茨木市文化財資料集　第62集

中条小学校遺跡発掘調査報告書

（本文編）

－ 立命館大学大阪いばらきキャンパス建設に伴う発掘調査報告書 －

平成27年（2015年）10月

茨木市教育委員会

はじめに

私たちが暮らしているこの茨木は、大阪と京都とのあいだに位置しており、北半分は丹波高原の老の坂山地の麓で、南半分には大阪平野の一部をなす三島平野がひろがり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた過ごしやすい環境の土地として、はるか昔から多くの人びとが生活してきました。その証として、人びとの生活した足跡は、土に埋もれた文化財として今に残されてきました。

このような先人たちの生活や文化は、現代の私たちの生活の根本となるものであり、また、土の中に残された遺構や遺物は、過去の人びとの生活を知る手がかりとなる貴重な文化遺産として、次代にのこし伝えていくべきものであります。

しかし、文化や生活はその時代ごとに移ろいでいき、本市においても同様に市のシンボルともいえる建造物や企業、商業施設などが移転し、その跡地に新たな市の魅力となる様々な開発が計画されています。そのひとつにＪＲ茨木駅に隣接するサッポロビール株式会社大阪工場跡地に、立命館大学大阪いばらきキャンパスが建設されることになりましたことは、本市にとりまして新たな文化の創造とにぎわいをもたらしてくれるものと大いに期待をよせております。

本報告書は、平成 24 年度に立命館大学大阪いばらきキャンパス建設のため、中条小学校遺跡および松ケ本南遺跡の発掘調査を実施した成果について、詳細を報告するものです。両遺跡からは、先人たちの生活を知るうえで貴重な遺構や遺物が数多く発見され、文化財の記録保存を行いました。さらに、広く一般に公開するために発掘調査中に現地説明会の開催や自然化学分析の実施、中条小学校遺跡で見つかった土坑剥ぎ取りを行い、立命館大学による遺構の保存を図るなど積極的で多大な協力のもと、無事、発掘調査を終了することができました。

終わりになりましたが、学校法人立命館をはじめ、調査にあたって惜しみないご協力をいただきました関係の皆さまに深く感謝するとともに、今後とも本市の埋蔵文化財の保護に一層の温かいご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成 27 年 10 月 31 日

茨木市教育委員会
教育長　　八　木　章　治

例　　言

1．本書は平成 24 年度に実施した茨木市岩倉町に所在する立命館大学大阪いばらきキャンパス建設に伴う中条小学校遺跡（ＣＪＳ 12 － 1 ）の発掘調査概要報告書である。

2．現地における発掘調査は、学校法人 立命館の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導・助言を得て、平成 23 年度に試掘調査（平成 23 年 11 月 25 日～ 12 月 19 日)、平成 24 年度に発掘調査（平成 24 年 5 月 7 日～平成 25 年 3 月 25 日）を茨木市教育委員会が実施した。

3．発掘調査に対する業務は地域教育振興課文化振興係（現　社会教育振興課文化財係）が実施した。
発掘調査に関する協議・手続きおよび事務処理は上田哲平が担当した（平成 26 年 3 月 31 日まで)。
現地調査の担当は以下の通りである。
平成 23 年度　地域教育振興課調査員　中東正之
平成 24 年度　文化財資料館学芸員清水邦彦（平成 24 年 8 月 1 日～)・地域教育振興課嘱託調査員藤田徹也・同調査員中東正之・同調査員大向智子・同調査員富田卓見（～平成 24 年 6 月 14 日）

4．整理・報告書作成業務は平成 25 年度～ 27 年度にかけて各担当者が行い、それ以外に中条小学校遺跡Ａ区については社会教育振興課嘱託調査員川村和子・同調査員木村健明が行った。本書の編集は木村が行い、執筆分担は目次に示した。

5．現地調査には、調査補助員石井恵子・上山篤志・大田年男・大坪啓子・大出暁雄・岡部裕樹・門井久登・神谷裕子・川畑康雄・地代広信・清水良真・須田佑子・高瀬隆治・滝口香菜子・辻本祐布子・中川夕香・野坂勇次郎・林　和子・藤井　脩・松沢　健・松政郁子・宮西貴史・山下哲也・吉田与喜一が従事し、整理作業は上記のほか柴田将幹・下口法子・初代絵里・高橋公子・西坂泰子・堀澤照美・和田惠津子が従事した。（五十音順）

6．出土遺物の実測・トレースは平成 26 年度に文化財サービスに委託して行った。

7．列状土坑の断面及び平面の剥ぎ取りを株式会社スタジオ三十三に委託して行った。
これは現在立命館大学大阪いばらきキャンパス内で展示・公開されている。

8．現地調査及び本書の執筆に際しては、関係諸機関をはじめ以下の方々から多大な御教示を賜った。記して感謝の意を表する。
伊藤淳史・川上洋一・高　正龍・木立雅朗・木庭元晴・柴田将幹・重松伸司・白井忠雄・辻尾榮市・辻　康男・濱田延充・濱野俊一・菱田淳子・菱田哲郎・深澤芳樹・藤川智之・古川　登・森岡秀人・森本　徹・矢野健一・若林邦彦・和田晴吾（五十音順・敬称略）

9．調査で出土した遺物・記録等は茨木市教育委員会　茨木市立文化財資料館で保管している。

凡　　例

1．調査にあたっては、平面垂直座標系第Ⅵ系（世界測地系）に準じて測量を行った。
2．本書で使用する標高はすべてT.P.（東京湾標準海水面）で表し、図中の方角はすべて座標北である。
3．遺構名称には遺構番号の前にＳＡ（掘立柱列）、ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＤ（溝）、ＳＥ（井戸）、ＳＫ（土坑）、ＳＰ（ピット）の略称を使用している。ただし、列状土坑群についてのみ、ほかの土坑と区別するため、略称は使用していない。
4．遺構断面図の作成位置は「 |A A'| 」で示している。
5．調査・整理にあたって土色・土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版　標準土色帖』を基準として行った。
6．本書の遺物に付記された番号は通し番号であり、本文・挿図・表・写真図版における番号と一致する。
7．遺物実測図は１／４を基準にしているが、石器など一部の遺物は縮尺を変更している。なお、いずれも各図のスケールに明示している。
8．遺物実測図はその断面を須恵器は黒塗、瓦・土製品はトーン、石器・石製品は斜線で表現している。
9．写真図版の縮尺は統一していない。
10．遺物の報告にあたっては下記の文献を参考にした。

光石鳴巳 2003「大阪府北摂地域出土の有茎尖頭器について」『粟生間谷遺跡　旧石器・縄紋時代編』(財)大阪府文化財センター
森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年　近畿Ⅱ』木耳社
平井　勝 1991『弥生時代の石器』ニューサイエンス社
奈良県立橿原考古学研究所 1980『六条山遺跡』
奈良県立橿原考古学研究所 1986『矢部遺跡』
庄内式土器研究会 1996『庄内式土器研究ＸⅡ』
田辺昭三 1981『須恵器大成』
奈良国立文化財研究所 1985『平城宮跡発掘調査報告書　ＸⅡ』
佐藤　隆 1996「摂津東部」『古代の土器４　煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
中世土器研究会 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

本　文　目　次

はじめに
第１章　調査に至る経緯（黒須）…… 1
第２章　周辺の環境と遺跡（清水）…… 3
　第１節　周辺の環境 …… 3
　第２節　周辺の遺跡 …… 3
第３章　調査の方法（中東）…… 7
第４章　調査成果 …… 9
　第１節　報告にあたって（木村）…… 9
　第２節　層序（中東）…… 9
　第３節　第１面の調査成果（中東）…… 22
　　（１）第１遺構面の概要 …… 22
　　（２）遺構と出土遺物 …… 22
　　（３）小結 …… 29
　第４節　Ａ区第２面の調査成果（木村）…… 29
　　（１）遺構と出土遺物 …… 29
　　１）第２面検出時出土遺物 …… 29
　　２）Ａ区１ブロックの遺構・出土遺物 …… 32
　　３）Ａ区２ブロックの遺構・出土遺物 …… 49
　　４）Ａ区３ブロックの遺構・出土遺物 …… 60
　　５）Ａ区４ブロックの遺構・出土遺物 …… 69
　　（２）小結 …… 85
　第５節　Ｂ・Ｃ区第２面の調査成果（中東）…… 87
　　（１）第２遺構面の概要 …… 87
　　（２）遺構と出土遺物 …… 87
　　１）第２面検出時出土遺物 …… 87
　　２）Ⅰブロック（Ｂ区北側）の遺構・出土遺物 …… 87
　　３）Ⅱブロック（Ｂ区東側）・Ⅲブロック（Ｂ・Ｃ区東側）の遺構・出土遺物 …… 96
　　４）Ⅳブロック（Ｂ区中央）・Ⅴブロック（Ｃ区中央）の遺構・出土遺物 …… 121
　　５）Ⅵブロック（Ｂ区西側）・Ⅶブロック（Ｃ区西側）の遺構・出土遺物 …… 134
　　６）轍跡 …… 138
　　（３）小結 …… 140
　第６節　列状土坑群の調査 …… 142
　　（１）分布（清水）…… 142
　　（２）列状土坑群（清水）…… 142
　　（３）出土遺物（柴田）…… 174
　　（４）列状土坑群の調査成果（清水）…… 176
第５章　まとめ（清水）…… 177

挿　図　目　次

第１図　茨木市地質図 …… 3
第２図　遺跡分布図 …… 4
第３図　調査区配置図 …… 8
第４図　中条小学校遺跡地区割図 …… 8
第５図　Ａ区北壁土層断面図 …… 10
第６図　Ａ区北壁・東壁土層断面図 …… 11
第７図　Ａ区東壁土層断面図 …… 12
第８図　Ａ区東壁・南壁土層断面図 …… 13
第９図　Ａ区南壁土層断面図 …… 14
第 10 図　Ｂ区東壁土層断面図 …… 15
第 11 図　Ｂ・Ｃ区東壁土層断面図 …… 16
第 12 図　Ｃ区東壁土層断面図 …… 17
第 13 図　Ｃ区南壁土層断面図 …… 18
第 14 図　Ｂ・Ｃ区西壁土層断面図 …… 19
第 15 図　Ｂ区西壁・北壁土層断面図 …… 20
第 16 図　第１面全体平面図 …… 21
第 17 図　Ａ区第１面平面図 …… 22
第 18 図　Ａ区第１面出土遺物実測図 …… 24
第 19 図　Ｂ・Ｃ区第１面平面図 …… 25
第 20 図　Ｂ・Ｃ区第１面出土遺物実測図 …… 26
第 21 図　Ａ区第２面検出時出土遺物実測図 …… 27
第 22 図　Ａ区第２面平面図 …… 28
第 23 図　Ａ区１ブロック平面図 …… 30
第 24 図　ＳＤ 0139 平面・断面・遺物出土状況図 …… 31
第 25 図　ＳＤ 0139 出土遺物実測図 …… 32
第 26 図　ＳＤ 0194 平面・断割図 …… 33
第 27 図　ＳＤ 0194 遺物出土状況・断面・出土遺物実測図 …… 34
第 28 図　ＳＤ 0262・0278・0282 平面・断面・断割・出土遺物実測図 …… 35
第 29 図　ＳＤ 0189 平面・断面・出土遺物実測図 …… 36
第 30 図　ＳＫ 0276 平面・断面・出土遺物実測図 …… 37
第 31 図　ＳＰ 0245・0624・1495・1500・1516 平面・断面・出土遺物実測図 …… 38
第 32 図　ＳＰ 0207・0208・0292・0295 平面・断面・出土遺物実測図 …… 39
第 33 図　ＳＫ 1515 平面・断面・出土遺物実測図 …… 40
第 34 図　ＳＤ 0100・1313・0380 平面・断割図 …… 41
第 35 図　ＳＤ 0100 断面・遺物出土状況図 …… 42
第 36 図　ＳＤ 0380 平面・断面・遺物出土状況図 …… 43
第 37 図　ＳＤ 0100・0380 出土遺物実測図 …… 44
第 38 図　ＳＤ 0666 平面・断面・断割・出土遺物実測図 …… 45
第 39 図　ＳＤ 0001 断面・出土遺物実測図 …… 46
第 40 図　調査区周辺の大字とＳＤ 0300 の位置関係 …… 46
第 41 図　ＳＤ 0300・0157・0622 断面・出土遺物実測図 …… 47
第 42 図　Ａ区２ブロック平面図 …… 48

第 43 図　ＳＰ 0462 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図 …… 49
第 44 図　ＳＫ 0471・0342 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図 …… 50
第 45 図　ＳＤ 0331 平面・断面・出土遺物実測図 …… 51
第 46 図　ＳＫ 0397・1455 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図 …… 52
第 47 図　ＳＤ 0096 平面・断面・断割図 …… 53
第 48 図　ＳＤ 0096 出土遺物実測図 …… 54
第 49 図　ＳＤ 0555 平面・断面・断割・出土遺物実測図 …… 55
第 50 図　ＳＥ 1600 平面・断面・遺物出土状況図 …… 56
第 51 図　ＳＥ 1600 出土遺物実測図 …… 57
第 52 図　ＳＫ 1470 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図 …… 58
第 53 図　ＳＤ 0427・0421・0432・ＳＫ 0431 平面・断面・出土遺物実測図 …… 59
第 54 図　ＳＤ 0787 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図 …… 60
第 55 図　各溝断面・ＳＤ 0461・0474 出土遺物実測図 …… 61
第 56 図　Ａ区３ブロック平面図 …… 62
第 57 図　ＳＫ 0348・ＳＰ 0388 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図 …… 63
第 58 図　ＳＤ 0853 平面・断面・出土遺物実測図 …… 64
第 59 図　ＳＤ 0731・0734・0742・1618・1620 平面・断面図 …… 65
第 60 図　ＳＤ 0731・0734・1618 出土遺物実測図 …… 66
第 61 図　ＳＤ 0800（古墳８）平面・断面・断割図 …… 67
第 62 図　ＳＤ 0800（古墳８）出土遺物実測図 …… 68
第 63 図　ＳＤ 0659・0660・0688・0690・1650 断面・出土遺物実測図 …… 69
第 64 図　Ａ区４ブロック平面図 …… 70
第 65 図　ＳＤ 1100 周辺平面図 …… 71
第 66 図　ＳＫ 1111 平面・断面・遺物出土状況図 …… 72
第 67 図　ＳＫ 1111 出土遺物実測図（１） …… 73
第 68 図　ＳＫ 1111 出土遺物実測図（２） …… 74
第 69 図　ＳＫ 1053・ＳＤ 1197 平面・断面・遺物出土状況図 …… 75
第 70 図　ＳＤ 1197 出土遺物実測図 …… 76
第 71 図　ＳＰ 1190・ＳＫ 1202 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図 …… 77
第 72 図　ＳＤ 1100 断面・遺物出土状況図（１） …… 78
第 73 図　ＳＤ 1100 断面・遺物出土状況図（２） …… 79
第 74 図　ＳＤ 1100 断割図 …… 80
第 75 図　ＳＤ 1100 出土遺物実測図（１） …… 81
第 76 図　ＳＤ 1100 出土遺物実測図（２） …… 82
第 77 図　ＳＤ 1100 出土遺物実測図（３） …… 83
第 78 図　ＳＤ 1244 遺物出土状況・断面・出土遺物実測図 …… 84
第 79 図　ＳＤ 1195・1196・1199・1194 断面・出土遺物実測図 …… 85
第 80 図　ＳＰ 1203 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図 …… 85
第 81 図　Ｂ・Ｃ区第２面検出時出土遺物実測図 …… 86
第 82 図　Ｂ・Ｃ区第２面平面図 …… 88
第 83 図　Ｂ・Ｃ区第２面平面図（西半部） …… 89
第 84 図　Ｂ・Ｃ区第２面平面図（東半部） …… 90
第 85 図　Ｂ・Ｃ区第２面ブロック割図 …… 91
第 86 図　Ｉブロック（Ｂ区北側）平面図 …… 92

第 87 図　ＳＤ 2122・ＳＫ 2150 平面・断面・出土遺物実測図 …… 93
第 88 図　古墳 7 平面・断面・断割図 …… 94
第 89 図　古墳 7 出土遺物実測図 …… 95
第 90 図　ＳＰ 2140・2145 平面・断面図 …… 95
第 91 図　Ⅱブロック（Ｂ区東側）平面図 …… 97
第 92 図　Ⅲブロック（Ｂ・Ｃ区東側）平面図 …… 98
第 93 図　ＳＤ 2005・2006・2068 平面・遺物出土状況図 …… 99
第 94 図　ＳＤ 2005・2006・2068 断面図 …… 100
第 95 図　ＳＤ 2005 出土遺物実測図 …… 100
第 96 図　ＳＤ 2006・2068 出土遺物実測図 …… 101
第 97 図　ＳＥ 2090 平面・断面・出土遺物実測図 …… 102
第 98 図　ＳＥ 2096 平面・断面・出土遺物実測図 …… 102
第 99 図　ＳＥ 2106 平面・断面・出土遺物実測図 …… 103
第 100 図　ＳＤ 2157・ＳＫ 2079・2128・2130 平面・断面・遺物出土状況図 …… 105
第 101 図　ＳＫ 2078 平面・断面・遺物出土状況図 …… 106
第 102 図　ＳＫ 2078・2079 出土遺物実測図 …… 106
第 103 図　ＳＫ 2011・2015 平面・断面図 …… 108
第 104 図　ＳＫ 2011・2015・2128 出土遺物実測図 …… 108
第 105 図　ＳＤ 2023・2065・2066・3029・3140 平面・断面・出土遺物実測図 …… 110
第 106 図　古墳 6 平面・断面・断割図 …… 111
第 107 図　古墳 6 出土遺物実測図（１） …… 112
第 108 図　古墳 6 出土遺物実測図（２） …… 113
第 109 図　古墳 2 平面・断面・断割図 …… 114
第 110 図　古墳 2 遺物出土状況・断面図 …… 115
第 111 図　古墳 2 出土遺物実測図 …… 116
第 112 図　古墳 1 平面・断面・断割図 …… 117
第 113 図　古墳 1 出土遺物実測図 …… 118
第 114 図　各遺構平面・断面図 …… 120
第 115 図　Ⅳブロック（Ｂ区中央）平面図 …… 122
第 116 図　Ⅴブロック（Ｃ区中央）平面図 …… 123
第 117 図　ＳＫ 125 平面・断面・出土遺物実測図 …… 124
第 118 図　古墳 5 平面・断面・断割図 …… 125
第 119 図　古墳 5 出土遺物実測図 …… 126
第 120 図　ＳＤ 2070・2071・3085 平面図、ＳＤ 2071 下層遺物出土状況図 …… 127
第 121 図　ＳＤ 2070・2071・3085 断面図 …… 128
第 122 図　ＳＤ 2070・2071・3085 出土遺物実測図 …… 129
第 123 図　ＳＤ 2071 下層出土埴輪実測図 …… 130
第 124 図　ＳＤ 3084・ＳＰ 3137・ＳＫ 3133・3138 平面・断面図 …… 131
第 125 図　ＳＫ 3133・3138 出土遺物実測図 …… 132
第 126 図　ＳＰ 3092・ＳＫ 3093 平面・断面、ＳＫ 3031・3131 断面図 …… 132
第 127 図　ＳＫ 3106 平面・断面・出土遺物実測図 …… 132
第 128 図　ＳＫ 3135 平面・断面図 …… 133
第 129 図　Ⅵブロック（Ｂ区西側）平面図 …… 135
第 130 図　Ⅶブロック（Ｃ区西側）平面図 …… 136

第 131 図　古墳 3 平面・断面・断割図 …… 137
第 132 図　古墳 4 平面・断面・断割図 …… 138
第 133 図　ＳＢ 01 平面・断面図 …… 139
第 134 図　ＳＡ 01 平面・断面図 …… 139
第 135 図　ＳＫ 3145 平面・断面・出土遺物実測図 …… 140
第 136 図　轍跡平面・断面図 …… 141
第 137 図　列状土坑群全体平面図 …… 143
第 138 図　列状土坑群平面・断面位置図（北半） …… 144
第 139 図　列状土坑群平面・断面位置図（南半） …… 145
第 140 図　列状土坑 1 ～ 3 ・ 5 ・ 8 ～ 11 断面図 …… 147
第 141 図　土坑 4 ・ 6 平面・断面・遺物出土状況図 …… 148
第 142 図　列状土坑 12 ～ 16 断面図 …… 149
第 143 図　列状土坑 17 ～ 21 断面図 …… 151
第 144 図　列状土坑 22 ～ 26 断面図 …… 152
第 145 図　列状土坑 27 ～ 31 断面図 …… 153
第 146 図　列状土坑 32 ～ 38 断面図 …… 155
第 147 図　列状土坑 39 ～ 44・46 断面図 …… 157
第 148 図　列状土坑 47 ～ 50・53 ～ 55 断面図 …… 158
第 149 図　列状土坑 56 ～ 62 断面図 …… 159
第 150 図　列状土坑 63・64・66 ～ 69 断面図 …… 161
第 151 図　列状土坑 70 ～ 75・77 断面図 …… 162
第 152 図　列状土坑 80 ～ 88 断面図 …… 163
第 153 図　列状土坑 89 ～ 96・98 断面図 …… 165
第 154 図　土坑 97 平面・断面・遺物出土状況図 …… 167
第 155 図　列状土坑 99 ～ 106 断面図 …… 168
第 156 図　列状土坑 107 ～ 114 断面図 …… 169
第 157 図　列状土坑 115 ～ 121 断面図 …… 172
第 158 図　列状土坑 122 ～ 124・126 ～ 129 断面図 …… 173
第 159 図　列状土坑群出土遺物実測図 …… 174

表　目　次

第 1 表　出土遺物観察表 …… 179 ～ 199

本　文

第１章　調査に至る経緯

立命館大学大阪いばらきキャンパスは、ＪＲ京都線（東海道本線）茨木駅の東に隣接するサッポロビール大阪工場跡地の 11.5 ヘクタールにもおよぶ広大な敷地に建設された。日本が高度経済成長期に沸くなか、1960（昭和 35）年に操業を開始したサッポロビール大阪工場は、岩倉・下池・総行（小字）と呼ばれた地にあった池を埋めたてるなどして建設され、半世紀におよぶ経済活動ののち、2008（平成 20）年に閉鎖した。

この工場跡地の周辺には、下中条町、西中条町、新中条町、奈良町、岩倉町にまたがる弥生時代から中世にかけての複合遺跡である中条小学校遺跡の存在が知られていた。中条小学校遺跡は、1976（昭和 51）年に中条小学校改築を機に発見された遺跡で、南北約 1 km、東西 0.4km の範囲に広がり、遺跡南西部の岩倉町、奈良町、新中条町付近に数多くの遺構が集中している。主なものに、弥生時代後期の円形周溝や古墳時代中期後半～後期前半頃の埴輪をともなう埋没古墳が複数基発見されている。さらに、古代の飛鳥・奈良時代～平安時代までの建物跡もまとまって見つかっているなど、各時代の遺構が重複する。

2011（平成 23）年 11 月、学校法人立命館から同キャンパス建設工事に先立ち、茨木市教育委員会に埋蔵文化財確認試掘調査依頼書の提出があり、本発掘調査の必要性の有無および本発掘調査の必要な範囲を確認するための調査を実施することとなった。サッポロビール大阪工場解体後は、更地となっており敷地中央に設けられた仮沈砂池に水が集まるよう四方八方に仮設水路が延びている状況のなか、同年 11 月 25 日～ 12 月 19 日にかけて、88 か所にもおよぶ確認試掘調査を実施した。調査の結果、仮沈砂池が設けられた敷地中央部を境にＪＲ京都線沿いと西中条町、新中条町に隣接した部分に遺構と遺物が確認されたことから、2012（平成 24）年 1 月に依頼主である学校法人立命館へ調査結果を報告するとともに、本発掘調査を実施するための協議を重ねることとなった。

従来の埋蔵文化財包蔵地の範囲外で遺構と遺物が発見されたことから、埋蔵文化財包蔵地の範囲の変更を行うため、2012（平成 24）年 2 月 28 日付で「埋蔵文化財包蔵地の取扱い変更協議書」を大阪府教育委員会に提出し、同年 3 月 7 日付、教委文第 9 － 17 号（通知）にて現在の包蔵範囲に変更された。松ケ本南遺跡は、JR の線路を取り込んで大きく東側に範囲が拡大され、また、中条小学校遺跡は岩倉町を中心に西側へ飛び出すように範囲が拡大された。

その間、2011（平成 23）年 12 月 20 日に学校法人立命館と茨木市とのあいだで、「立命館大学大阪茨木新キャンパス設置に関わる基本協定書」と協定に基づく覚書を締結した。協定書には、立命館は 2015（平成 27）年 4 月を目処に、同キャンパスを開設すること、茨木市はキャンパス整備に合わせて防災公園街区整備事業を実施すること、関連する公共施設の整備、改善に努めることなどが盛り込まれた。

同キャンパス開設に伴う建設工事スケジュールが、造成工事は 2013（平成 25）年 1 月から、本体工事は同年 4 月から着工ということであり、2012（平成 24）年度中に本発掘調査を完了させる必要があったことから、早急に調査体制を整える必要性に迫られた。本発掘調査は、調査面積がおよそ 31,000㎡にもおよび、異なる時代の遺構面も複数面確認されていることから、相当の調査経費と調査期間が見込まれるものの、キャンパス開設時期が決定していたこともあり、およそ 1 年間で本発

掘調査を完遂するための調査体制の整備に取り組んだ。まず、発掘調査を指揮・推進する調査員の複数配置を行い、通常 1 名体制のところを 4 名体制に拡充することで、調査期間の圧縮を図った。さらに、各調査員を頂点とする調査チームを 4 チーム配置したことで、それに連なる調査補助員、作業員等もそれぞれ増員されることとなった。

2013（平成 24）年 4 月、学校法人立命館から発掘届（文化財保護法 93 条）が提出され、本発掘調査に向けて諸手続きおよび学校法人立命館と茨木市教育委員会による本発掘調査の契約を行い、5 月から本発掘調査を開始することとなった。本発掘調査は調査面積が 31,580㎡、調査期間を 2013（平成 24）年 4 月 27 日～ 2014（平成 25）年 3 月 31 日とし、松ケ本南遺跡を A ～ D 区、中条小学校遺跡を E 区（さらに E 区を A ～ C）にわけて、本発掘調査を実施することとした。

本発掘調査は、仮囲い、敷地の草刈り、測量による調査区の位置出し、調査に必要な資器材の搬入などの準備工から始まり、周辺近隣住民へ「埋蔵文化財発掘調査のお知らせ」の配布による周知を行ったうえで、5 月 11 日から大型重機（バックホー）による表土の機械掘削を開始した。

また、本発掘調査の規模が大きいこともあり、月 1 回程度を目処に現場の進捗状況の確認およびその他連絡事項や関係者間の共通認識をもつための定例会を行った。

本発掘調査も後半戦に差しかかるあたりで、中条小学校遺跡において弥生時代の集落遺構や埋没古墳、大規模な土坑群が発見されるなど重要な成果が得られたことから、広く一般に公開するために学校法人立命館と茨木市教育委員会による発掘調査の現地説明会を 2013（平成 23）年 12 月 15 日（土）に開催した。

さらに、学校法人立命館の協力の下、中条小学校遺跡現地説明会において、話題となった市松状 7 列に配された 100 を超える土坑群（弥生時代後期後半頃）について、土坑を保存するための剥ぎ取りの実施、古環境や年代等を調べるための自然科学分析を実施した。

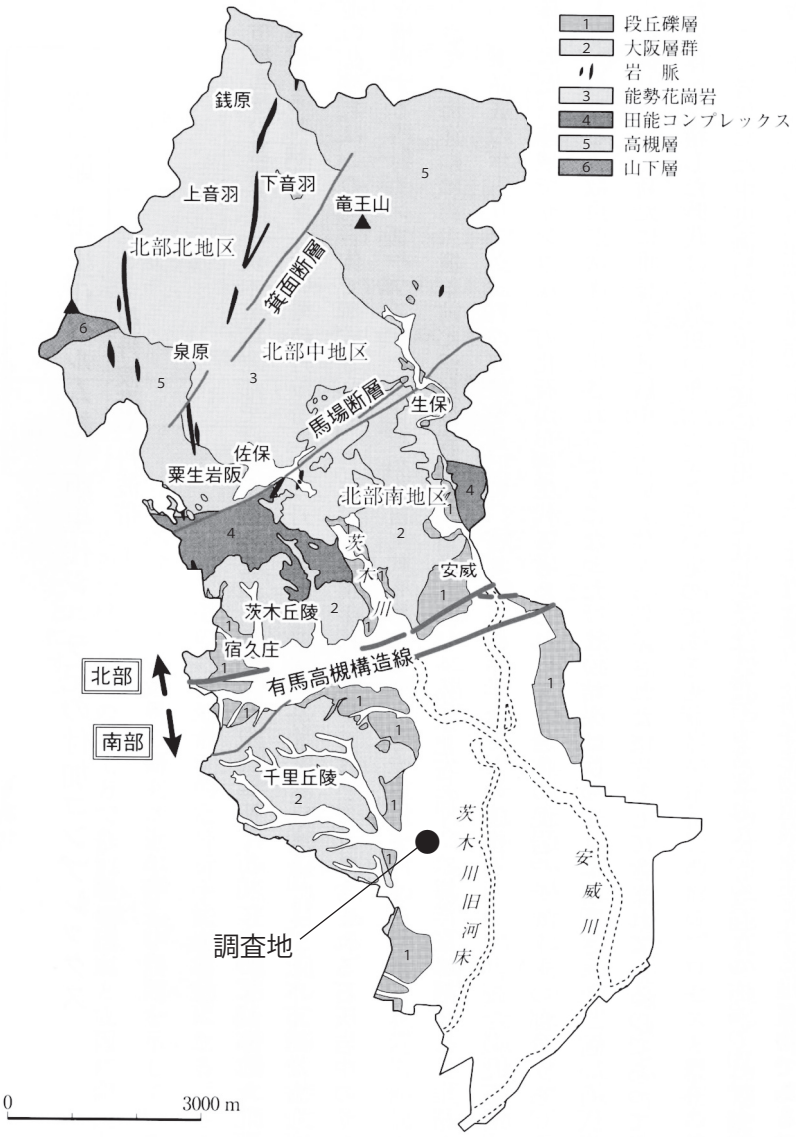
1 年にわたり続けられた本発掘調査は、数多くの遺構の記録とともに、弥生土器、埴輪、土師器、須恵器、陶磁器類などの大量の発掘調査出土品（コンテナ 93 箱・中条小学校遺跡 91 箱、松ケ本南遺跡 2 箱）をともない、2014（平成 25）年 3 月 25 日をもって調査を終了した。

第２章　周辺の環境と遺跡

第１節　周辺の環境（第１図）

中条小学校遺跡・松ケ本南遺跡が所在する茨木市域は、北東―南西方向に走る有馬－高槻構造線によって、大きく南北二つに区分される。北部はさらに馬場断層と箕面断層で三区分されるが、おおむね標高 300m 前後の秩父古生層系の岩石により構成される北摂山地と、そこから派生する丘陵部からなる。南部は西側に標高 50 ～ 100m 前後で、前期洪積層の隆起地形の一つである大阪層群で形成された千里丘陵があり、東側と南側は淀川や安威川などの河川によって規制された沖積層からなる三島平野が広がっている（木庭 2012・第１図）。

中条小学校遺跡・松ケ本南遺跡は南部の西側、千里丘陵の東に広がる沖積扇状地上に位置している。この沖積扇状地は縄文時代前半には既に離水傾向にあったと推定され、弥生時代には安定した地表環境が広がっていたと考えられる（清水・辻 2014）。



第１図　茨木市地質図

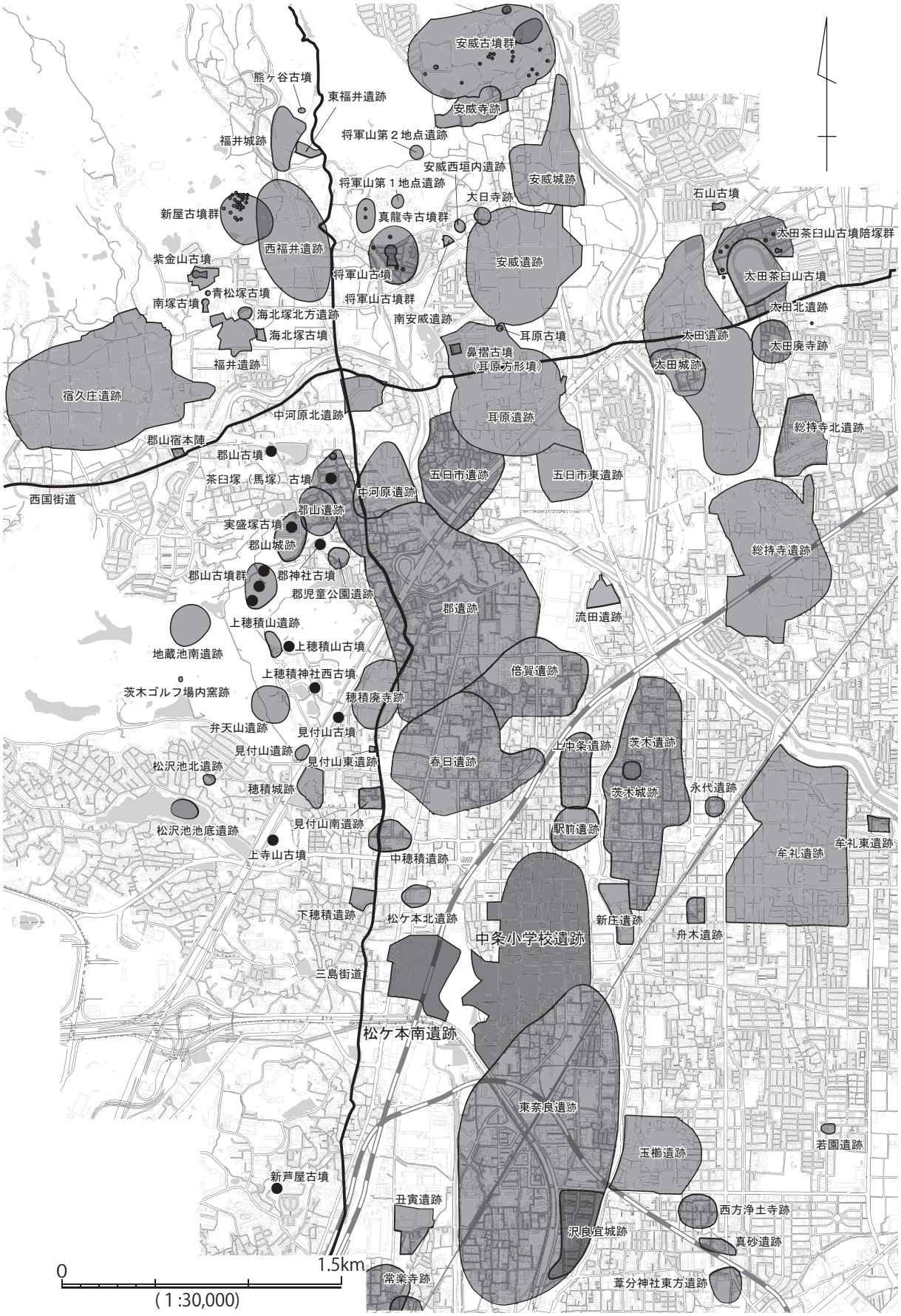
第２節　周辺の遺跡（第２図）

中条小学校遺跡・松ケ本南遺跡が所在する千里丘陵東麓周辺の状況について、概観しておく。

千里丘陵東麓周辺における人々の歴史は郡遺跡から出土したナイフ形石器により、旧石器時代後期に遡ることが明らかになっている。

縄文時代の遺跡としては、耳原遺跡が挙げられる。縄文時代晩期の土器棺が 16 基見つかっており、その周囲には居住空間があったと想定される。また、東奈良遺跡では縄文時代の遺構は検出されていないものの、縄文時代前期の大歳山式土器が出土している。

弥生時代は大規模な集落遺跡である東奈良遺跡が著名である。東奈良遺跡は弥生時代前期から集落


安威古墳群
熊ヶ谷古墳
東福井遺跡
安威寺跡
福井城跡
将軍山第２地点遺跡
安威西垣内遺跡
安威城跡
将軍山第１地点遺跡
大日寺跡
石山古墳
新屋古墳群
真龍寺古墳群
太田茶臼山古墳陪塚群
西福井遺跡
紫金山古墳
安威遺跡
将軍山古墳
太田茶臼山古墳
青松塚古墳
南塚古墳
将軍山古墳群
太田北遺跡
海北塚北方遺跡
南安威遺跡
海北塚古墳
耳原古墳
太田遺跡
太田廃寺跡
鼻摺古墳
（耳原方形墳）
福井遺跡
太田城跡
宿久庄遺跡
中河原北遺跡
耳原遺跡
総持寺北遺跡
郡山宿本陣
郡山古墳
茶臼塚（馬塚）古墳
五日市遺跡
五日市東遺跡
西国街道
中河原遺跡
郡山遺跡
実盛塚古墳
郡山城跡
総持寺遺跡
郡山古墳群
郡神社古墳
郡児童公園遺跡
郡遺跡
流田遺跡
上穂積山遺跡
地蔵池南遺跡
上穂積山古墳
上穂積神社西古墳
倍賀遺跡
茨木ゴルフ場内窯跡
穂積廃寺跡
弁天山遺跡
見付山古墳
見付山遺跡
見付山東遺跡
上中条遺跡
茨木遺跡
松沢池北遺跡
春日遺跡
穂積城跡
茨木城跡
永代遺跡
見付山南遺跡
駅前遺跡
松沢池池底遺跡
牟礼東遺跡
上寺山古墳
中穂積遺跡
牟礼遺跡
下穂積遺跡
松ケ本北遺跡
新庄遺跡
中条小学校遺跡
舟木遺跡
三島街道
松ケ本南遺跡
東奈良遺跡
若園遺跡
玉櫛遺跡
新芦屋古墳
丑寅遺跡
西方浄土寺跡
沢良宜城跡
真砂遺跡
0
1.5km
(1:30,000)
常楽寺跡
葦分神社東方遺跡

第２図　遺跡分布図

が営まれ、中期に最盛期を迎える（奥井 2012）。銅鐸、銅戈、ガラス勾玉、ガラス小玉の鋳型のほか、鞴の羽口、高坏形土製品、金属成分が付着した真土などの鋳造関連遺物が出土しており、青銅器・ガラス製品の一大生産地であったことが窺える（清水 2013b）。また、本書で報告する列状土坑群と一連のものと考えられる土坑群が東奈良遺跡で検出されており、集落を巡るように続いている（清水 2013a、清水・辻 2014）。郡遺跡でも当該期の生活域や墓域が検出されている。

古墳時代は集落（生産）と古墳に分けてみていく。周辺の集落遺跡としては、郡遺跡、春日遺跡、倍賀遺跡、東奈良遺跡などが挙げられる。郡遺跡では馬の埋葬土壙を検出、倍賀遺跡では鍛冶関連遺物が出土しているほか、千里丘陵上には茨木ゴルフ場内窯跡および須恵器窯推定地がある。そのため、６世紀代には馬匹生産、鍛冶生産、須恵器生産が千里丘陵東麓周辺でおこなわれていたことになる（清水 2014b）。古墳は、郡山古墳、茶臼塚（馬塚）古墳、実盛塚古墳、郡山１号墳、郡山２号墳、郡山３号墳、郡神社古墳、上穂積山古墳、上穂積神社西古墳、見付山古墳、上寺山古墳、郡・上穂積古墳が知られている。これらの古墳は郡古墳群と総称されている。なかでも、郡・上穂積古墳は数多くの鉄製武器・武具や鏡、盾などが副葬されていた。この周辺では、最も古くさかのぼる古墳であることから、郡古墳群の嚆矢となる古墳と考えられる（清水 2014）。また、上穂積神社西古墳は詳細が不明であるが、上寺山古墳と同じく火化された横穴式木室墳とされており、近年紹介された須恵器より古墳の時期は７世紀初頭頃と考えられる（清水 2015）。上記の古墳のほかにも、沖積扇状地上に広がる郡遺跡、春日遺跡では５世紀後半から６世紀前半の埋没古墳が検出されている。これらの古墳群は小規模な円墳であるにも関わらず、円筒埴輪だけではなく、形象埴輪を伴う事例が多いことが注目される。

律令期に入ると、三島地域は嶋上郡と嶋下郡に分かれ、中条小学校遺跡が所在する茨木市は嶋下郡に相当する（茨木市史編纂委員会 1969）。その嶋下郡の郡家は郡遺跡が有力視されている。「郡」の地名、古代の掘立柱建物群の検出、円面硯などの出土遺物がその根拠である。近辺に７世紀代の穂積廃寺があることもその傍証とされている。また、この近辺は垂水東牧の推定地でもある。当該期には古代山陽道が成立していたと考えられ、その道筋は近世における西国街道とほぼ一致すると推測されている（足利 1990）。嶋上郡になるが、郡家川西遺跡では西国街道から約 15m 北の地点で古代山陽道の一部とみられる石敷遺構が見つかっている。嶋下郡においても、中河原北遺跡で現在の西国街道から約 60m 南にあたる地点で、同じく古代山陽道の一部とみられる幅約 7m の小石が敷かれた遺構が見つかっており、上記の推測が考古学的に裏付けられつつある（菱田 2012）。

中世には、中条小学校遺跡で中世前半と考えられている鋤溝および柱穴が見つかっているほか、周辺の松ケ本北遺跡、見付山東遺跡、見付山南遺跡、東奈良遺跡、玉櫛遺跡、郡遺跡などでも当該期の遺構と遺物が見つかっており、中世集落の動向が明らかになりつつある。また、中世城館としては、郡山城、穂積城、茨木城が存在する。特に茨木城は、中世末には拡張整備が行われたと考えられており（中井 2007）、中川清秀や片桐且元がその城主として知られている。元和元年（1615 年）の一国一城令を受け、1617 年に廃城となった。

参考文献（五十音順）

足利健亮 1990「摂津古道の原形—三島路と長尾の直道—」『西国・丹波街道』歴史の道調査報告書第６集　大阪府教育委員会

茨木市史編纂委員会 1969『茨木市史』

茨木市史編さん委員会 2014『新修茨木市史』第七巻史料編考古

奥井哲秀 2012「弥生時代の茨木市域」『新修茨木市史』第一巻通史Ⅰ　茨木市史編さん委員会

木庭元晴 2012「基盤地質」「山地と平野の地形のしくみ」『新修茨木市史』第一巻通史Ⅰ　茨木市史編さん委員会

笹川隆平・免山　篤 1963『古墳』茨木市の文化財第３号　　茨木市教育委員会・茨木市文化財研究調査会

清水邦彦 2013a「茨木市中条小学校遺跡の調査－列状土坑群の調査－」『第 16 回近畿弥生の会奈良場所発表要旨集』近畿弥生の会

清水邦彦 2013b『東奈良遺跡の青銅器鋳造』茨木市立文化財資料館

清水邦彦 2014『茨木に眠る資料—免山篤コレクションを中心に—』茨木市立文化財資料館

清水邦彦 2015「上穂積神社西古墳について」『上寺山古墳の研究』上寺山古墳研究会

清水邦彦・辻　康男 2014「列状土坑群の性格」『日本考古学協会第 80 回総会発表要旨』日本考古学協会

田代克己 1972『上寺山古墳発掘調査概要』茨木市教育委員会

中井　均 2007「茨木城の機能と構造」『よみがえる茨木城』清文堂

菱田哲郎 2012「古代寺院の成立と地域社会」『新修茨木市史』第一巻通史Ⅰ　茨木市史編さん委員会

藤原　学 1981「新芦屋古墳」『吹田市史』第八巻別編　吹田市史編さん委員会

第３章　調査の方法

調査は立命館大学大阪いばらきキャンパス建設予定地のうち、敷地の西方から延びる松ケ本南遺跡と、東方から延びる中条小学校遺跡の包蔵範囲を対象として実施した。

両遺跡とも、現地表面から１～2m の造成土と近･現代耕土（１層）は機械掘削によって除去した。以下の 0.1 ～ 0.4m の堆積層は、層界ごとに人力で掘削し、中条小学校遺跡では、中・近世耕作土である２層下面（第１遺構面）と基盤層である４層上面（第２遺構面）において遺構の検出を行なった。松ケ本南遺跡では撹乱の影響が大きく、Ｃ区のみ２面調査を行った。

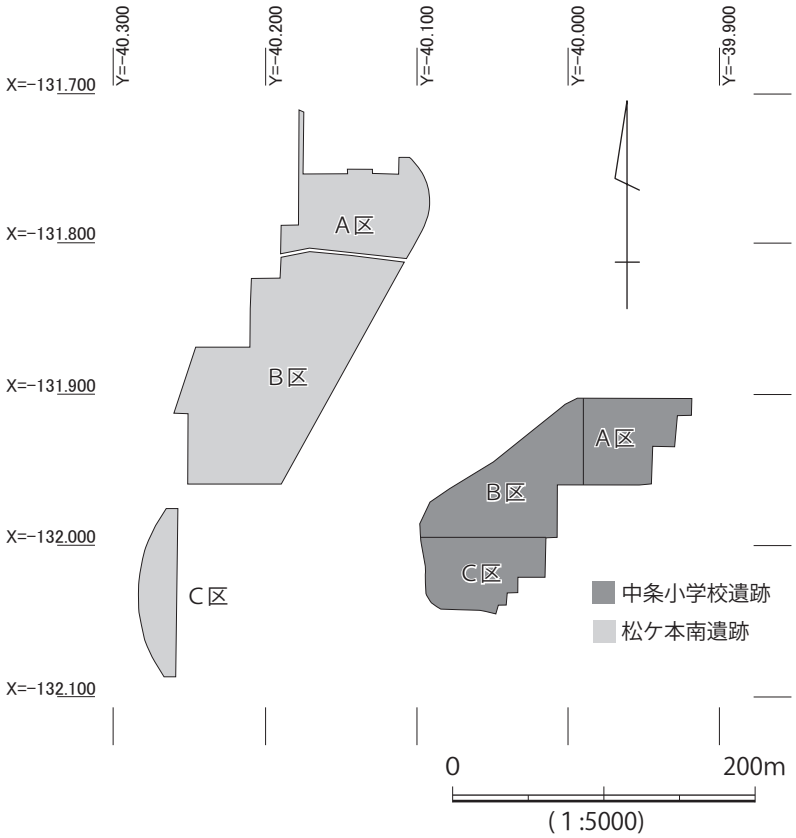
調査においては松ケ本南遺跡をＡ～Ｃ区、中条小学校遺跡をＥ区として調査を開始した。しかし、Ｅ区は遺構・遺物とも多く検出されたため、調査期間の都合上、Ｅ区内をＡ～Ｃに３分割して調査を進めた（第３図）。本来、中条小学校遺跡の各調査区はＥ－Ａ・Ｂ・Ｃ区と記述されるべきものであるが、煩雑となるため、本報告中では単にＡ・Ｂ・Ｃ区と記述している。Ｅ区内の調査区割りは、Y= － 39.990 ライン上の南北方向の土層観察用畔（Ａ・Ｂ区）と、X= － 131.995 ライン上の東西方向の土層観察用畔（Ｂ・Ｃ区）を利用して行った。更に調査範囲を覆う 20m 単位のグリッドに分け、遺物取り上げや整理作業に用いた。北東角の X= － 131,900・Y= － 39,900 を基点とし、西に向かって平行式に１～ 38 のグリッド番号を付与した（第４図）。

遺構番号は、中条小学校遺跡では、原則として遺構の種類に関わらず連続した番号を付与し、番号の前にＳＤ・ＳＰなどの種類を記した。但し、中条小学校遺跡では、あらかじめＡ区に０番台から 1,000 番台まで、Ｂ区に 2,000 番台、Ｃ区に 3,000 番台を割り当てている。

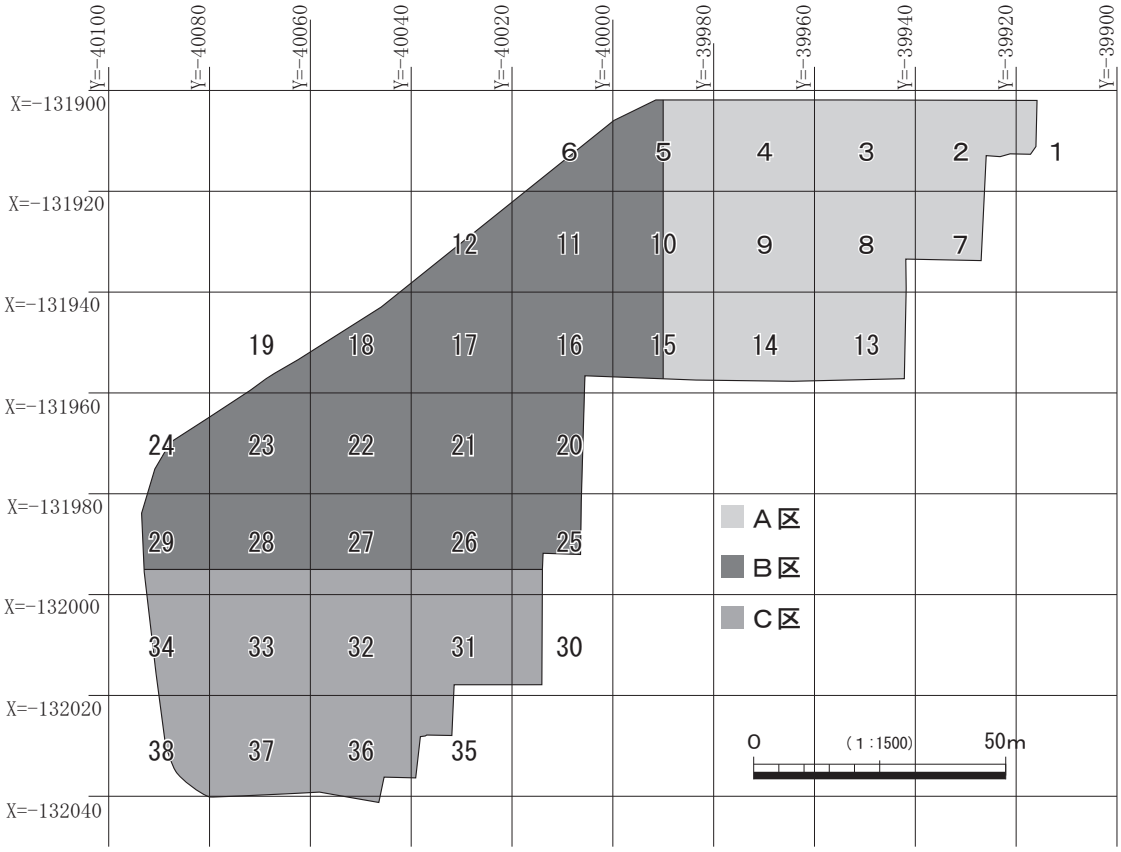
またＢ区の遺構で、Ａ区との境界付近に位置する遺構では、Ａ区の番号台を付与しているものがある。さらに列状土坑は、通し番号には含めずに、別途土坑番号を付与している。

一方、松ケ本南遺跡では調査区ごと、遺構種別ごとに番号を付与している。

記録作業は、遺構全体平面図は写真測量を実施し、調査区壁面図は 1/20、個別遺構の平・断面図については 1/10 を基本として作成した。写真撮影は、写真測量以外の足場を利用しての全景や個別の遺構などは、35mm 判のモノクロ・カラーリバーサルフィルムおよび中判（６×７）のモノクロフィルムでの撮影を行った。デジタルカメラは、メモやスナップなど補助的な使用であるが、35mm 判のバックアップとなりうるように、デジタル一眼レフによって同一カットを撮影している。また、列状土坑群の斜め写真で、タイリング手法による高解像度デジタル撮影を実施した。



第３図　調査区配置図



第４図　中条小学校遺跡地区割図

第４章　調査成果

第１節　報告にあたって

今回の調査区では全域に工場の建設・解体時の撹乱が少なからず及んでいるが、特にＢ区北半部では、遺構面のほぼ全てが破壊されていた。遺構検出は第１遺構面と第２遺構面の２面で行った。

報告に際しては本来ならば遺構・遺物の時代ごとに報告を行うべきである。しかし、本報告では主要な遺構面である第２遺構面の報告は、Ａ区とＢ・Ｃ区に分けて記述を行う。これはＡ区の遺構・遺物量が多いことと、Ｂ・Ｃ区は、列状土坑群や古墳などが両調査区にまたがっていることによる。

第１遺構面については、検出された遺構が耕作関連の素掘溝が主体であることから、全体をまとめて報告する。

遺物はコンテナ 91 箱分が出土したが、全体に磨滅が著しく、特に弥生土器・土師器・埴輪などは出土時に細片化してしまったものも多い。そのため出土状況図は作成していても遺物実測図を作成できなかったものや、図化し得ても調整の観察が不可能なものもある。

第２節　層序（第５～ 15 図）

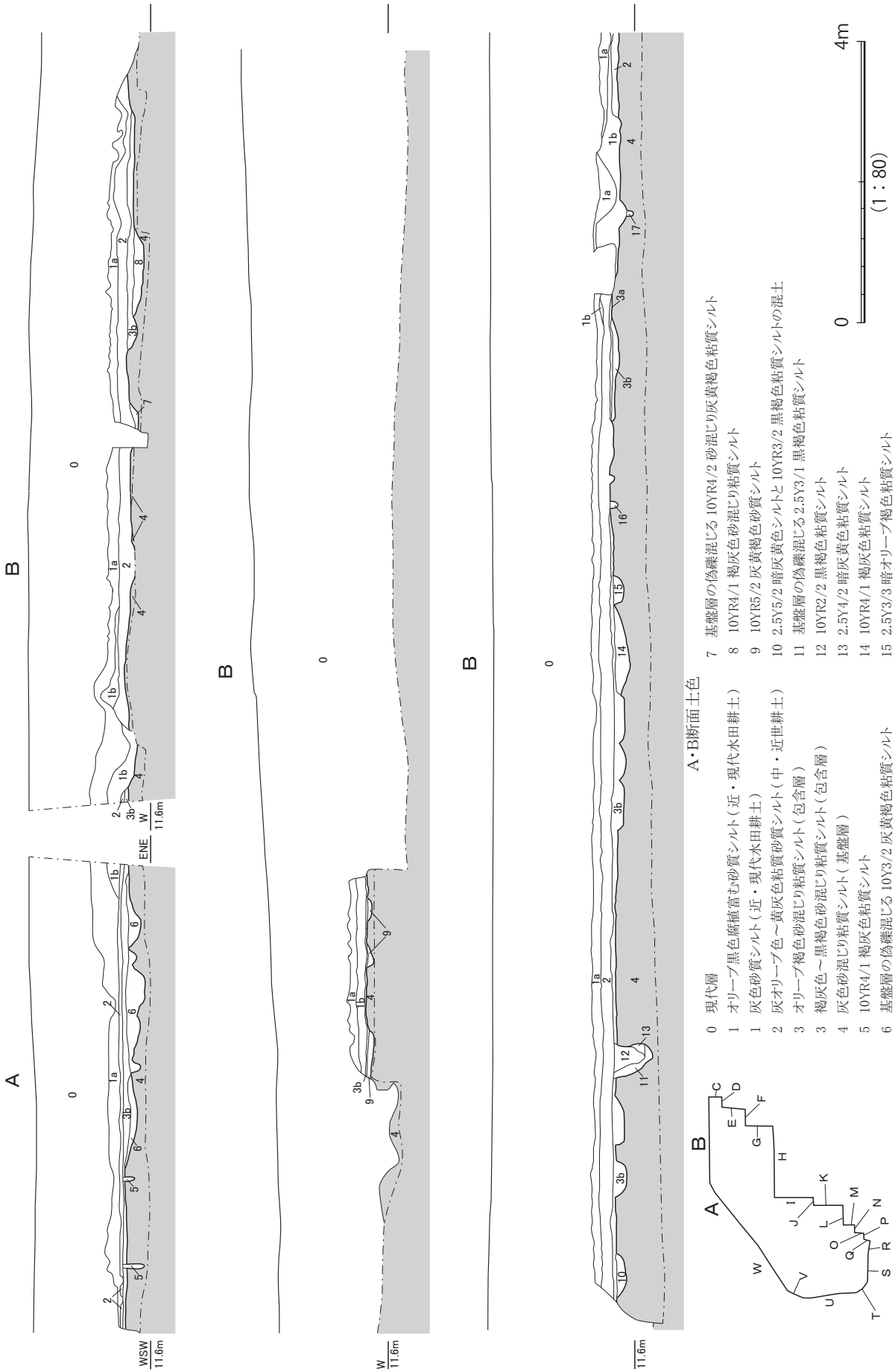
断面観察は、調査区壁面と土層観察用畔や撹乱部を利用して実施した。確認された堆積層は、自然堤防帯や扇状地などの高燥な環境下にみられる沖積層と、盛土などの人為層である。遺跡を構成する堆積層は、中・細粒の物質を主体とする。鉄・マンガン成分の斑紋 (以下、鉄斑とする) が遺跡基盤層の上部まで降下するため、全体に褐色付いて本来の色調が捉えにくい。地下水位は低く、排水は良好であるが、いったん裸地となると乾裂が生じやすく、且つ雨食されやすい性質である。層序は地点によって、色調およびその母材となる基盤層の粒度の変化に応じた層相の違いはあるが、以下に大別した５層を基本層序とした。

０層　サッポロビール大阪工場建設当時の造成土と、その後の改修や工場の解体に伴う撹乱・整地土である。沈砂池に向けて雨水が集まるように東側縁辺部が高く造成されている。

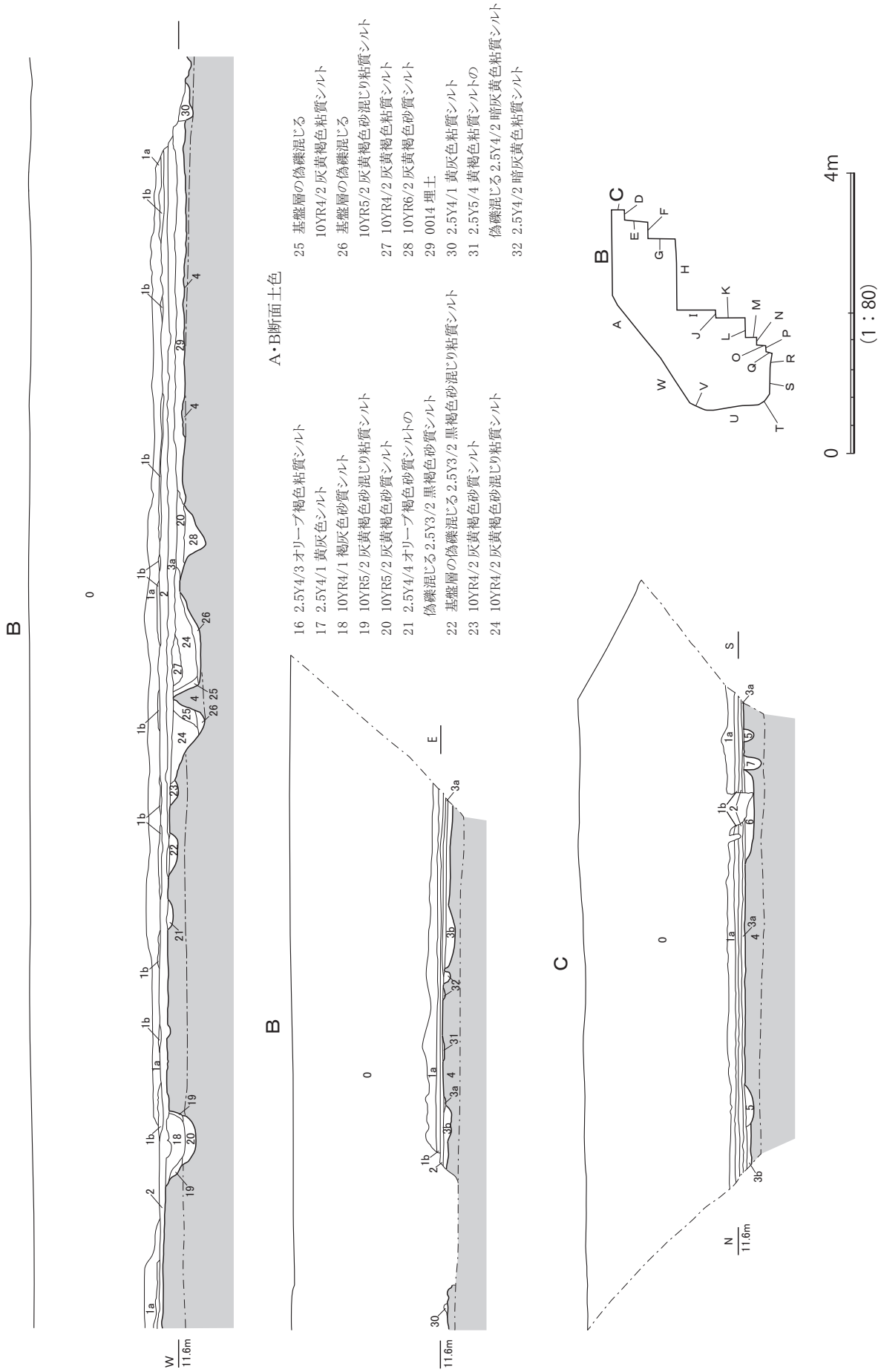
１層（１a・１b）　全域で普遍的に認められる、造成土直下の旧耕土である。鉄斑を有し、極粗粒砂と細礫がわずかに混じる砂質シルトを主体とする。オリーブ黒色の色調で腐植に富む１a 層と、その下位に普遍的に伴う灰色の色調の 1b 層に二分される。遺物はほとんど含まない。昭和 20 年代の航空写真によると、一帯はほとんどが田畑として利用されていたと判読できることから、近・現代耕土と判断される。

２層　全域で普遍的に認められる。基本的に水田耕土下に伴う層であり、床土として機能していたと考えられる。鉄斑を有し、概ね灰オリーブ色～黄灰色、Ｂ・Ｃ区西域では主に褐灰色の色調を呈する。３・４層に由来する偽礫の混じる粘質砂質シルトを主体とする。土師器・須恵器・瓦質土器・陶器・磁器など 18 世紀頃までの土器を含むが出土量が少ないことや、耕土に近い良好な粒度であること、第１遺構面で検出された素掘り小溝などの条里関連遺構の埋土は本層が該当することなどから、中・近世耕作土と判断される。形成過程を示す細分が可能であったが、調査の進行上、詳細な細分は行っていない。本層を除去した下面を第１遺構面とした。

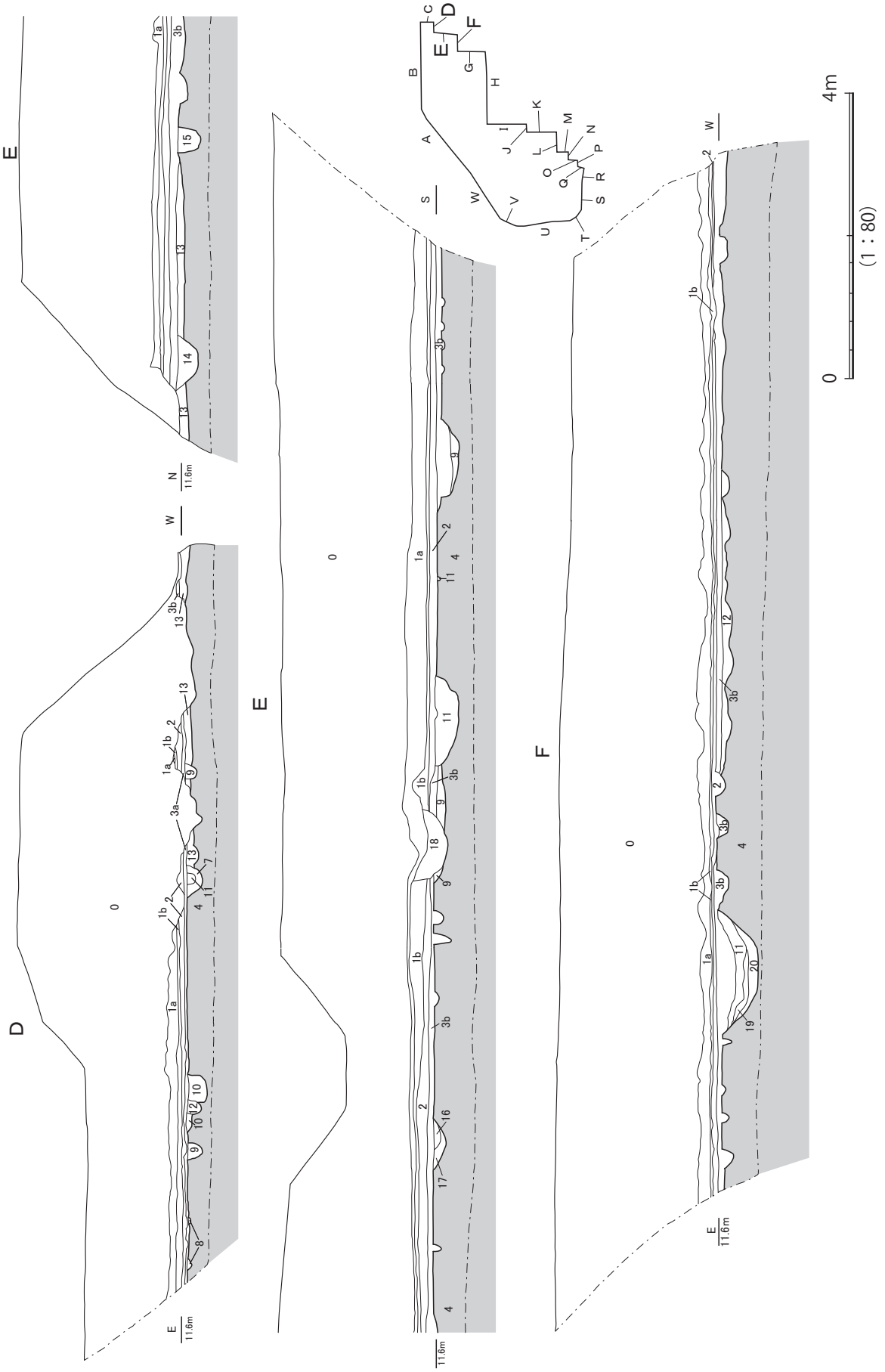
３層（３a・３b）　Ｂ・Ｃ区の東部などを除いた調査区のほぼ全域で認められる鉄・マンガン沈着層



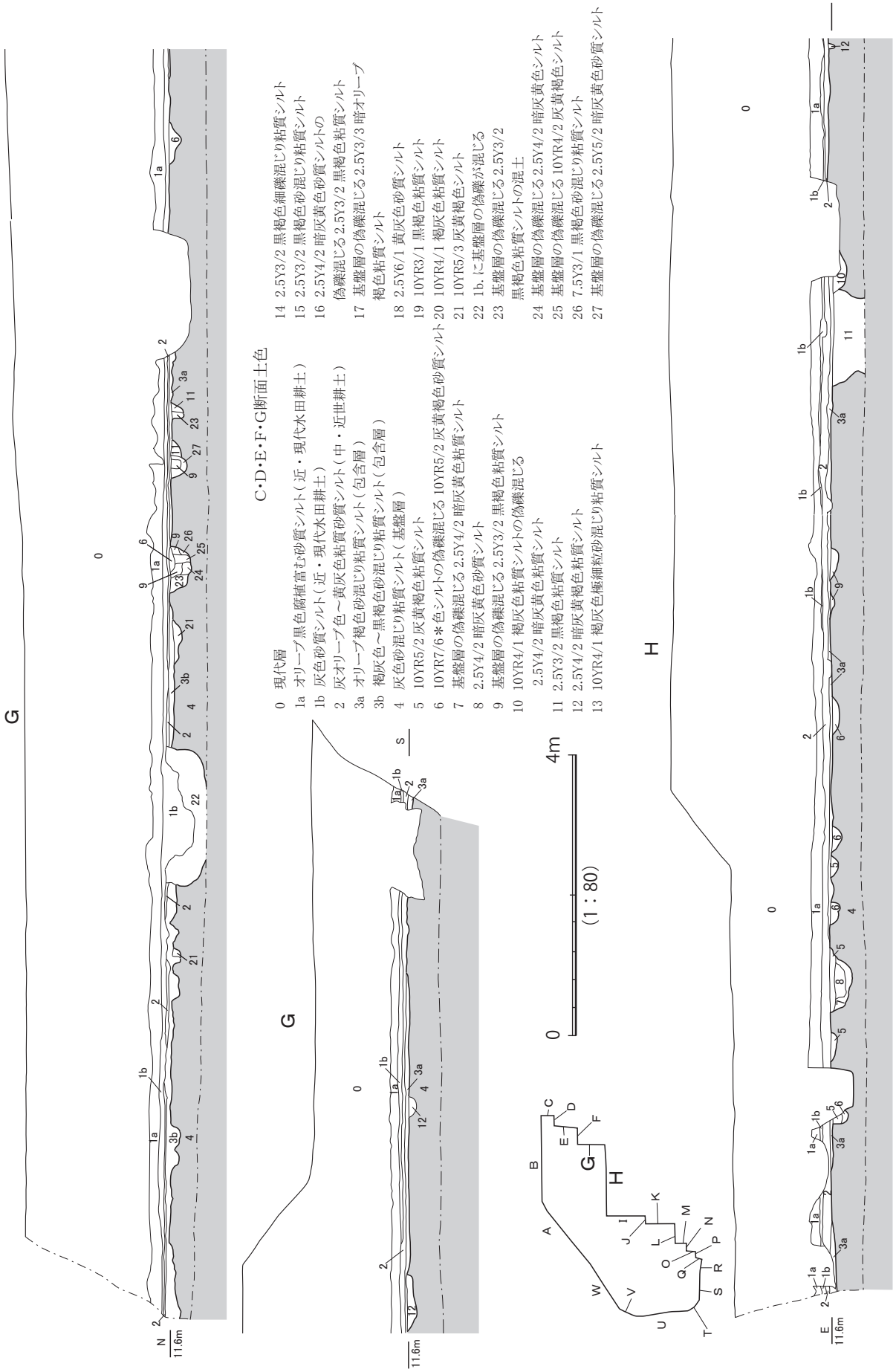
第５図　Ａ区北壁土層断面図



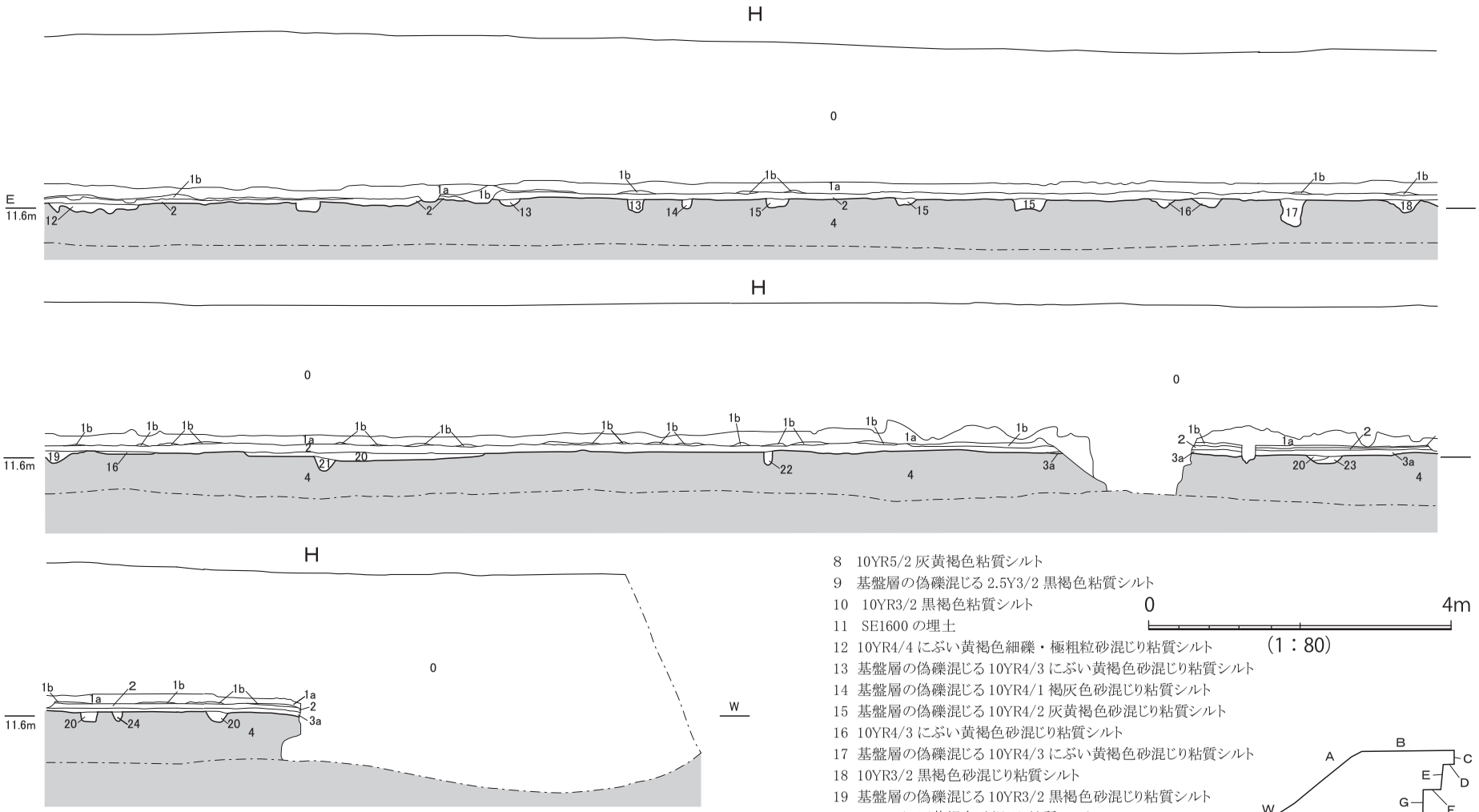
第６図　Ａ区北壁・東壁土層断面図



第７図　Ａ区東壁土層断面図



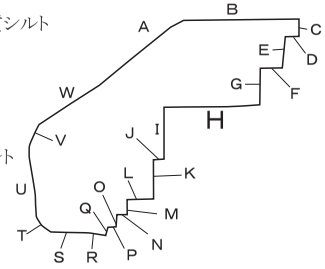
第８図　Ａ区東壁・南壁土層断面図



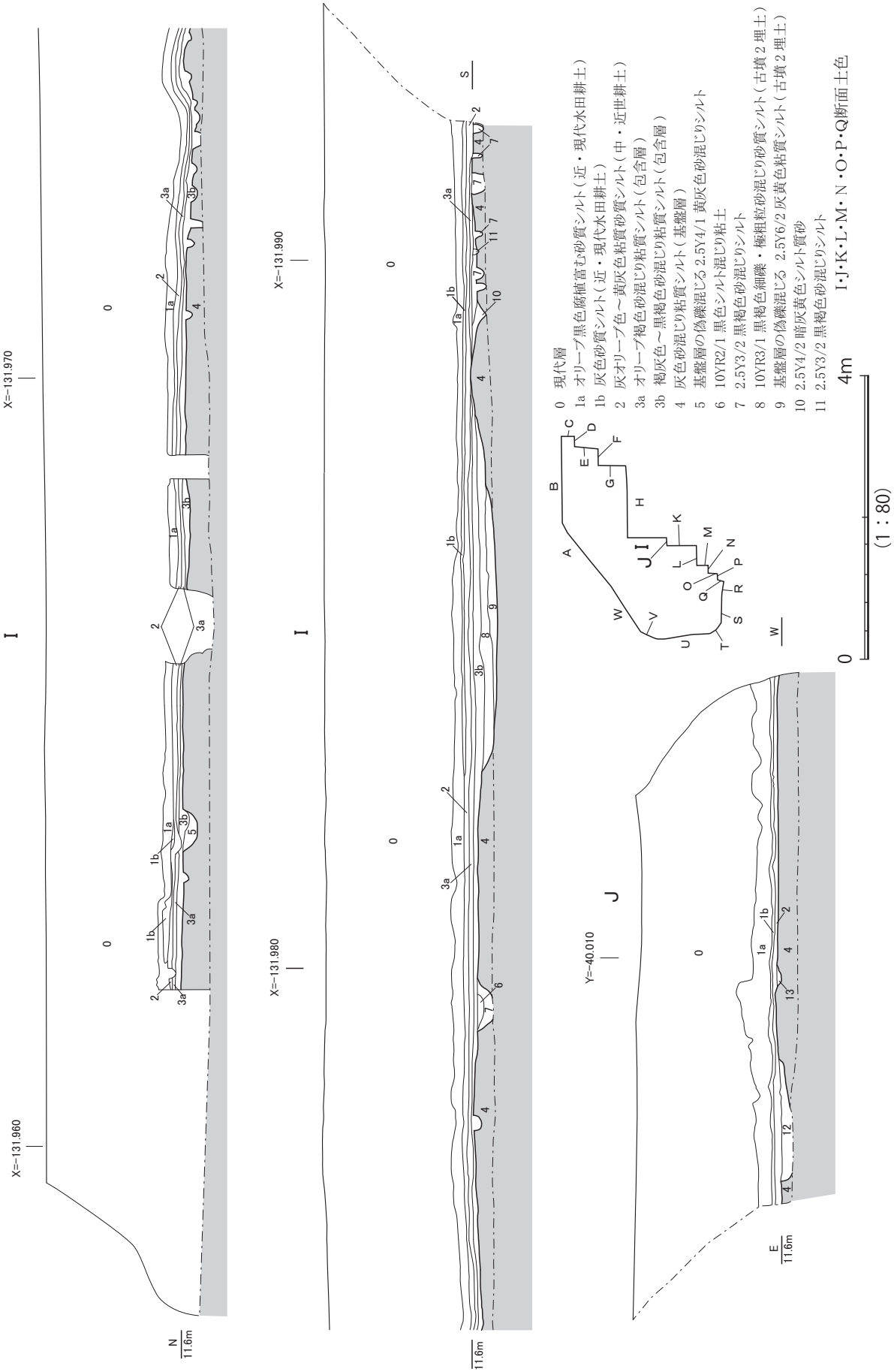
H断面土色

0　現代層
1a　オリーブ黒色腐植富む砂質シルト（近・現代水田耕土）
1b　灰色砂質シルト（近・現代水田耕土）
2　灰オリーブ色～黄灰色粘質砂質シルト（中・近世耕土）
3a　オリーブ褐色砂混じり粘質シルト（包含層）
3b　褐灰色～黒褐色砂混じり粘質シルト（包含層）
4　灰色砂混じり粘質シルト（基盤層）
5.　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト
6　基盤層の偽礫混じる 10Y5/2 灰黄褐色粘質シルト
7　基盤層の偽礫混じる 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
8　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト
9　基盤層の偽礫混じる 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト
10　10YR3/2 黒褐色粘質シルト
11　SE1600 の埋土
12　10YR4/4 にぶい黄褐色細礫・極粗粒砂混じり粘質シルト
13　基盤層の偽礫混じる 10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じり粘質シルト
14　基盤層の偽礫混じる 10YR4/1 褐灰色砂混じり粘質シルト
15　基盤層の偽礫混じる 10YR4/2 灰黄褐色砂混じり粘質シルト
16　10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じり粘質シルト
17　基盤層の偽礫混じる 10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じり粘質シルト
18　10YR3/2 黒褐色砂混じり粘質シルト
19　基盤層の偽礫混じる 10YR3/2 黒褐色砂混じり粘質シルト
20　10YR4/2 灰黄褐色砂混じり粘質シルト
21　10YR4/2 灰黄褐色細礫・極粗粒砂混じり粘質シルト
22　基盤層の偽礫混じる 10YR5/2 灰黄褐色砂混じり粘質シルト
23　10YR6/1 灰色シルトと 5B6/1 青灰色粘質シルトの混土
24　7.5Y7/1 灰白色シルトと 7.5Y5/1 灰色粘質シルトの混土

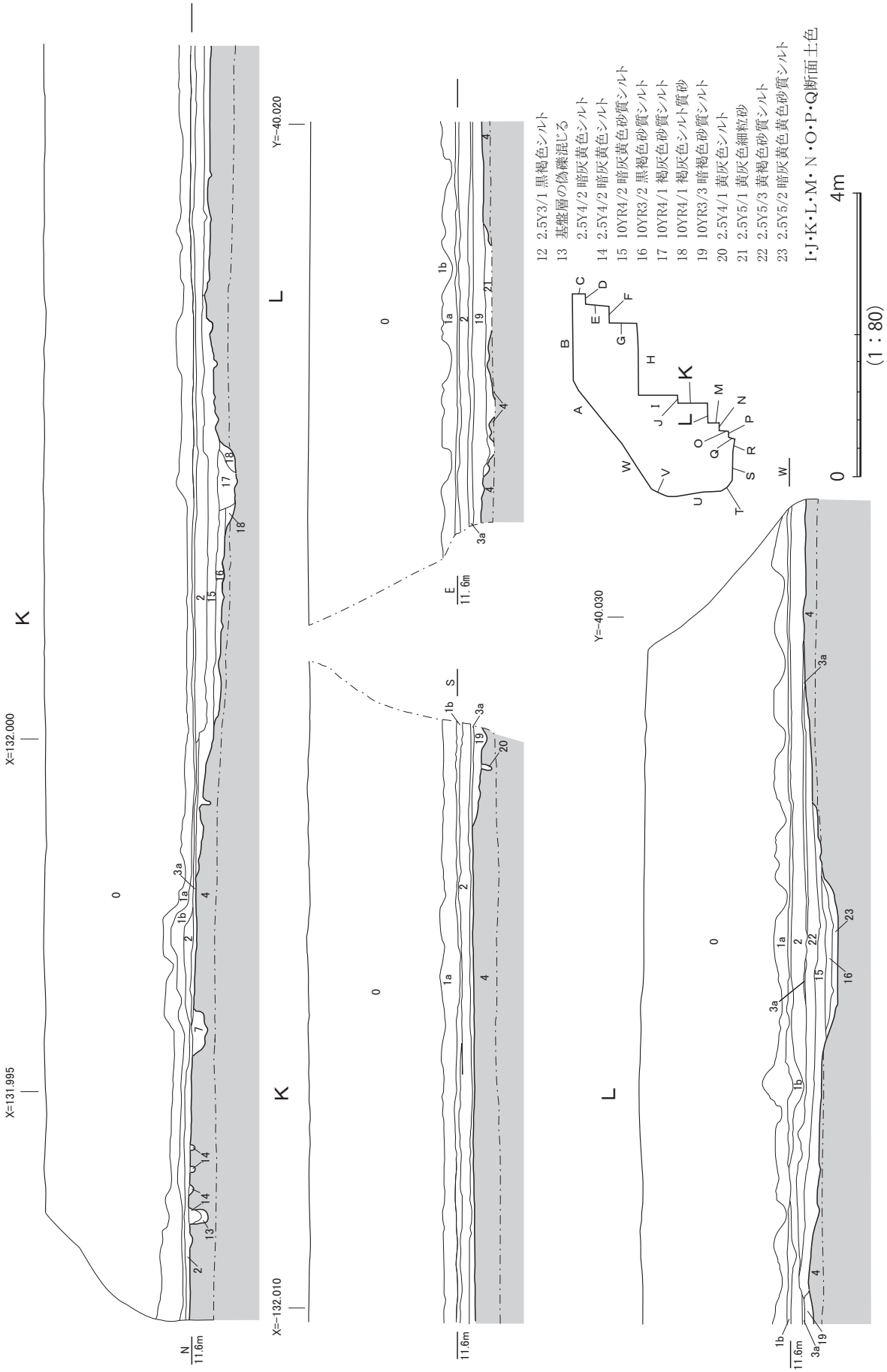
0　4m
（1：80）



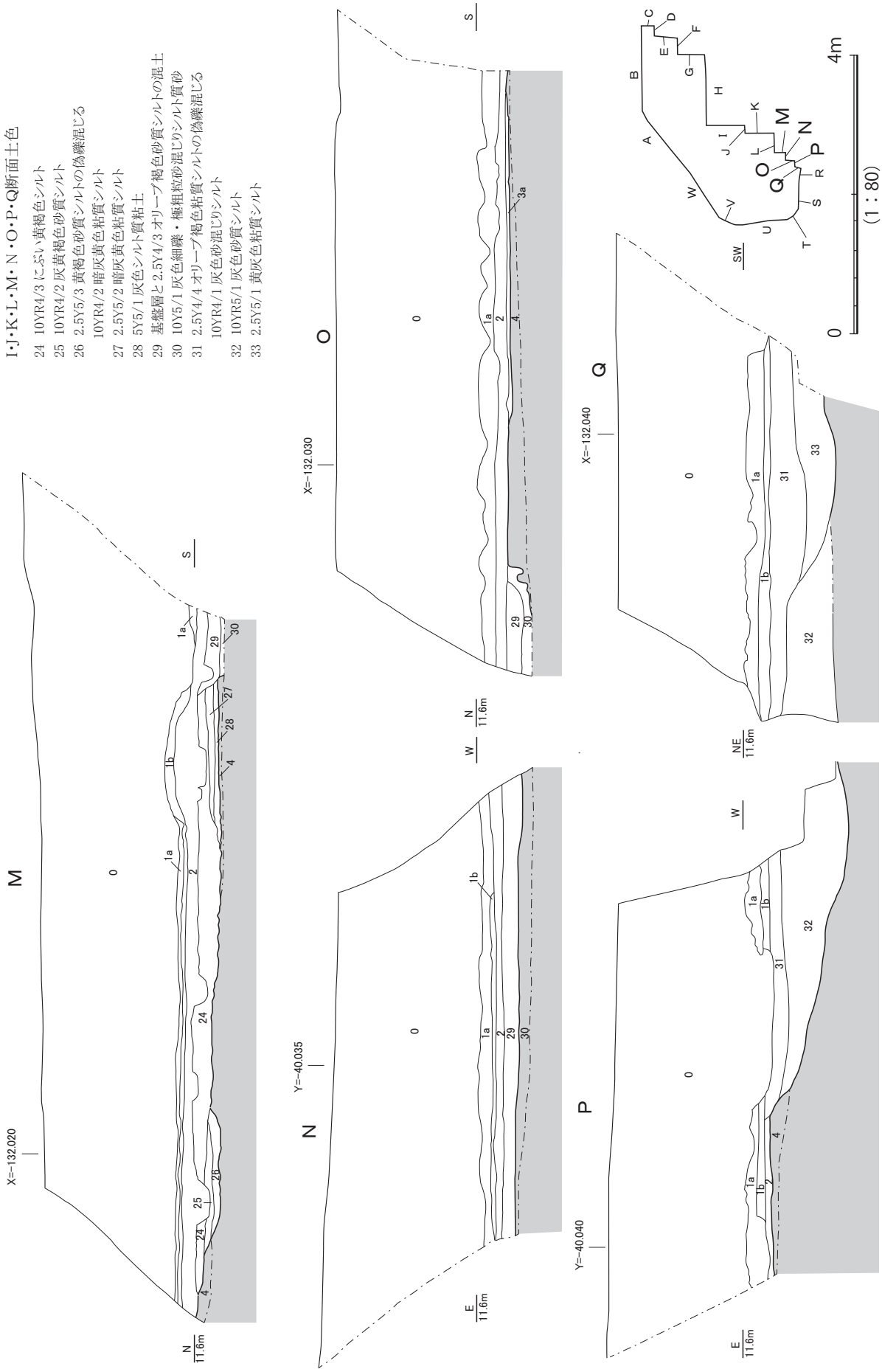
第９図　A区南壁土層断面図



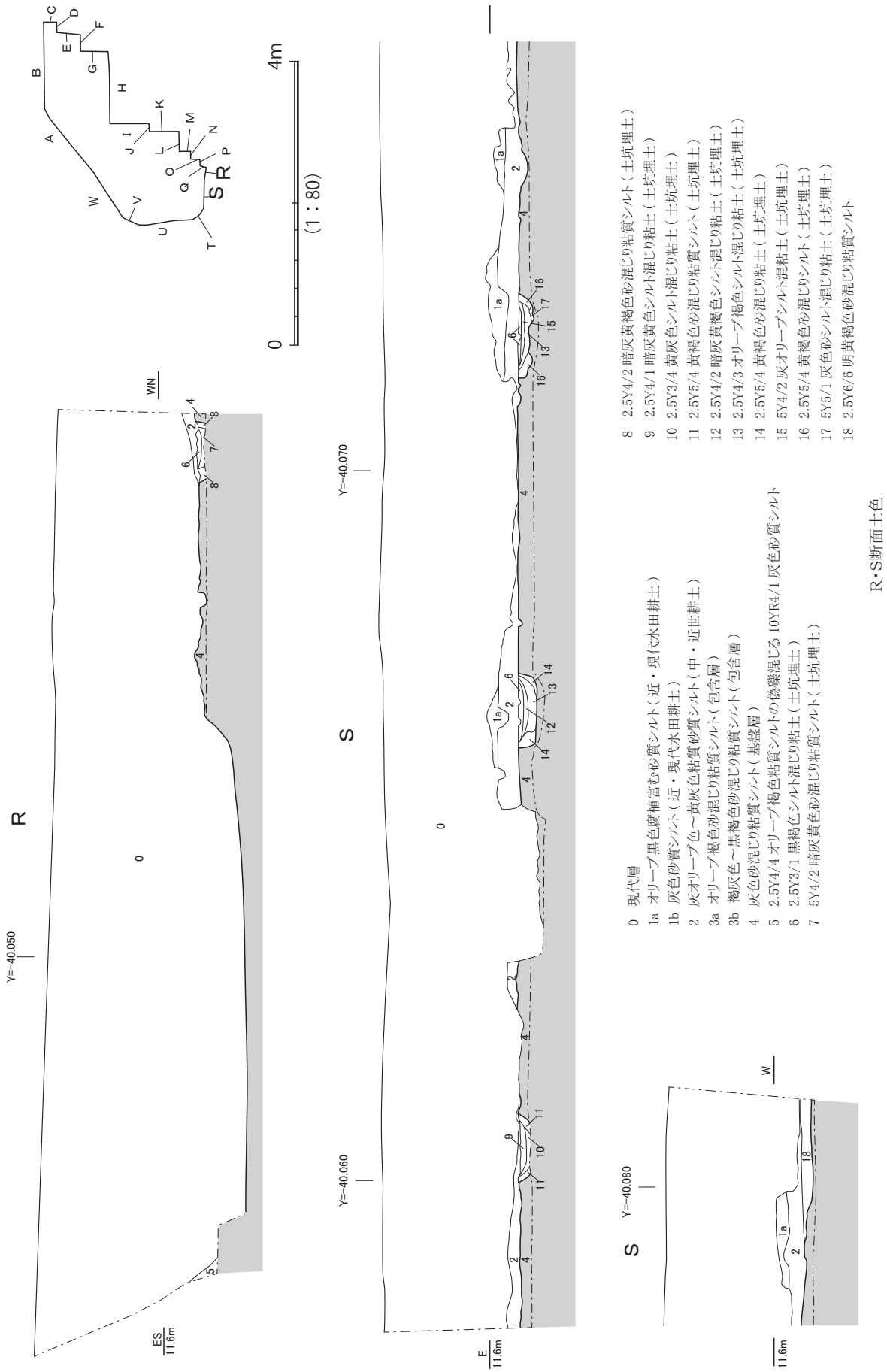
第 10 図　B 区東壁土層断面図



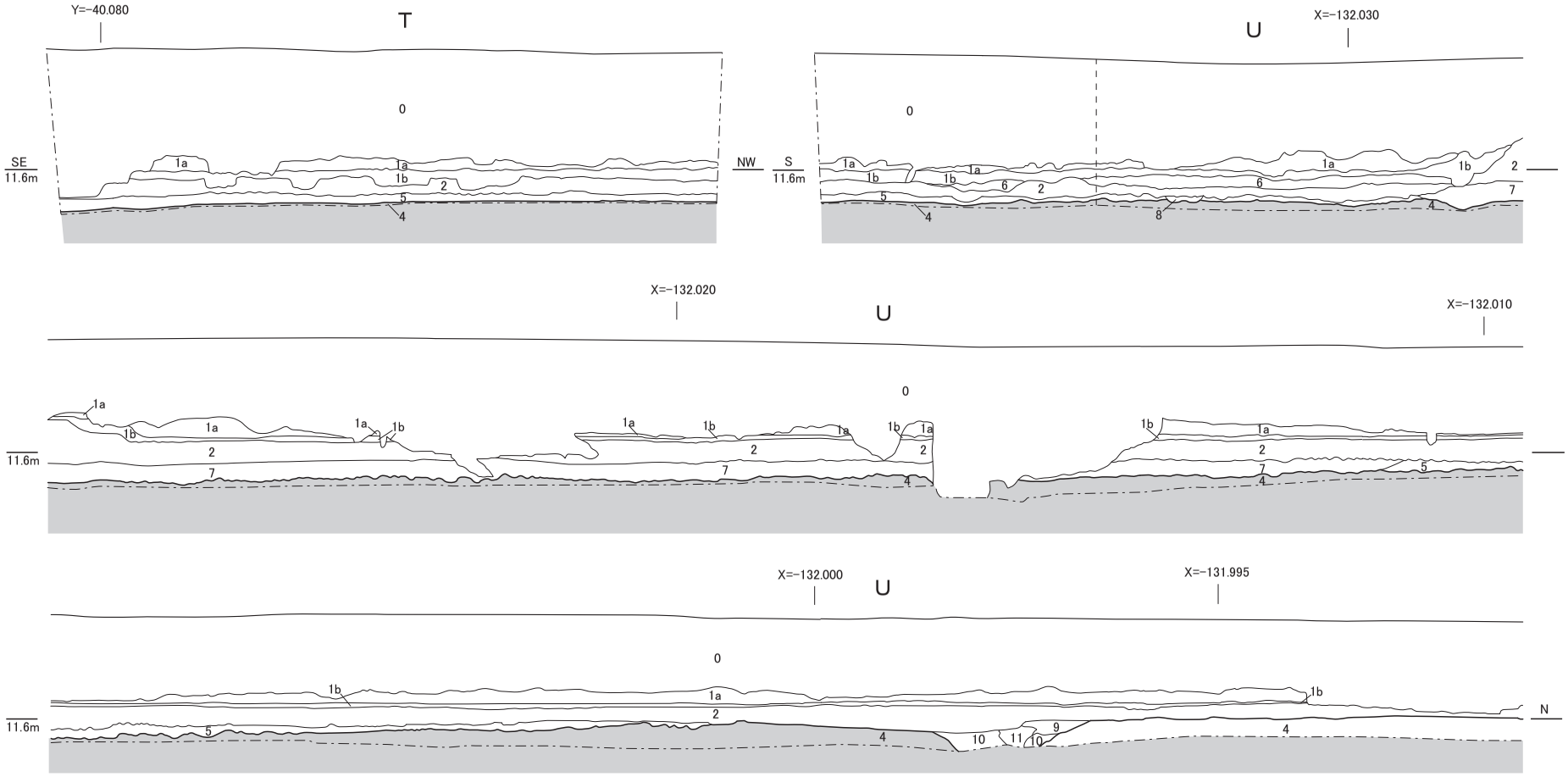
第 11 図　B・C区東壁土層断面図



第 12 図　C区東壁土層断面図

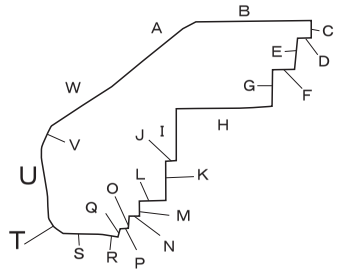


第 13 図　C 区南壁土層断面図

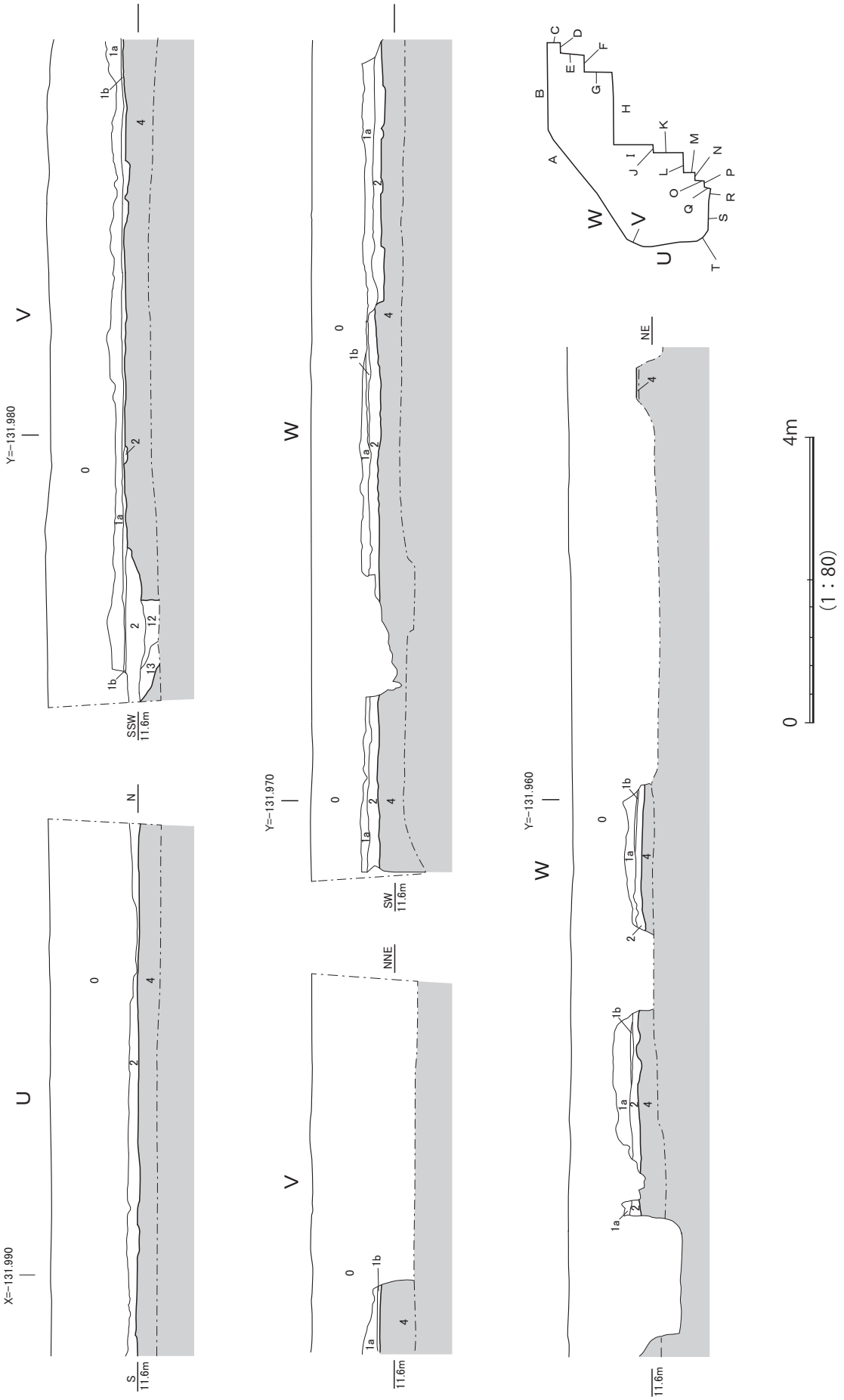


0　現代層
1a　オリーブ黒色腐植富む砂質シルト（近・現代水田耕土）
1b　灰色砂質シルト（近・現代水田耕土）
2　褐灰色～黄灰色粘質砂質シルト（中・近世耕土）
3a　オリーブ褐色砂混じり粘質シルト（包含層）
3b　褐灰色～黒褐色砂混じり粘質シルト（包含層）
4　灰色砂混じり粘質シルト（基盤層）
5　2.5Y6/6 明黄褐色粗粒砂混じり粘質シルト
6　10YR5/1 褐灰色粗粒砂混じり粘質シルト
7　10YR4/4 褐色細礫・極粗粒混じり砂質シルト（古墳3埋土）
8　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト
9　10YR5/6 黄褐色粘質シルト
10　10YR4/1 褐灰色粘質シルト
11　10YR6/6 明黄褐色粘質シルト
12　7.5Y5/1 黄灰色粗粒砂混じり粘質シルト
13　基盤層の偽礫混じる 7.5Y5/1 黄灰色粗粒砂混じり粘質シルト

0　4m
（1：80）



第14図　B・C区西壁土層断面図

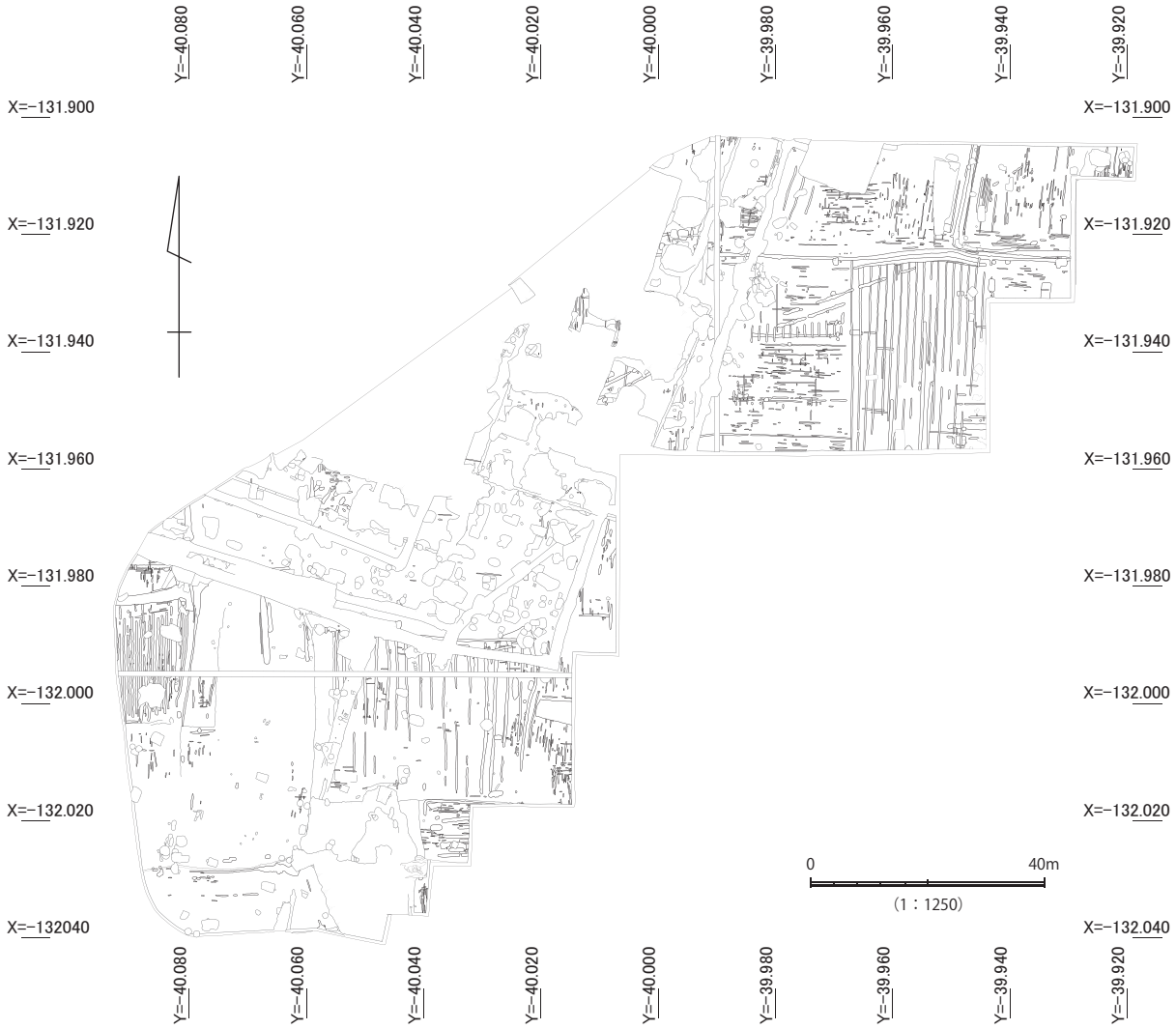


第 15 図　B区西壁・北壁土層断面図

で遺物包含層である。弥生時代中期から 12 世紀頃までの遺物を含むが、主体は弥生時代後期後半の遺物である。遺構面を被覆する土壌化層である 3a 層と、生活面や遺構埋土と一体となった土壌化層である 3b 層に二分される。3a 層はオリーブ褐色の色調を呈し、砂混じりの粘質シルトを主体とするものが A 区を中心に分布するが、地形的に低い B・C 区では砂質が多くなり、灰黄褐色～暗灰黄色の色調を呈する。3b 層は褐灰色～黒褐色の色調を呈する砂混じりの粘質シルトである。遺構の埋土としては近似したものが全域で認められるが、層として確認できるのは部分的である。

4 層　本遺跡の基盤層である。鉄斑を有し、一見明黄褐色を呈するが、基質は灰色の色調である。中・粗粒砂混じりの粘土・シルトを主体とする。A・B 区境界付近では、放棄流路と思われる砂ベースで締まりの悪い帯状の領域が南北方向に分布する。B・C 区では、開析谷の埋積層に相当する泥質を帯びた領域が大きく占める。開析谷の詳細は不明であるが、東西方向の幅は B・C 区境界付近で約 70m を測る。地点により最上部に暗色帯が挟在し側方に連続する。やがて深く埋没して追跡し得ないが、開析谷谷頭付近の基盤層に現れ、開析谷内へ埋没しているものと思われる。暗色帯を含め土器等の遺物は含まないが、炭化物の細片は散見される。これらを 4 層として総称し、本層上面を第 2 遺構面 (最終面) とした。

尚、鉄斑については、遺構埋土を含めたほとんどの堆積層が有するため、以降は特筆すべき場合以外には記載しない。



第 16 図　第 1 面全体平面図

第 17 図　A 区第 1 面平面図

第 3 節　第 1 面の調査成果

（1）第 1 遺構面の概要

調査区のほぼ全域で素掘り小溝・土坑などを検出した。すべて基底部での検出であり畦畔などを捉えることはできなかった。

平坦地を得るために削り出された段差も認められるが、全体として西北西から東南東方向に下る緩傾斜地形を呈する。最も標高が高い A 区北西部や B 区西部で 11.8m 前後、最も低い C 区南端部で 11.2m 前後を測る。地形的に高い部分は削平されているため、B・C 区西端部などでは、4 層上面が検出面となる。

（2）遺構と出土遺物（第 16 ～ 20 図）

素掘り小溝　溝同士の間隔が不規則で検出長が短く、東西溝と南北溝が交錯する溝群と、溝同士の間隔が規則的で検出長が長く、比較的明瞭に掘り込まれた南北溝群とに大別できる。前者は調査区全体に分布し、溝幅 0.1 ～ 0.3m、深さ 0.03 ～ 0.1m を測り、断面形状は浅い皿状を呈する。後者は区画溝とみられるやや深く掘り込まれた溝によるまとまりが認められ、三ヶ所に集中する。

A 区南東部の 8・9・13・14 グリッドで検出された一群は、後述する坪境溝とみられる東西溝の南側に南北方向に並行して走る。坪境溝と同規模で検出長 22m を測る溝に端を発し、一部は調査区外に延びる。検出長 32m 以上、溝幅 0.3 ～ 0.4m、深さ約 0.15m、溝心間約 1.25m を測り、断面形状は浅い皿状を呈する。西側にも区画溝とみられる小溝を構える。

B・C 区西端の 29 グリッドで検出された一群は、北辺に幅 1.6 ～ 2.1m、深さ 0.4m 前後、断面形

が逆台形を呈する幅広の溝と、東辺に区画溝とみられる小溝に区画された内側に、南北方向の溝が多数検出された。検出長 18m 前後、溝幅 0.3m 前後、深さ 0.1 ～ 0.15m、溝心間約 0.7m を測り、断面形状は浅い皿状を呈する。

Ｂ・Ｃ区東側から中央部にかけての 26・27・31・32 グリッドでは、東西約 30m に渡って南北溝群が展開する。検出長 15 ～ 25m、溝幅 0.2 ～ 0.7m、深さ 0.1 ～ 0.15m、溝心間２m 前後を測り、断面形状は浅い皿状を呈する。先の二群と比べるとやや溝の間隔が広く、疎らに分布するため一連のものとは断じられないが、北側には区画溝とみられる東西方向の小溝が認められる。

素掘り小溝は、東西方向の小溝列を切るように南北方向の小溝列が掘削されている。ある時期を境として、東西方向から南北方向へと変化した可能性が推測できるが、時期は不明である。埋土は基本層序の２層に相当するものであるが、下位層の偽礫がよく混じる。

耕作単位と思われる範囲ごとに、わずかな方向性の違いを示すが、条里地割の方向に概ね合致する。

坪境溝　Ａ区中央部に位置する東西方向の溝は、旧地籍図の大字界にほぼ合致するもので、東西方向に長さ 72m 以上、幅 0.4 ～ 0.7m、深さ 0.15m 前後を測る、断面形状が「Ｕ」字状の溝である。本溝より南側は約 0.05m 下がる段差となっている。埋土は第２層に相当する。

また、本溝に並行する同規模の溝が認められる。北側に並行する溝は、平面形「L」字状の溝で、南辺が約 11m、西辺 17.5m 以上、幅 0.3 ～ 0.9m、深さ約 0.2m を測り、断面形状は「Ｕ」字状を呈する。一段低い位置に存在する南側の溝は、検出長 22m、幅 0.4 ～ 0.7m、深さ 0.1m 前後、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は第２層に相当する。

Ｃ区南端部に位置する東西溝は、旧地籍図の小字界に合致するものである。南側が約 0.1m 下がる段差に沿う。大きく撹乱されており、撹乱の西側は検出長約 18m を測る。その西半は溝幅 0.2 ～ 0.3m、深さ 0.05 ～ 0.1m、断面形状は浅い「Ｕ」字状を呈する細溝であるが、東半は幅 0.5m 前後、深さ 0.5m を測り、やや蛇行する溝となる。埋土は第２層に相当する。撹乱の東側は、検出長 10m 以上、溝幅約３m、深さ約 0.75m を測り、断面形状は「Ｕ」字状を呈する。埋土上層は人為層で埋積され、下層は細礫混じりの砂で、流路であったことを示す。東西で様相が異なり、遺物も出土しなかったため、詳細は不明である。

土坑　素掘り小溝列に伴うようにして 10 基程を検出した。平面形は隅丸長方形であるものが多い。規模は長径 1 ～ 2m、深さ 0.3m 程度を測るものが多い。素掘り小溝と重複する場合は、切るものと切られるものの両方があるため、ほぼ同時期に営まれたものと考えられる。埋土はいずれも素掘り小溝等と同様であるが、泥質を帯びる。機能としては、灌漑水を管理する簡易な井戸として利用されていた可能性が考えられる。

第１面検出時および第１面出土遺物　第 1 面の検出時及び側溝・撹乱と第 1 面の鋤溝から出土した遺物である。旧石器時代～近世までの様々な遺物が出土しているが、遺構出土遺物に認められないものや特徴的なものを抽出して報告する。

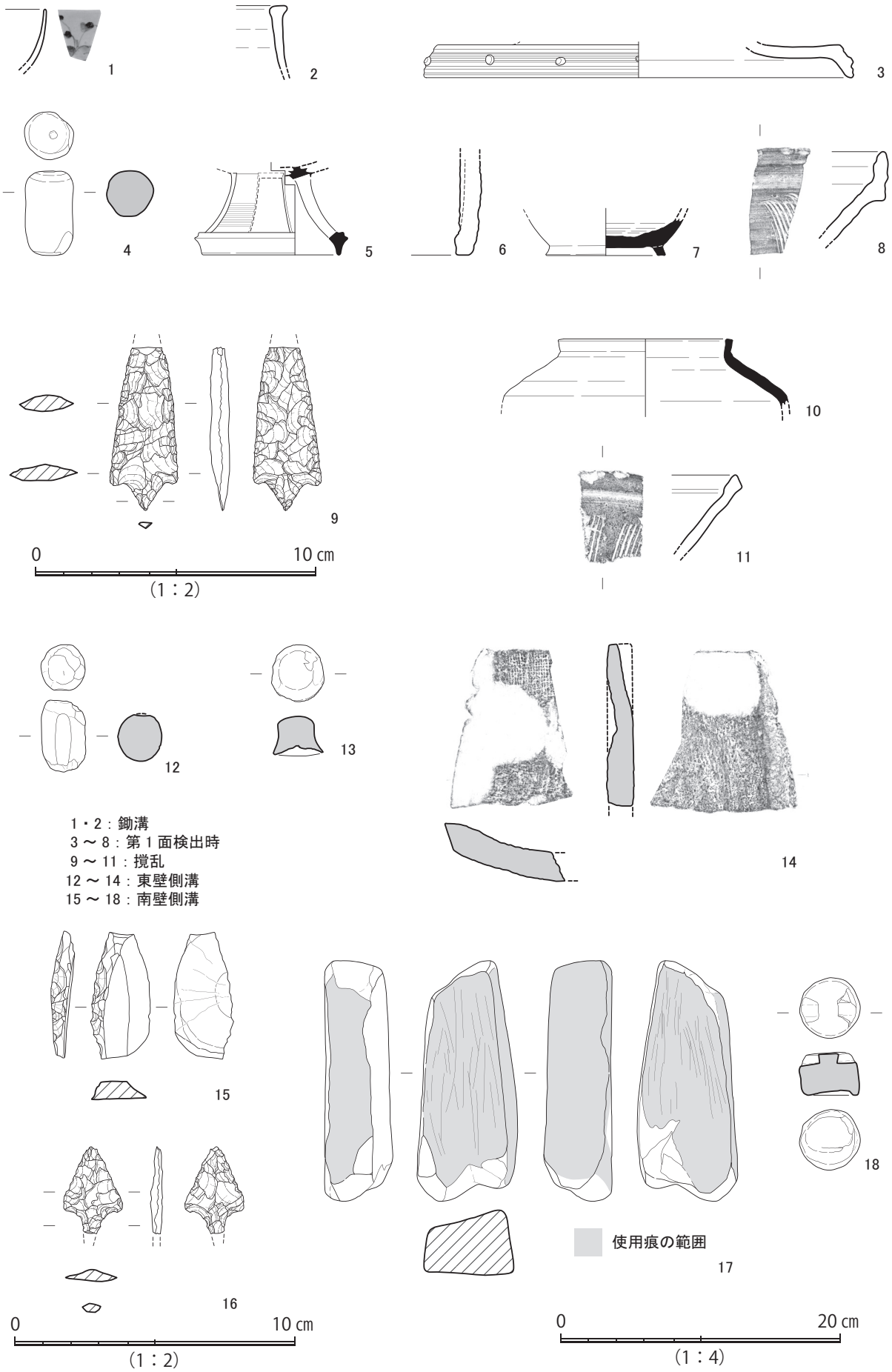
Ａ区第１面　鋤溝出土遺物（第 18 図　１・２）

1 は染付碗である。外面に草花文を描く。胎土の色調のためか、茶色がかった色調を呈する。

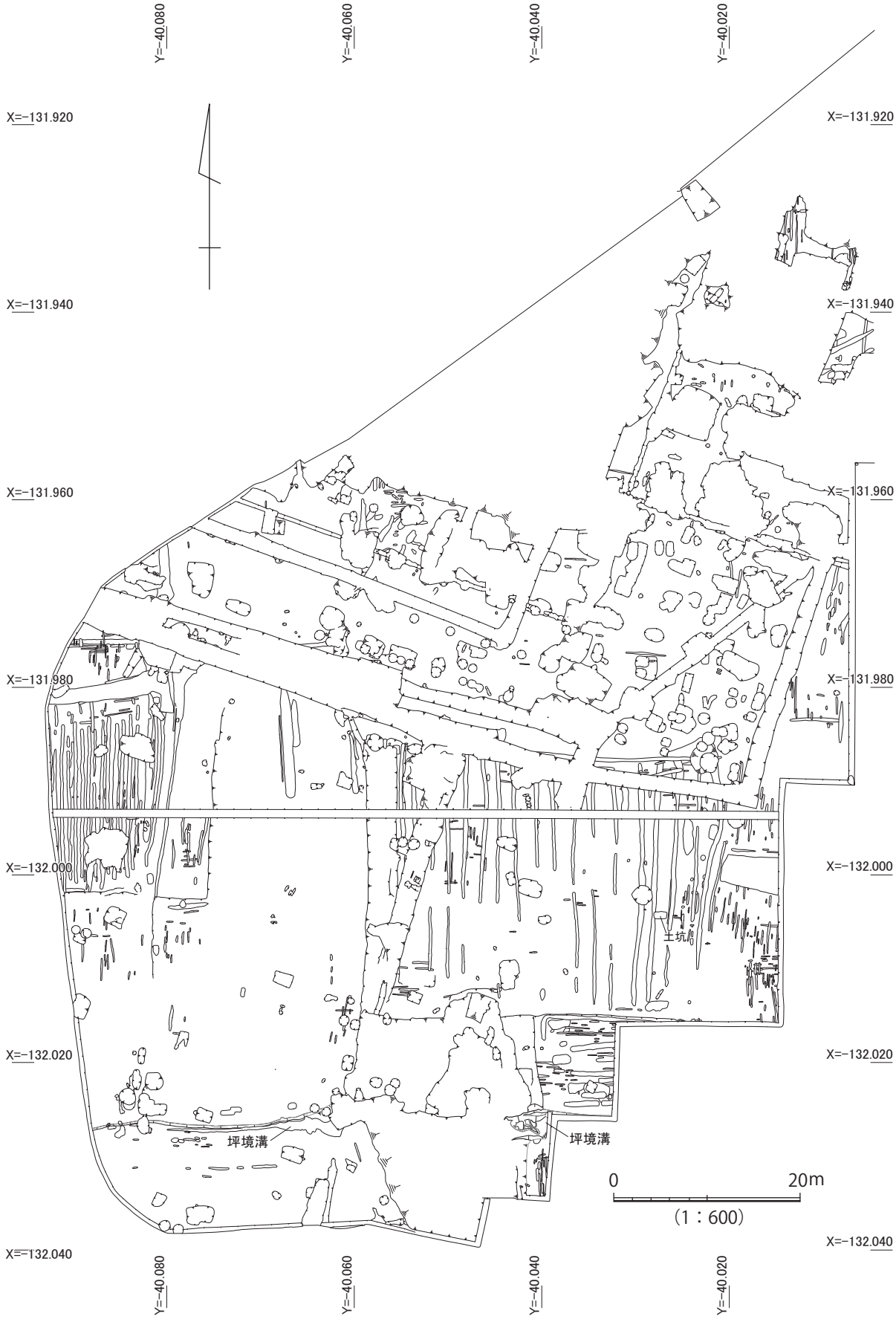
2 は陶器鉢である。口縁部は上端が外方へ拡張し面を成す。外面に褐色釉を施す。

Ａ区第１面検出時出土遺物（第 18 図　３～８）

3 は弥生土器高杯である。杯部から水平に張り出す口縁部をもつ。端部は下方に拡張し、端面に凹



第 18 図　A 区第 1 面出土遺物実測図



第 19 図　B・C 区第 1 面平面図

線文４条と突起状の円形浮文を施す。弥生時代中期のものである。

4 は土錘である。下端が一部欠損する。長さ 6.0cm、直径 3.4cm、重量 80 ｇである。上面・下面ともに直径 0.6cm の円形に鉄分が沈着している部分が認められる。後述する **122** などの例から、この部分は貫通していると思われる。

5 は須恵器高杯である。脚端部は下方に拡張し、上面に凹線が巡る。脚部外面にカキメを施し、方形透かし孔を４方向に穿つ。内面に自然釉が付着する。ＴＫ 47 型式のものである。

6 は埴輪である。小片のため不確実であるが、直径はおよそ 6.0cm 前後の円筒形となる可能性がある。円筒埴輪としては径が小さいため、形象埴輪の一部であろう。

7 は須恵器壺である。断面方形の貼り付け高台をもつ。内面に火膨れが認められる。高台内も含め外面全体に緑灰色の自然釉が付着する。８世紀頃のものである。

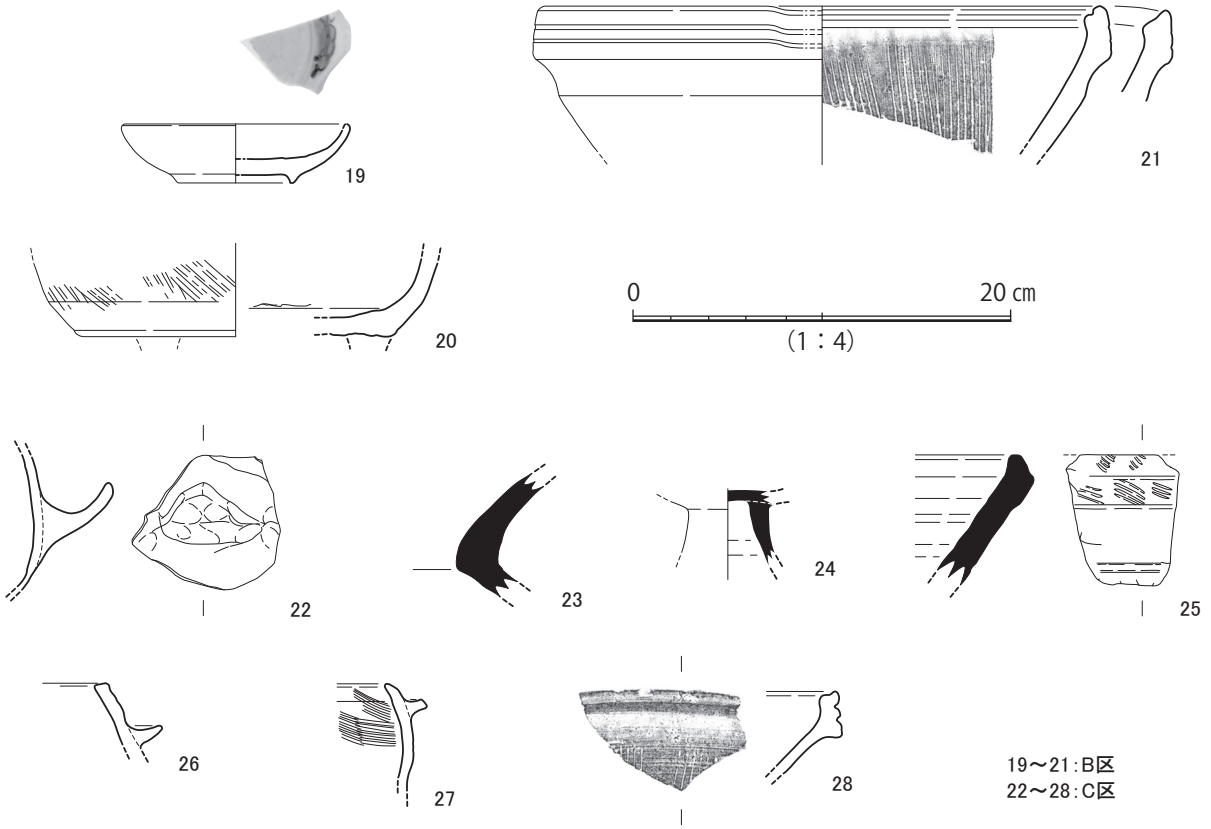
8 は陶器擂鉢である。口縁部は垂直に立ち上がり、内面はナデにより凹線状に窪む。擂目は９条認められる。また、使用による磨り減りが認められる。口縁部外面に自然釉がかかっており、灰白色を呈する。内面は灰黄褐色を呈する。18 世紀頃の丹波焼か。

Ａ区撹乱出土遺物（第 18 図　9～11）

9 は有舌尖頭器である。先端部は欠損する。残存長 5.8m、幅 2.35cm、厚さ 0.55cm、重量 9.0 ｇのサヌカイト製である。両側縁は直線的で、返し部から基部にかけては身部に抉り込むようにしており、返し部が明瞭である。一部に斜並行剥離を施す。縄文時代草創期のものである。

10 は須恵器壺Ａである。短く直立する口縁部をもち、端部上端は面を成す。

11 は陶器擂鉢である。口縁端面と体部がほぼ直角を成し、口縁部内面に凹線を施す。体部内面に５条以上を単位とする擂目を施す。使用痕は顕著ではない。17 世紀前半の丹波焼である。



第 20 図　Ｂ・Ｃ区第１面出土遺物実測図

Ａ区東壁側溝出土遺物（第 18 図　12 ～ 14）

12 は円筒状土製品である。上部が欠損する。形態は **4** と似ているが、円形の鉄分の沈着も穿孔も認められない。現状で長さ 5.2cm、直径 3.1 ～ 3.25cm、重量 62 ｇである。長辺の一か所（図の正面部分）に面取りがなされており、別のものと組み合わせていた可能性がある。

13 は半球状土製品である。長径 4.1cm、短径 3.7cm、高さ 2.7cm を測る。両側面はユビオサエにより押しつぶされたようになっている。裏面は接合面で剥離しており、何らかの製品の一部であろう。

14 は平瓦である。残存長 11.5cm、残存幅 10.3cm、厚さ 2.0cm を測る。側縁と狭端面が残存する。凹面に布目圧痕、凸面に縄タタキ痕が認められる。

Ａ区南壁側溝出土遺物（第 18 図　15 ～ 18）

15 は翼状剥片である。長さ 4.4cm、幅 2.0cm、厚さ 0.5cm、重量６ｇのサヌカイト製である。先端部は欠損する。刃部に相当する箇所に細かい調整を行っているが、刃部の形成にはいたっていない。旧石器時代のものである。

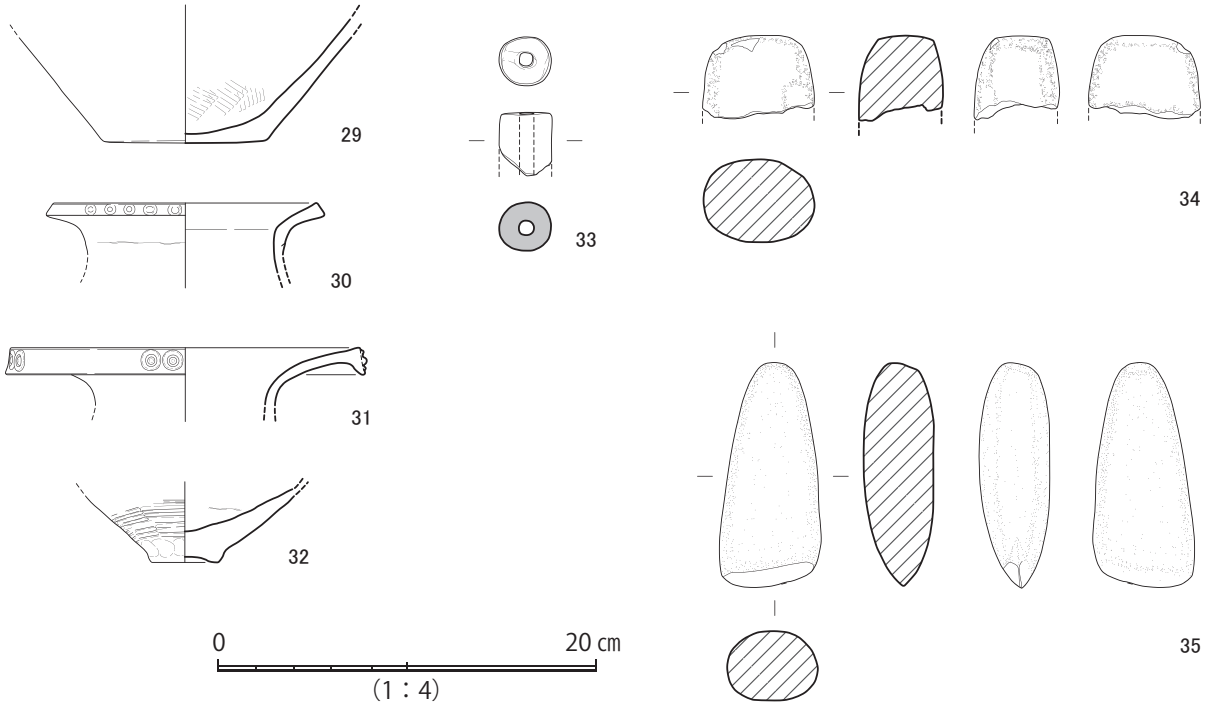
16 は有茎式石鏃である。残存長 3.1cm、幅 2.1cm、厚さ 0.45cm、重量 2.0 ｇのサヌカイト製である。茎の先端が欠損する。鏃身の平面形は三角形状を呈する。弥生時代中期のものである。

17 は砥石である。長さ 17.3cm、幅 7.3cm、厚さ 4.85cm、重量 731.5 ｇである。４面とも使用痕が認められ、特に幅の広い２面には縦方向の筋が多数認められる。

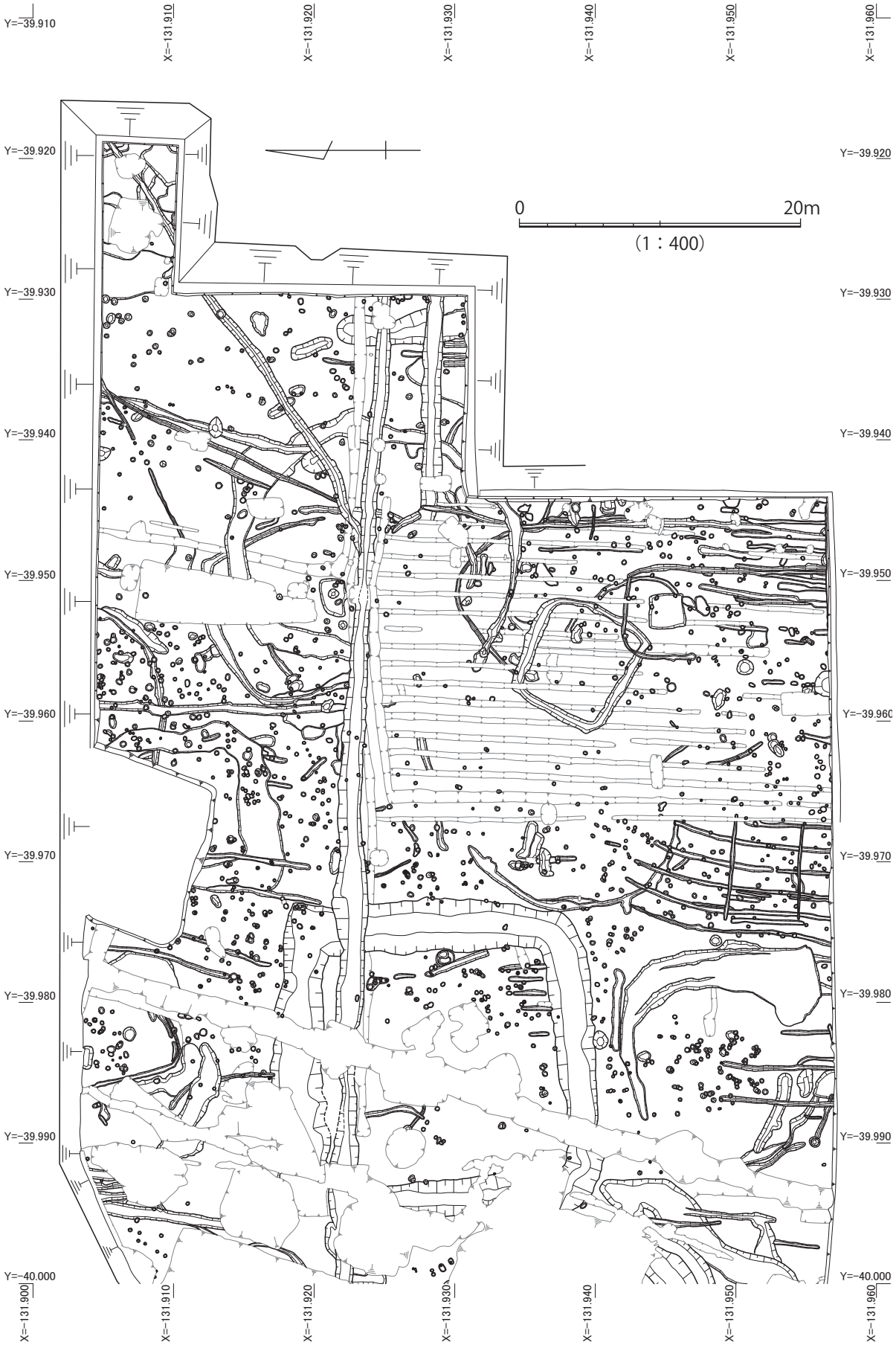
18 は土製品である。扁平な円筒形を呈し、上面に円筒を半分にした形状の深さ 0.5cm 程度の窪みが２箇所存在する。窪みの間は幅 1.2cm の陸橋状になっている。上面は赤色に彩色している可能性がある。下面はユビオサエによる窪みが一か所認められる。側面も丁寧にナデており、これ自身は完形品である。上面の窪みと陸橋状の部分をつまみとして用いる蓋状ないし栓状のものであろうか。

Ｂ区第１面検出時出土遺物（第 20 図　19 ～ 21）

19 は染付皿である。断面台形状の高台をもつ。高台端部は釉ハギを行う。内面は見込みに蛇ノ目釉ハギを施し、その外側に圏線２条と松ないし雲状の文様を描く。線で描いた部分は鉄分が多かった



第 21 図　Ａ区第２面検出時出土遺物実測図



第 22 図　A 区第 2 面平面図

のか銹化する。18 世紀代のものである。

20 は瓦質土器鉢である。底面に脚が剥離した痕跡が認められる。外面にタタキを施す。底部外面は未調整である。

21 は陶器擂鉢である。口縁部縁帯の外面に凹線２条を施し、縁帯直下にナデを施す。口縁内面には凹線を施し、９条一組の擂目を施し、擂目の上端を揃えるためにナデを施す。注口は一部が残存する。内面には使用による磨滅が認められる。備前系である。

Ｃ区第１面検出時出土遺物（第 20 図　22 ～ 28）

22 は土師器把手付甕である。把手の平面形態は三角形状、断面は扁平な四角形状を呈する。

23 は須恵器甕である。口縁部は外反する。体部内面に同心円状当て具痕が認められる。

24 は須恵器高杯である。中空の脚柱部をもつ。脚柱部外面にカキメを施す。

25 は須恵器鉢である。口縁端部は上方に拡張し面を成す。口縁部直下はやや肥厚し、凹線１条を施す。肥厚する部分と口縁端部外面に櫛状工具による刺突文を施す。外面全体に自然釉がかかる。

26 は土師質土器羽釜である。口縁部は内傾し、短く水平に延びる鍔をもつ。菅原分類の摂津Ｅ型である。

27 は瓦質土器鍋である。口縁部は内傾し、短く水平に延びる鍔をもつ。内面にハケを施す。

28 は陶器擂鉢である。口縁部縁帯の外面に凹線２条を施し、口縁部内面にナデによる窪みをもつ。内面に６条１組の擂目を施す。内外面に鉄釉を塗布する。18 世紀後半頃の丹波焼と考えられる。

（３）小結

嶋下郡東部の茨木は、嶋上・嶋下両郡の主条里域に属し、条は東から西、里は北から南に数え、坪並びは東北端から始まり東南で終わる千鳥式である。本調査地では大字奈良と大字下穂積の旧地籍図や古絵地図に見える、半折型の地割り区画にほぼ合致するかたちで、条里地割に沿う素掘り小溝群などを検出した。尚、小字名は「総行」および「下池」に該当する。

第４節　Ａ区第２面の調査成果

（１）遺構と出土遺物

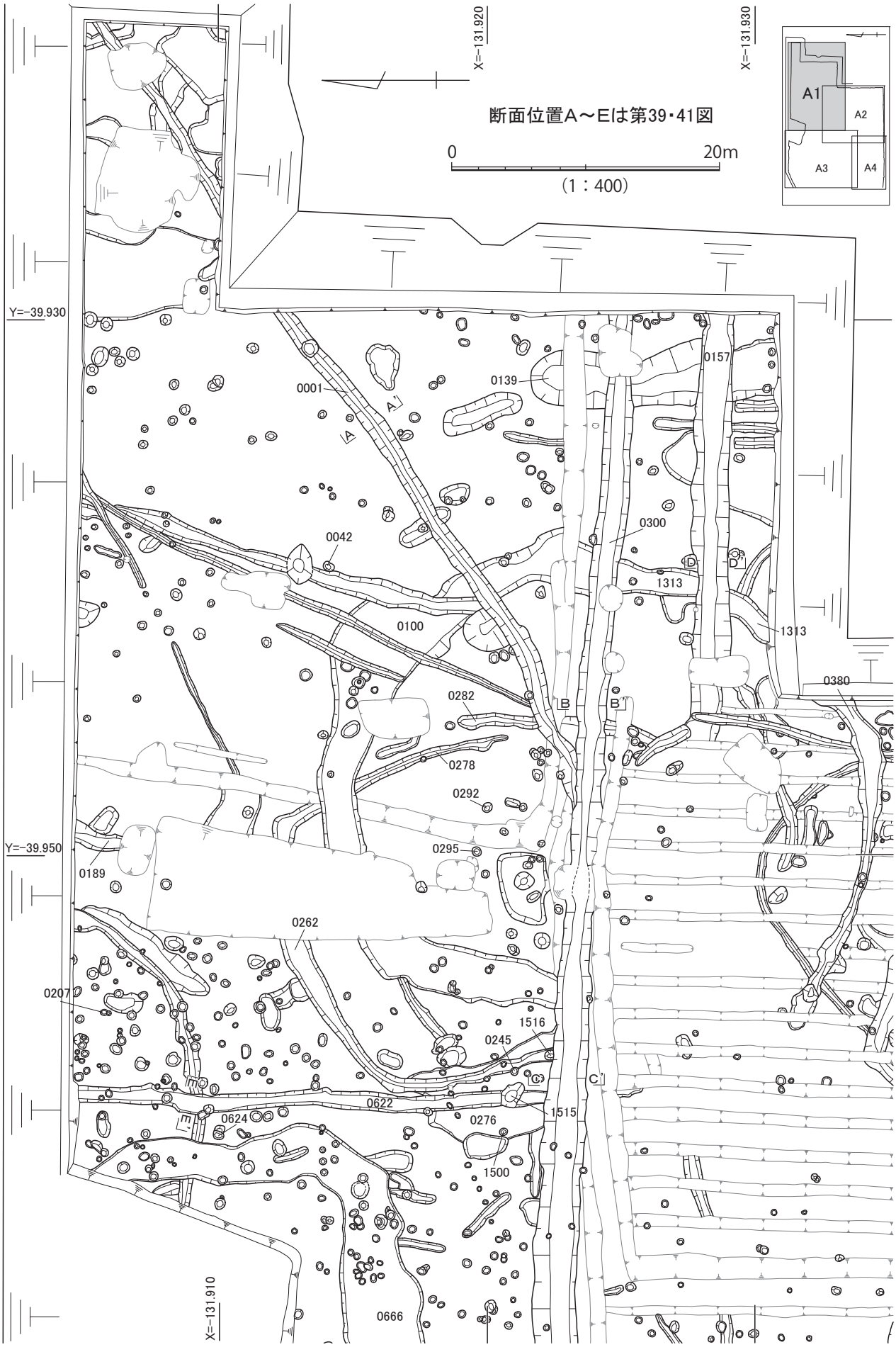
Ａ区では、各時代の様々な遺構を検出している。しかし、調査面積が広大なため、すべての遺構を対象としてその年代ごとに記述したのでは、その位置を把握しにくくなるおそれがある。そのためＡ区をＡ１～Ａ４の任意のブロックに４分割し、その範囲内に位置する遺構について記述していくこととする。ただし、ブロックをまたぐ遺構については、先に報告するブロックにおいて記述し、Ａ区全体における各時代の様相については、本節の最後にまとめることとする。

まず、第２面検出時の出土遺物について記述を行った後、各ブロックの遺構及び遺構出土遺物についての記述を行う。

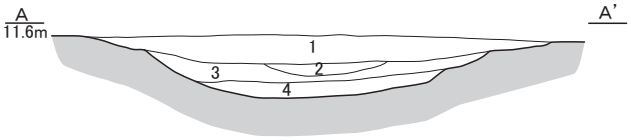
１）第２面検出時出土遺物（第 21 図　29 ～ 35）

弥生土器（中期、後期）・土錘・石斧を図示した。

29・30・31 は壺である。**29** は壺底部である。平底で、内面にハケを施す。中期のものである。**30・31** は広口壺である。**30** は口縁部が外反し、端部は面を成す。端面に竹管文を施す。**31** は口縁

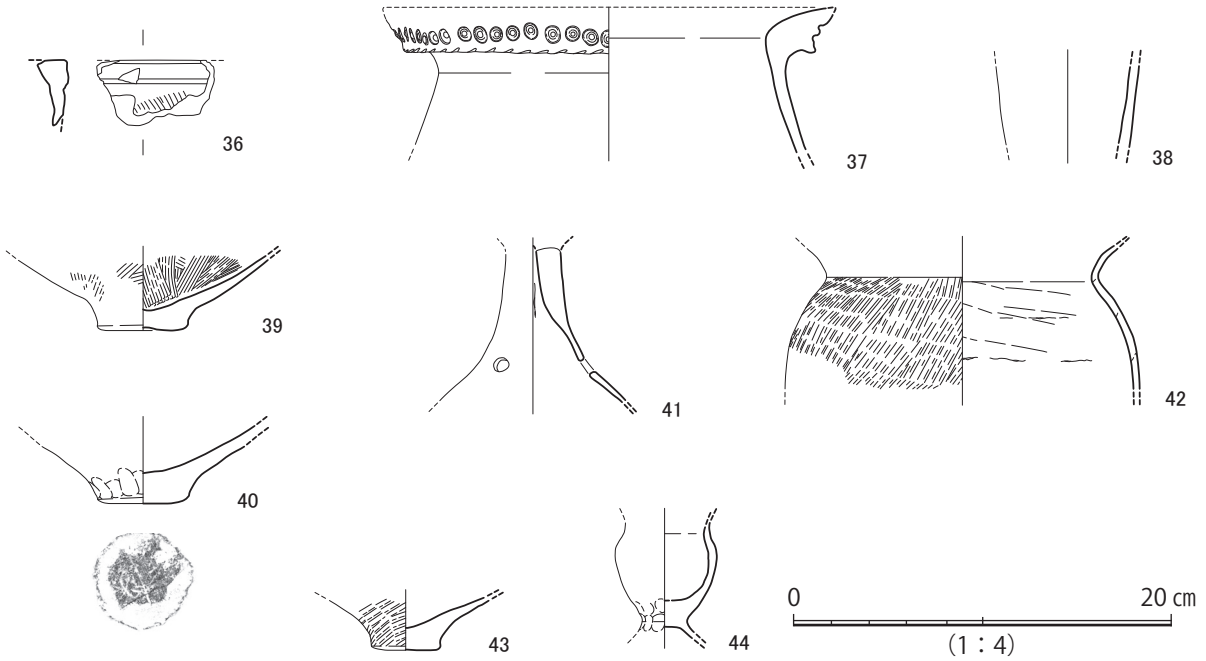


第 23 図　A 区 1 ブロック平面図



1　10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト細粒砂混じりと
　10YR5/2灰黄褐色粘質シルト極細砂混じりの混土
2　2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト（土師質土器片を含む）
3　10YR5/1褐灰色粘質シルト極細粒砂混じり
4　2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルトと2.5Y5/1黄灰色粘質シルトの混土

第 24 図　ＳＤ 0139 平面・断面・遺物出土状況図



第 25 図　ＳＤ 0139 出土遺物実測図

部が外反し、端部は下方に拡張し面を成す。端面に円形浮文を２個１組で施す。後期のものである。

32 は甕である。外面にタタキ、底部周辺にユビオサエを施す。底部はドーナツ底である。

33 は管状土錘である。下側は欠損する。残存長 3.1cm、直径 2.5cm、重量 24 ｇである。直径 0.8cm の円孔が貫通する。

34・35 は太型蛤刃石斧である。**34** は基端部のみ残存する。残存長 4.4cm、残存幅 5.9cm、厚さ 4.4cm、重量 167.8 ｇである。基端はほぼ平らで、やや斜めに広がりながら、刃部に延びていくようである。断面形状は円形を呈する。**35** は長さ 11.9cm、幅 5.4cm、厚さ 3.7cm、重量 331 ｇである。基部が尖り、平面形態は長三角形状を呈する。刃部は片側のみ平滑に磨かれる。ともに弥生時代中期のものである。

２）Ａ区１ブロックの遺構・出土遺物（第 23 ～ 41 図）

Ａ区１ブロックでは弥生時代後期、古墳時代、古代の遺構を検出した。グリッド１～４、７～８に位置する。

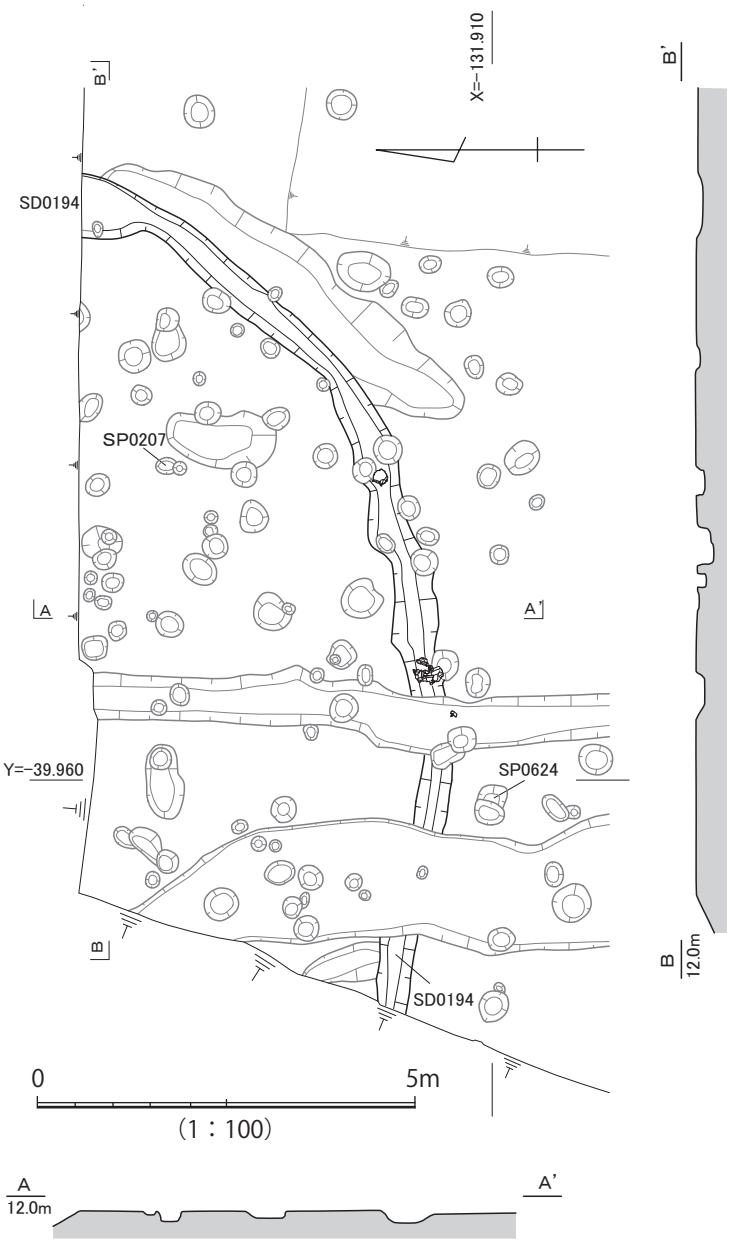
弥生時代後期の遺構

ＳＤ 0139（第 24・25 図）　グリッド７に位置する。南北方向の溝で、南側は調査区外に延びる。検出長 9.4 m、幅 2.4 m～ 3.0 m、深さ 0.35 mを測る。断面形状は椀状を呈する。ＳＤ 0300・ＳＤ 0157 に切られる。遺物は埋土の中層から後期の弥生土器が出土した。最下層からは僅かに弥生時代中期の土器片が出土している。

遺物は９点を図示した。**（第 25 図　36 ～ 44）**

36 は鉢である。口縁端部は内彎しながら立ち上がり、外側に肥厚して、上端と外側が面を成す。中期後半のものである。

37 ～ 40 は壺である。**37** は頸部が内傾して立ち上がる。口縁部は短く外反し、端部は下方に拡張して面を成す。端面に竹管文、端面下端に刺突文を施す。**38** は直口壺である。頸部・口縁部とも欠損する。**39・40** は底部である。**39** はドーナツ底で、内外面にハケを施す。**40** はやや丸みを帯びる



第 26 図　ＳＤ 0194 平面・断割図

突出した平底で、底面に木の葉圧痕が認められる。外面は粘土紐の接合面で剥離する。

41 は高杯である。中空の脚柱部と緩やかに開く裾部をもつ。円形透かし孔を３方向に穿つ。脚柱部内面にシボリメが認められる。上面に直径 0.4 ～ 0.5cm の楕円孔を穿つ。接合法によって杯部と接合していると思われる。

42・43 は甕である。ともに外面にタタキを施す。**42** は頸部から肩部が残存する。**43** は突出した平底である。

44 はミニチュア台付土器である。体部は上半が内彎し、頸部は外反する。台部は「ハ」字状に広がるが、端部は欠損する。

ＳＤ 0194（第 26・27 図）

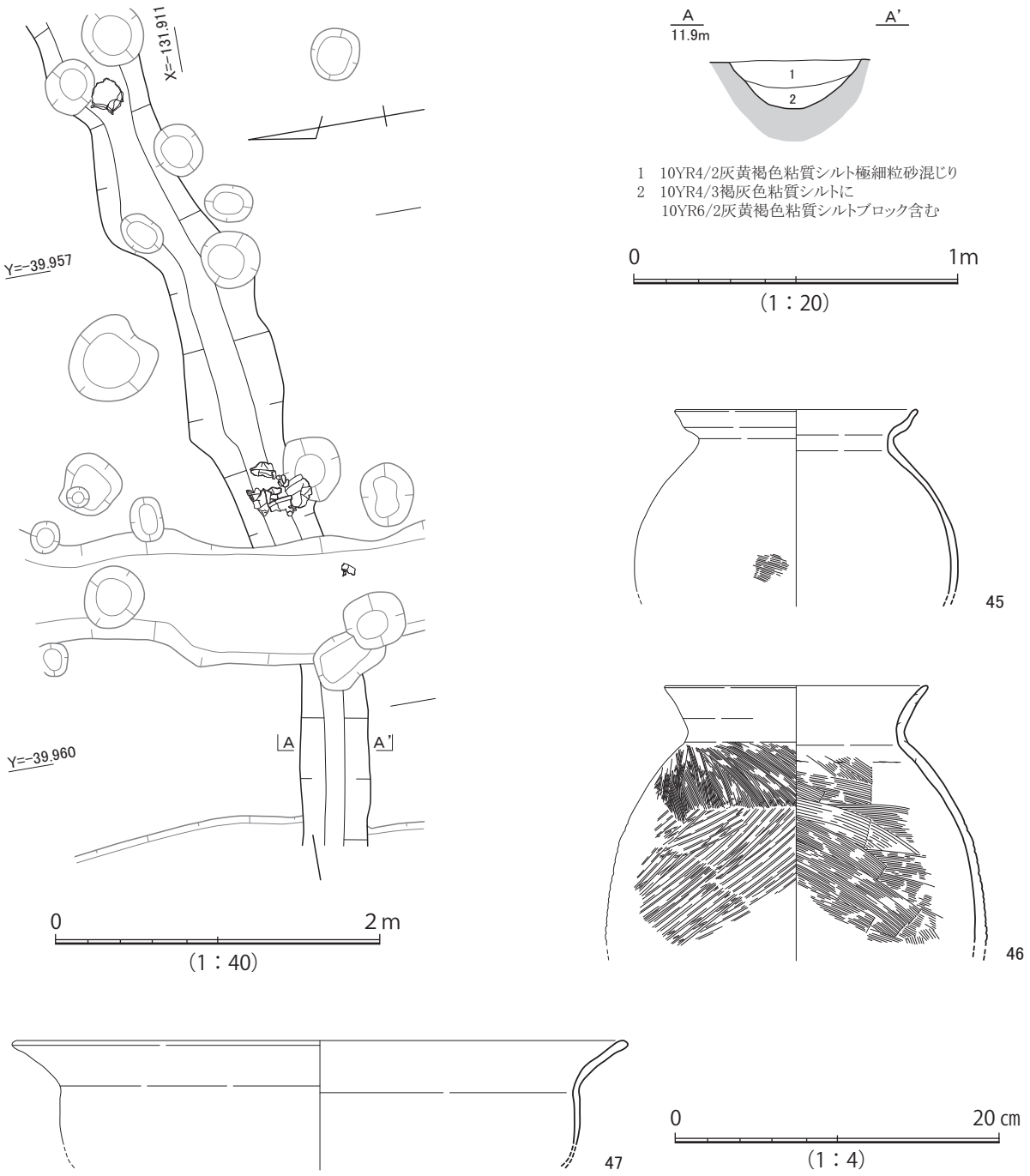
グリッド３北西部・グリッド４北東部に位置する。弧を描く溝で、北側は調査区外に延び、西側は撹乱に切られる。またＳＤ 0622・ＳＤ 0666 に切られる。検出長 12 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 ～ 0.15 mを測る。断面形状は椀状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。ＳＤ 0194 は正円と仮定すると直径 20 m程度に復元することができる。南東側に弥生時代後期後半の直径約 20 mを測る円形周溝墓（ＳＤ 0100）があることから、ＳＤ 0194 も周溝墓の一部となる可能性がある。

遺物は３点を図示した。**（第 27 図　45 ～ 47）**

45･46 は甕である。**45** は口縁部を上方につまみあげ、受け口状口縁を呈する。外面にハケを施す。**46** は口縁端部を丸く収める。体部外面上半はタタキ後ハケ、下半はタタキ、内面にハケを施す。

47 は鉢である。口縁部は外反し、端部は丸く収める。口縁部に黒斑を有する。

ＳＤ 0262・0278（第 28 図）　グリッド３・８に位置する。南側を除く三方を「コ」字状に囲む溝である。北辺を撹乱、東辺をＳＤ 0100、西辺をＳＤ 0300 に切られる。検出長は北辺 11.0 m、東辺 9.5 m、西辺 6.5 mを測る。幅は北辺 0.5 m～ 1.1 m、東辺 0.35 m～ 0.65 m、西辺 0.4 m、深さは 0.1 ～ 0.15 mを測る。ＳＤ 0300 以南は北側よりも遺構検出面が 0.15 m程低くなっているため、本来は南側にも溝が存在し、一辺 11 m程度の方形に巡っていた可能性がある。断面形状は皿状を呈



第 27 図　ＳＤ 0194 遺物出土状況・断面・出土遺物実測図

する。遺物は弥生土器が出土した。

遺物は２点を図示した。**（第 28 図　48・49）**

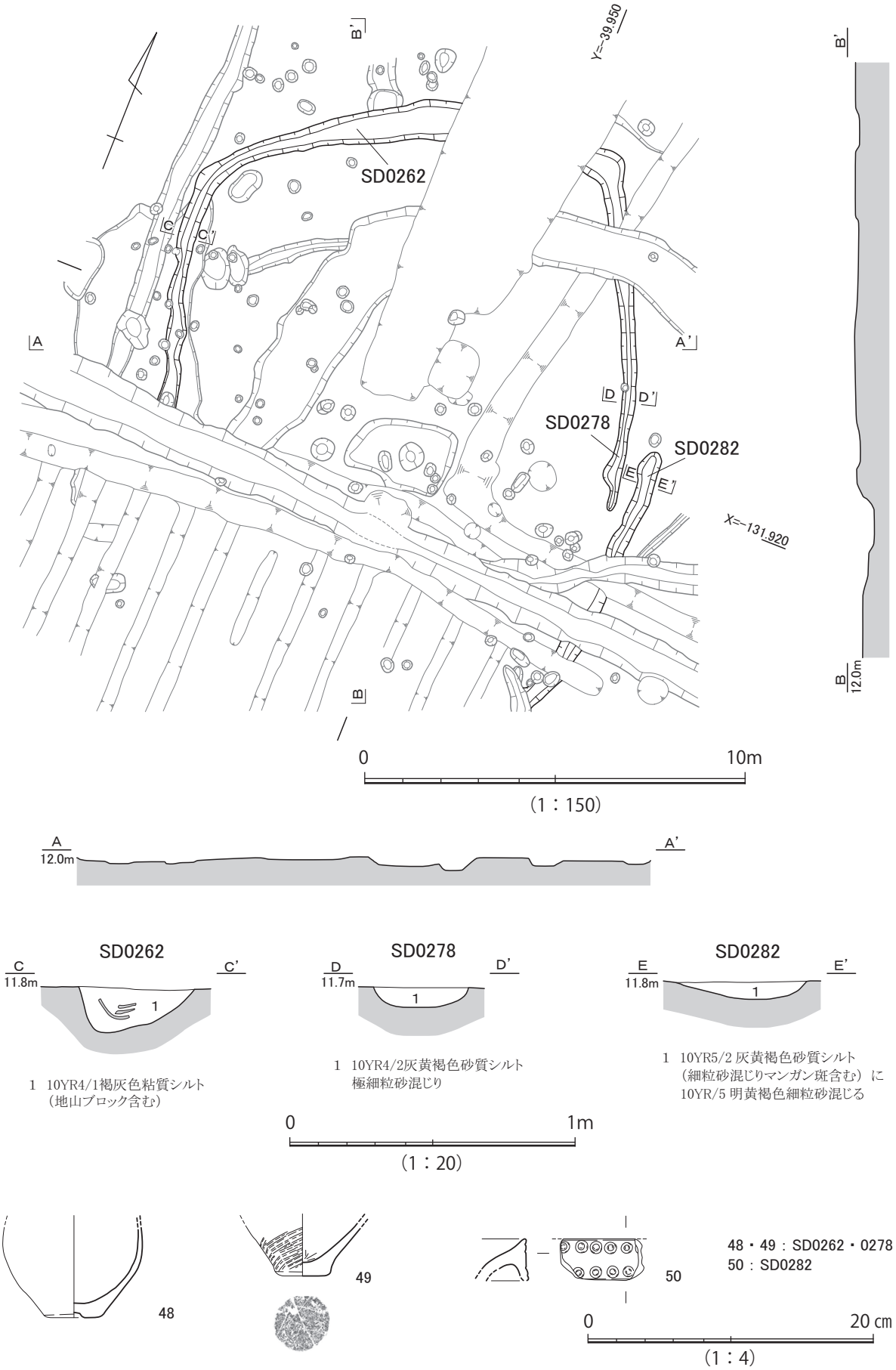
48 は壺である。体部は内彎して立ち上がり、底部はドーナツ底である。

49 は甕である。外面にタタキ、内面にハケを施す。平底で、木の葉圧痕が認められる。

ＳＤ 0282（第 28 図）　グリッド３南東部・グリッド８北東部に位置する。ＳＤ 0278 の東側を南北方向に延びる溝で、ＳＤ 0001・ＳＤ 0300 などに切られる。検出長 7.2 m、幅 0.5 m、深さ 0.09 ～ 0.17 mを測る。断面形状は皿状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。

50 は広口壺である。口縁端部が下方に拡張し、端部は面を成す。端面に竹管文を上下端に２列施す。

ＳＤ 0189（第 29 図）　グリッド３北東部に位置する。南北方向に延びる溝で、北は調査区外に延び、



第 28 図　ＳＤ 0262・0278・0282 平面・断面・断割・出土遺物実測図

第 29 図　ＳＤ 0189 平面・断面・出土遺物実測図

南側は撹乱に切られる。また、ＳＫ 188 を切る。検出長 1.75 m、幅 0.7 m、深さ 0.19 mを測る。断面形状は皿状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。

51 は有孔鉢である。底径 2.1cm で、尖底を呈する。中央に直径 0.5cm のやや楕円形を呈する円孔を穿つ。外面にタタキを施す。

ＳＫ 0276（第 30 図）　グリッド３・４・８・９に位置する。ＳＤ 0262・ＳＤ 0622・ＳＤ 0300 などに切られる。また、ＳＫ 1515（**第 33 図**）を切る。その他のピットは検出長 5.0 m、幅 3.0 m、深さ 0.05 mを測る。平面形は楕円形、断面形状は皿状を呈する。内側に多くのピットが存在するが、これらとの前後関係は不明である。遺物は弥生土器が出土した。

遺物は２点を図示した。（**第 30 図　52・53**）

52 は高杯である。口縁部は面を成し、凹線文４条と円形浮文を施す。

53 は甕である。口縁部は外反し、端部は丸く収める。外面にタタキを施す。口縁端部外面に煤が付着する。

ＳＰ 0245（第 31 図）　グリッド８北西部に位置する。長径 0.3 m、短径 0.26 m、深さ 0.3 mを測る。平面形は円形、断面形状は「Ｕ」字状を呈する。ＳＤ 0262 を切る。遺物は弥生土器が出土した。

54 は広口壺である。頸部から口縁端部は外反し、端部は面を成す。外面にハケを施す。

ＳＰ 0624・1495（第 31 図）　グリッド４北東部、ＳＤ 0666 とＳＤ 0622 の間に位置する。ＳＰ 0624 はＳＰ 1495 に切られる。長径 0.4 m、検出径 0.2 m、深さ 0.34 mを測る。平面形は楕円形、断面形状は「Ｕ」字状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。

ＳＰ 1495 は長径 0.4 m、短径 0.3 m、深さ 0.18 mを測る。遺物は出土していない。

遺物はＳＰ 0624 出土の１点を図示した。**55** は甕である。底部は平底で、体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。

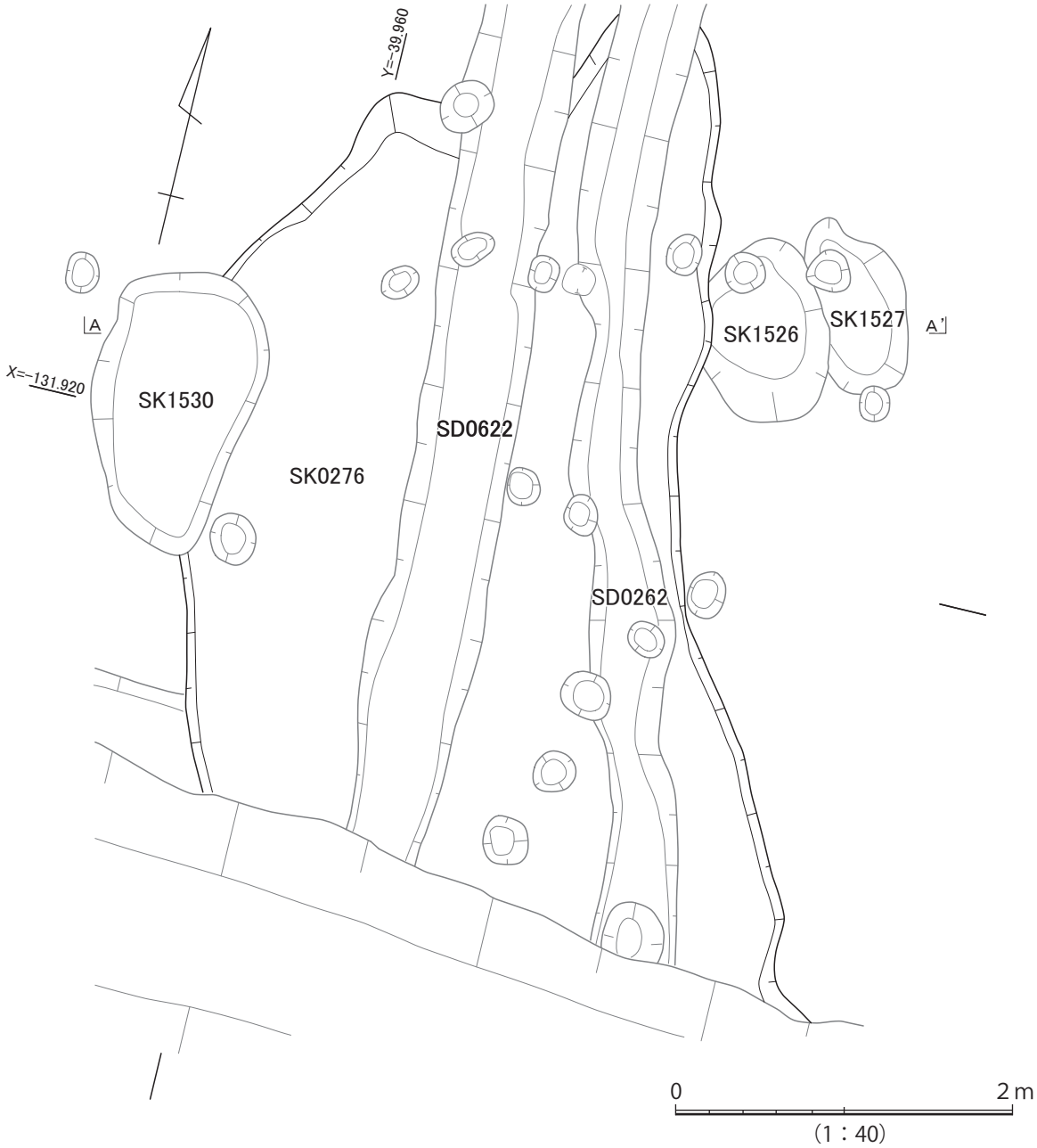
ＳＰ 1500（第 31 図）　グリッド９北東部、ＳＫ 0276 内に位置する。直径 0.28 m、深さ 0.22 mを測る。平面形は円形、断面形状は「Ｕ」字状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。

56 は甕である。ドーナツ底で、体部外面にタタキを施す。

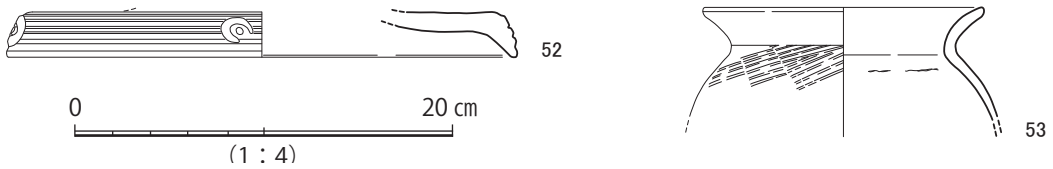
ＳＰ 1516（第 31 図）　グリッド８北西部、ＳＤ 0262 内に位置する。南側はＳＤ 0300 に切られる。検出長 0.34 m、幅 0.36 m、深さ 0.18 mを測る。平面形は楕円形、断面形状は台形状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。

57 は鉢である。平底で、体部は内彎して立ち上がる。口縁端部は丸く収める。

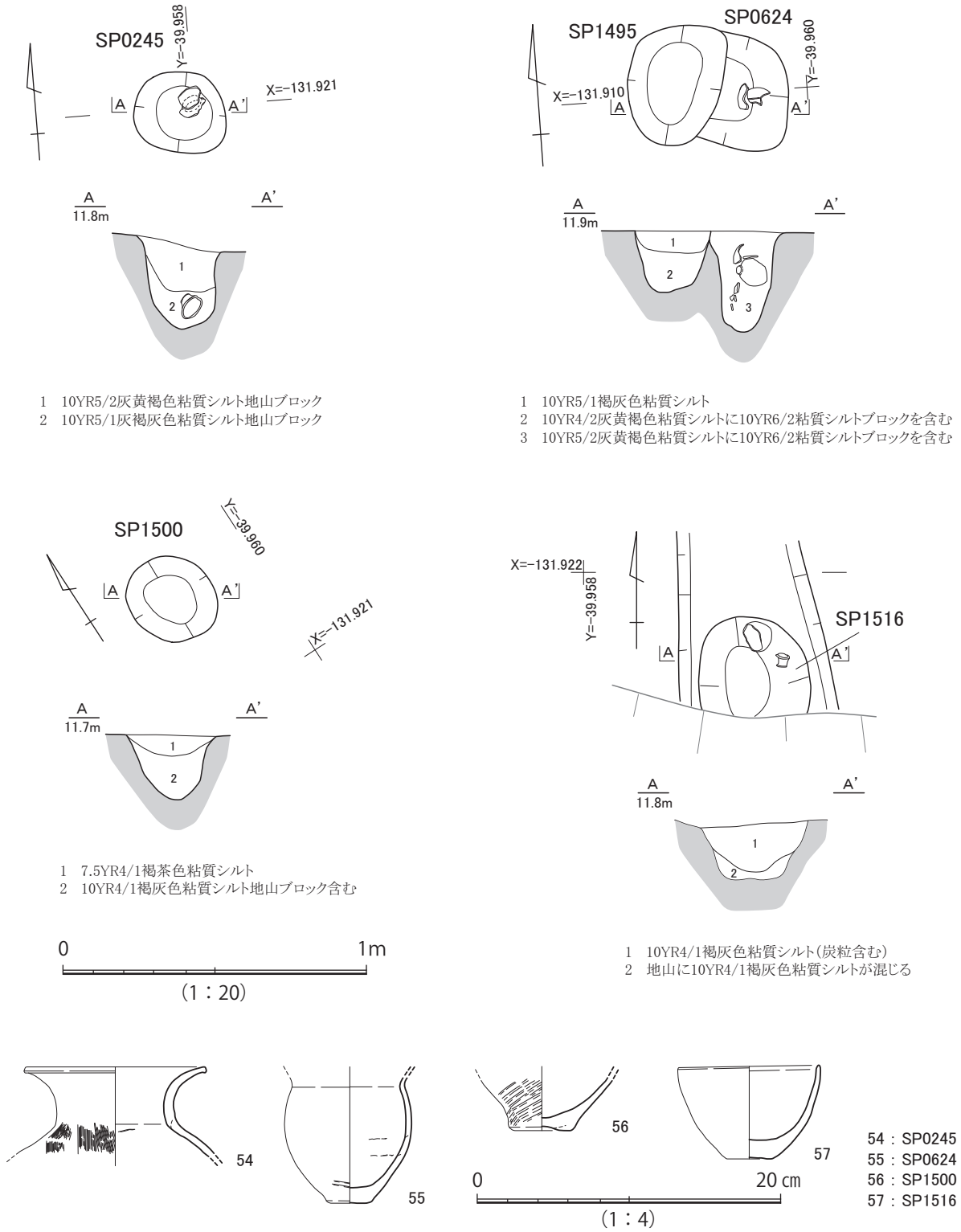
ＳＰ 0207・208（第 32 図）　グリッド３北西部、ＳＤ 0194 の内側に位置する。ＳＰ 0207 は南側をＳＰ 0208 に切られる。検出長 0.25 m、幅 0.2 m、深さ 0.3 mを測る。平面形は楕円形、断面形状は「Ｕ」字状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。ＳＰ 0208 は直径 0.18 m、深さ 0.2 mを



1　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト極細粒砂混じり（SK1530）
2　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト極細粒砂混じり10YR4/2灰黄褐色粘質シルト混じる（SK0276）
3　10YR4/1褐灰色粘質シルト極細粒砂混じり（SD0622）
4　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト極細粒砂混じり地山ブロック含む（炭粒を含む・SD0262）
5　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト極細粒砂混じりに10YR4/2灰黄褐色粘質シルトブロック含む(炭粒、土師質土器片含む・SK1526)
6　10YR5/1褐灰色粘質シルト極細粒砂混じりに10YR4/2灰黄褐色粘質シルトブロック含む(炭粒、土師質土器片含む・SK1527)



第 30 図　ＳＫ 0276 平面・断面・出土遺物実測図

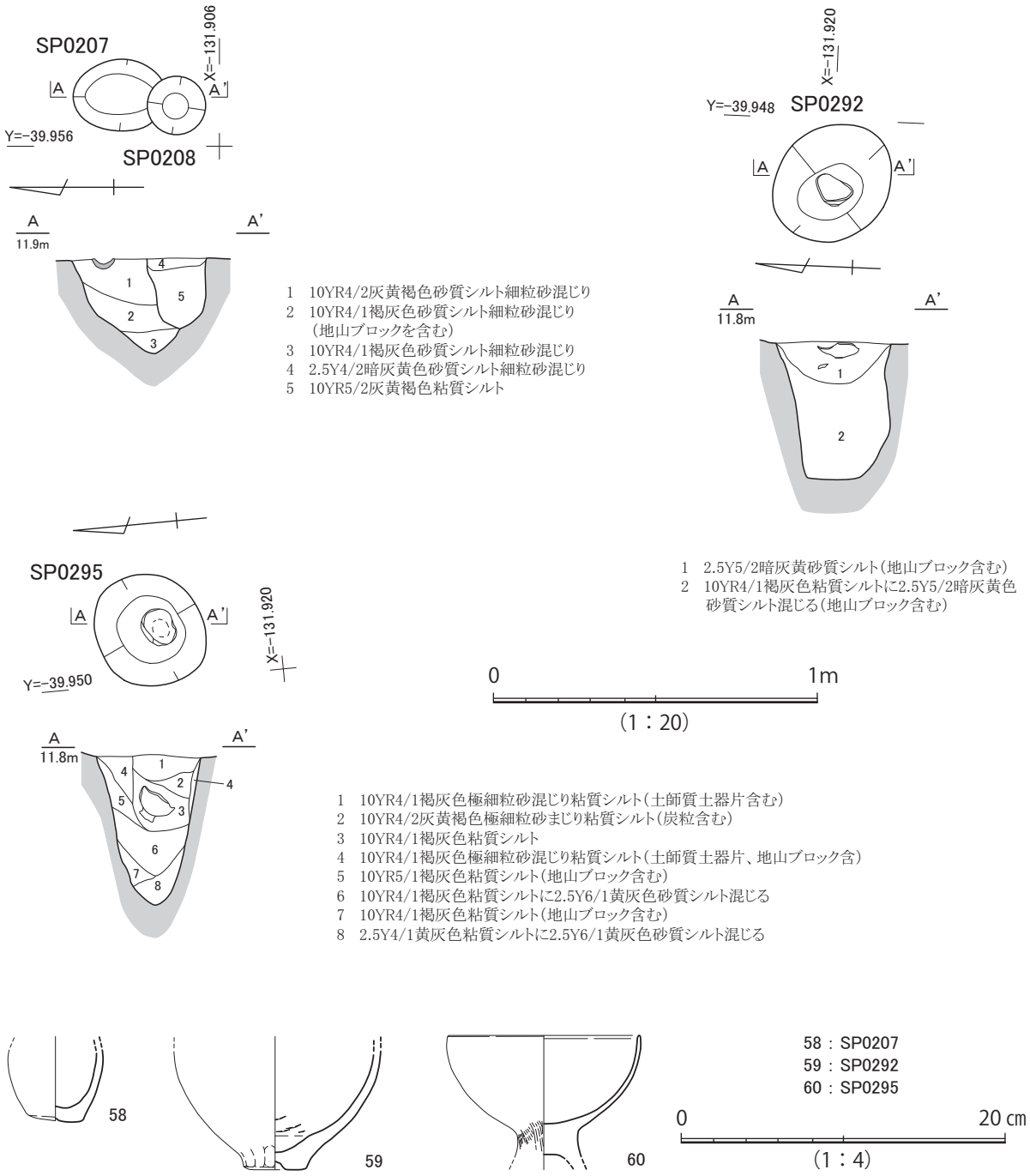


第 31 図　ＳＰ 0245・0624・1495・1500・1516 平面・断面・出土遺物実測図

測る。遺物は出土していない。

遺物はＳＰ 0207 出土の１点を図示した。**58** はミニチュア土器である。底部はドーナツ底である。底部の器壁は一部のみ分厚くなっており、1.1cm を測る箇所がある。上端でやや内彎するが、器種は不明である。

ＳＰ 0292（第 32 図）　グリッド３に位置する。直径 0.35 m、深さ 0.46 mを測る。平面形は円形、断面形状は筒状を呈する。遺物は上層から弥生土器が出土した。



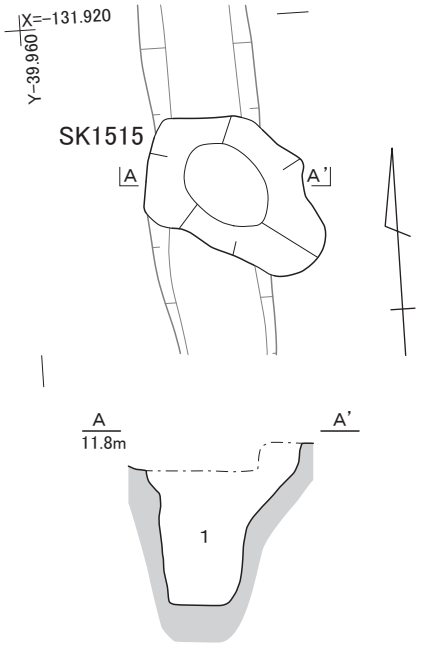
第 32 図　ＳＰ 0207・0208・0292・0295 平面・断面・出土遺物実測図

59 は壺である。底部はドーナツ底で、体部は内彎して立ち上がる。底部外面にユビオサエ、内面にナデを施す。内面見込みは円形に窪む。外面底部付近に黒斑が認められる。

ＳＰ 0295（第 32 図）　グリッド３に位置する。直径 0.32 m、深さ 0.46 mを測る。平面形は円形、断面形状は「Ｖ」字状を呈する。遺物は上層から弥生土器が出土した。

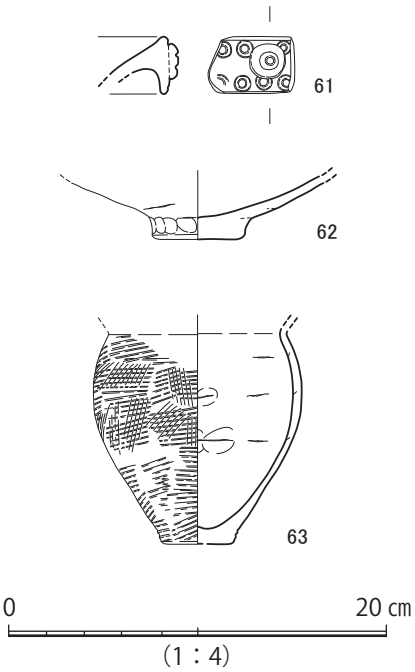
60 は高杯である。深い半球状の杯部をもつ。体部は内彎し、口縁端部は丸く収める。脚柱部は円柱状に延びる。脚柱部と杯部の接合部外面にハケを施す。

ＳＰ 0292 とＳＰ 0295 の間隔は 1.7 mを測る。２基のピットは平面形、深さが近似することから、関連する可能性がある。しかし、土層断面図で柱痕跡は確認できず、一方で土器が遺構のほぼ中央から出土していること、及びこの２基の他に同様の規模のピットが周囲に認められないことから、掘立柱建物を構成するピットではない可能性がある。



1　10YR4/1褐灰色粘質シルト極細粒砂混じり
（地山ブロック、炭粒、土師質土器片を含む）

0　2m
（1：40）



0　20㎝
（1：4）

第33図　ＳＫ 1515 平面・断面・出土遺物実測図

ＳＫ 1515（第33図）　グリッド８北西部、ＳＫ 0276 の内側に位置する。長さ 1.0 m、幅 0.5 m、深さ 0.9 mを測る。平面形は楕円形、断面形状は筒状を呈する。ＳＤ 0622 に切られる。遺物は弥生土器が出土した。

遺物は３点を図示した。（**第33図　61 ～ 63**）

61 は器台である。口縁端部を下方に拡張し面を成す。端面には上下二列に竹管文、その上に円形浮文を施す。

62 は壺である。突出した平底で、体部は大きく開き、外方へ延びる。外面に黒斑が認められる。

63 は甕である。底部は平底で、肩部が最大径を測る。口縁部は欠損する。外面にタタキ後ハケを施す。外面に黒斑が認められる。

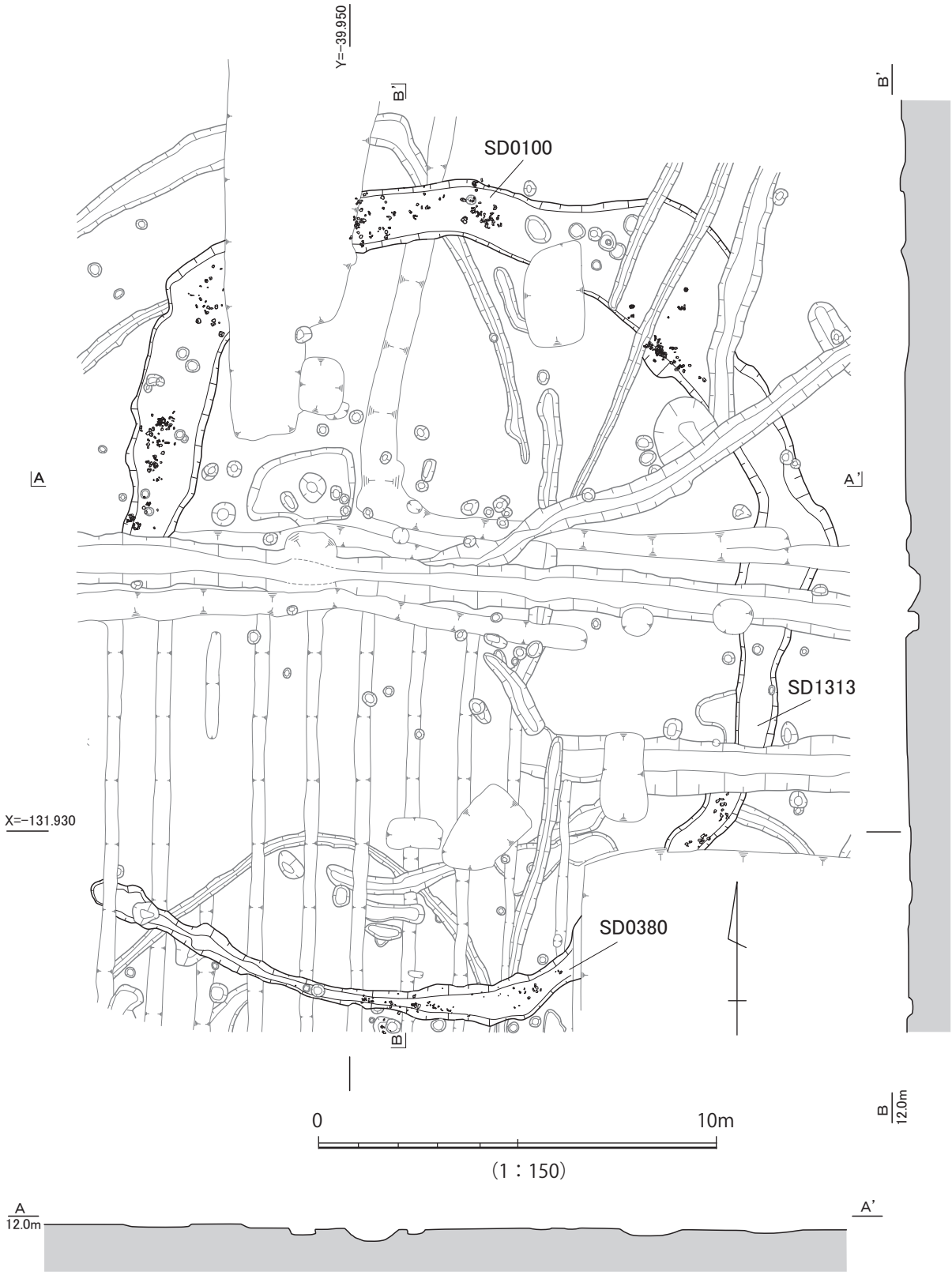
ＳＤ 0100･1313･0380（第34 ～ 37図）　グリッド２・３・７・８に位置する。撹乱などで分断された箇所で別の遺構番号が付与されており、３つの遺構番号をもつが、本来は連続した南北に長い楕円形を呈する溝である。直径は南北 20 m、東西 18 mを測る。ＳＤ 0001・0300・0157 などに切られる。またＳＤ 0278・0331 などを切る。幅はＳＤ 0157 の北側では 1.4 m～ 1.8 m、南側では 0.4 m～ 1.0 mを測る。これは、検出面の標高が北側では T.P. ＋ 11.7 m、南側では T.P. ＋ 11.6 mと削平の影響が大きいためと思われる。一方深さはいずれの地点においても 0.1 m程度であり、断面形状は皿状を呈する。埋葬施設は検出されなかったが、円形周溝墓の周溝と考えられる。遺物は縄文土器・弥生土器・須恵器片・埴輪・サヌカイト片・土錘などが出土した。周溝内の数ヶ所に集中するが、破片が集積しているような状態である。須恵器・埴輪も含むが小片であり、ほぼ弥生時代後期後半の土器が占めているため、該期の遺構と考えられる。

遺物は 13 点を図示した。（**第37図　64 ～ 76**）

縄文土器（**64**）、弥生土器（**65 ～ 74**）および土錘（**75**）、埴輪（**76**）である。

64 は体部片で沈線文１条を施し、沈線より上はナデ、下はケズリを施す。角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。詳細な時期は不明であるが、後期頃のものか。

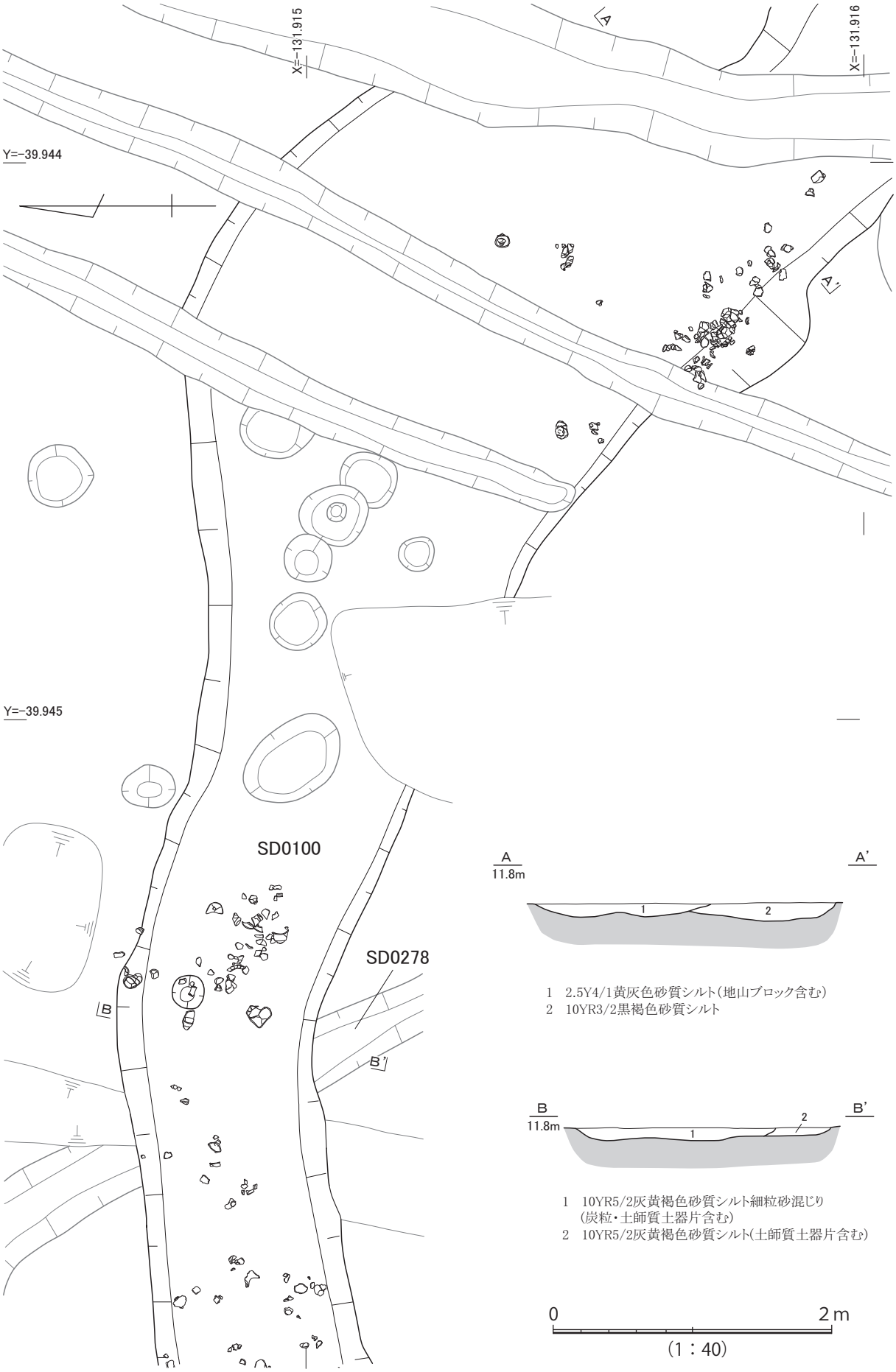
65 ～ 69 は壺である。**65 ～ 67** は広口壺である。**65** は頸部から口縁部が大きく外反し、端部は面を成す。頸部内外面にハケを施す。**66** は口縁部が強く外反し、端部は面を成す。**67** は口縁部が外反し、端部は丸く収める。頸部に粘土を帯状に貼り足している。**68** は二重口縁壺である。外反する口縁部を付加する。**69** は突出した平底である。底部外面に木の葉圧痕、体部外面に黒斑が認められる。



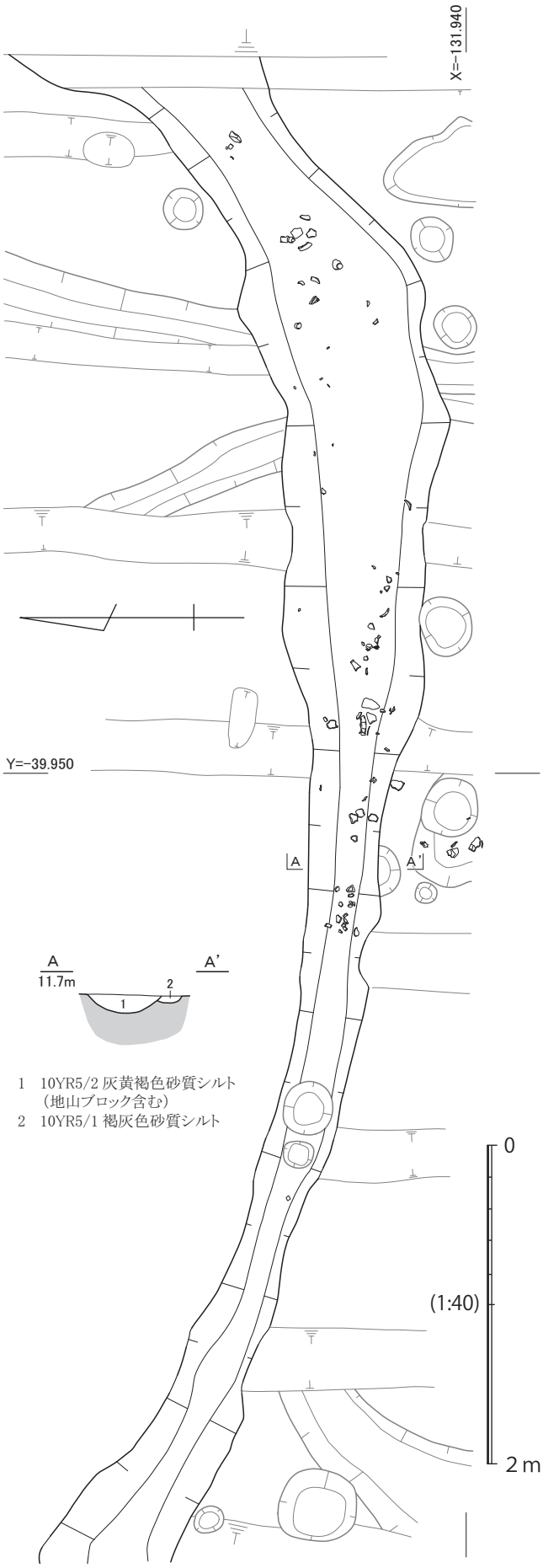
第 34 図　ＳＤ 0100・1313・0380 平面・断割図

70 は外面に突帯を貼り付ける破片である。突帯の頂部をナデにより波状にする。受口状口縁鉢の体部片の可能性がある。

71・72 は高杯である。**71** は円柱状の脚柱部をもち、裾部は角度を変えて広がる。円形透かし孔を３方向に穿つ。**72** は短い中実の脚柱部をもつ。裾部は大きく開き、端部は面を成す。挿入付加法



第 35 図　ＳＤ 0100 断面・遺物出土状況図



第 36 図　ＳＤ 0380 平面・断面・遺物出土状況図

によって杯部と接合する。

73・74 は甕である。ともに口縁部は外反し、端部は丸く収める。

75 は土錘である。長さ 5.6cm、長径 3.0cm、短径 2.5cm、重量 74 g である。円孔が貫通しており、図の上側で直径 0.6cm、下側で直径 0.4cm を測る。

76 は形象埴輪である。動物形埴輪の脚部と思われる。底面をまっすぐにすると上方はやや斜めになるように作られている。残存高 6.6cm、直径 4.1cm の円筒形を呈する。

古墳時代の遺構

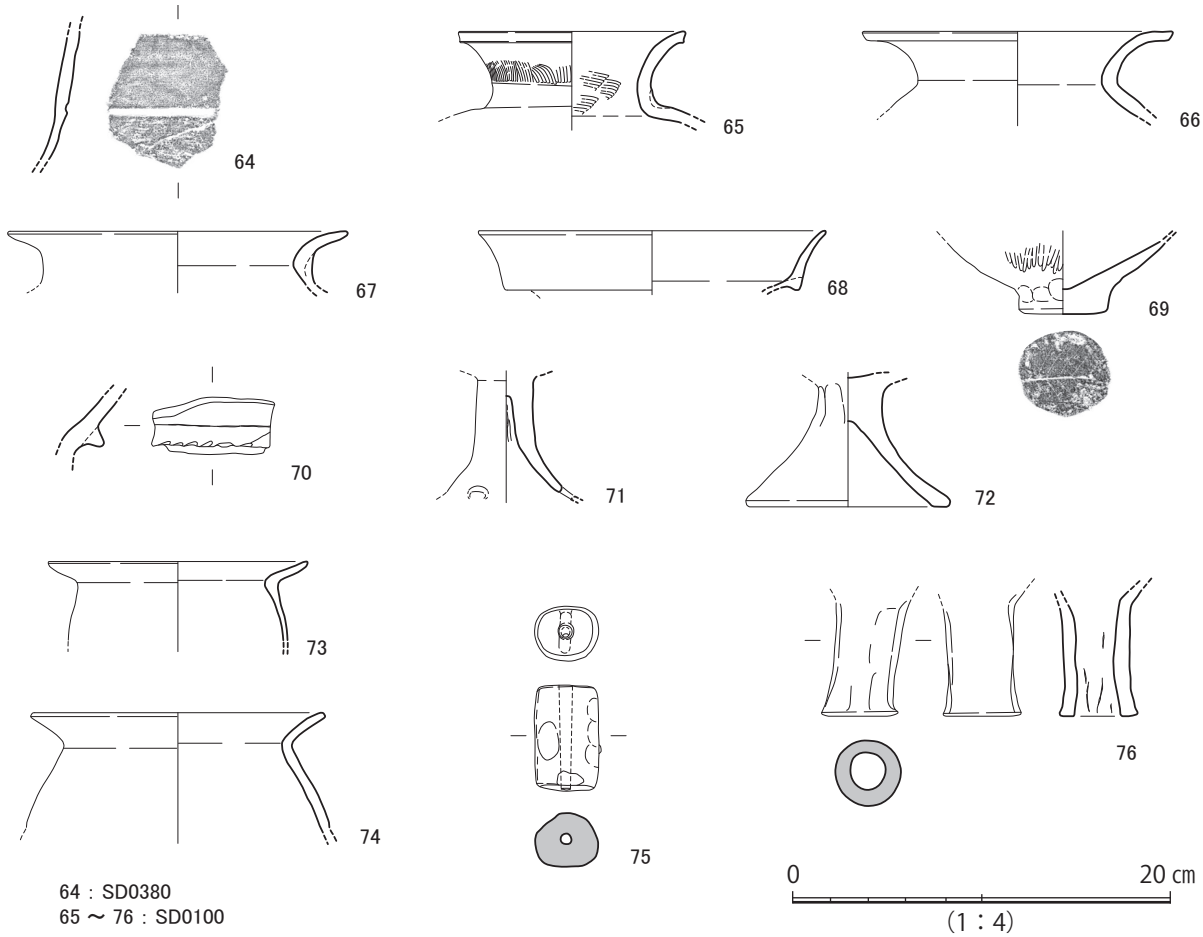
ＳＤ 0666（第 38 図）　グリッド 4 に位置する。「コ」字状を呈する溝で、北西部は撹乱によって削平される。ＳＤ 0659・0660 に切られ、ＳＤ 0194 を切る。検出長は東・南辺が 11 m・西辺 6.0 m、幅は東・西辺が 1.8 m・南辺が 3 m、深さは 0.05 ～ 0.1 m 程度で、断面形状は皿状を呈する。溝の外側で一辺 12 m程度を測る方形と考えられる。遺物は少ないが、弥生土器・土師器・須恵器が出土した。弥生時代後期のＳＤ 0194 を切っており、後述するＳＤ 0800（古墳８）が同じく方形を呈していることから、古墳時代後期の方墳の可能性がある。ただし、埋葬施設は検出されていない。

遺物は２点を図示した。**（第 38 図　77・78）**　土師器・須恵器は細片のため図化できず、図示した２点はともに弥生土器である。

77 は広口壺である。口縁部は外反し、端部は面を成す。

78 は有稜高杯である。口縁部は外反して延び、端部は丸く収める。稜は明瞭である。

ＳＤ 0001（第 23･39 図）　グリッド１・２・３に位置する。北東－南西方向に延びる溝である。検出長 34 m、幅 0.6 ～ 0.8 m、深さ 0.15 ～ 0.2 mを測る。ＳＤ 0100 などを切り、ＳＤ 0300 に切られる。以南は不明であるが、



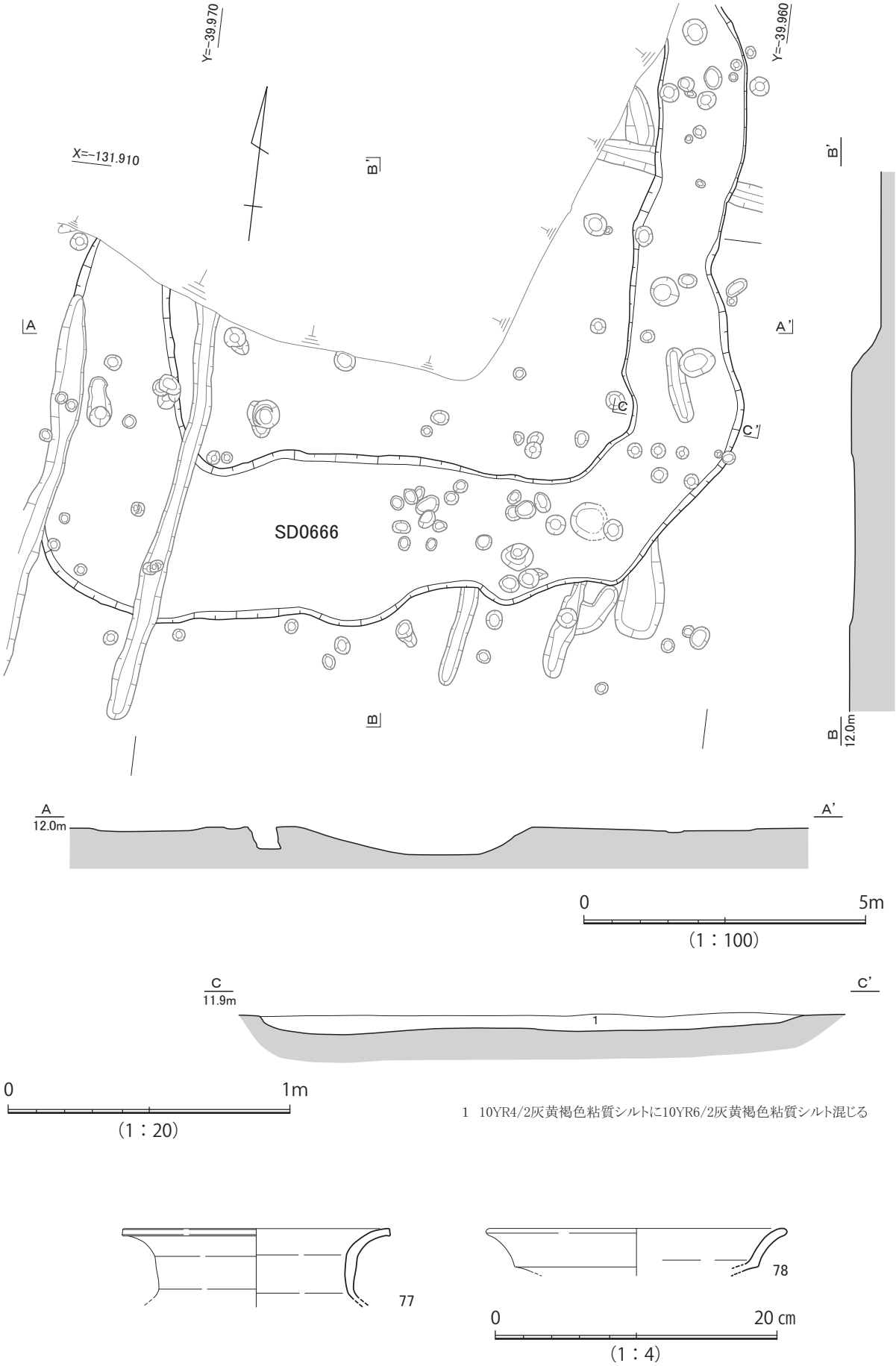
第 37 図　ＳＤ 0100・0380 出土遺物実測図

これはＳＤ 0300の南側が北側より 0.15 m程低いことから削平されている可能性が考えられる。また、延長上に 15 mほど進んだ位置に鋤溝に分断された溝が認められる。これをＳＤ 0001 の続きと捉えてよいならば、総延長は 50 mを測ることとなる。更に延長上にはＡ２ブロックの項で報告するＳＤ 0787 がある。断定はできないが、本来連続する一本の溝であった可能性も考えられる。断面形状は台形状を呈する。遺物は弥生土器の細片が出土した。ただし、弥生時代後期後半のＳＤ 0100 を切ることから、ＳＤ 0001 の時期はそれ以降であり、ＳＤ 0787 と接続する可能性もふまえ、古墳時代の遺構として報告した。

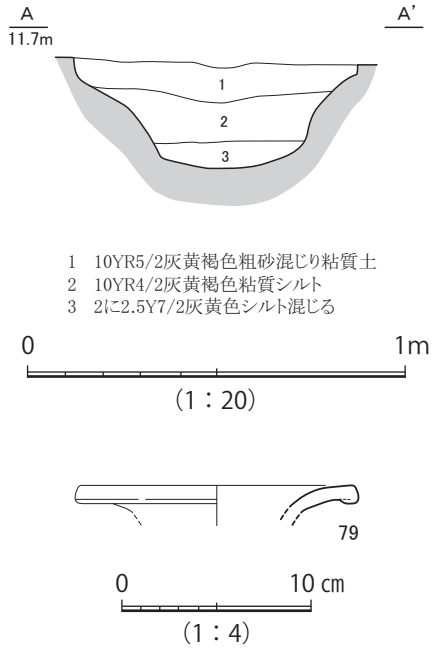
79 は弥生土器器台である。口縁端部を下方に拡張し、面を成す。外面に口縁部に貼り足した粘土紐の接合痕が明瞭に認められる。

古代の遺構

ＳＤ 0300（第 23･41 図）　グリッド７・８・９・10 にかけて位置し、調査区を東西方向に横断する。東側は調査区外に延び、西側は撹乱で破壊されているため、全長は不明であるが、検出長は 70 mを測る。幅は西側では最大 2.05 m、東側では 0.98 mを測る。検出面の標高は西側が T.P. ＋ 11.8 m、東側が T.P. ＋ 11.5 mを測る。深さは西側で 0.3 m（T.P. ＋ 11.5 m）前後、東側で 0.2 m（T.P. ＋ 11.3 m）前後を測る。本来の深さからは削平を受けている可能性を考慮しなければならないが、元々の地形が千里丘陵から派生する北西から南東へ下がる傾斜地であるため、溝としても西から東に下がっていたのであろう。断面形状は台形状を呈する。ＳＤ 0001・ＳＤ 0800・ＳＤ 0139 など多数の遺構を切る。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器が出土した。破片ではあるが、黒色土器が



第 38 図　ＳＤ 0666 平面・断面・断割・出土遺物実測図



第 39 図　ＳＤ 0001 断面・出土遺物実測図

認められることから、10 世紀中頃の遺構と思われる。

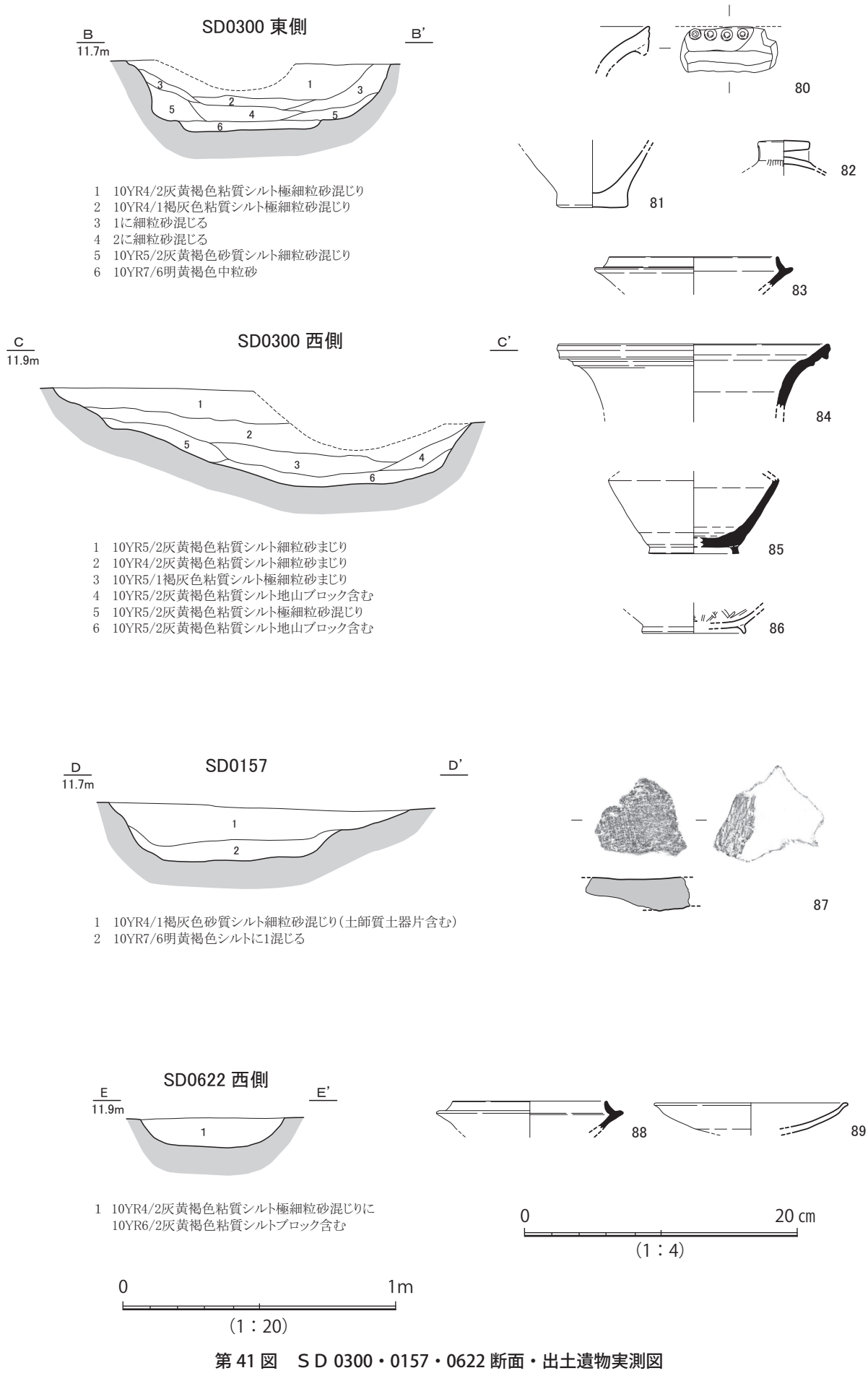
遺物は７点を図示した。(**第 41 図　80 ～ 86**)　弥生土器(**80 ～ 82**)、須恵器（**83 ～ 85**)、黒色土器（**86**）である。

80 は広口壺である。口縁端部を下方に拡張し、端面に竹管文を施す。ただし､竹管文の施文位置が口縁端部際であるため、本来は上方にも粘土を貼り付ける二重口縁壺であった可能性もある。

81 は甕で、平底である。**82** は蓋である。直径 3.7cm の円形を呈するつまみ部分が残存する。つまみ部分に直径 0.8cm の円孔を穿つ。外面にハケを施す。

83 は杯身である。短く水平に延びる受け部をもつ。口縁部は内傾して立ち上がり、外反して端部は丸く収める。ＴＫ 209 型式頃のものである。

第 40 図　調査区周辺の大字とＳＤ 0300 の位置関係



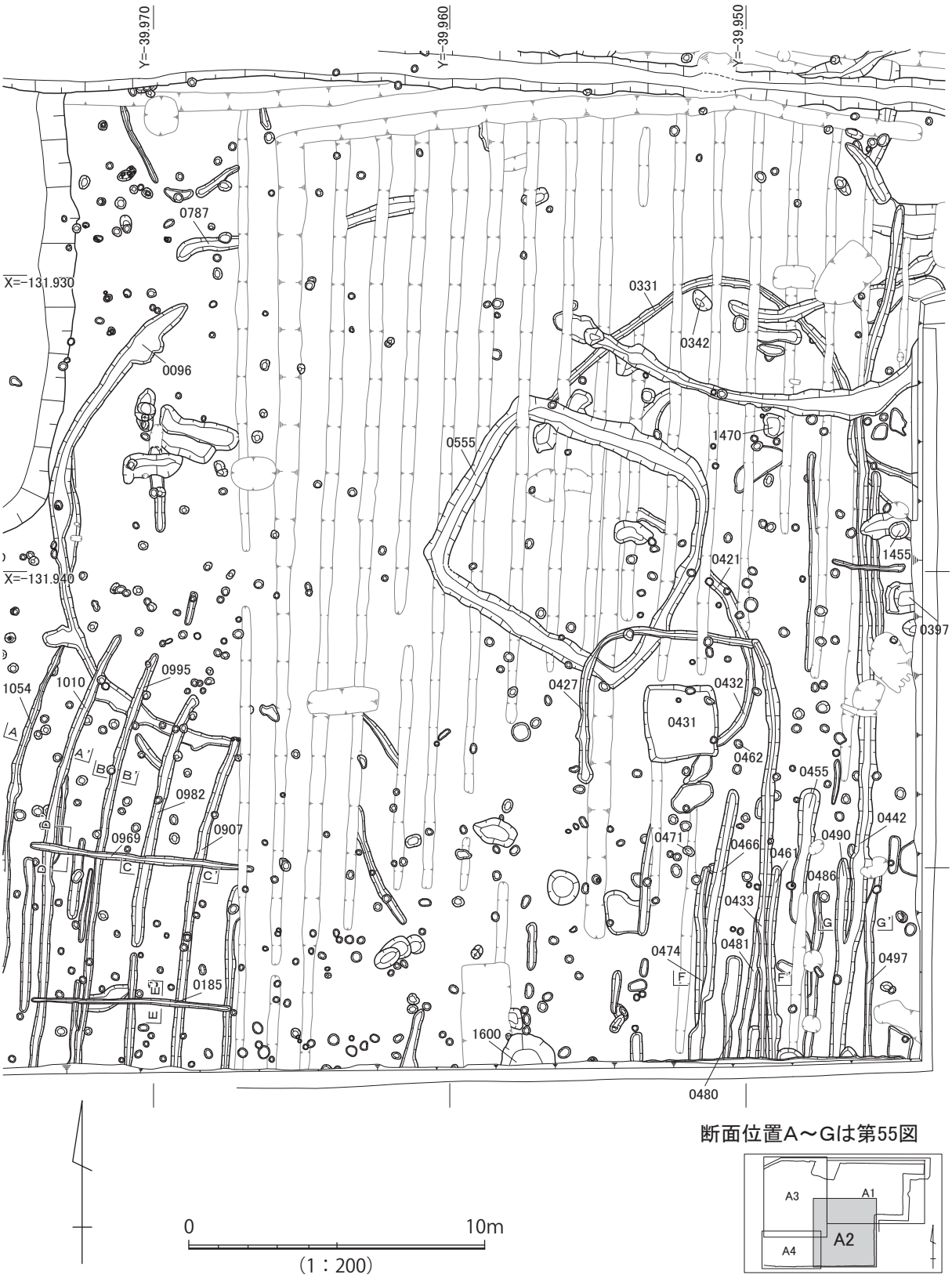
1　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト極細粒砂混じり
2　10YR4/1褐灰色粘質シルト極細粒砂混じり
3　1に細粒砂混じる
4　2に細粒砂混じる
5　10YR5/2灰黄褐色砂質シルト細粒砂混じり
6　10YR7/6明黄褐色中粒砂

1　10YR5/2灰黄褐色粘質シルト細粒砂まじり
2　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト細粒砂まじり
3　10YR5/1褐灰色粘質シルト極細粒砂まじり
4　10YR5/2灰黄褐色粘質シルト地山ブロック含む
5　10YR5/2灰黄褐色粘質シルト極細粒砂混じり
6　10YR5/2灰黄褐色粘質シルト地山ブロック含む

1　10YR4/1褐灰色砂質シルト細粒砂混じり（土師質土器片含む）
2　10YR7/6明黄褐色シルトに1混じる

1　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト極細粒砂混じりに
　　10YR6/2灰黄褐色粘質シルトブロック含む

第 41 図　ＳＤ 0300・0157・0622 断面・出土遺物実測図



第 42 図　A区 2 ブロック平面図

84・85 は壺である。**84** は口縁部が外反して立ち上がり、端部は内彎する。口縁部を下方に拡張し、端面に凹線を施す。口縁部が屈曲する位置に突帯をつける。ＭＴ 15 型式頃のものである。**85** は断面四角形状の高台をもつ。体部は外傾して立ち上がり、上端で明確な稜を持って内傾する。８世紀頃のものである。

86 はＡ類椀で、断面三角形状の高台をもち、見込みにミガキを施す。10 世紀中頃のものである。

ＳＤ 0157（第 23・41 図） グリッド７・８に位置する。ＳＤ 0300 の南側を並行して東西方向に延びる。東側は調査区外に延び、検出長は 16.0 mを測る。検出面の標高はＳＤ 0300 と同じ T.P. ＋ 11.5 m、深さは 0.2 m（T.P. ＋ 11.3 m）前後で同様の規模である。幅は 1.2 mを測る。ＳＤ 0300 とは溝の芯々で 3.3 m～ 4.0 mの距離がある。断面形状は台形状を呈する。ＳＤ 0139・1313 などを切る。遺物は弥生土器・須恵器・瓦が出土した。

87 は平瓦である。磨滅が著しいが、凸面に縄タタキ、凹面に布目圧痕が認められる。

ＳＤ 0300 及びＳＤ 0157 は、明治 18 年・明治 20 年の地籍図を基にした復原図（『新修　茨木市史　地理編』所収）によれば、その位置は大字奈良「総行」、大字下穂積「下池」、大字下中条「南山垣」の境界にあたる（**第 40 図**）。第１面においてもほぼ重複する位置で東西方向の溝（坪境溝）を検出しており、若干の移動はあるがその位置はほぼ踏襲されていると思われる。

地籍図において確認できたのはあくまでも明治時代の大字境ではあるが、ＳＤ 0300 からは破片ながら、10 世紀中頃の黒色土器（**86**）が出土しており、この時期まで境界の存在を遡らせることができるのかもしれない。なお、大字下穂積と大字下中条の境界部分は撹乱で破壊されていたため、その状況は不明である。

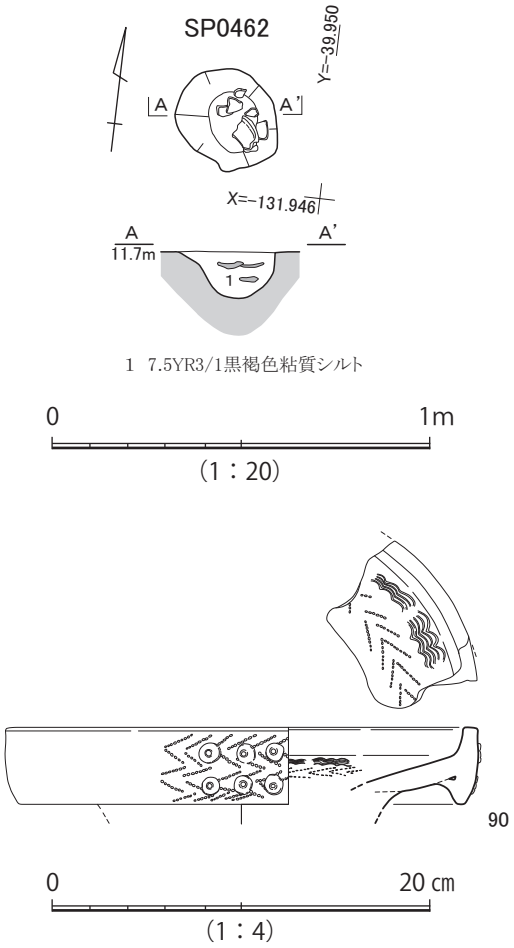
ＳＤ 0622（第 23・41 図） グリッド３・８に位置する。南北方向に延びる溝で、北側は調査区外に延び、南側はＳＤ 0300 に切られる。ただし、ＳＤ 0300 と時期が近接しており、接続していた可能性も考えられる。

またＳＤ 0194、ＳＫ 0262、1515 を切る。検出長 18.0 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 mを測る。断面形状は椀状を呈する。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器が出土した。灰釉陶器（**89**）の年代から９世紀後半頃の溝と考えられる。

遺物は２点を図示した。（**第 41 図　88・89**）

88 は須恵器杯身である。受け部は短く水平に延び、口縁部は内彎し、端部は丸く収める。ＴＫ 43 型式頃のものである。

89 は灰釉陶器皿である。口縁端部は外反し、端部は丸く収める。内外面とも全面に施釉する。９世紀後半頃のものである。



第 43 図　ＳＰ 0462 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図

３）Ａ区２ブロックの遺構・出土遺物（第 42 ～ 55 図）

Ａ区２ブロックでは弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代中期、古代以降の遺構・遺物を検出した。グリッド８・９・13・14 に位置する。

弥生時代中期の遺構

ＳＰ 0462（第 43 図） グリッド 13 北東部に位置する。直径 0.3 m、深さ 0.22 mを測る。平面形状は円形、断面形状は椀状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。弥生時代中期後半の遺構である。

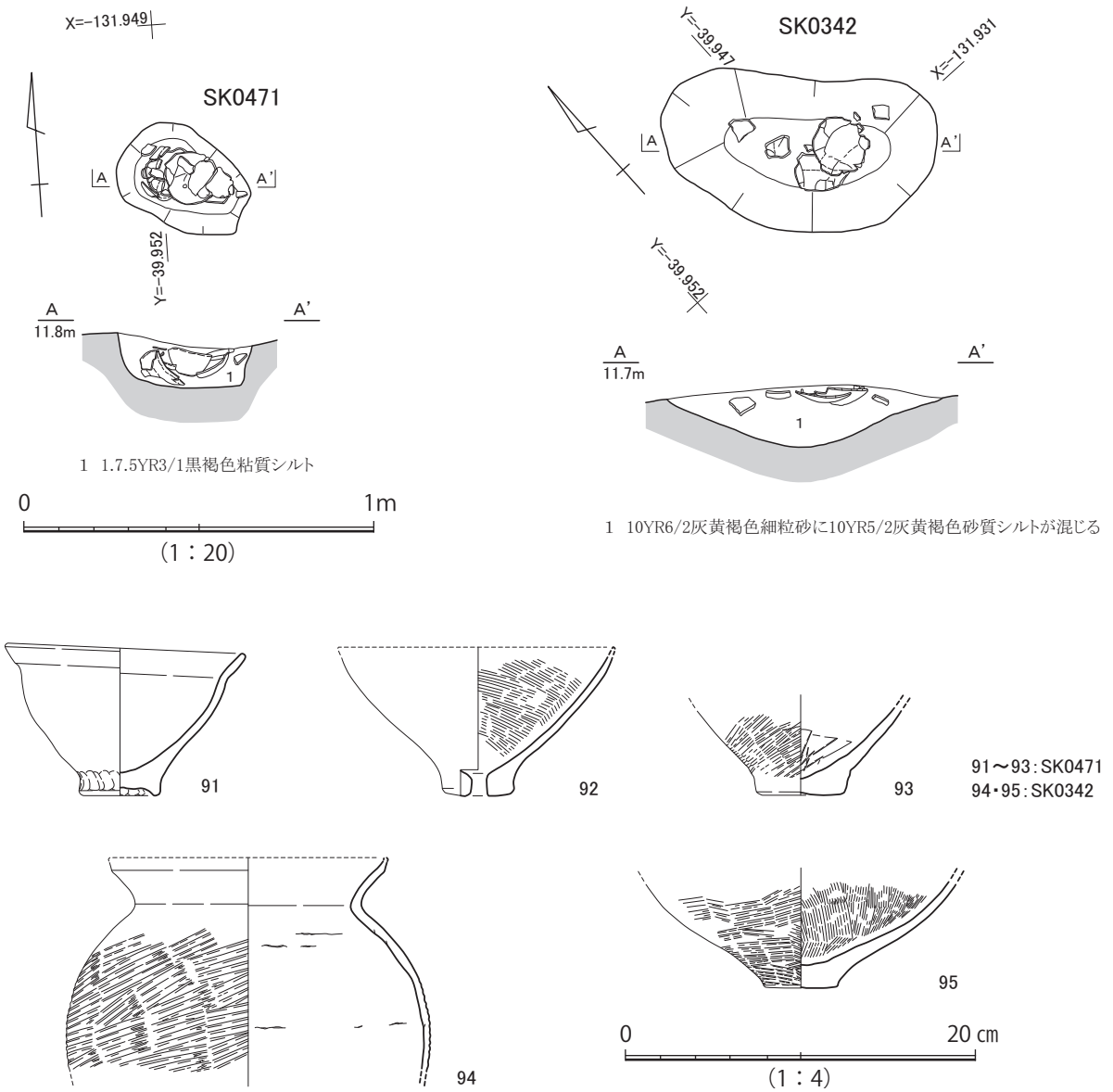
90 は壺である。頸部から口縁部が水平に延び、端部は上下に拡張して面を成す。口縁部内面に波状文と羽状列点文、端面に羽状列点文と２段の円形浮文を施す。

弥生時代後期の遺構

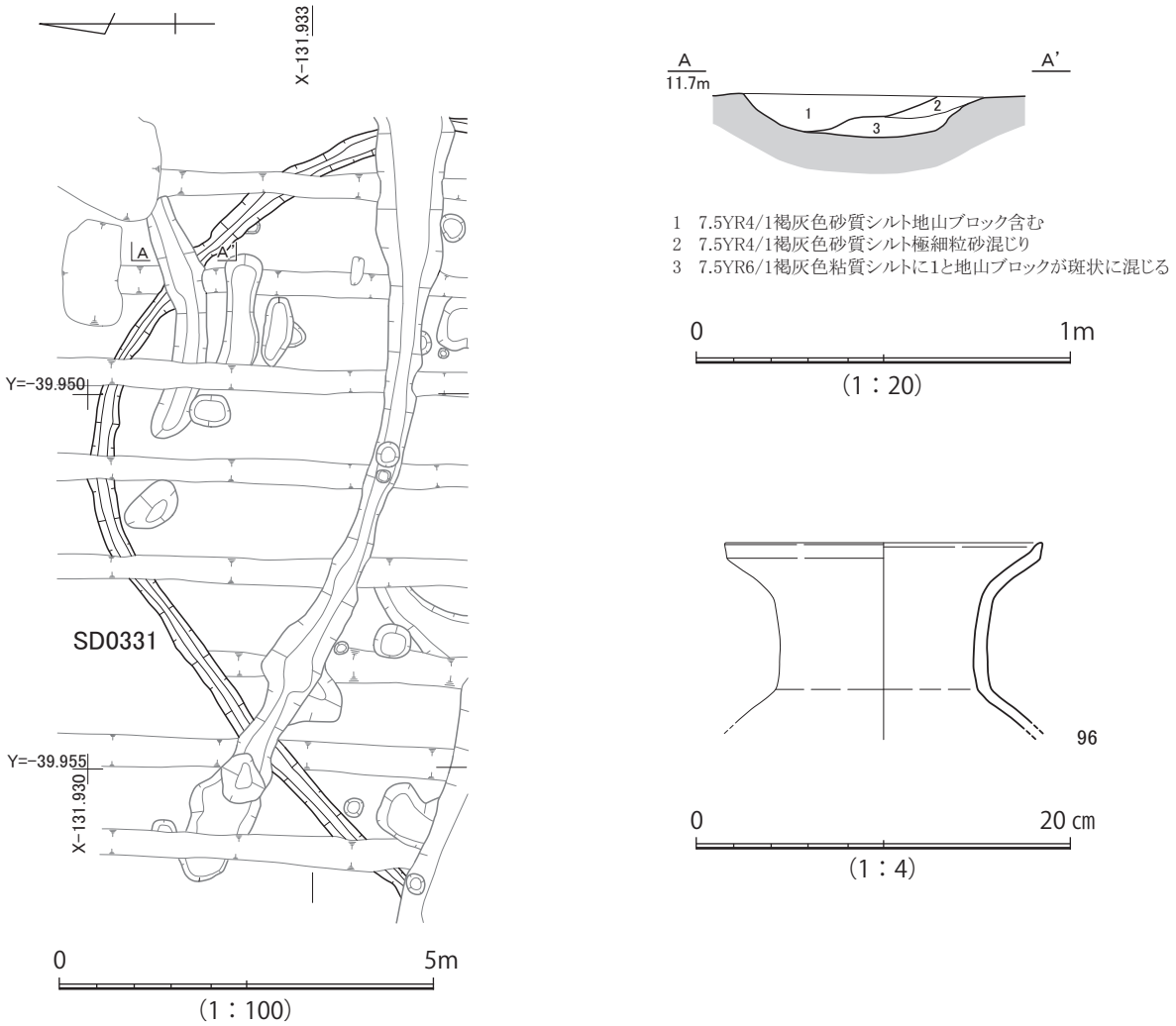
ＳＫ 0471（第 44 図） グリッド 13 中央部に位置する。長径 0.5 m、短径 0.25 m、深さ 0.11 mを測る。平面形状は楕円形、断面形状は台形を呈する。遺物は弥生土器が重なった状態で出土した。

遺物は３点を図示した。（**第 44 図　91 ～ 93**）

91・92 は鉢である。**91** は口縁部は外反し、端部は丸く収める。底部は上げ底で、外面にユビオサエを施す。内面に黒斑が認められる。**92** は有孔鉢で、底部は突出した平底を呈する。底部のほぼ



第 44 図　ＳＫ 0471・0342 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図



第 45 図　ＳＤ 0331 平面・断面・出土遺物実測図

中央に直径 1.0cm の円孔を穿つ。内面にハケを施す。

93 は甕である。底部はドーナツ底で、木の葉圧痕が認められる。外面にタタキ、内面にハケを施す。

ＳＫ 0342（第 44 図）　グリッド８、ＳＤ 0331 の内側に位置する。長径 0.8 m、短径 0.5 m、深さ 0.22 mを測る。平面形状は楕円形、断面形状は椀状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。

94・95 はともに甕で、外面にタタキを施す。**94** は口縁端部を上方に摘み上げる。**95** は平底である。

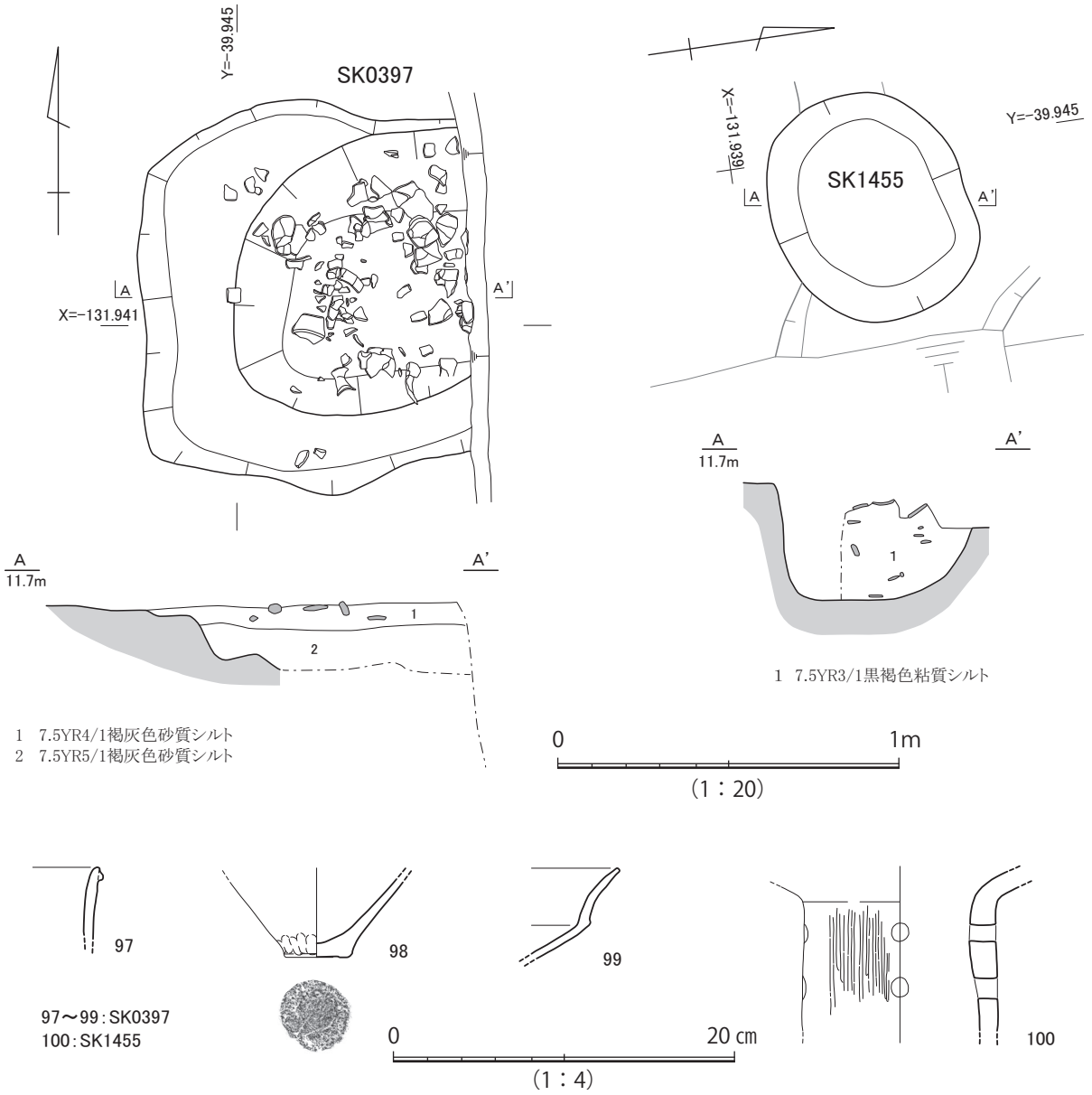
ＳＤ 0331（第 45 図）　グリッド８に位置する「Ｌ」字状を呈する溝である。ＳＤ 0380・ＳＤ 0329・ＳＤ 0555 などに切られる。検出長は北東－南西方向が 7.0 m、北西－南東方向が 5.5 mを測る。ともに幅は 0.3 m、深さは 0.12 mを測る。断面形状は台形を呈する。遺物は弥生土器が出土した。

96 は広口壺である。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上方に摘み上げ面を成す。

ＳＫ 0397（第 46 図）　グリッド 13 北東部に位置する。東側が調査区外に延びる。検出長 1.0 m、幅 1.2 m、深さ 0.22 mを測る。平面形は四角形、断面形状は台形を呈する。遺物は縄文土器・弥生土器が出土した。

遺物は３点を図示した。**（第 46 図　97 ～ 99）**　縄文土器（**97**）、弥生土器（**98・99**）である。

97 は深鉢である。口縁部に断面三角形状の突帯をもつ長原式である。磨滅が著しいためか突帯上に刻み目は認められない。晩期のものである。



第 46 図　ＳＫ 0397・1455 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図

98 は甕である。ドーナツ底で、木の葉圧痕が認められる。外面にユビオサエを施す。

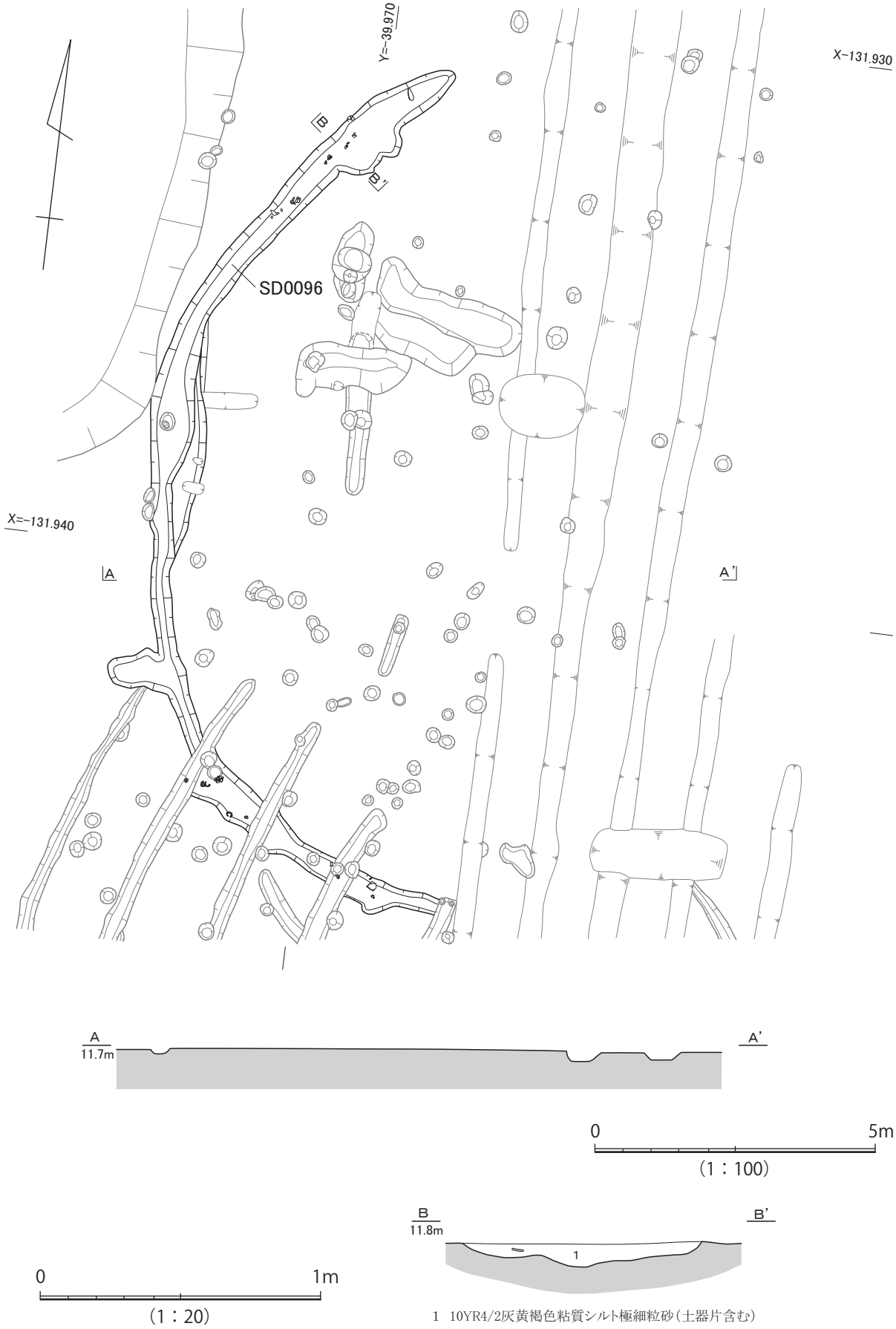
99 は有稜高杯である。口縁部は外反し、体部との稜線は明瞭である。外面に黒斑が認められる。

ＳＫ 1455（第 46 図）　グリッド８南東部に位置する。長径 0.7 m、短径 0.6 m、深さ 0.35 mを測る。平面形は楕円形、断面形状は台形状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。

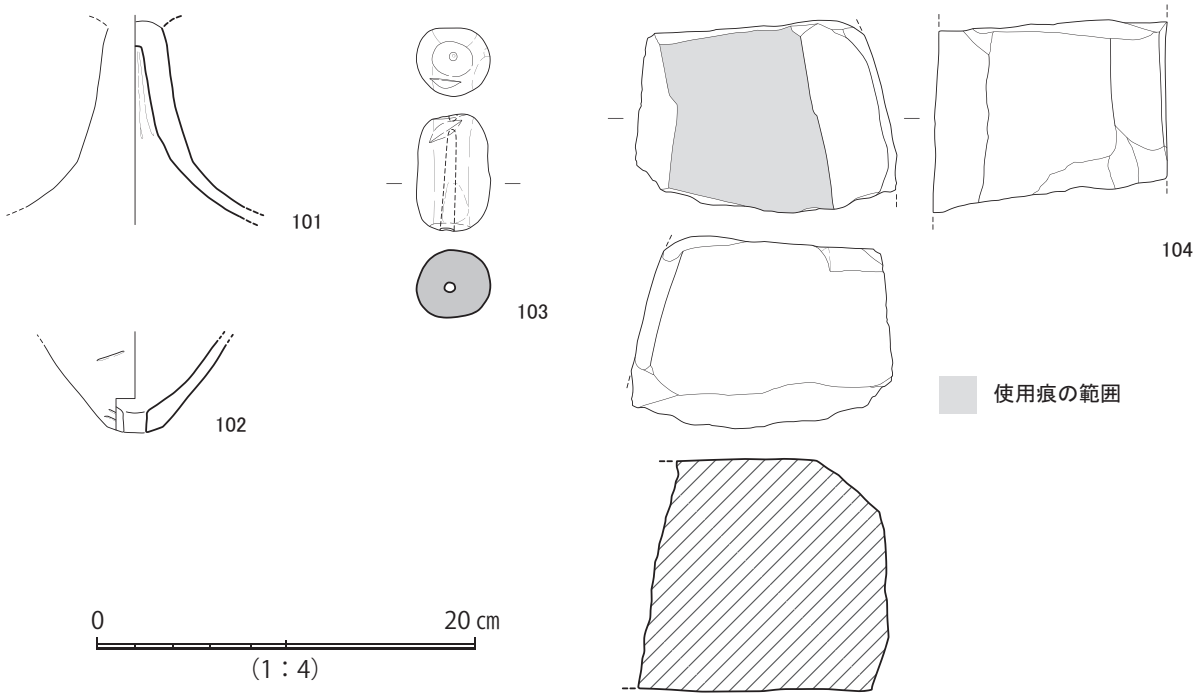
100 は器台である。直立する体部から外反する口縁部が延びる。体部に円形透かし孔を２段で４方向に穿つ。外面にハケを施す。

ＳＤ 0096（第 47・48 図）　グリッド９・グリッド 14 にまたがって位置する。弧を描く溝で、東側は後世の耕作溝で削平される。検出長 19 m、幅 0.3 m〜 0.6 m、深さ 0.05 m〜 0.1 mを測る。断面形状は皿状を呈する。円形であれば直径 16 m程度に復元できるが、ＳＤ 0555 と重複してしまうため、円形ではなかった可能性が高い。ＳＤ 0970・0982・0995・1010・1054 に切られる。遺物は弥生土器・サヌカイト片などが出土した。

遺物は４点を図示した。**（第 48 図　101 〜 104）**



第 47 図　ＳＤ 0096 平面・断面・断割図



第 48 図　ＳＤ 0096 出土遺物実測図

101 は高杯である。中空の脚柱部である。内面にシボリメが認められる。挿入付加法によって杯部と接合する。

102 は有孔鉢である。ほぼ尖底の底部中央に直径 1.0m の円孔を穿つ。体部外面にタタキを施す。

103 は土錘である。長さ 6.2cm、直径 3.6cm、重量 100 ｇである。直径 0.3mm の円孔を穿つ。反対側は塞がっているが、直径 0.3mm の円形の窪みが認められ、本来は貫通していたと思われる。

104 は砥石である。本来は使用面となっている部分がもう少し長かったと思われる。残存長 11.5cm、幅 9.5cm、厚さ 12.6cm、重量 3,000 ｇである。上下２面が使用のため平滑になっている。

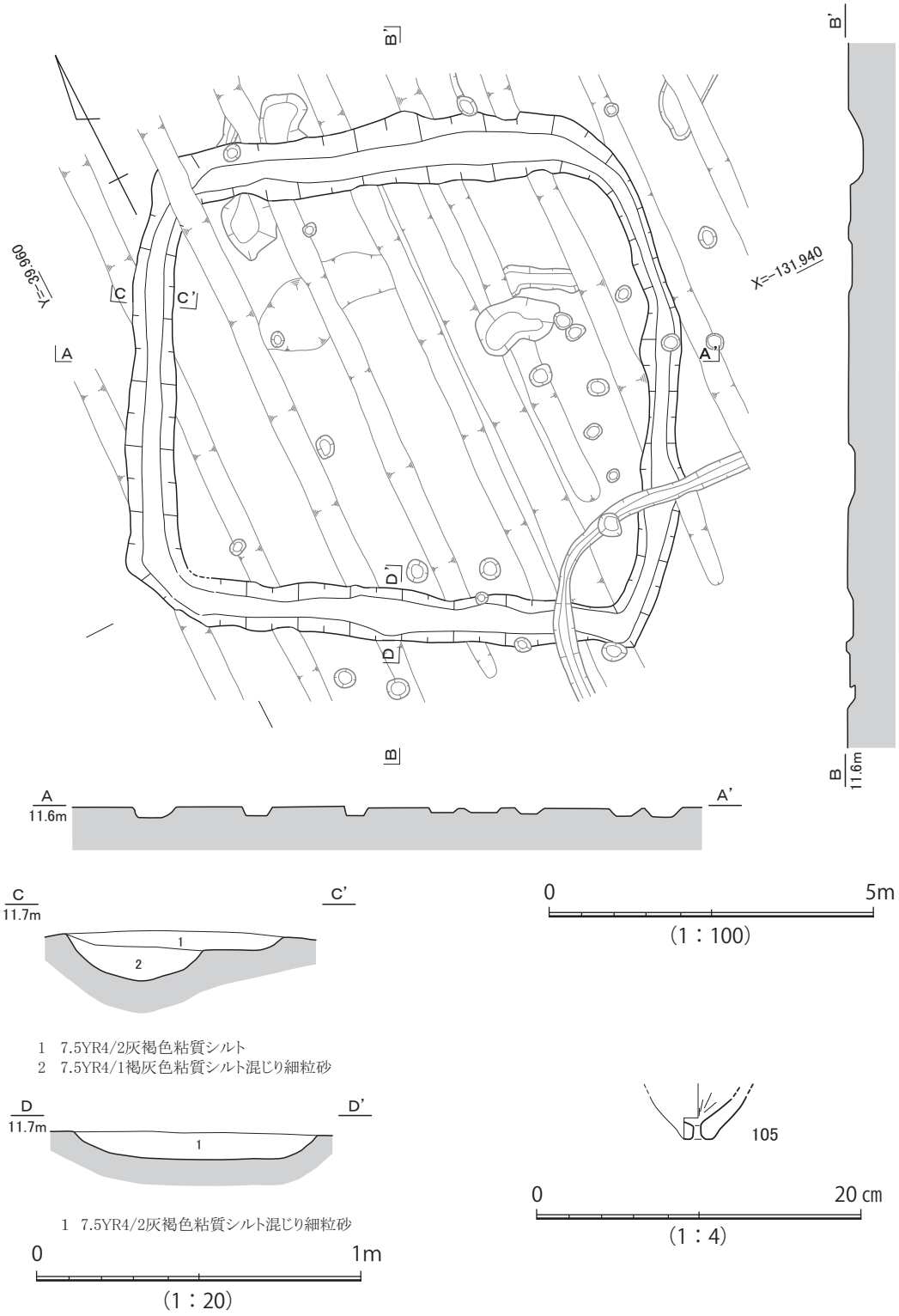
ＳＤ 0555（第 49 図）　グリッド８・９・13・14 にまたがって位置する。方形を呈し、長さは北辺 7.0 m、東･南辺 7.7 m、西辺 6.5 m、幅は北辺 0.9 m、東･西･南辺 0.7 m、深さは北辺 0.2 m、東･南辺 0.1 m、西辺 0.17 mをそれぞれ測る。後世の鋤溝による撹乱が全体に及んでおり、残存状況は悪い。また、南東隅はＳＤ 0427 に切られる。一方ＳＤ 0421・0331 などを切る。方形周溝墓の可能性が考えられるが、埋葬施設は検出していない。遺物は弥生土器が出土した。

105 は有孔鉢である。底径 1.7cm を測る尖底気味の底部をもつ。中央に直径 0.5cm の円孔を穿つ。外面の調整が粗く、小型であることから、ミニチュア土器の可能性もある。

ＳＤ 0432・0421（第 53 図）　グリッド 13 に位置する。緩やかな弧を描く溝で、検出長 6.3m、幅 0.3 m～ 0.4 m、深さ 0.06 mを測る。ＳＤ 0555・0427・0431 に切られる。断面形状は皿状を呈する。遺物は弥生土器が出土したが、図示できる遺物はなかった。上記の各溝に切られていることから、弥生時代後期後半以前の遺構と考えられる。

ＳＫ 0431（第 53 図）　グリッド 13 に位置する。東西 2.5 m、南北 2.5 m、深さ 0.15 mを測る。平面形は方形、断面形状は皿状を呈する。遺物は弥生土器が出土したが、細片のため図示できるものはなかった。古墳時代中期のＳＤ 0427 に囲まれているが、本遺構出土遺物には須恵器が含まれていないため、時期が異なると考えられる。

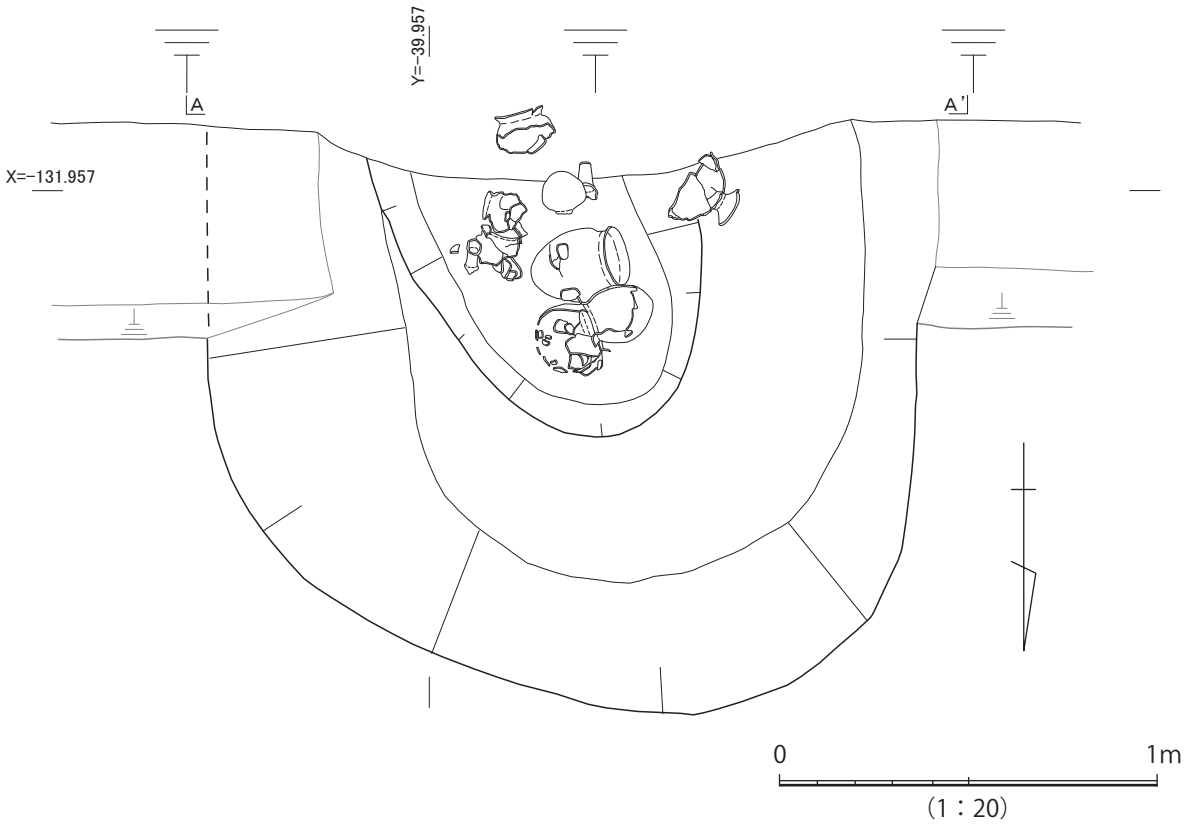
古墳時代前期の遺構

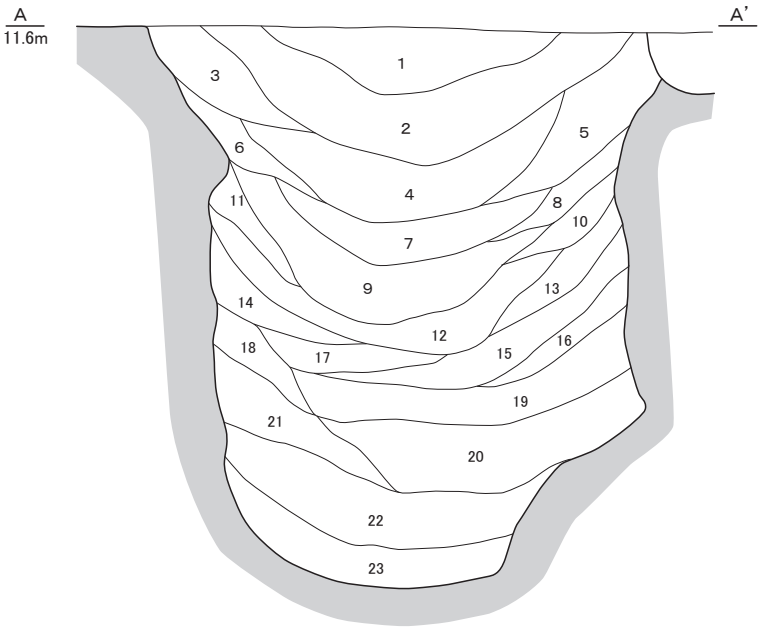


第 49 図　ＳＤ 0555 平面・断面・断割・出土遺物実測図

ＳＥ 1600（第 50 図）　グリッド 13 に位置する。南側は調査区外に延びる。平面形は円形を呈すると思われ、東西 1.9 m、南北 1.6 mを検出した。深さは T.P. ＋ 10.4 m付近で中段となり、内側は更に 0.3 m程深くなり、最深部で 1.5 mを測る。井戸枠は検出されなかったため、素掘りであったと思われる。遺物は土師器が出土した。

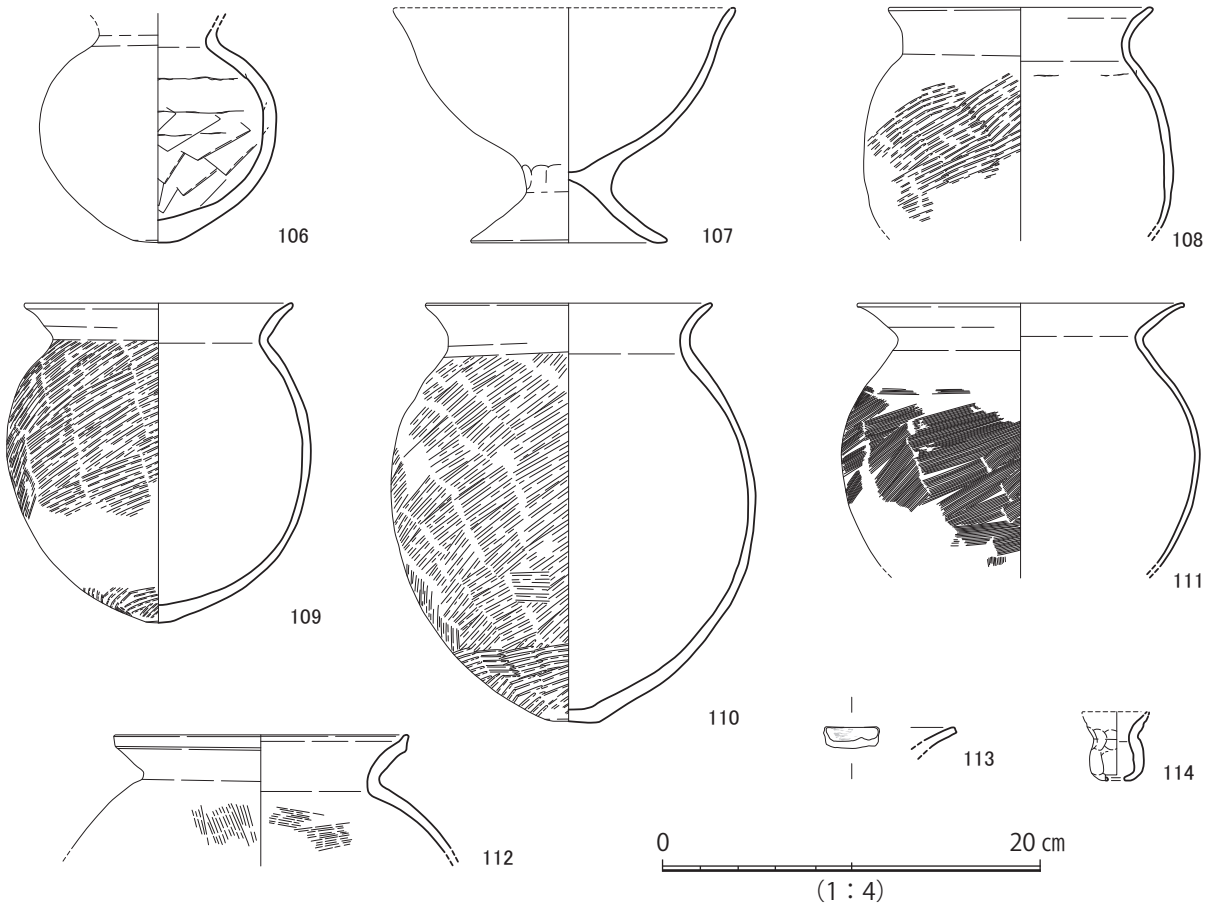
遺物は９点を図示した。**（第 51 図　106 ～ 114）**





1　10YR4/2灰黄褐色細粒砂まじり粘質シルト
2　10YR3/1黒褐色細粒砂まじり粘質シルト
3　10YR4/1褐灰色細粒砂まじり粘質シルト
4　10YR3/2黒褐色細粒砂まじり粘質シルト
5　10YR4/1褐灰色細粒砂まじり粘質シルト
6　10YR4/1褐灰色粘質シルトに10YR7/6明黄褐色地山ブロック含む
7　10YR3/1黒褐色極細粒砂まじり粘質シルト
8　10YR4/1褐灰色細粒砂まじり粘質シルト
9　10YR3/1黒褐色細粒砂まじり粘質シルトに
　2.5Y7/1灰白色地山ブロックが斑状にまじる（炭粒含む）
10　10YR4/1褐灰色粘質シルトに10YR6/2灰黄褐色粘質シルトブロックを含む
11　2.5Y7/1 灰白色地山に 10YR5/1 褐灰色粘質シルトがラミナ状にまじる
12　10YR5/1 褐灰色粘質シルトに 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルトと
　2.5Y7/1 灰白色地山ブロックを含む
13　10YR4/1 褐灰色粘質シルトに 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルトがラミナ状にまじる
14　10YR4/1 褐灰色粘質シルトに 2.5Y7/1 灰白色地山がラミナ状にまじる
15　10YR4/1 褐灰色粘質シルトに 2.5Y7/1 灰白色地山がラミナ状にまじる（炭粒含む）
16　10YR4/1 褐灰色粘質シルトに 2.5Y7/1 灰白色地山ブロックと炭粒含む
17　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質シルトに 10YR4/1 褐灰色粘質シルトまじる
18　10YR4/1 褐灰色粘質シルトに 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質シルトと
　10YR7/6 明黄褐色粘質シルトブロック含む
19　10YR3/1 黒褐色粘質シルトに 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質シルトブロック含む
20　10YR3/1 黒褐色粘質シルトに 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質シルトがラミナ状にまじる
21　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質シルトに 10YR3/1 黒褐色粘質シルトブロック含む
22　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質シルトに 10YR3/1 黒褐色粘質シルトがラミナ状にまじる
23　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質シルトに 10YR3/1 黒褐色粘質シルトがまじる

第 50 図　ＳＥ 1600 平面・断面・遺物出土状況図



第 51 図　ＳＥ 1600 出土遺物実測図

106 は壺である。底部がほぼ丸底を呈する球形の体部をもつ。頸部は直立するが、口縁部は粘土紐接合部で剥離する。内面に板ナデを施す。

107 は高杯である。深い半球状の杯部をもつ。口縁部は僅かに外反し、端部は丸く収める。脚柱部は短く、裾部は大きく広がる。円盤充填法によって杯部と接合する。杯部外面に黒斑が認められる。

108 ～ 112 は甕である。**108 ～ 111** は口縁端部が外反し、端部は丸く収める。**108 ～ 110** は外面にタタキ、**111** は外面にハケを施す。**112** は口縁部が外反し、端部は上方に摘み上げ面を成す。**109** の底部は僅かに尖るがほぼ丸底である。**110** の底部は直径 2.5cm を測る平底である。

108・109・111 はいずれも外面に煤が付着する。付着部位は **108** が口縁部から体部にかけて、**109** が体部最大径を測る位置まで、**111** は口縁部から体部にかけてである。また **108** は内面に被熱による変色、**109** は内面に黒色の付着物、外面に黒斑が認められる。

113 は器種不明の口縁部片である。端部は面を成す。内面に赤色顔料が薄く付着している。

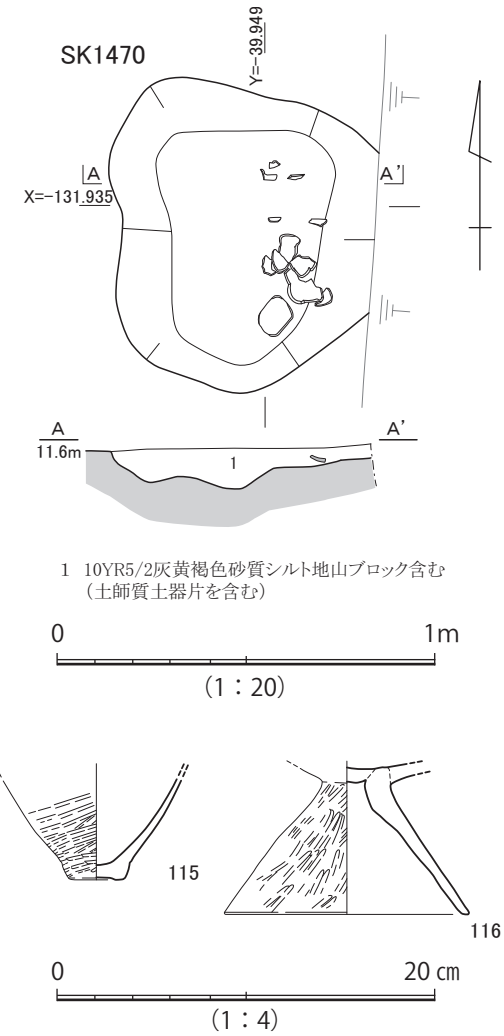
114 はミニチュア土器壺である。球状の体部から外反する口縁部をもつ。口縁部にはユビオサエ、外面に黒斑が認められる。底面に直径 0.8cm の孔が認められるが、穿孔か破損かは判断しがたい。

ＳＫ 1470（第 52 図）　グリッド８北東部に位置する。検出長 0.8 m、幅 0.8 m、深さ 0.13 mを測る。平面形は隅丸方形、断面形状は台形状を呈する。遺物は弥生土器・土師器が出土した。

遺物は２点を図示した。（**第 52 図　115・116**）　弥生土器（**115**）、土師器（**116**）である。

115 は甕である。底径 3.0cm と小型のドーナツ底である。外面にタタキを施し、黒斑が認められる。

116 は器台である。円錐状の裾部で、外面にミガキを施す。円盤充填法によって受部と接合する。布留式期前半のものである。



第 52 図　ＳＫ 1470 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図

古墳時代中期の遺構

ＳＤ 0427（第 53 図）　グリッド 13 に位置する。「Ｌ」字状を呈し、西辺・北辺とも長さ 5.0 m、幅 0.3 m、深さ 0.2 mを測る。断面形状は椀状を呈する。ＳＤ 0555、0421・0432 を切り、ＳＤ 0433 に切られる。遺物は弥生土器・須恵器が出土した。

遺物は２点を図示した。**（第 53 図　117・118）**　弥生土器（**117**）・須恵器（**118**）である。

117 は器台である。口縁端部は下方に拡張し、面を成す。端面に凹線文３条を施し、その上に円形浮文を貼り付ける。

118 は無蓋高杯である。口縁部は外反し、端部は丸く収める。断面三角形状の突帯１条が巡る。外面に自然釉がかかり、砂粒が付着する。ＭＴ 15 型式頃のものか。

ＳＤ 0787（第 54 図）　グリッド９に位置する東西方向の溝である。東側は後世の鋤溝によって削平されており、検出長 2.0 m、幅 0.4 m、深さ 0.07 mを測る。断面形状は皿状を呈する。遺物は須恵器が出土した。**119** と **120** が組み合わされた状態、**121** の小壺が正置で出土した。その状態から意図的に置かれたものと考えられる。いずれもＴＫ 47 型式のものである。

遺物は３点を図示した。**（第 54 図　119 ～ 121）**

119 は杯蓋である。天井部と口縁部境の稜はにぶい。口縁端部は内傾して面を成す。

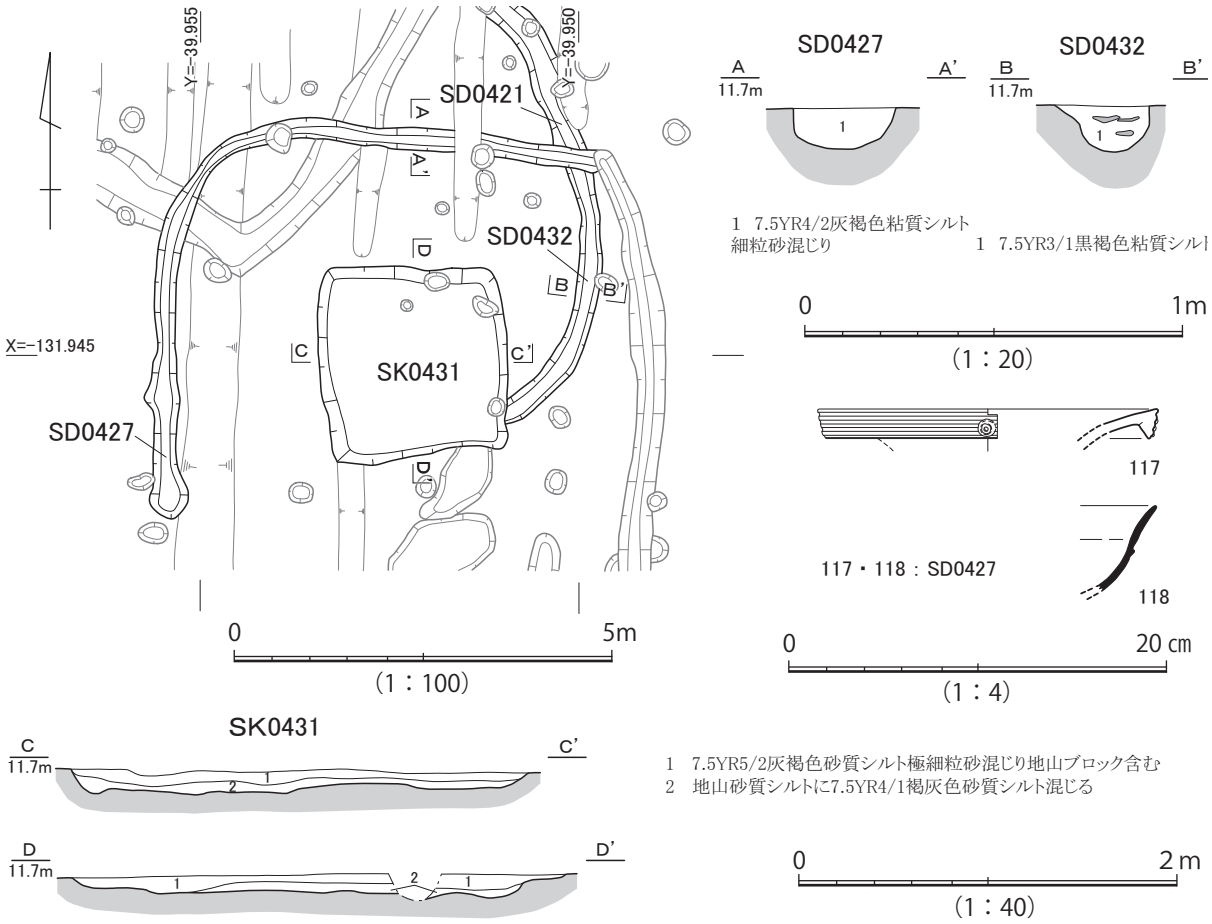
120 は杯身である。口縁部は内傾し、端部は内傾する面を成す。受け部は打ち欠かれている。

121 は小型壺である。扁平な球状を呈する体部から直立する短い口縁部をもつ。底部外面にヘラケズリを施す。

古代以降の遺構

この項で報告するのはいずれも数条でのまとまりが想定できる溝である。出土遺物は弥生土器の細片のみのものが多いため時期を決め難いが、切り合いの状況から古墳時代以降であり、耕作関連の遺構と考えられることから、古代以降の遺構として報告する。

ＳＤ 0958・0970・0982・0995・1010・1054（第 42・55 図）　いずれもグリッド 14 に位置する南北方向の溝である。その様相が類似しており、一連の関連する遺構と考えられる。南側は調査区外へ延びる。いずれも北側で東に振る。東側は後世の素掘り小溝で削平されているため、東側の２条は遺存する長さが短いが、西側の４条は 12.5 m～ 14.5 mを測る。幅はいずれも 0.3 ～ 0.4 m、深さは 0.05 ～ 0.08 mを測る。断面形状は皿状を呈する。各溝の間隔は 1.1 ～ 1.3 mとほぼ一定であり、本数が多いことから、耕作に伴う素掘り小溝と考えられる。やや斜めに振っているのは、地形の影響によるものなのかもしれない。



第 53 図　ＳＤ 0427・0421・0432・ＳＫ 0431 平面・断面・出土遺物実測図

弥生時代後期のＳＤ 0096 を切り、東西方向のＳＤ 0184・0969 に切られる。遺物はＳＤ 0958 以外の溝から弥生土器の細片が出土したが、図示できるものはなかった。

ＳＤ 0185・0969（第 42・55 図）　グリッド 14 に位置する東西方向の溝である。ともに前述した南北方向の溝を切る。ＳＤ 0184 は長さ 6.9 m、幅 0.2 m、深さ 0.03 m、ＳＤ 0969 は長さ 7.6 m、幅 0.3 m、深さ 0.04 mを測る。断面形状は皿状を呈する。ＳＤ 0184 とＳＤ 0969 の間隔は 5 mを測る。耕作に関連する溝と思われるが、他に同規模の東西方向の溝が認められないことから、他の目的で掘削された可能性もある。遺物はともに弥生土器の細片が出土したが、図示できるものはなかった。

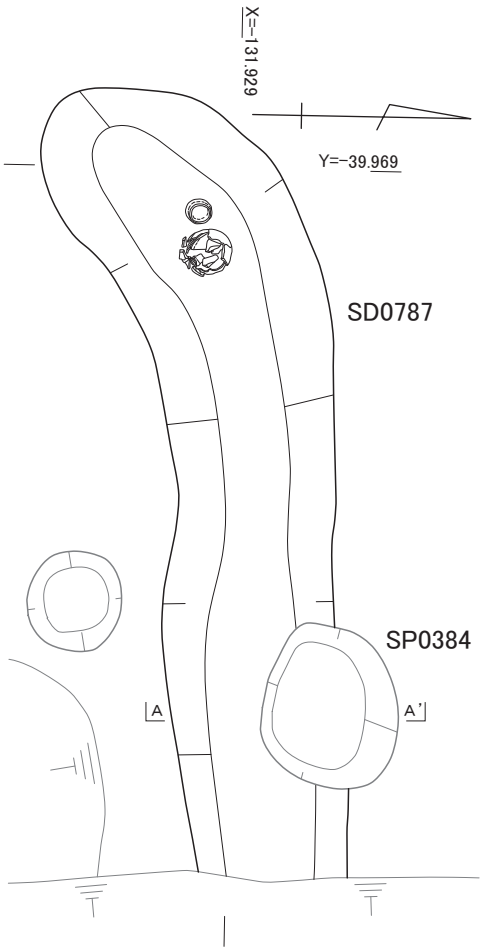
ＳＤ 0433・0442・0455・0461・0466・0474・0480・0481・0486・0490・0497（第 42・55 図）

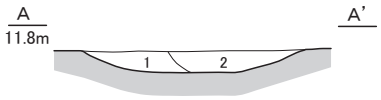
いずれもグリッド 13 に位置する南北方向に延びる溝である。南端は調査区外に延びる。全体で 11 条が認められるが、それぞれ 2 条ないし 3 条程度が切り合っている。長さは 5.5 m～ 6.5 m程度（ＳＤ 0461・0474・0490・0497）、 9 m程度（ＳＤ 0455・0466）、14 m（ＳＤ 0433）、19 m（ＳＤ 0442）と様々である。幅はいずれも 0.4 ～ 0.5 m程度で、深さは 0.05 m以下（ＳＤ 0480・0481・0486）、0.1 m以下（ＳＤ 0466・0433・0490・0442・0497・0455）、0.15 m以下（ＳＤ 0474・0461）に分かれる。

遺物はＳＤ 0481 以外から弥生土器・土師器・須恵器・サヌカイトなどが出土したが、特にＳＤ 0461 から 9 世紀半ば頃の土師器皿が出土しており、それ以降の耕作に伴う溝と考えられる。

遺物はＳＤ 0461 出土の 5 点（**122 ～ 126**）、ＳＤ 0474 出土の 1 点（**127**）を図示した。

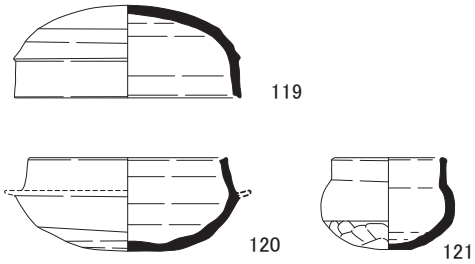
122 は土錘である。長さ 6.0cm、直径 4.0cm、重量 128 g を測る。両端に直径 0.7cm の貫通する円孔を穿つ。





1　10YR4/2灰黄褐色粘質シルトに
　　10YR6/2灰黄褐色粘質シルトブロック含む
2　10YR4/2灰黄褐色極細粒砂まじり粘質シルトに
　　10YR6/2灰黄褐色粘質シルトブロック含む

0　1m
（1：20）



0　20 cm
（1：4）

第 54 図　ＳＤ 0787 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図

123 は須恵器杯身である。受け部は短く、口縁部は強く内彎する。ＴＫ 43 型式頃のものか。

124 は土師器甕である。口縁部は短く外反し、端部は面を成す。体部外面にタテハケ、口縁部内面にヨコハケを施す。体部内面に煤が付着する。８世紀半ば頃のものである。

125・126 は土師器皿である。**125** は口縁部が底部から屈曲して立ち上がる。口縁部内面に凹線を施す。８世紀半ば頃のものである。**126** は口縁部が緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸く収める。９世紀半ば頃のものである。

127 は須恵器杯Ｂである。断面四角形状の高台をもつ。８世紀から９世紀初頭のものか。

４）Ａ区３ブロックの遺構・出土遺物（第 56 ～ 63 図）

Ａ区３ブロックでは、弥生時代後期、古墳時代後期、古代以降の遺構・遺物を検出した。グリッド４・５・９・10 に位置する。

弥生時代後期の遺構

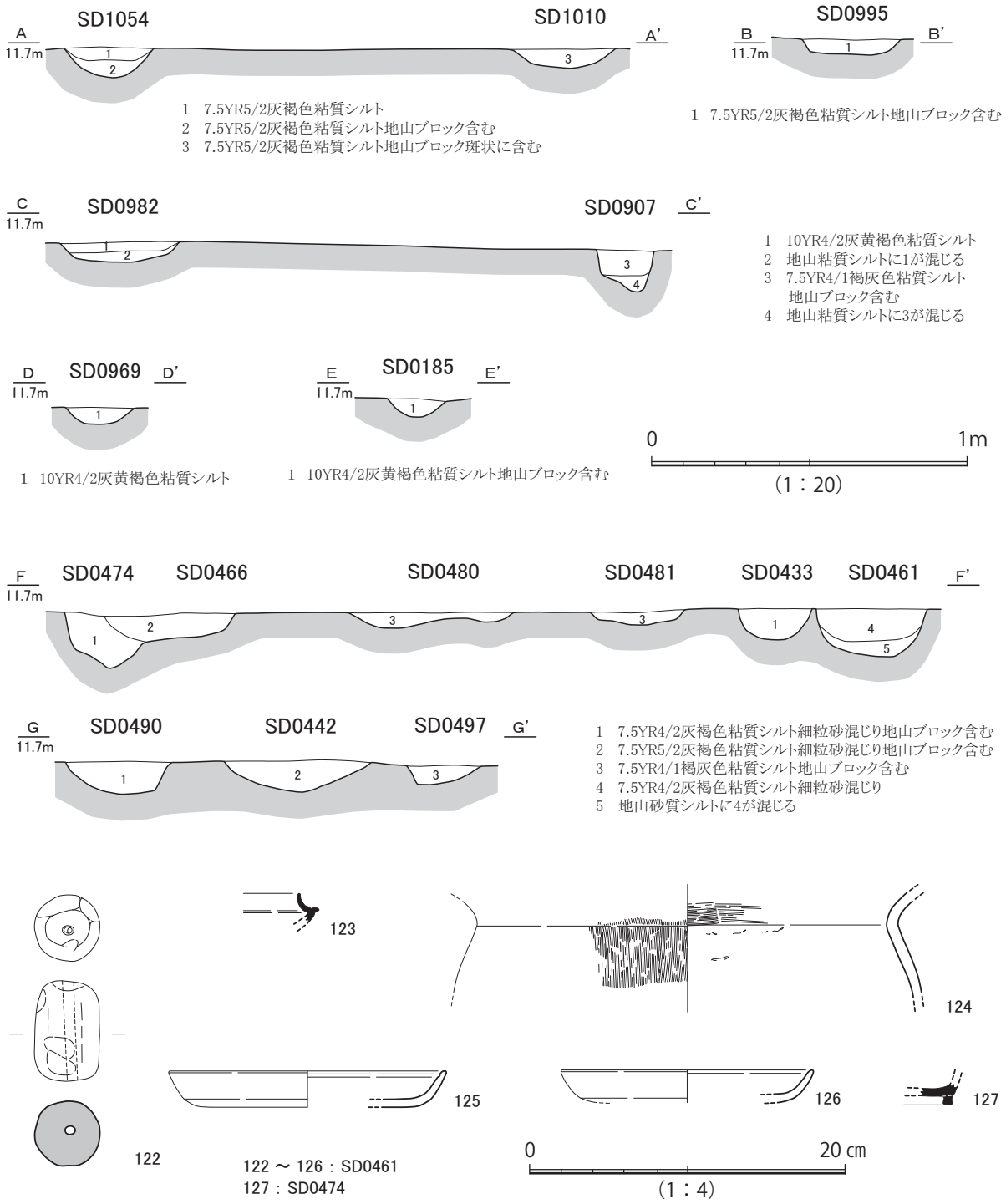
ＳＫ 0348（第 57 図）　グリッド９の北西部、ＳＤ 0300 の北側に位置する。南側をＳＤ 0300、東側をＳＰ 0327・0328 に切られる。東西 1.9 m、南北 0.7 m、深さ 0.14 mを測る。断面形状は皿状を呈する。遺物は遺構の中央部に集中して弥生土器が出土した。

遺物は３点を図示した。**（第 57 図　128 ～ 130）**

128 は有稜高杯である。口縁部が強く外反し、体部との境の稜線は明瞭である。脚柱部は短く中空で、裾部との境に円形透かし孔を３方向に穿つ。杯部内外面及び脚柱部外面にミガキを施し、脚柱部内面にシボリメが認められる。

129・130 は甕である。ともに外面にタタキを施す。**129** は内傾する体部から外反する口縁部が延びる。口縁端部は丸く収める。内面は磨滅して不明であるが、頸部やや下方で段が認められ、以下にケズリを施す可能性がある。**130** は突出するドーナツ底である。

ＳＰ 0388（第 57 図）　グリッド 10 北東部に位置する。長径 0.3 m、短径 0.25 m、深さ 0.12 mを測る。断面形状は二段掘りの台形状を呈する。遺物は弥生土器が出土



第 55 図　各溝断面・ＳＤ 0461・0474 出土遺物実測図

した。

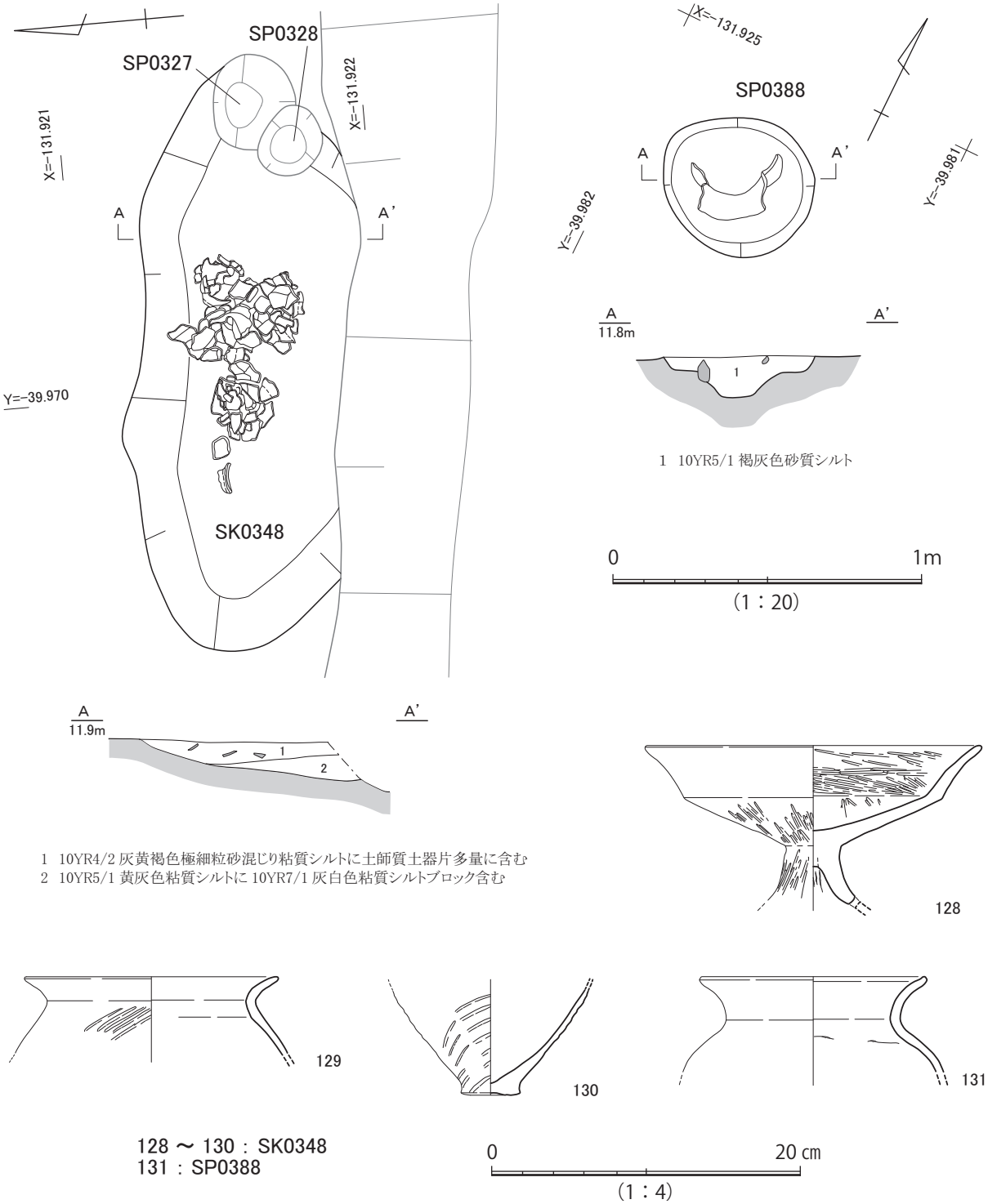
131 は広口壺である。頸部は短く、口縁部は外反し端部は丸く収める。

ＳＤ 0853（第 58 図）　グリッド 10 北東部に位置する。北西－南東方向に延びる溝で、撹乱及びＳＤ 0851 に切られる。検出長 2.0 m、幅 0.3 m、深さ 0.2 mを測る。断面形状は椀状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。

132 は壺である。球形の体部をもち、ドーナツ底である。赤褐色系と灰黄色系の胎土を混ぜて作られており、マーブル状を呈している。

ＳＤ 1618・0742（第 59・60 図）　グリッド５東側に位置する。北西－南東方向に延びる溝で、

第 56 図　A区３ブロック平面図



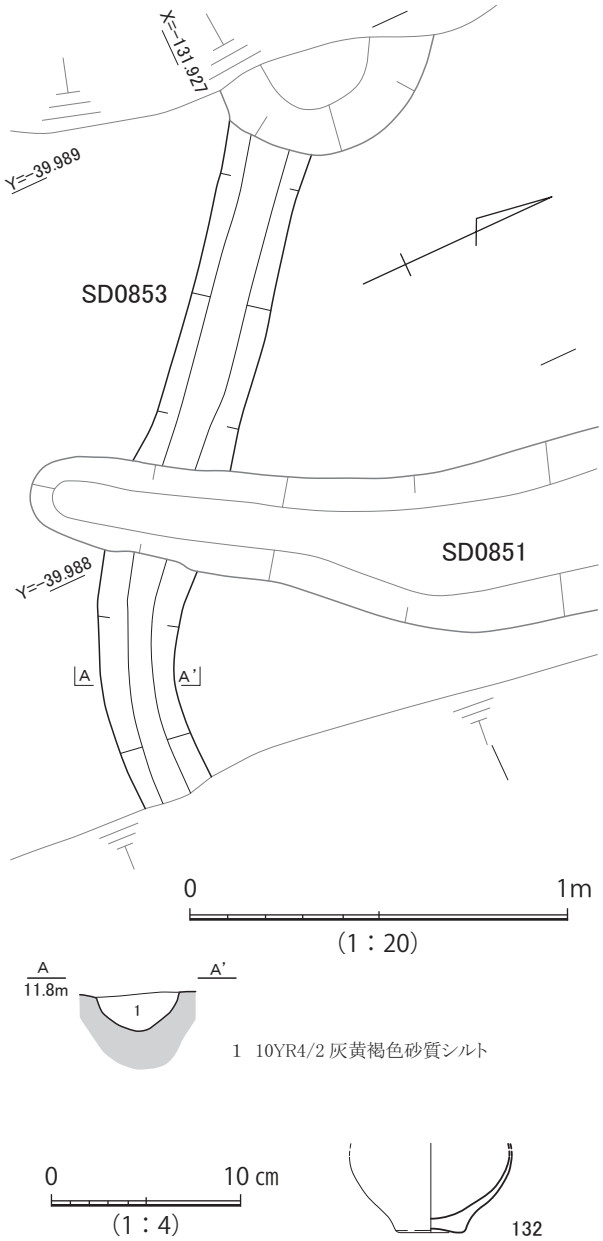
第 57 図　ＳＫ 0348・ＳＰ 0388 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図

ＳＤ 0731 を切り、ＳＤ 0734 に切られる。ＳＤ 0734 の南側に延びるＳＤ 0742 と繋がり、長さ 9.0 m、幅 0.3 m、深さ 0.18 mを測る。断面形状は皿状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。

遺物はＳＤ 1618 出土の３点を図示した。

133 ～ 135 は甕である。**133** は口縁部が外反し、端部は面を成す。外面にタタキ、内面にハケを施す。**134・135** はともにドーナツ底である。外面にタタキを施し、黒斑が認められる。

ＳＤ 0731・0734（第 59・60 図）　グリッド５東部に位置する。ＳＤ 0731 は平面形が「Ｌ」字状を呈する溝であり、南西部をＳＤ 1618・0734 に、北側を撹乱に切られる。検出長は南北 4.0 m、



第 58 図　ＳＤ 0853 平面・断面・出土遺物実測図

東西 2.0 m、幅 1.8 m、深さ 0.14 mを測る。断面形状は椀状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。

ＳＤ 0734 はＳＤ 0731・1618・0742 を切り、西側を撹乱に切られる。検出長 6.0m、幅 1.8 m、深さ 0.15 mを測る。断面形状は皿状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。

ＳＤ 0731 とＳＤ 0734 の出土遺物は一括して取り上げられているものがあるため、まとめて報告する。合わせて 16 点を図示した。（**第 60 図 136 ～ 151**）**147** 以外は弥生土器であり、中期（**148**）と後期の土器（**148 以外**）が認められる。なお **147** はＳＤ 0731 出土、**148 ～ 151** はＳＤ 0734 出土、**136 ～ 146** は一括取り上げ分である。

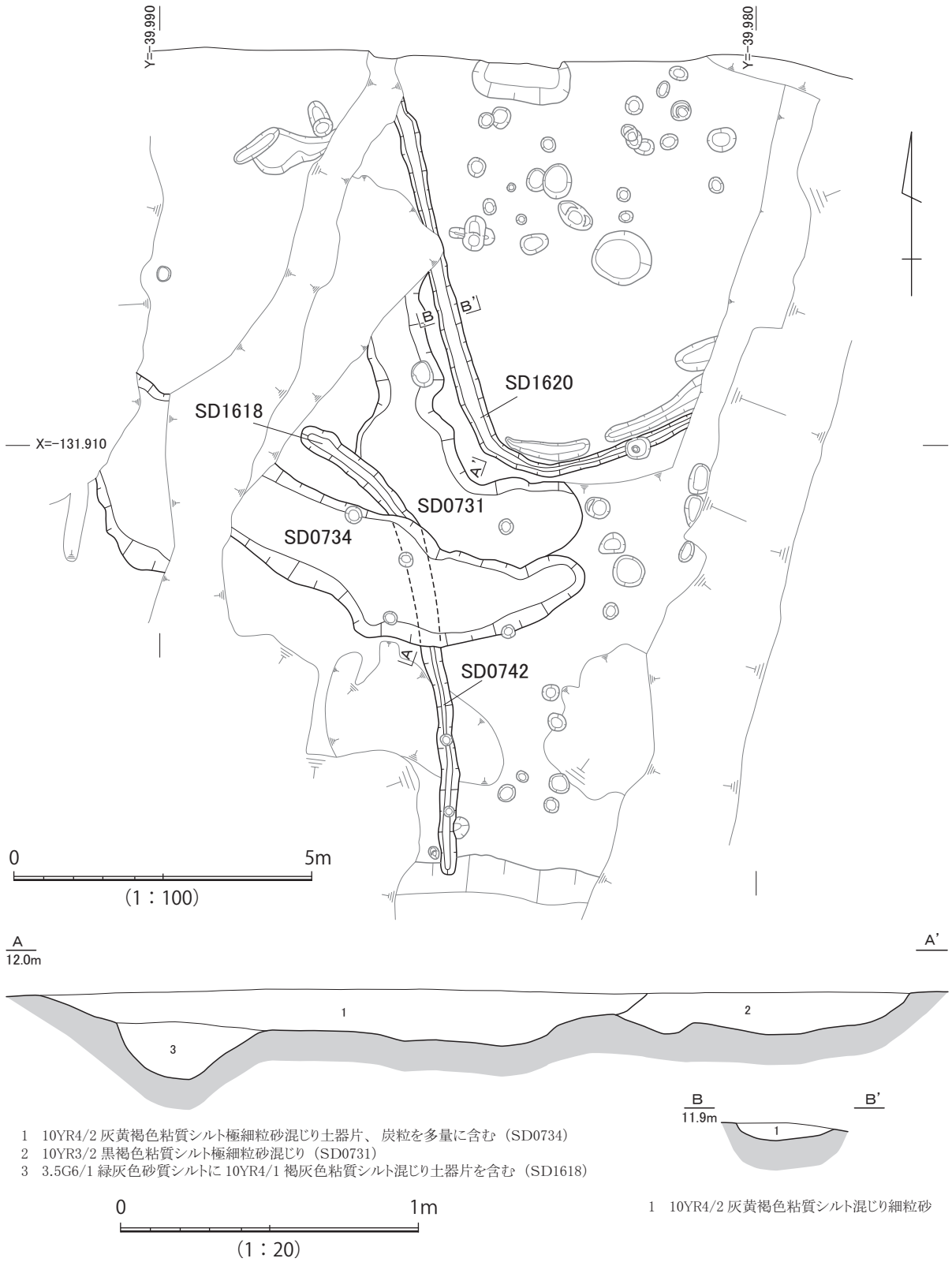
136 ～ 141・148 は壺である。**136・137** は広口壺である。**136** は口縁端部が面を成し、端面に波状文を施す。**137** は口縁部の外反は緩やかである。端部は面を成す。**138・139** は細頸壺である。**138** は口径 5.8cm、最も細い箇所では外径で 4.3cm を測る。外面にミガキを施し、内面にシボリメが認められる。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。**139** は磨滅が著しいが、頸部径が 3.2cm を測る。**140** は突出の少ないやや丸みを帯びた平底である。外面にミガキ、内面にハケを施す。外面に黒斑が認められる。**141** はドーナツ底である。胎土中に直径 1.0cm を測る大粒の石を含み、内面に露出する。**148** は口縁端部を上下に拡張し、面を成す。弥生時代中期後半のものである。

142・143 は高杯である。ともに中空の直立する脚柱部と、緩やかに広がる裾部をもつ。**142** は円形透かし孔を３方向に穿つ。外面にハケ後ミガキ、内面にハケを施し、脚柱部内面にシボリメが認められる。**143** は円形透かし孔を４方向に穿つ。脚柱部内面にシボリメが認められる。挿入付加法で杯部と接合する。

144・145 は甕である。ともに外面にタタキ、**145** は内面にもハケを施す。**144** はドーナツ底、**145** は平底である。

149 は有孔鉢である。底部は平底であり、底部中央からややずれた位置に直径 1.0cm の円孔を穿つ。

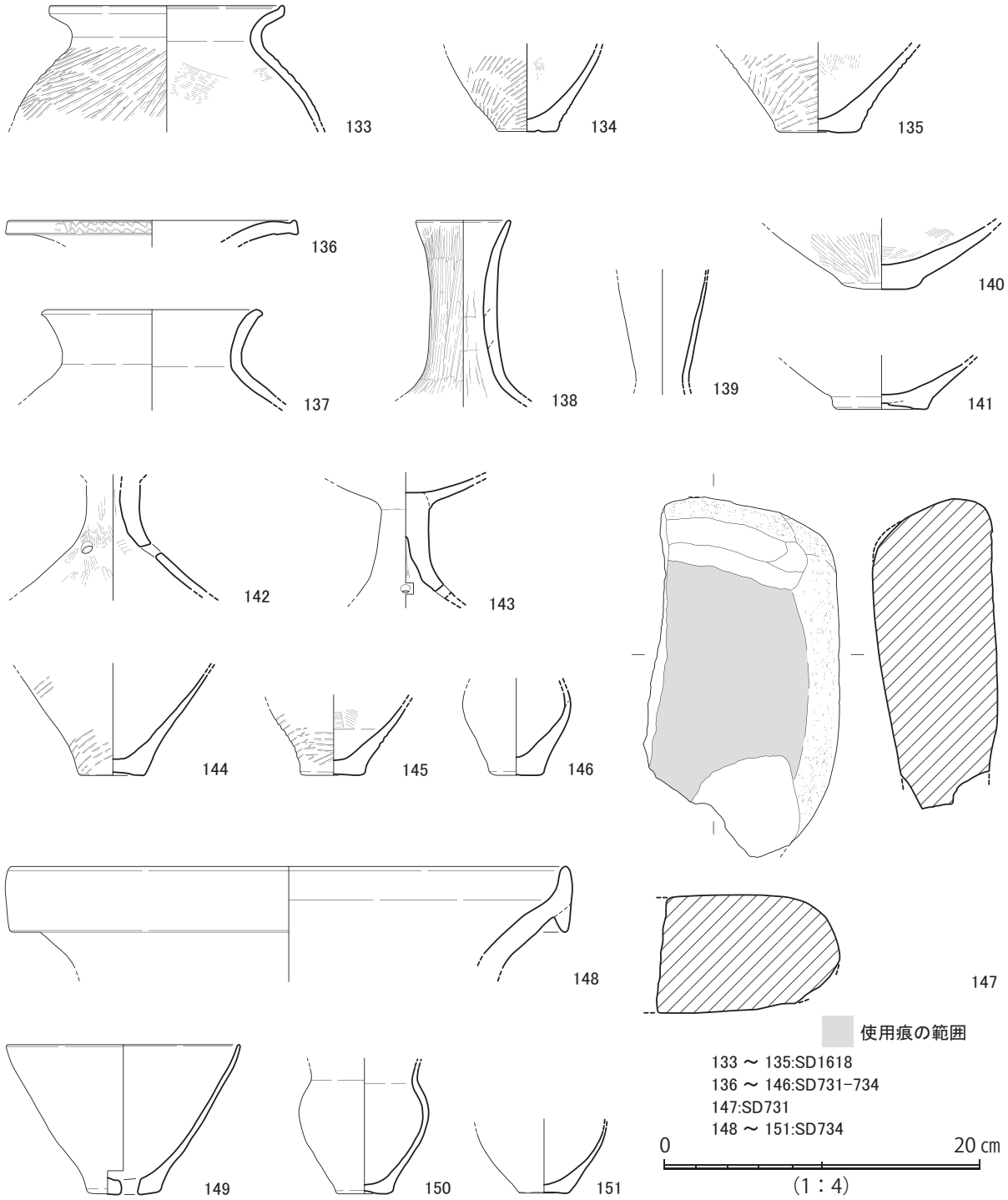
146・150・151 はミニチュア土器壺である。**146** は平底で、体部は上部で内彎する。外面に黒斑が認められる。**150** は口縁端部を欠損する。頸部から外反する口縁部をもつ。底部はドーナツ底である。**151** は平底の底部である。体部は内彎して立ち上がる。



第 59 図　ＳＤ 0731・0734・0742・1618・1620 平面・断面図

147 は石皿である。残存長 22.9cm、残存幅 12.4cm、厚さ 7.6cm、重量 3,000 g である。上面は使用によって磨滅する。左下方がより平滑になっているため、中心に近いと思われる。

ＳＤ 1620（第 59 図）　グリッド５東部に位置する。平面形が「Ｌ」字状を呈する溝で、東側と北側を撹乱に切られる。西側は検出長 6.0 m、幅 0.33 m、深さ 0.05 m、南側は検出長 3.5 m、幅 0.2 m、深さ 0.06 mを測る。遺物は弥生土器が出土したが、図示できるものはなかった。

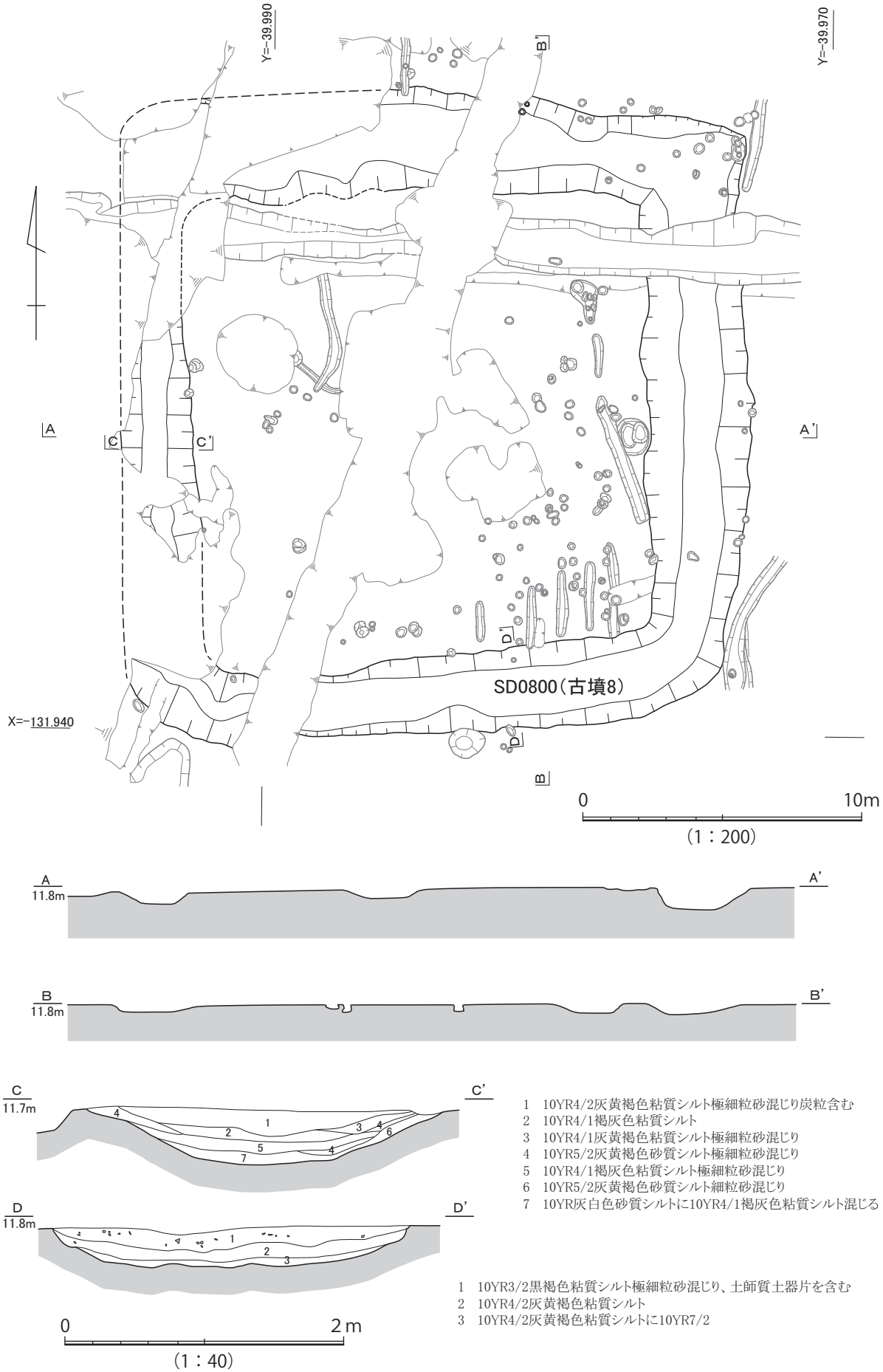


第 60 図　ＳＤ 0731・0734・1618 出土遺物実測図

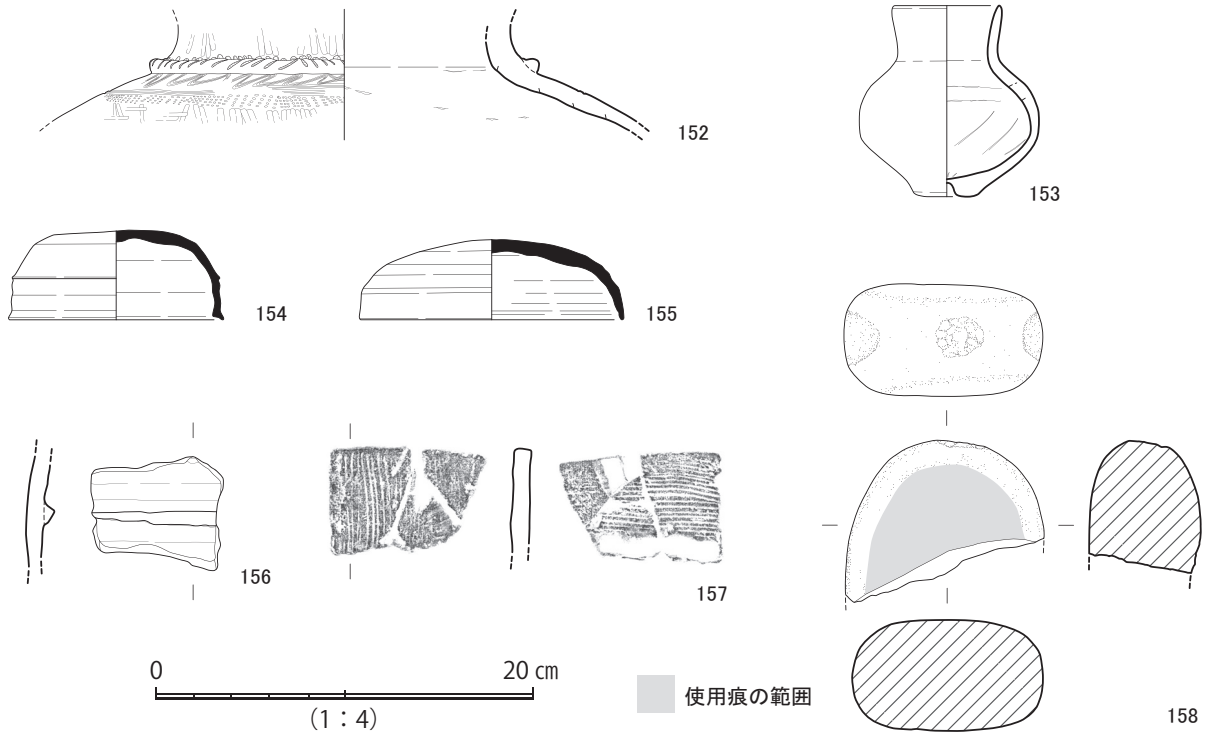
古墳時代後期の遺構

ＳＤ 0800（古墳８）（第 61・62 図）　グリッド４・５・９・10 にかけて位置する。平面形が四角形を呈し、古墳時代後期の方墳と考えられる。周溝の外側で南北 22.5 m、東西 21.8 m、内側で南北 16.2 m、東西 16.4 mを測る。西側は特に撹乱が著しいが、かろうじて規模を把握することができた。北側はＳＤ 0300 に切られる。墳丘部分は削平されており、埋葬施設などは検出していない。周溝の幅は 2.5 m～ 3.8 mを測る。深さは東側で部分的に 0.7 mを測る他は、0.25 m～ 0.3 m程度であり、断面形状は台形状を呈する。遺物は弥生土器・石器・土師器・須恵器・埴輪が出土したが量は少ない。

遺物は７点を図示した。（**第 62 図　152 ～ 158**）　弥生土器（**152・153**）、石器（**158**）、須恵器



第61図　ＳＤ 0800（古墳８）平面・断面・断割図



第 62 図　ＳＤ 0800（古墳８）出土遺物実測図

（**154・155**）、埴輪（**156・157**）である。

152 は壺である。頸部から肩部にかけて残存する。頸部は接合面で剥離する。頸部に断面三角形状の貼付突帯をもつ。突帯上面に串状工具による刺突文、刻み目を施し、突帯下に波状文・極浅い直線文・４本一組で中空の円形工具による刺突文を施す。**153** は直口壺である。器高 10.1cm と小形である。口縁部は短く直立し、端部は丸く収める。内面に板ナデを施す。体部は球形で、底部は平底である。中央部が窪むが、充填した粘土が剥離した可能性がある。

154・155 は杯蓋である。**154** は天井部と口縁部の境に稜をもつ。口縁端部は外方に摘み出し、面を成す。ＴＫ 23 型式のものである。**155** は扁平な形状となり、天井部と口縁部の境はナデにより段をもつ。口縁端部は丸く収める。ＴＫ 43 型式のものである。

156・157 は円筒埴輪である。**156** は突帯の断面形態が、低い三角形状を呈する。内外面ともハケは認められない。**157** は口縁部で直立する形態である。外面にヨコハケ、内面にタテハケを施す。

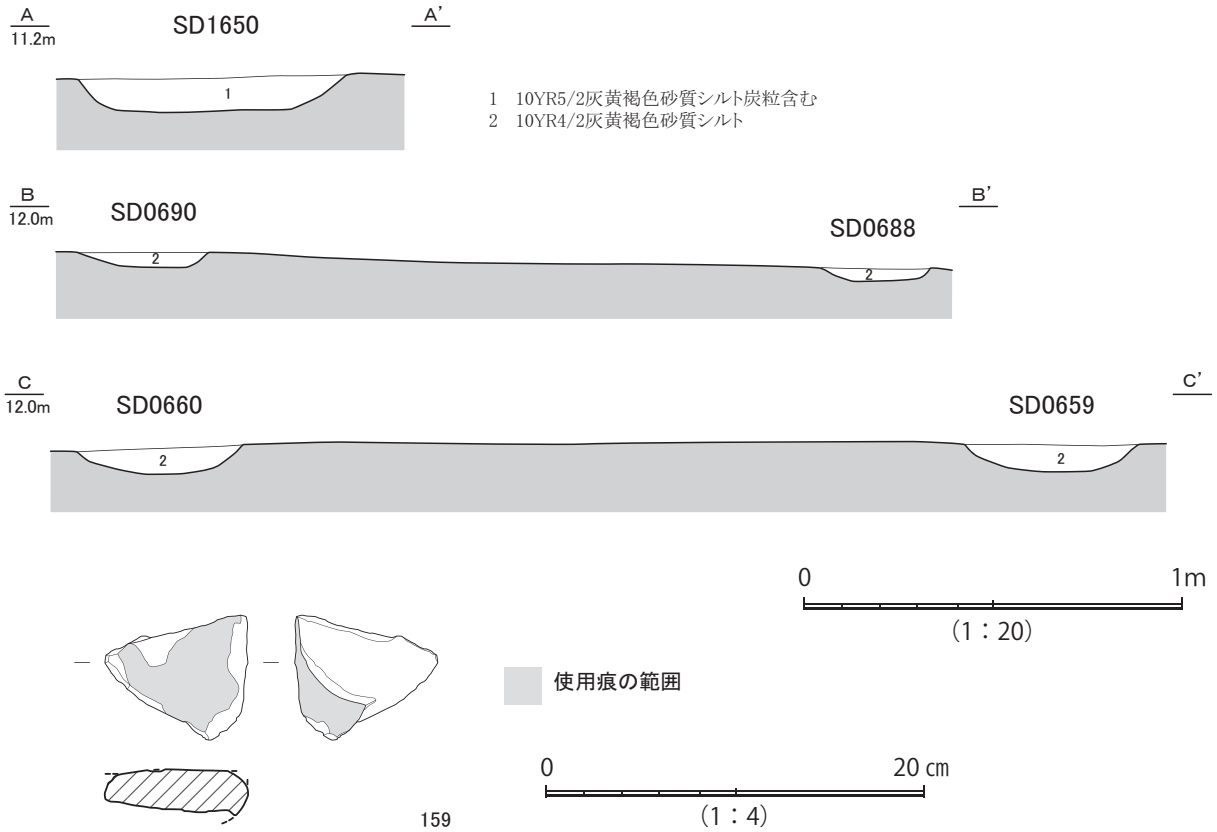
158 は磨石である。扁平な円形を呈する。およそ半分程度が残存する。重さ 666 ｇである。平らな面の片側は使用痕が認められ、反対面の中央は敲打痕により窪む。周縁にも敲打痕が認められる。

古代以降の遺構

Ａ区２ブロックと同様にこのブロックでも、南北方向に延びる溝を数条検出した。出土遺物はいずれも弥生土器の小片であり時期は決め難いが、古墳時代後期のＳＤ 0666 を切っているものがあることから、古代以降の遺構として報告する。

ＳＤ 0690・0688・0689（第 56・63 図）　グリッド４西部に位置する。南北方向に延び、北側は撹乱に切られる。また、ＳＤ 0688 とＳＤ 0689 は中央に撹乱が存在するために別の遺構番号が付与されているが、本来は一本の溝と考えられる。ＳＤ 0690 とＳＤ 0688・0689 の芯々間の距離は 1.8 mと一定するため、関連を有する溝と考えられる。

ＳＤ 0690 は検出長 9.0 m、幅 0.4 m、深さ 0.05 m、ＳＤ 0688･0689 は検出長 6.8 m、幅 0.4 m、



第 63 図　ＳＤ 0659・0660・0688・0690・1650 断面・出土遺物実測図

深さ 0.05 mを測り、断面形状はともに皿状を呈する。遺物はＳＤ 0688 から弥生土器、ＳＤ 0690 から弥生土器・砥石が出土した。ＳＤ 0690 はＳＫ 0700 を切る。

遺物はＳＤ 0690 出土の 1 点を図示した。**159** は砥石である。現状で長さ 6.6cm、幅 7.6cm、厚さ 2.9cm、重量 131 g である。裏面が剥離するが、表面及び、裏面の斜めになっている部分が使用により平滑になっている。

ＳＤ 0660・0659（第 56・63 図）　グリッド 4 南西部に位置する。南北方向に延び、北側は撹乱に切られる。検出長はＳＤ 0660 が 9.2 m、ＳＤ 0659 が 7.5 mを測る。ともに幅は 0.4 m、深さは 0.07 mを測り、断面形状は皿状を呈する。ともに遺物は弥生土器が出土したが、図示できるものはなかった。両者の芯々間の距離は 2.0 m～ 2.2 mを測り、互いに関連を有する溝と考えられる。

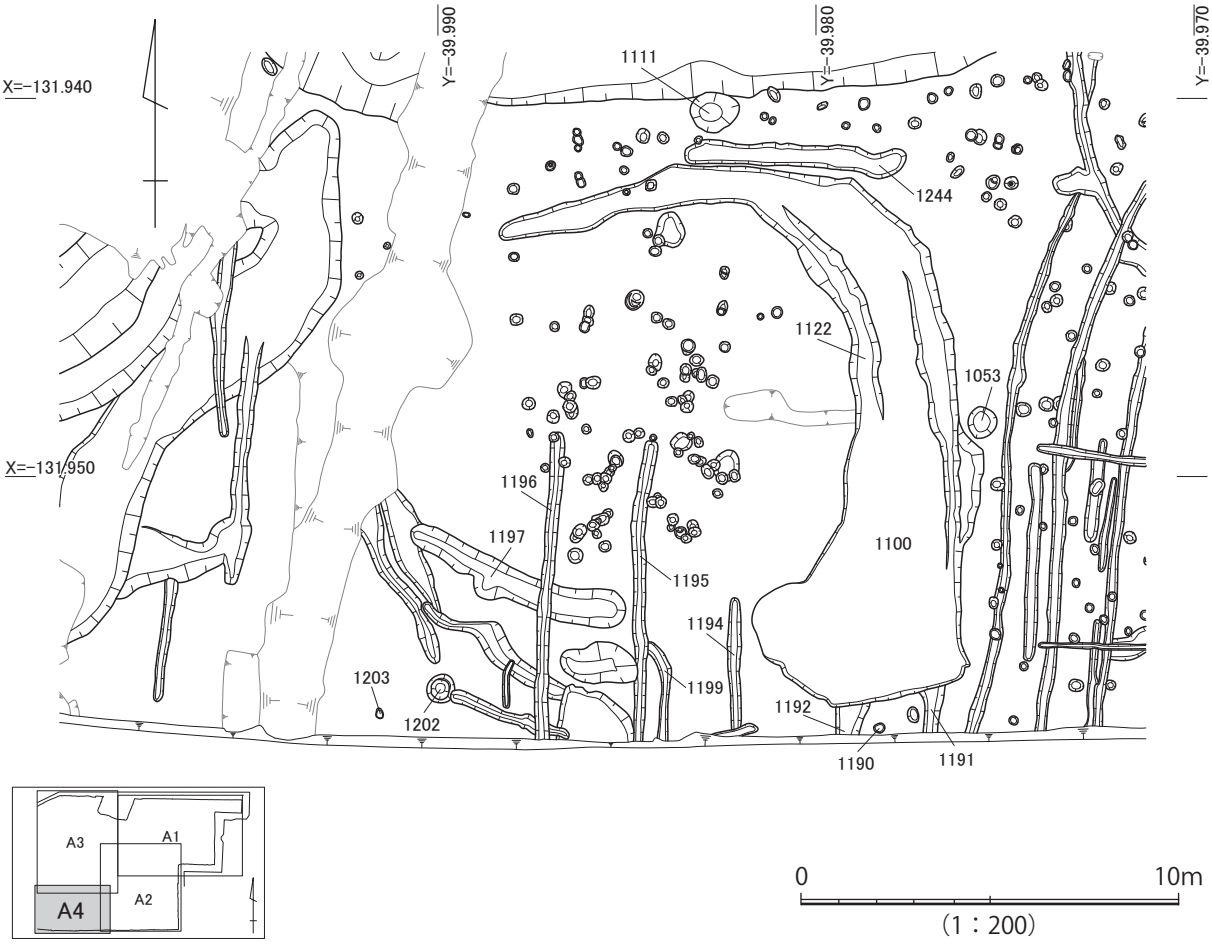
ＳＤ 1650（第 56・63 図）　グリッド 5 西側に位置する南北方向の溝である。北側は調査区外に延び、南側は撹乱に切られる。検出長 8.5 m、幅 0.8 m、深さ 0.1 mを測る。断面形状は皿状を呈する。遺物は弥生土器が出土したが、図示できるものはなかった。

5）A 区 4 ブロックの遺構・出土遺物（第 64 ～ 80 図）

A 区 4 ブロックでは、弥生時代後期、古墳時代前期、古代の遺構・遺物を検出した。グリッド 14・15 に位置する。

弥生時代後期の遺構

ＳＫ 1111（第 66 ～ 68 図）　15 グリッド北東部、ＳＤ 1110 とＳＤ 0800 の間に位置する。長径 1.3 m、短径 1.1 m、深さ 1.08 mを測る。平面形は楕円形、断面形状は「U」字状を呈する。ＳＤ 0800 に切られる。遺物は特に埋土の中層より上位から、弥生時代後期の土器が多く出土した。



第 64 図　A 区 4 ブロック平面図

遺物は 18 点を図示した。（第 67・68 図　160 ～ 177）

160 ～ 167 は壺である。**160 ～ 162** は広口壺である。**160** は短く直立する頸部から口縁部が外反し、端部は面を成し、凹線文 2 条を施す。**161** は **160** と比べると頸部と口縁部との境が明瞭ではなく、緩やかに移行する。端部は面を成す。**162** は外反する短い口縁部をもつ。口縁部と肩部に黒斑を有する。**163** は細頸壺である。球形の体部とやや外反する頸部をもつ。底部外面にミガキ、体部内面にハケを施す。ほぼ完形であるが、口縁端部は磨滅のため、完存しているのかは定かでない。底部はドーナツ底である。**164** は短頸直口壺である。口縁部はやや外反し、端部は角度を変えて上方に延びる。体部外面に斜め方向のタタキの後、横方向のタタキを施す。**165** は完形の体部から底部である。頸部以上を欠く。体部は球形を呈し、底部は突出したドーナツ底である。外面にミガキを施す。底部付近に黒斑が認められる。**166・167** は平底の底部である。ともに体部は緩やかに内彎して立ち上がる。内面にハケを施す。**166** は底部付近、**167** は外面から底部にかけて黒斑が認められる。

168 は高杯である。裾部を欠く。口縁部は外反し、体部との接線は明確な稜をもつ。杯部内面と脚柱部外面にミガキを施し、脚柱部内面にシボリメが認められる。円形透かし孔を 3 方向に穿つ。杯部の内面及び外面に黒斑が認められる。

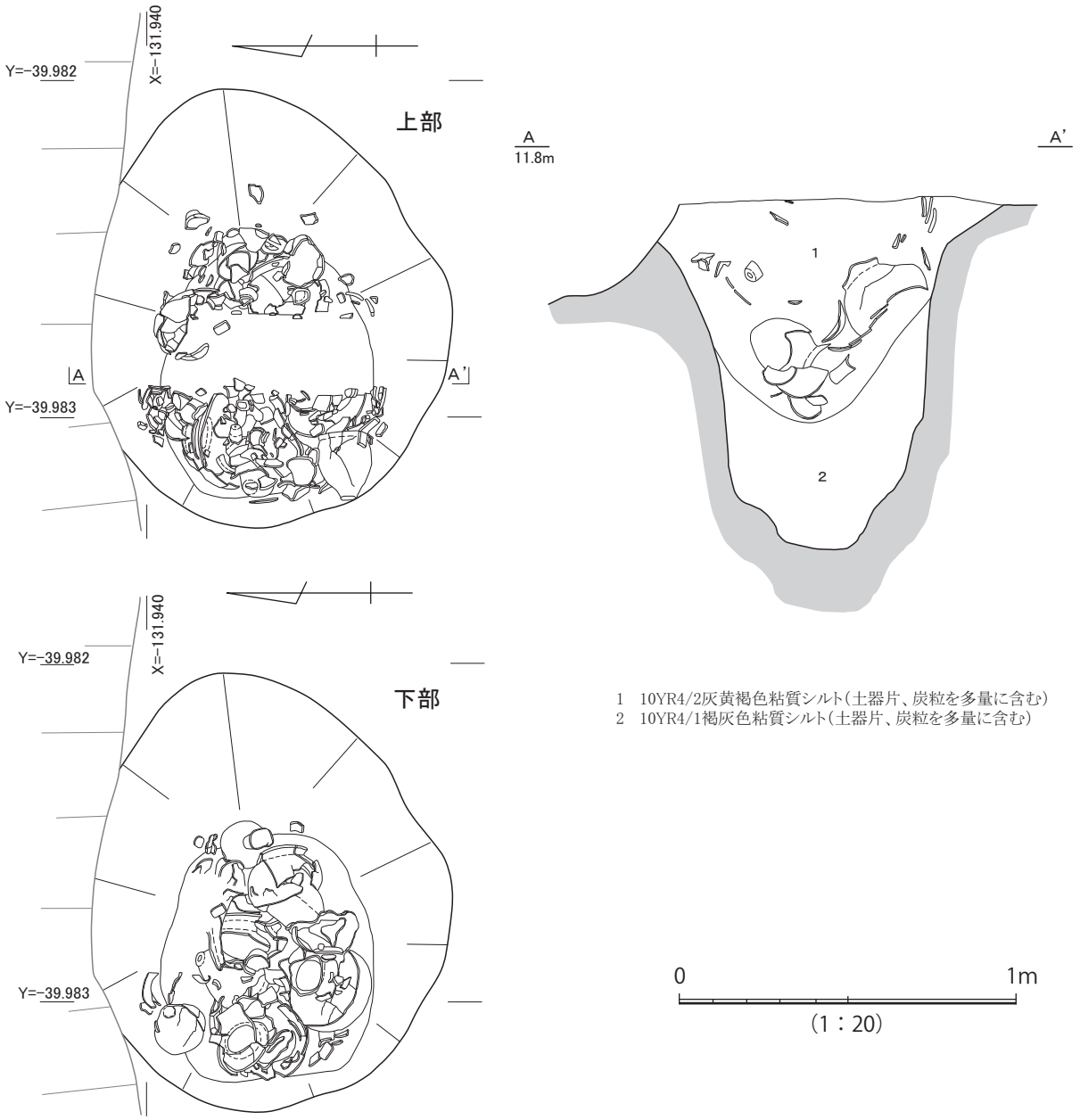
169 ～ 175 は甕である。**171** は口縁部が外反せずほぼ直立の状態で、口縁部の内外面にユビオサエを施す。**171** 以外は口縁部が外反し、**172・173** は口縁端部が面を成す。**174** は端部が磨滅しており不明である。**169 ～ 171・175** は外面にタタキ、**173** はタタキ後ハケを施す。**174** は僅かにハケが認められる。**170・171・174・175** は内面にハケ、**173** は板ナデを施す。底部は **170** が平底、

第 65 図　ＳＤ 1100 周辺平面図

171・175 がドーナツ底である。**170・171** は体部、**174** は肩部に黒斑が認められる。

176・177 は鉢である。**176** は有孔鉢である。尖底の底部に直径 0.6cm の円孔を穿つ。内面にハケを施す。口縁部外面に黒斑が認められる。**177** は片口をもつ大型の鉢である。口縁部は外反し、端部は面を成す。外面にタタキ、内面に板ナデを施す。

ＳＫ 1053（第 69 図）　グリッド 14 北西部、ＳＤ 1100 の東側に近接する。長径 0.88 m、短径 0.72 m、深さ 0.2 m を測る。平面形は楕円形、断面形状は台形状を呈する。埋土の上層に炭粒と土器を含む。



第 66 図　ＳＫ 1111 平面・断面・遺物出土状況図

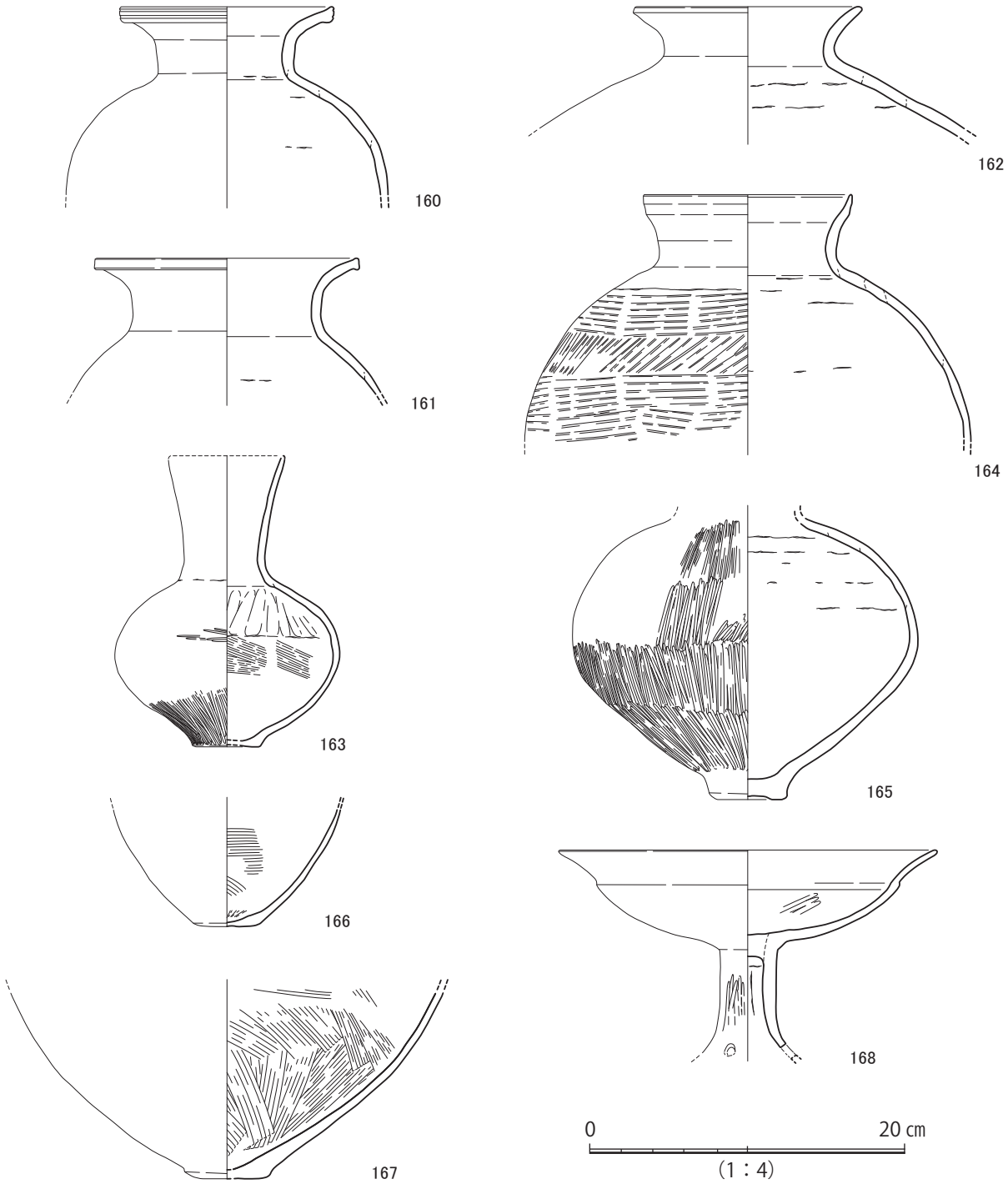
遺物は弥生土器が出土した。出土状況図では長頸壺と甕が認められるが、取り上げ時に細片化しており、図示できなかった。

ＳＤ 1197（第 69・70 図）　グリッド 15 の南東部に位置する。ＳＤ 1100 の西側で緩やかな弧を描きながら南東－北西方向に延びる。長さ 6.2 m、幅 0.8 m、深さ 0.14 mを測る。断面形状は台形状を呈する。中ほどをＳＤ 1196 に切られ、西端はＳＤ 1610 を切る。遺物は南東端に集中しており、弥生土器、埴輪が出土した。埴輪は出土量が少ないため混入と考えられる。

遺物は 14 点を図示した。（**第 70 図　178 ～ 191**）　**190・191** 以外は弥生土器である。

178･179 は壺である。178 は広口壺である。口縁部は頸部より緩やかに外反し、端部は丸く収める。底部は突出してやや丸みを帯びた平底である。底部外面にユビオサエが認められる。**179** は体部から底部である。底部は突出するドーナツ底である。

180・181 は高杯である。ともに緩やかに開く脚柱部で裾部は欠損する。内面にシボリメが認められる。**180** は円形透かし孔を穿つ可能性があるが、磨滅のため定かではない。**181** は円形透かし

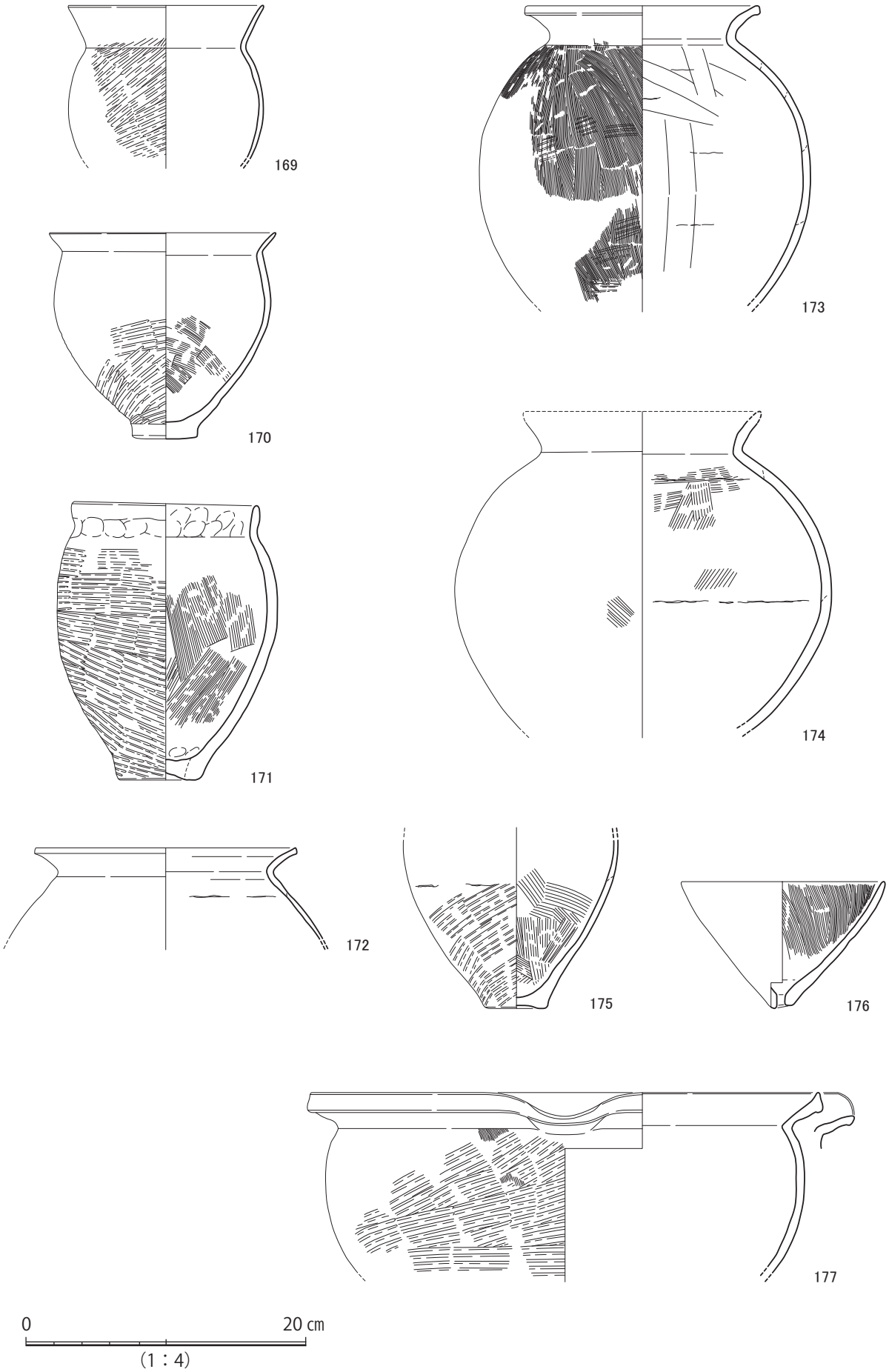


第 67 図　ＳＫ 1111 出土遺物実測図（1）

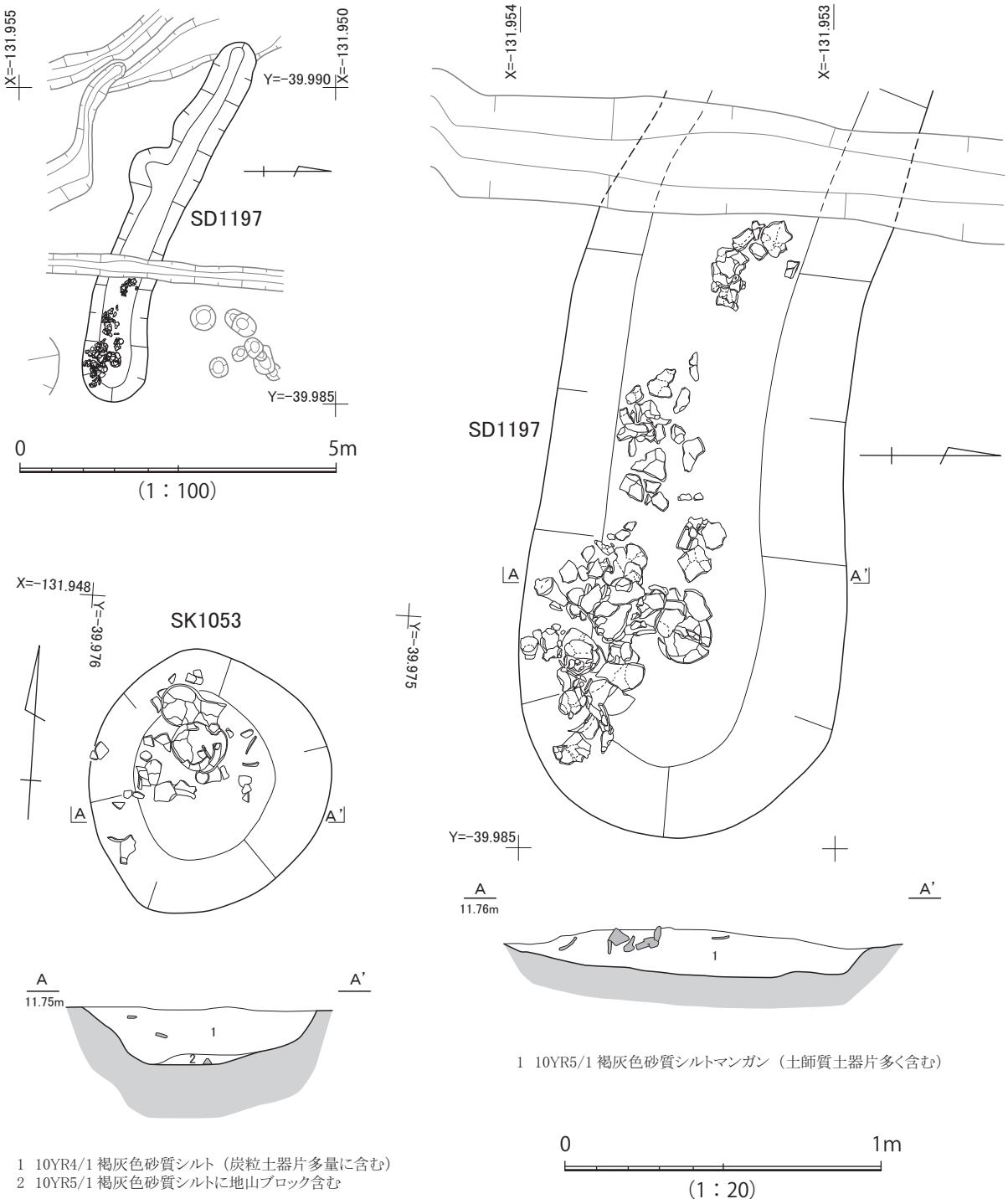
孔を３方向に穿つ。杯部との接合は **180** は円盤充填法、**181** は不明である。また、**180** は脚柱部外面に粘土を貼り足している。

182 ～ 185 は甕である。いずれも平底である。**184** はほぼ直立に近い角度で上方にのび、**185** は体部が外傾して上方にのびる。182 以外は外面にタタキを施し、**184・185** は内面にハケを施す。

186 ～ 189 は鉢である。**186** は受口状口縁鉢である。口縁端部は外反して摘み上げる。体部外面にミガキを施す。**187・188** は有孔鉢である。**187** は直線的な体部をもつ。外面にタタキを施し、口縁部は丸く収める。平底の底部に直径 0.6cm の円孔を穿つ。**188** は丸みを帯びた体部をもつ。平底の底部に直径 1.0 ～ 1.2cm の楕円孔を穿つ。**189** は突出したあげ底で、外面にユビオサエが認め



第 68 図　ＳＫ 1111 出土遺物実測図（2）



第 69 図　ＳＫ 1053・ＳＤ 1197 平面・断面・遺物出土状況図

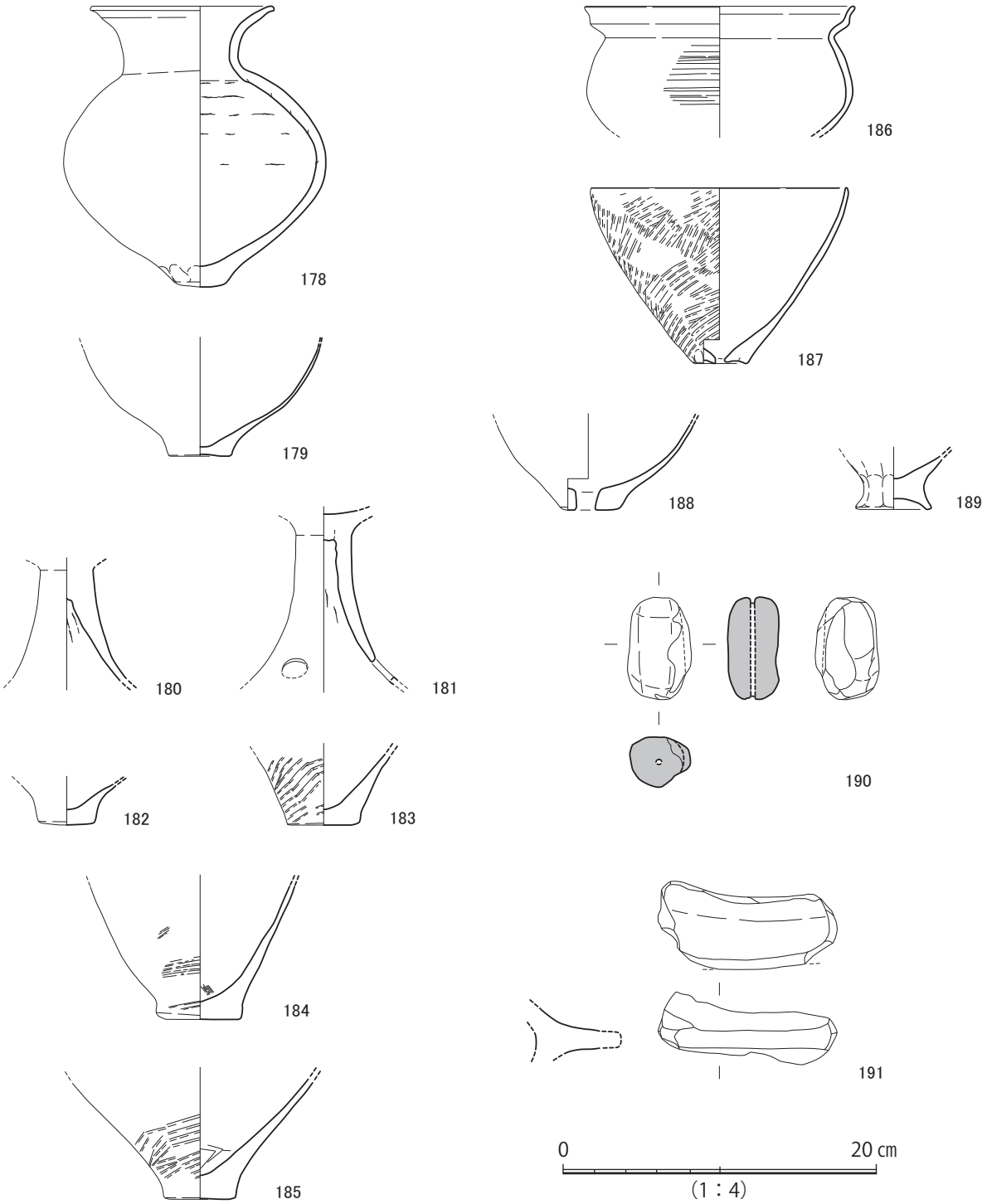
られる。

190 は土錘である。長楕円形を呈し、長さ 6.5cm、直径 3.3cm、重量 90 g である。外面に鉄分が付着する。片側は鉄分で塞がっているが、直径 0.4cm の孔が貫通しているようである。

191 は形象埴輪の台部分の箍である。断面形状は扁平な四角形を呈する。上部は内傾する。

ＳＰ 1190（第 71 図）　グリッド 14 南西部、ＳＤ 1100 の南側に位置する。直径 0.28 m、深さ 0.1 mを測る。平面形は円形、断面形状は台形を呈する。遺物は上層から弥生土器が出土した。体部片のため図化には至らなかった。

ＳＫ 1202（第 71 図）　グリッド 15 の南東部と南西部の境界に位置する。直径 0.7 m、深さ 0.39



第 70 図　ＳＤ 1197 出土遺物実測図

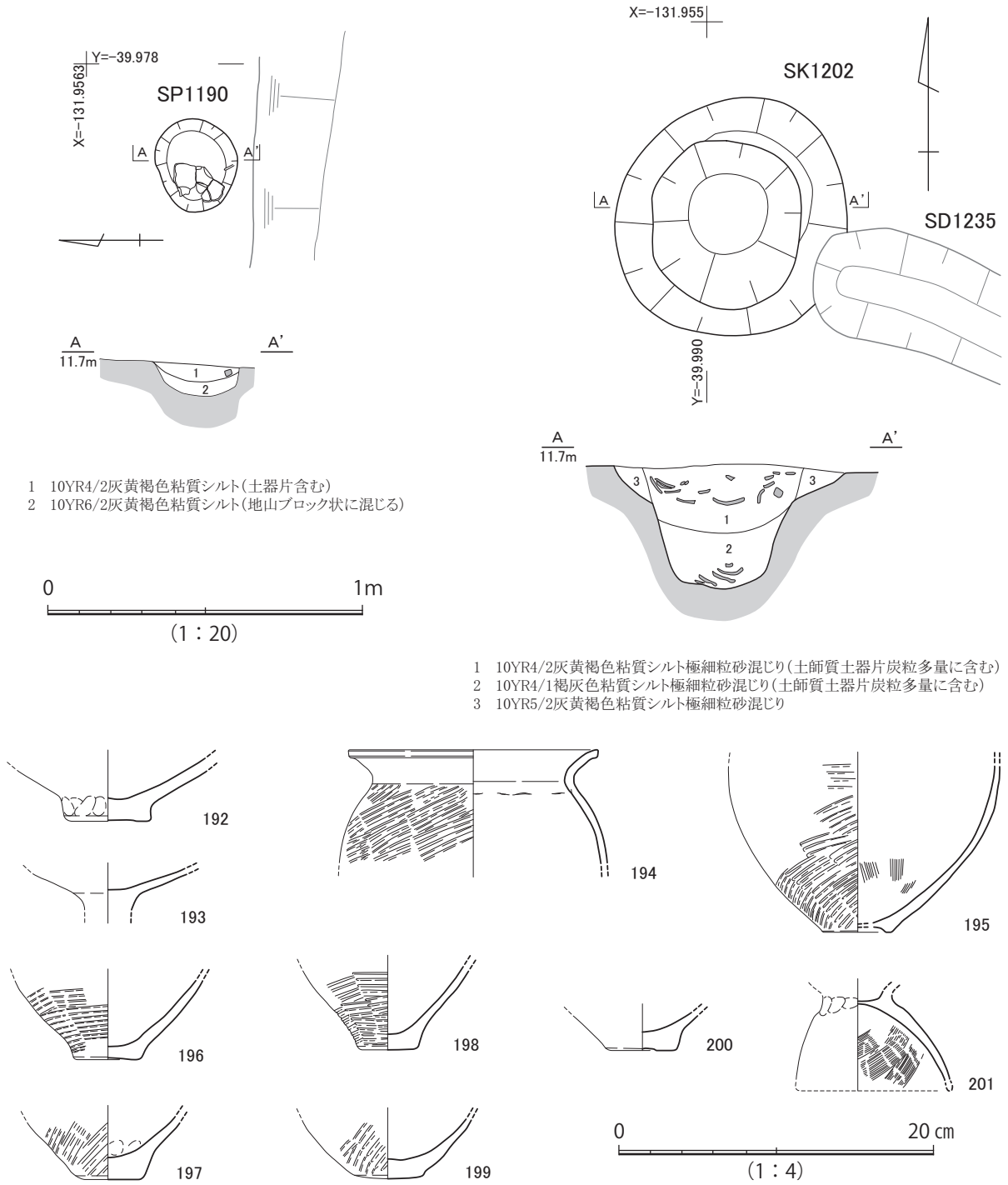
mを測る。平面形は円形、断面形状は台形状を呈する。埋土はいずれの層にも炭粒を多く含む。東側をＳＤ 1235 に切られる。遺物は弥生土器が出土した。

遺物は 10 点を図示した。**（第 71 図　192 ～ 201）**

192 は壺である。突出した平底で、外面にユビオサエが認められる。

193 は高杯である。柱状部と杯部の接合部が残存する。接合法によって杯部と接合する。

194 ～ 201 は甕である。**194** は外反する口縁部をもつ。端部は面を成す。外面にタタキを施す。**195 ～ 200** は底部である。突出する平底（**196･197･198･200**）、平底（**199**）、ドーナツ底（**195**）がある。**200** 以外は外面にタタキを施し、**195** は内面にハケを施す。**195・196** は外面に黒斑が認



第 71 図　ＳＰ 1190・ＳＫ 1202 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図

められる。**201** は脚台付甕の脚台部である。内彎して下方に延び、内面にハケを施す。底部との接合部分にユビオサエを施す。

ＳＤ 1100（第 65・72 ～ 77 図）　グリッド 14・15 にまたがる「Ｌ」字状を呈する溝である。東側は長さ 13 m、幅 2.7 ～ 3.1 m、深さ 0.1 ～ 0.13 m程度、北側は長さ 10.0 m、幅 1.1 m、深さ 0.03 m程度を測る。断面形状は北側では皿状、東側では台形状を呈する。埋土中に炭粒を多く含む。ＳＤ 1100 の西端には別途ＳＤ 1122 と番号を付与された溝が存在する。断面図を見る限り、ＳＤ 1122 の埋没後にＳＤ 1100 が掘削されている。出土状況図上の遺物はその出土レベルからＳＤ 1100 に帰属するものと考えられる。遺物は特に溝の東側に沿って多く出土している。

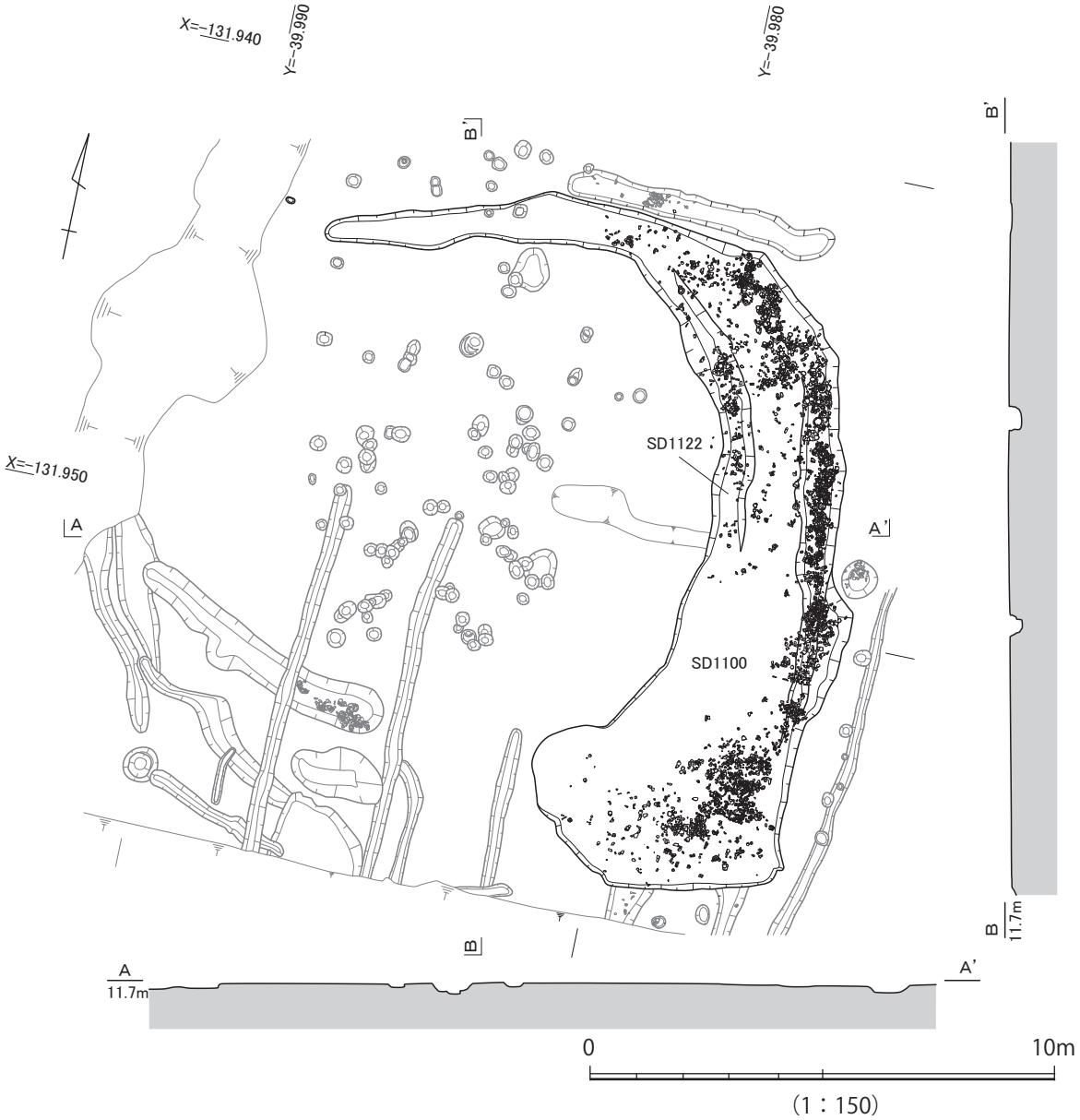
1　10YR4/1 褐灰色粘質シルト極細土器片炭粒多量に含む
2　10YR5/1 褐灰色粘質シルト極細地山ブロック含む炭粒土器片多量に含む

第 72 図　ＳＤ 1100 断面・遺物出土状況図（1）

1　10YR3/1黒褐色粘質シルト極細混じり（炭片、土器片を多量に含む）
2　10YR4/1褐灰色粘質シルト極細混じり（炭片、土器片を多量に含む）

0　2 m
（1：40）

第 73 図　ＳＤ 1100 断面・遺物出土状況図（２）



第 74 図　ＳＤ 1100 断割図

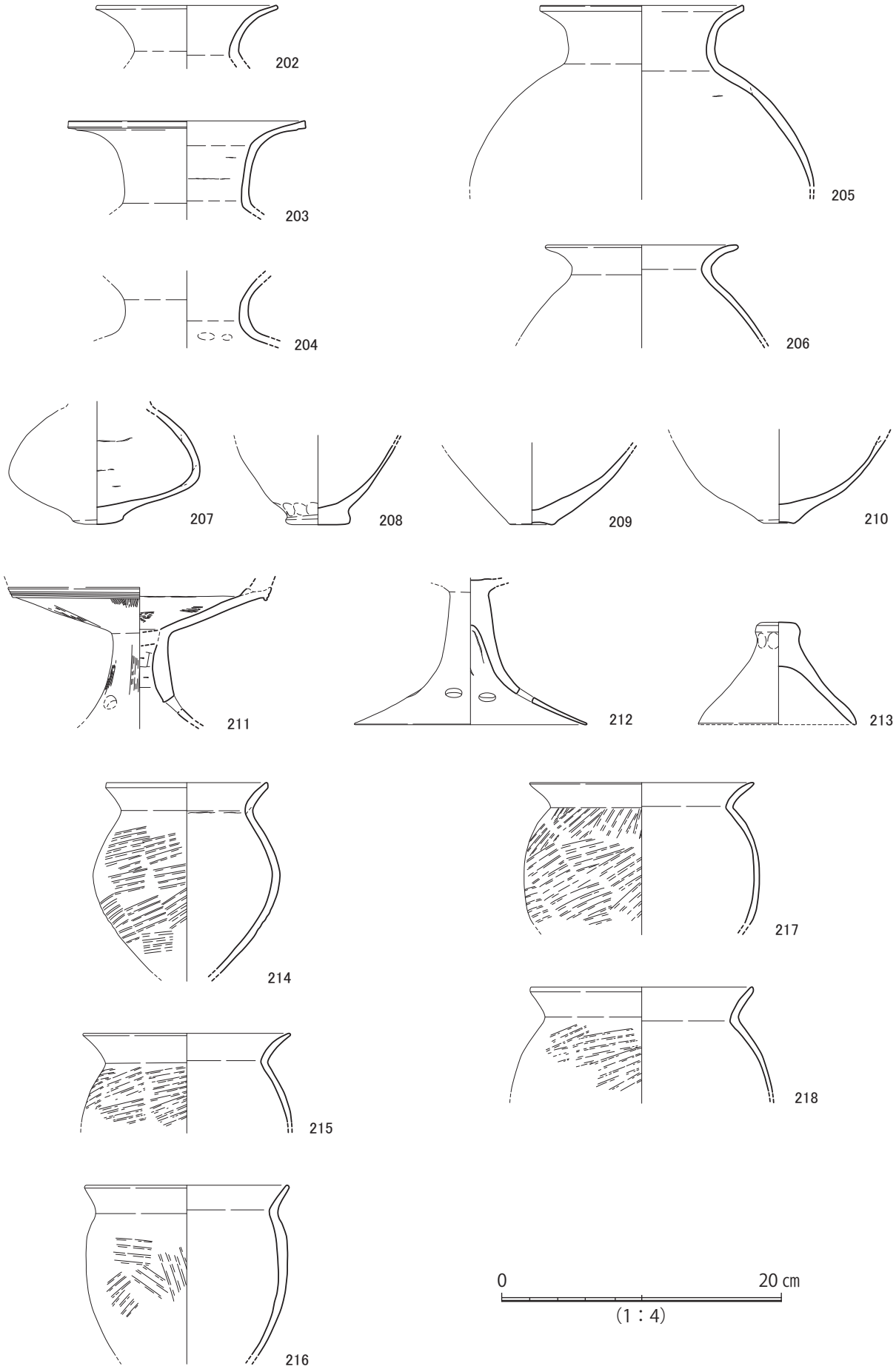
本遺構はその「Ｌ」字状を呈する平面形態から、周墓溝の可能性が考えられるが、完形に近い土器が集中して出土している状況は、周墓溝ではないようにも思われる。

このような土器の出土状況は、弥生時代後期に類例の認められるものである（東大阪市段上遺跡、八尾市弓削遺跡、岸和田市下池田遺跡、天理市和爾・森本遺跡など）。ただし、いずれも数十mにわたって延びる溝状遺構であり、ＳＤ 1100 のような形状を示すものではない。

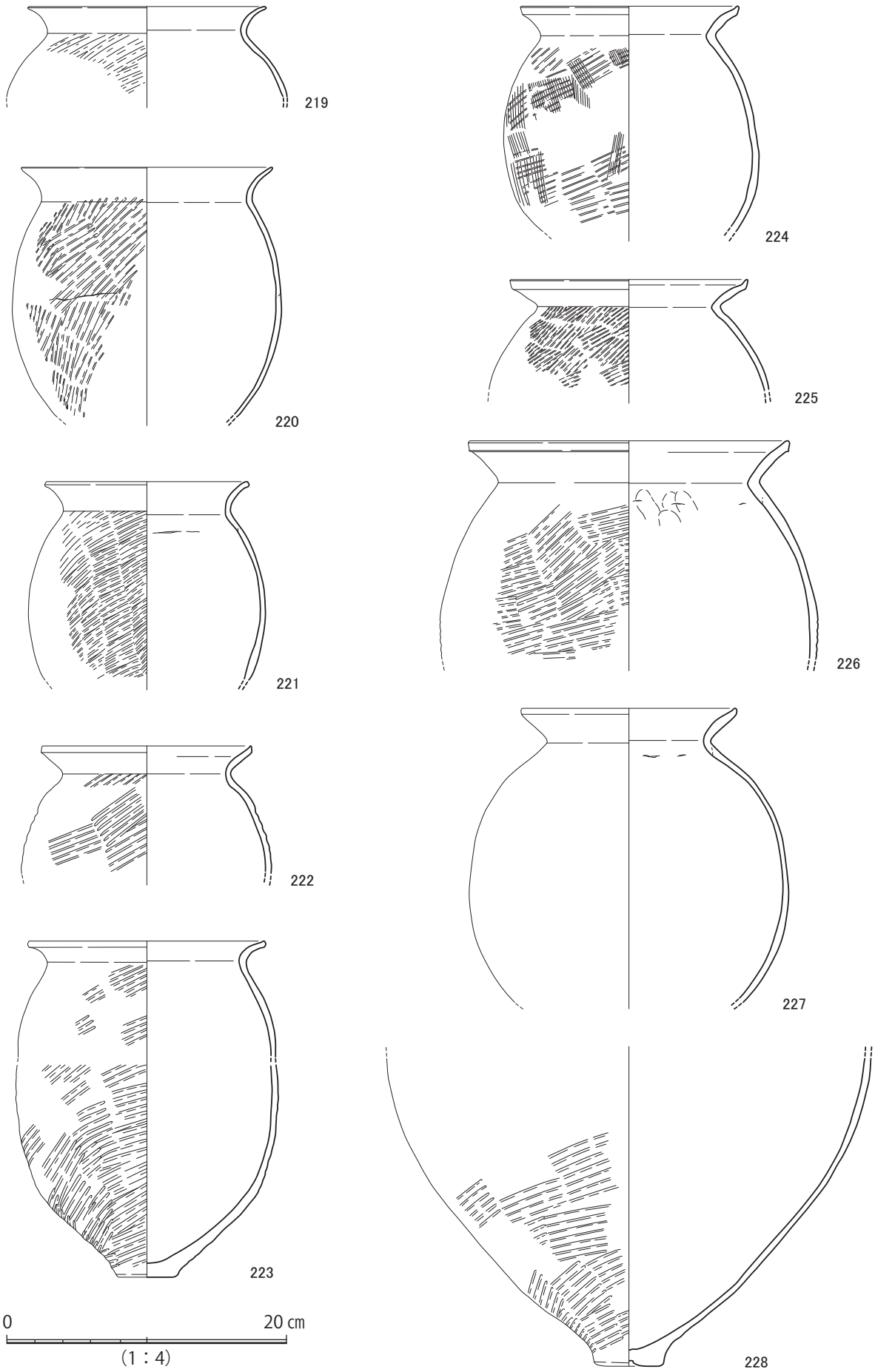
Ｂ区で検出したＳＤ 2005・2006 は西側のＳＤ 2068 も含めて、検出長 31 mを測る。土器が多数出土しており、これらの類例に近いかもしれない。

遺物は 47 点を図示した。**（第 75 ～ 77 図　202 ～ 248）**

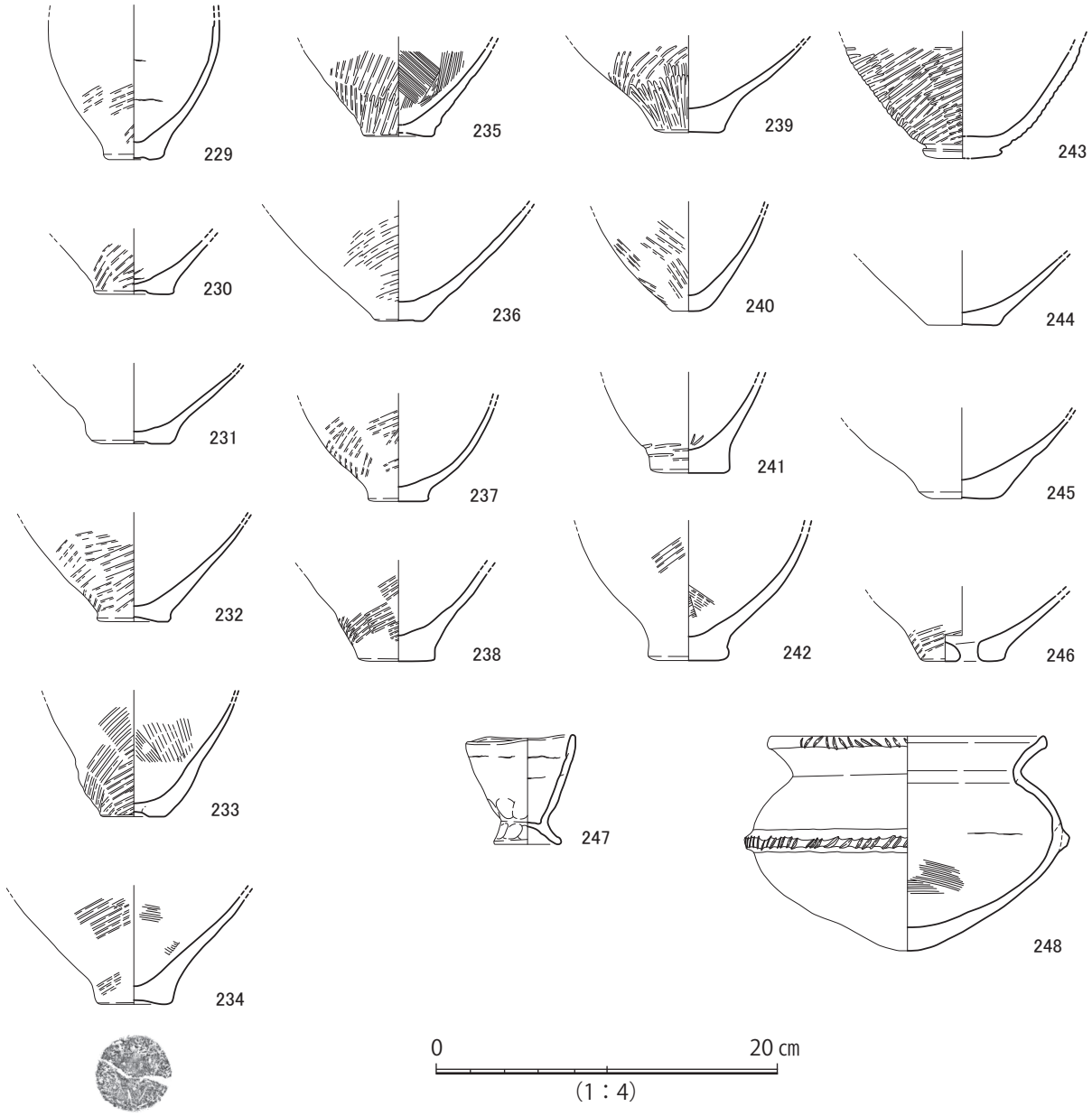
202 ～ 210 は壺である。**202 ～ 206** は広口壺である。**203・205** は口縁端部が面を成し、**202・206** は端部を丸く収める。**204** は口縁端部が欠損する。**207 ～ 210** は底部である。**207** はやや突出した丸底気味の平底、**208** は突出した平底、**209** は底部中央がやや窪む平底、**210** は底径 2.2cm と尖底気味で、やや突出したドーナツ底である。**208** は外面にユビオサエが認められる。底面の粘土



第 75 図　ＳＤ 1100 出土遺物実測図（1）



第 76 図　ＳＤ 1100 出土遺物実測図（2）



第 77 図　ＳＤ 1100 出土遺物実測図（３）

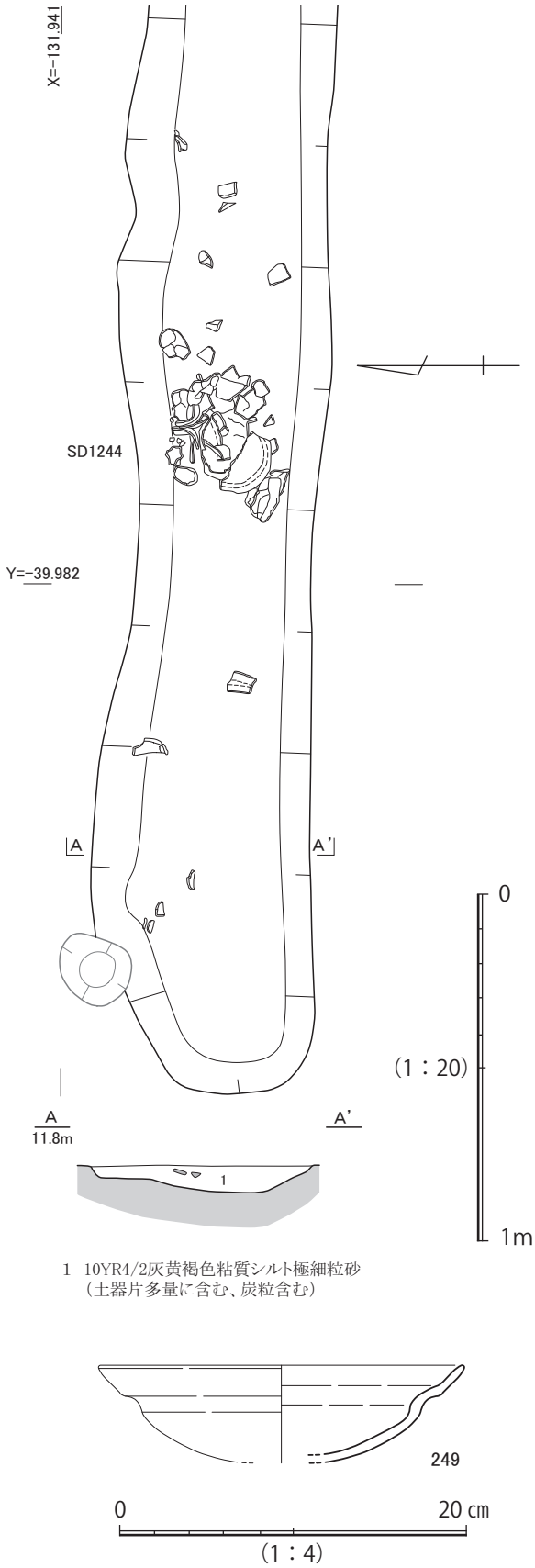
が外側に広がることで、やや斜めになっている。**209・210** は外面に黒斑が認められる。

211・212 は高杯である。**211** は有稜高杯である。口縁部が接合面から剥離する。残存する外面に凹線文２条が認められる。脚柱部と裾部の境に円形透かし孔を３方向に穿つ。円盤充填法によって杯部と接合するが、円盤部分は剥離する。杯部内外面、脚柱部外面にハケ、脚柱部内面にケズリを施す。杯部外面に黒斑が認められる。**212** は裾部が脚柱部から緩やかに広がる。円形透かし孔は２個認められるが、並んで穿たれており、本来の個数は不明である。挿入付加法によって杯部と接合する。

213 は甕蓋である。つまみ部分は円柱状を呈し、全体は笠形を呈する。口縁端部は磨滅のため完存しているかは定かでない。

214 ～ 246 は甕である。**227・231・241・244・245** 以外は外面にタタキを施す。**224** はタタキ後ハケ、**239** は一部にタタキ後ミガキを施す。磨滅のため確認できないものが多いが、**233 ～ 235・241・242** は内面にハケを施す。

口縁端部は丸く収めるもの（**215 ～ 220・223・227**）、面を成すもの（**214・221・222・224**



第 78 図　ＳＤ 1244 遺物出土状況・断面・出土遺物実測図

～ **226**）がある。**216** は体部の張りが弱く、長胴形の体部をもつ。

底部は平底（**223**・**235** ～ **246**）、ドーナツ底（**228** ～ **234**）である。**233** は体部が底部の直上で角度を変えて外傾する。**240** は底径 1.8cm と尖底気味である。**234** は底部外面に木の葉圧痕が認められる。**243** は底部の粘土が潰れて外側に広がり、沈線状になっている。**246** は底部の中央から少しずれた位置に直径 1.0cm の円孔を穿つ。**239**・**241** は外面に黒斑が認められる。

248 は受口状口縁鉢である。胴部最大径を測る位置に突帯を貼り付ける。突帯及び、口縁端面に刺突文、内面にハケを施す。底部は丸底である。底面に黒斑が認められる。近江系の土器であるが、胎土は他のものと差はない。頸部以上の残存が僅かであるため、手焙形土器となる可能性もある。

247 はミニチュア台付土器である。短く「ハ」状にひらく脚台をもち、外傾してのびる体部をもつ。現状の口縁部は割れてはいないが、粘土紐の接合面で剥離している可能性がある。

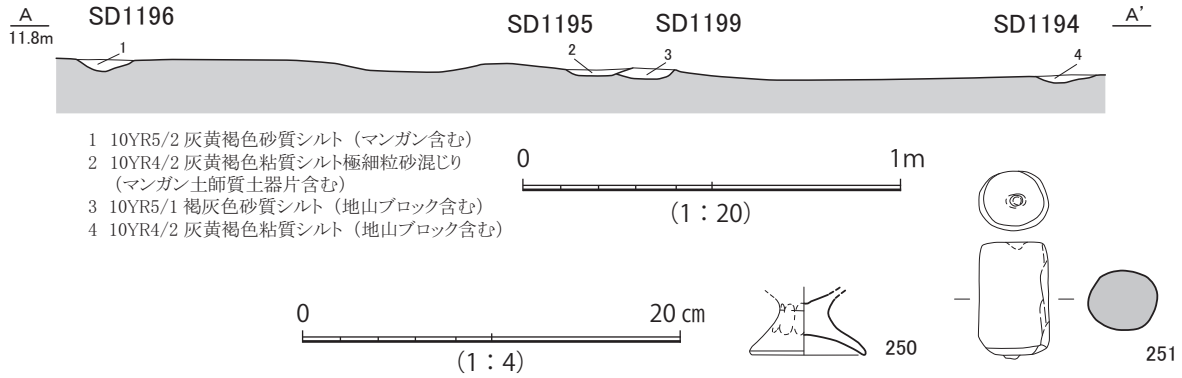
古墳時代前期の遺構

ＳＤ 1244（第 78 図）　グリッド 14 北西部とグリッド 15 北東部にまたがって位置する。ＳＤ 1100 の北側を東西方向に延びる。長さ 5.9 m、幅 0.6 m、深さ 0.12 mを測る。断面形状は皿状を呈する。遺物は土師器が出土した。特に西側でまとまって出土している。

249 は土師器有段口縁鉢である。段をもって外上方に立ち上がる口縁部をもつ。布留式期である。

古代の遺構

ＳＤ 1195（第 65・79 図）　グリッド 15 の南東部、ＳＤ 1100 の西側に位置する。南北方向に延びる溝である。南側は調査区外に延びる。検出長 8.0 m、幅 0.4 m、深さ 0.06 mを測る。断面形状は皿状を呈する。西側のＳＤ 1196・東側のＳＤ 1194 と方向や規模の点で類似し、互いの間隔が溝の芯々距離で 2.55 mと同じであることから、関連を有する溝と考えられる。遺物はＳＤ 1194 からは出土してお



第 79 図　ＳＤ 1195・1196・1199・1194 断面・出土遺物実測図

らず、ＳＤ 1195・1196 からは弥生土器が出土した。

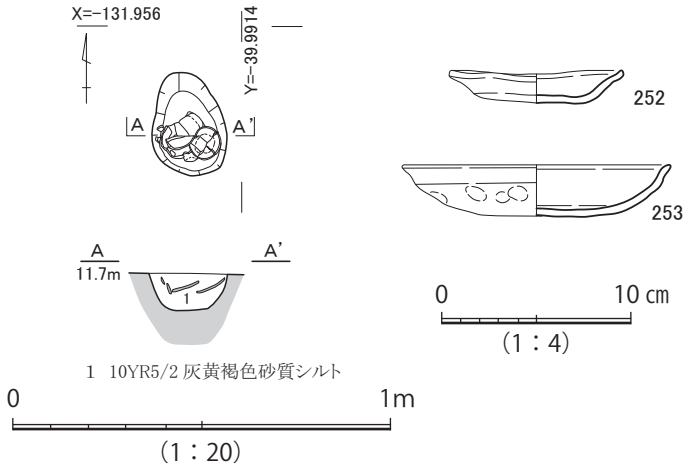
遺物はＳＤ 1195 出土の 1 点を図示した。**250** はミニチュア台付甕の底部から脚台部である。底部と脚台部の境にユビオサエが認められる。

ＳＤ 1199（第 65・79 図）　グリッド 15 の南東部、ＳＤ 1195 の東側に位置する。南北方向に延びる溝である。南側は調査区外に延び、北端はＳＤ 1195 に切られる。検出長 2.5 m、幅 0.3 m、深さ 0.03 mを測る。断面形状は皿状を呈する。遺物は弥生土器が出土した。

251 は土錘である。長さ 6.2cm、直径 3.4 ～ 3.8cm、重量 96 g である。現状では図の上側に直径 0.6cm の鉄分の沈着する円形の窪みが認められる。反対側は鉄分が直径 0.6cm の円形に盛り上がる。このことから、孔は貫通していると思われる。

ＳＰ 1203（第 80 図）　グリッド 15 の南西部、ＳＫ 1202 の西側に位置する。長径 0.27 m、短径 0.20 m、深さ 0.1 mを測る。平面形は長楕円形、断面形状は台形状を呈する。遺物は土師器皿 2 点が重なって出土した。

252・253 は土師器皿である。**252** は口径 9.0cm、器高 1.8cm を測る。口縁部はヨコナデによって外反し、端部は面を成す。**253** は口径 14.0cm、器高 2.7cm を測る。口縁部は外反し、端部は丸く収める。外面にユビオサエが認められる。ともに 10 世紀後半頃のものである。



第 80 図　ＳＰ 1203 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物実測図

（２）小結

以上Ａ区で検出した遺構について述べてきた。

ここでＡ区で検出した遺構・遺物について、時期別にまとめておくこととする。

Ａ区では包含層・撹乱ないし新しい時期の遺構に混じる状態で、弥生時代中期以前の遺物が出土している。旧石器時代の翼状剥片（**15**）、縄文時代草創期の有舌尖頭器（**9**）、後期頃及び晩期の縄文土器（**64・97**）、弥生時代中期の石器（**16・34・35**）、土器（**3・29・36・52・90**）である。

弥生時代中期の遺構も僅かに存在するが、多くの遺構が確認できるのは、弥生時代後期からである。後期の遺構の中でも切り合いが認められ、より細分できると思われるが、出土した土器の状態が良好

ではないこともあり判断しがたい。

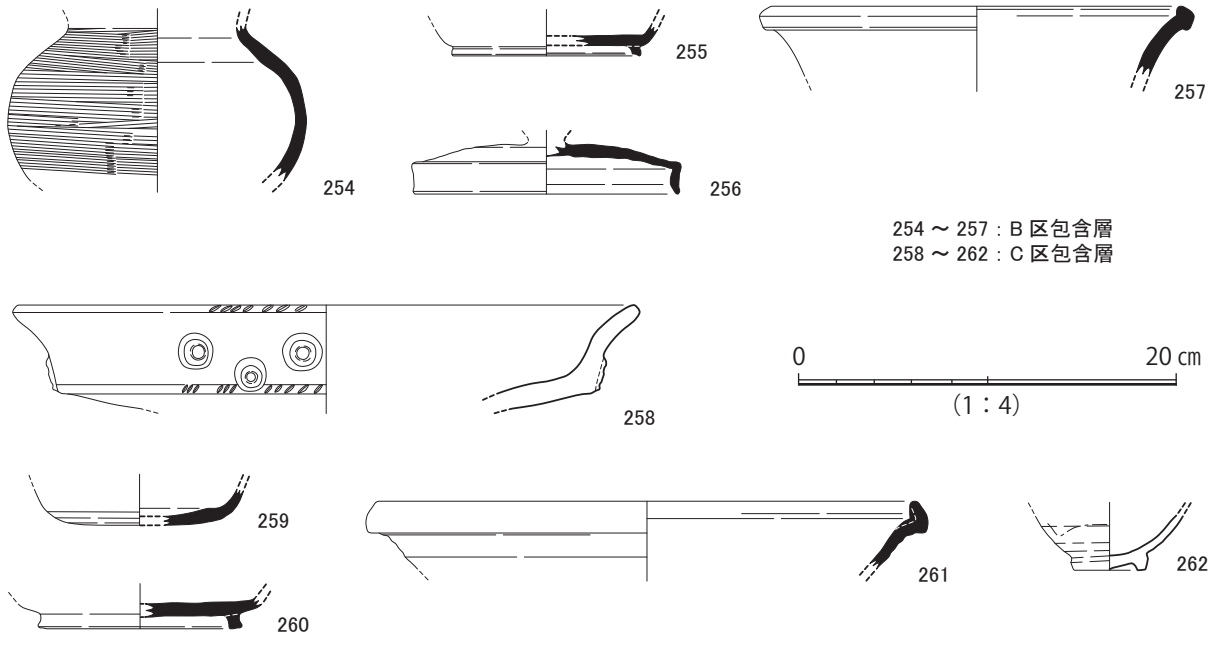
土坑及び溝が多く検出されており、溝には方形（ＳＤ 0555・0262)、「Ｌ」字状（ＳＤ 0331・1100)、弧状（ＳＤ 0096・0194）を呈するものがある。特にＳＤ 1100 からは完形に復元できるものも含めて多量の土器が出土している。また、楕円形を呈するＳＤ 0100 は円形周溝墓、方形を呈するＳＤ 0555 とＳＤ 0262 は方形周溝墓の可能性がそれぞれ考えられる。

古墳時代前期には遺構がほとんど認められないが、グリッド 13 で井戸（ＳＥ 1600)、グリッド８でＳＫ 1470、グリッド 14・15 でＳＤ 1244 が検出されている。散在している状況で、まとまりは認められないが、ＳＥ 1600 は調査区南端での検出であるため、南側の調査区外に該期の遺構が存在する可能性がある。

古墳時代中期も検出した遺構は少なく、ＳＤ 0767 で須恵器３点が据え置いた状態で検出されている程度である。ＳＤ 0767 は後世の削平のため僅かな部分しか検出できていないが、北東方向に延び、ＳＤ 0001 と接続する可能性がある。

古墳時代後期には、削平され、周溝のみが遺存した古墳が検出された（ＳＤ 0800[古墳８]）。また北側で検出したＳＤ 0666 も古墳となる可能性がある。削平された古墳は、隣接するＢ・Ｃ区でも検出されており、その広がりを確認することができたといえよう。

古代以降では、ＳＤ 0300･0157 が東西方向に延び、近代まで続く大字の境界となる可能性がある。他には、土師器皿が出土したＳＰ 1902、灰釉陶器が出土したＳＤ 0622 などがあるが、点在している状態で面的な広がりは確認できない。ただし調査区内を主に南北方向に延びる溝はその多くが耕作に伴う溝と考えられ、ＳＤ 0461 出土遺物の年代から、９世紀頃からは耕地化が進んでいたと考えられる。



第 81 図　Ｂ・Ｃ区第２面検出時出土遺物実測図

第５節　Ｂ・Ｃ区第２面の調査成果

（１）第２遺構面の概要

Ｂ・Ｃ区第２遺構面は、Ⅰ～Ⅶの７ブロックに分割して図示する **(第 85 図)**。更にⅠブロック（Ｂ区北側）、Ⅱブロック（Ｂ区東側）・Ⅲブロック（Ｂ・Ｃ区東側）、Ⅳブロック（Ｂ区中央）・Ⅴブロック（Ｃ区中央）、Ⅵブロック（Ｂ区西側）・Ⅶブロック（Ｃ区西側）の四つにまとめ、主要な遺構について出土遺物とともに記述する。なお、轍跡についてはⅥ・Ⅶブロックの後にまとめ、列状土坑群については第６節において報告する。

４層（基盤層）上面で検出を実施した。第２節においても述べたが、本調査地の基盤層は浸食されやすい土質であるため、検出面でもガリー（雨裂）などの微地形が多数みられた。そのほとんどが中央部を南流する流路（ＳＤ 2070・2071・3085）に注ぐように発生している。人為遺構の多くはその埋土最下層において、形成直後の開口期間に、滞水や風化による崩落等で生成された基盤層の偽礫が堆積しているのが確認される。そのため、遺構底面の認識が難しくなる場合が多かった。

検出面は、最も標高が高いＡ区北西部やＢ区西側で 11.8 ｍ前後、最も低いＣ区中央南端部で 11.15 ｍ前後を測る。Ａ区では平坦を得ているが、Ｂ・Ｃ区では、中央を南流する流路に沿って凹面が分布する。弥生時代から古代にかけての遺構を同一面で検出した。

（２）遺構と出土遺物

１）第２面検出時出土遺物

遺構検出時の包含層などの遺物のうち、以下の９ 点を図示する。

Ｂ区第２面検出時出土遺物（第 81 図　254 ～ 257）

254 ～ 257 は古墳時代中期から古代の須恵器である。

254 は壺である。体部のみの残存で、外面全体にカキメを施す。

255 は杯Ｂである。高台は台形状を呈する。

256 は壺蓋である。口縁部はやや外反しながら垂下する。頂部はやや丸く盛り上がる。中央に存在するつまみは欠損する。上面に自然釉がかかる。

257 は壺である。口縁端部は上下に肥厚し、玉縁状を呈する。

Ｃ区第２面検出時出土遺物（第 81 図　258 ～ 262）

弥生土器（**258**）、須恵器（**259 ～ 261**）、施釉陶器（**262**）である。

258 は二重口縁壺である。口縁部は外反し、端部は面を成す。口縁端部と二重口縁の下端に刻み目を施し、口縁部外面に円形浮文を上下二列に施す。

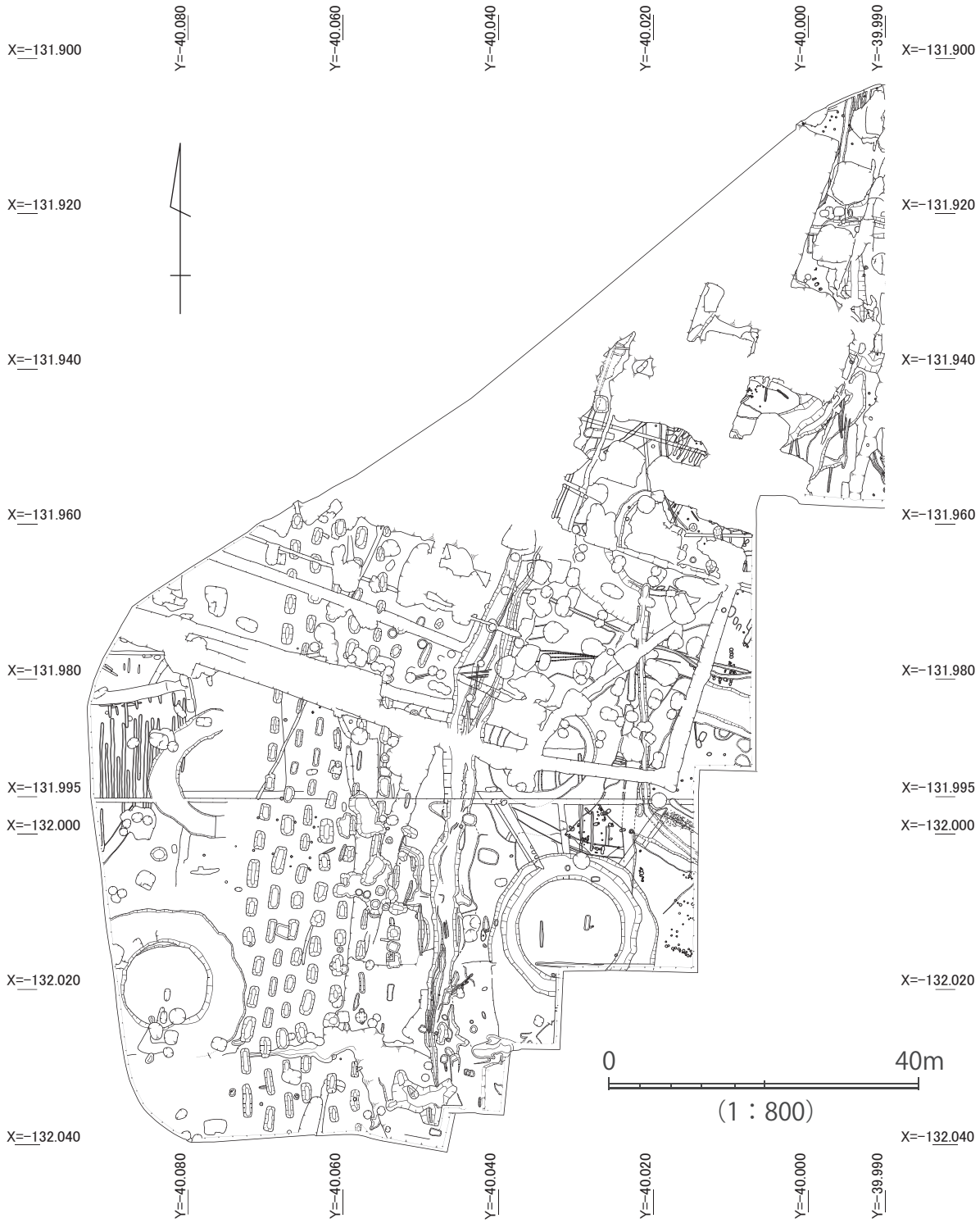
259 は杯Ａである。**260** は杯Ｂである。断面長方形を呈する高台をもつ。

261 は鉢である。口縁端部は上方へ大きく拡張される。口縁部外面に釉をかける。12 世紀中頃～後半の東播系鉢である。

262 は碗である。断面台形状を呈する削り出し高台をもつ。外面および内面に灰色釉をかける。

２）Ⅰブロック（Ｂ区北側）の遺構・出土遺物（第 86 ～ 90 図）

Ａ区から続く遺構密度の高い区画である。基盤層は、砂が基質となる極めて締まりの悪い放棄流路と考えられる範囲がＡ区との境界に沿って続く。そのため、当該区画では降雨などの影響で遺構の形

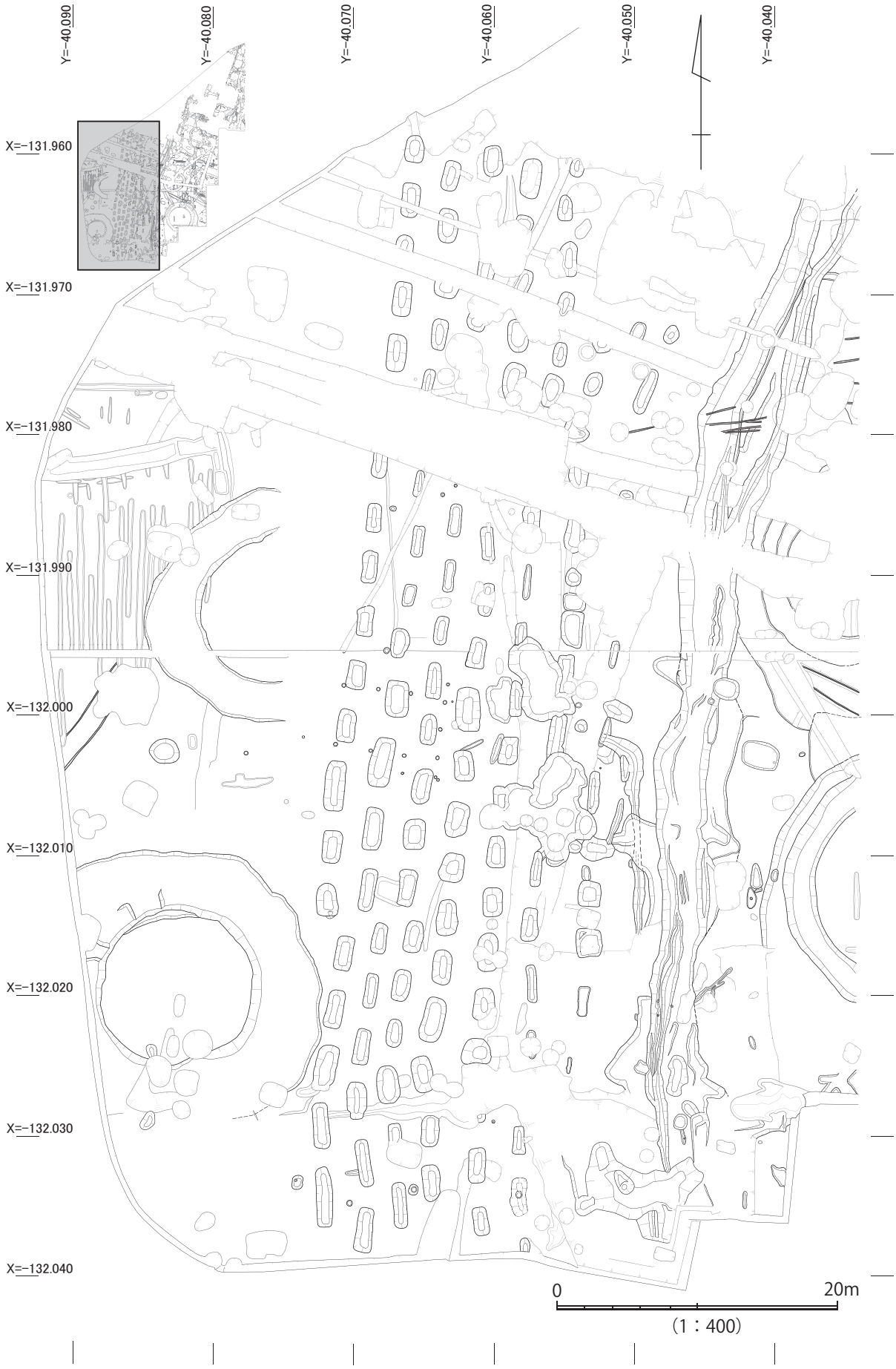


第 82 図　B・C 区第 2 面平面図

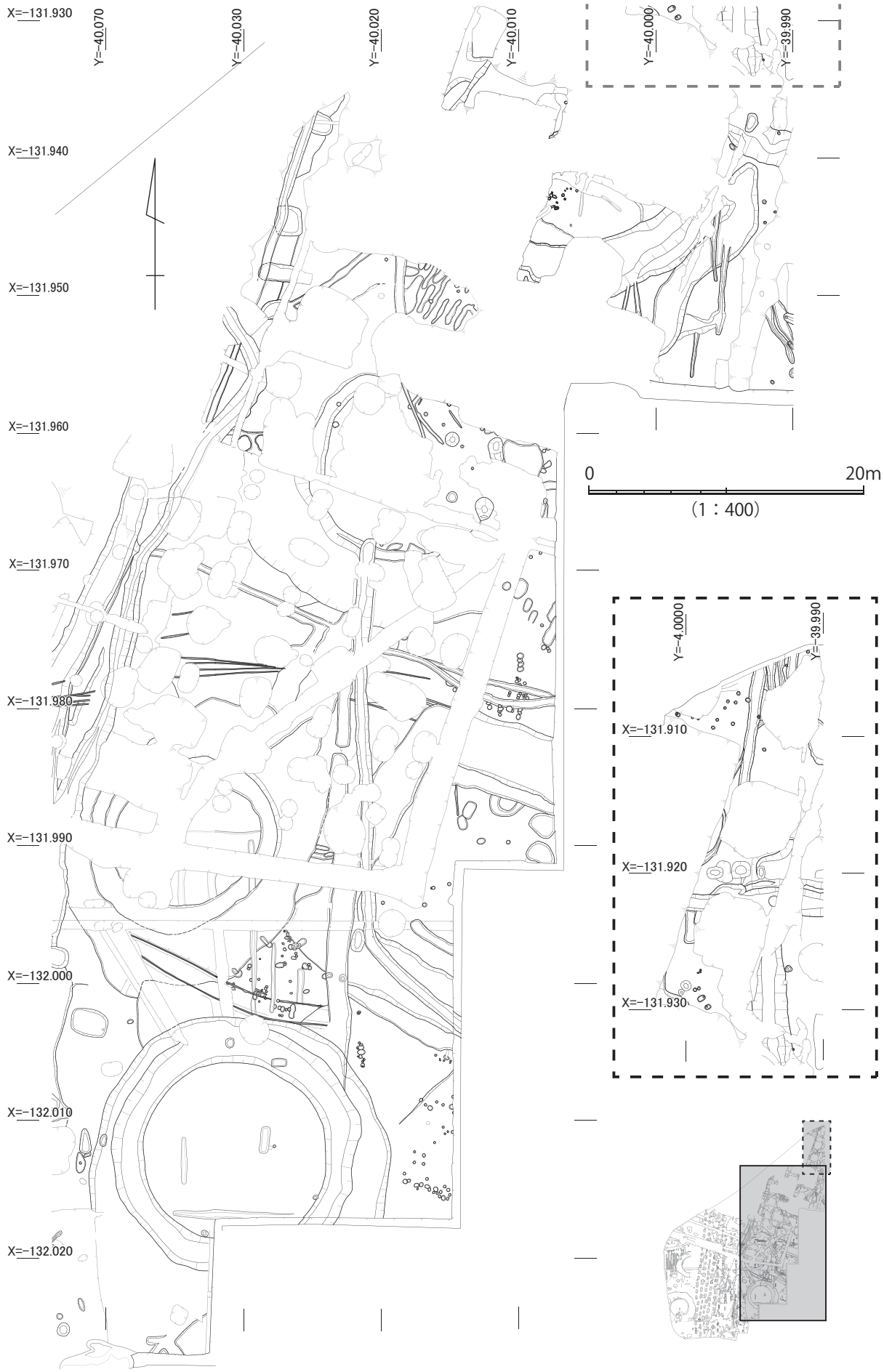
状が崩れやすく、精査は困難であった。検出遺構は、弥生時代後期後半の溝・井戸・ピット、古墳時代後期の古墳などである。なお、当ブロックの遺構のうち 1,000 番台の遺構番号を付与したものについては、第 4 節において記述している。

弥生時代後期の遺構

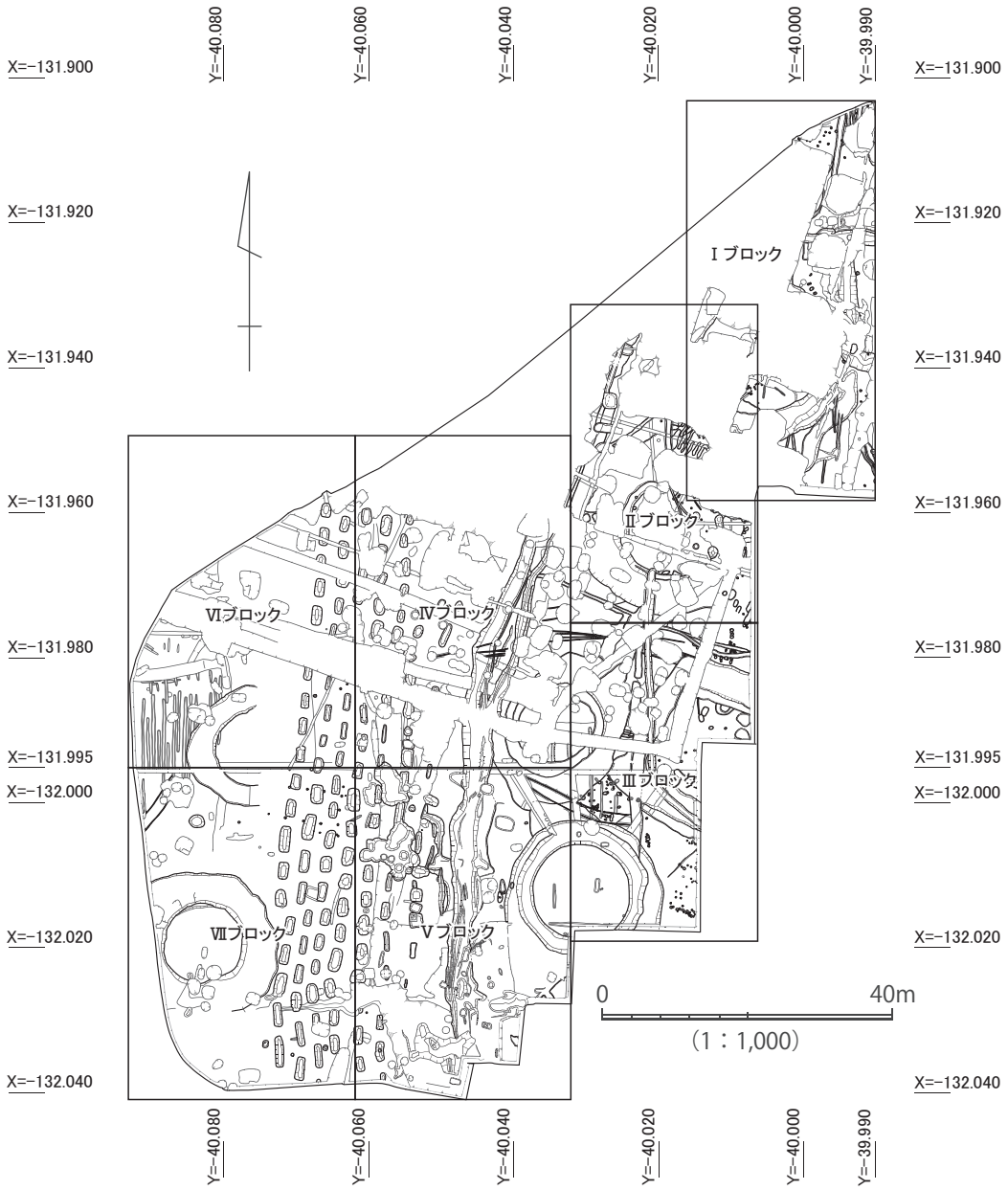
ＳＤ 2122（第 87 図） 15 グリッドに位置する。北東－南西方向に延びる溝で、古墳 7 周溝に切られる。撹乱の影響により全容は不明であるが、検出長約 15 m、幅 2 ～ 3 m、深さ 0.1 ～ 1.15 mを測る。断面形状は浅い「U」字状を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は灰黄褐色細礫混じり砂であ



第 83 図　B・C 区第 2 面平面図（西半部）



第 84 図　B・C区第２面平面図（東半部）



第 85 図　B・C区第２面ブロック割図

る。基盤層も同様の層相であったため、外形は判然としなかった。遺物は弥生時代後期後半の土器が出土した。

遺物は２点を図示した。ともに弥生土器である。**（第 87 図　263・264）**

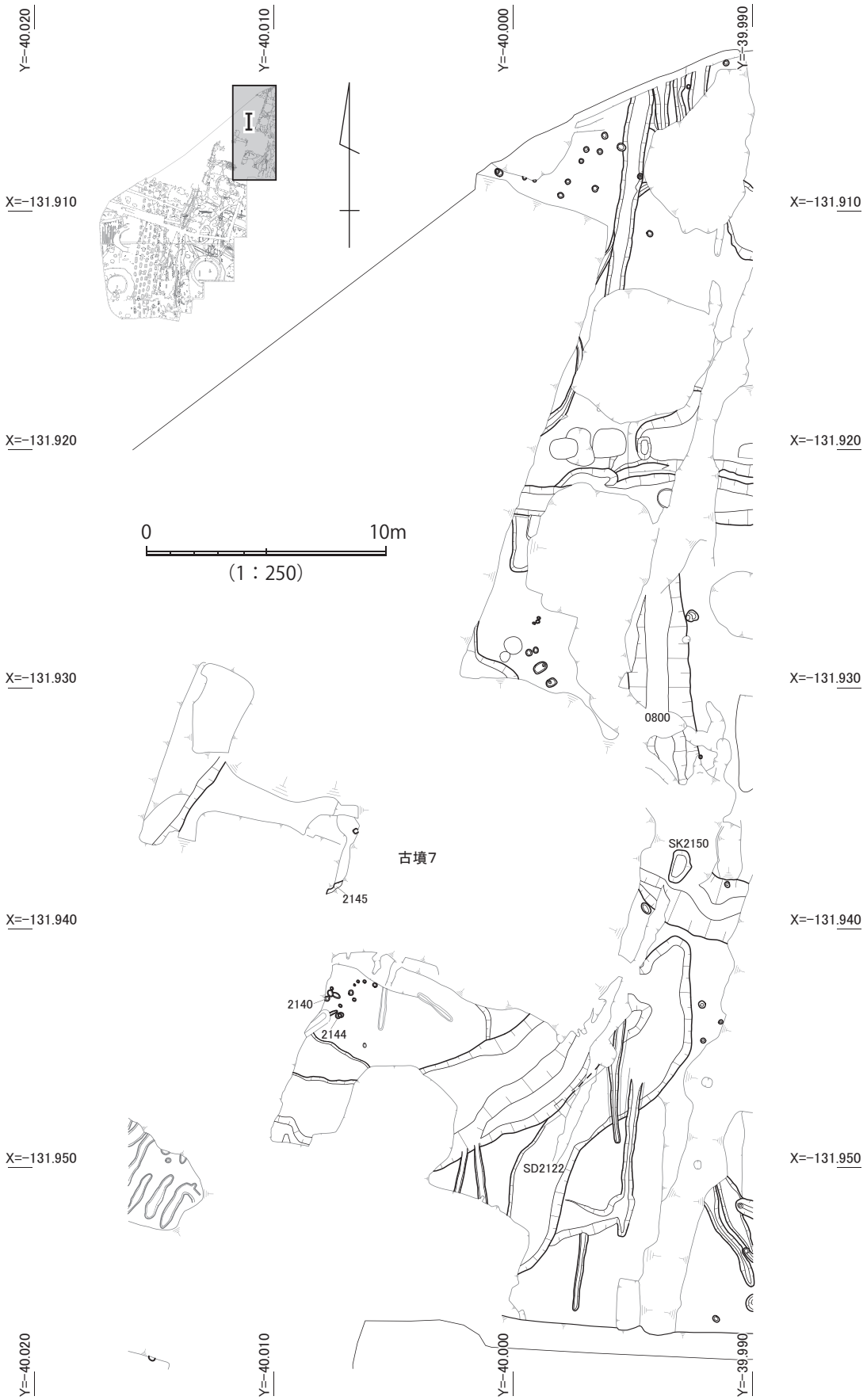
263 は甕である。口縁端部は外反し、端部は上方に摘み上げ、受け口状を呈する。

264 は高杯である。中空の脚柱部である。円盤充填法で杯部と接合しているようである。脚柱部内面にシボリメが認められる。

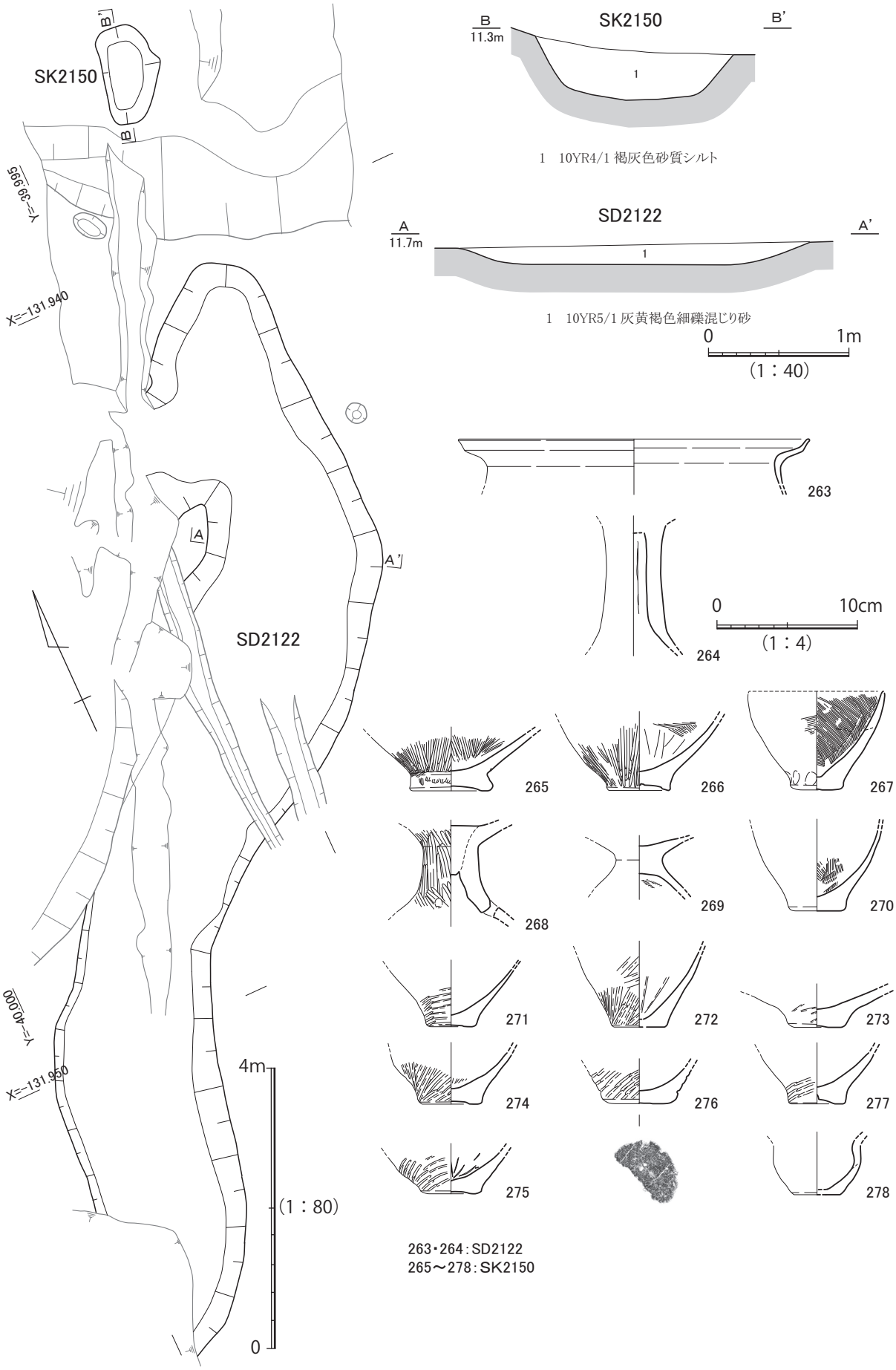
ＳＫ 2150（第 87 図）　10 グリッドに位置する。ＳＤ 0800（古墳８）に切られており、底部のみの検出である。井戸の可能性が考えられる。基盤層が脆く、埋土半裁直後の降雨によって冠水・崩落してしまい、堆積状況等を確認することはできなかった。検出面での規模は、長径 1.4 m、短径 0.85 m、ＳＤ 0800 の肩部からの深さは約 0.8 mを測る。遺物は弥生時代後期後半の土器が多く出土した。

遺物は 14 点を図示した。**（第 87 図　265 ～ 278）**いずれも弥生土器である。

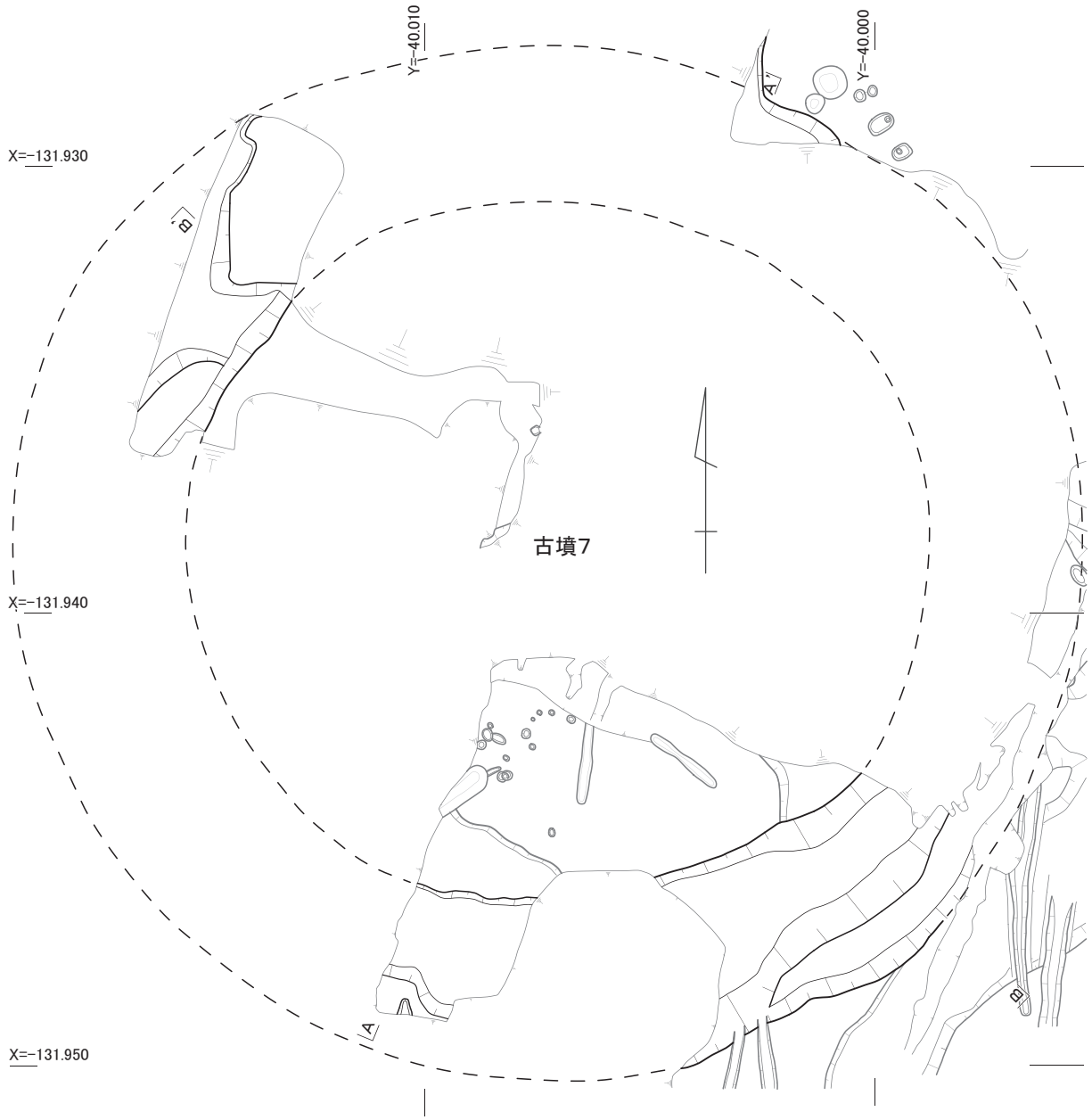
265・266 は壺である。**265** は高台状に突出したドーナツ底、**266** はドーナツ底である。**265** は



第 86 図　Ｉブロック（Ｂ区北側）平面図



第 87 図　ＳＤ 2122・ＳＫ 2150 平面・断面・出土遺物実測図



1　10YR3/1 黒褐色細礫・極粗粒砂混じり砂質シルト（炭化物含む）
2　10YR4/1 褐灰色細礫・極粗粒砂混じり砂質シルト
3　おもに基盤層の偽礫からなり、上位から 2 と 10YR2/1 黒色砂質シルトが混入する

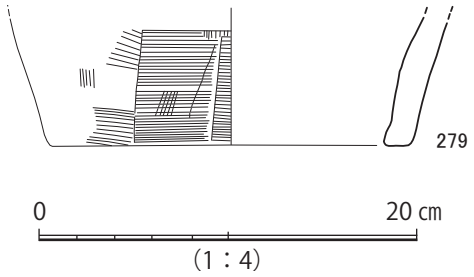
1　10YR3/1 黒褐色細礫・極粗粒砂混じり砂質シルト
2　10YR4/1 褐灰色極粗粒砂混じり砂質シルト
3　おもに基盤層の偽礫からなり、上位から 2 が混入する

1　10YR3/1 黒褐色細礫・極粗粒砂混じりシルト質砂（炭化物含む）
2　10YR4/1 褐灰色砂質シルト
3　基盤層の偽礫が混じる 10YR4/1 褐灰色砂質シルト（炭化物含む）
4　10YR5/1 褐灰色砂質シルト

1　10YR3/1 黒褐色砂質シルト（炭化物含む）
2　10YR4/1 褐灰色～2.5Y4/1 黄灰色砂混じりシルト（炭化物含む）
3　おもに基盤層の偽礫からなり上位から 2 が混入する

0　5m
（1：150）

第 88 図　古墳 7 平面・断面・断割図



第 89 図　古墳７出土遺物実測図

体部外面にハケ後ミガキ、内面にミガキを施す。**266** は体部外面にタタキ後ミガキ、体部内面にハケを施す。

267 は鉢である。体部が上端でやや内彎する。体部内外面ともにハケを施す。平底である。体部外面に黒斑が認められる。

268・269 は高杯である。**268** は中空の脚柱部と緩やかに開く裾部である。円盤充填法によって杯部と接合する。裾部との境界に円形透かし孔を３方向に穿つ。杯部・脚柱部外面にミガキを施す。外面及び杯部内面に煤が付着する。**269** は杯部から大きく開く裾部をもつ。

270 ～ 277 は甕である。**270 ～ 273** は平底、**274 ～ 276** はドーナツ底、**277** は突出したドーナツ底である。**274・275・277** は体部外面にタタキ、体部内面にハケ、**271** は体部外面にタタキ、**270･272** は体部内外面にハケ、**273** は体部外面にタタキ後ナデを施す。**272** は外面に煤が付着する。**275** は外面に黒斑、**276** は底部外面に木の葉圧痕が認められる。

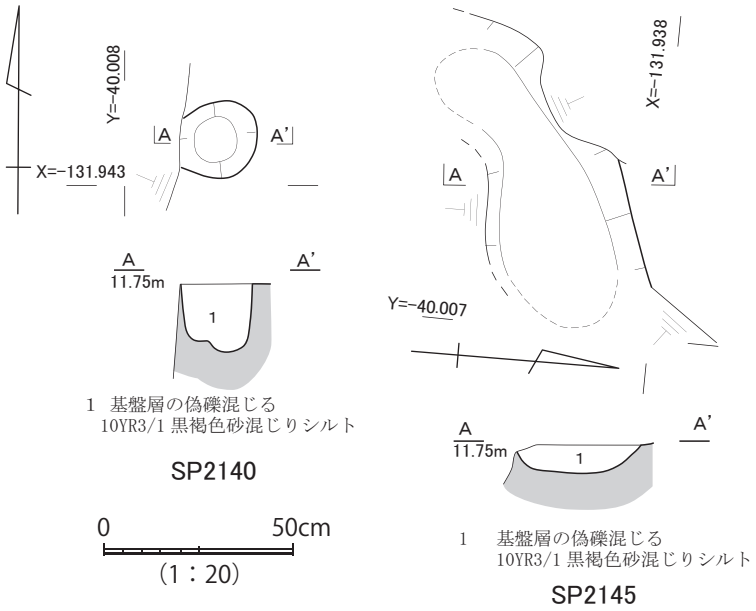
278 はミニチュア土器壺である。底部は平底である。体部は内彎して立ち上がる。

ＳＰ 2140（第 90 図）　16 グリッド、古墳７の墳丘部分に位置する。直径 0.19m、深さ 0.18m を測る。埋土は基盤層の偽礫が混じる黒褐色砂混じりシルトである。遺物は弥生土器とみられる細片がわずかに出土した。

ＳＰ 2145（第 90 図）　11 グリッド、古墳７の墳丘部分に位置する。北側肩部が検出されたのみで規模は不明である。長径約 0.65m、深さ 0.15m を測る。埋土は基盤層の偽礫混じる黒褐色砂混じりシルトである。遺物は弥生時代後期後半の土器片が出土した。

古墳時代後期の遺構

古墳７（第 88・89 図）　10・11・15・16 グリッドに位置する。大部分を撹乱によって破壊されており、確認できたのは南側から南東側にかけてと北側の一部のみである。墳形は直径約 18 mの円形と推測される。周溝の規模は、弧状に残る南側から南東側で幅約 4 m、深さ約 0.45 mを測る。その底面は、外側に浅く緩い傾斜の一段を有する。他の側の周溝は、北側で幅 1.3 m以上、深さ約 0.3 m、北西側は幅 2.2 m以上、深さ約 0.5 mを測る。底面は概ね平坦であるが、周溝北西部では基底部が少し掘り込まれている。墳丘部分は基盤層の削り出し部分を残して削平されている。その検出面は基盤層中の暗色帯が表れた、暗褐色を呈する締まった粘質シルトである。古墳築造以前のピットなどの遺構が存在するが、墳丘盛土や埋葬施設は確認できなかった。周堤部も基盤層まで削平されてお



第 90 図　ＳＰ 2140・2145 平面・断面図

り、墓道等の外部構造は確認できなかった。周溝埋土は概ね３層に分けられる。上層は包含層に近似した黒褐色砂質シルト、中層は褐灰色砂質シルトである。下層は主に古墳築造直後に周溝内で形成されたとみられる基盤層の偽礫からなる。堆積が休止して発達する強く土壌化した堆積が認められないため、近傍の土壌化層の発達とともに比較的短期間で埋没したものと考えられる。周溝埋土上層より、埴輪の小片などが出土した。周溝埋没前の古墳築造直後に転落したとみられるものはなかった。

279 は円筒埴輪基底部である。外面にタテハケ後Ｂ種ヨコハケを施す。内面は摩滅する。

３）Ⅱブロック（Ｂ区東側）・Ⅲブロック（Ｂ・Ｃ区東側）の遺構・出土遺物（第 91 ～ 114 図）

撹乱される範囲は大きいが、遺構密度の高い区画である。検出遺構は、弥生時代後期後半の溝・井戸・土坑・ピット、古墳時代の溝・古墳などである。

弥生時代後期の遺構

ＳＤ 2005（第 93 ～ 95 図） 20 グリッド、古墳２の北側に位置する。東端は調査区外に延びる。ＳＤ 2006 を切る。西南西―東南東に緩く蛇行しながら延びる。検出長約 13 m、幅 0.4 ～ 0.7 m、深さ 0.2 ～ 0.24 mを測る。底面は両端で約 0.1 mの比高差があり、西へ向かって下がる。西端は撹乱に切られるが、その延長上に同規模のＳＤ 2068 が存在し、ＳＤ 2005 ないし後述するＳＤ 2006 と連続する可能性が高い。埋土は黄灰色砂質シルトであるが、下層は主に基盤層の偽礫からなる。遺物は溝の東側では希薄であり、西側に集中する。埋土上層より弥生後期後半の土器が、廃棄されたような状態で多量に出土した。

遺物は 25 点を図示した。いずれも弥生土器である。（**第 95 図　280 ～ 304**）

280 ～ 285 は壺である。**280・281** は広口壺である。ともに口縁部は外反する。**280** は端部が面を成す。**282 ～ 284** はドーナツ底、**281** は突出したドーナツ底である。**282** は体部がほぼ水平に延びる。内面にハケを施す。

280 ～ 302 は甕である。**286 ～ 289** は口縁部が外反し、端部は丸く収める。**290 ～ 295・302** は平底、**296 ～ 301** はドーナツ底である。**289・291・293・294・297・300 ～ 302** は体部外面にタタキを施す。**297・302** は外面に黒斑が認められる。

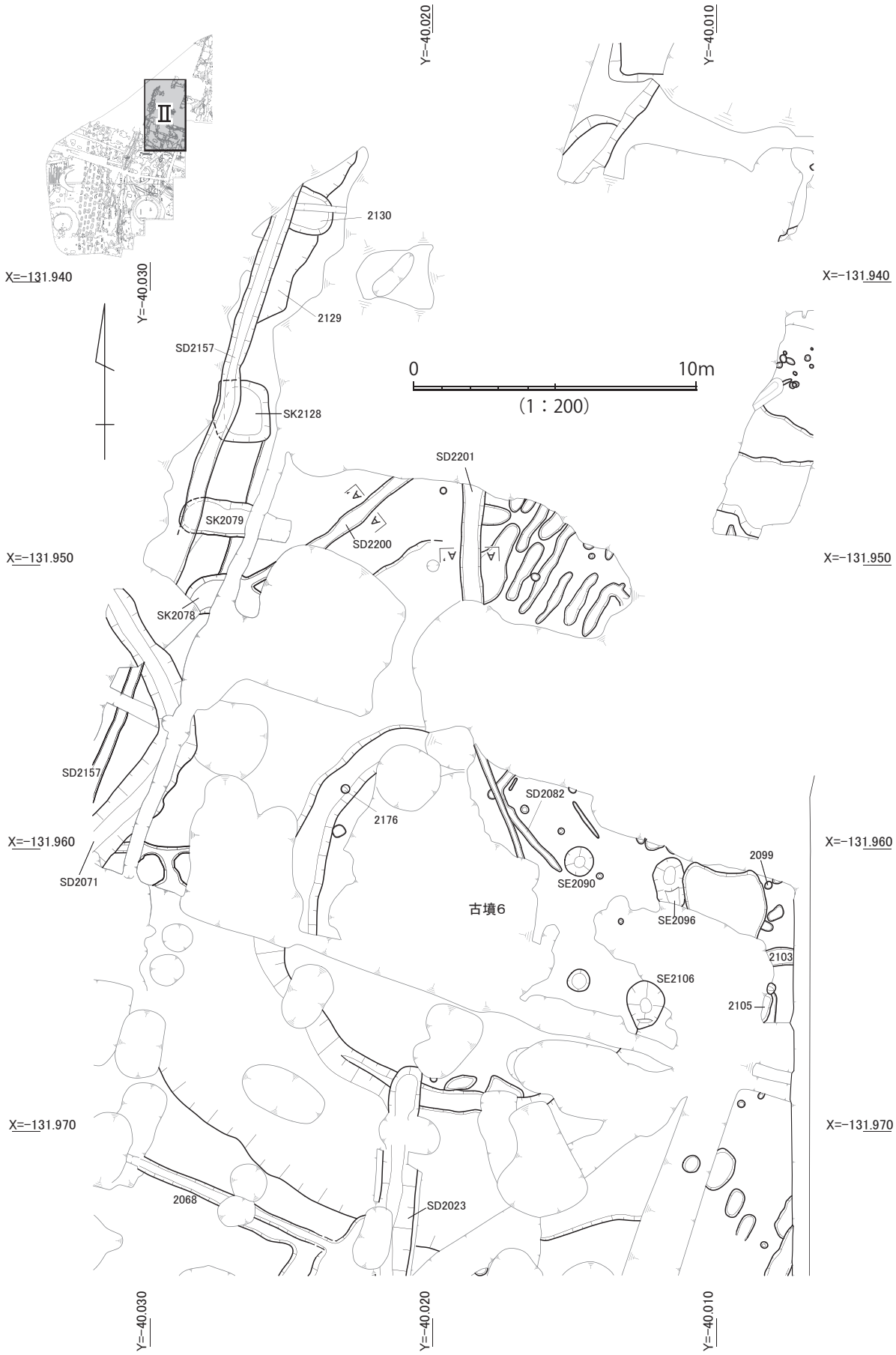
303・304 は高杯である。**303** は中空の脚柱部である。外面に黒斑が認められる。**304** は短い中実の脚柱部である。裾部は外側に開く。円形透かし孔を３方向に穿つ。接合法によって杯部と接合する。

ＳＤ 2006（第 93・94・96 図） 20 グリッド、古墳２の北側に位置する。ＳＤ 2005 に両端を切られる。西南西―東南東に延びる直線的な溝である。検出長約 10 m、幅 0.38 ～ 0.5 m、深さ約 0.2 mを測り、底面の比高差はほとんど認められない。埋土上層は褐灰色砂質シルトなどから構成されるが、下層は主に基盤層の偽礫からなる。埋土上層より弥生時代後期後半の土器が、廃棄されたような状態で多量に出土した。

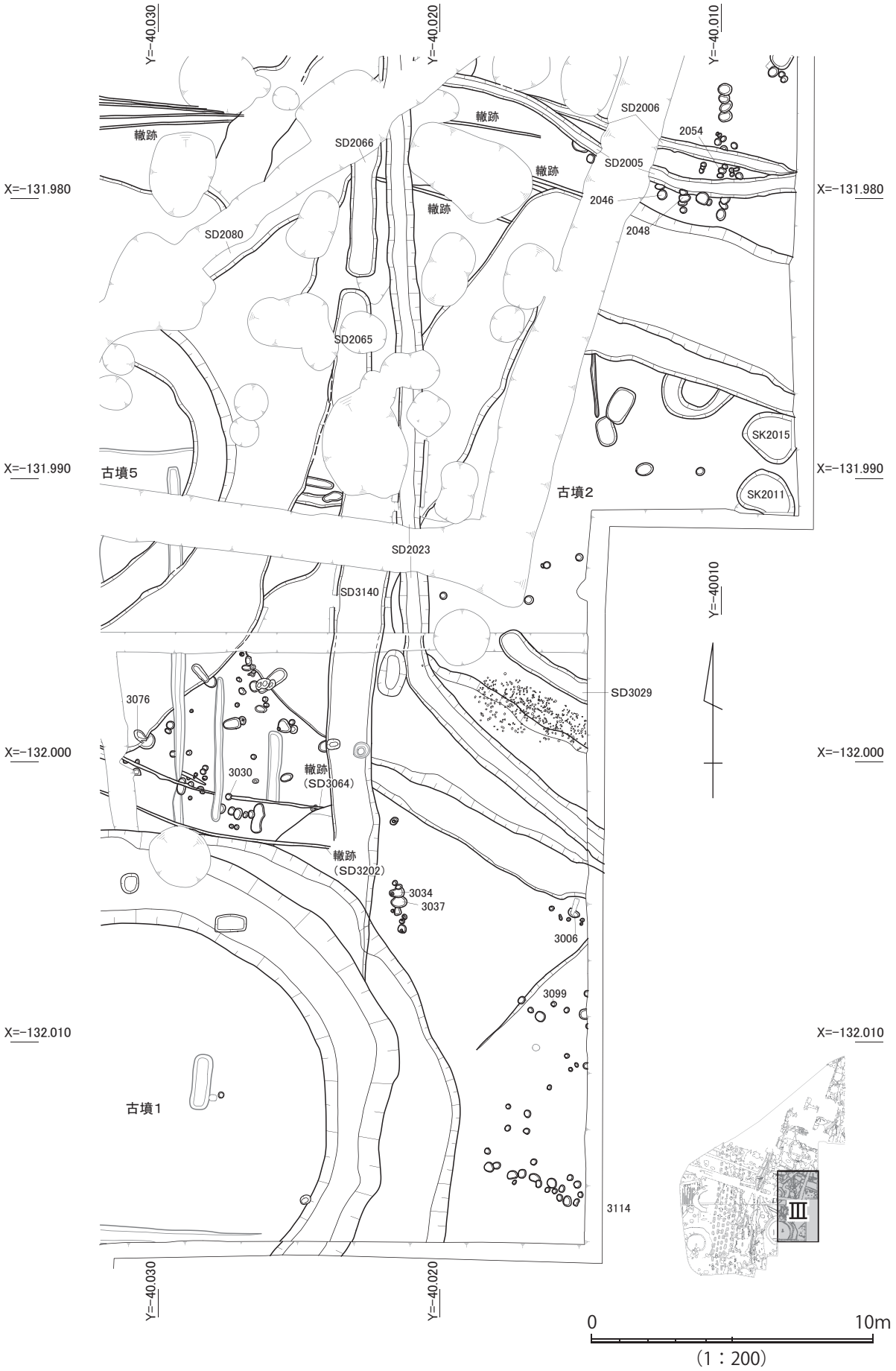
遺物は 32 点を図示した。いずれも弥生土器である。（**第 96 図　305 ～ 337**）

305 ～ 309 は壺である。**305** は広口壺である。頸部は肩部から緩やかに直立し、口縁部は短く外反する。口縁端部は丸く収める。**306** は口縁部が外反し、端部は面を成す。**307** は口縁部が欠損する。**308・309** は平底の底部である。**308** は体部が緩やかに内彎して立ち上がる。底部外面に格子状の圧痕が認められる。

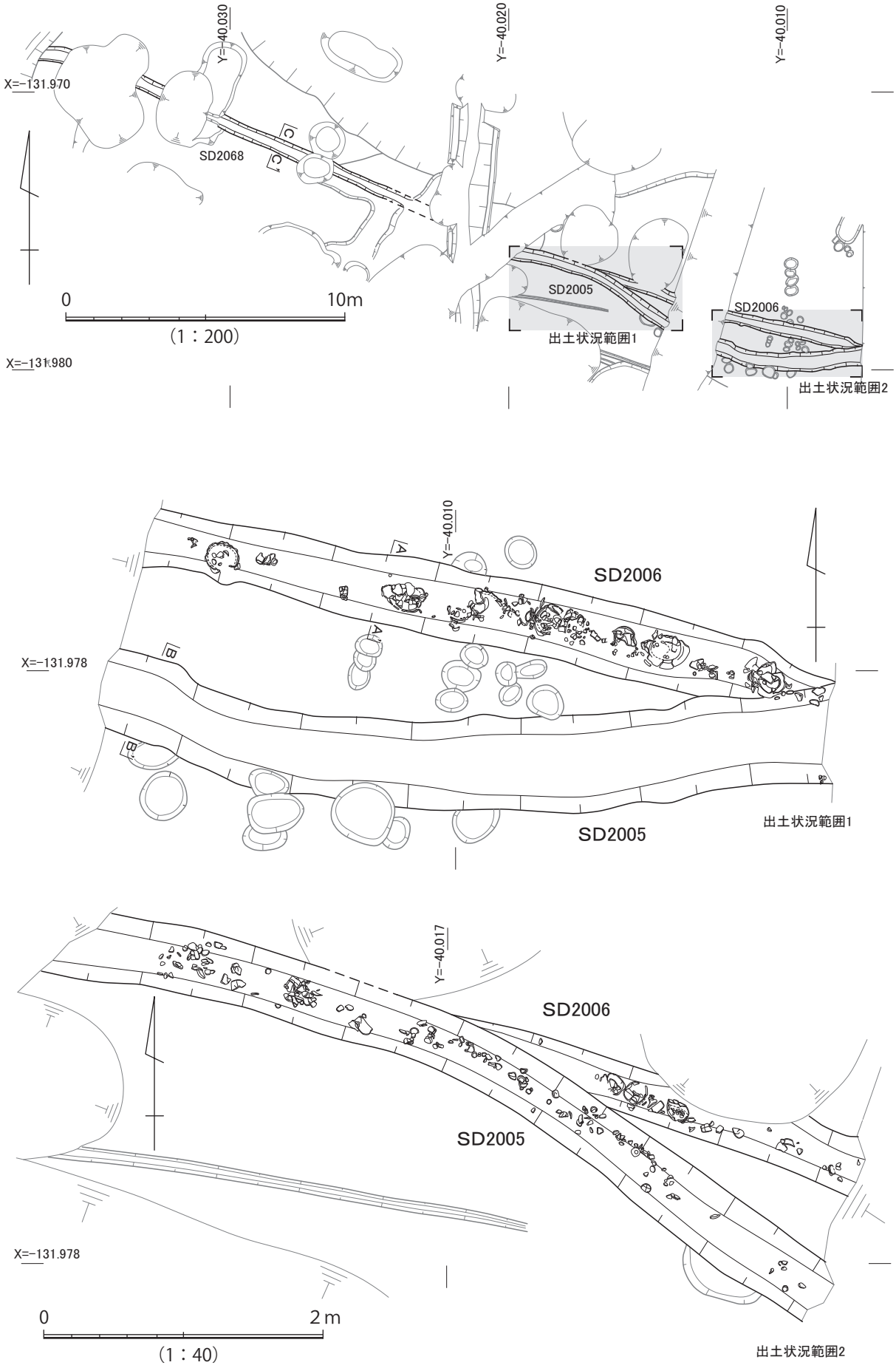
310 は鉢ないし甕の底部である。底部はドーナツ底である。**311 ～ 314** は壺ないし甕の底部である。



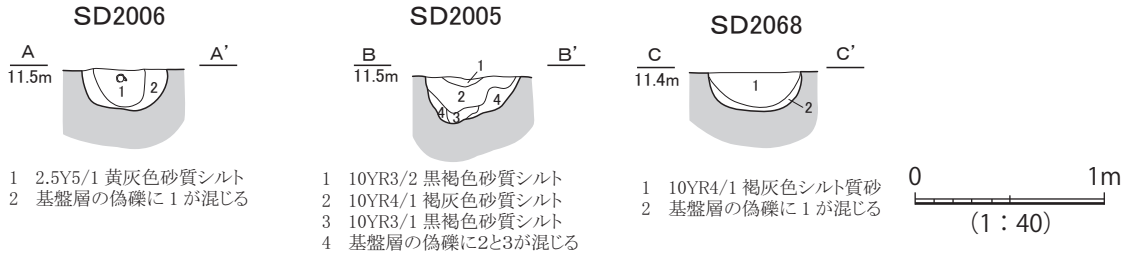
第 91 図　Ⅱブロック（B区東側）平面図



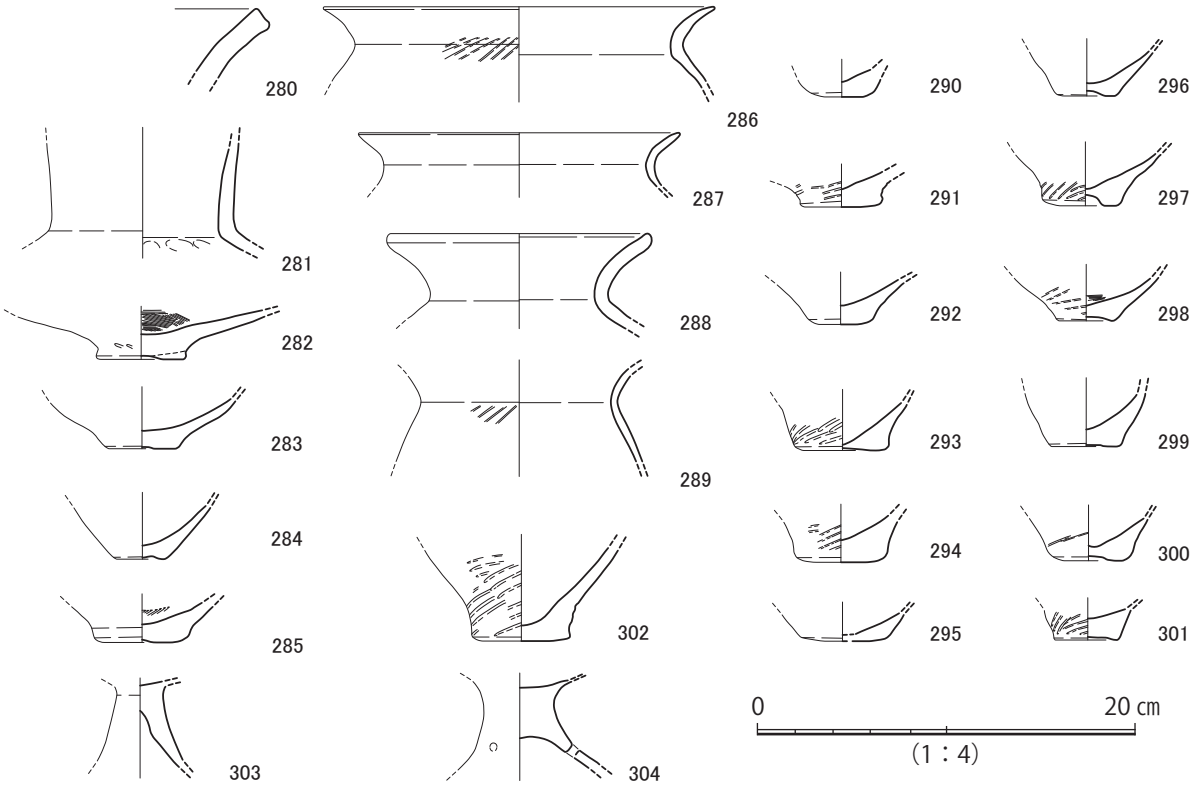
第 92 図　Ⅲブロック（B・C区東側）平面図



第 93 図　ＳＤ 2005・2006・2068 平面・遺物出土状況図



第 94 図　ＳＤ 2005・2006・2068 断面図



第 95 図　ＳＤ 2005 出土遺物実測図

311・313 は平底、**312** は突出した平底、**314** はドーナツ底である。

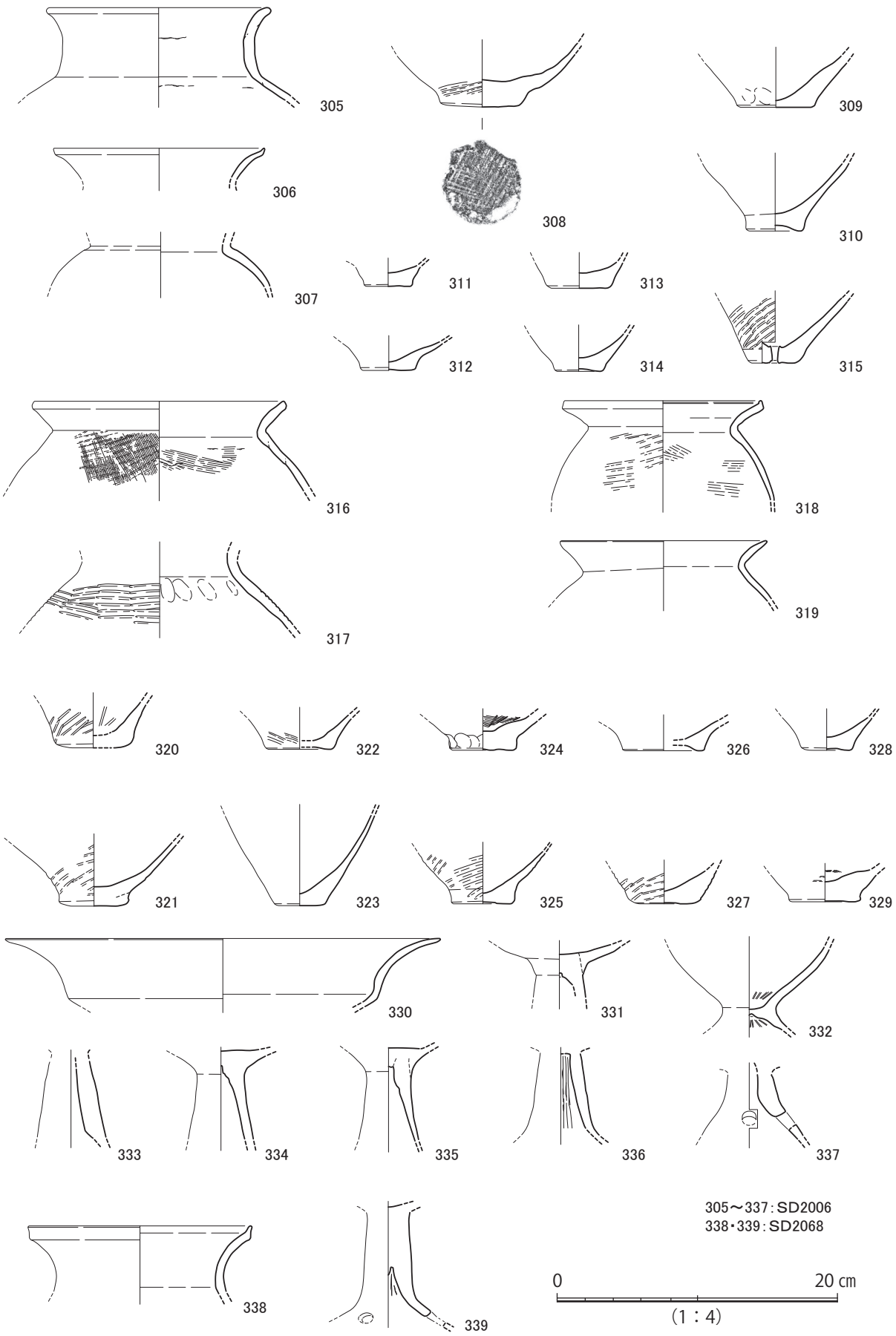
315 は有孔鉢である。底部は平底で、中央に直径 0.5cm の円孔を穿つ。体部外面にタタキを施す。

316 ～ 329 は甕である。**316** は口縁部が短く外反し、端部は丸く収める。体部外面にタタキ後ハケを施す。**317** は口縁部が欠損する。体部外面にタタキを施す。**318** は口縁部が外反し、端部は面を成す。体部外面にタタキ、体部内面にハケを施す。**319** は口縁部が外反し、端部は丸く収める。

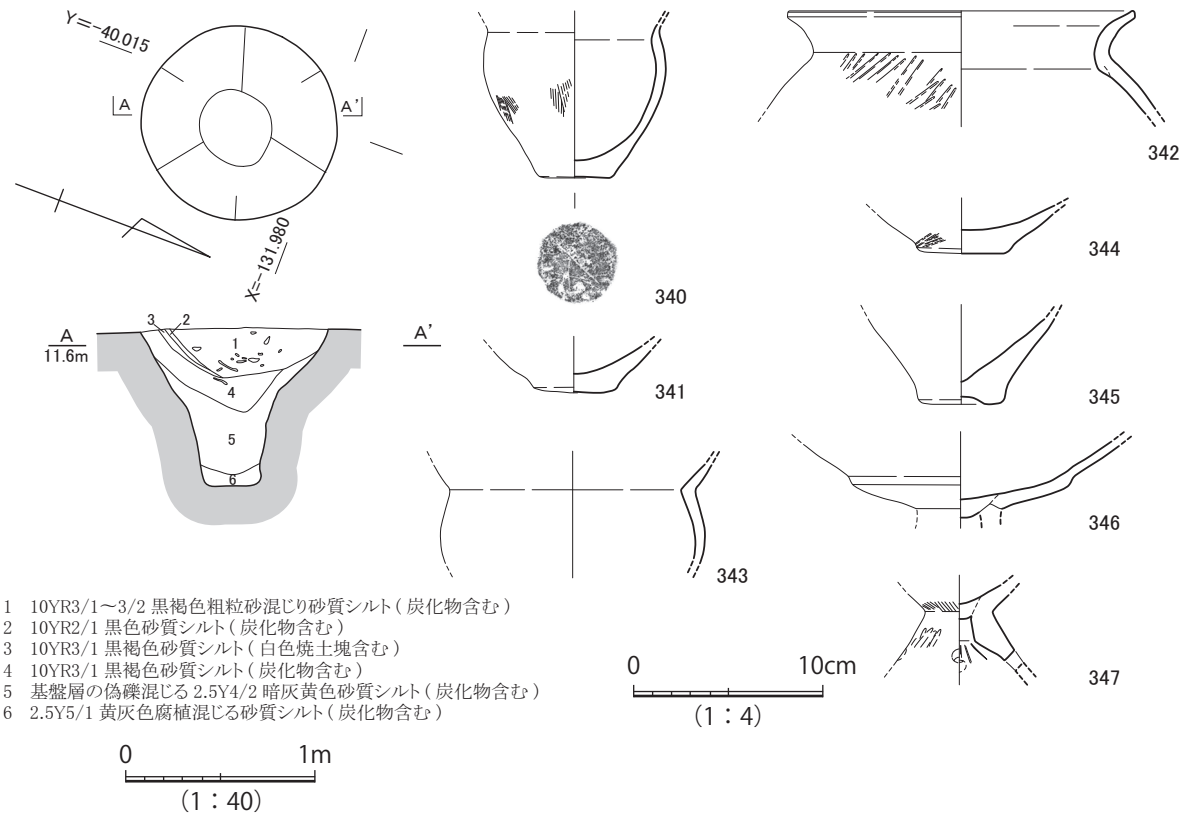
320 ～ 329 は底部である。**320 ～ 323** は平底、**324・325** は突出した平底、**326 ～ 329** はドーナツ底である。**320 ～ 322・325・327・329** は体部外面にタタキ、**320・324・329** は体部内面にハケを施す。**323** は体部が上端でやや内彎する。体部外面に黒斑が認められる。

330 ～ 337 は高杯である。**330** は有稜高杯である。口縁部は大きく外反し、体部との接線は明瞭な稜をもつ。口縁端部は丸く収める。**331・333 ～ 337** は中空の脚柱部である。**331・334 ～ 337** は接合法によって杯部と接合する。**333** は下端で裾部が開く。**336** は下端で裾部が開く。内面にシボリメが認められる。**337** は「ハ」字状に開き、円形透かし孔を４方向に穿つ。内面にシボリメが認められる。**332** は半球状の杯部に短い脚部をもつ。

ＳＤ 2068（第 93・94・96 図）　21 グリッド、古墳６の南側に位置する。西南西―東南東に延びる

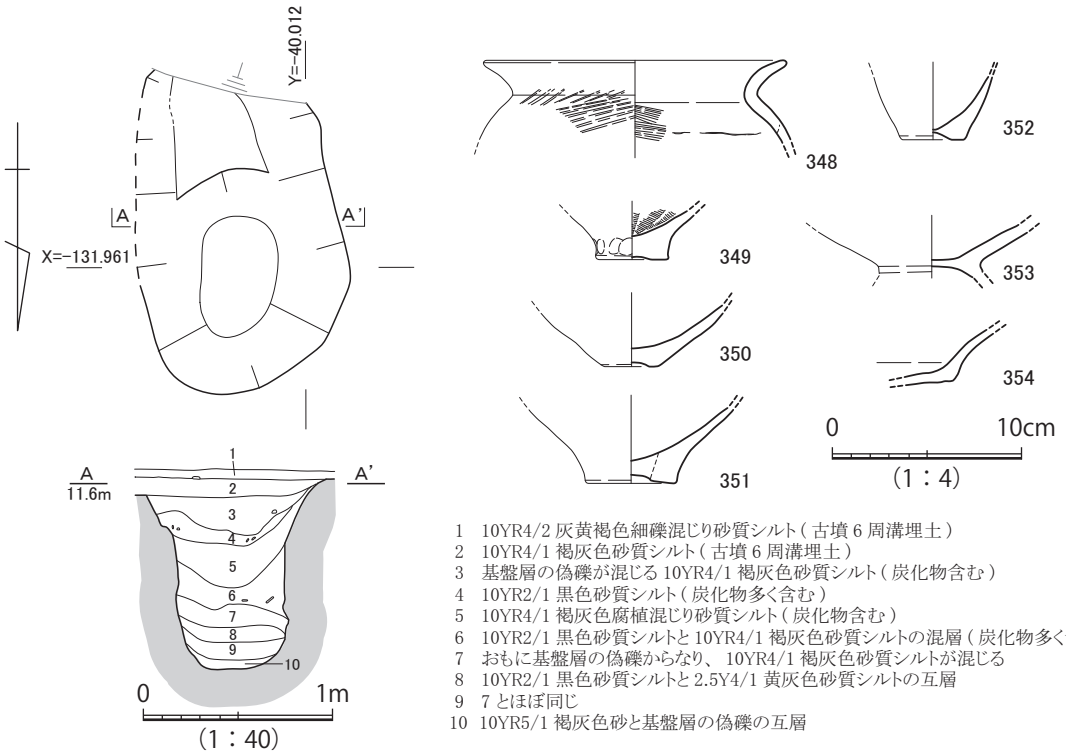


第 96 図　ＳＤ 2006・2068 出土遺物実測図



1　10YR3/1～3/2 黒褐色粗粒砂混じり砂質シルト（炭化物含む）
2　10YR2/1 黒色砂質シルト（炭化物含む）
3　10YR3/1 黒褐色砂質シルト（白色焼土塊含む）
4　10YR3/1 黒褐色砂質シルト（炭化物含む）
5　基盤層の偽礫混じる 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト（炭化物含む）
6　2.5Y5/1 黄灰色腐植混じる砂質シルト（炭化物含む）

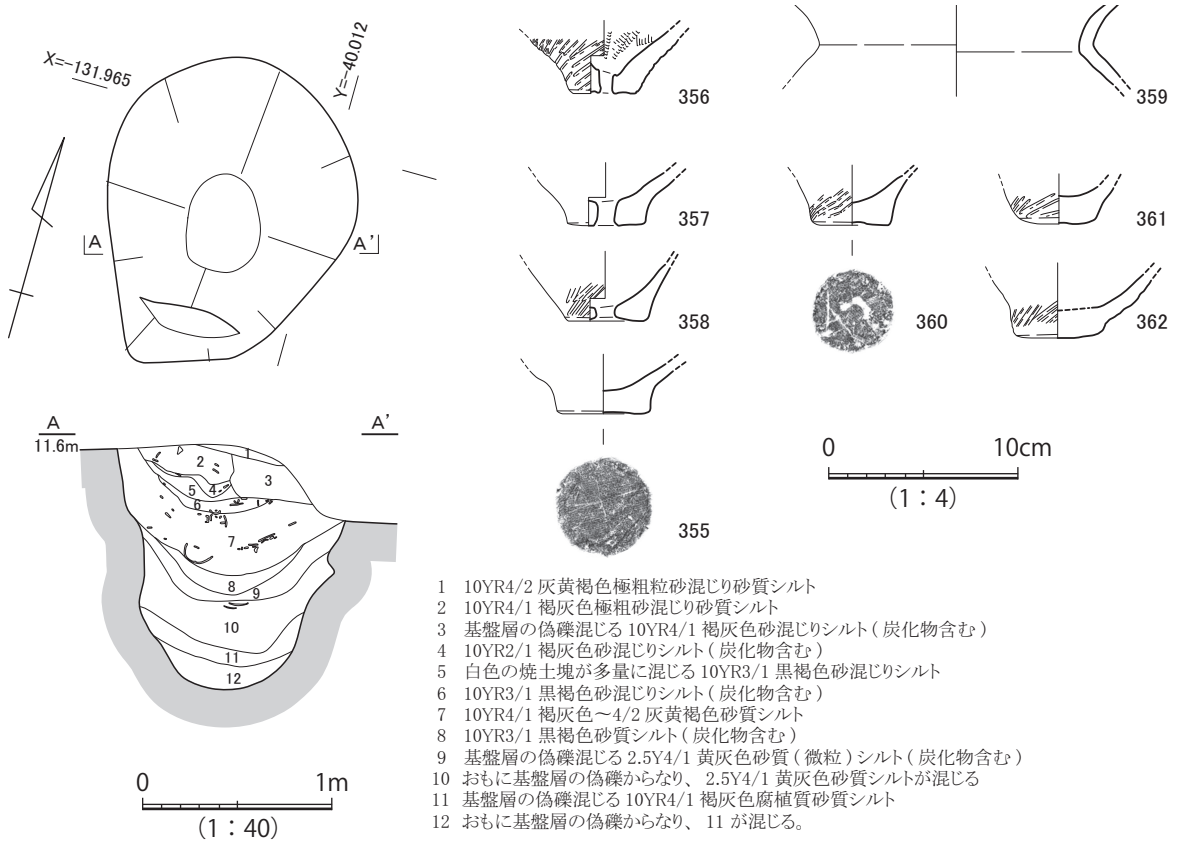
第 97 図　ＳＥ 2090 平面・断面・出土遺物実測図



1　10YR4/2 灰黄褐色細礫混じり砂質シルト（古墳 6 周溝埋土）
2　10YR4/1 褐灰色砂質シルト（古墳 6 周溝埋土）
3　基盤層の偽礫が混じる 10YR4/1 褐灰色砂質シルト（炭化物含む）
4　10YR2/1 黒色砂質シルト（炭化物多く含む）
5　10YR4/1 褐灰色腐植混じり砂質シルト（炭化物含む）
6　10YR2/1 黒色砂質シルトと 10YR4/1 褐灰色砂質シルトの混層（炭化物多く含む）
7　おもに基盤層の偽礫からなり、10YR4/1 褐灰色砂質シルトが混じる
8　10YR2/1 黒色砂質シルトと 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルトの互層
9　7 とほぼ同じ
10　10YR5/1 褐灰色砂と基盤層の偽礫の互層

第 98 図　ＳＥ 2096 平面・断面・出土遺物実測図

直線的な溝である。規模や方向性の一致するＳＤ 2005 とＳＤ 2006 の西方に位置しており、いずれかと接続すると考えられる。西端をＳＤ 2071 に切られる。検出長約 14 m、幅 0.4 ～ 0.55 m、深さ約 0.25 mを測る。底面は両端で約 0.05 mの比高差があり、西へ向かって下がる。なお、ＳＤ 2005 およびＳＤ 2006 を含めた総延長は約 31 mを測る。埋土上層は褐灰色シルト質砂、下層は主



1　10YR4/2 灰黄褐色極粗粒砂混じり砂質シルト
2　10YR4/1 褐灰色極粗砂混じり砂質シルト
3　基盤層の偽礫混じる 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト（炭化物含む）
4　10YR2/1 褐灰色砂混じりシルト（炭化物含む）
5　白色の焼土塊が多量に混じる 10YR3/1 黒褐色砂混じりシルト
6　10YR3/1 黒褐色砂混じりシルト（炭化物含む）
7　10YR4/1 褐灰色～4/2 灰黄褐色砂質シルト
8　10YR3/1 黒褐色砂質シルト（炭化物含む）
9　基盤層の偽礫混じる 2.5Y4/1 黄灰色砂質（微粒）シルト（炭化物含む）
10　おもに基盤層の偽礫からなり、2.5Y4/1 黄灰色砂質シルトが混じる
11　基盤層の偽礫混じる 10YR4/1 褐灰色腐植質砂質シルト
12　おもに基盤層の偽礫からなり、11 が混じる。

第 99 図　ＳＥ 2106 平面・断面・出土遺物実測図

に基盤層の偽礫からなる。埋土上層より弥生時代後期後半の土器が出土した。

遺物は２点を図示した。（**第 96 図　338・339**）ともに弥生土器である。

338 は広口壺である。口縁部の外反は僅かで、ほぼ直立する。口縁端部は上方に拡張し、端部は面を成す。

339 は高杯である。脚柱部から裾部が開いて延びる。裾部に円形透かし孔を３方向に穿つ。杯部とは接合法によって接合する。脚柱部内面にシボリメが認められる。

ＳＥ 2090（第 97 図）　20 グリッド、古墳６の墳丘部分に位置する。井戸の中心を掘り込んだ、漏斗状の断面形状を呈する素掘りの井戸である。よく締まった基盤層で掘り止まる。底面の色調は還元状態を呈すが、滞水層は認められない。平面形は円形を呈し、直径約 1 m、深さ 0.85 mを測る。埋土はレンズ状に６層が堆積する。２層に大別されるが、いずれも炭化物を含む。上層（１～４）は焼土塊と土器を含む黒褐色砂質シルトなどで構成される。下層（５・６）は基盤層の偽礫が混じる暗灰黄色砂質シルトなどで構成される。下層は一見埋め戻し土であり、上層は燃焼行為に伴って廃棄土坑として利用された可能性が考えられるが、埋没過程は定かではない。井戸内で強く発達した土壌化は認められないことから、比較的短期間に埋積したものと考えられる。埋土上層から弥生時代後期後半の土器が多く出土した。

遺物は８点を図示した。（**第 97 図　340 ～ 347**）いずれも弥生土器である。

340・341 は壺である。ともに底部は平底である。**340** は上端で口縁部となるが、剥離する。底部外面に木の葉圧痕及び黒斑が認められる。

342 ～ 345 は甕である。**342・343** は口縁部が外反し、端部は丸く収める。**342** は体部外面にタタキを施す。344は平底の底部である。体部はやや内彎しながら立ち上がる。体部外面にタタキを施す。

345 はドーナツ底の底部である。

346・347 は高杯である。**346** は有稜高杯である。杯部のみ残存する。口縁部は外反し、体部との接線は明瞭な稜をもつ。円盤充填法によって脚柱部と接合する。**347** は杯部から大きく開く裾部をもつ。円形透かし孔を 4 方向に穿つ。裾部内面にハケを施す。

ＳＥ 2096（第 98 図） 20 グリッド、古墳 6 の墳丘部分に位置する素掘りの井戸である。平面形が楕円形を呈する長径推定 1.8 m、短径 1.1 m、深さ 0.2 mを測る土坑の南側に偏在して、直径約 1 m の井戸本体を掘削する。深さ 0.95 mを測る。底部側壁の基盤層に滞水層であったとみられる砂層の狭在が認められる。埋土はレンズ状に 8 層が堆積する。3 層に大別され、上層 (3) は粗大な基盤層の偽礫などが混じる埋め戻し土である。中層 (4 ～ 6) は炭化物を多く含み、褐灰色砂質シルトなどで構成される。井戸近傍で発達した土壌化層に由来すると考えられる。下層は基盤層の偽礫と褐灰色砂質シルトなどの互層 (7 ～ 10) である。雨水による地表物質の流入と、井戸側壁の崩落等によるものと考えられる。埋土上層から弥生時代後期後半の土器が出土した。

遺物は 7 点を図示した。**（第 98 図　348 ～ 354）**

348 ～ 353 は甕である。**348** は口縁部が外反し、端部は丸く収める。体部外面にタタキ、内面にハケを施す。**349・350・352** はドーナツ底、**351** は突出したドーナツ底である。**349** は内面にハケを施す。**350** は底径が 3.0cm と小さく、体部外面に黒斑が認められる。**353** は脚台付甕である。脚台部は直径 5.2cm を測るが欠損する。磨滅が著しいため定かではないが、打ち欠いた可能性もある。

354 は有稜高杯である。口縁部は外反し、体部との接線は明瞭な稜をもつ。口縁端部は丸く収める。

ＳＥ 2106（第 99 図） 20 グリッド、古墳 6 墳丘部分に位置する素掘りの井戸である。撹乱と古墳周溝により本来の肩は大きく削平されている。平面形は楕円形を呈し、南北径 1.65 m、東西径 1.3 m、深さは遺存状況の良い西側の肩から 1.3 mを測る。南側に足場となる小さな段差を有する。底部側壁の基盤層に砂層が狭在するが、湧水は認められなかった。埋土はレンズ状に 12 層が堆積する。3 層に大別され、上層 (1 ～ 5) はＳＥ 2090 と同じく、炭化物や焼土塊を含む褐灰色砂質シルトなどで構成される。中層 (6 ・ 7) は黒色砂質シルトなどである。下層 (8 ～ 12) は黄灰色砂質シルトと基盤層の互層である。ある程度、井戸内での土壌の発達も認められる。埋土上・中層から弥生時代後期後半の土器が出土した。

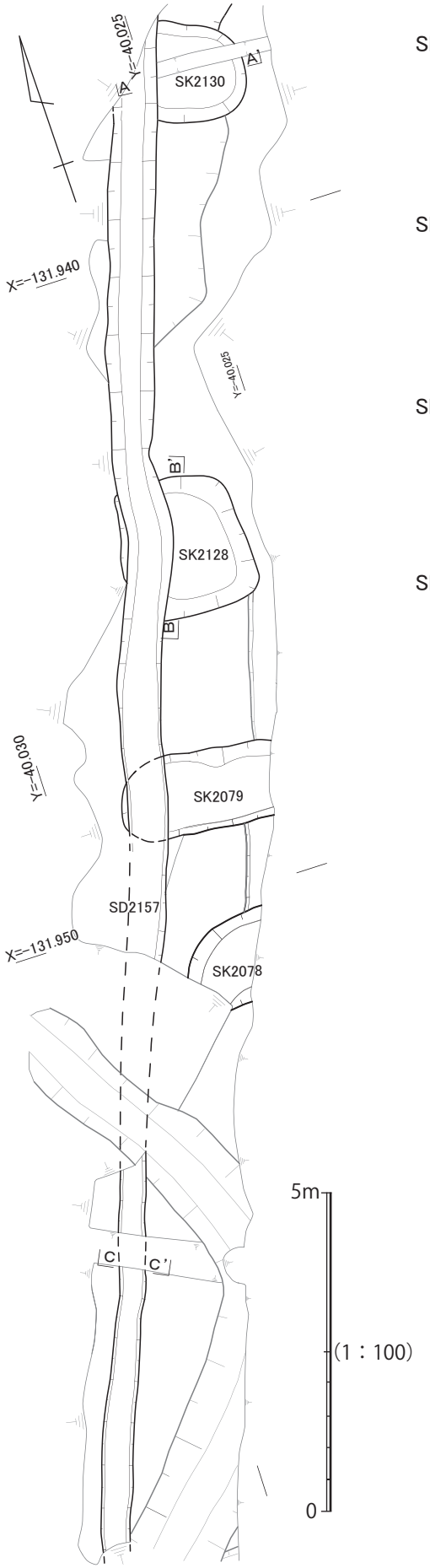
遺物は 8 点を図示した。**（第 99 図　355 ～ 362）**

355 は壺である。底部は突出した平底である。底部外面に木の葉圧痕と黒斑が認められる。

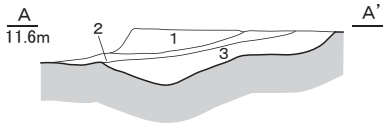
356 ～ 358 は有孔鉢である。いずれも底部は平底で、中央に円孔を穿つ。円孔の直径は **356** が 0.7cm、**357・358** が 1.0cm を測る。いずれも体部外面にタタキを施し、**356** は体部内面にハケを施す。**356** は底部外面に成形時の圧痕、**358** は外面に黒斑が認められる。

359 ～ 362 は甕である。**359** は口縁部が外反し、端部は丸く収める。内面では口縁部と肩部の境が明瞭である。**360・362** は平底、**361** はやや丸みを帯びた平底である。いずれも体部外面にタタキを施す。**360** は底部外面に草状の圧痕、**362** は底部外面に黒斑が認められる。

ＳＫ 2078（第 101・102 図） 17 グリッド、古墳 6 の北側に位置する。東・西両側を撹乱に切られる。東西径 2.3 m以上、南北径 1.2 m、深さは最も残りの良い北側の肩から 0.27 mを測る。底面は平坦であるが、側壁は垂直に立ち上がる。埋土は 4 層に分けられ、2 層に大別される。上層 (1 ～ 3) は炭化物を含む黒褐色シルト質砂などである。下層は主に基盤層の偽礫からなる。主に埋土上層から、

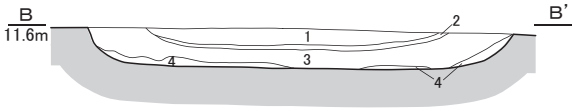


SK2130



1　10YR4/1 褐灰色細礫・極粗粒砂混じり砂
2　10YR3/1 黒褐色細礫・極粗粒砂混じりシルト質砂
3　基盤層の偽礫が混じる 10YR4/2 灰黄褐色細礫・極粗粒砂混じり砂

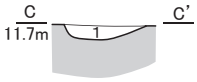
SK2128



1　2.5Y4/2 暗灰黄色細礫・極粗粒砂混じりシルト質砂
2　10YR3/1 黒褐色砂質シルト（炭化物含む）
3　基盤層の偽礫混じる 2.5Y4/1 黄灰色細礫・極粗粒砂混じりシルト質砂
4　基盤層の偽礫に 3. が混じる

0　1m
(1：40)

SD2157



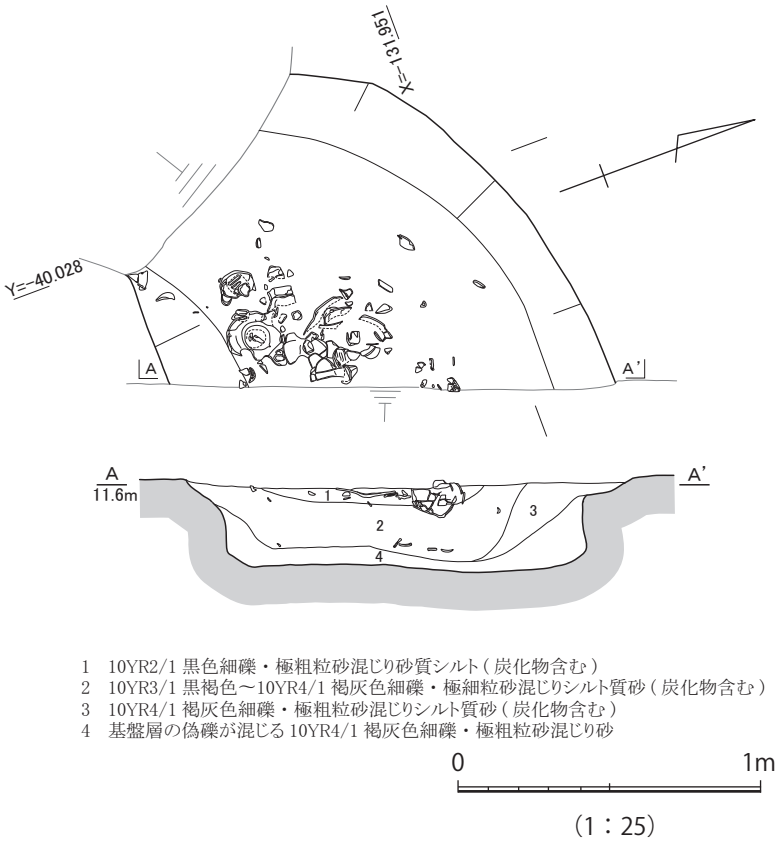
1　10YR4/2 灰黄褐色細礫・極粗粒砂混じり砂

SK2079

1　10YR2/1 黒色細礫・極粗粒砂混じり砂質シルト
2　10YR4/1 褐灰色～ 3/1 黒褐色細礫・極粗粒砂混じり砂質シルト
3　2.5Y4/1 黄灰色細礫・極粗粒砂混じりシルト質砂
4　基盤層の偽礫に上位から 3. が混じる

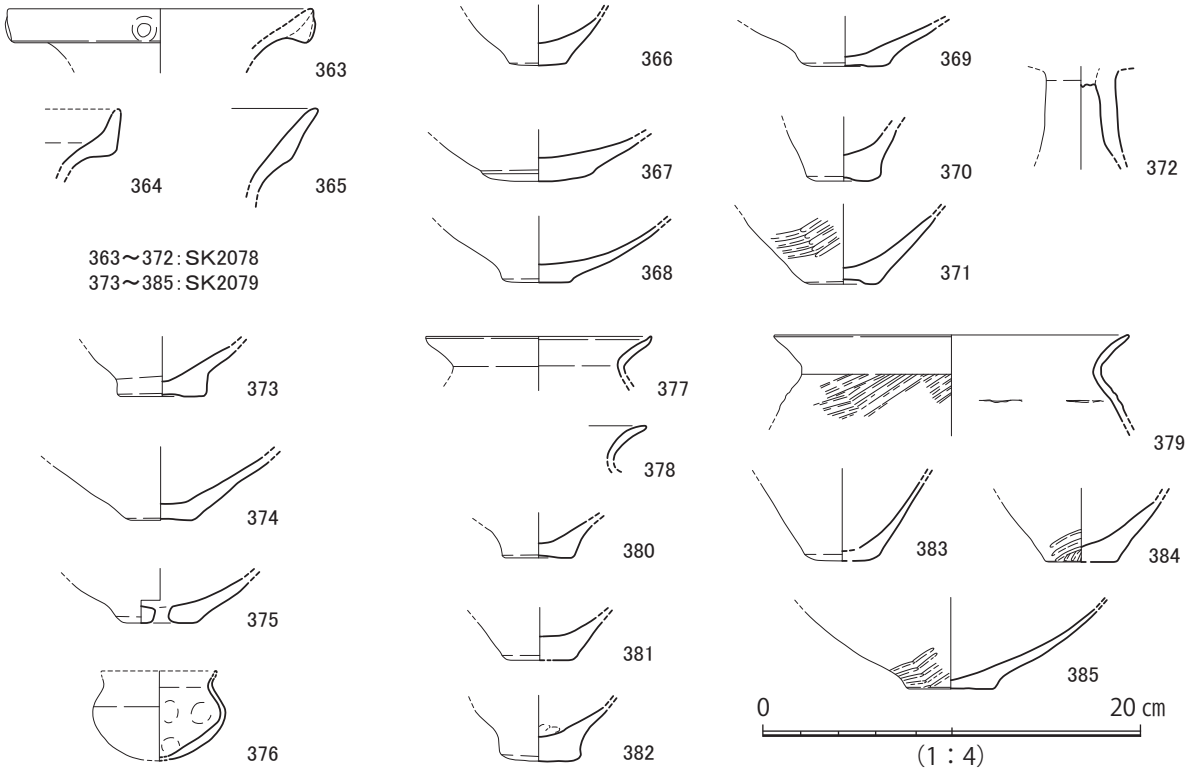
0　1m
(1：25)

第 100 図　ＳＤ 2157・ＳＫ 2079・2128・2130 平面・断面・遺物出土状況図



1　10YR2/1 黒色細礫・極粗粒砂混じり砂質シルト（炭化物含む）
2　10YR3/1 黒褐色～10YR4/1 褐灰色細礫・極細粒砂混じりシルト質砂（炭化物含む）
3　10YR4/1 褐灰色細礫・極粗粒砂混じりシルト質砂（炭化物含む）
4　基盤層の偽礫が混じる 10YR4/1 褐灰色細礫・極粗粒砂混じり砂

第 101 図　ＳＫ 2078 平面・断面・遺物出土状況図



第 102 図　ＳＫ 2078・2079 出土遺物実測図

弥生時代後期後半の土器が廃棄された状態で多く出土した。

遺物は 10 点を図示した。（**第 102 図　363 ～ 372**）いずれも弥生土器である。

363 ～ 368 は壺である。**363** は広口壺である。口縁端部は面を成し、端面に円形浮文を施す。**364・365** は二重口縁壺である。**364** は口縁部に付加状口縁を形成するが、現状の端部は波状を呈しているため、接合部が剥離した状態と考えられる。**365** は外反する口縁部に付加状口縁を形成する。口縁端部は丸く収める。**366・368** は平底、**367** は丸底である。**367** は円盤状の粘土に体部を貼り付けて成形している。

369 ～ 371 は甕である。**369** は平底、**370・371** はドーナツ底である。**371** は外面にタタキを施す。外面に黒斑が認められる。

372 は高杯である。中空の脚柱部である。円盤充填法によって杯部と接合する。

ＳＫ 2079（第 100・102 図）　17 グリッド、古墳６の北側に位置する。平面形は東西に長い楕円形を呈する。ＳＤ 2157 に切られる。東側は撹乱のため全容は不明であるが、東西径 2.3 m以上、南北径 1.3 m、深さ 0.25 mを測る。埋土は４層に分けられ、上・中層は褐灰色砂質シルトなどで構成される。下層は主に基盤層の偽礫からなる。埋土上層から弥生時代後期後半の土器が廃棄された状態で多く出土した。

遺物は 13 点を図示した。（**第 102 図　373 ～ 385**）いずれも弥生土器である。

373･374 は壺である。**374** は平底、**373** は突出した平底である。**373** は外面に黒斑が認められる。**375** は有孔鉢である。底部は平底で、中央に直径 0.8cm の円孔を穿つ。外面に黒斑が認められる。

377 ～ 385 は甕である。**377 ～ 379** はいずれも口縁端部は外反し、**377** は端部を僅かに上方に摘み上げ、**378・379** は端部を丸く収める。**379** は体部外面にタタキを施す。**380 ～ 382・385** は平底、**383・384** はドーナツ底である。**384・385** は体部外面にタタキを施す。

376 はミニチュア土器壺である。内彎する体部から外反する口縁部が延びる。口縁端部は欠損する。

ＳＫ 2130（第 100 図）　12 グリッドに位置し、ＳＤ 2157 に切られる。平面形は楕円形を呈する。東西径 1.4m 以上、南北径 1.55m、深さは 0.35m を測る。断面形はすり鉢状を呈する。埋土は３層に分けられ、いずれも細礫・極粗砂混じりの砂である。遺物は弥生時代後期後半の土器小片がわずかに出土した。

ＳＫ 2128（第 100・104 図）　17 グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈する。ＳＤ 2157 に切られる。東西２ m、南北 2.2 m、深さは 0.15 mを測る。埋土は４層に分けられ、黄灰色シルト質砂などで構成される。遺物は南側に位置するＳＫ 2079 などに比べて少量である。埋土内から弥生時代後期後半の土器が出土した。

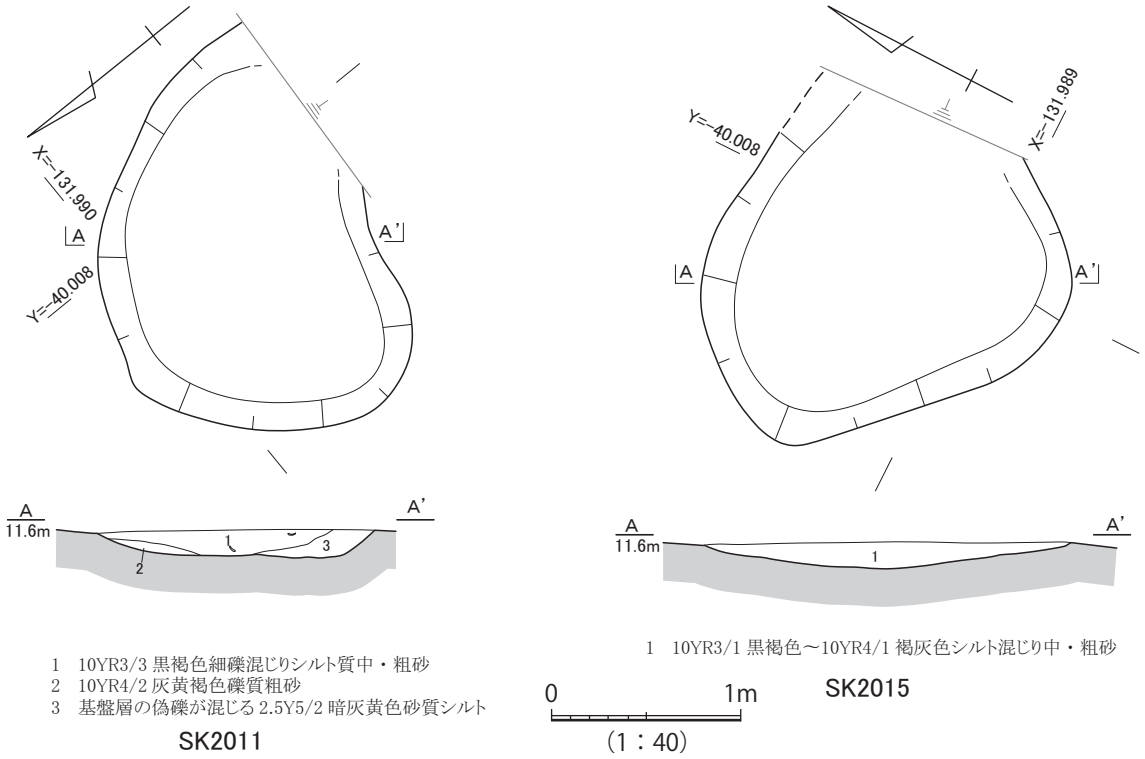
遺物は４点を図示した。（**第 104 図　387 ～ 390**）

387 は壺である。底部はドーナツ底である。体部はほぼ水平に延びる。

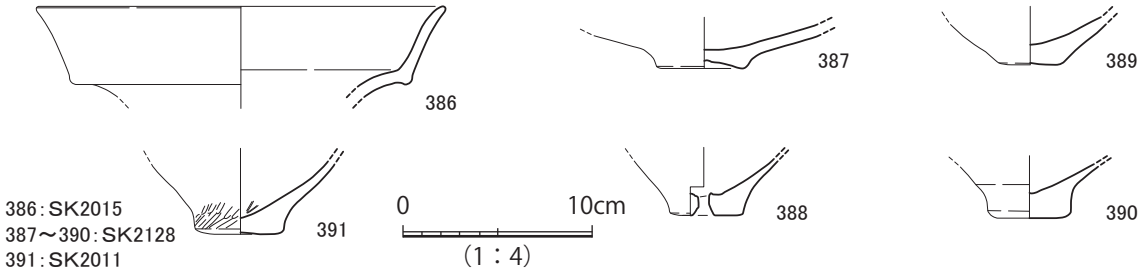
388 は有孔鉢である。底部は突出した平底である。中央に直径 0.9cm の円孔を穿つ。

389･390 は甕である。ともに底部は平底である。**389** は胎土中に直径 0.7 ～ 1.0cm の礫を複数含む。

ＳＫ 2011（第 103・104 図）　25 グリッドに位置する。南側を側溝に切られる。層界が不明瞭なため外形は判然としないが、検出した平面形は歪んだ楕円形を呈する。長径 1.8 m、短径 1.3 m、深さ 0.15 mを測る。断面形は皿状を呈し、底面は平坦である。埋土は黒褐色細礫混じりシルト質砂などである。遺物は土器小片が出土した。



第103図　ＳＫ2011・2015平面・断面図



第 104 図　ＳＫ 2011・2015・2128 出土遺物実測図

391 は弥生土器甕である。底部は突出したドーナツ底である。

ＳＫ 2015（第 103・104 図）　25 グリッドに位置する。東側を側溝、北側を古墳 2 周溝に切られる。層界が不明瞭なため、外形は判然としないが、検出した平面形は歪んだ隅丸方形を呈する。長径 1.9 m、短径 1.8 m、深さ 0.14 mを測る。断面形は浅いすり鉢状を呈する。埋土は黒褐色細礫・シルト混じりの中・粗砂である。埋土内から弥生時代後期後半の土器小片が出土した。

386 は二重口縁壺である。口縁部は外反し、端部は丸く収める。二重口縁部下端は稜をもつ。

古墳時代の遺構

ＳＤ 2023（第 105 図）　21･26 グリッドに位置する。古墳 6 南側周溝を切り、ほぼ直線的に南下する溝である。古墳 2 を切り、その南側周溝に達した後、南東方向に屈曲し、調査区外に延びる。検出長約 38.5 m、幅 0.8 ～ 1.2 m、深さ 0.3 ～ 0.5 mを測る。断面形状は逆台形を呈し、底面は両端で約 0.2 mの比高差があり、南へ向かって下がる。埋土は 3 ～ 4 層に分けられる。上層はにぶい黄褐色砂質シルト、中層は褐灰色砂質シルトなど、下層は基盤層の偽礫を主体とする。遺物は須恵器と埴輪の小片が出土した。

遺物は 4 点を図示した。（**第 105 図　392 ～ 395**）**392・393** は須恵器、**394・395** は埴輪である。

392 は杯蓋である。天井部と口縁部境の稜は鋭い。口縁端部は面を成す。天井部に自然釉がかかる。

393 は壺である。口縁部は外反し、上端で外方へ広がるが口縁端部は欠損する。外面に自然釉がかかる。**392・393** はともに MT15 型式のものである。

395 は円筒埴輪である。箍の断面は台形を呈する。

394 は形象埴輪である。筒状を呈する。切妻屋根をもつ家形埴輪の棟側か。

ＳＤ 3140（第 105 図） 26・31 グリッドに位置する南北溝である。古墳２及び古墳１を切る。検出長約 17 m、幅 1.4 ～ 1.8 m、深さ 0.1 ～ 0.26 mを測る。断面形状は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、両端で約 0.1 mの比高差を以って南へ下る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトなどである。遺物は埴輪や須恵器の細片が出土したが、図示できるものはなかった。

古墳６（第 106 ～ 108 図） グリッド 16･17･20･21 に位置する。全体に撹乱や削平を受けており、特に南東側は完全に破壊されているが、墳形は直径 15 m前後の円墳と推測される。周溝の規模は幅 5 ～ 6 m、内側の肩から深さ 0.4 mを測る。周溝は基底部が掘り込まれている。墳丘部分では、古墳築造以前とみられる溝・井戸・柱穴・小穴などが多数遺存するが、墳丘盛土や埋葬施設は確認できなかった。基盤層の削り出し部分を残して削平されているとみられる。周堤部も削平されており、墓道等の外部構造は確認できなかった。周堤西側はＳＤ 2071 に切られる。周溝埋土は概ね３層に分けられる。上層は灰黄褐色砂質シルト、中層は褐灰砂質シルトなどである。近傍の土壌化層に由来するとみられるが、堆積が休止して発達する強く土壌化した部分が認められないため、比較的短期間で埋没したものと推測される。下層は主に基盤層の偽礫からなる。周溝埋土上・中層より埴輪・須恵器が多く出土した。

遺物は 42 点を図示した。**（第 107・108 図　396 ～ 438）** 須恵器（**396 ～ 402**）、埴輪（**403 ～ 438**）である。

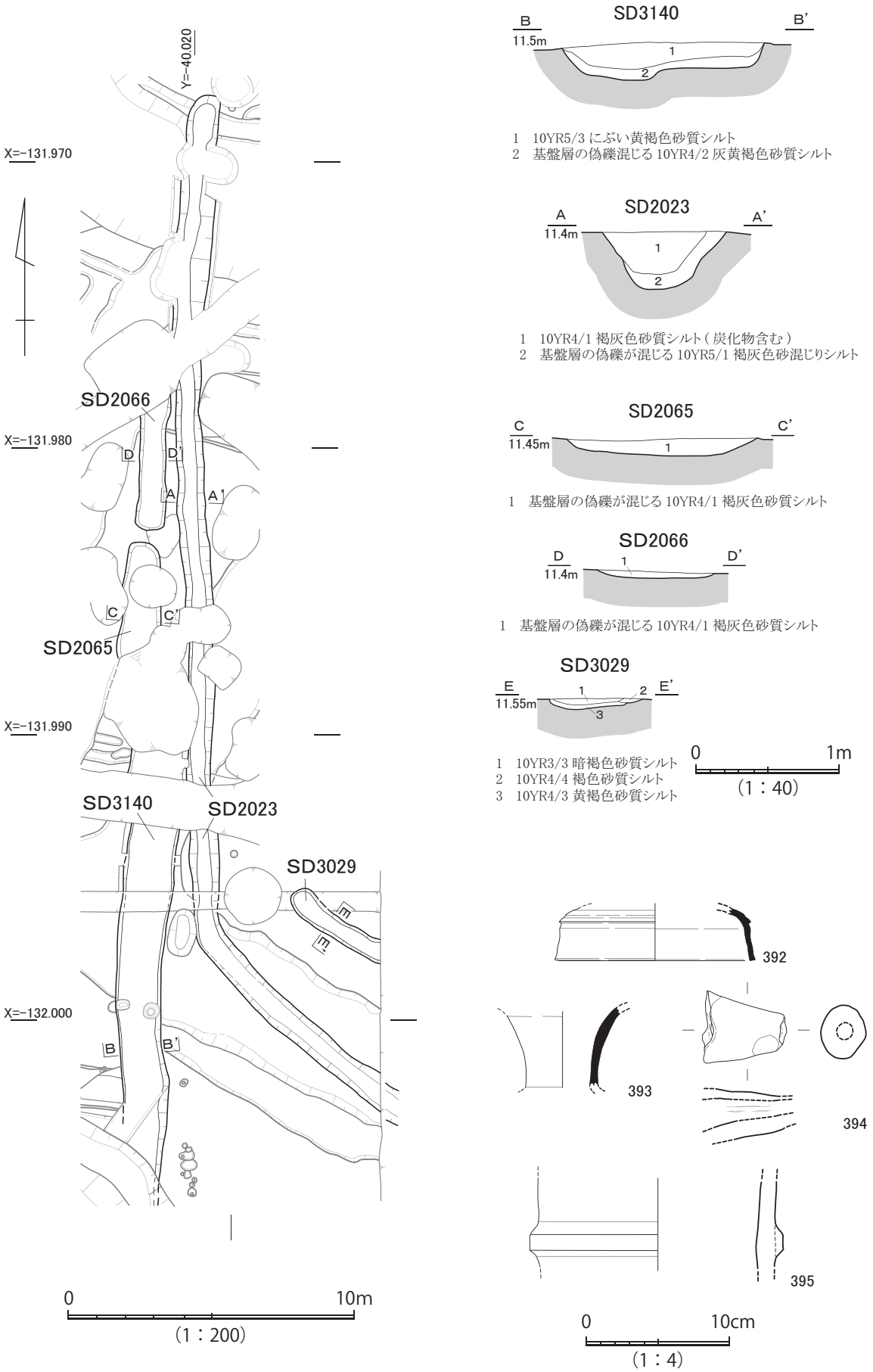
398・399 は杯身である。**398** は受け部が水平方向に延び、口縁端部は丸く収める。外面に自然釉がかかり、また受け部端のみ釉が付着することから、重ね焼きをおこなっていたと思われる。MT15 型式のものである。**399** は受け部が水平に延び、口縁部は内傾して立ち上がり、端部は丸く収める。火膨れが多く認められる。内面に自然釉が滴状に付着する。

396・397 は壺である。**397** は口縁部が緩やかに外反し、端部は肥厚し、面を成す。外面にタタキ後カキメ、内面に同心円タタキ後ナデを施す。**396** は口縁端部が外反し、端部は肥厚する。端面に凹線を１条施す。MT15 型式のものである。

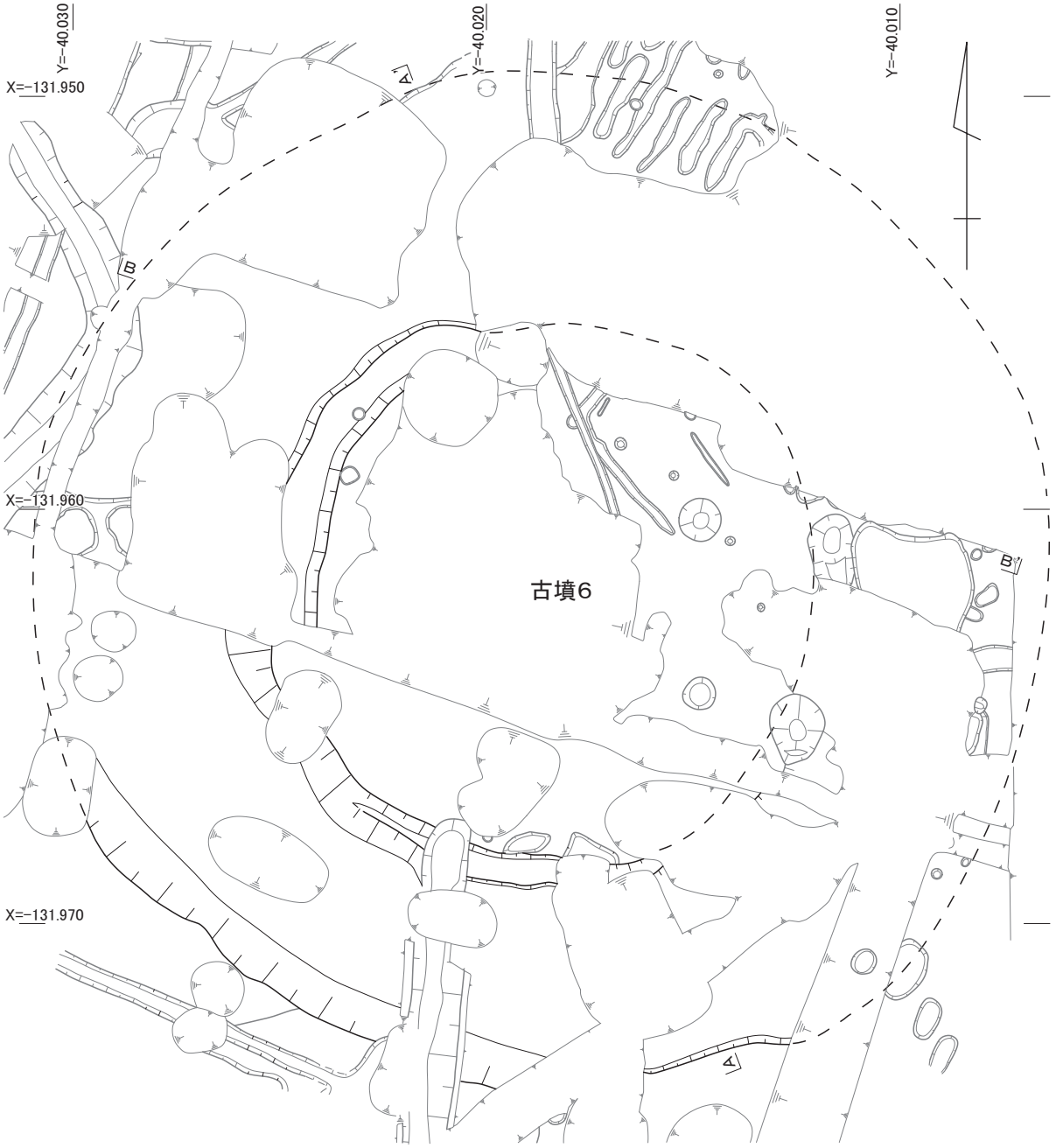
400 ～ 402 は器台である。**400** は長方形透かしを４方向に穿ち、上下二段が残存する。透かし孔の間に凹線２条を、その上下にそれぞれ波状文を施す。**401** は、長方形透かし孔は３方向に穿つ。脚柱部外面に自然釉がかかる。**402** は、長方形透かし孔は二段分残存するが、互い違いの位置に穿つ。透かし孔の間に凹線文２条を､その上に波状文を施す。外面に自然釉がかかる。接合はしないが、**401** と同一個体である。**400 ～ 402** はＴＫ 47 ～ＭＴ 15 型式のものである。

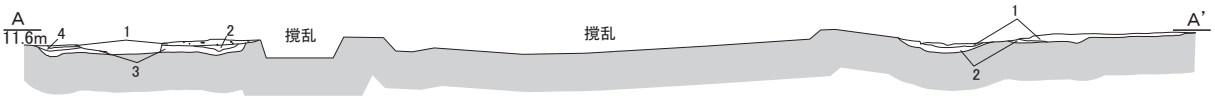
403 ～ 423 は円筒埴輪である。箍の断面形状は細かくは三角形（**403**）、「Ｍ」字状（**405** など）、台形（**414** など）を呈しているが、全体として扁平で低い形状を呈する。**404・405** は、箍の上下のナデによってかろうじて形成されている。**423** は基底部でやや外傾して立ち上がる。内面にユビオサエを施す。**412** は外面にナナメハケ、**421** は内面にユビオサエ、**422** は外面にナナメハケ、箍の上下及び頂部にナデを施す。

424 ～ 429 は朝顔形埴輪である。箍の断面形状は台形（**424・425**）と扁平な台形（**426 ～**



第 105 図　ＳＤ 2023・2065・2066・3029・3140 平面・断面・出土遺物実測図





1　10YR4/2灰黄褐色細礫混じり砂質シルト
2　2.5Y6/2灰黄色粘質シルトの偽礫含む10YR3/1黒褐色砂質シルト
3　おもに基盤層の偽礫からなり、上位から2が混入する
4　10YR4/1褐灰色砂混じり色シルト

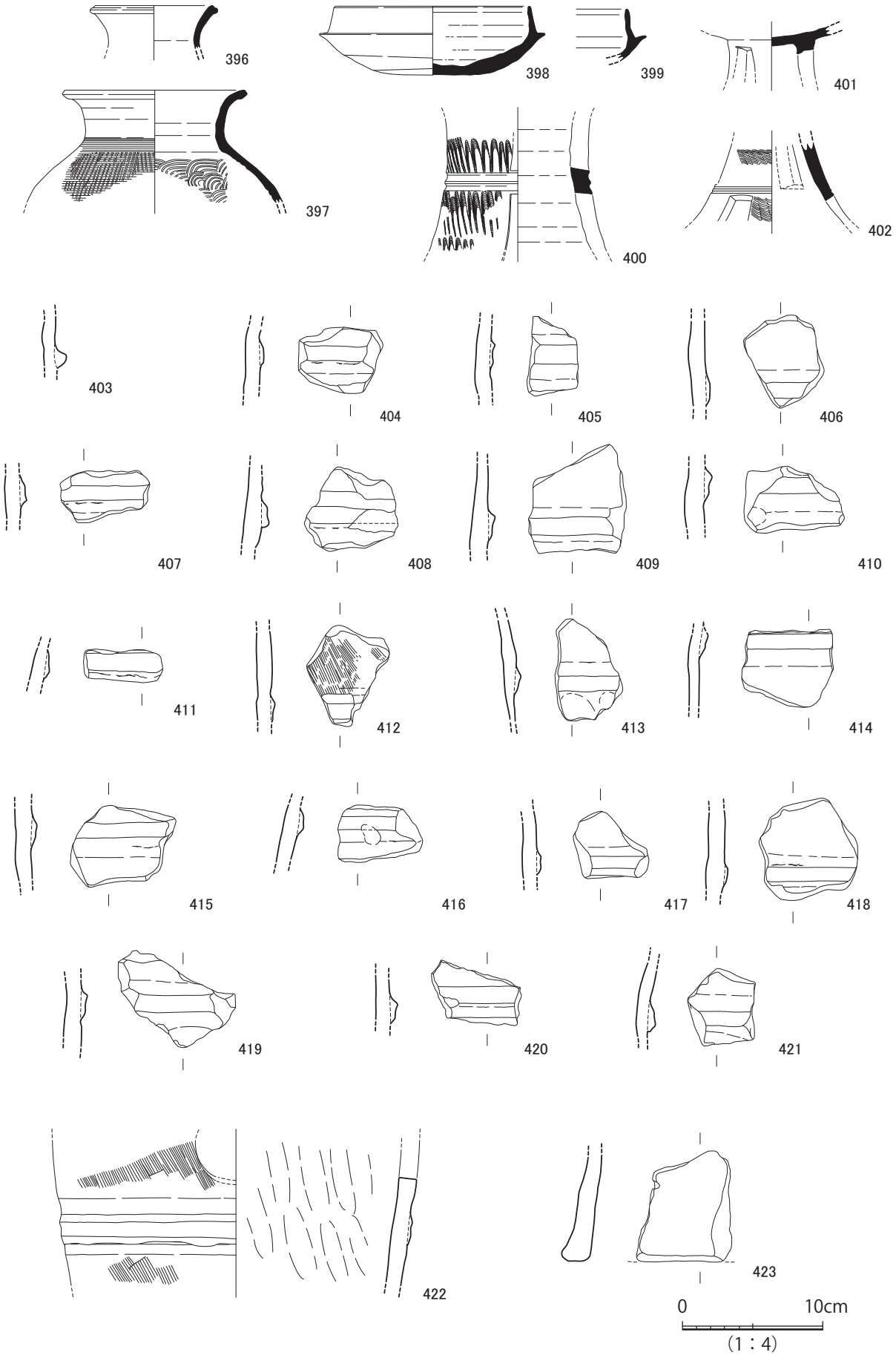
1　10YR4/1褐灰色極粗粒砂混じり砂質シルト
2　おもに基盤層の偽礫からなり、上位から1が混入する

0　5m
(1：160)

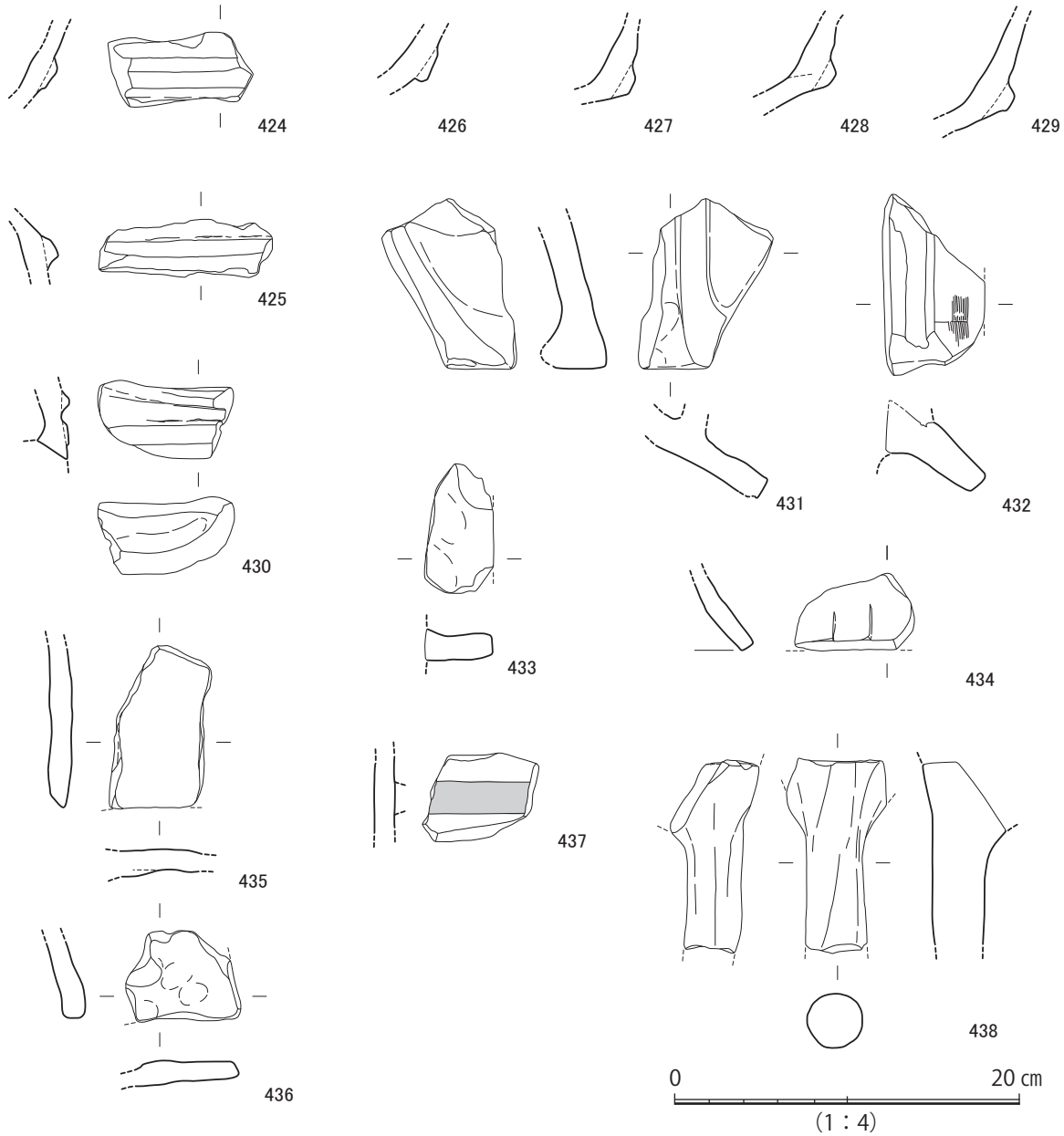
1　10YR4/2 灰黄褐色細礫混じり粗砂質シルト（淘汰悪い）
2　10YR4/1 褐灰色～3/1 黒褐色細礫混じりシルト質粗砂
3　10YR4/1 褐灰色粗砂混じり粘質シルト（炭化物含む）
4　おもに基盤層の偽礫からなり、 上位から 2 などが混入する

1　10YR4/2灰黄褐色細礫混じり砂質シルト
2　10YR3/1黒褐砂質シルト
3　おもに基盤層の偽礫からなり、上位から2と2.5Y6/2灰黄粘質シルトが混入する
4　10YR4/1褐灰色砂質シルト(2096埋土)
5　基盤層の偽礫混じる10YR4/1褐灰色砂質シルト(2096埋土)

第 106 図　古墳６平面・断面・断割図



第 107 図　古墳６出土遺物実測図（１）



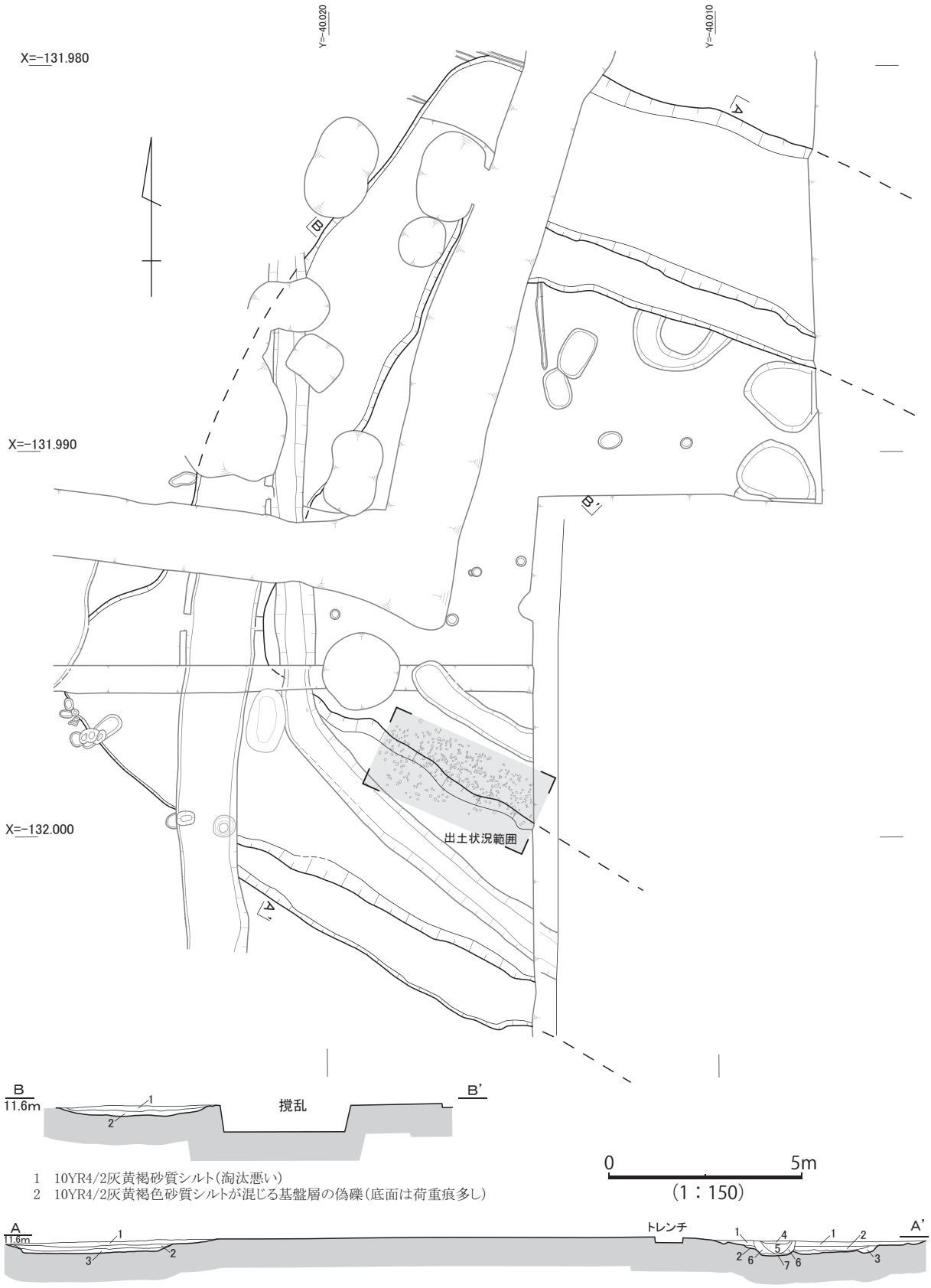
第 108 図　古墳６出土遺物実測図（２）

429）を呈する。

430 ～ 438 は形象埴輪片である。**433** は台部か。**434** は段が表現されており、蓋形埴輪の笠部分と考えられる。**432・437** は家形埴輪の可能性がある。**437** は剥離痕跡が認められる。

430・431・436・437・438 は器形不明である。**431** は斜め方向に面をもつ。**436** は内外面オサエを施す。**438** は円柱の柱状を呈する。片側に斜めの剥離面が認められる。

古墳２（第 109 ～ 111 図）　25・26・30・31 グリッドに位置する。墳丘東側は調査区外となるため、全容は不明であるが、南北約 14 mを測る方墳と考えられる。墳丘の主軸方向は N‐30°‐E である。周溝は検出範囲では完周しており陸橋部は認められない。検出面での周溝の規模は、北側で幅約 5.5 m・深さ約 0.4 m、西側で幅 3.5 m・深さ約 0.2 m、南側で幅約 5 m・深さ 0.45 mをそれぞれ測る。底面は平坦であるが、北周溝では内側、南周溝では外側に浅く緩い傾斜の一段が付く。墳丘部分では、墳丘盛土や埋葬施設は確認できなかった。基盤層の削り出し部分を残して削平されていると考えられる。周堤部も削平されており、墓道等の外部構造は確認できなかった。周溝埋土は３層に分けられ、



1　10YR4/2灰黄褐砂質シルト（淘汰悪い）
2　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトが混じる基盤層の偽礫（底面は荷重痕多し）

1　10YR4/1褐灰色細礫混じり砂質シルト（淘汰悪い）
2　10YR3/1黒褐色細礫混じり砂質シルト
3　10YR5/1褐灰色砂質シルトと2.5Y6/2灰黄粘質シルトが混じる基盤層の偽礫

1　10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト
2　10YR4/1 黒褐色シルトの偽礫が混じる 10YR4/1 褐灰色砂質シルト
3　基盤層の偽礫が混じる 10YR4/2 暗灰黄色砂質シルト
4　10YR3/1 黒褐色砂質シルト（2023 埋土）
5　10YR3/3 にぶい黄褐色砂質シルト（2023 埋土）
6　10YR4/1 褐灰色砂質シルト（2023 埋土）
7　基盤層の偽礫が混じる 10YR5/2 暗灰黄色砂質シルト（2023 埋土）

第 109 図　古墳 2 平面・断面・断割図

上層は包含層と近似した褐灰色砂質シルト、中層は黒褐色砂質シルトなどで構成される。近傍での土壌化層の発達とともに、比較的短期間で埋積したものと推測される。下層は主に基盤層の偽礫からなる。遺物は周溝埋土上・中層から埴輪片が出土した。特に南周溝の墳丘肩部では、周溝埋土上層である褐灰色砂混じりシルトから、南北約 2 m、東西約 4.5 mの範囲で埴輪が多量に出土した。しかし、摩耗して調整が不明な円筒埴輪小片が大半であることから、古墳の削平や墳丘の流出に伴って堆積したものと考えられる。個体としてのまとまりや樹立位置などは不明である。北側周溝の底面からは弥生土器片が出土しており、古墳築造時に削平された弥生時代の遺構の遺物と考えられる。

遺物は 10 点を図示した。**（第 111 図　439 ～ 448）**

439 ～ 445 は円筒埴輪である。箍の断面形状は台形（**440 ～ 442**）、扁平な台形（**439・443・444**）を呈する。**445** は基底部である。外面に黒斑が認められる。**443** は外面にヨコハケを施す。

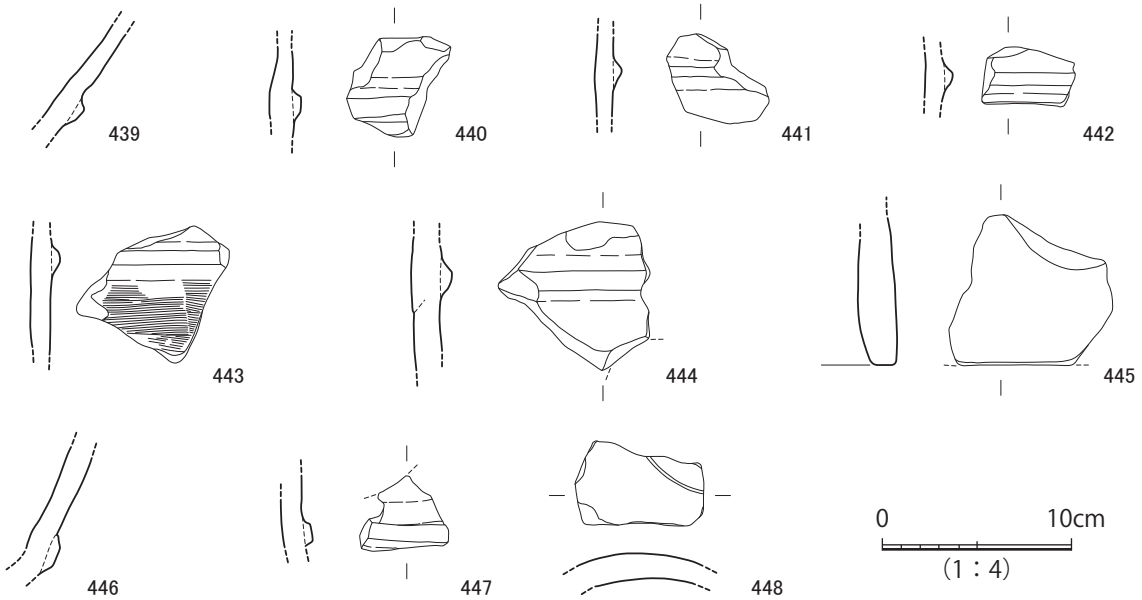
446 は朝顔形埴輪である。頸部の箍と外傾して延びる口縁部分である。箍の断面形状は扁平な台形を呈する。外面に黒斑が認められる。

1　10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト
2　10YR4/1 黒褐色シルトの偽礫が混じる 10YR4/1 褐灰色砂質シルト

第 110 図　古墳２遺物出土状況・断面図

447・448 は形象埴輪の可能性がある。**447** は箍の断面形状は扁平な台形状を呈する。**448** は外面に弧状の線刻が認められる。

古墳 1（第 112・113 図）　31 グリッドに位置する。南側は調査区外となるが、墳形は直径約 14 mの円墳と推測される。周溝は検出範囲においては完周しており陸橋部は認められない。検出面での周溝の規模は、幅 3.2 m～ 5 m、深さは北側で約 0.4 m、西側で約 0.35 m、東側で約 0.5 mをそれぞれ測る。底面は外側に浅く緩い傾斜の一段が付き、南側に行く程広がりを呈する。基底部は掘り込まれており底面は南東側がやや低くなる。墳丘部分では、墳丘盛土や埋葬施設は確認できなかった。基盤層の削り出し部分を残して削平されていると考えられる。周堤部も削平されており、墓道等の外部構造は確認できなかった。周溝埋土は３層ほどに分けられ、上層は包含層に近似した暗灰黄色砂質シルト、中層は灰黄褐色砂質シルトである。下層は主に基盤層の偽礫からなるが、基底部の深い部分では、流入した土壌化層が帯水の影響で再沈底したと考えられる暗灰黄色砂質シルトが堆積する。その上位には堆積が休止し



第 111 図　古墳２出土遺物実測図

て発達したとみられる強く土壌化した部分が確認される。ほかの古墳に比べて滞水し、開口する期間が長かったとみられる。遺物は周溝埋土上層より須恵器・埴輪が出土した。いずれも周溝埋没以前の転落や、樹立位置を保つ状況ではない。

遺物は 11 点を図示した。**（第 113 図　449 ～ 459）** 須恵器（**449 ～ 451**）、埴輪（**452 ～ 459**）である。

449・450 は甕である。**449** は口縁部が外反し、端部は面を成す。**450** は口縁部が外反し、端部は上下に肥厚し、玉縁状を呈する。

451 は杯身である。受け部は短く水平に延び、口縁部は内傾して立ち上がる。内面に回転ナデの痕跡が段になって残る。外面に自然釉が付着する。古墳５出土の **465・467** とは同一個体の可能性がある。**449 ～ 451** はＭＴ 15 ～ＴＫ 10 型式のものである。

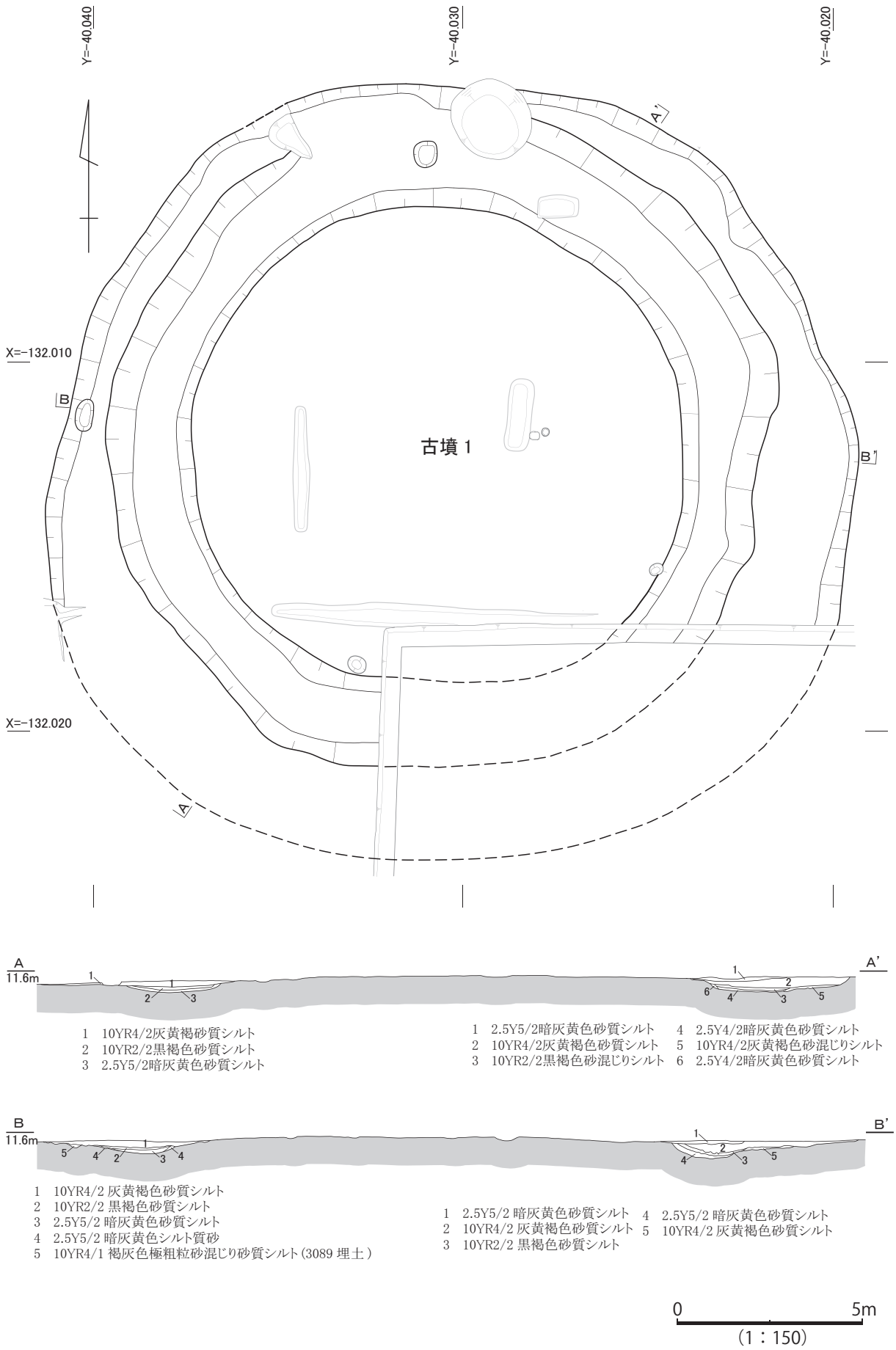
452 は形象埴輪である。中空の円筒状を呈する。**453 ～ 458** は円筒埴輪である。箍の断面形状は台形（**455**）、低い台形（**453・454・458**）を呈する。**457** は口縁部片で、直立し、端部は面を成す。**456** は基底部である。内面にハケを施す。**459** は埴輪の基底部である。やや外傾して立ち上がる。端部内面にユビオサエを施す。

時期不明の遺構

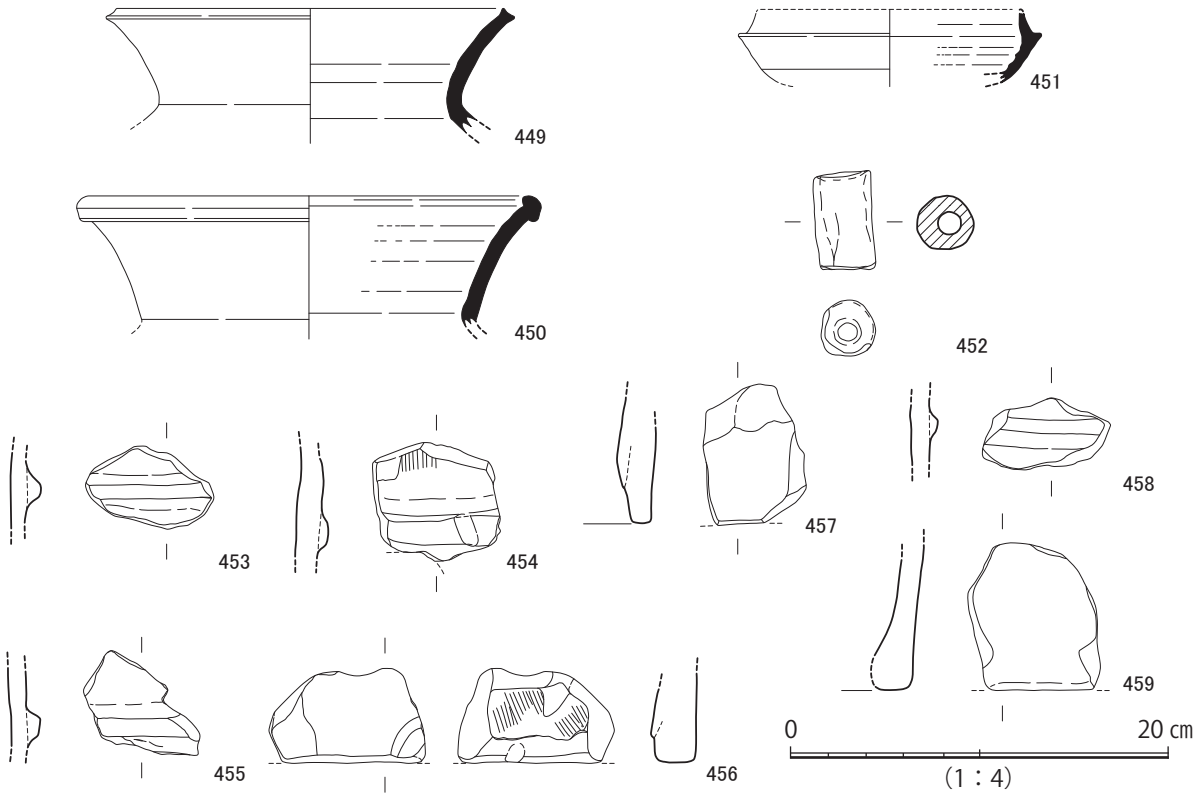
特に古墳２の北側、古墳１の北側および東側でピット (小穴) を数多く検出した。平面形は直径 0.1 ～ 0.2 m程度の円形を呈し、深さは数 cm 程度の極浅いものが多い。大半は本来の成立面から削平され、底面のみを残す柱穴と推測されるが、一部は地下茎の痕跡と思われるものも含まれる。遺物の出土量も少なく、時期を判定しがたいものが多いためこの項で報告する。

ＳＤ 2065（第 105 図） 21・26 グリッド、古墳２の西側に位置する南北方向の溝である。検出長 4m、幅 1.15 ～ 1.35m、深さ約 0.1 mを測る。断面形状は浅い「Ｕ」字状で、平坦な底面を呈する。埋土は基盤層の偽礫が混じる褐灰色砂質シルトである。遺物は円筒埴輪片がわずかに出土した。

ＳＤ 2066（第 105 図） 26 グリッド、SD2065 の北側に位置する南北方向の溝である。検出長 4.4m、幅約 1m、深さ約 0.1m を測る。形状はＳＤ 2065 と近似し、埋土は同一の基盤層の偽礫が混じる褐灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。



第 112 図　古墳 1 平面・断面・断割図



第 113 図　古墳 1 出土遺物実測図

ＳＤ 2080（第 92 図）　21・26 グリッド、古墳 5 北東側に位置する北東－南西方向の溝である。東肩のみの検出であるため規模は不明である。検出長 6.5m、深さ約 0.2m を測る。埋土は包含層に近似した褐灰色砂質シルトである。遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土器片がわずかに出土した。

ＳＤ 2082（第 92 図）　16・20 グリッド、古墳 6 の墳丘部分に位置する。北西－南西に延びる直線的な溝である。ＳＤ 2081 と重複する付近で北東へほぼ直角に屈曲する。検出長約 4m、幅 0.26 ～ 0.31m、深さ約 0.06m を測る。断面形状は「Ｕ」字状で、埋土は褐灰色砂質シルトである。遺物は弥生土器とみられる小片がわずかに出土した。

ＳＤ 2103（第 114 図）　20 グリッド、古墳 6 の東側に位置する。検出長 1.8m、幅 0.57m、深さ 0.11m を測る。断面形状は「Ｕ」字状で、埋土は基盤層の偽礫が混じる褐灰色砂質シルトである。遺物は土師質の土器片がわずかに出土した。

ＳＤ 2157（第 100 図）　12･17 グリッドに位置する。ＳＫ 2129、2130、2079、ＳＤ 2071 を切る。北北東－南南西に延びるほぼ直線的な溝である。撹乱のため全容は不明であるが、検出長 24 m、幅 0.4 ～ 0.7 m、深度 0.09 ～ 0.28 mを測る。断面形状は「Ｕ」字状を呈し、底面は両端で 0.14 mの比高差があり、南へ向かって下がる。埋土は灰黄褐色細礫・極粗粒砂混じり砂である。遺物は出土していない。

ＳＤ 2200（第 91・114 図）　17 グリッド、古墳 6 の北側に位置する北東－南西の溝である。検出長約 7m、幅 0.4 ～ 0.6m、深さ 0.05 ～ 0.1 m、断面形状は「Ｕ」字状で、底面は両端で約 0.1m の比高差を以って北へ下る。埋土は 2 層に分けられ、上層は黒褐色砂質シルト、下層は基盤層の偽礫が多く混じる褐灰色砂混じりシルトである。遺物は土師質の土器片がわずかに出土した。

ＳＤ 2201（第 91・114 図）　17 グリッド、古墳 6 の北側に位置する南北溝で、ＳＤ 2303 を切る。

検出長約 4m、幅約 0.75m　深さ約 0.25m を測る。断面形状は「U」字状で、底面の比高差はほとんどなかった。埋土は 2 層に分けられ、上層は黒褐色砂混じりシルト、下層は基盤層の偽礫を主体とする。遺物は土師質の土器片がわずかに出土した。尚、本溝の東側には、北北東－南南西の並行する浅い溝群が並ぶ。検出長は 0.5 ～ 3.5 m、幅は 0.3 ～ 1.0m、深さ 0.03 ～ 0.07m を測る。埋土はすべて包含層と近似した褐灰色砂質シルトで、基盤層との層界には澱みがみられる。遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土器片が出土した。層位的に見てＳＤ 2201 開削以前のものとみられるが、その用途や時期は不明である。

ＳＤ 3029（第 92・114 図）　26 グリッド、古墳 2 の墳丘部南辺に沿って位置する、北西－南東に走る溝である。検出長 4.5m、幅 0.6 ～ 0.9m、深さ約 0.1m を測る。断面形状は浅い「U」字状である。埋土は 3 層に分けられ、上層は暗褐色砂質シルト、中層は褐色砂質シルト、下層はにぶい黄褐色砂質シルトである。遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土器片がわずかに出土した。

ＳＰ 2046（第 92・114 図）　20・25 グリッド、ＳＤ 2005 の南側に位置する。直径 0.3m、深さ 0.04m を測る。断面形が皿状のピットの底面の西方に偏在して、直径 0.1m、底面からの深さ 0.03m を測る小穴がある。埋土は 2 層に分けられ、上層は基盤層の偽礫が混じる褐灰色砂質シルト、下層は褐灰色砂質シルトである。遺物は弥生土器と思われる土器片がわずかに出土した。

ＳＰ 2048（第 92・114 図）　20・25 グリッド、ＳＤ 2005 の南側に位置する。ＳＰ 2047・2049 を切る。長径 0.35m、短径 0.25m、深さ 0.15m を測る。埋土は基盤層の偽礫が混じる褐灰色砂質シルトである。遺物は弥生土器と思われる土器片がわずかに出土した。

ＳＰ 2054（第 114 図）　20 グリッド、ＳＤ 2005 とＳＤ 2006 の間に位置する。直径 0.23m、深さ 0.04m を測る。埋土は基盤層の偽礫がわずかに混じる褐灰色砂質シルトである。遺物は弥生土器と思われる小片がわずかに出土した。

ＳＰ 2076（第 114 図）　17 グリッド、古墳 6 の墳丘部分に位置する。直径 0.25m、深さ 0.3m を測る。埋土は 2 層に分けられ、上層は褐灰色シルト質中粒砂、下層は基盤層の偽礫が混じる褐灰色シルト質砂である。柱痕は確認できなかった。遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土器片が出土した。

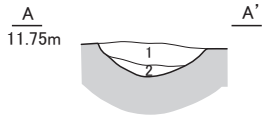
ＳＰ 2099（第 114 図）　20 グリッド、古墳 6 の東側に位置する。直径 0.28m、深さ 0.06m を測る。埋土は基盤層の偽礫が混じる褐灰色砂混じりシルトである。遺物は土師質の土器片がわずかに出土した。

ＳＰ 2105（第 114 図）　20 グリッド、古墳 6 の東側に位置する。東側肩部が検出されたのみで規模は不明である。長径 1.1m、深さ 0.22m を測る。埋土は 3 層に分けられ、上層は褐灰色砂質シルト、中層は灰黄褐色砂混じりシルト、下層は主に基盤層の偽礫からなる。遺物は弥生土器と思われる小片がわずかに出土した。

ＳＰ 3006（第 114 図）　30 グリッド、古墳 2 の南側に位置する。長径 0.4m、短径 0.22m、深さ 0.06m を測る。埋土は基盤層の偽礫が混じる褐色砂質シルトである。遺物は土師質の土器片がわずかに出土した。

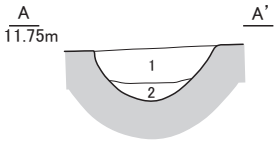
ＳＰ 3030（第 114 図）　20 グリッド、古墳 1 の北側に位置する。直径 0.2m、深さ 0.03m を測る。埋土は灰黄褐色極粗砂混じりシルトである。遺物は土師質の土器細片がわずかに出土した。

ＳＰ 3034（第 114 図）　31 グリッド、古墳 1 の北側に位置する。長径 0.5m、短径 0.3m、深さ



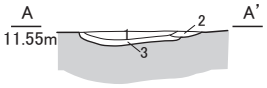
1　10YR3/1 黒褐色砂質シルト
2　基盤層の偽礫が混じる
　　10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト

SD2200



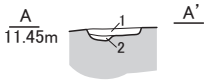
1　10YR3/1 黒褐色砂混じりシルト
　（炭化物含む）
2　基盤層の偽礫に 1 が混じる

SD2201



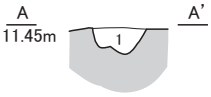
1　10YR3/3 暗褐色砂質シルト
2　10YR4/4 褐色砂質シルト
3　10YR4/3 黄褐色砂質シルト

SD3029



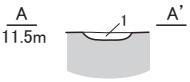
1　基盤層の偽礫が混じる
　　10YR4/1 褐灰色砂質シルト
2　10YR4/1 褐灰色砂質シルト

SP2046



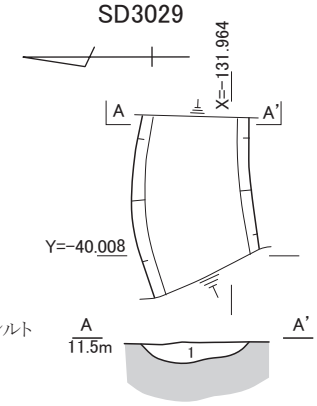
1　基盤層の偽礫が混じる
　　10YR4/1 褐灰色砂質シルト

SP2048



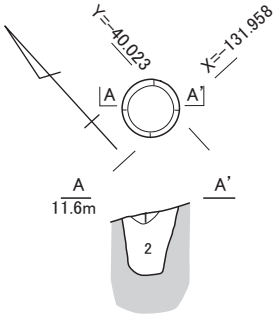
1　基盤層の偽礫が混じる
　　10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト

SP2054



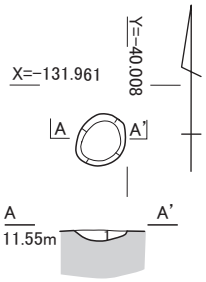
1　基盤層の偽礫が混じる
　　10YR4/1 褐灰色極細粒砂
　　混じり砂質シルト

SD2103



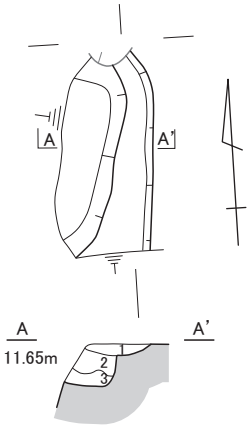
1　10YR4/1 褐灰色シルト混じり砂
2　基盤層の偽礫が混じる
　　10YR4/1 褐灰色シルト質砂

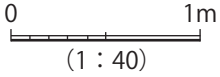
SP2076



1　基盤層の偽礫が混じる
　　10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト

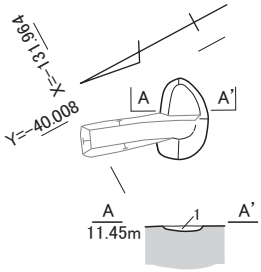
SP2099





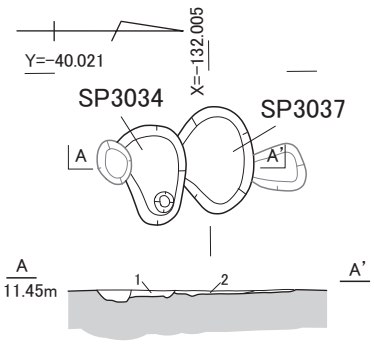
1　10YR5/1 褐灰色砂質シルト
2　10YR5/2 灰黄褐色砂混じりシルト
3　基盤層の偽礫に 2 が混入する

SP2105



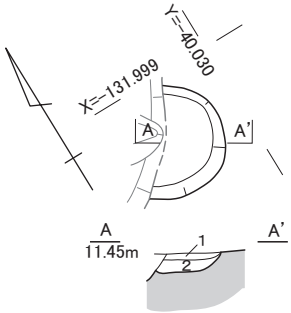
1　10YR4/6 褐色砂質シルト

SP3006



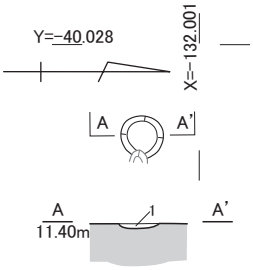
1　基盤層の偽礫が混じる
　　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト
2　基盤層の偽礫が混じる
　　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト

SP3034・3037



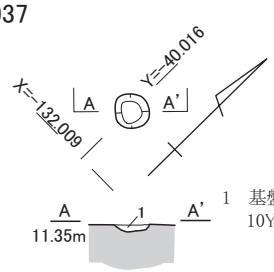
1　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト
2　10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト

SP3076



1　10YR5/2灰黄褐色粘質砂

SP3030



1　基盤層の偽礫が混じる
　　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト

SP3099

第 114 図　各遺構平面・断面図

0.03m を測る。皿状を呈する底面には、西側に偏在して径 0.05m、深さ 0.03m を測る小穴がある。埋土は基盤層の偽礫が混じる灰黄褐色砂質シルトである。遺物は土師質の土器片がわずかに出土した。

ＳＰ 3037（第 114 図） 31 グリッド、古墳 1 の北側に位置する。長径 0.52m、短径 0.35m、深さ 0.02m を測る。埋土は基盤層の偽礫が混じる褐色砂質シルトである。遺物は土師質の土器片がわずかに出土した。

ＳＰ 3076（第 114 図） 26 グリッド、古墳 1 の北側に位置する。古墳 5 周溝に切られるため全形は不明であるが、検出面での径 0.57m、深さ 0.11m を測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトである。遺物は器種不明の須恵器片が出土した。

ＳＰ 3099 （第 114 図） 30 グリッド、古墳 1 の東側に位置する。直径約 0.15m、深さ約 0.04m を測る。埋土は基盤層の偽礫が混じる灰黄褐色砂質シルトである。遺物は土師質の土器片がわずかに出土した。

4）Ⅳブロック（Ｂ区中央）・Ⅴブロック（Ｃ区中央）の遺構・出土遺物（第 115 ～ 128 図）

伏在する開析谷の影響から、流路と流路に向かって落ち込むような凹地が広がる。流路を境に基盤層の様相に差異が認められ、西側は締まりの良い粘土・シルトが主体となり、列状土坑群が並ぶ。他に検出した遺構は、古墳、古墳時代～古代の溝・土坑・ピットなどがある。

ＳＫ 125（第 117 図） 22 グリッドに位置する。当初は列状土坑群として扱っていた。平面形は楕円形を呈する。長形 1.25m、短径 0.95m、深さ約 0.4m を測る。埋土は 4 層に分けられ、上層は包含層に近似する黒褐色砂質シルト、中層は基盤層の偽礫が混じるにぶい黄褐色砂質シルト、下層は基盤層の偽礫を含む褐灰色砂質シルトで構成される。埋土上層から弥生時代後期後半の土器が出土した。遺物は 4 点を図示した（**第 117 図　460 ～ 463**）いずれも弥生土器である。

460 は広口壺である。口縁部は外反し、端部は面を成す。

461 ～ 463 は甕である。**461・462** は平底、**463** はドーナツ底である。**461** は外面にタタキを施す。

古墳 5 （第 118・119 図） グリッド 26・27 に位置する。撹乱の影響を大きく受けているが、墳形は直径 15 m前後の円墳と推測される。東周溝は古墳 2 の西周溝をわずかに切る。西周溝はＳＤ 2071 に墳端まで切られる。周溝の外形は判然としないが、南北に広がりを呈し、規模は幅 2.5 ～ 5 m、内側の肩から深さ 0.3 ～ 0.4 mを測る。底面はほぼ平坦である。墳丘部分では墳丘盛土や埋葬施設は確認できなかった。基盤層の削り出し部分を残して削平されているとみられる。周堤部も削平されており、墓道等の外部構造は確認できなかった。

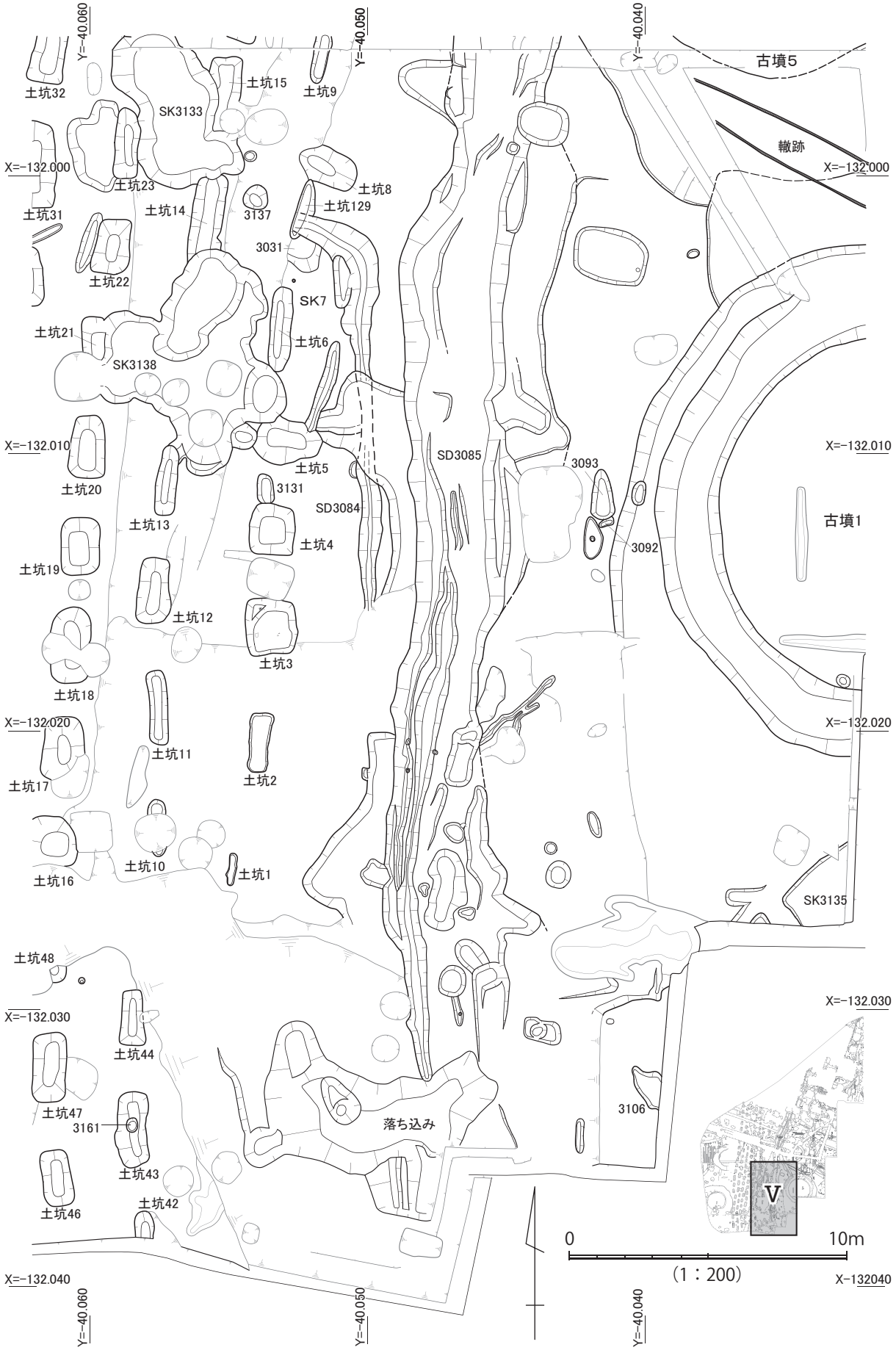
周溝埋土は概ね 3 層に分けられる。上層は包含層に近似した灰黄褐色砂質シルト、中層は褐灰色砂質シルトなどで構成される。下層は基盤層の偽礫が混じる灰黄褐色砂混じりシルトである。周溝埋土上層から須恵器が出土したが、埴輪はほとんど認められなかった。

遺物は 9 点を図示した。（**第 119 図　464 ～ 472**）いずれも須恵器である。

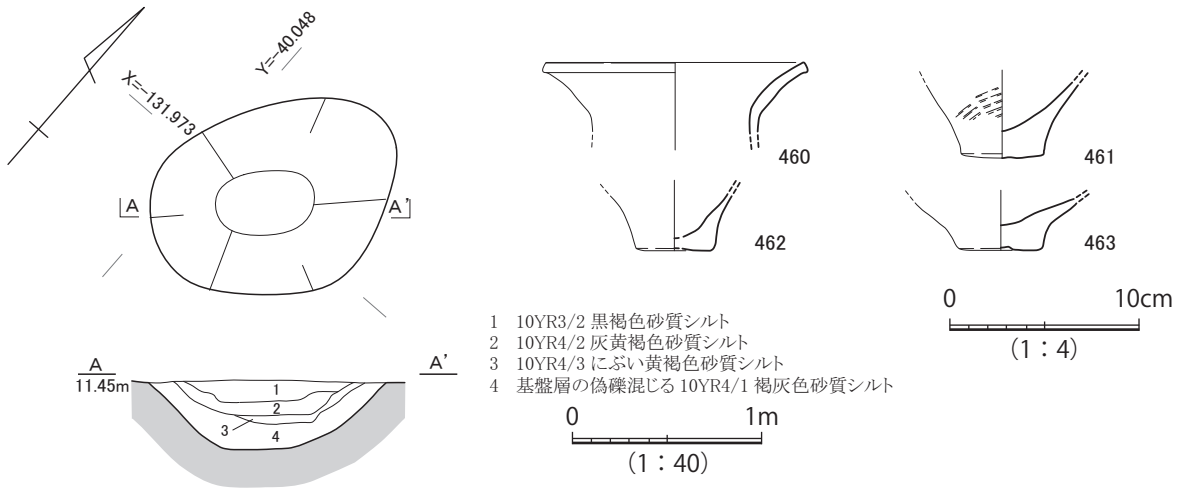
464 ～ 467 は杯身である。いずれも受け部は水平に延び、口縁部は内傾する。**465** は内面に、**467** は内外面に回転ナデの痕跡が段になって残る。**465・467** とも外面に自然釉が付着する。古墳 1 の **451** と同一個体の可能性がある。

468 ～ 470 は壺である。**468** は口縁部が外反し、端部は面を成す。外面は褐灰色を呈する。**469** は口縁部が外傾する。端部は肥厚し、面を成す。外面に自然釉がかかる。**470** は凹線文 2 条を施す。**471** は短頸壺である。口縁部は直立するが、端部は欠損する。ＴＫ 10 型式新段階のものか。

第 115 図　Ⅳブロック（B区中央）平面図



第 116 図　Vブロック（C区中央）平面図



第 117 図　ＳＫ 125 平面・断面・出土遺物実測図

472 は提瓶である。扁平な体部と細い頸部をもつ。口頸部は外反して延び、端部は面を成す。体部外面にカキメを施す。

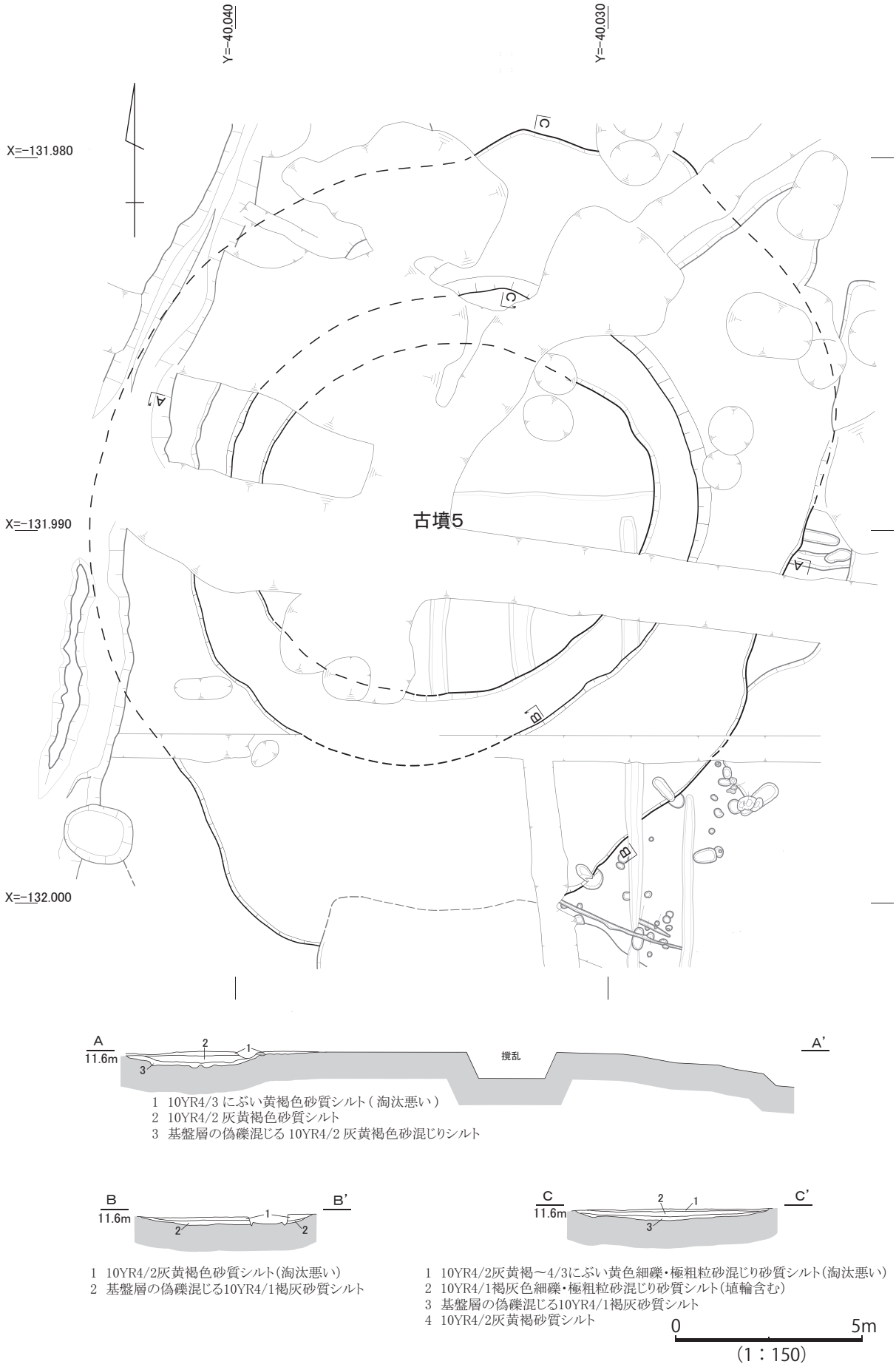
古代の遺構

ＳＤ 2070・2071・3085（第 120 ～ 123 図）　21・22・27・32・36 グリッドに位置する。当初は、１条の自然河道と思われたが、調査の進捗とともにＳＤ 2070 とＳＤ 2071 の２条となることが判明した。ＳＤ 2070 は、古墳６の西側から北北東－南南西に延び、古墳５の北西で南－北方向に角度を変え、更にほぼ直線的に延びる。Ｃ区内ではＳＤ 3085 と呼称しているが、一連のものである。ＳＤ 3085 は調査地南端部で旧古池に相当する場所に行きつく。この場所は工場の建設まで溜池として利用されていたため、その埋土には大量の近現代廃棄物を含む。埋土は池底まで浚えたが、その底部には流線や落ち込みの痕跡が認められる。ＳＤ 2070 とＳＤ 3085 とを合わせた長さは約 70 ｍを測る。幅は北側で２～ 2.5 ｍ、南側 (ＳＤ 3085) で４ｍ前後、深さは１ｍ前後を測る。底面は南北で約 0.9 ｍの比高差がある。断面形状は逆台形を呈する。埋土はレンズ状に 10 層程に分けられ、上層は凹地を充填する淘汰の悪い土壌もしくはそれに類する堆積層が陥入する。流路を最終的に埋積した層であり、古代の土師器・須恵器や 10 世紀後葉の黒色土器などが出土する。中層は砂質シルトなど、下層は礫混じりのシルト質砂で構成され、弥生土器が出土した。

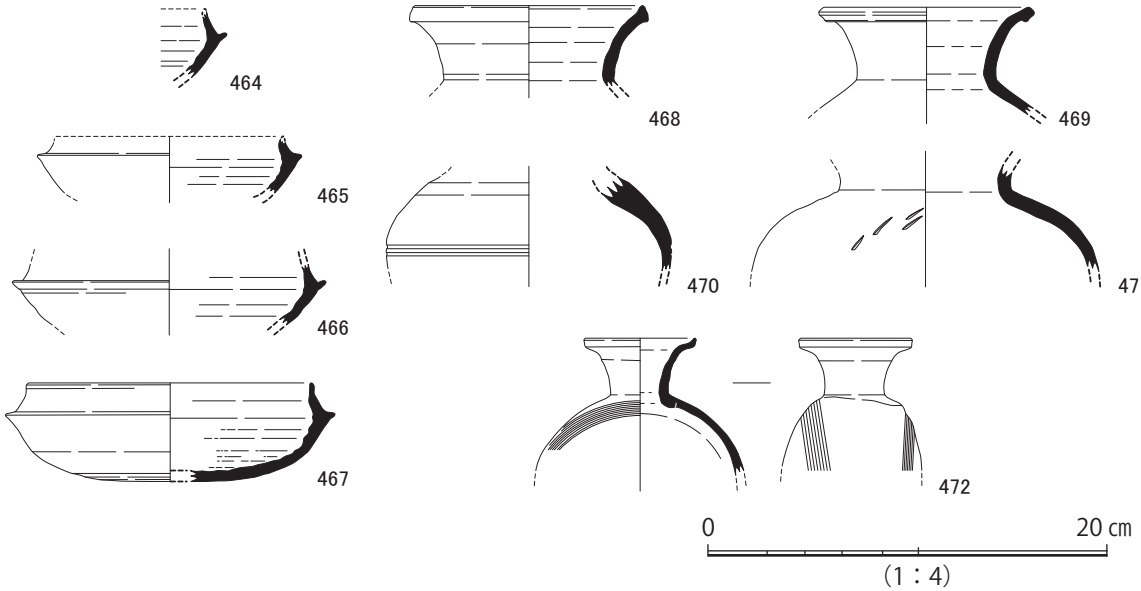
ＳＤ 2071 は、ＳＤ 2070 の左側をやや蛇行しながら並行して延びる。幅１～２ｍ、深さ約 1.2 ｍを測り、断面形「Ｖ」字形を呈する。底面は北端からＳＤ 2070 と切り合うあたりまでは、ほとんど比高差が認められない。埋土は４層程に分けられる。上層はＳＤ 2070 の上層に連なる淘汰の悪い土壌化層、中層は細礫・極粗粒砂の混じるシルト質砂などである。下層は粗砂が主体である。遺物は弥生土器や古式土師器、土師器、須恵器が出土した。特に下層からは、古墳５・６に由来すると思われる埴輪や須恵器が、７世紀頃の土師質土器羽釜とともに出土した。

ＳＤ 3085 は、その底面に「Ｖ」字形の断面形が特徴的なＳＤ 2071 の流線が明確に刻まれ、古墳時代の須恵器などが出土している。埋土はレンズ状に 15 層ほどに分けられ、流路の争奪を示す複雑な堆積が認められる。

流路の消長は不明であるが、地形的にみて開析谷を伏在する凹地に刻まれたガリー侵食に由来し、弥生時代後期頃の段階で、直線的で平坦な溝底の流路であるＳＤ 2070 へ改修された可能性がある。後に幅狭ながら流路として機能的な形状のＳＤ 2071 が開削されたとみられる。７世紀頃を目安とし



第 118 図　古墳 5 平面・断面・断割図



第 119 図　古墳 5 出土遺物実測図

てＳＤ 2071 が主流となる時期があり、古墳の遺物をさかんに流下させたと推測される。流路が完全に機能を停止するのは、埋土上層の黒色土器の年代から 10 世紀後葉頃と考えられるが、流路南端の落ち込み底部からは古墳時代の土師器とともに 12 世紀頃の土師質土器鍋が出土しており、第 1 遺構面の条里形成直前段階まで存続していた可能性がある。

遺物は 26 点を図示した。（**第 122・123 図　473 ～ 498**）出土層位・地点毎に分けて報告する。

ＳＤ 2070・2071 上層出土遺物（第 122 図　473 ～ 477）

473 は黒色土器Ｂ類椀である。幅の広い低い三角形状の高台をもつ。10 世紀後葉のものである。

474 は須恵器杯である。断面台形状の高台をもつ。8 ～ 9 世紀のものか。

475 は弥生土器甕である。ドーナツ底である。

476 は土師器羽釜である。強く外反する口縁部をもつ。端部は上方に摘み上げ、面を成す。口縁部直下に鍔を巡らせる。摂津Ａ型である。7 世紀代のものである。

477 は土師器甕である。口縁部は外反するが、端部は欠損する。

ＳＤ 2071 上・中層出土遺物（第 122 図　478 ～ 480）

478 は須恵器杯蓋である。天井部は回転ケズリによって平らになっている。天井部と口縁部の境に凹線が巡る。口縁端部は丸く収める。内面に火膨れが多数認められる。ＴＫ 10 型式古段階のものか。

479 は須恵器杯身である。受け部は短く水平に延び、口縁部は内傾して立ち上がる。端部は丸く収める。

480 は弥生土器高杯である。中空の脚柱部である。杯部とは接合法によって接合する。

ＳＤ 2070 下層出土遺物（第 122 図　481・482）

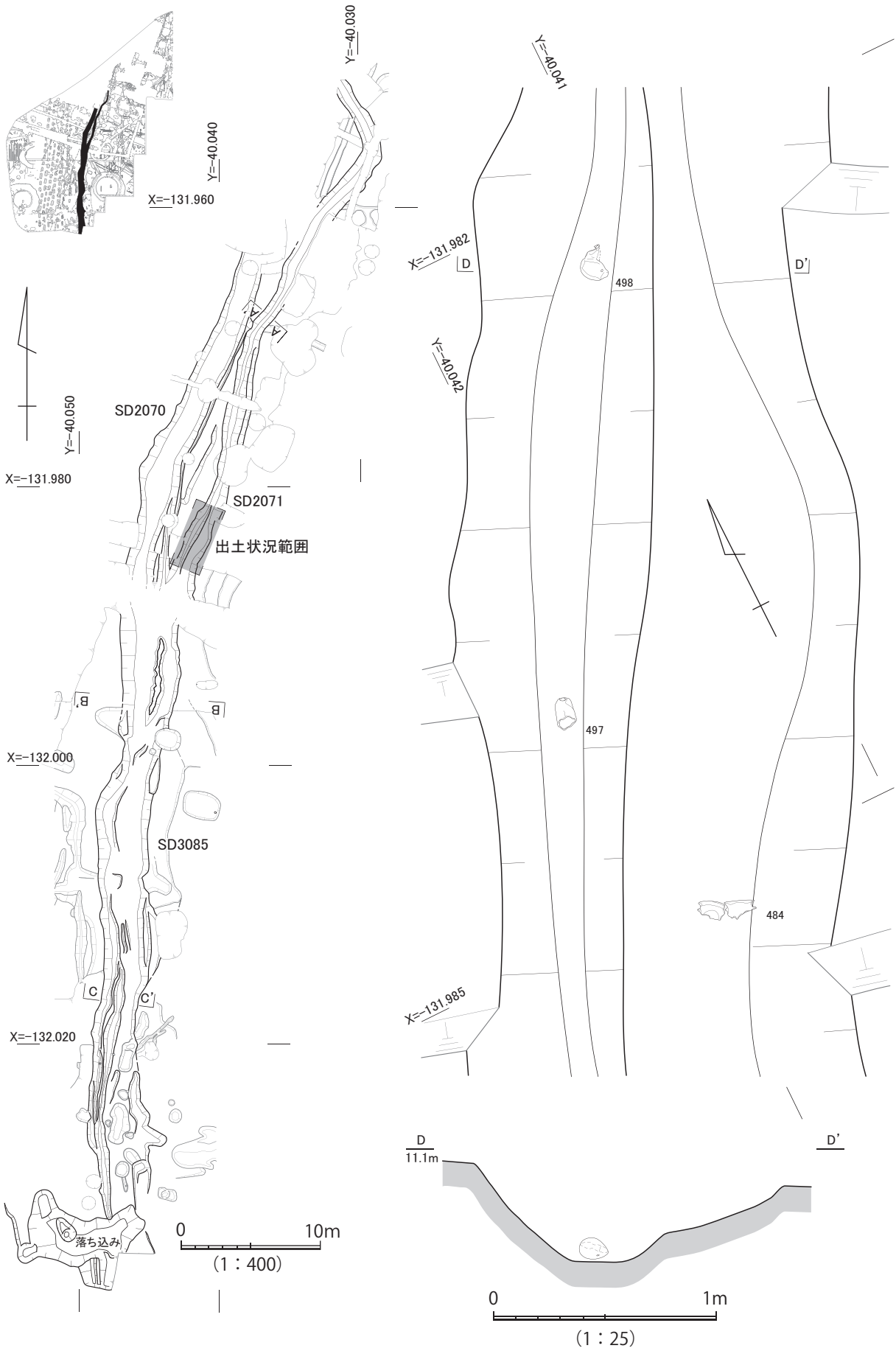
481・482 は弥生土器壺である。**481** はドーナツ底、**482** は平底である。

ＳＤ 2071 下層出土遺物（第 122・123 図　483 ～ 486・493 ～ 498）

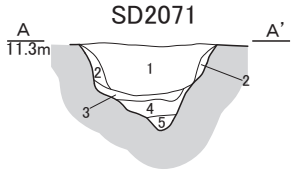
483 は須恵器杯である。底部から口縁部が外傾して立ち上がる。8 世紀初め頃のものか。

484 は土師器羽釜である。強く外反する口縁部をもつ。口縁部直下に鍔を巡らせる。体部外面にハケを施す。摂津Ａ型である。7 世紀代のものである。

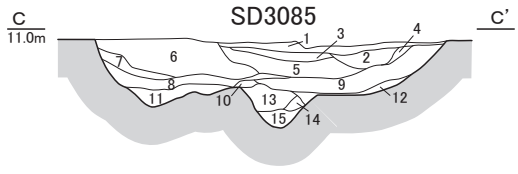
485 は弥生土器甕である。口縁部は外反するが、端部は欠損する。



第 120 図　ＳＤ 2070・2071・3085 平面図、ＳＤ 2071 下層遺物出土状況図

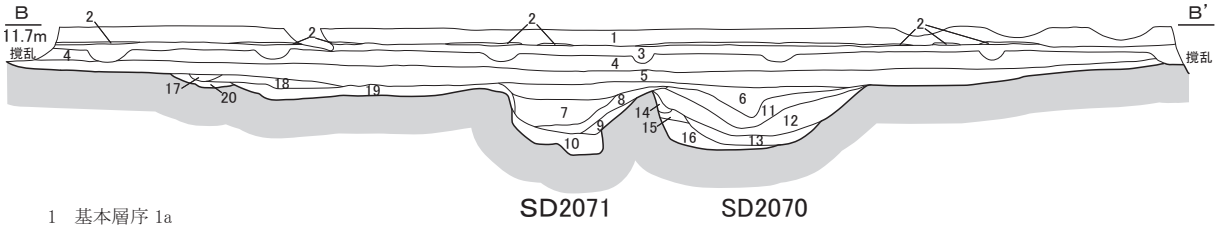


1　10YR4/1 褐灰色細礫・極粗粒砂混じり砂質シルト
2　1 に基盤層の偽礫が混じる
3　2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト
4　10YR4/1 褐灰色細礫・極粗砂混じりシルト質砂
5　10YR5/1 褐灰色細礫・極粗砂混じり砂



1　10YR4/4 褐色細礫・極粗粒砂混じり砂質シルト（淘汰悪い）
2　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（炭化物わずかに含む）
3　10YR4/2 灰黄褐色砂質砂質シルト
4　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
5　10YR5/4 にぶい黄褐色砂～砂質シルト（ラミナ認める、上方細流化）
6　10YR4/4 褐色砂質シルト（淘汰悪い、1. の再堆積か）
7　基盤層の偽礫混じる 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
8　基盤層の偽礫混じる 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
9　基盤層の偽礫混じる 10YR4/1 褐灰色砂質シルト
10　10YR3/1 黒褐色粘質シルト
11　10YR4/2 灰黄褐色砂～砂質シルト
12　基盤層の偽礫混じる 10YR6/2 オリーブ灰色粘質シルト
13　10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
14　13. の偽礫混じる 10Y6/2 オリーブ灰色粘質シルト
15　13. の偽礫混じる 10Y6/2 オリーブ灰色砂質シルト

（1：80）



1　基本層序 1a
2　基本層序 1b
3　基本層序 2
4　10YR4/2灰黄褐色～4/3にぶい黄褐色細礫・極粗粒砂混じり砂質シルト(淘汰悪い)
5　10YR4/2灰黄褐色細礫・極粗粒砂混じり砂質シルト(淘汰不良)
6　10YR4/1褐灰色細礫・極粗粒砂混じり砂質シルト(淘汰不良)
7　10YR4/1褐灰色砂混じりシルト
8　10YR4/1褐灰色シルト質砂
9　基盤層の偽礫に8が混入する
10　10YR4/1褐灰色細礫混じりシルト混じり粗砂
11　10YR4/1褐灰色細礫混じりシルト質砂
12　10YR5/1褐灰色砂質シルト
13　5Y6/1灰色細礫・極粗粒砂混じり砂質シルト
14　基盤層の偽礫
15　2.5Y6/1黄灰色砂
16　5Y7/1灰白色細礫混じり粗砂
17　10YR4/1褐灰色シルト
18　2.5Y5/1黄灰色砂混じりシルト
19　10YR5/1褐灰色シルト質砂(ラミナ認める)
20　基盤層の偽礫が混じる10YR4/1砂質シルト

第 121 図　ＳＤ 2070・2071・3085 断面図

486 は弥生土器鉢である。底部は上げ底をもつ。外面にユビオサエを施す。

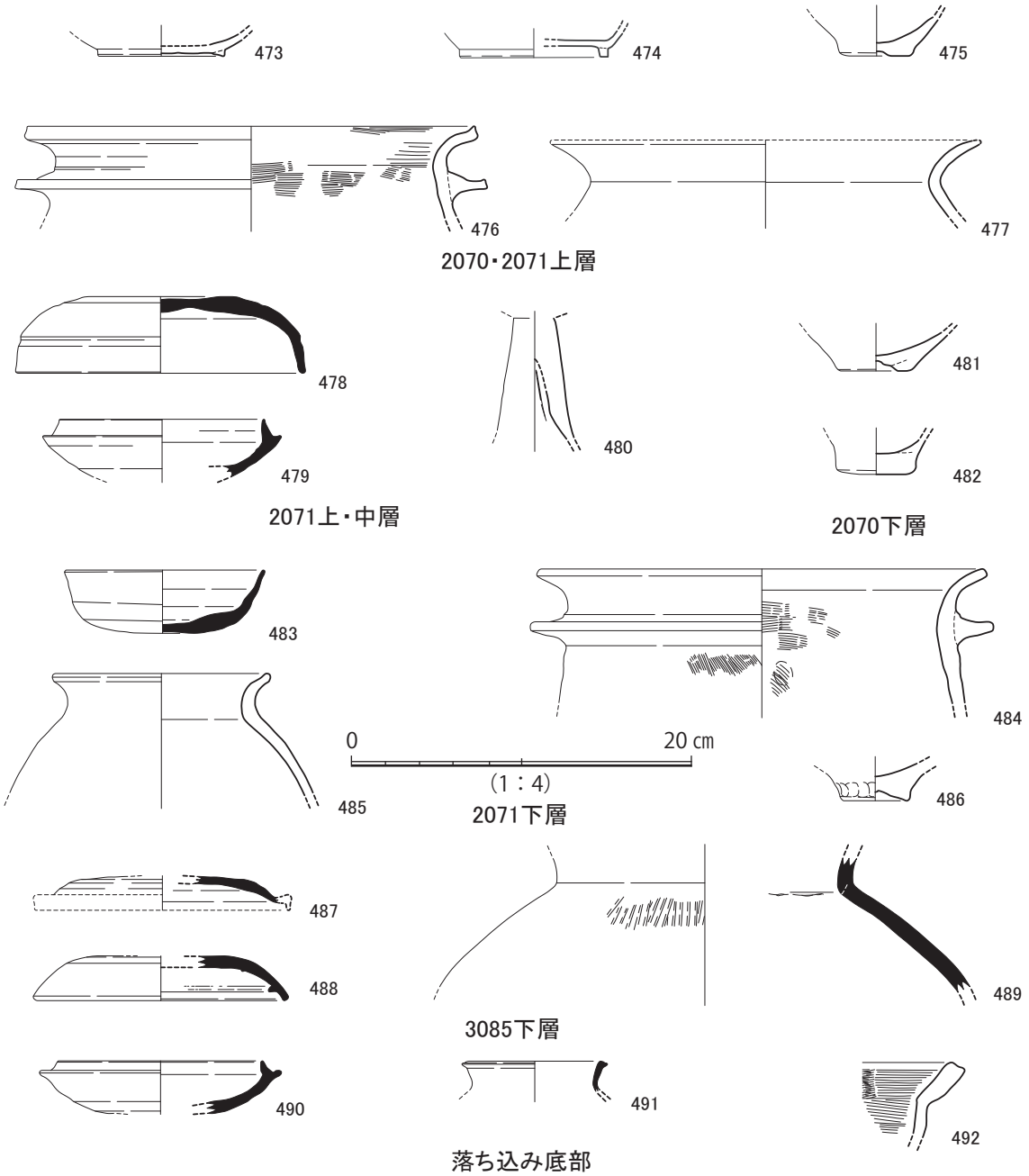
493 は朝顔形埴輪である。断面台形状の箍をもち、内傾して立ち上がる。外面にタテハケを施す。**494** は形象埴輪である。筒部で外反しながら立ち上がる。外面にナナメハケを施し、端面には圧痕が認められる。**495** は円筒埴輪である。幅広の扁平な箍をもつ。外面にやや斜め方向のタテハケを施す。楕円形ないし円形を呈する透かし孔が一部残存する。**496** は埴輪基部である。やや外傾して立ち上がる。端部に粘土接合痕が認められる。**497** は馬形埴輪である。頭部の先端部である。鼻孔は貫通する円孔、口は線刻によって表現する。口の両横に灰色を呈する部分が認められ、本来馬具などが表されていたものが剥落した可能性がある。**498** は鶏形埴輪である。頭部がほぼ完形で残存する。目は貫通する円孔、嘴は線刻によって表現する。頭頂部の鶏冠、頬、顎部分に剥離痕跡が認められることから、雄鶏形埴輪と考えられる。

ＳＤ 3085 下層出土遺物（第 122 図　487 ～ 489）

487・488 は須恵器蓋である。**487** の天井部は平らで、端部付近で下方に屈曲し、更に外方へ屈曲する。ＭＴ 21 型式のものか。**488** の天井部は丸みを帯び、口縁端部は丸く収める。内面のやや内側に下方に延びるかえりがみられる。内面に自然釉がかかり、溶着痕跡も認められる。ＴＫ 217 型式のものか。ＳＫ 3106 の **503** と同一個体の可能性がある。

489 は須恵器甕である。頸部から肩部が残存する。外面に自然釉がかかる。

落ち込み底部出土遺物（第 122 図　490 ～ 492）



第 122 図　ＳＤ 2070・2071・3085 出土遺物実測図

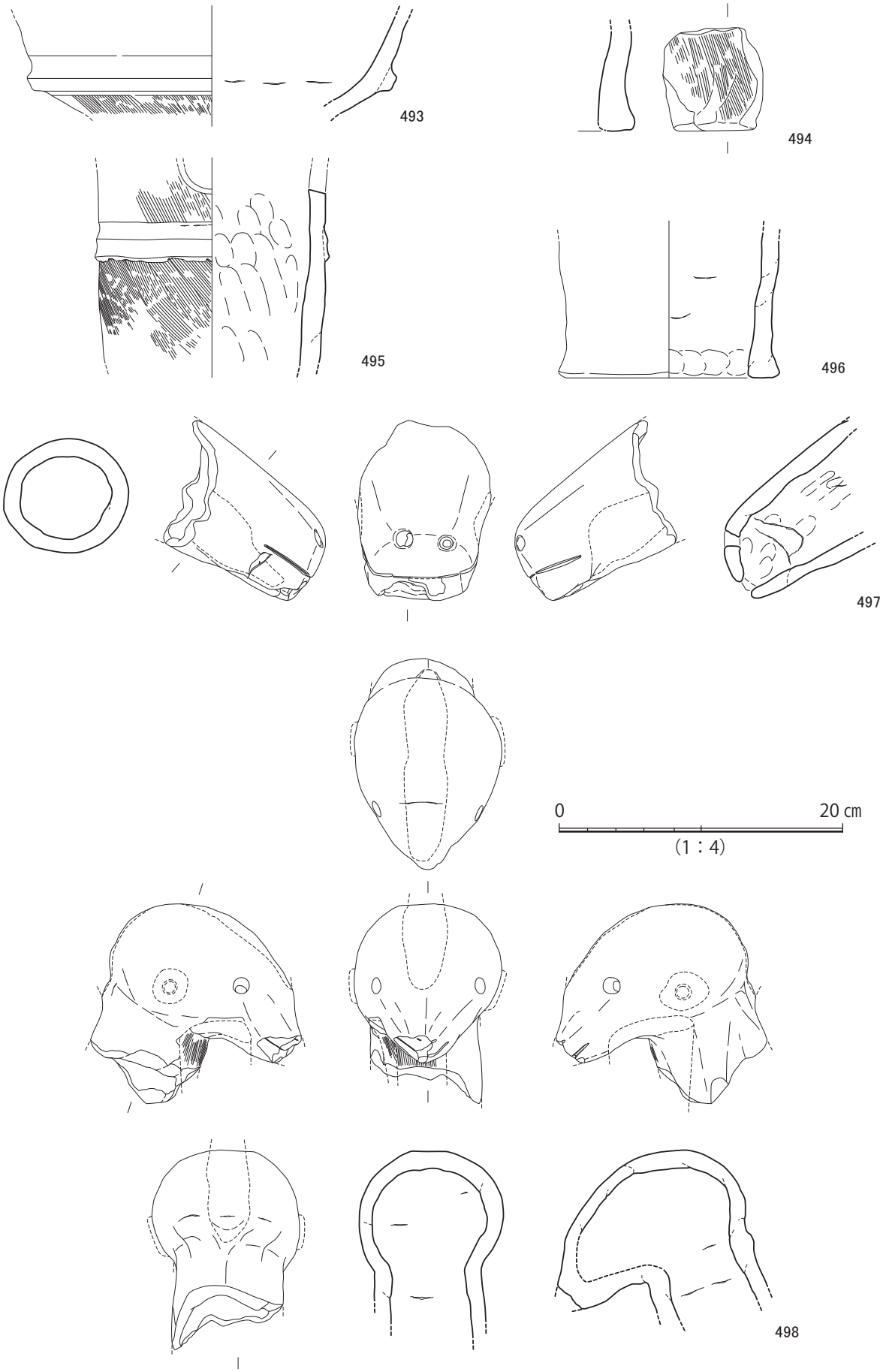
490 は須恵器杯身である。受け部はやや厚く、水平に延びる。口縁部は内傾し、短く立ち上がる。

491 は須恵器壺である。口縁部は外反し、端部は外方へ摘み出し、上部が面を成す。

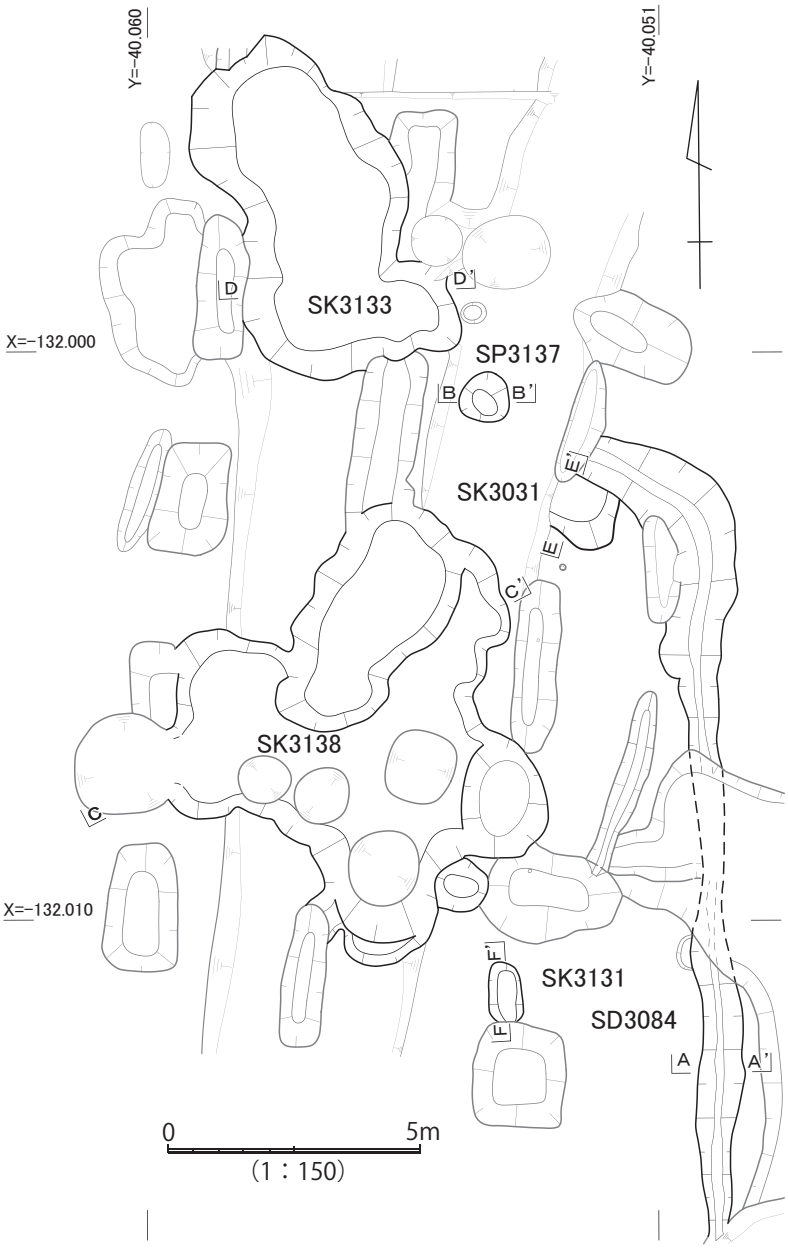
492 は土師質土器鍋である。体部から後円部が外方へ屈曲し、端部は面を成す。端面に凹線、体部外面と内面にハケを施す。口縁部内面に煤が付着する。12 世紀頃のものである。

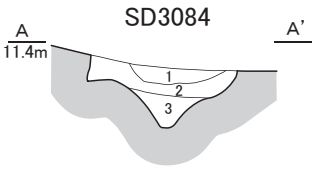
ＳＤ 3084（第 124 図）　32 グリッドに位置する。列状土坑 129 の西側から弧を描いて南北方向に延びる溝である。列状土坑 7・129 を切り、ＳＤ 3085 の西側を並行する。途中、流路に注ぐ浸食溝に切られる。検出長約 15 m、幅約 0.5 ～ 1.5 m、深さ 0.2 ～ 0.6 mを測る。埋土は暗灰黄色のシルトと砂からなり、下層は基盤層の偽礫が混じる。遺物はほとんど出土していない。

ＳＫ 3138（第 124・125 図）　32 グリッドに位置する。列状土坑 5 ・13・14・21 を切る。形状は不定形を呈する。東西最大径 16 m、南北最大径 16.5 m、深さ 1.2 mを測る大型の土坑である。埋土は近傍の土壌化層や基盤層に由来する埋め戻し土である。いわゆる粘土採掘坑の可能性が考えられ

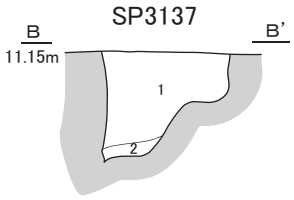


第 123 図　ＳＤ 2071 下層出土埴輪実測図



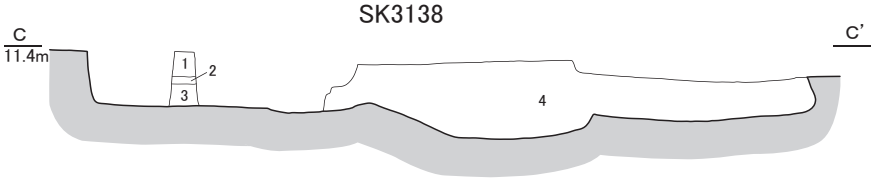


1　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト質
2　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質砂
3　基盤層の偽礫混じる
　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト



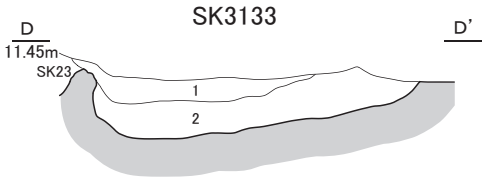
1　10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
　・10YR3/1 黒褐色砂質シルト
　・10YR4/1 褐灰色砂質シルトの
　偽礫からなる混土
2　10YR3/1 黒褐色砂質シルトと
　10YR4/1 褐灰色砂質シルトの互層

0　1m
(1：40)



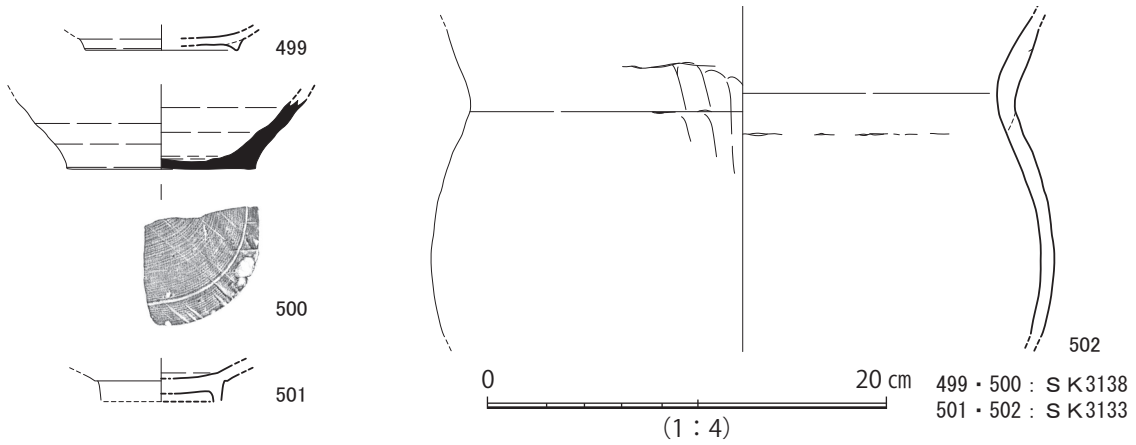
1　10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
2　10YR4/1 褐灰色シルト
3　基盤層の偽礫混じる 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
4　基盤層・10YR4/1 褐灰色砂混シルト・10YR4/2 灰黄褐色シルト質砂・
　7.5Y5/1 灰色砂質シルトの偽礫からなる埋め戻し土

0　2m
(1：80)

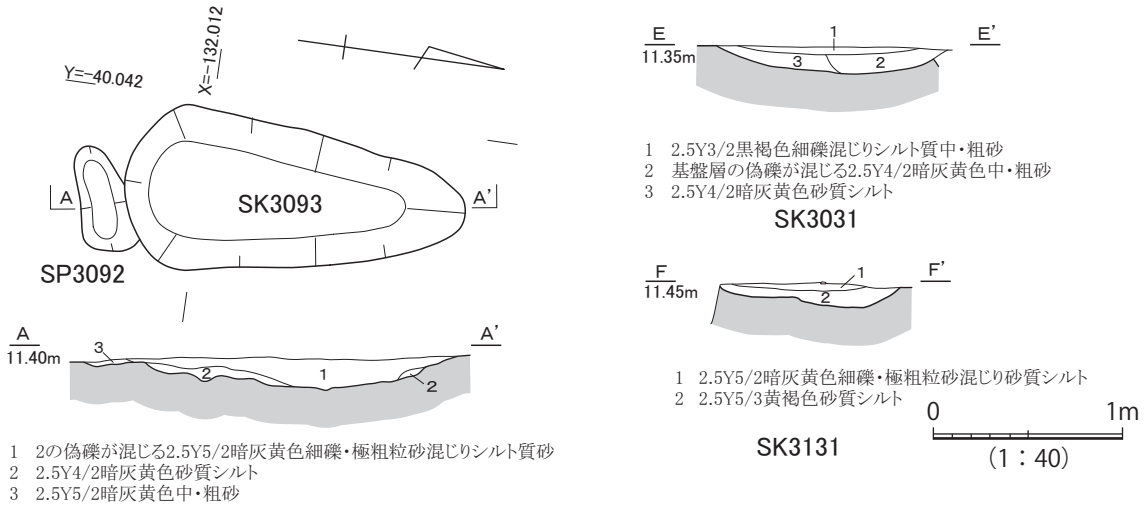


1　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト質
2　基盤層の偽礫を主体に 10YR4/1 褐灰色砂混シルト・
　7.5Y5/1 灰色砂質シルトなどの偽礫からなる埋め戻し土

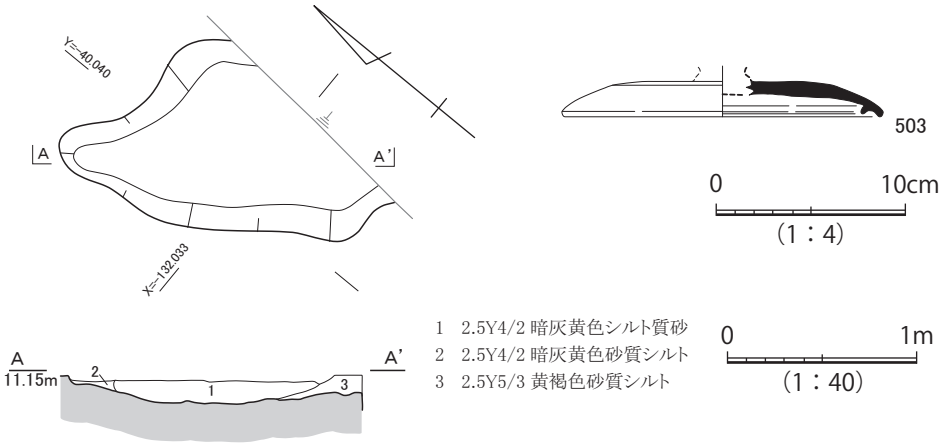
第 124 図　ＳＤ 3084・ＳＰ 3137・ＳＫ 3133・3138 平面・断面図



第 125 図　ＳＫ 3133・3138 出土遺物実測図



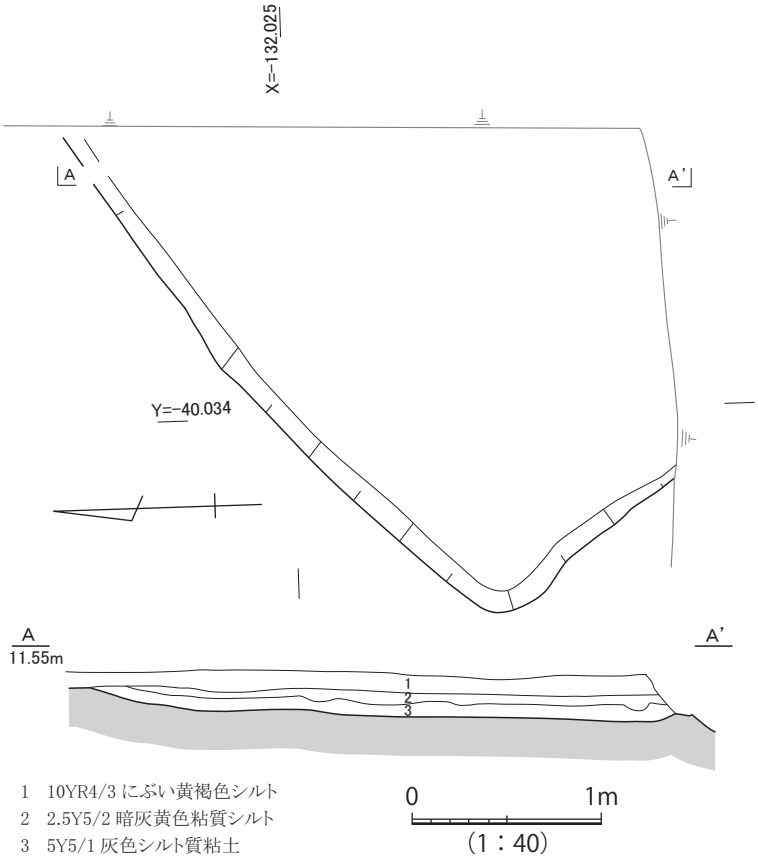
第 126 図　ＳＰ 3092・ＳＫ 3093 平面・断面、ＳＫ 3031・3131 断面図



第 127 図　ＳＫ 3106 平面・断面・出土遺物実測図

たが、本調査地では本土坑内を含め精良な粘土のまとまった堆積は見いだされておらず、用途は不明である。なお、切り合い関係にある列状土坑 21 から黒色土器（**499**）が出土しているが、本遺構の遺物が混入したと考えられるため、本項で報告する。

499 は黒色土器椀である。断面三角形状の高台をもつ。黒化しておらず、浅黄橙色を呈する。**500** は須恵器鉢である。平底の底部から、体部が外傾して立ち上がる。底部外面に回転糸切痕と平行線状の圧痕が認められる。また、内面は使用により平滑になっている。



第 128 図　ＳＫ 3135 平面・断面図

ＳＫ 3133（第 124・125 図）

27 グリッドに位置する。列状土坑 14・15・23・81 を切る。平面形状は不定形である。最大径 6 m、深さは 1 mを測る大型の土坑である。埋土は近傍の土壌化層や基盤層に由来する埋め戻し土である。

502 は土師質土器甕ないし鍋である。口縁部は外反し、端部は丸く収める。体部と口縁部の境にユビナデを施す。外面に煤が付着する。

501 は白磁碗である。高台内面以外に釉がかかる。高台は打ち欠かれており、土製円盤として加工した可能性がある。

ＳＫ 3106（第 127 図）　36 グリッドに位置する。東側を側溝に切られる。最大長 1.75 m、深さ約 0.12 m を測る。断面形状は浅い「U」字状を呈する。埋土は暗灰黄色シルト質砂などである。遺物は須恵器が出土した。

503 は須恵器蓋である。口縁端部に砂が溶着する。SD3085 の **487** と同一個体の可能性がある。ただし、**503** には内面の溶着痕は認められない。

ＳＫ 3135（第 128 図）　35 グリッドに位置する。東側と南側が調査区外であるため定かではないが、竪穴建物の一部となる可能性がある。西辺約 1.3 m、北辺約 3.5 m、深さ約 0.2 mを測る。底面は平坦で断面形は逆台形を呈する。埋土は３層に分けられる。褐灰色砂質シルトなどである。埋土最下層より土師質の土器片が出土したが、図示できるものはなかった。

ＳＫ 3031（第 124・126 図）　32 グリッドに位置する。西側が撹乱に破壊されており全形は不明であるが、平面形は歪んだ楕円形を呈する。ＳＤ 3084 を切る。東西径約 1.4m、南北径約 1.3m、深さ 0.14mを測る。断面形状は皿状を呈する。埋土は３層に分けられ、上層は黒褐色細礫混じりシルト質砂、下層は基盤層の偽礫混じる暗灰黄色中・粗砂と暗灰黄色砂質シルトである。遺物は土師質の土器細片がわずかに出土した。

ＳＰ 3137（第 124 図）　32 グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。直径約 0.85m、深さ 0.5m を測る。断面形は底部がスロープ状の不正な逆台形を呈する。埋土は基盤層の偽礫・黒褐色砂質シルト・褐灰色砂質シルト・灰黄褐色粗砂混じり砂質シルトの混土である。最下層ではラミナがみられるため、掘削直後は開口しており、近傍の物質とともに雨水が流れ込んだものと考えられる。遺物は出土していない。

ＳＰ 3092（第 126 図）　32 グリッド、古墳 1 西側に位置する。平面形は楕円形を呈する。長径 0.55m、短径 0.2m、深さ 0.06m を測る。断面形は東側が一段低い皿状を呈する。埋土は 3 層に分け

られ、いずれも中・粗砂である。遺物は土師質の土器片がわずかに出土した。

ＳＫ 3093（第 126 図） 32 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径 1.75m、短径 0.8m、深さ 0.15m を測る。断面形は浅いすり鉢状を呈する。埋土は 2 層に分けられ、上層は暗灰黄色中・粗砂が主体で、下層は基盤層の偽礫が混じる暗灰黄色砂質シルトである。遺物はサヌカイト片が一片出土した。

ＳＫ 3131（第 124･126 図） 32 グリッドに位置する。土坑 4 を切る。平面形は歪んだ楕円形を呈する。長径 1.05m、短径 0.55 m、深さ 0.13m を測る。断面形は北側が一段低い皿状を呈する。埋土は 2 層に分けられ、上層は暗灰黄色細礫・極粗粒砂混じり砂質シルト、下層は黄褐色砂質シルトである。遺物は須恵器小片が一片出土した。

５）Ⅵブロック（Ｂ区西側）・Ⅶブロック（Ｃ区西側）の遺構・出土遺物（第 129 ～ 133 図）

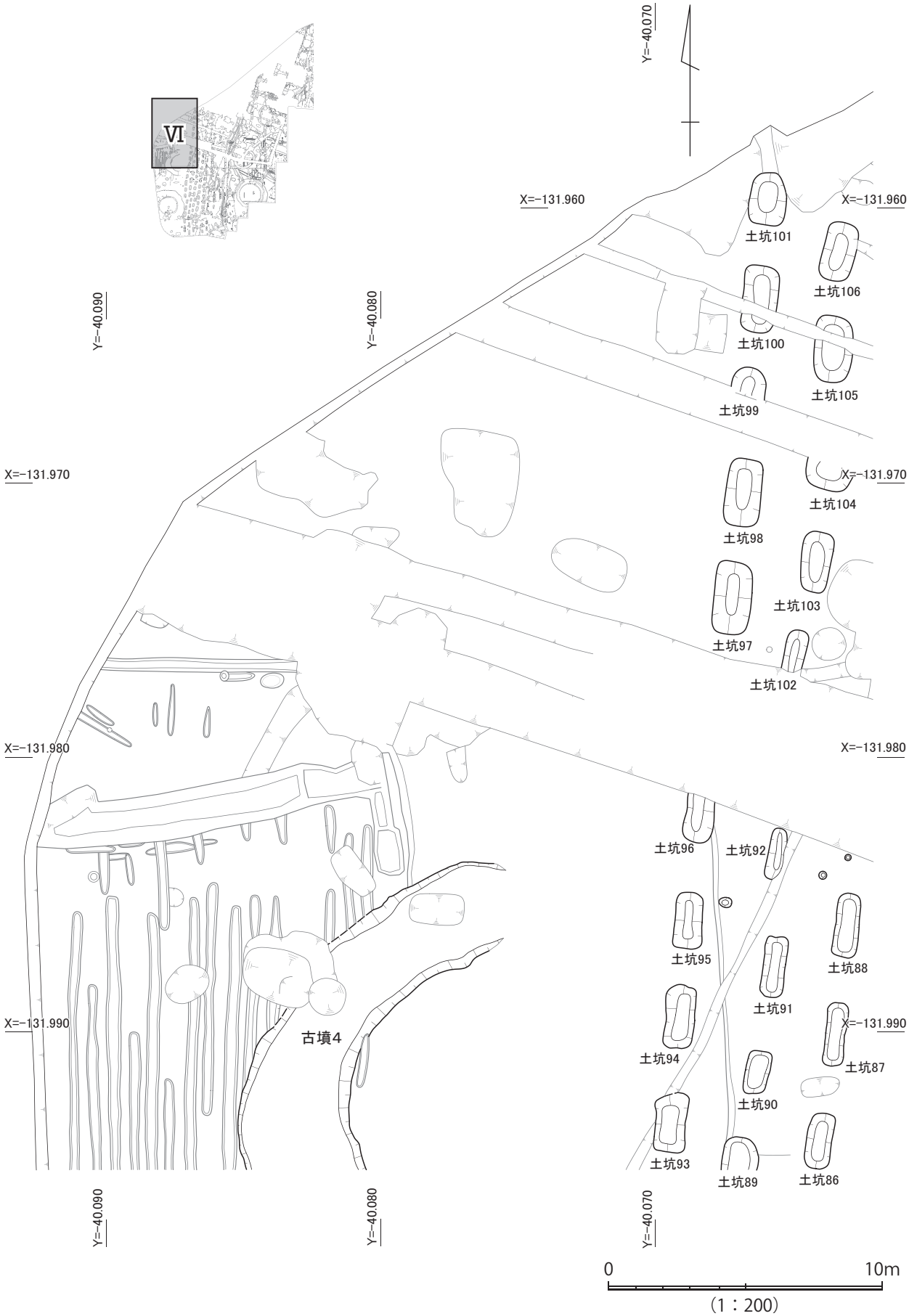
列状土坑群以西の遺構密度の低い区域である。検出された遺構は、列状土坑群の他、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土坑・ピット、古墳時代のピット、古代の土坑、時期不明の掘立柱建物などである。

古墳３（第 131 図） 33・34・37・38 グリッドに位置する。南側は撹乱で破壊されるが、墳形は直径約 12 mの円墳と推測される。周溝は検出した範囲内では完周し陸橋部は認められない。検出面での周溝の規模は、幅 4.0 ～ 5.5 m、深さは 0.25 ～ 0.4 mを測る。底面は基底部が深く、周溝外側は緩い傾斜を呈する。墳丘部分では、墳丘盛土や埋葬施設は確認できなかった。基盤層の削り出し部分を残して削平されていると考えられる。周堤部も削平されており、墓道等の外部構造は確認できなかった。周溝埋土は３層に分けられる。上層は淘汰の悪い褐色の砂質シルトである。中層はにぶい黄褐色粘質シルトなどである。溝内での強い土壌発達はみられない。下層は主に基盤層の偽礫からなる。遺物は出土していない。

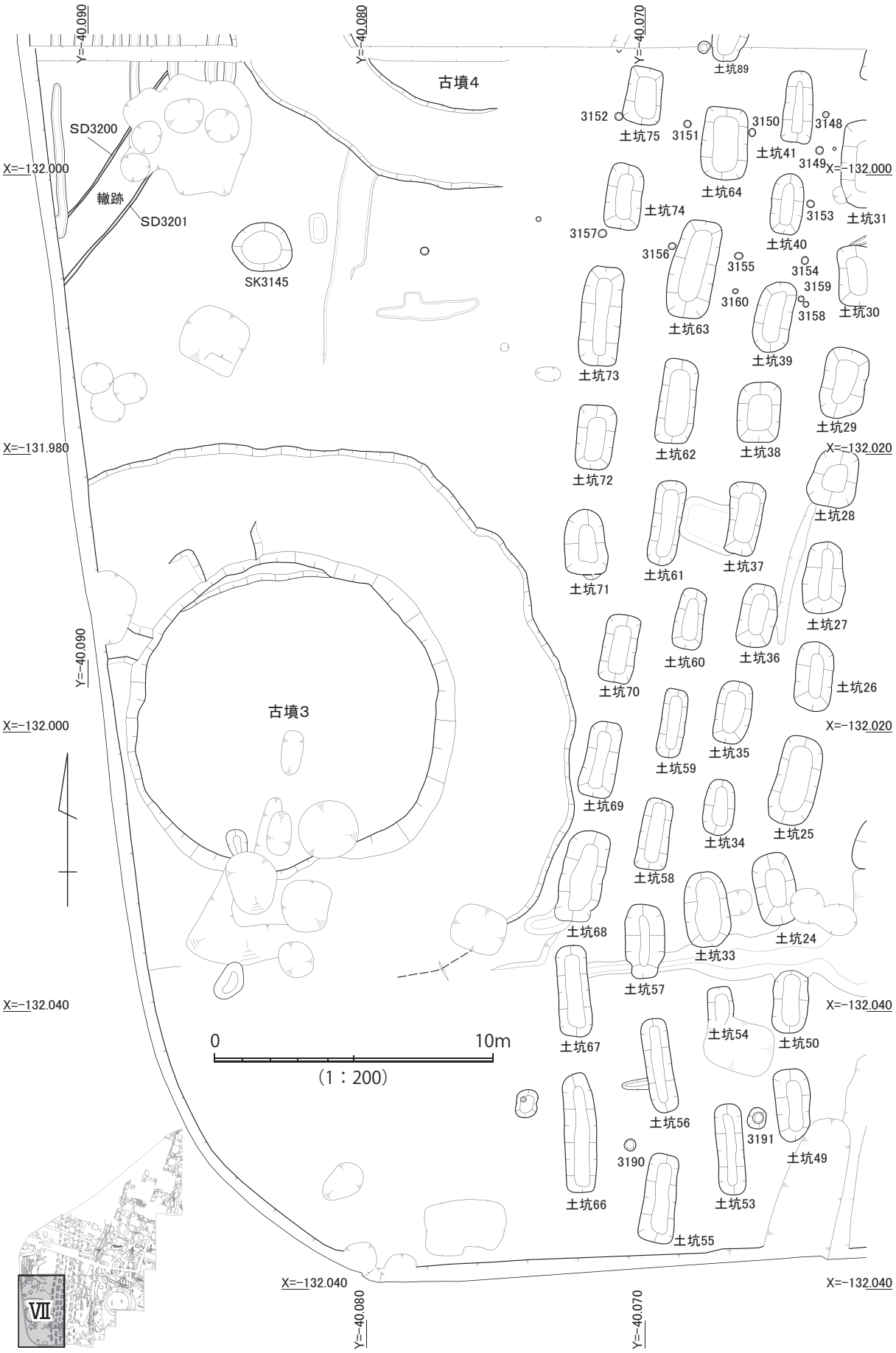
古墳４（第 132 図） 28・29 グリッドに位置する。東半部は周溝まで削平されているが、墳形は直径約 11 mの円墳と推測される。検出面での周溝の規模は、幅 3.0 ～ 4.0 m、深さは 0.07 ～ 0.2 m を測る。底面はほぼ平坦であるが、基底部がわずかに深くなる緩い傾斜を呈する。墳丘部分は基盤層の削り出し部分を残して削平されており、墳丘盛土や埋葬施設は確認できなかった。周堤も基盤層まで削平されており、墓道等の外部構造は確認できなかった。周溝埋土は上層が黒褐色砂質シルト、下層は主に基盤層の偽礫からなる。遺物は出土していない。

ＳＢ 01（第 133 図） 28・33 グリッドに位置する。ＳＰ 3148 ～ 3160 で構成される。列状土坑 39 ～ 41・63・64・74・75 と重複するが、いずれの土坑とも柱穴との切り合いは認められない。梁間 1 間･桁行 3 間の建物であり、切妻造の小規模な小屋に復元できる。主軸は東西からやや北に振る。検出面は緩い傾斜を有する。建物外周の隅柱が内側に寄り、東妻側の壁心に棟持柱がある。南北両面に下屋が付いていたとみられるが､一部しか検出できなかった。梁間長は 4 ～ 4.3 m､桁行長約 7.4 m、桁行の柱間は約 2.5 mを測る。建物の柱穴は、径 0.22 ～ 0.27 m、深さ 0.2 ～ 0.27 mを測り、隅柱が深くなっている。下屋の柱穴は径約 0.17 m、深さ 0.06 ～ 0.13 mである。柱穴の埋土はすべてわずかながら炭化物を含み、基盤層の偽礫が混じる黒褐色砂質シルトなどである。ＳＰ 3151・3155・3158 は柱痕跡が確認できる。いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

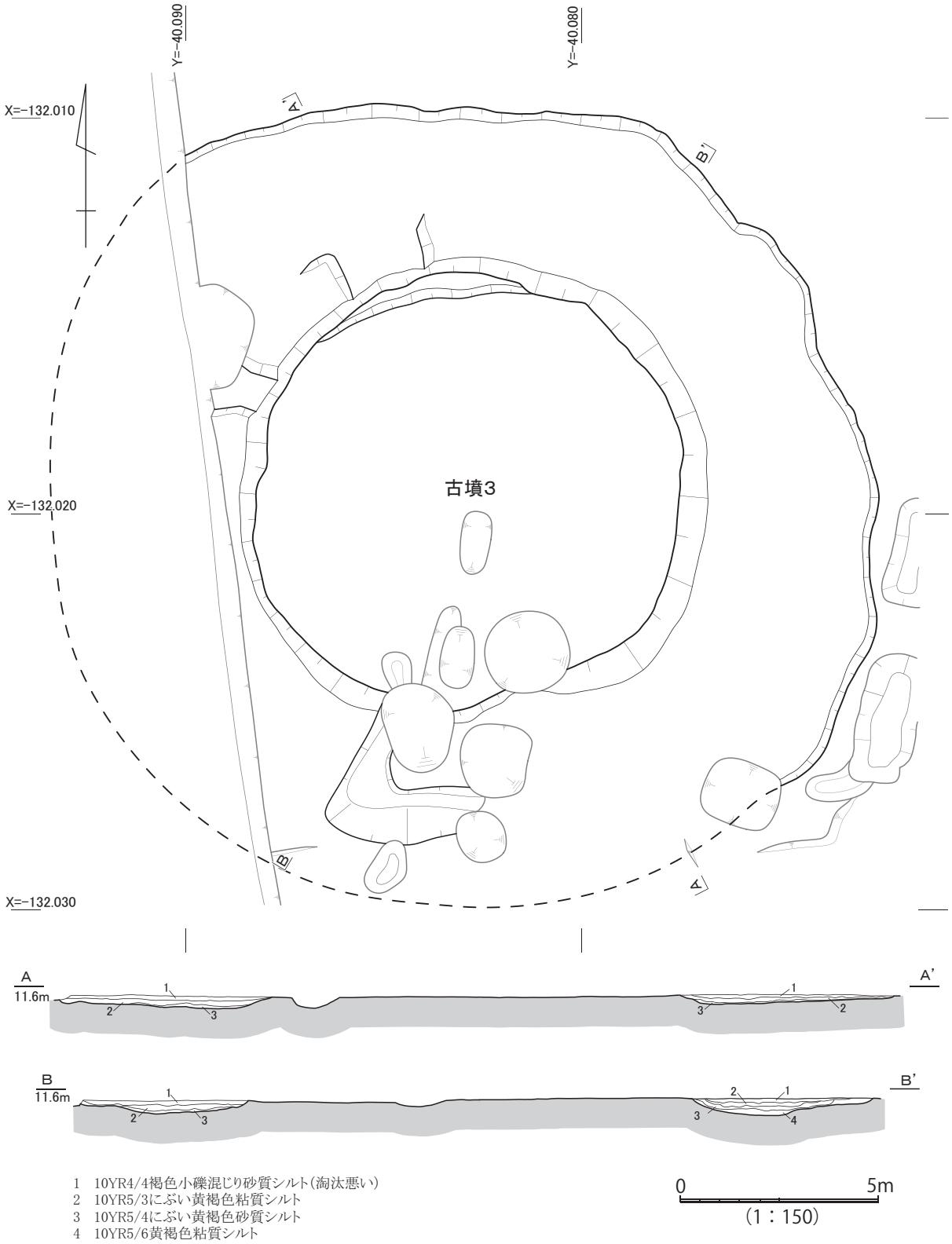
ＳＡ 01 (第 134 図) 36・37 グリッドに位置する。ＳＰ 3161・3190・3191 で構成される。ＳＰ



第 129 図　VIブロック（B区西側）平面図



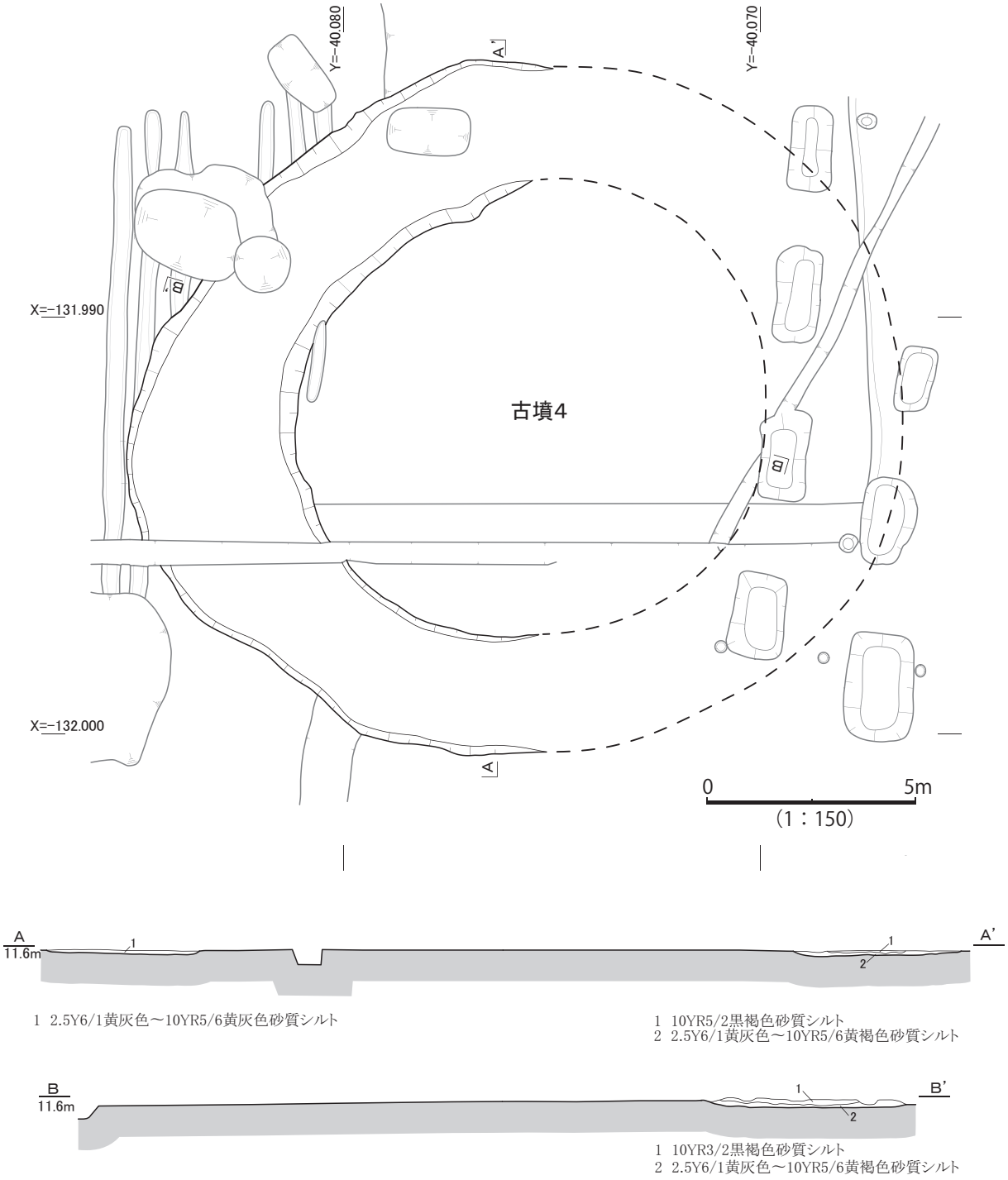
第 130 図　Ⅶブロック（C 区西側）平面図



第 131 図　古墳 3 平面・断面・断割図

3161 は列状土坑 43 を切る。柱間は 8m 前後を測るため、建物等としては考えにくいが、遺構密度の低い区域にあって東西方向に並ぶため、柱列として扱かった。柱穴の平面形は楕円形を呈する。長径 0.5 ～ 1.0m、短径 0.37 ～ 0.7m、深さ 0.27 ～ 0.45m を測る。埋土は褐色系の色調の砂質シルトが 2 ～ 5 層堆積する。遺物は出土していない。

ＳＫ 3145（第 135 図）　34 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径 2.15 m、短径 1.7 m、



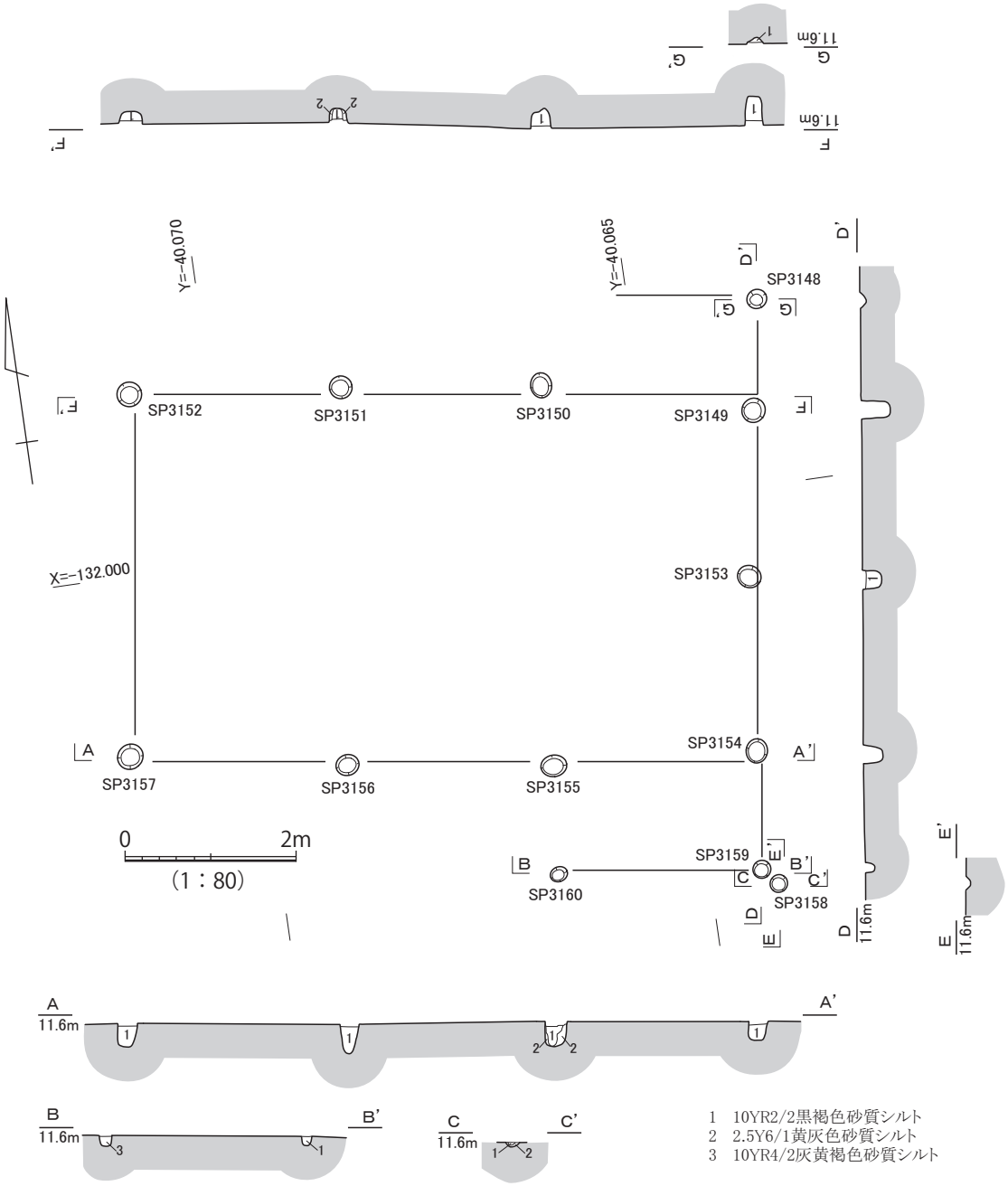
第 132 図　古墳４平面・断面・断割図

深さ約 0.35 mを測る。底面は平坦で断面形状は逆台形を呈する。埋土は３層に分けられ、上層が淘汰の悪い黄褐色砂質シルト、中層が基盤層の偽礫が混じる暗褐色砂質シルトである。下層はほとんどが基盤層の偽礫からなる。埋土中層よりほぼ完形の土器が一点出土した。

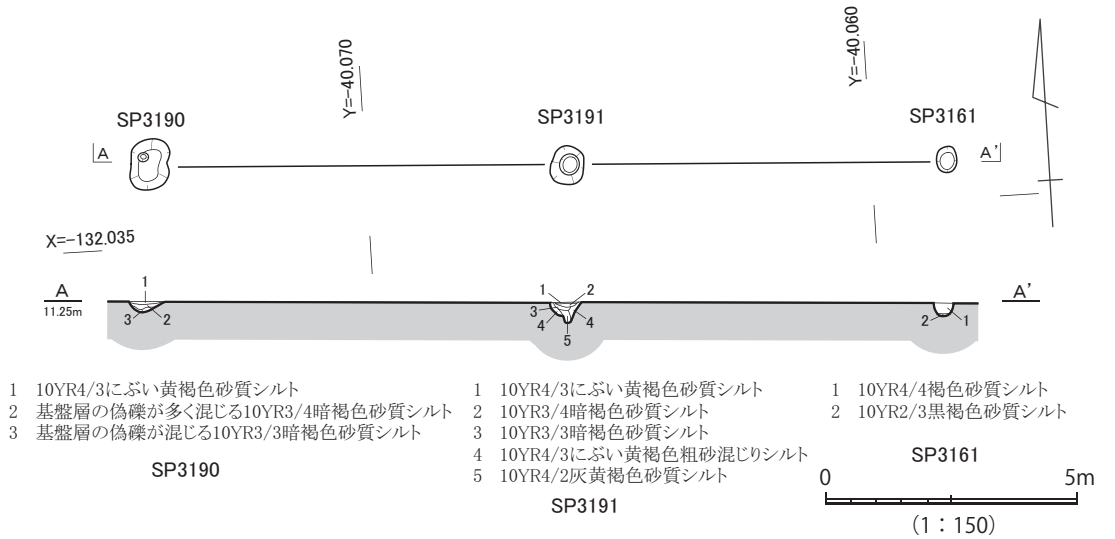
504 は土師器甕である。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反して立ち上がり、端部は面を成す。外面に黒斑が認められる。８世紀前半のものである。

６）轍跡

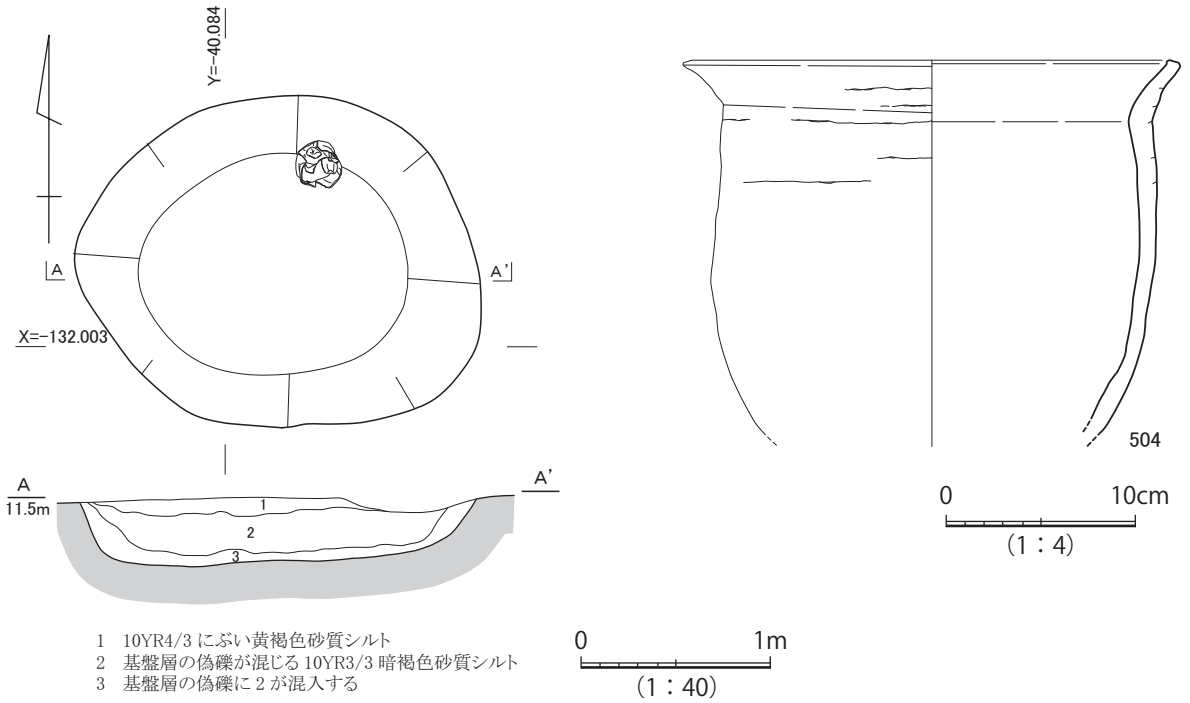
Ｂ・Ｃ区を東西方向に横断する、10 条以上を数える細溝群である。検出は断続的で、溝幅 0.05 ～



第 133 図　ＳＢ 01 平面・断面図



第 134 図　ＳＡ 01 平面・断面図



第 135 図　ＳＫ 3145 平面・断面・出土遺物実測図

0.08 m、深さ 0.05 ～ 0.12 mを測る。特に地盤の緩い古墳 5 の北側に集中して認められる。埋土は検出面の直上層が陥入する。ＳＤ 2020 の埋土内から土師質の土器片が出土しているが、時期は不明である。以下の例などが轍跡として適当な間隔の二条一対で確認された。最も長く遺存するＳＤ 3063・3064 について図示した（**第 136 図**）。

ＳＤ 2020・2021　21 グリッド、古墳 5 の北側に位置する。検出長は東西方向に約 2 m、溝間 1.5 mを測る。

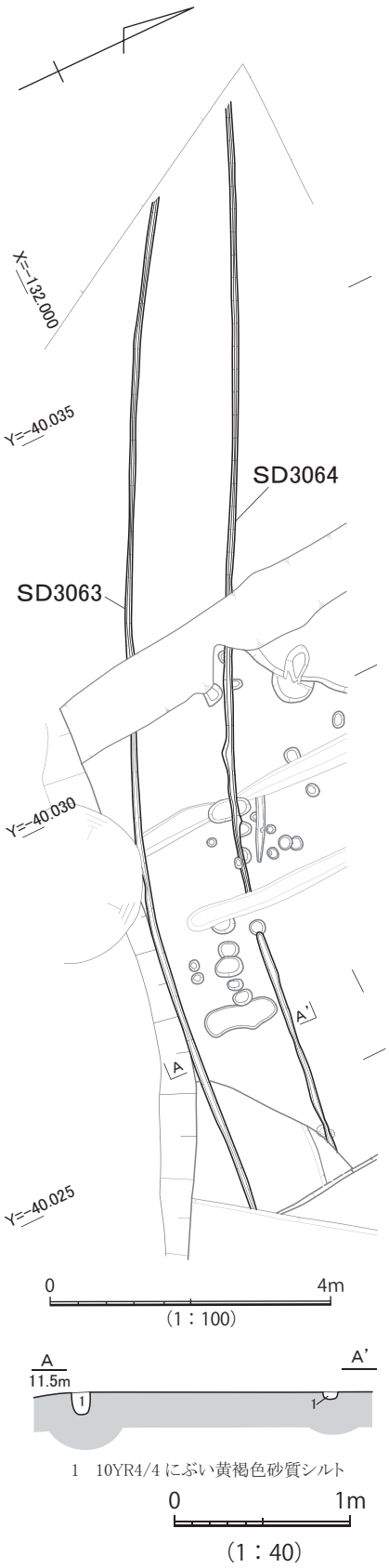
ＳＤ 3200･3201　29･31 グリッド、古墳 4 の南西側に位置する。検出長は北東－南西方向に約 6 m、溝間 1.45 mを測る。

ＳＤ 3063・3064　26･31 グリッドに位置する。古墳 5 の南側周溝を切る。検出長は西北西－東北東に約 16 m、溝間 1.5 mを測る。西端で平行が失われ、溝間が狭くなっているのは、地震動などによる影響が考えられる。

（3）小結

以上Ｂ・Ｃ区で検出した遺構について述べてきた。列状土坑群については次節で記述するため、その他の遺構について、時期別にまとめておくこととする。

Ｂ・Ｃ区で弥生時代後期後半の遺構としたものは、出土遺物が在地の弥生Ｖ様式期の伝統的な特徴を有し、庄内式土器並行期前半段階までに収まるものである。本調査区は、当該期の遺跡範囲の西側縁辺部にあたると考えられる。主な遺構としては、ＳＤ 2005・2006・2068、ＳＥ 2090・2096・2106、ＳＫ 2078・2079・2128・2130 などがある。ＳＤ 2005・2006 は、東側調査区外から延びており、多くの土器を含む溝である。その西側の延長であるＳＤ 2068 とあわせ、もとは排水路としての用途が想定される。ＳＥ 2090・2096・2106 は、３基が隣接しており、井戸としての機能層の発達はほとんどみられないが、近傍でのさかんな燃焼行為を窺わせる堆積状況を示す。ＳＫ 2078・



第 136 図　轍跡平面・断面図

2079・2128・2130 は、４基が直線状に並ぶ土坑である。列状土坑群と比べて、その性格が異なる。ほかにも東側（Ⅱ・Ⅲブロック）を中心に、同時期と推測される溝・土坑・柱穴などが多く検出されたが、全体として成立面から削平されている為か、時期比定に足る遺物が出土するものはまれであった。

古墳時代後期のおもな遺構は、８基の古墳（円墳６・方墳２）である。尚、古墳８（方墳）はＡ区での検出である。既往の調査でも遺跡範囲の南西隅で中・後期の古墳が集中して検出されており、その西側にあたる本調査区とあわせて古墳群が形成されていたものと推測される。検出された古墳はいずれも、周溝と墳丘部の基盤層削り出し部分のみを残す埋没墳である。遺物は、古墳１・２・５・６では形象埴輪を含む埴輪と須恵器が出土したが、古墳３・４では遺物が全く出土していないなど、全体に遺物の遺存状態は悪い。築造順は、切り合い関係から古墳２が古墳１・５に先行するものと判断される。また、古墳７でＢ種ヨコハケを施す埴輪片が出土しているが、全体として大きな時期差はないと考えられる。

古代の主な遺構は、ＳＤ 2070・2071・3085、ＳＫ 3133・3138・3145 などがある。既往の調査では、遺跡範囲の南西隅で同時期の建物や井戸が多数検出されているが、本調査区は、ほぼ空閑地の様相を呈する。ＳＤ 2070・2071・3085 は、伏在する開析地形を反映した自然流路に由来するものと考えられ、開削時期は大きく遡る可能性がある。耕土に近い層相の土壌化層で埋積されていることから、周辺地が耕地化するなかで廃絶され、やがて条里プランが形成されていったと推測される。ＳＫ 3133・3138 は粘土採掘坑の可能性がある不定形な大型土坑である。また、ＳＫ 3145 からは土師器甕の完形品が出土している。

時期不明の掘立柱建物であるＳＢ 01 は、下屋付きの梁間一間型の建物である。類型的には中世の簡易な住居や馬屋などが挙げられる。

第６節　列状土坑群の調査

（１）分布

隅丸長方形の土坑が、南北約 80m にわたって帯状に続く状態で検出された。土坑の総数は検出できたものに限っても、121 基にのぼる。土坑は横７列に配置され、総体として帯状を呈している。個々の土坑を市松状に配置したとみることもできなくはないが、地点によっては並列に近いところもある。そのため、各列を列状に並べることだけが意識された結果と考える方が妥当であろう。

列状土坑群の北は撹乱によって切られているものの、さらに北へ続いていたことが想定される。南についても調査区南端の断面で南へと続いていることが確認できた。そのため、検出された約 80m よりも長かったことは間違いない。また、基本的には南北に直線状に配置されているが、調査区南端近くで、若干東へ屈曲している。

（２）　列状土坑群

列状に並ぶ土坑の総数は、121 基である。個別遺構の詳細は、**第 140 ～ 158 図**で示すが、以下で全体的な傾向および個々の土坑の概要等について記述する。

埋土　すべての土坑内の埋土は自然堆積であることが特徴である。ただし、堆積物は地表物質の違いによって異なっている。個々の詳細は別途述べるが、全体的な傾向を示しておく。

最下層は偽礫を多く含む。偽礫は土坑壁面の崩落に伴うものと想定される。調査中に約１か月間完掘した土坑 62 を放置し、堆積状況を確認したところ、土坑壁面の崩落による偽礫の堆積と、風雨によるシルトの堆積が同時並行していくことを確認できた（**写真図版編　図版 86**）。この現象と同じことが過去にも起こっていたと考えられる。堆積実験の間、深いところで約 4 cm 程度の堆積が認められたことから、土坑の堆積速度は比較的早かったことが推測される。また、最下層の多くは酸化が顕著であり、10YR5/6 黄褐色が斑状に広がっていることを確認できる。最下層より上の層では、当時の地表環境によって堆積物は異なるが、多くの土坑で明瞭なシルト～細砂のラミナを確認できる。最上層の多くは土壌化している。

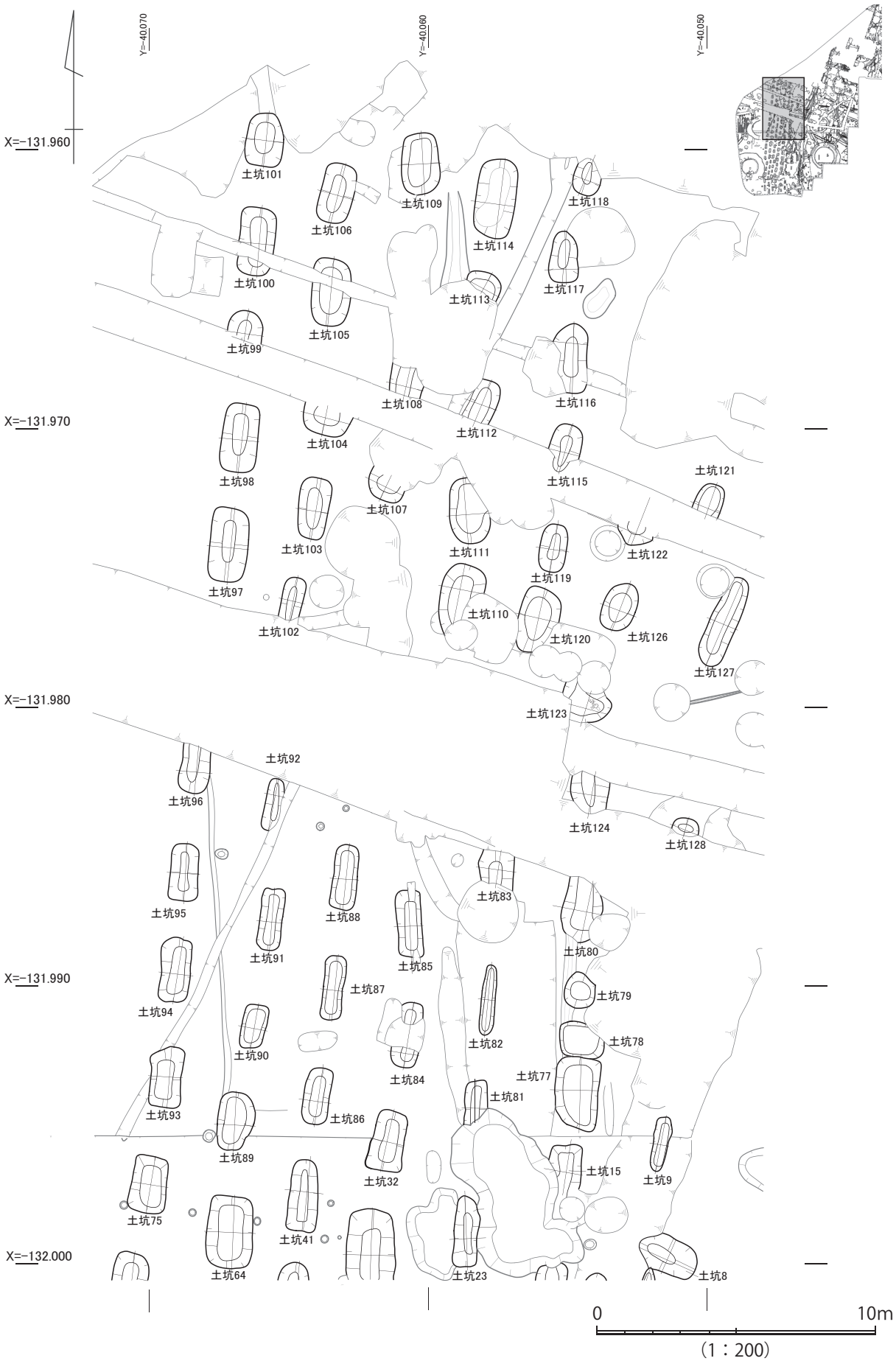
掘削深度　土坑は本来、検出面より上から掘削されたものと考えられるが、削平により当時の遺構面は遺存していないと考えられる。ただし、ほぼすべての土坑の最上層は土壌化していた。土壌化した層は土坑内への堆積が落ち着いて安定していた段階と考えることができることから、当初の遺構面は検出面よりそれほど高くはなかったと想定される。

以下、個別の土坑について記述する。記述中の深さは原則として検出面からの深さである。なお、土坑７・51・76・78・79・125 については調査時には列状土坑群に含めていたが、検討の結果、列状土坑群ではないと判断したため欠番とする。更に土坑 65 は土坑 89 と同一遺構に番号を重複して付与していたため欠番とする。また、土坑 45・52 は調査区南壁での確認のみであるため、個別の報告を省く。

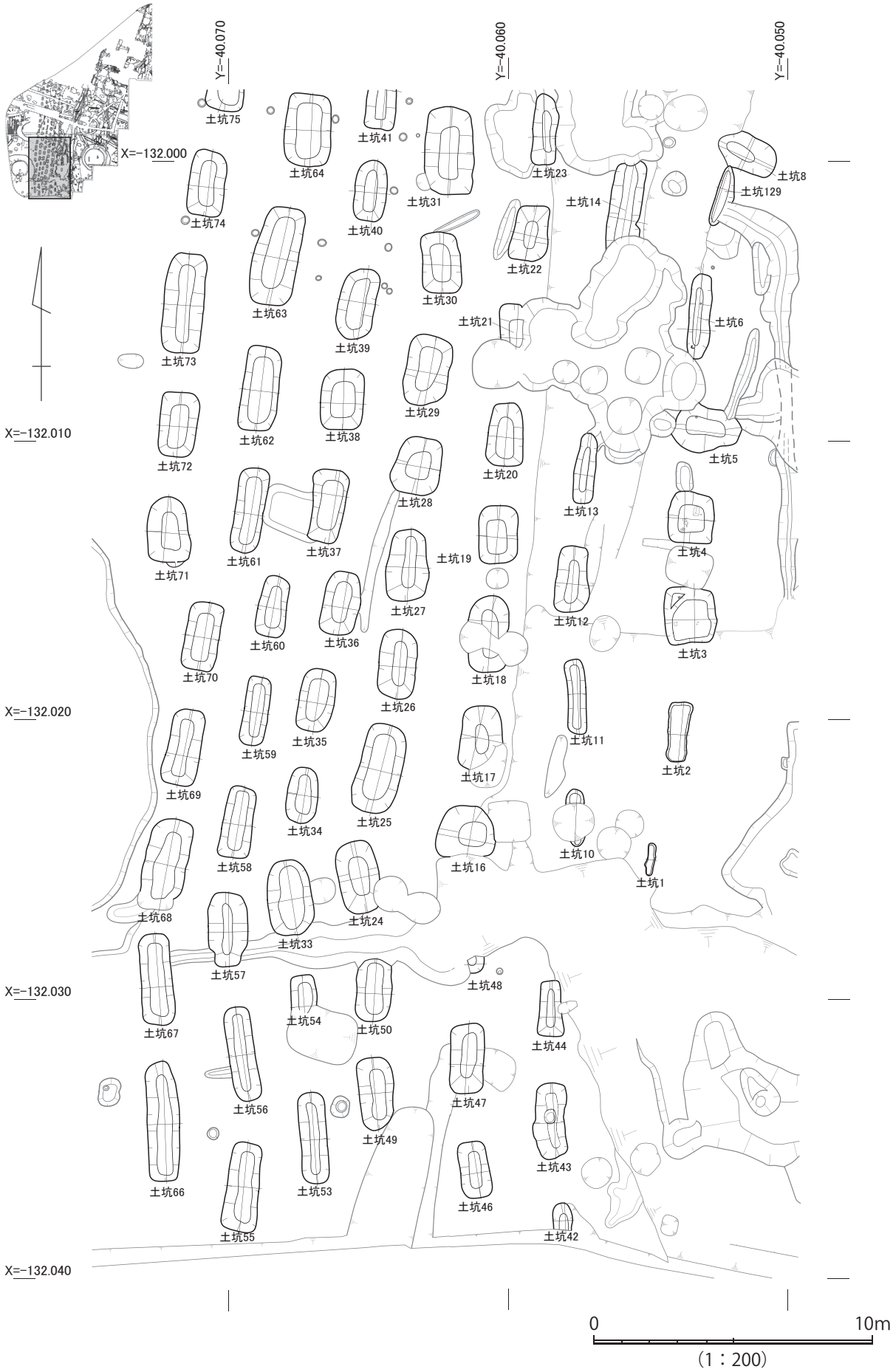
土坑１（第 139・140 図）　大きく削平を受けており、短軸 0.27 m、深さ 0.01m である。埋土は１層で砂質シルト層である。

土坑２（第 139･140 図）　大きく削平を受けており、短軸 0.69 m、長軸 2.17 m、深さ 0.04m である。埋土は４層の砂質シルト層からなる。

第 137 図　列状土坑群全体平面図



第 138 図　列状土坑群平面・断面位置図（北半）



第 139 図　列状土坑群平面・断面位置図（南半）

土坑 3（第 139・140 図） 北端を撹乱に切られる。短軸 1.72 m、長軸の残存長 1.92 m、深さ 0.34m である。埋土は 8 層からなる。6 層が中粗砂層で、ほかの層は砂質シルト層である。4 層の下部には偽礫の堆積が認められる。2 層の下部に中粗砂が目立つ。

土坑 4（第 139･141 図） 北端を別遺構に切られる。短軸 1.15 m、長軸 1.9 m、深さ 0.38m である。埋土は 5 層からなる。5 層は偽礫とシルトの混土層である。ほかの層はすべて砂質シルト層である。3 層でもわずかに偽礫の堆積を確認できる。2 層では肩口に比較的粗い砂が目立つ。下方にいくにつれ細粒化していく。この層中より、広口壺の口縁部から肩部にかけての破片や壺の底部片などが出土した（**第 159 図　505・506**）。1 層の上部は下部に比べ、砂が多い。

土坑 5（第 139・140 図） 列状土坑は基本的に南北方向に長軸をもつが、土坑 5 は東西方向に長軸をもつ。列状土坑群ではない可能性も考えられるが、土坑と土坑の間隔および土坑の形状の類似から、列状土坑群に含めて報告する。短軸 1.8 m、長軸の残存長 2.24 m、深さ 0.38m である。埋土は 4 層からなる。3 層がシルト混じりの中粗砂層で、ほかの層は砂質シルト層である。3 層は偽礫の堆積が認められる。1 層から土器の細片が出土した。

土坑 6（第 139・141 図） 南と西の一部を撹乱に切られる。短軸 0.96 m、長軸 3.0 m、深さ 0.38m である。埋土は 7 層からなる。6 層はほぼ偽礫の堆積である。5 層は粗砂層であり、その他の層は砂質シルト層である。4・5 層は偽礫の堆積が認められる。5 層は比較的粗い砂が多く、4 層へと下方にいくにつれ細粒化していく。2 層は細礫を含む。1 層は土壌化しており、層中から壺と甕の底部片が出土した（**第 159 図　507・508**）。1 ～ 3 層は炭化物が混じる。

土坑 8（第 139・140 図） 西側を撹乱に切られる。土坑 5 と同様に東西方向に長軸をもつ。列状土坑群ではない可能性も考えられるが、土坑の形状の類似から列状土坑群に含めて報告する。短軸 1.12 m、長軸の残存長 2.1 m、深さ 0.42m である。埋土は 4 層からなる。4 層は砂質シルト層で、偽礫の堆積が認められる。3 層はシルト混じり中粗砂層で、シルトのラミナを確認できる。1・2 層は砂質シルト層である。1 層では偽礫が堆積している。また、すべての層にわずかな炭化物を含む。

土坑 9（第 138・140 図） 南側 2/3 は削平が著しい。短軸 0.52 m、長軸 1.81 m、深さ約 0.25m である。埋土は 3 層の砂質シルト層からなる。2・3 層はとりわけ北側からのシルトと細砂のラミナの堆積を確認することができる。

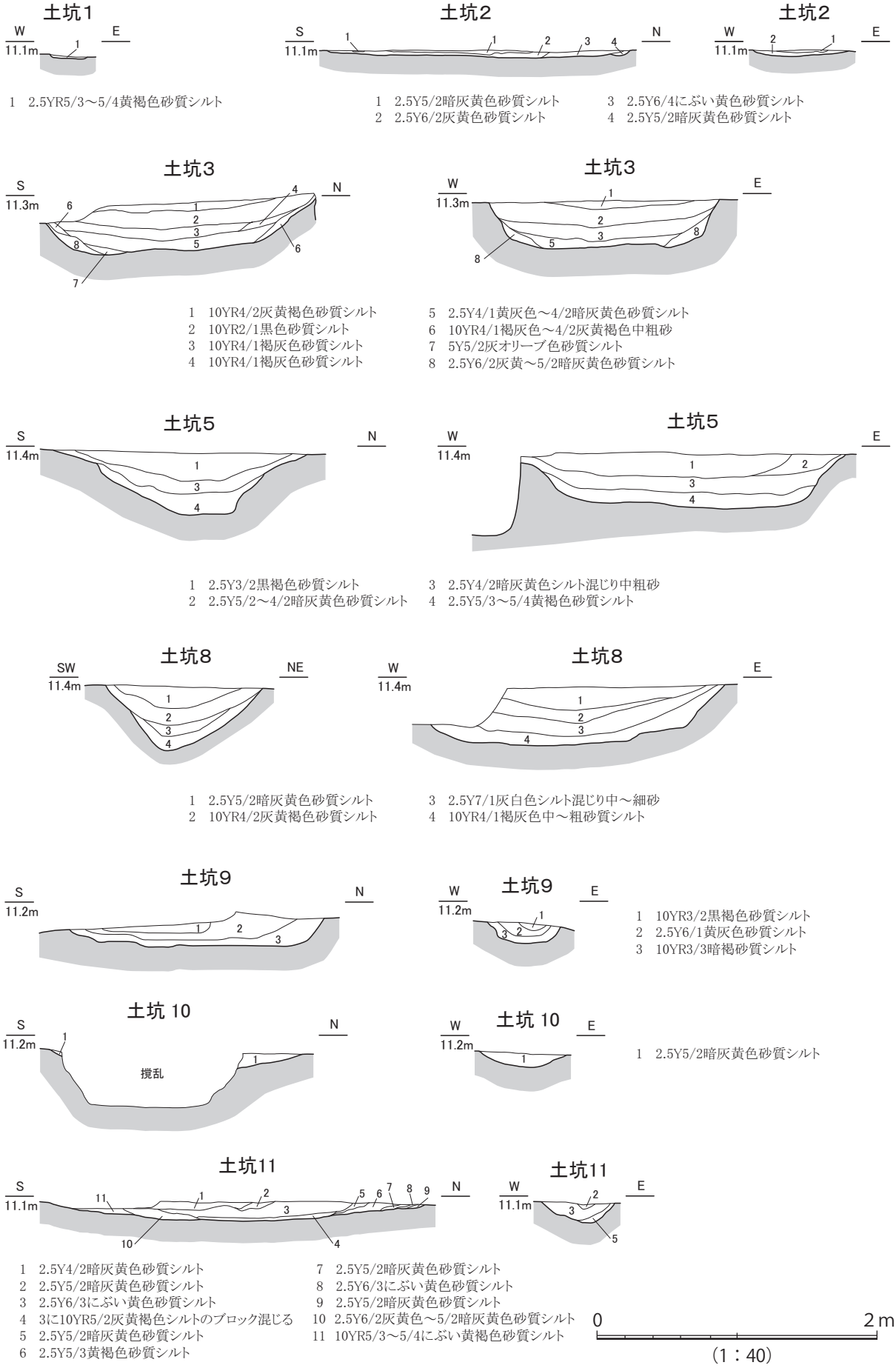
土坑 10（第 139・140 図） 中央を大きく撹乱に切られており、わずかに南北端が残っているのみである。短軸 0.62 m、長軸 1.82 m、深さ 0.1m である。埋土は 1 層で砂質シルト層である。

土坑 11（第 139･140 図） 大きく削平を受けており、短軸 0.53 m、長軸 2.5 m、深さ約 0.13m である。埋土は 11 層の砂質シルト層からなる。

土坑 12（第 139・142 図） 東側を撹乱に切られる。短軸の残存長 0.86 m、長軸 1.87 m、深さ 0.37m である。埋土は 8 層からなる。1 層は素掘り小溝の埋土である。2・8 層は砂質シルト層、3 ～ 6 層は砂混じりシルト層、7 層は中粗砂層である。

土坑 13（第 139・142 図） 短軸 0.64 m、長軸 2.22 m、深さ約 0.25m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。4 層は肩口に中粗砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。2 層は偽礫の堆積が認められる。

土坑 14（第 139・142 図） 南北を別遺構に切られる。短軸 1.14 m、長軸の残存長 2.8 m、深さ 0.4m である。埋土は 7 層からなる。6 層が中粗砂層であるほかは、すべて砂質シルト層である。3・



1　2.5YR5/3～5/4黄褐色砂質シルト

1　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
2　2.5Y6/2灰黄色砂質シルト
3　2.5Y6/4にぶい黄色砂質シルト
4　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト

1　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
2　10YR2/1黒色砂質シルト
3　10YR4/1褐灰色砂質シルト
4　10YR4/1褐灰色砂質シルト
5　2.5Y4/1黄灰色～4/2暗灰黄色砂質シルト
6　10YR4/1褐灰色～4/2灰黄褐色中粗砂
7　5Y5/2灰オリーブ色砂質シルト
8　2.5Y6/2灰黄～5/2暗灰黄色砂質シルト

1　2.5Y3/2黒褐色砂質シルト
2　2.5Y5/2～4/2暗灰黄色砂質シルト
3　2.5Y4/2暗灰黄色シルト混じり中粗砂
4　2.5Y5/3～5/4黄褐色砂質シルト

1　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
2　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
3　2.5Y7/1灰白色シルト混じり中～細砂
4　10YR4/1褐灰色中～粗砂質シルト

1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト
3　10YR3/3暗褐砂質シルト

1　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト

1　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
2　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
3　2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト
4　3に10YR5/2灰黄褐色シルトのブロック混じる
5　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
6　2.5Y5/3黄褐色砂質シルト
7　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
8　2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト
9　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
10　2.5Y6/2灰黄色～5/2暗灰黄色砂質シルト
11　10YR5/3～5/4にぶい黄褐色砂質シルト

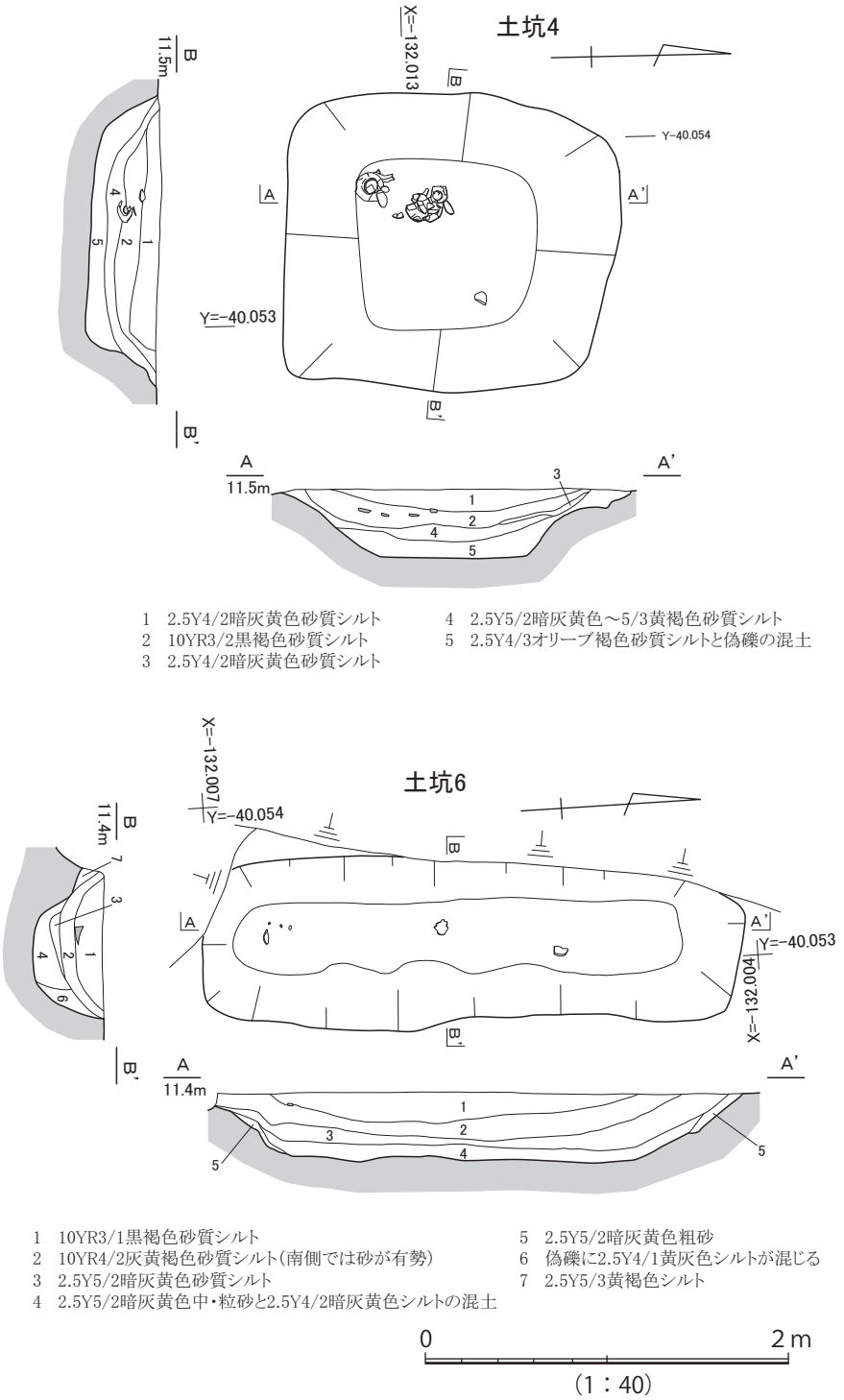
第 140 図　列状土坑 1 ～ 3 ・ 5 ・ 8 ～ 11 断面図

5 層では肩口に比較的粗い砂の堆積が目立つ。また、２・３・５層にわずかな炭化物を含む。

土坑 15（第 138･142 図） 南側は別遺構に切られる。短軸の残存長は 1.14 m、長軸の残存長は 1.83 m、深さ 0.43m である。埋土は 6 層の砂質シルト層からなる。4 層は偽礫を含む。２・３・４・６層はわずかに炭化物を含む。２・３層は肩口に比較的粗い砂の堆積が目立つ。

土坑 16（第 139・142 図） 南側は撹乱に切られる。短軸の残存長 1.96 m、長軸の残存長 1.71 m、深さ 0.52m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。4 層は偽礫の堆積が多く認められる。

土坑 17（第 139･143 図） 短軸 1.34 m､長軸 2.24 m、深さ 0.64m である。埋土は 6 層の砂質シルト層からなる。４・６層は偽礫の堆積が認められ、とりわけ 4 層は顕著である。6 層はわずかに炭化物を含む。2･3・5 層は肩口に比較的荒い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。

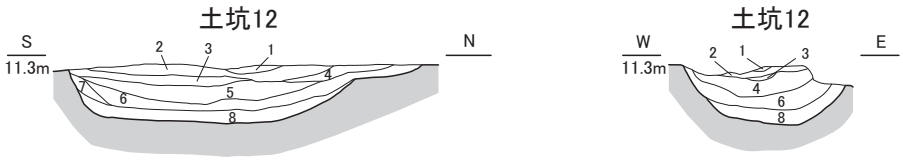


第 141 図　土坑４・６平面・断面・遺物出土状況図

土坑 18（第 139・143 図） 短軸 1.31 m、長軸 2.07 m、深さ 0.52m である。埋土は 6 層の砂質シルト層からなる。6 層は砂質シルト層で、偽礫の堆積が認められる。2 〜 4 層は肩口に比較的粗い砂の堆積が目立ち、ごくわずかに炭化物を含む。1 層は細礫をごくわずかに含む。

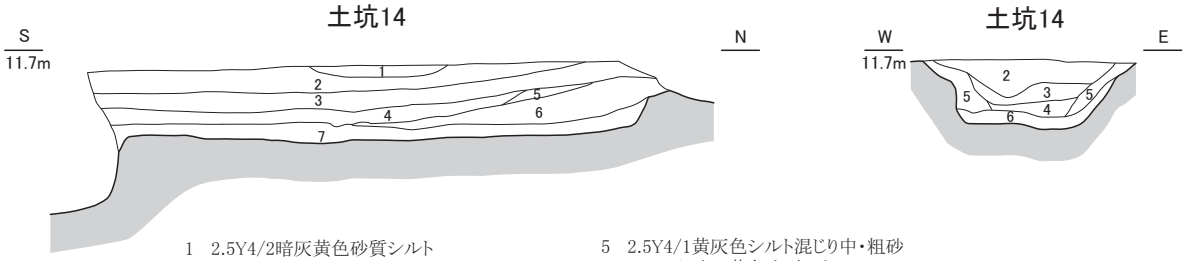
土坑 19（第 139・143 図） 短軸 1.36 m、長軸 2.08 m、深さ 0.31m である。埋土は 5 層の砂質シルト層からなる。１・４・５層で偽礫の堆積が認められる。2 層は北側で砂の割合が多く、北側からの堆積が想定される。また、1 層は細礫をごくわずかに含む。

土坑 20（第 139･143 図） 短軸 1.17 m、長軸 2.2 m、深さ 0.42m である。埋土は 6 層からなる。

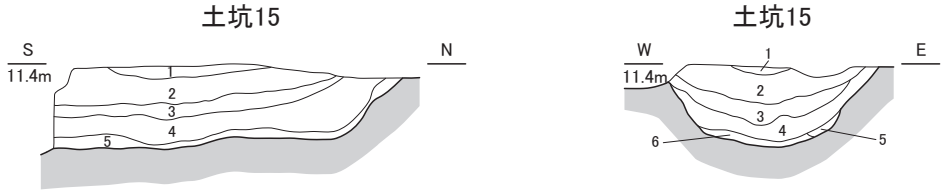


1　2.5Y5/2暗灰黄色～5/3黄褐色細礫混じり砂質シルト(鋤溝堀土)
2　10YR3/2黒褐色砂質シルト
3　10YR5/2～4/2灰黄褐色砂混じりシルト
4　2.5Y3/1黒褐色わずかに砂混じりシルト
5　10YR4/1褐灰色砂混じりシルト
6　2.5Y4/1黄灰色粗砂混じりシルト
7　2.5Y4/1黄灰色中粗砂
8　2.5Y6/2灰黄色～6/3にぶい黄色砂質シルト

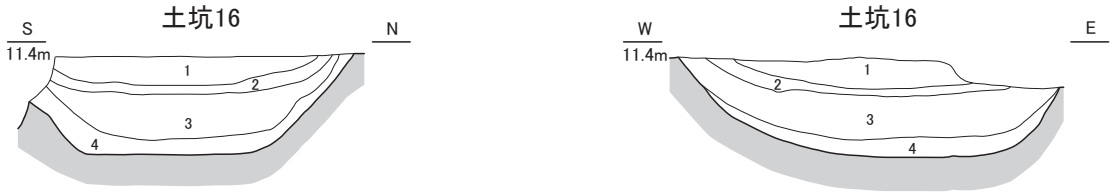
1　10YR3/2～2/2黒褐色砂質シルト
2　10YR4/1褐灰色～10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
3　2.5Y5/1～5/4黄灰色砂質シルト
4　2.5Y5/2暗灰黄色シルト



1　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
2　10YR2/2黒褐色砂質シルト
3　10YR3/1黒褐色砂質シルト
4　2.5Y4/1黄灰色砂質シルト
5　2.5Y4/1黄灰色シルト混じり中・粗砂
6　2.5Y5/2暗灰黄色中・粗砂
7　5Y7/2灰白色砂質シルト



1　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
2　10YR2/2黒褐色砂質シルト
3　10YR4/1褐灰色砂質シルト
4　10YR4/2灰黄褐色～4/3にぶい黄褐色砂質シルト
5　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
6　5Y7/1灰白色砂質シルト



1　2.5Y5/2暗灰黄色～5/3黄褐色砂質シルト
2　10YR3/2黒褐色砂質シルト
3　2.5Y4/1黄灰色砂質シルト
4　3に偽礫を多く含む

0　2m
(1：40)

第 142 図　列状土坑 12 ～ 16 断面図

6 層はシルト混じりの中粗砂層、4 層はシルト混じり中砂層である。ほかの層は砂質シルト層である。2・3 層はわずかに炭化物を含む。1 層は偽礫の堆積が認められ、ごくわずかに細礫を含む。

土坑 21（第 139・143 図） 別遺構に切られ、北西部のみが残存する。短軸の残存長 0.85 m、長軸の残存長 1.56 m、深さ 0.31m である。埋土は 4 層からなる。1・3・4 層は砂質シルト層、2 層は砂混じりシルト層である。3 層の肩口は中～粗砂を比較的多く含む。

土坑 22（第 139・144 図） 西側は撹乱に切られる。短軸の残存長 1.36 m、長軸の残存長 1.92 m、深さ 0.42m である。埋土は 7 層からなる。7 層はシルトが混じる中粗砂層、5 層はシルトが混じる中砂層、ほかの層はすべて砂質シルト層である。2 層は肩口に比較的粗い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。2・3 層は炭化物を含む。また、全ての層で細礫をわずかに含む。

土坑 23（第 139・144 図） 西端を別遺構に切られる。短軸の残存長 0.88 m、長軸の残存長 2.48 m、深さ 0.56m である。埋土は 6 層からなる。4 層が砂混じりシルト層であるほかは、砂質シルト層である。7 層は偽礫の堆積が多く認められる。5 層下部でシルトのラミナを確認できる。5 層中ではシルトおよび中・粗砂のラミナを確認できる。また、肩口に比較的粗い砂が目立つ。2・3 層は炭化物を含む。2 層からは土器の細片が出土した。1 層は細礫をわずかに含む。

土坑 24（第 139・144 図） 短軸 1.31 m、長軸 2.52 m、深さ 0.55m である。埋土は 5 層からなる。4 層は粘質シルト層、ほかの層は砂質シルト層である。2 ～ 4 層では肩口に比較的粗い砂が目立つ。また、1 ～ 4 層は炭化物をわずかに含む。

土坑 25（第 139・144 図） 短軸 1.4 m、長軸 3.12 m、深さ 0.42m である。埋土は 8 層からなる。2 ～ 4・8 層はシルト層、ほかの層は砂質シルト層である。

土坑 26（第 139・144 図） 短軸 1.24 m、長軸 2.32 m、深さ 0.36m である。埋土は 6 層の砂質シルト層からなる。4 層以外はわずかに炭化物を含む。2・3 層は肩口に比較的粗い砂が目立つ。

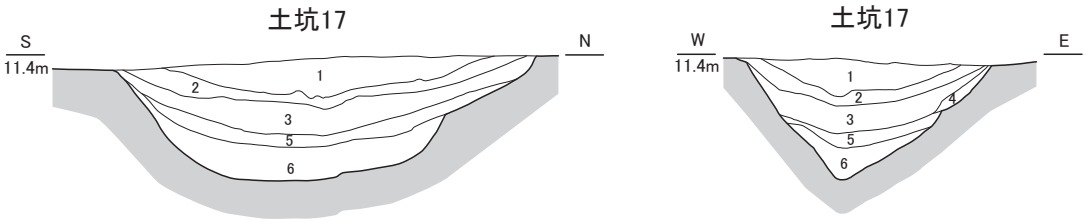
土坑 27（第 139・145 図） 短軸 1.34 m、長軸 2.54 m、深さ 0.56m である。1 層はピット埋土である。12 層がシルト混じり中粗砂層である以外は、砂質シルト層である。3・6・13 層は肩口に比較的粗い砂が目立つ。

土坑 28（第 139・145 図） 短軸 1.53 m、長軸 2.0 m、深さ 0.46m である。埋土は 5 層からなる。1・3 層は砂質シルト層、2・4・5 層は砂混じりシルト層である。5 層上部ではシルトのラミナを確認できる。4 層は肩口に比較的粗い砂が目立つ。2 ～ 5 層は炭化物を含む。

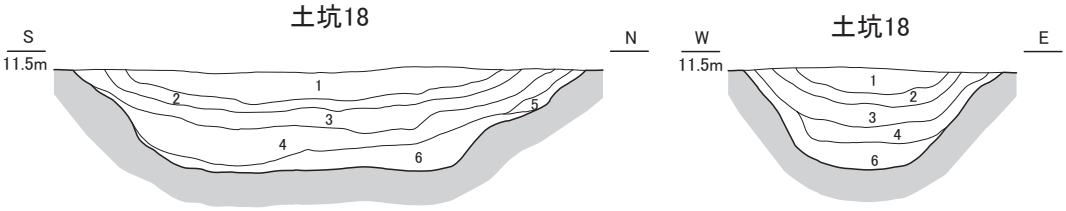
土坑 29（第 139・145 図） 短軸 1.33 m、長軸 2.34 m、深さ 0.25m である。埋土は 5 層からなる。4 層がシルト混じりの中粒砂層で、ほかの層は砂質シルト層である。2 層は肩口に比較的粗い粒子の砂が目立つ。

土坑 30（第 139・145 図） 短軸 1.22 m、長軸 2.03 m、深さ 0.37m である。埋土は 6 層からなる。5 層は砂混じりシルト層で、上部で砂のラミナを確認することができる。3・4 層は一連の層と考えられ、4 層は中粗砂層で、3 層は砂混じりシルト層である。4 層から 3 層中央へいくにつれ細粒化していく。1・2 層は砂質シルト層である。1 ～ 3・5 層は炭化物を含む。

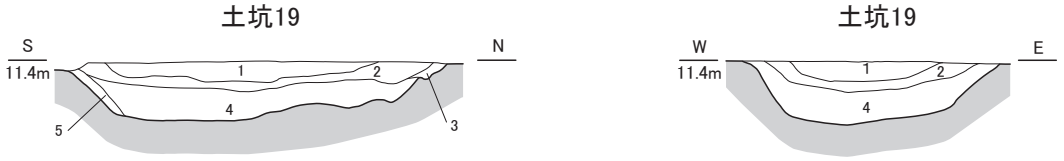
土坑 31（第 139・145 図） 短軸 1.72 m、長軸 3.06 m、深さ 0.38m である。埋土は 6 層からなる。6 層は砂質シルト層である。4・5 層は一連の堆積と考えられ、5 層は中粗砂層、4 層は砂混じりシルトで、土坑中央にいくにつれ細粒化していく。2・3 層は砂混じりシルト層で、肩口に比較的粗い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。1 層は砂質シルト層である。



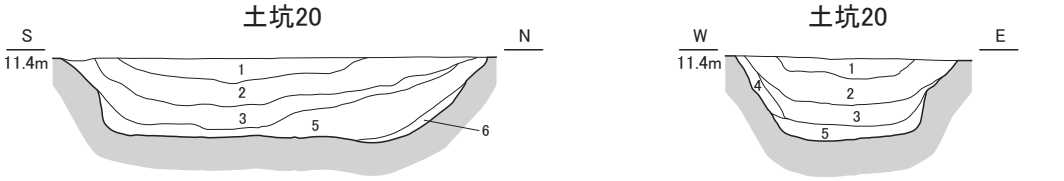
1　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
2　10YR2/2黒褐色砂質シルト
3　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
4　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
5　10YR5/2灰黄褐色砂質シルト
6　2.5Y7/1灰白色～6/1黄灰色砂質シルト



1　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
2　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト
3　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
4　2.5Y5/1黄灰色～5/2暗灰黄色砂質シルト
5　2.5Y7/2灰黄色砂質シルト
6　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



1　2.5Y4/2暗灰黄色～4/3オリーブ褐色砂質シルト
2　10YR3/2黒褐色砂質シルト
3　2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト
4　10YR5/2灰黄褐色(上位)2.5Y5/2暗灰黄色(下位)砂質シルト
5　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト

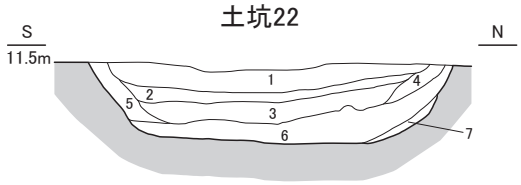


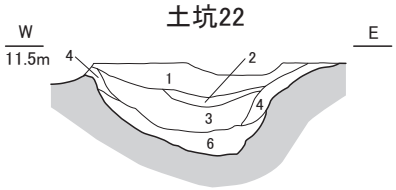
1　2.5Y4/2暗灰黄色～4/3オリーブ褐色砂質シルト
2　10YR3/1(上位)～3/2(下位)黒褐色砂質シルト
3　10YR5/2灰黄褐色砂質シルト
4　2.5Y5/1黄灰色～5/2暗灰黄色シルト混じり中砂(6とほぼ同じ)
5　2.5Y7/1灰白色～7/2灰黄色シルト
6　2.5Y5/1黄灰色シルト混じり中・粗砂(4とほぼ同じ)

1　10YR3/1黒褐色砂質シルト
2　2.5Y5/1黄灰色砂混じりシルト
3　5Y5/1灰色砂質シルト
4　5Y6/1灰色砂質シルト

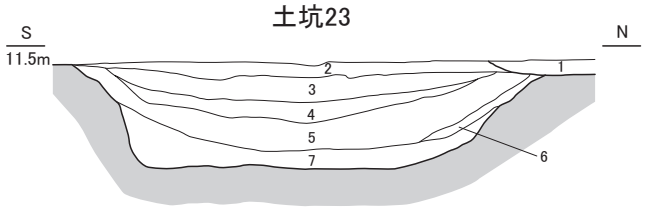
0　2m
(1：40)

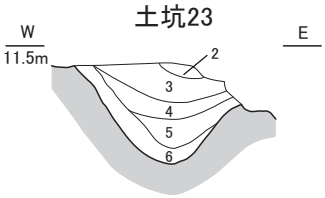
第 143 図　列状土坑 17 ～ 21 断面図



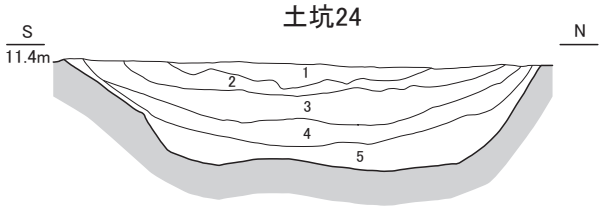


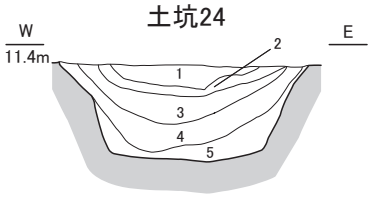
1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　10YR3/1黒褐色砂混じりシルト
3　10YR4/1褐灰色砂混じりシルト
4　3に2.5Y5/2暗灰黄色中砂混じる
5　10YR4/1褐灰色シルト混じり中砂
6　5Y6/1灰色砂質シルト（下位に2.5Y5/2暗灰黄色中砂混じる）
7　2.5Y5/2暗灰黄色シルト混じり中・粗砂



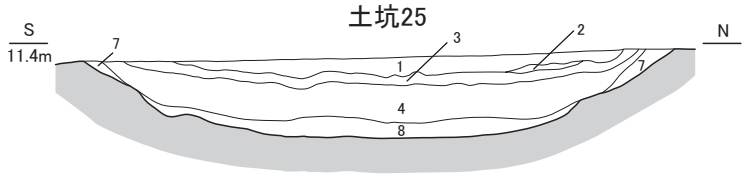


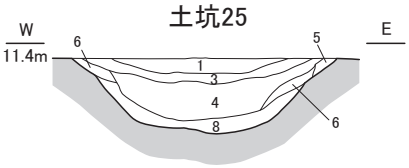
1　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
2　10YR4/2灰黄褐色～4/3にぶい黄褐色砂質シルト
3　10YR3/1黒褐色砂質シルト
4　2.5Y5/2暗灰黄色砂混じりシルト
5　5Y7/1灰白色砂質シルトに2.5Y5/1黄灰色細礫を含む中・粗砂および2.5Y6/1黄灰色シルトが混じる。
6　2.5Y4/1黄灰色砂質シルト
7　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



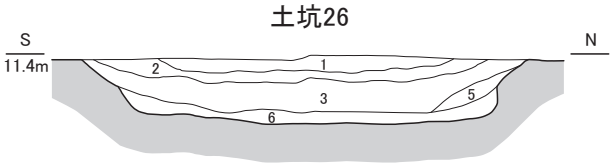


1　10YR4/1褐灰色～4/2灰黄褐色砂質シルト
2　10YR3/1黒褐色砂質シルト
3　10YR5/1褐灰色～5/2灰黄褐色砂質シルト
4　2.5Y5/1褐灰色～5/2暗灰黄色砂質シルト
5　2.5Y6/2灰黄色砂質シルトと5Y6/1灰色砂質シルトの混土





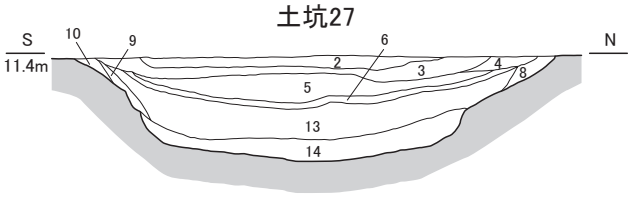
1　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
2　10YR3/2黒褐色シルト
3　10YR3/1黒褐色シルト
4　2.5Y5/1黄灰色～5/2暗灰黄色シルト
5　2.5Y5/3黄褐色砂質シルト
6　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
7　2.5Y5/1黄灰色～5/2暗灰黄色砂質シルト
8　7.5Y7/1灰白色シルト

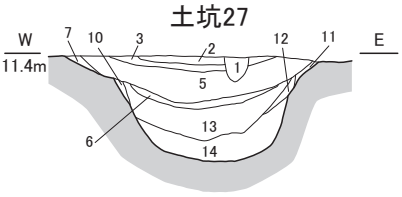


1　2.5Y4/2暗灰黄色～4/3オリーブ褐色砂質シルト
2　10YR3/2黒褐色砂質シルト
3　2.5Y5/1黄灰色～5/2暗灰黄色砂質シルト
4　2.5Y5/3黄褐色砂質シルト
5　4にほぼ同じ（4より砂質多い）
6　7.5Y7/1灰白色砂質シルトに5Y6/1灰色砂質シルトが混じる

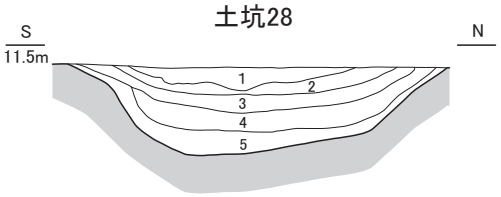
0　2m
（1：40）

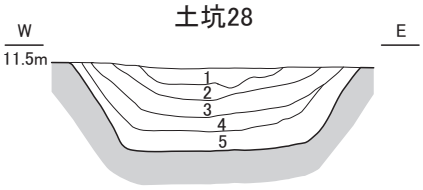
第 144 図　列状土坑 22 ～ 26 断面図



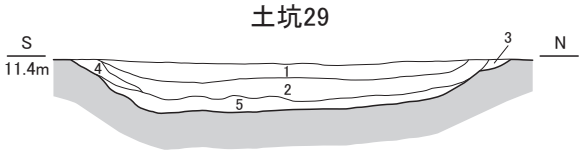


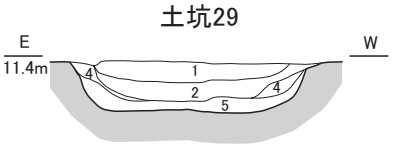
1　2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト
2　2.5Y4/2暗灰黄色～4/3オリーブ褐色砂質シルト
3　10YR3/1黒褐色砂質シルト
4　2.5Y3/2黒褐色砂質シルト
5　2.5Y4/1黄灰色砂質シルト
6　2.5Y5/2～4/2暗灰黄色砂質シルト
7　2.5Y5/3黄褐色砂質シルト
8　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
9　5に偽礫含む
10　2.5Y5/1～6/1黄灰色砂質シルト
11　2.5Y5/3黄褐色砂質シルト
12　2.5Y5/2暗灰黄色シルト混じり中・粗砂
13　2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
14　7.5Y7/1灰白色砂質シルトに2.5Y5/1黄灰色シルトが混じる



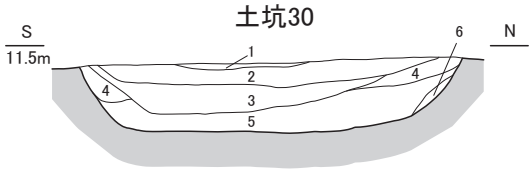


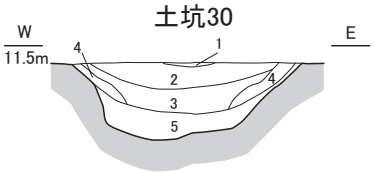
1　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
2　10YR2/2黒褐色砂混じりシルト
3　10YR4/1褐灰色～4/2灰黄褐色砂質シルト
4　2.5Y5/1黄灰色砂混じりシルト
5　7.5Y7/1灰白色砂混じりシルト



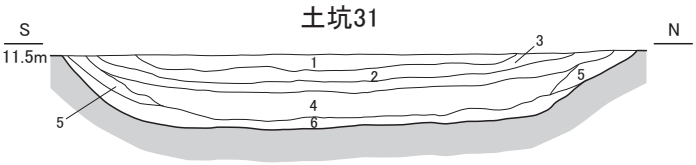


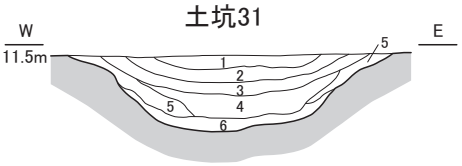
1　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト
2　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
3　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
4　2.5Y5/2暗灰黄色シルト混じり中砂
5　7.5Y7/1灰白色砂質シルトに2.5Y5/1黄灰色シルトが混じる





1　2.5Y4/2灰黄褐色砂質シルト
2　10YR3/2黒褐色砂質シルト
3　2.5Y5/1黄灰色砂混じりシルト
4　2.5Y5/2暗灰黄色シルト質中・粗砂
5　7.5Y7/1灰色砂混じりシルト
6　2.5Y5/1黄灰色砂質シルト





1　10YR4/1褐灰色砂質シルト
2　10YR3/1黒褐色砂混じりシルト
3　2.5Y4/1黄灰色砂混じりシルト
4　2.5Y5/1黄灰色～5/2暗灰黄色砂混じりシルト
5　2.5Y5/1黄灰色シルト混じり中・粗砂
6　5Y6/1灰色と10YR黄褐色の斑状砂質シルト

0　2m
(1：40)

第 145 図　列状土坑 27 ～ 31 断面図

土坑 32（第 138•146 図） 短軸 1.07 m、長軸 2.16 m、深さ 0.40m である。埋土は 5 層からなる。4 層は細砂が混じるシルト層で偽礫を含む。1 層は砂質シルト層であり、肩口に細砂が認められ、中央にいくにつれ細粒化していく。1 層中からは土器が出土した。

土坑 33（第 139・146 図） 南側を若干撹乱に切られる。短軸 1.5 m、長軸の残存長 2.63 m、深さ 0.4m である。埋土は 6 層からなる。1・５・６層は砂質シルト層、２～４層は砂混じりシルト層である。5 層と 6 層は類似するが、層の間に砂が堆積している。2・4 層で肩口に比較的粗い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。4 層下部は砂のラミナを確認できる。

土坑 34（第 139・146 図） 短軸 0.98 m、長軸 1.88 m、深さ 0.3m である。埋土は 4 層からなる。３・４層は砂質シルト層、１・２層は砂混じりシルト層である。2 層下部ではシルトおよび砂のラミナを確認できる。

土坑 35（第 139・146 図） 短軸 1.15 m、長軸 2.23 m、深さ 0.38cm である。埋土は 5 層からなる。5 層は砂質シルト層で、下部に偽礫の堆積が認められる。その上にはシルトのラミナを確認できる。また、肩口には比較的粗い砂が堆積しており、下方にいくにつれ細粒化していく。2 ～ 4 層は砂混じりシルト層である。4 層でも 5 層同様、肩口に比較的粗い砂の堆積が認められる。

土坑 36（第 139•146 図） 短軸 1.05 m、長軸 2.13 m、深さ 0.39m である。埋土は 4 層からなる。2・4 層は砂混じりシルト層、1・3 層は砂質シルト層である。２・３層は肩口に比較的粗い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。

土坑 37（第 139・146 図） 短軸 1.18 m、長軸 2.63 m、深さ 0.43m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。4 層は偽礫の堆積が認められる。また、肩口では比較的粗い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。上層でシルトのラミナが確認できる。3 層も肩口で比較的粗い砂が目立ち、4 層と同様の堆積を確認できる。2・3 層はごくわずかに炭化物を含む。

土坑 38（第 139・146 図） 短軸 1.5 m、長軸 2.13 m、深さ 0.41m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。3 層では細砂のラミナを確認できる。また、肩口では比較的粗い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。2 層も肩口に粒子が粗い砂が目立ち、3 層と同様の堆積をしている。

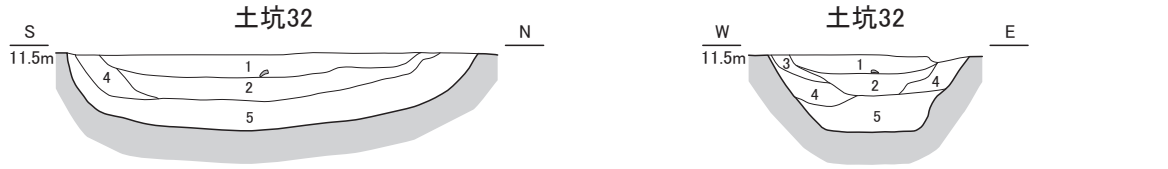
土坑 39（第 139・147 図） 短軸 1.35 m、長軸 2.46 m、深さ 0.32m である。埋土は 3 層の砂質シルトからなる。最下層の 3 層では土中の鉄分が酸化しており、その箇所は 10YR5/6（黄褐色）を呈している。また、層中にシルトのラミナを確認することができる。

土坑 40（第 139・147 図） 短軸 1.3 m、長軸 2.37 m、深さ 0.32m である。埋土は 3 層からなり、すべて砂質シルト層である。

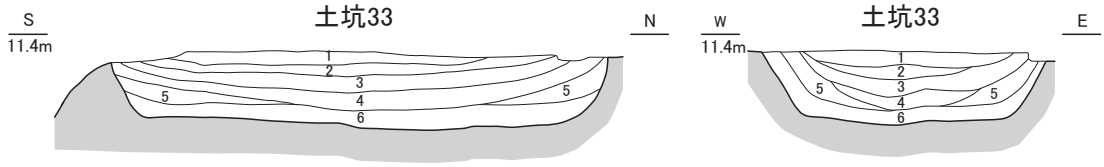
土坑 41（第 138・147 図） 短軸 1.22 m、長軸 2.44 m、深さ 0.3m である。埋土は 2 層からなり、両層とも砂質シルト層だが、1 層は 2 層よりも砂の割合が多い。1 層の底には偽礫が複数堆積している。また、1 層の肩口は細砂が多く認められ、中央にいくほど粒子が細かくなっていく。

土坑 42（第 139•147 図） 調査区南端に位置するため、北半分のみ調査した。短軸の検出長 0.64 m、長軸の検出長 0.8 m、深さ 0.42cm である。埋土は 3 層の砂質シルト層からなる。1・2 層はごくわずかに炭化物を含む。

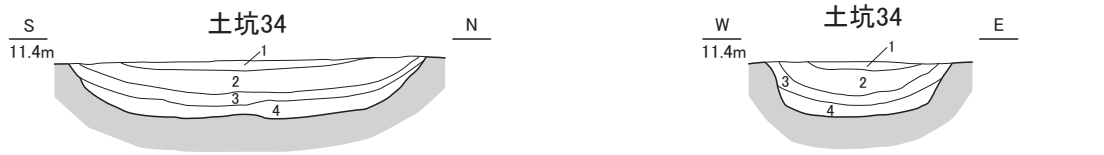
土坑 43（第 139・147 図） 土坑中央に後世の柱穴が位置する。短軸 0.98 m、長軸 2.58 m、深さ 0.37m である。土坑の埋土は 5 層の砂質シルト層からなる。１・２層は柱穴の堆積である。6 層は 5 層に比べ砂の割合が多く、5 層は 4 層に比べ、細かい砂が目立つ。



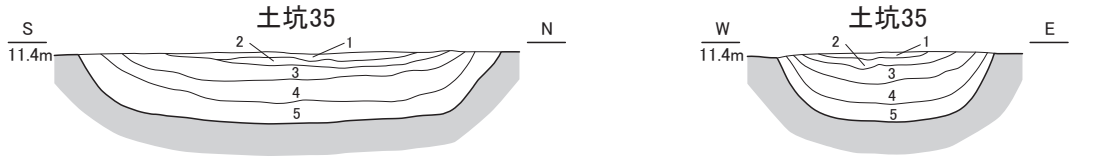
1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
3　10YR4/2灰黄褐色粗砂混じりシルト
4　10YR4/3にぶい黄褐色粗砂混じりシルト
5　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



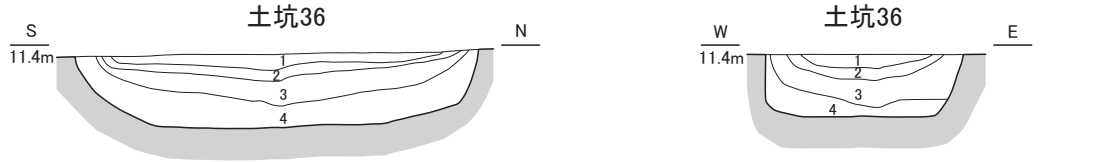
1　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
2　2.5Y3/1黒褐色砂混じりシルト
3　2.5Y4/1黄灰色砂混じりシルト
4　2.5Y5/1黄灰色砂混じりシルト
5　6とほぼ同様であるが下位(6との層界)に砂が入る
6　5Y7/1灰色砂質シルトに10YR6/1褐灰色シルトが混じる



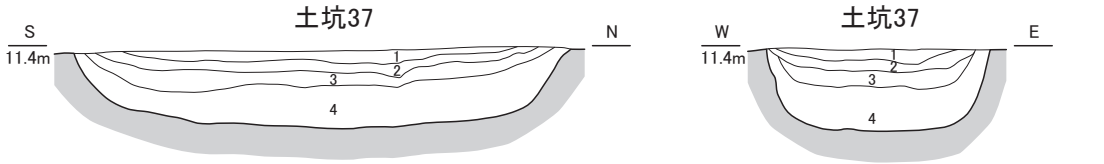
1　2.5Y4/2暗灰黄色砂混じりシルト
2　2.5Y5/2暗灰黄色砂混じりシルト
3　5Y7/1灰色砂質シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルトが混じる
4　5Y7/1灰色砂質シルトに2.5Y5/1黄灰色シルトが混じる



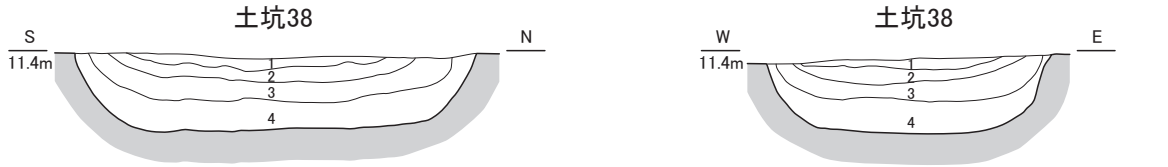
1　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
2　10YR3/2黒褐色砂混じりシルト
3　10YR4/1褐灰色砂混じりシルト
4　10YR5/2灰黄褐色砂混じりシルト
5　5Y7/1灰色砂質シルト



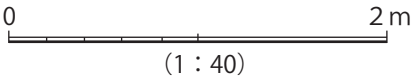
1　10YR3/2黒褐色シルト
2　10YR4/2灰黄褐色砂混じりシルト
3　2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
4　5Y7/1灰色砂混じりシルトに2.5Y5/3黄褐色シルトが混じる



1　10YR3/3暗褐色砂質シルト
2　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト
3　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
4　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　10YR4/1褐灰色砂質シルト
3　2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
4　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



第 146 図　列状土坑 32 ～ 38 断面図

土坑 44（第 139・147 図） 短軸 0.78 m、長軸 2.0 m、深さ 0.44m である。埋土は 6 層の砂質シルト層からなる。6 層は偽礫の堆積が認められる。5 層で細砂のラミナを確認できる。4 層は上の 2・3 層よりも砂の粒子が細かい。2 ～ 4 層はわずかに炭化物を含む。

土坑 46（第 139・147 図） 短軸 1.05 m、長軸 2.0 m、深さ 0.47m である。埋土は 5 層の砂質シルト層からなる。5 層はほぼ偽礫の堆積である。4 層でも偽礫の堆積が認められる。3 層は肩口に比較的粗い砂が堆積しており、下方にいくにつれ細粒化していく。1・2 層は砂質シルト層である。

土坑 47（第 139・148 図） 短軸の残存長 1.05 m、長軸 2.5 m、深さ 0.52m である。埋土は 5 層の砂質シルト層からなる。5 層では細砂のラミナを確認できる。2 ～ 4 層はごくわずかに炭化物を含む。4 層は 3 層よりも砂の粒子が細かい。

土坑 48（第 139・148 図） 大半を撹乱に切られており、断面は東西のみ図化した。短軸の残存長 0.67 m、深さ約 0.3m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。2 層の下で細砂のラミナを確認できる。1 層はわずかに炭化物を含む。

土坑 49（第 139・148 図） 短軸 1.13 m、長軸 2.52 m、深さ 0.39m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。2・3 層では肩口に極細砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。

土坑 50（第 139・148 図） 北端を撹乱に切られる。短軸 1.2 m、長軸の残存長 2.2 m、深さ 0.37m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。3・4 層はごくわずかに炭化物を含む。2 ～ 4 層においては、肩口に比較的粗い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。

土坑 53（第 139・148 図） 短軸 0.88 m、長軸 3.25 m、深さ 0.35m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。2・3 層は肩口に比較的粗い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。また、炭化物をごくわずかに含む。

土坑 54（第 139・148 図） 南半分を撹乱に切られる。短軸 0.8 m、長軸の残存長 0.92 m、深さ 0.31m である。埋土は 4 層からなる。4 層は砂質シルト層である。3 層は粘質シルト層で、ごくわずかに炭化物を含む。2 層は砂質シルト層で、3 層同様ごくわずかに炭化物を含む。1 層は砂質シルト層である。

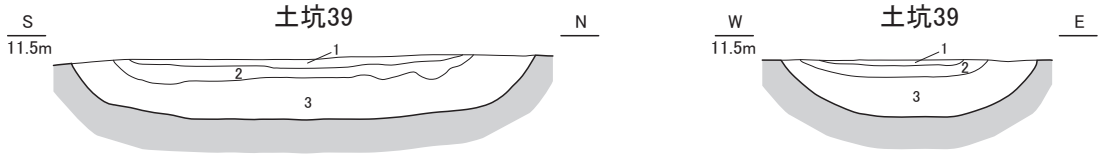
土坑 55（第 139・148 図） 短軸 1.12 m、長軸 3.15 m、深さ 0.44m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。3 層は肩口に比較的粗い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。2 層よりも砂の割合が多い。2 層はごくわずかに炭化物を含む。

土坑 56（第 139・149 図） 短軸 0.86 m、長軸 3.35 m、深さ 0.3m である。埋土は 4 層からなる。最下層の 4 層は砂質シルト層である。2・3 層は粘質シルト層で、2 層はわずかに炭化物を含む。1 層は砂質シルト層である。

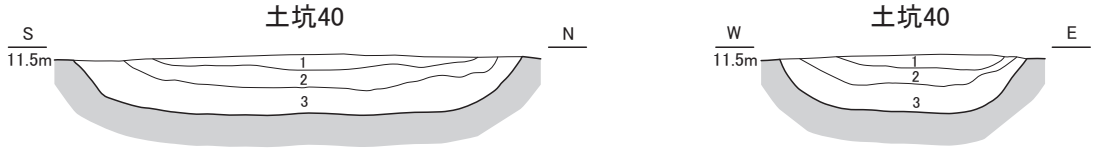
土坑 57（第 139・149 図） 短軸 1.37 m、長軸 2.6 m、深さ 0.46m である。埋土は 5 層からなる。5 層は砂質シルト層である。3・4 層は粘質シルト層であるが、肩口は極細砂の堆積が認められ、下方にいくにつれ細粒化していく。2 層は極細砂を含む砂質シルト層である。1 層は粗砂が混じるシルト層である。

土坑 58（第 139・149 図） 短軸 1.05 m、長軸 2.5 m、深さ 0.28m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。4 層は偽礫の堆積が認められる。また、シルトのラミナを確認できる。3・4 層ともに、肩口に粗い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。

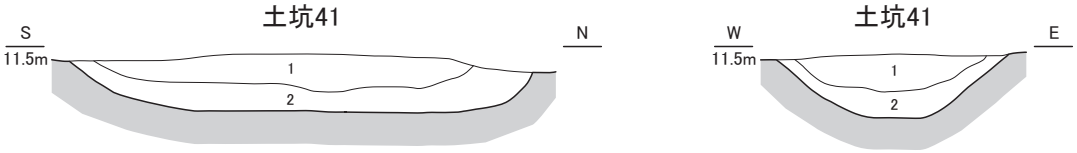
土坑 59（第 139・149 図） 短軸 0.86 m、長軸 2.45 m、深さ 0.35m である。埋土は 4 層からなる。



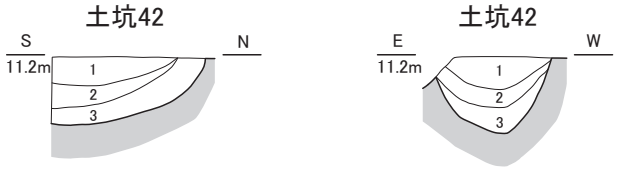
1　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
2　2.5Y4/1黄灰色砂質シルト
3　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



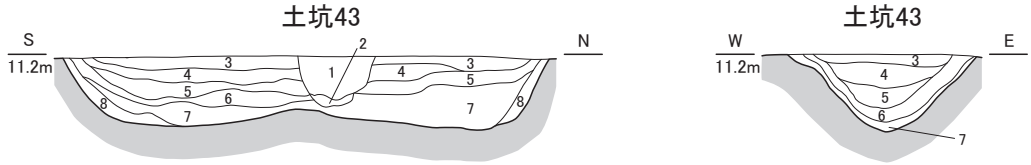
1　10YR4/3灰黄褐色砂質シルト
2　2.5Y4/1黄灰色砂質シルト
3　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



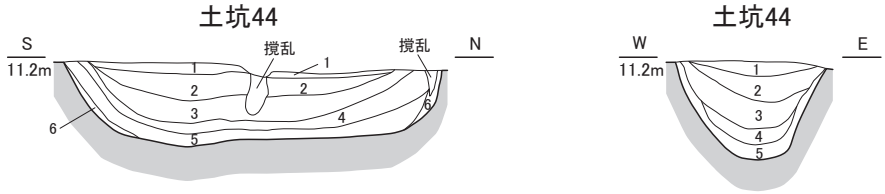
1　2.5Y5/3黄褐色砂質シルト(2層より砂の割合が多い)
2　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



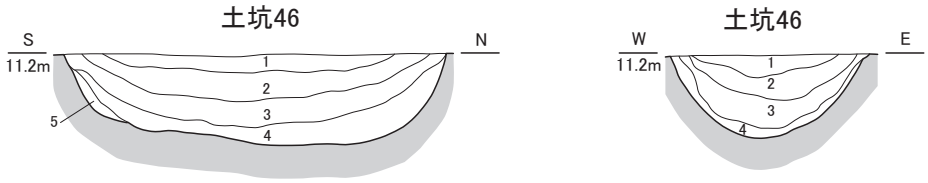
1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　10YR4/1褐灰色砂質シルト
3　2.5Y6/1褐灰色砂質シルト



1　10YR4/4褐色砂質シルト
2　10YR2/3黒褐色砂質シルト
3　10YR3/2黒褐色砂質シルト
4　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
5　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
6　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
7　2.5Y6/2灰黄色砂質シルト
8　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



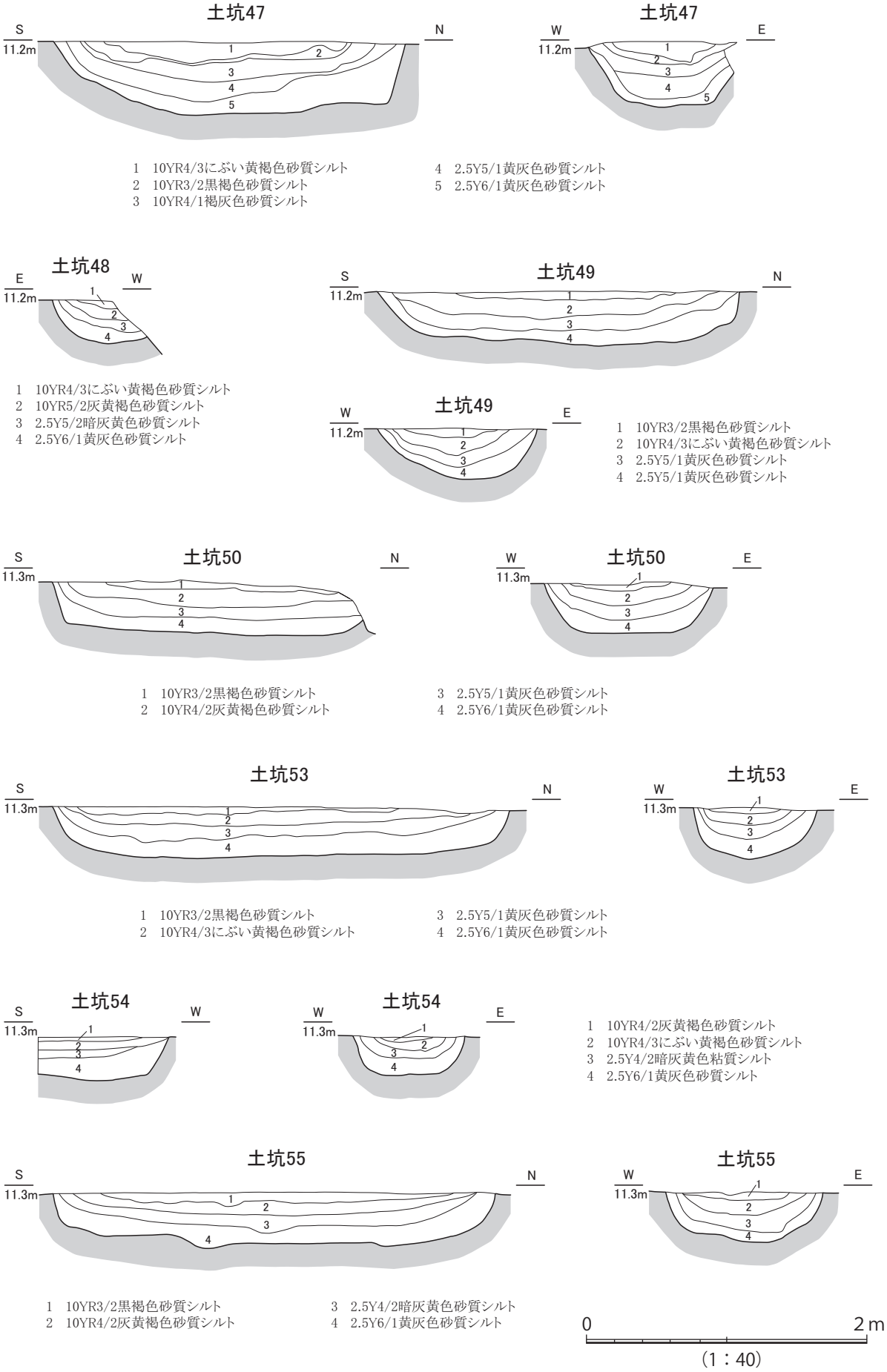
1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　10YR4/1褐灰色砂質シルト
3　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
4　2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
5　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト
6　2.5Y4/1黄灰色砂質シルト



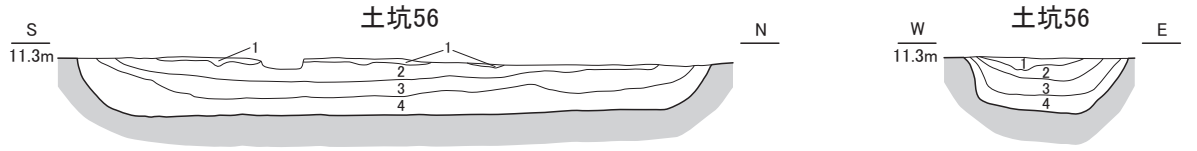
1　10YR3/1黒褐色砂質シルトに10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトが混じる
2　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
3　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
4　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト
5　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト

0　2m
(1：40)

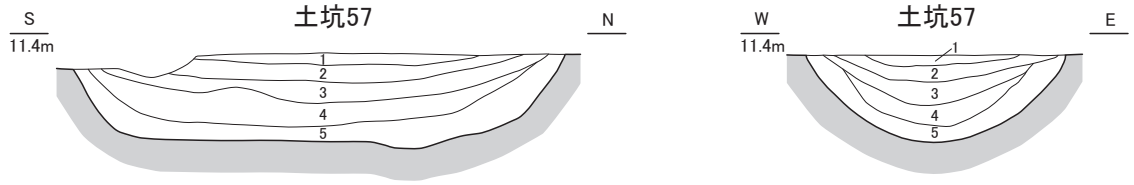
第 147 図　列状土坑 39 ～ 44・46 断面図



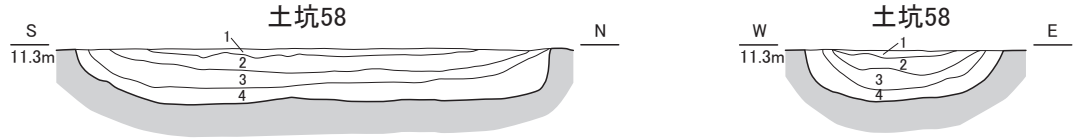
第 148 図　列状土坑 47 ～ 50・53 ～ 55 断面図



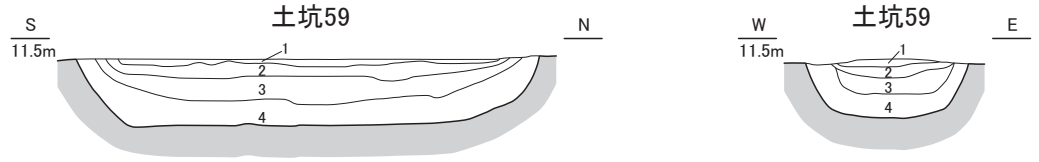
1　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
2　10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト
3　2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト
4　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



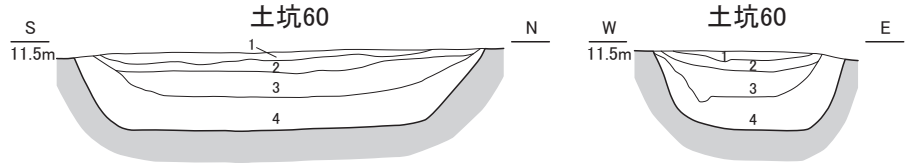
1　10YR4/2灰黄褐色粗砂混じりシルト
2　10YR3/2黒褐色砂質シルト
3　10YR4/2灰褐色粘質シルト
4　2.5Y5/1黄灰色粘質シルト
5　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



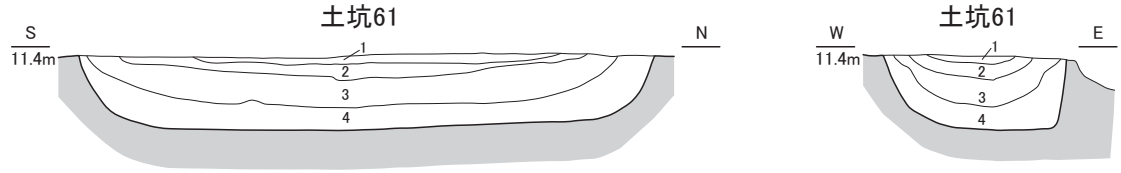
1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
3　2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
4　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



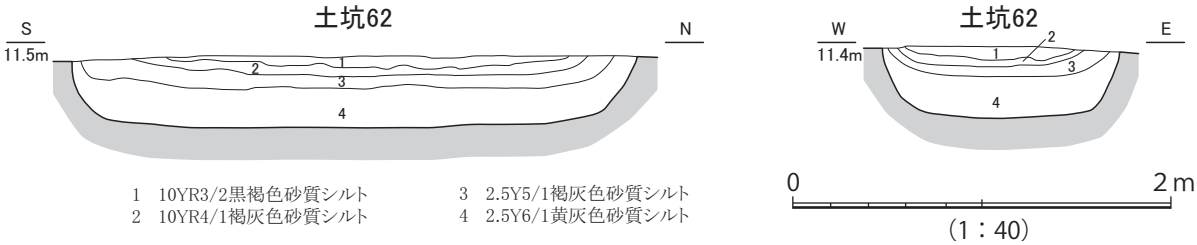
1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
3　2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
4　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
3　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
4　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
3　2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
4　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト



1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　10YR4/1褐灰色砂質シルト
3　2.5Y5/1褐灰色砂質シルト
4　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト

第 149 図　列状土坑 56 ～ 62 断面図

4 層は砂質シルト層で、シルトおよび極細砂のラミナを確認できる。肩口には比較的粗い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。3 層はわずかに炭化物を含む砂質シルト層で、シルトのラミナを確認できる。1・2 層も砂質シルト層であり、2 層はごくわずかに炭化物を含む。

土坑 60（第 139・149 図） 短軸 1.0 m、長軸 2.17 m、深さ 0.41m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。4 層はシルトおよび細砂のラミナを確認できる。西側の肩口には粗い砂の堆積が目立つ。3 層も同様に西の肩口に粗い粒子の砂が目立つ。この一帯の土坑群は西からの粗い粒子の砂の堆積が総じて目立つ。

土坑 61（第 139・149 図） 短軸 0.97 m、長軸 3.05 m、深さ 0.4m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。4 層中ではシルトのラミナを確認できる。3 層でも細砂のラミナを確認できるとともに、肩口に比較的粗い砂が堆積しており、下方にいくにつれ細粒化していく。3・4 層はごくわずかに炭化物を含む。

土坑 62（第 139・149 図） 短軸 1.25 m、長軸 2.98 m、深さ 0.38m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。4 層は偽礫が堆積している。一部シルトのラミナが確認できるが、植物の根やクラックによって確認しづらい。3 層は肩口付近で細砂のラミナを確認できる。

土坑 63（第 139・150 図） 短軸 1.6 m、長軸 3.54 m、深さ 0.51m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。 4 層上部では、植物の根の影響で途切れるシルトのラミナを確認できる。1・2 層はごくわずかに炭化物を含む。

土坑 64（第 139・150 図） 短軸 1.65 m、長軸 2.57 m、深さ 0.39m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。4 層の西側肩口では粗砂が目立つ。4 層上部でシルトのラミナを確認できる。3 層の東側肩口で粗砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。また、シルトのラミナを確認できる。

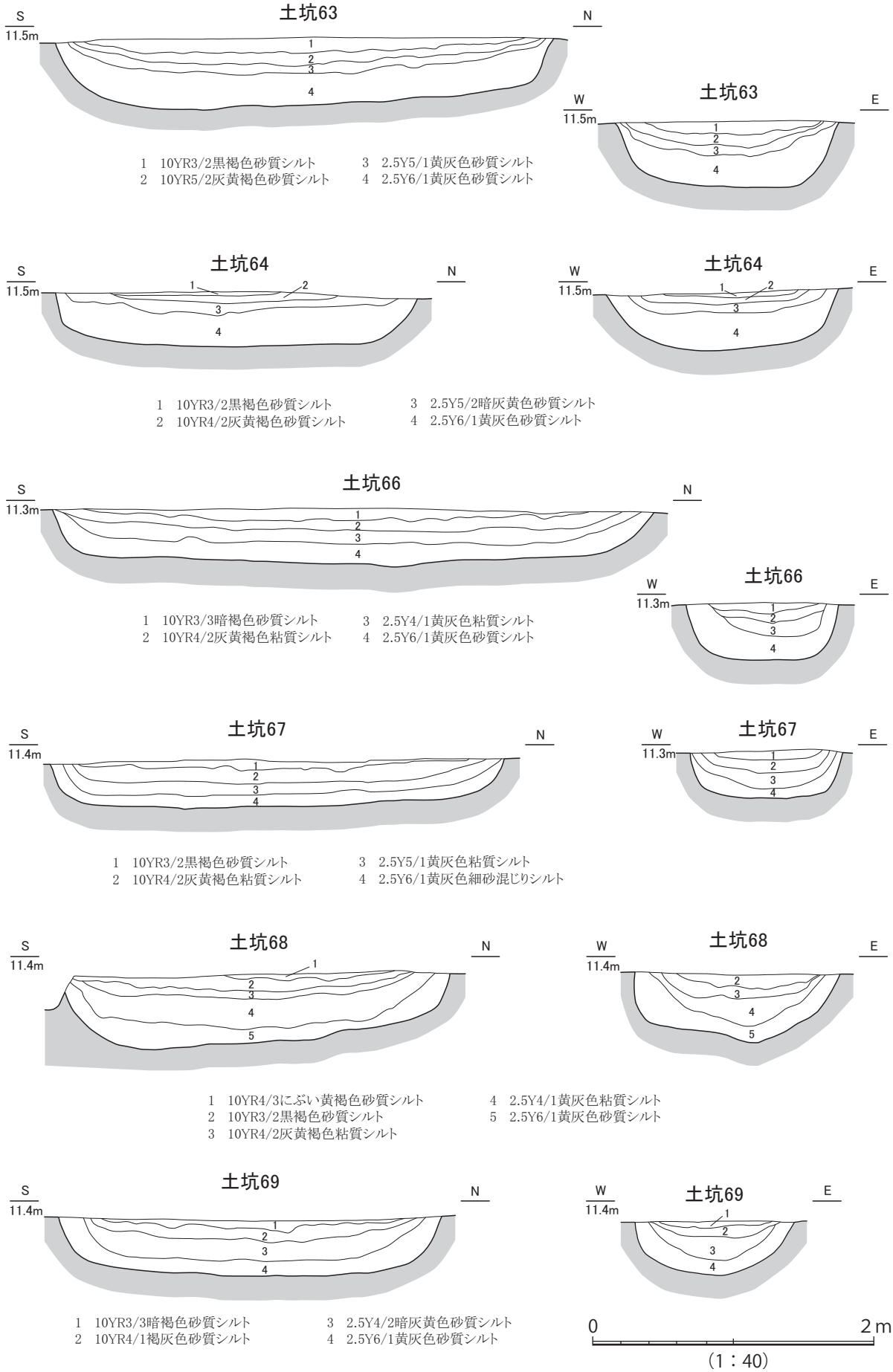
土坑 66（第 139•150 図） 短軸 1.08 m、長軸 4.29 m、深さ 0.39m である。埋土は 4 層からなる。4 層は細砂を含む砂質シルト層である。2・3 層は粘質シルト層であるが、肩口は極細砂が認められ、下方へいくにつれ細粒化していく。2 層はごくわずかに炭化物を含む。1 層は粗砂を含む砂質シルト層である。

土坑 67（第 139•150 図） 短軸 1.08 m、長軸 3.22 m、深さ 0.34m である。埋土は 4 層からなる。4 層は細砂が混じるシルト層である。2・ 3 層は粘質シルト層であるが、肩口は極細砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。1 層は粗砂を含む砂質シルト層である。

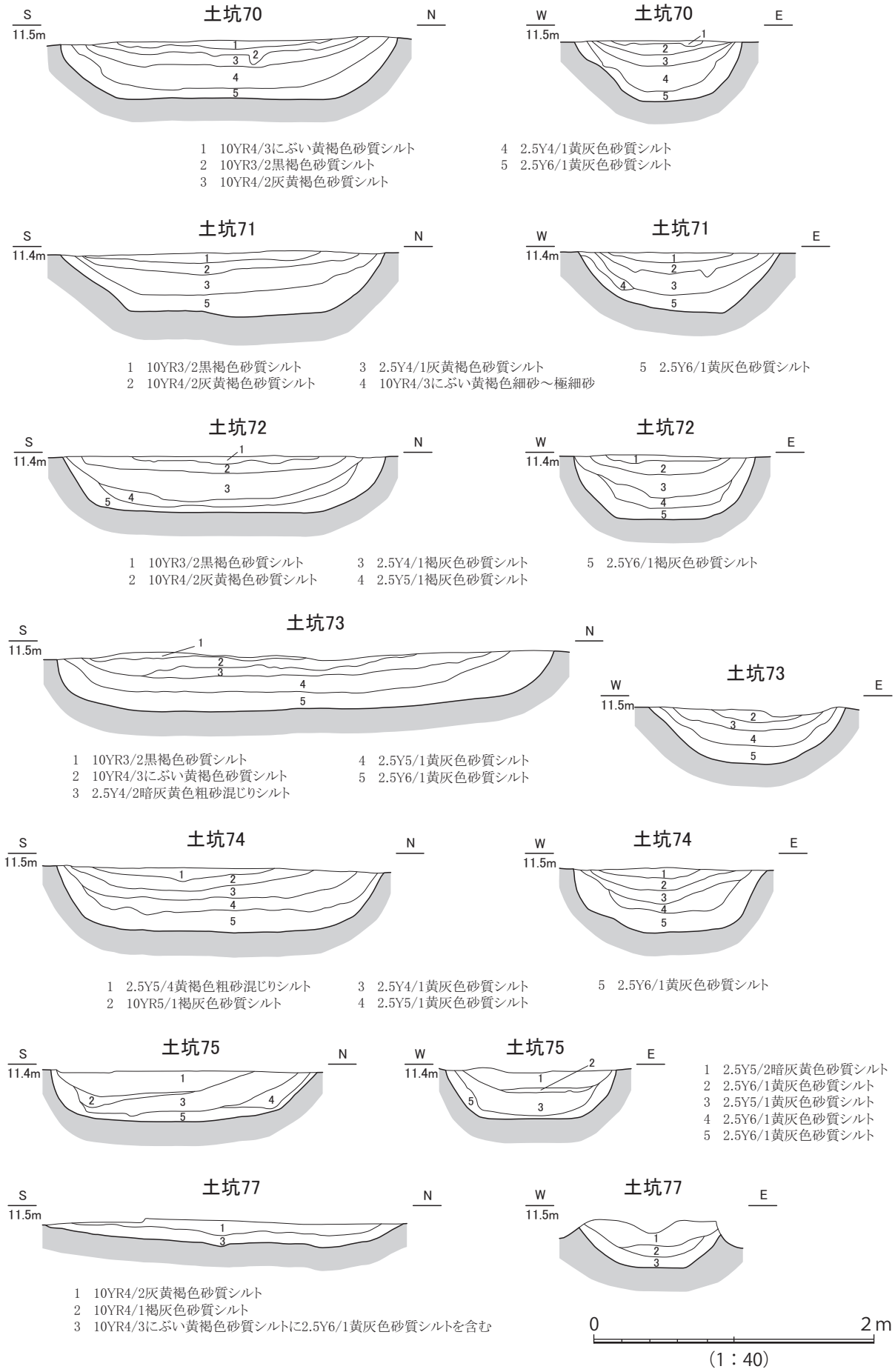
土坑 68（第 139・150 図） 南端を撹乱に切られる。短軸 1.47 m、長軸の残存長 2.73 m、深さ 0.5m である。埋土は 5 層からなる。5 層は砂質シルト層で、シルトのラミナを確認できる。4 層は粘質シルト層で、肩口に比較的粗い砂の堆積が目立つ。わずかに炭化物を含む。3 層は粘質シルト層で、2 層は砂質シルト層で、両層ともごくわずかに炭化物を含む。1 層は砂質シルト層である。

土坑 69（第 139・150 図） 短軸 1.13 m、長軸 2.72 m、深さ 0.39m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。4 層は肩口に比較的粗い砂が目立つ。また、3・4 層はシルトのラミナ、偽礫の堆積を確認できる。

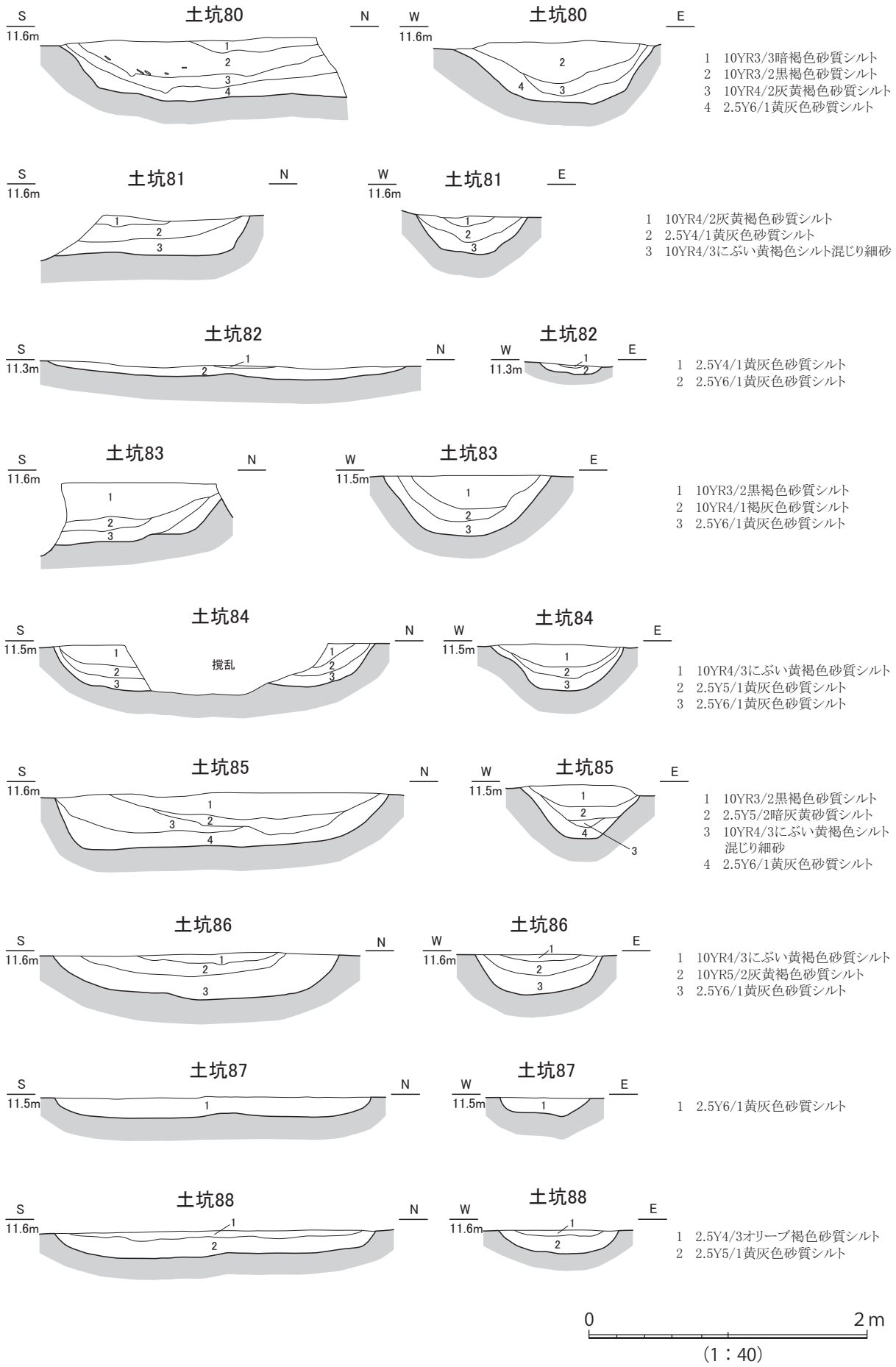
土坑 70（第 139・151 図） 短軸 1.2 m、長軸 2.4 m、深さ 0.41m である。埋土は 5 層の砂質シルト層からなる。5 層は偽礫が堆積している。また、シルトのラミナを確認できるほか、肩口にかけては比較的粗い砂が目立つ。4 層も 5 層同様、肩口に比較的粗い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。3・4 層では土中の鉄分の酸化が斑状に認められる。



第 150 図　列状土坑 63・64・66 ～ 69 断面図



第 151 図　列状土坑 70 ～ 75・77 断面図



第 152 図　列状土坑 80 ～ 88 断面図

土坑 71（第 139•151 図） 短軸 1.44 m、長軸 2.3 m、深さ 0.45m である。5 層は砂質シルト層で、シルトのラミナを確認することができる。肩口には比較的粒子が粗い砂が堆積しており、下方にいくにつれ細粒化していく。4 層は極細砂～細砂の層である。1 ～ 3 層は砂質シルト層で、3 層でも肩口に比較的に粗い砂が目立ち、5 層同様の堆積をしている。

土坑 72（第 139・151 図） 短軸 1.3 m、長軸 2.3 m、深さ 0.4m である。埋土は 5 層の砂質シルト層からなる。4・5 層では偽礫の堆積が認められる。3 層は肩口に比較的粗い砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。

土坑 73（第 139・151 図） 短軸 1.4 m、長軸 3.54 m、深さ 0.42m である。埋土は 5 層からなる。5 層は砂質シルトで、南北断面で南および北から流入した細砂のラミナを確認できる。4 層は砂質シルトで、細砂のラミナを確認できる。3 層は粗砂混じりシルト層で、ほかの層よりも粗砂が目立つ。1・2 層は砂質シルト層である。

土坑 74（第 139•151 図） 短軸 1.38 m、長軸 2.33 m、深さ 0.45m である。埋土は 5 層からなる。4 ～ 5 層は砂質シルト層である。5 層ではラミナを一部確認できるが、植物の根の影響が多く、明確には確認しにくい。4 層ではシルトおよび細砂のラミナが確認できる。東西断面では下から細砂のラミナ、シルトのラミナ、偽礫・細砂・シルトの混在、シルトのラミナの順に堆積を確認できる。3 層では肩口は粗砂が目立ち、下方にいくにつれ細砂化していく。南側の肩口ではシルトと細砂のラミナが確認できる。2 層では南側の肩口で一部シルトのラミナを確認できる。1 層は粗砂混じりのシルト層である。

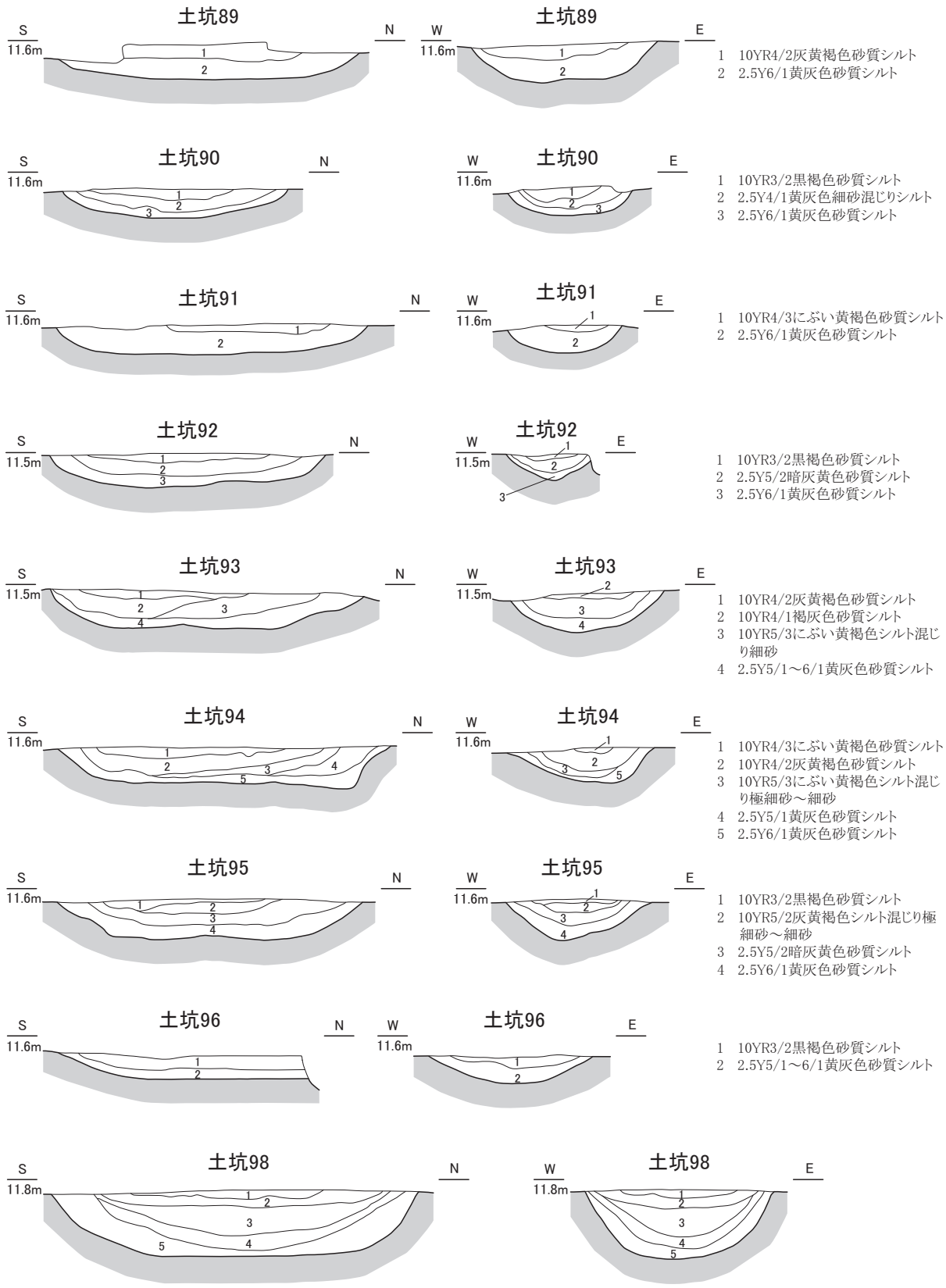
土坑 75（第 138・151 図） 短軸 1.21 m、長軸 1.9 m、深さ 0.36m である。埋土は 5 層の砂質シルト層からなる。5 層は偽礫が堆積している。また、シルトや粗砂のラミナを確認できる。4 層は南北断面でのみ確認でき、層中の下端には細砂のラミナが認められ、その上に複数の偽礫の堆積が確認できる。3 層の南北断面では、下からシルトのラミナ、偽礫・細砂・シルトが混在したもの、細砂のラミナの順に確認できる。北側から堆積物が流入した状況がうかがえる。2 層の下端にシルトのラミナが確認できる。その上に南側から流入した細砂のラミナを確認できる。1 層は砂質シルト層である。肩口で粗砂が目立ち、下方にいくにつれて細粒化していく。

土坑 77（第 138・151 図） 東側を遺構 2158 に切られる。短軸の残存長 1.02 m、長軸 2.58 m、深さ 0.35m である。埋土は 3 層の砂質シルト層からなる。最下層である 3 層は偽礫の堆積が認められる。一部では、肉眼で細砂およびシルトのラミナも確認できる。

土坑 80（第 138・152 図） 北側は撹乱に切られる。短軸 1.44 m、長軸の残存長 2.06 m、深さ 0.43m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。4 層下部で偽礫が多く認められる。また、壁側には細砂が多く認められる。3 層も壁側に多くの細砂が確認できる。細砂は 10YR4/3（にぶい黄褐色）を呈する。2 層は所々に粗砂が混じる。また、土器の細片を含む。

土坑 81（第 138・152 図） 南側は別遺構に切られる。短軸 0.8 m、長軸の残存長 1.4 m、深さ 0.25m である。埋土は 3 層からなる。3 層はシルト混じり細砂層である。下部に偽礫が堆積し、その上に細砂が堆積している。細砂の中にシルトのラミナを確認できる。1•2 層は砂質シルト層である。2 層でも細砂およびシルトのラミナを確認できる。

土坑 82（第 138•152 図） 大きく削平を受けており、短軸 0.45 m、長軸 2.56 m、深さ 0.08m である。埋土は 2 層の砂質シルト層からなる。2 層の一部でシルトのラミナを確認できる。



1　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
2　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト

1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　2.5Y4/1黄灰色細砂混じりシルト
3　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト

1　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト
2　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト

1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
3　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト

1　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
2　10YR4/1褐灰色砂質シルト
3　10YR5/3にぶい黄褐色シルト混じり細砂
4　2.5Y5/1～6/1黄灰色砂質シルト

1　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト
2　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
3　10YR5/3にぶい黄褐色シルト混じり極細砂～細砂
4　2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
5　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト

1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　10YR5/2灰黄褐色シルト混じり極細砂～細砂
3　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
4　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト

1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　2.5Y5/1～6/1黄灰色砂質シルト

1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　10YR2/1黒色砂質シルト
3　10YR5/2灰黄褐色砂質シルト
4　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
5　2.5Y6/1黄灰色～10YR5/6黄褐色砂質シルト

0　2m
（1：40）

第 153 図　列状土坑 89 ～ 96・98 断面図

土坑 83（第 138・152 図） 南側を撹乱に切られる。短軸 1.2 m、長軸の残存長 1.11 m、深さ 0.44m である。埋土は 3 層の砂質シルト層からなる。3 層の中央底部付近で偽礫を確認できる。その上には細砂が多く認められ、なかにはシルトのラミナが複数確認できる。2 層上部には細砂が多く、下方にいくにつれ細粒化していく。

土坑 84（第 138・152 図） 中央を大きく撹乱に切られる。短軸 0.95 m、長軸 2.31 m、深さ 0.34m である。埋土は 3 層の砂質シルト層からなる。3 層では極細砂および細砂のラミナを確認できる。2 層でもシルトおよび細砂のラミナを確認できる。1 層は細砂がまばらに混じる。

土坑 85（第 138・152 図） 短軸 0.85 m、長軸 2.4 m、深さ 0.4m である。埋土は 4 層からなる。4 層は砂質シルト層であり、シルトおよび細砂のラミナを確認できる。3 層はシルト混じり細砂層であり、層中に偽礫の堆積が認められる。1・2 層は砂質シルト層である。2 層東側の肩口でごくわずかな偽礫の堆積を確認できる。

土坑 86（第 138・152 図） 短軸 0.92 m、長軸 2.05 m、深さ 0.33m である。埋土は 3 層の砂質シルト層からなる。3 層では側方に 10YR5/3（にぶい黄褐色）を呈する細砂のラミナを確認することができる。また、細砂のラミナの間や 3 層上部ではシルトのラミナも確認でき、3 層は幾度もの自然作用による堆積過程を経たことが窺える。2 層は側方下部で 10YR5/3（にぶい黄褐色）を呈する細砂の堆積が認められる。1 層は粗砂から細砂を含む。

土坑 87（第 138・152 図） 短軸 0.64 m、長軸 2.27 m、深さ 0.14m である。埋土は 1 層で砂質シルト層である。

土坑 88（第 138・152 図） 短軸 0.86 m、長軸 2.3 m、深さ 0.19m である。埋土は 2 層の砂質シルト層からなる。2 層では偽礫の堆積が認められる。

土坑 89（第 138・153 図） 北側と南側の一部は削平を受けている。短軸 1.26 m、長軸 2.04 m、深さ 0.25m である。埋土は 2 層からなる。2 層は砂質シルト層であり細砂とシルトのラミナを確認できる。1 層は細砂が若干混じる砂質シルト層である。

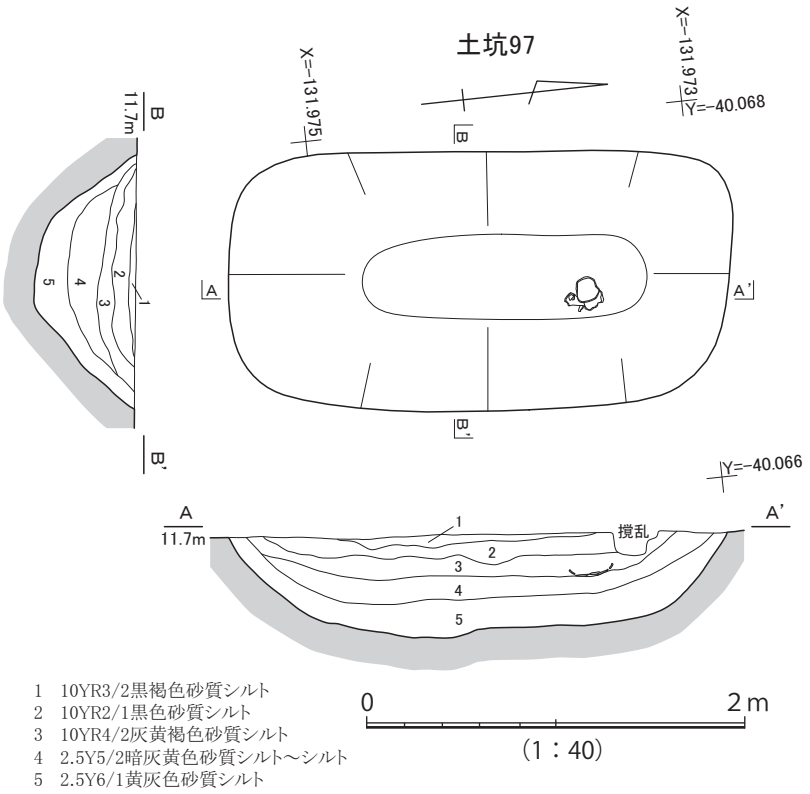
土坑 90（第 138•153 図） 短軸 0.84 m、長軸 1.52 m、深さ 0.19m である。埋土は 3 層からなる。3 層は砂質シルト層で、肩口で細砂が目立つ。2 層は細砂混じりシルト層で、上部と下部でシルトのラミナを確認できる。その間は細砂が堆積している。1 層は砂質シルト層である。

土坑 91（第 138・153 図） 短軸 0.77 m、長軸 2.1 m、深さ 0.2m である。埋土は 2 層の砂質シルト層からなる。2 層上部ではシルトおよび細砂のラミナを確認できる。1 層はごくわずかに炭化物を含む。

土坑 92（第 138・153 図） 東端を若干、撹乱に切られる。短軸の残存長 0.58 m、長軸 1.87 m、深さ約 0.22m である。埋土は 3 層の砂質シルト層からなる。3 層底部には偽礫が堆積している。南側の肩口で、細砂のラミナを確認できる。2 層も南側の肩口で細砂が多く確認でき、東側でも一部確認できる。下方にいくにつれ細粒化していく。2 層上部と下部でシルトのラミナを確認できる。その間には土中の鉄分の酸化が顕著で、2.5Y5/3（黄褐色）を呈している。

土坑 93（第 138•153 図） 短軸 1.04 m、長軸 2.11 m、深さ 0.26m である。埋土は 4 層からなる。4 層は砂質シルト層で、シルト～極細砂のラミナを確認できる。3 層はシルト混じりの細砂層で、層中に偽礫を複数含む。また、一部でシルトのラミナを確認できる。2 層は砂質シルト層である。1 層も砂質シルト層であるが、まばらに極細砂～粗砂を含む。

土坑 94（第 138・153 図） 短軸 1.0 m、長軸 2.25 m、深さ 0.24m である。埋土は 5 層からなる。最下層の 5 層は偽礫を多く含む砂質シルト層である。肩口には細砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。ごく一部でラミナを確認できる。4 層は 5 層同様、偽礫を確認できるが、数は少ない。砂質シルト層であり、シルトおよび細砂のラミナを確認できる。3 層はシルトが混じる極細砂～細砂層である。2 層は砂質シルト層で、炭化物を含む。1 層も砂質シルト層でわずかに炭化物を含む。



第 154 図　土坑 97 平面・断面・遺物出土状況図

土坑 95（第 138•153 図） 短軸 0.98 m、長軸 2.06 m、深さ 0.28m である。埋土は 4 層からなる。最下層の 4 層は砂質シルト層で、細砂およびシルト質のラミナが顕著に認められる。また、細砂のなかに様々な大きさの偽礫も堆積している。肩口には若干粗砂が含まれ、下方にいくにつれ細粒化していく。3 層も同じく砂質シルト層であるが、中央底付近で粗砂の堆積が認められる。細砂のなかに一部、シルト質のラミナが確認できる。肩口の方がより粒子が粗く、下方にいくにつれ細粒化していく。2 層はシルト混じりの極細砂～細砂層である。上の方は粒子が細かい。1 層は砂質シルトからなる層である。

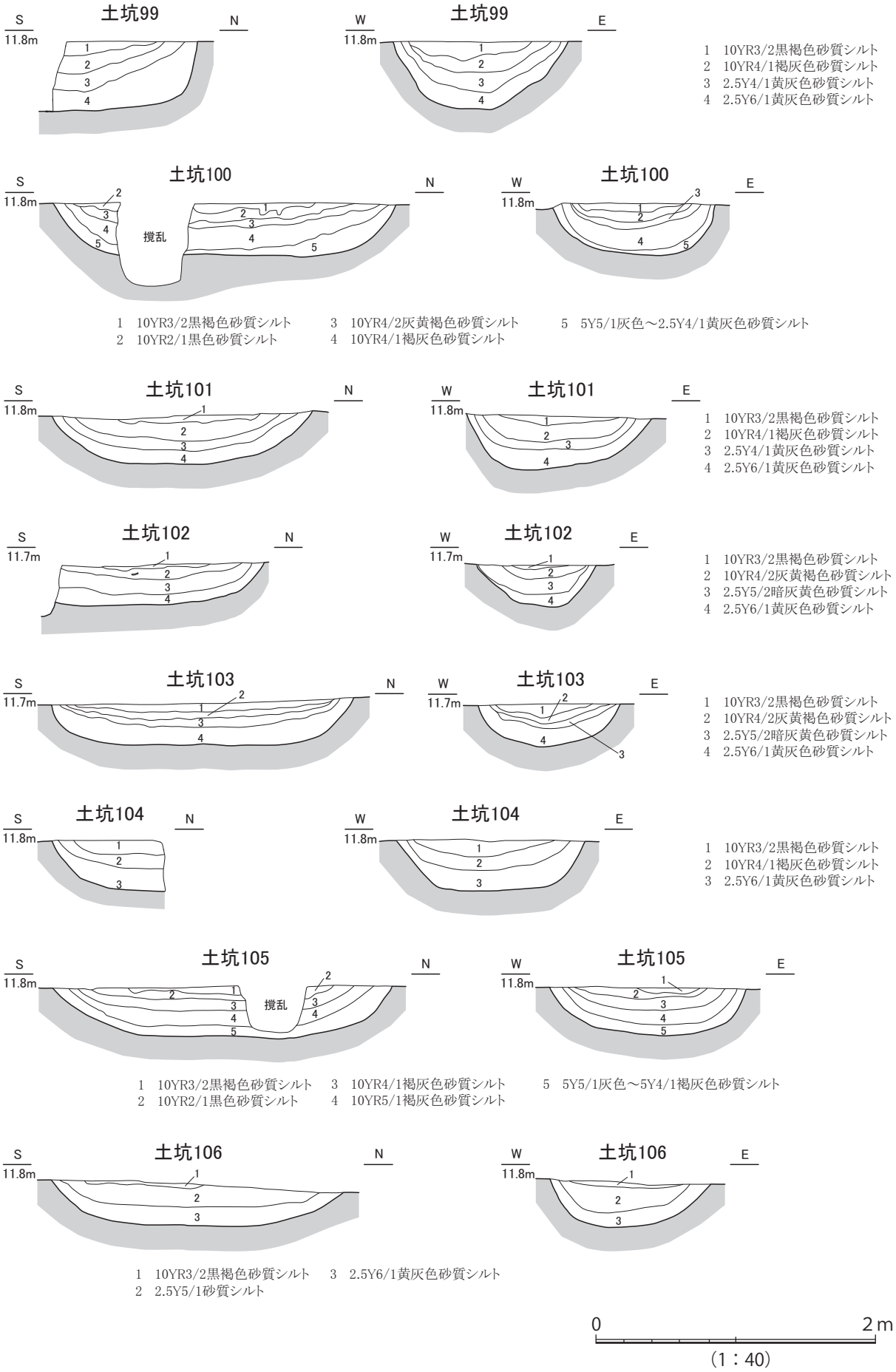
土坑 96（第 138・153 図） 北側を撹乱に切られる。短軸 1.11 m、長軸の残存長 1.7 m、深さ約 0.16m である。埋土は 2 層からなり、両層とも砂質シルト層で、わずかに炭化物を含む。2 層では土中の鉄分の酸化が顕著で、その箇所は 10YR5/6（黄褐色）を呈する。

土坑 97（第 138・154 図） 短軸 1.34 m、長軸 2.68 m、深さ 0.54m である。埋土は 5 層の砂質シルト層からなる。5 層ではシルトのラミナを確認できる。4 層はこの土坑埋土内のなかで、もっともシルトの割合が高い層である。ごくわずかに炭化物を含む。3 層もごくわずかに炭化物を含む。また、3 層からは壺と甕の底部片が出土した（**第 159 図　509・510**）。

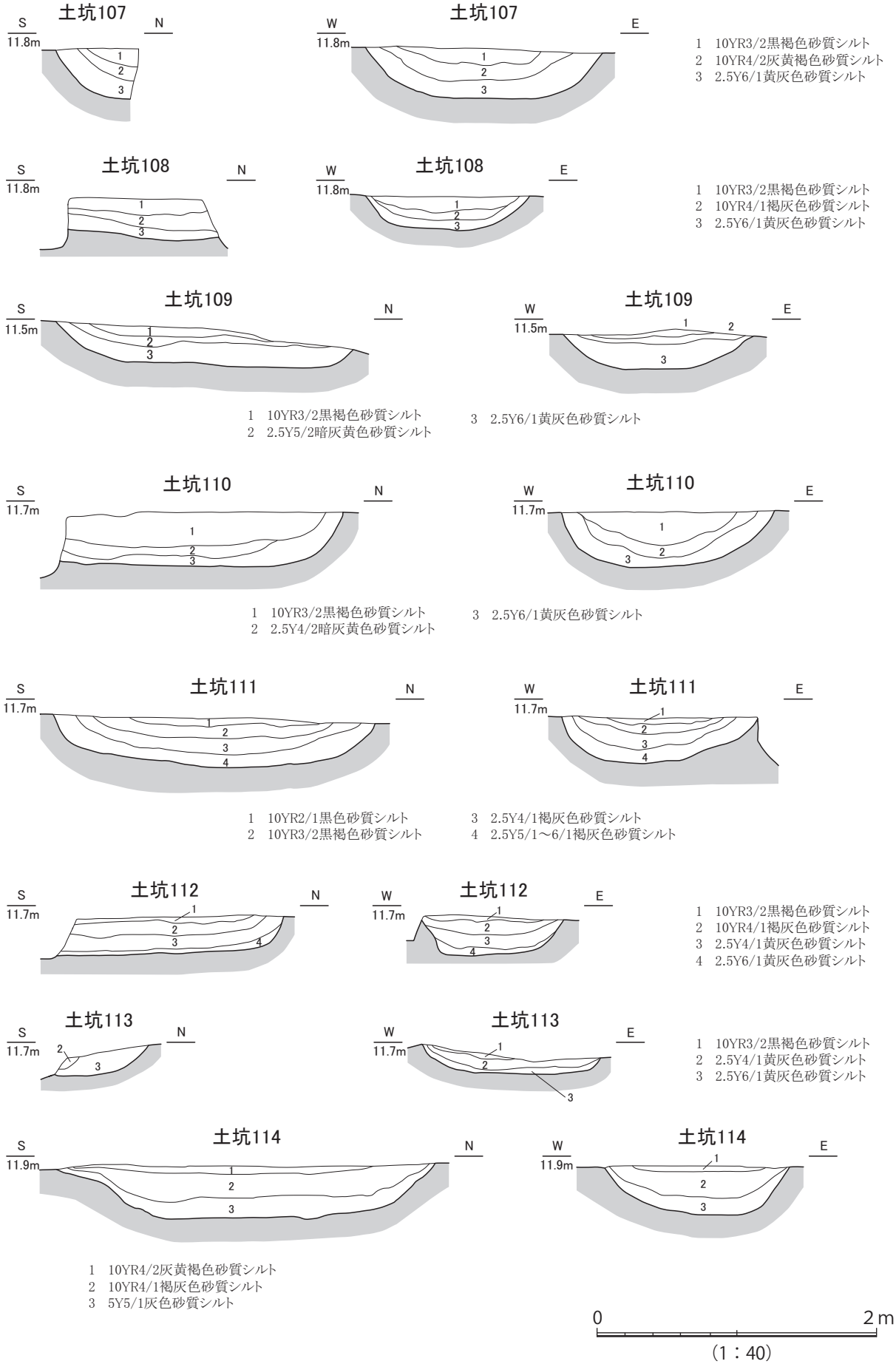
土坑 98（第 138・153 図） 短軸 1.28 m、長軸 2.48 m、深さ 0.45m である。埋土は 5 層の砂質シルト層からなる。5 層ではシルトのラミナを確認できる。3 層はごくわずかに炭化物を含む。1・2 層から土器の細片が出土している。

土坑 99（第 138・155 図） 南側を撹乱に切られる。短軸 1.25 m、長軸の残存長 1.0 m、深さ 0.5m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。4 層ではシルトのラミナが幾重にも認められる。2・3 層はごくわずかに炭化物を含む。

土坑 100（第 138・155 図） 中央やや南側を撹乱に切られる。短軸 1.18 m、長軸 2.44 m、深さ



第 155 図　列状土坑 99 ～ 106 断面図



第 156 図　列状土坑 107 ～ 114 断面図

0.37mである。埋土は5層の砂質シルト層からなる。最下層の5層ではシルトのラミナを確認できる。また、肩口は粒子が粗く、下方にいくにつれ細粒化していく。3・4層は他の層に比べて砂の割合が少なく、両層ともわずかに炭化物を含む。土坑内から、甕の底部が出土した（**第159図　511**）。

土坑101（第138・155図）　短軸1.32 m、長軸1.85 m、深さ0.34mである。埋土は4層からなる。4層は砂質シルト層で、シルトおよび細砂のラミナを確認できる。3層は他の層に比べて砂の割合が少ない砂質シルト層で、ごくわずかに炭化物を含む。1・2層は砂質シルト層である。

土坑102（第138・155図）　土坑の南側を撹乱に切られる。短軸0.85 m、長軸の残存長1.48 m、深さ0.28mである。埋土は4層の砂質シルト層からなる。3・4層ではシルトのラミナを確認できる。2層からは土器の細片が出土した。

土坑103（第138･155図）　短軸1.01 m、長軸2.16 m、深さ0.3mである。埋土は4層からなる。最下層の4層では砂質シルト層で、シルトのラミナを一部確認できる。3層はごくわずかに炭化物を含む砂質シルト層である。1・2層も砂質シルト層である。

土坑104（第138・155図）　北半分を撹乱に切られる。短軸1.35 m、長軸の残存長0.8 m、深さ0.37mである。埋土は3層の砂質シルト層からなる。3層ではシルトのラミナを一部、確認できる。2層はごくわずかに炭化物を含む。

土坑105（第138･155図）　中央付近は撹乱を受ける。短軸1.4 m、長軸2.42 m、深さ0.35mである。埋土は5層の砂質シルト層からなる。5層は肩口に細砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。また、シルトのラミナを確認できる。3・4層は他の層に比べて砂の割合が少なく、ごくわずかに炭化物を含む。

土坑106（第138・155図）　短軸1.15 m、長軸2.09 m、深さ0.3mである。埋土は3層の砂質シルト層からなる。3層では、シルトのラミナを確認できる。2層はわずかに炭化物を含む。

土坑107（第138・156図）　北側の大半を撹乱に切られる。短軸1.69 m、長軸の残存長0.58 m、深さ0.36mである。埋土は3層の砂質シルト層からなる。3層ではシルトのラミナを一部確認できる。また、肩口には細砂が目立ち、下方にいくにつれ細粒化していく。2層においても肩口に細砂～極細砂が目立ち、3層と同様の堆積が認められる。

土坑108（第138・156図）　南北を撹乱に切られる。短軸1.17 m、長軸の残存長0.95 m、深さ0.3mである。埋土は3層の砂質シルト層からなる。3層ではシルトのラミナを確認することができる。

土坑109（第138・156図）　北側は検出面が低くなっている。短軸1.35 m、長軸2.12 m、深さ0.26mである。埋土は3層の砂質シルト層からなる。3層ではシルトのラミナを確認できる。2層はごくわずかに炭化物を含む。

土坑110（第138・156図）　南側を撹乱に切られる。短軸1.52 m、長軸の残存長2.05 m、深さ0.39mである。埋土は3層の砂質シルト層からなる。最下層の3層では、土中の鉄分の酸化が多く認められる。その箇所は10YR5/6（黄褐色）を呈する。

土坑111（第138・156図）　短軸1.39 m、長軸2.3 m、深さ0.35mである。埋土は4層の砂質シルト層からなる。4層では偽礫の堆積が認められ、またシルトおよび細砂のラミナを確認できる。

土坑112（第138･156図）　南側を撹乱に切られる。短軸の残存長1.02 m、長軸の残存長1.65 m、深さ0.26mである。埋土は4層の砂質シルト層からなる。4層は偽礫の堆積が多く認められる。また、わずかにラミナを確認できる。3層は炭化物を含む。炭化物は土坑の形状に沿う形で堆積しており、

開口時の流入を想定できる。2 層はわずかに炭化物を含む。

土坑 113（第 138・156 図） 南側を大きく撹乱に切られる。短軸の残存長 0.67 m、長軸 1.27 m、深さ 0.2m である。埋土は 3 層の砂質シルト層からなる。2 層はわずかに炭化物を含む。

土坑 114（第 138・156 図） 短軸 1.32 m、長軸 2.7 m、深さ 0.37m である。埋土は 3 層の砂質シルト層からなる。最下層の 3 層では、シルトのラミナを確認できる。2 層は他の層に比べて砂の割合が低く、3 層と同じくシルトのラミナを確認できる。また、炭化物を含む。

土坑 115（第 138・157 図） 南側を撹乱に切られる。短軸 1.16 m、長軸の残存長 1.65 m、深さ 0.47m である。埋土は 4 層の砂質シルト層からなる。 4 層の西側と東側の下部には大きな偽礫の堆積を確認できる。また、シルトのラミナを若干確認することができる。2・3 層は他の層に比べて砂の割合が少なく、わずかに炭化物を含む。

土坑 116（第 138・157 図） 中央付近を撹乱に切られる。短軸 1.24 m、長軸 2.48 m、深さ 0.6m である。埋土は 5 層の砂質シルト層からなる。4 層では途切れ途切れであるが、シルトのラミナを確認できる。3 層は他の層に比べて砂の割合が少ない。また、炭化物を含む。 2 層中からは壺の底部片が出土した（第 159 図　512）。

土坑 117（第 138•157 図） 短軸 1.06 m、長軸 1.8 m、深さ 0.37m である。埋土は 4 層からなる。4 層は砂質シルト層で、シルトのラミナを確認できる。4 層中から土器の細片が 1 点出土した。今回の調査で、土坑の下層から出土した唯一の事例である。3 層は炭化物を含む砂質シルト層である。2 層はわずかに炭化物を含む砂質シルト層である。土器の細片が数点出土した。1 層は砂質シルト層である。

土坑 118（第 138・157 図） 北側が撹乱に切られる。短軸 0.98 m、長軸の残存長 1.34 m、深さ 0.44m である。埋土は 3 層の砂質シルト層からなる。3 層はシルトのラミナが幾重にも確認できる。2 層は炭化物を含む。1 層はわずかに炭化物を含む。

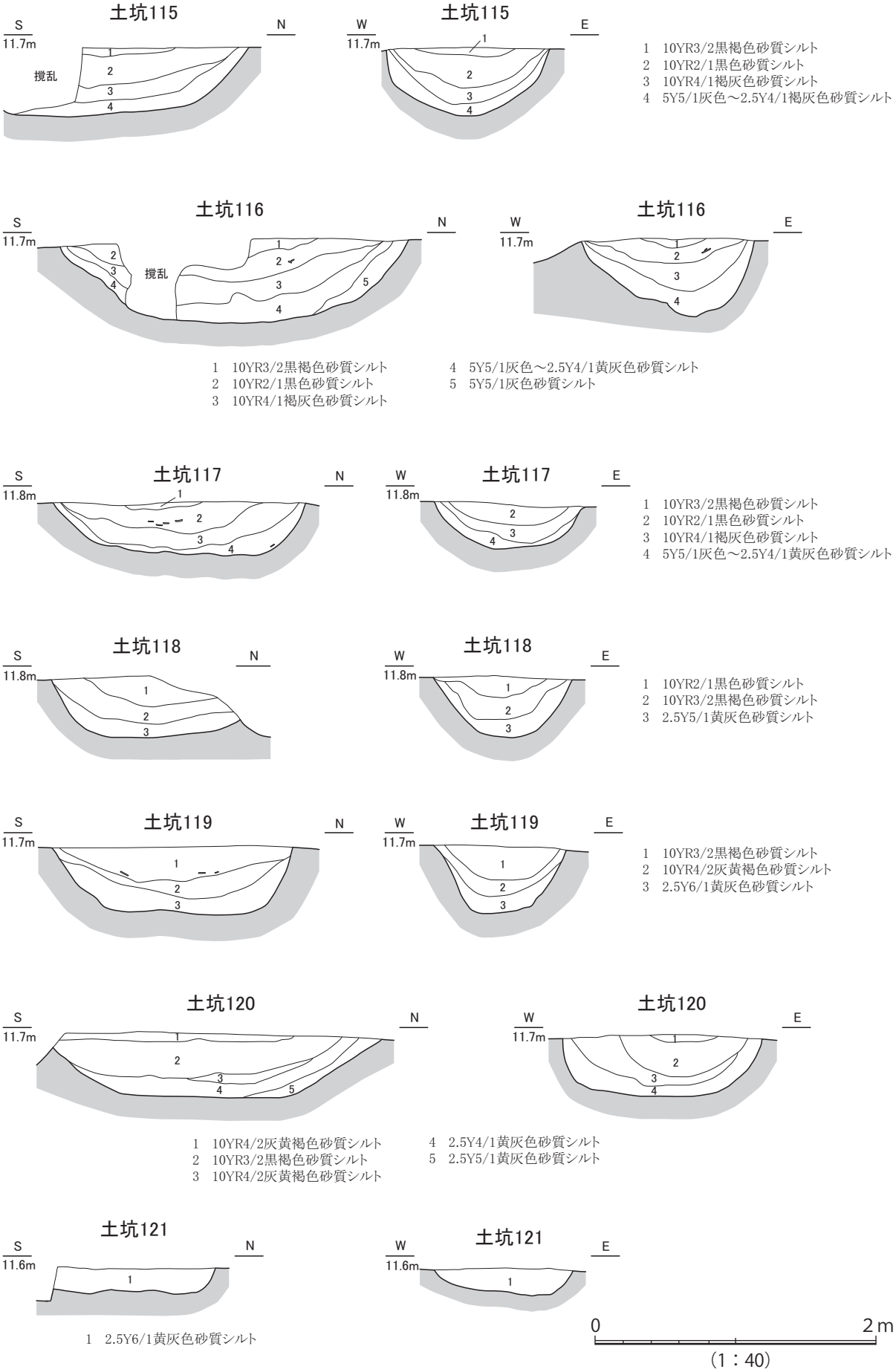
土坑 119（第 138・157 図） 短軸 0.95 m、長軸 1.71 m、深さ 0.49m である。埋土は 3 層からなり、最下層である 3 層は、砂質シルトからなる層で、ごくわずかに炭化物を含む。1・2 層も砂質シルトである。また、1 層からは土器片が出土した。

土坑 120（第 138•157 図） 南側をわずかに撹乱に切られる。短軸 1.41 m、長軸の残存長 2.35 m、深さ 0.45m である。埋土は 5 層の砂質シルト層からなる。5 層は偽礫が多く認められる。4 層は 5 層と類似するものの、偽礫はわずかに含まれる程度である。2 層はわずかに炭化物を含む。

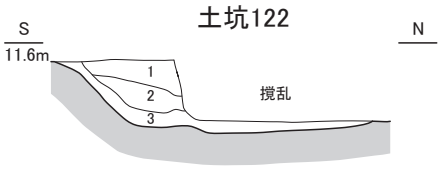
土坑 121（第 138・157 図） 南側を撹乱に切られる。短軸 0.99 m、長軸の残存長 1.15 m、深さ 0.19m である。埋土は 1 層の砂シルト層のみである。

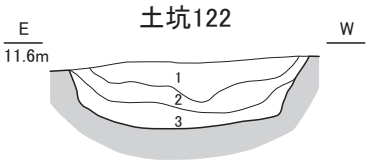
土坑 122（第 138・158 図） 大半を撹乱に切られる。短軸 1.27 m、長軸の残存長 1.68 m、深さ 0.35m である。埋土は 3 層の砂質シルト層からなる。3 層底部では偽礫が多く堆積している。2 層はわずかに炭化物を含む。

土坑 123（第 138・158 図） 東側の肩部以外を撹乱に切られる。短軸の残存長 1.36 m、長軸の残存長 1.12 m、深さ 0.35m である。埋土は 3 層の砂質シルト層からなる。最下層である 3 層は偽礫を多く含む。偽礫は土坑底面から浮いた状態のものも観察され、自然堆積と土坑側壁の崩落が同時に進行した状態が想定できる。 1 ・ 2 層では、細砂のラミナを確認できる。また、両層からは土器の細片が多く出土した。

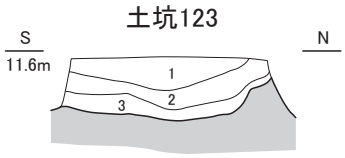


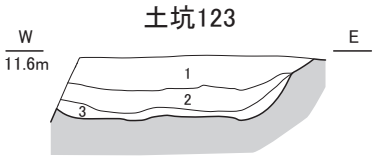
第 157 図　列状土坑 115 ～ 121 断面図



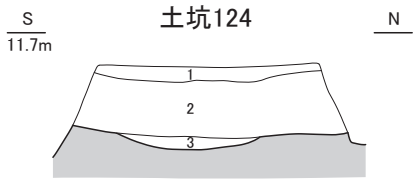


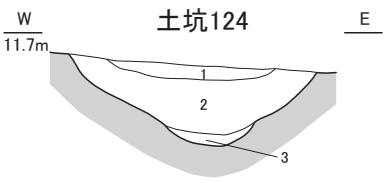
1　10YR2/2黒褐色砂質シルト
2　10YR3/2黒褐色砂質シルト
3　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト



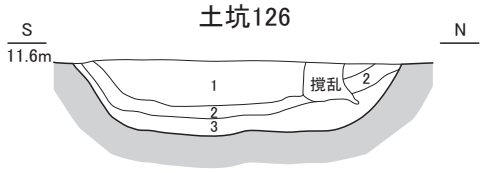


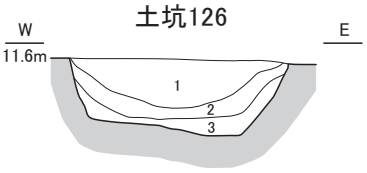
1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
3　10YR3/2黒褐色砂質シルト



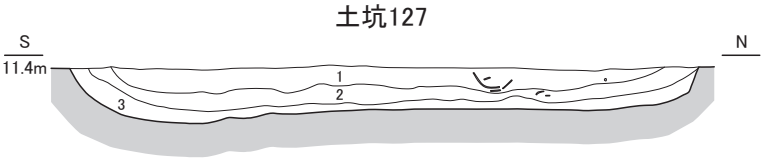


1　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト
2　10YR2/2黒褐色シルト混じり細砂
3　10YR4/2灰黄褐色シルト混じり細砂

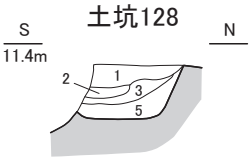




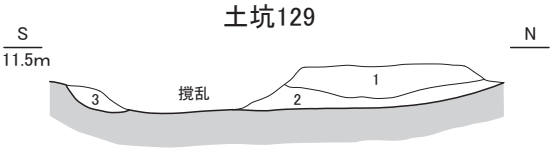
1　10YR3/2黒褐色砂質シルト
2　10YR4/1褐灰色砂質シルト
3　2.5Y4/1～2.5Y6/1黄灰色砂質シルト

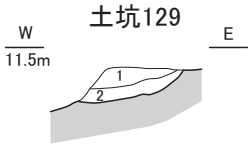


1　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
2　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト
3　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト

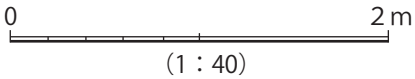


1　10YR4/2灰黄褐色細砂混じりシルト
2　10YR3/3暗褐色細砂混じりシルト
3　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト
4　10YR4/3にぶい黄褐色シルト混じり細砂
5　10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト





1　10YR4/1褐灰細砂
2　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト
3　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト



第 158 図　列状土坑 122 ～ 124・126 ～ 129 断面図

土坑 124（第 138・158 図） 南北を撹乱に切られる。短軸 1.3 m、長軸の残存長 1.46 m、深さ 0.44m である。埋土は 3 層からなる。3 層はシルト混じりの細砂層である。2 層はシルト混じりの細砂層で、わずかに粗砂を含む。1 層は砂質シルト層である。この土坑はほかの土坑とは異なり、砂層を掘りこんでつくられた土坑である。そのため、土坑周辺の地表物質の違いが埋土に反映されたと考えられる。土坑内からは、甕の底部片が出土した（**第 159 図　513**）。

土坑 126（第 138･158 図） 短軸 1.15 m、長軸 1.73 m、深さ 0.4m である。埋土は 3 層からなる。3 層とも砂質シルトである。最下層の 3 層では土中の鉄分が酸化しており、その箇所は 10YR5/6（黄褐色）を呈している。1 層はわずかに炭化物を含む。

土坑 127（第 138・158 図） 短軸 0.96 m、長軸 3.32 m、深さ 0.28m である。埋土は 3 層の砂質シルト層からなる。最下層である 3 層では偽礫を多く確認できる。1・2 層からは壺や甕の底部片、高坏の脚部が出土した（**第 159 図　514 ～ 516**）。これらは、ある程度堆積が進行したのちの廃棄と考えられる。

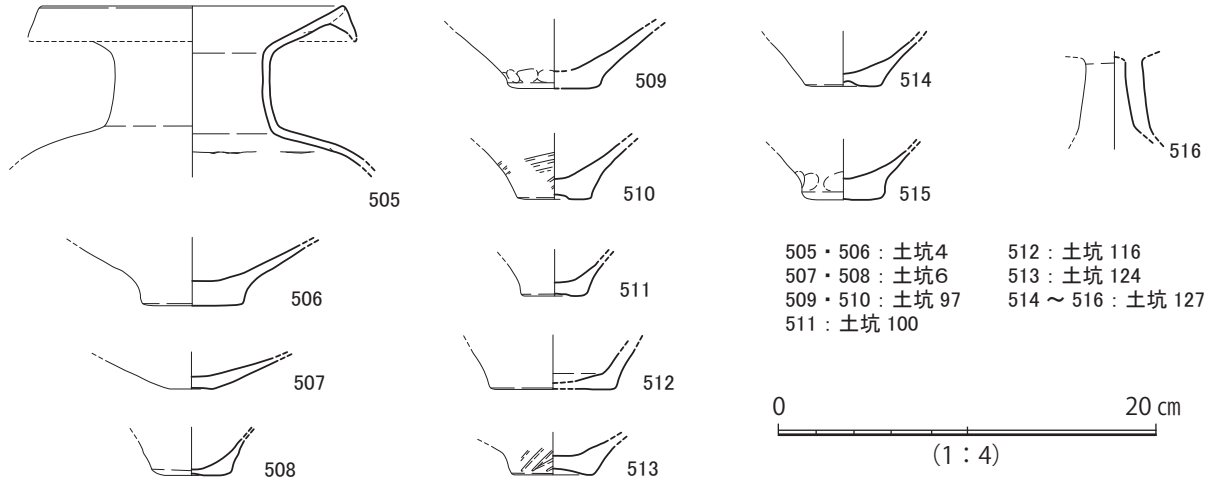
土坑 128（第 138・158 図） 短軸 0.88 m、長軸の残存長 0.55 m、深さ 0.3m である。埋土は 5 層からなる。最下層である 5 層は偽礫の堆積が認められる。4 層は東西の断面図でのみ確認できた。西側から流入した自然堆積であり、偽礫を含むシルト混じりの細砂である。4・5 層の偽礫は土坑の壁が崩落したものであろう。1・2 層は細砂混じりシルト層で、2 層は 1 層と比べると細砂の割合が多い。

土坑 129（第 139･158 図） 大きく削平を受けており、短軸の残存長 0.57 m、長軸の残存長 2.32 m、深さ 0.18m である。埋土は 3 層からなる。2・3 層は砂質シルト層、1 層はシルト混じりの細砂層である。ただし、3 層については、別遺構の埋土の可能性もある。

（3） 出土遺物

前述のように、列状土坑群からの遺物出土量は少なく、出土した土器も小片のものが多いが、図化可能なものはすべて**第 159 図**に示した。

土坑 4 からは **505・506** が出土した。**505** は広口壺の口縁部から肩部にかけての破片である。口頸は 15.6㎝に復元でき、垂下する口縁部をもち、頸部が短く直立する。内外面は磨滅により器面調整は確認できない。胎土中には 3㎜程度の長石粒や石英粒を少量含み、焼成はやや不良である。口縁



第 159 図　列状土坑群出土遺物実測図

部の垂下する部分は粘土紐接合面で剥離する。しかし本来、垂下部が貼り付けられていたと考えられる部分に黒斑が認められることから、焼成前に粘土紐が剥離したものと考えられる。また、肩部には外傾接合の痕跡が明瞭に観察される。**506** は壺の底部片である。底径は５㎝を測る。内外面とも磨滅により器面調整は不明である。胎土中には 2.5㎜程度の長石粒、石英粒を少量含む。底面は黒斑を切る形で一部欠損しており、使用中もしくは堆積中に欠損したと考えられるが、後述する堆積状況から堆積中の欠損ではなく、使用中の欠損であると推定できる。

土坑 6 からは **507・508** が出土した。**507** は壺の底部片である。2.5㎝を測る底部から大きく外彎する体部をもち、底部は明瞭に作り出されていない。胎土中に 1.5㎜～２㎜程度の長石粒、石英粒を含む。内外面とも磨滅が激しいが、外面にわずかにナデ調整の痕跡が確認できる。**508** は甕の底部片で底径は 3.6㎝を測る。底面中央にわずかにくぼみが認められる。胎土中には 2.5㎜程度の長石粒、１㎜程度の石英粒、２㎜程度のチャート粒を含む。内外面とも磨滅が激しく、器面調整は不明である。

土坑 97 からは **509・510** が出土した。**509** は壺の底部片である。底面の約半分が残存しており、底部外面に指頭圧痕が残る。底径は 4.8m に復元できる。胎土中には 2.5㎜程度の長石粒、石英粒、チャート粒を少量含むほか雲母の細粒を多く含む。石英粒は、他の土器に含まれる石英粒と比較して透明度が高い印象をうける。内面は磨滅のため調整は不明だが、外面はナデ調整が確認できる。**510** は甕の底部片である。底径は長径４㎝、短径 3.5㎝を測り、楕円形を呈する。底面の中心付近にくぼみがあることから、粘土紐で輪を作り、その上に粘土板を置くことで成形していったと考えられる。胎土中には３㎜程度の長石粒、１㎜程度の石英粒を含む。器面調整は内面がナデ調整、外面がタタキ成形の後ナデ調整を施す。

土坑 100 からは甕の底部 **511** が出土した。底径は 3.4cm を測る。胎土中に 3㎜程度の長石粒、5㎜程度の小礫を多く含み、他の列状土坑群出土土器と比較して胎土中の礫の様相が異なる。内外面とも磨滅のため器面調整は不明である。

土坑 116 からは壺の底部片 **512** が出土した。底径は 6.4㎝に復元できる。胎土中に１㎜程度の長石粒、石英粒を少量含む。内外面とも磨滅のため器面調整は不明である。

土坑 124 からは甕の底部片 **513** が出土した。底径は 4.35㎝を測り、中央部分がややくぼみをもつ上げ底状の底部である。胎土中には 1.5㎜～２㎜程度の長石粒、石英粒、チャート粒を含む。器面調整は内外面とも磨滅のため不明瞭だが、外面にはタタキ成形と判断できる痕跡を残す。また、内面は底部からの体部への立ち上がり部分を成形する際に内傾接合した部分で粘土帯が剥離する。

土坑 127 からは **514 ～ 516** が出土した。**514** は壺の底部片と考えられる。底径は 3.85㎝を測る。底面中央付近にはくぼみがあり、前述した **510** と同様の成形技法を用いたと考えられる。胎土中には３～ 3.5㎝程度の長石粒、石英粒を少量含む。器面調整は内外面とも磨滅のため不明である。**515** は甕の底部片である。底径は 4㎝を測る。胎土中には 2.5㎜程度の長石粒、1.5㎜程度の石英粒を含む。含有される石英粒は透明度が高いものと低いものの二者が確認できる。器面は内外面とも磨滅が激しく、内面の調整は不明だが、外面の調整はナデ調整と推定できる。**516** は高坏の脚柱部片である。内面に明瞭な屈曲をもつことから、脚柱部下半から屈曲して開く裾部をもつと考えられる。胎土中には最大で 5㎜程度の石英粒を多量に含む。器面調整は内外面とも磨滅のため不明である。

以上のように、列状土坑群から出土した土器は明瞭な底部をもつ個体が多数を占める。また、高坏の脚部に明瞭な屈曲が確認できることから、庄内式前半に位置づけられる。更に、内外面の磨滅が激

しく器面調整が不明な資料が多いことも特筆される。これは、一括投棄と推定できるＡ区ＳＫ 1111 出土土器では器面調整が明瞭に確認できるものが多いことと比較すると、風雨などの自然作用による堆積によって徐々に土坑が埋没する過程で、器表面が剝落していった結果と考えることができよう。

（４） 列状土坑群の調査成果

列状土坑群は 121 基の土坑が横 7 列の列状に配置され、南北 80m にわたって帯状に続き、調査区南端で若干東へ屈曲していた。南北ともにさらに続いているものと考えられ、より長いものであったことは確実である。

個々の土坑については、長軸 2 ～ 3m 程度、短軸 1m 程度、検出面からの深さ 0.40m 程度のものが多いが、ばらつきはある。土坑の形状についても個々で若干異なるが、似た形状の土坑がかたまって存在する傾向が認められ、掘削した人の「くせ」等の可能性が想定される。

列状に並ぶ土坑の列がずれる箇所がある。土坑 36 と 37、59 と 60、70 と 71 の間である。３列まとめてずれることから、土坑の掘削単位を想定することが可能である。また、この地点に関しては掘削が両方向から進行した結果と想定される。このような土坑群は時間をかけて掘削されたのではなく、同時期に一斉に掘削されたと考える方が妥当であろう。

土坑の埋土については、個々で堆積物は異なるものの、全ての土坑埋土が自然堆積であることが大きな特徴である。堆積物の違いは、土坑周辺の地表環境の差異に起因すると考えらえる。

出土遺物は非常に少ない。出土しても土器の細片であることが多く、実測可能なものは少なかった。また、土坑 117 における最下層からの土器の細片の出土例を除き、ほかの土器はすべて土壌化した上層からの出土であった。これらの土器の帰属時期は列状土坑群の掘削時期の下限を示している。土器は庄内式前半に位置づけられることから、列状土坑群はそれより以前に掘削されたと考えられる。ただし、土坑群があまり時間をおかず掘削されたと考えるならば、土器の帰属時期とそれほどの時期差を見なくてよいことになる。その場合、列状土坑群の掘削時期は庄内式前半と想定できる。

第５章　まとめ

（１）弥生時代～庄内式期

今回の調査で特筆すべき成果は、121 基の土坑が列状に配置された列状土坑群である。個々の土坑は横７列に配置され、各列内で列状に並べることが意識されており、総体として約 80m の帯状をなす。さらに南北ともに続くことは確実で、より長大な遺構群であったことは間違いない。時期は出土した土器より、庄内式期前半と考えられる。

土坑群の特徴は埋土がすべて自然堆積である点である。個々の土坑では、法量および形状で若干の違いを認めることができる。似た形状の土坑はかたまって存在する傾向があり、掘削した人の「くせ」等の可能性が想定される。また、土坑 36 と 37、59 と 60、70 と 71 では各列の土坑がずれて掘削されていた。そのため、土坑の掘削は両方向から進行したこと、３列まとめて掘削していたことなどが想定される。このような想定を踏まえると、列状土坑群は時間をかけて掘削されたのではなく、同時期に一斉に掘削されたと考える方が妥当であろう。

中条小学校遺跡と隣接する東奈良遺跡の既往の調査でも、列状土坑群が検出されていた（註１）。これらの土坑群の性格については、『分析・考察編』「第２章　第１節」で区画的な性格をもつ遺構群として考えた。明確な性格の判断はなお困難であるが、当該期の土地利用のあり方を考えるうえで貴重な遺構群である。性格解明のためにも、今後の類例の増加が待たれる。

列状土坑群以外の遺構についてもみておく。包含層等からは中期以前の遺物の出土は認められるが、明確に遺構を確認できるのは後期以降である。A 区では、方形（ＳＤ 0555、ＳＤ 0262）、「L」字状（ＳＤ 0331）、弧状（ＳＤ 0096・0194）、円形（ＳＤ 0100）の溝が検出されている。これらは周溝墓と考えられる。また、井戸（ＳＥ 1600）が A 区南端で見つかっている。Ｂ・C 区では、ＳＤ 2005・2006・2068、ＳＥ 2090・2096・2106、ＳＫ 2078・2079・2128・2130 などがある。

（２）古墳時代

８基の埋没古墳を検出した。時期については出土遺物がなく、詳細が不明な古墳もある。ただし、古墳に伴うと考えられる須恵器および埴輪の全体的な傾向から、これらの古墳群は中期から後期にかけての築造時期を想定してよいだろう。墳丘の形状については、円墳が６基、方墳が２基あり、同一古墳群のなかで円墳と方墳が混在する。

今回の調査範囲の南東でも、古墳が見つかっている。平成９年度調査では円墳が１基、平成 15 年度調査では、円墳が２基および方墳が１基、平成 16 年度調査では円墳が１基の計５基の古墳が検出されている。また、これらの古墳群の時期については、６世紀代前半と報告されている（黒須 2007）。そのため、中条小学校遺跡では中期から後期にかけて、円墳 10 基、方墳３基の計 13 基以上の古墳群を形成していたことになる。

茨木市域の平地に立地する古墳群に目を向けると、総持寺遺跡、太田遺跡、春日遺跡、郡遺跡などで古墳群が見つかっている。総持寺遺跡では方墳が 42 基と円墳が１基、太田遺跡では円墳が６基と方墳が５基、春日遺跡では円墳が７基（不明１基）、郡遺跡では円墳が 11 基と方墳が１基（不明１基）検出されている。これらの古墳群は時期もほぼ同時期であり、中条小学校遺跡の古墳群もこれらと併

せて考える必要があるだろう。

また、今回の調査地点では、埋没古墳以外には古墳時代の顕著な遺構は見あたらなかった。一方、上記の既往調査では、古墳のほかにも、古墳と同時期の柱穴などが検出されている（黒須 2007）。そのため、古墳群に葬られた人々の生活域は、古墳群の南東に求めることが可能であろう。つまり、春日遺跡や郡遺跡と同様、集落とセット関係で捉えることができる古墳群と評価できる。

（３）古代以降

第 1 面では条里地割に沿う鋤溝を中心とした遺構を検出した。第 2 面では弥生時代から古墳時代の遺構とともに、古代以降の遺構を検出した。第 2 面の古代以降のおもな遺構は、A 区では一連の遺構と考えられるＳＤ 0958・0970・0982・0995・1010・1054・0184・0969 や、南東部溝群（ＳＤ 0474・0466・0480・0481・0433・0461・0455・0486・0490・0442・0497）がある。Ｂ・C 区ではＳＤ 2070・2071・3085、ＳＫ 3133・3138・3145 である。ＳＫ 3133・3138 は粘土採掘坑である。遺構の数は多くないものの、溝が多いことが特徴と言える。ＳＤ 2071 の上層では、近傍からの流れ込みが想定でき、淘汰されていない耕作土由来の堆積が認められた。水はけがよい基盤層の土質を考慮すると、稲作は考えにくく、畑作の可能性が想定される（註２）。また、花粉分析の結果、下層からソバ属が産出している。そのため、ＳＤ 2071 周辺は畑作としての土地利用を想定できる。

今回の調査範囲の南東でおこなわれた既往の調査では、古代から中世にかけての建物や井戸などが多数検出されている（黒須 2007）。そのため、今回の調査範囲は集落の中心からはずれた周辺域であったと考えられる。上記の埋土からの土地利用の想定も、これに矛盾しない。

註

１）従来は、土壙墓等として考えられていた。（東奈良遺跡調査会 1976、奥井 2012）

２）辻康男氏（株式会社パリノ・サーヴェイ）のご教授による。

参考文献（五十音順）

奥井哲秀 2012「弥生時代の茨木市域」『新修茨木市史』第 1 巻通史Ⅰ　茨木市史編さん委員会

黒須靖之 2007「中条小学校遺跡」『平成 18 年度発掘調査概報』茨木市教育委員会

黒須靖之 2011「太田遺跡」『歴史発掘おおさか』大阪府立近つ飛鳥博物館

清水邦彦 2014『茨木に眠る資料－免山篤コレクションを中心に－』茨木市立文化財資料館

田代克己ほか 1979『東奈良　発掘調査概報Ⅰ』東奈良遺跡調査会

東奈良遺跡調査会 1976『東奈良』

第１表　出土遺物観察表（１）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備　　考
18-1	87	E-A 9	第1面 鍬溝	染付	碗	器高：(4.0)	口縁部片	外・内：10YR7/2にぶい黄橙色 断：2.5Y8/1灰白色	密	外面：施釉、草花文 内面：施釉	
18-2	87	E-A 8	第1面 鍬溝	陶器	鉢	器高：(4.5)	口縁部片	外：10YR4/3にぶい黄褐色 断：10YR6/1褐灰色 内：10YR6/3にぶい黄橙色	密(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ナデ、施釉(褐色釉) 内面：回転ナデ	
18-3	87	E-A 5	第1面 検出時 (1・2層)	弥生土器	高杯	口径：28.8 器高：(2.3)	口縁部 1/12	外・断・内：2.5Y8/2灰白色	やや密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：凹線文４条、円形浮文、ナデ 内面：ナデ	
18-4	87	E-A 南東端	第1面 検出時 (1・2層)	土製品	土錘	長さ：6.0 直径：3.4	ほぼ完形	10YR8/2灰白色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	ナデ	重量：80ｇ 穿孔(直径0.6cm)
18-5	87	E-A 14	第1面 検出時 (1層)	須恵器	高杯	底径：9.7 器高：(6.3)	脚柱部 1/4	外・内：N4/灰色 断：5YR5/1褐灰色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ナデ、カキメ、方形透かし孔(４方向) 内面：ナデ	内外面：自然釉
18-6	87	E-A 東側南半	第1面 検出時 (1・2層)	埴輪	形象埴輪	器高：(6.8)	破片	外・断・内：10YR8/4浅黄橙色	やや密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：磨滅のため不明 内面：ナデ	
18-7	87	E-A 9	第1面 検出時 (1・2層)	須恵器	壺	底径：8.2 器高：(2.6)	底部完形	外・断・内：5Y7/1灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ナデ、貼付高台、底部糸切り 内面：回転ナデ	外面：自然釉
18-8	87	E-A 7	第1面 検出時 (1層)	陶器	擂鉢	器高：(6.25)	口縁部片	外・断：N7/灰白色 内：10YR5/2灰黄褐色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、擂目９条	外面：自然釉 内面：使用痕
18-9	87	E-A 3	撹乱	石製品	有舌尖頭器	長さ：(5.8) 幅：2.95 厚さ：0.55	先端部欠損	—	—	—	重量：9.0g 石材：サヌカイト
18-10	87	E-A 8	撹乱	須恵器	壺	口径：11.6 器高：(5.7)	口縁部 1/12	外・断・内：N7/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：回転ナデ	
18-11	87	E-A 8	撹乱	陶器	擂鉢	器高：(5.5)	口縁部片	外・断・内：2.5YR4/2灰赤色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、擂目(５条以上)	丹波焼
18-12	87	E-A 13	東壁側溝	土製品	円筒状土製品	長さ：(5.2) 長径：3.25 短径：3.1	—	10YR6/6明黄褐色	密(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	ナデ、一部面取り	重量：62ｇ
18-13	87	E-A 13	東壁側溝	土製品	半球状土製品	長径：4.1 短径：3.7 厚さ：2.7	完形	7.5YR7/4にぶい橙色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、雲母、チャート、赤色土粒を含む)	外面：ナデ・ユビオサエ	
18-14	87	E-A 7	東壁側溝	瓦	平瓦	残存長：(11.5) 残存幅：(10.3) 厚さ：2.0	側縁・狭端面残存	凸・断面：10YR8/2灰白色 凹面：7.5YR7/6橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	凹面：布目圧痕 内面：縄タタキ	
18-15	87	E-A 7	南壁側溝	石器	翼状剥片	長さ：4.5 幅：2.1 厚さ：0.6	先端部欠損	—	—	—	重量：6ｇ 石材：サヌカイト
18-16	—	E-A 7	南壁側溝(遺構内)	石器	石鏃	長さ：3.1 幅：2.1 厚さ：0.45	—	—	—	—	重量：2.0g 石材：サヌカイト
18-17	87	E-A 7	南壁側溝(3層)	石製品	砥石	残存長：(17.2) 幅：7.3 厚さ：4.85	ほぼ完形	—	—	—	重量：731.5g ４面に使用痕あり
18-18	87	E-A 7	南壁側溝	土製品	蓋状土製品	直径：4.3 厚さ：3.0	完形	5YR4/6赤褐色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母を含む)	上面：ナデ、赤彩か 下面：ユビオサエ	
20-19	88	E-B 27	第1面 検出時 (1層)	染付	皿	口径：11.8 底径：6.0 器高：3.1	口縁部 1/8	外・内：2.5GY8/1灰白色 断：N8/灰白色	密	外面：施釉 内面：施釉、蛇ノ目釉ハギ、雲ないし松の文様	
20-20	88	E-B 26	第1面 検出時 (1・2層)	瓦質土器	鉢	底径：16.4 器高：(4.1)	底部 1/8	外・内：N4/灰色 断：N8/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	底面に脚の剥離痕あり
20-21	88	E-B 20	第1面 検出時 (1層)	陶器	擂鉢	口径：29.4 器高：(7.7)	口縁部 1/8	外・断・内：2.5YR6/4にぶい橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英を含む)	外面：ヨコナデ、凹線(２条)、ケズリ 内面：ヨコナデ、凹線(１条)、擂目(９条１組)	備前系
20-22	88	E-C 36	第1面 検出時 (1層)	土師器	把手付甕	器高：(7.1)	把手完形	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子を含む)	外面：ナデ 内面：ユビオサエ	
20-23	88	E-C 30	第1面 検出時 (1層)	須恵器	甕	器高：(6.6)	破片	外・断・内：N6/灰色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、同心円当て具痕	
20-24	89	E-B・C	大セクション2a層	須恵器	高杯	器高：(4.0)	脚部 2/5	外・断・内：N7/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ナデ、カキメ 内面：回転ナデ	
20-25	88	E-C 30	第1面 検出時 (1層)	須恵器	鉢	器高：(6.9)	口縁部片	外：7.5Y5/1灰色 断：5Y7/1灰白色 内：5Y6/1灰色	密(φ1.0mm以下の長石を含む)	外面：回転ナデ、凹線１条、櫛状工具による刺突文 内面：回転ナデ	外面：自然釉

第１表　出土遺物観察表（２）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備　　考
20-26	88	E-C 35	第1面検出時（1層）	土師質土器	羽釜	器高：(3.4)	口縁部1/12	外・内：2.5Y6/1黄灰色 断：2.5Y2/1黒色	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ	
20-27	88	E-C 35	第1面検出時（1層）	瓦質土器	鍋	器高：(5.6)	破片	外・内：N3/暗灰色 断：N8/灰白色	密（φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ヨコナデ、ユビオサエ 内面：ハケ	
20-28	88	E-C 32	第1面検出時（1層）	陶器	擂鉢	器高：(4.4)	破片	外・内：7.5YR3/2黒褐色 断：5Y8/1灰白色	密（φ4.0mm以下の長石、石英を含む）	外面：ヨコナデ、凹線文（２条）、施釉 内面：ヨコナデ、施釉、擂目（６条１組）	丹波焼
21-29	88	E-A 2	第2面検出時（3層）	弥生土器	壺	底径：8.6 器高：(6.5)	底部2/3	外・断・内：2.5Y7/3浅黄色	やや粗（φ6.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：磨滅のため不明 内面：ハケ後ナデ	
21-30	88	E-A 2	第2面検出時（3層）	弥生土器	広口壺	口径：13.9 器高：(3.7)	口縁部1/4	外・断・内：10YR8/2灰白色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：竹管文、磨滅のため不明 内面：磨滅のため不明	
21-31	88	E-A 3	第2面検出時（3層）	弥生土器	広口壺	口径：18.4 器高：(3.1)	口縁部1/4	外・断・内：2.5Y7/2灰黄色	やや密（φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：円形浮文、ナデ 内面：ナデ	
21-32	88	E-A 3	第2面検出時（3層）	弥生土器	甕	底径：3.5 器高：(3.8)	底部完形	外・断：7.5YR5/4にぶい褐色 内：10YR6/3にぶい黄橙色	やや粗（φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む）	外面：タタキ、ユビオサエ 内面：ナデ	
21-33	88	E-A 8	第2面検出時（3層）	弥生土器	土錘	長さ：(3.3) 長径：2.8 短径：2.6	1/2	外：10YR7/4にぶい黄橙色 断：7.5YR6/4にぶい橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：ナデ	重量：24ｇ 穿孔(直径0.8cm)
21-34	88	E-A 2	第2面検出時（3層）	石器	石斧	残存長：(4.4) 残存幅：(5.9) 厚さ：4.4	基端部のみ残存	—	—	—	重量：167.8ｇ
21-35	88	E-A 8	第2面検出時（3層）	石器	石斧	長さ：11.9 幅：5.4 厚さ：3.7	完形	—	—	—	重量：331g
25-36	89	E-A 7	SD0139最下層	弥生土器	鉢	器高：(3.5)	破片	外：N3/暗灰色 断：N5/灰色 内：10YR8/2灰白色	密（φ2.5mm以下の長石、チャート、赤色粒子を含む）	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：磨滅のため不明	
25-37	89	E-A 7	SD0139	弥生土器	壺	器高：(7.1)	口縁部ほぼ完形	外・断・内：5YR7/6橙色	やや粗（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：ナデ、竹管文、刺突文、 内面：ナデ	
25-38	89	E-A 7	SD0139	弥生土器	直口壺	器高：(4.8)	頸部ほぼ完形	外・断・内：5YR6/6橙色	やや粗（φ4.5mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	
25-39	89	E-A 7	SD0139	弥生土器	壺	底径：4.6 器高：(3.9)	底部完形	外・断：2.5Y8/3淡黄色 内：5Y4/1灰色	やや粗（φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：ハケ	
25-40	89	E-A 7	SD0139	弥生土器	壺	底径：4.2 器高：(4.1)	底部完形	外・断：10YR8/2灰白色 内：10YR5/3にぶい黄褐色	やや粗（φ3.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：ナデ、ユビオサエ、木の葉圧痕 内面：ナデ	
25-41	89	E-A 7	SD0139	弥生土器	高杯	器高：(8.7)	脚部3/5	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：ナデ、円形透かし孔（３方向） 内面：シボリメ	接合法か
25-42	89	E-A 7	SD0139	弥生土器	甕	器高：(7.6)	頸～肩部1/4	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	密（φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ケズリ	
25-43	89	E-A 7	SD0139	弥生土器	甕	底径：3.7 器高：(2.7)	底部完形	外：7.5YR6/6橙色 断・内：5Y4/1灰色	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
25-44	89	E-A 7	SD0139	弥生土器	ミニチュア台付土器	器高：(6.1)	4/5	外：2.5Y7/3浅黄色 断・内：5Y4/1灰色	やや粗（φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ユビオサエ 内面：ナデ	
27-45	89	E-A 3	SD0194	弥生土器	受口状口縁甕	口径：14.8 器高：(11.3)	口縁～体部1/3	外：10YR7/4にぶい黄橙色 断・内：2.5Y7/2灰黄色	やや粗（φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ナデ	
27-46	90	E-A 3	SD0194	弥生土器	甕	口径：16.1 器高：(16.0)	口縁～体部1/5	外・断・内：10YR7/6明黄褐色	密（φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ、ハケ、粘土紐接合痕	
27-47	90	E-A 3	SD0194	弥生土器	鉢	口径：37.4 器高：(6.4)	口縁部1/8	外：10YR7/4にぶい黄橙色 断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや粗（φ5.0mm以下の長石、石英、赤色粒子を含む）	内外面：磨滅のため不明	口縁部：黒斑
28-48	90	E-A 3	SD0262－SD0278	弥生土器	壺	底径：3.8 器高：(6.3)	3/5	外・断・内：10YR8/2灰白色	密（φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	
28-49	91	E-A 3	SD0262	弥生土器	甕	底径：3.65 器高：(3.5)	底部完形	外・内：10YR8/4浅黄橙色 断：10YR5/4にぶい黄褐色	密（φ5.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：タタキ、木の葉圧痕 内面：ハケ	
28-50	91	E-A 8	SD0282	弥生土器	広口壺	器高：(2.9)	口縁部片	外：10YR8/4浅黄橙色 断：10YR6/3にぶい黄橙色 内：10YR7/3にぶい黄橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：磨滅のため不明、竹管文（２段） 内面：磨滅のため不明	

第１表　出土遺物観察表（３）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
29-51	91	E-A 3	SD0189	弥生土器	有孔鉢	底径：2.4 器高：(3.1)	底部完形	外：10YR6/6明黄褐色 断：2.5Y5/1黄灰色 内：2.5Y7/4浅黄色	密(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	穿孔(直径0.5cm)
30-52	91	E-A 3・4・8・9	SK0276	弥生土器	高杯	口径：24.6 器高：(2.3)	口縁部1/8	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：凹線文(４条)、円形浮文、 内面：磨滅のため不明	
30-53	91	E-A 3・4・8・9	SK0276	弥生土器	甕	口径：14.9 器高：(6.0)	口縁部1/4	外：10YR7/3にぶい黄橙色 断・内：10YR8/2灰白色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ	
31-54	90	E-A 8	SP0245	弥生土器	広口壺	口径：11.8 器高：(5.7)	口縁～頸部3/5	外：2.5Y7/3淡黄色 断：N4/灰色 内：2.5Y7/3淡黄色	やや粗(φ9.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ヨコナデか、ナデ、粘土紐接合痕	
31-55	90	E-A 4	SP0624	弥生土器	甕	底径：3.0 器高：(8.2)	3/4	外：2.5Y7/1灰白色 断：10YR7/2にぶい黄橙色 内：10YR8/2灰白色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ、粘土紐接合痕	
31-56	91	E-A 9	SP1500	弥生土器	甕	底径：3.65 器高：(3.3)	底部完形	外：10YR7/2にぶい黄橙色 断：7.5YR5/6明褐色 内：10YR4/1褐灰色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	
31-57	90	E-A 8	SP1516	弥生土器	鉢	口径：9.2 底径：3.0 器高：6.2	ほぼ完形	外・断：2.5Y8/2灰白色 内：2.5Y8/3淡黄色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：磨滅のため不明 内面：ナデ	
32-58	91	E-A 3	SP0207	弥生土器	ミニチュア土器	底径：3.4 器高：(4.5)	2/5	外・内：2.5Y7/2灰黄色 断：10YR5/4にぶい黄褐色	密(φ2.0mm以下の長石、チャートを含む)	内外面：ナデ	
32-59	90	E-A 8	SP0292	弥生土器	壺	底径：3.8 器高：(7.3)	底部完形	外：10YR7/2にぶい黄橙色 断：10YR8/1灰白色 内：10YR7/4にぶい黄橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ナデ、爪圧痕	外面：黒斑
32-60	90	E-A 8	SP0295	弥生土器	高杯	口径：11.7 器高：(7.6)	杯部ほぼ完形	外・断：2.5Y8/2灰白色 内：10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ハケ 内面：磨滅のため不明	
32-61	91	E-A 8	SK1515	弥生土器	器台	器高：(3.0)	口縁部片	外・断・内：5YR7/6橙色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：竹管文、円形浮文 内面：磨滅のため不明	
32-62	91	E-A 8	SK1515	弥生土器	壺	底径：4.0 器高：(3.3)	底部完形	外・断・内2.5Y8/2灰白色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、ユビオサエ、粘土紐接合痕 内面：ナデ	外面：黒斑
32-63	91	E-A 8	SK1515	弥生土器	甕	底径：3.0 器高：(11.4)	体部～底部1/2	外・断・内・5Y4/1灰色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ後ハケ 内面：ユビオサエ後ナデ、粘土紐接合痕	
37-64	92	E-A 8	SD0380	縄文土器	体部	器高：(6.8)	破片	外：10YR6/4にぶい黄橙色 断・内：2.5Y6/2灰黄色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、角閃石、赤色粒子を含む)	外面：ナデ、沈線文(１条)、ケズリ 内面：ナデ	生駒西麓産
37-65	90	E-A 8	SD0100	弥生土器	広口壺	口径：11.9 器高：(4.8)	口縁部完形	外・断・内：10YR6/4にぶい黄橙色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ヨコナデ、ナデ	
37-66	92	E-A 8	SD0100	弥生土器	広口壺	口径：16.4 器高：(4.1)	口縁部1/4	外：10YR7/3にぶい黄橙色 断：2.5Y8/2灰白色 内：2.5Y7/2灰黄色	密(φ3.0mm以下の石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
37-67	92	E-A 8	SD0100	弥生土器	広口壺	口径：18.0 器高：(2.8)	口縁部1/3	外：10YR7/3にぶい黄橙色 断：2.5Y5/2暗灰黄色 内：2.5Y4/1黄灰色	密(φ3.0mm以下の石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ナデ、粘土紐接合痕 内面：ナデ	
37-68	92	E-A 8	SD0100	弥生土器	二重口縁壺	口径：18.4 器高：(3.2)	口縁部1/6	外：2.5Y7/2灰黄色 断：2.5Y6/1黄灰色 内：2.5Y5/1黄灰色	密(φ3.0mm以下の石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
37-69	92	E-A 8	SD0100	弥生土器	壺	底径：4.7 器高：(3.8)	底部完形	外：2.5Y7/1灰白色 断・内：2.5Y8/2灰白色	密(φ3.0mm以下の石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ミガキ、ユビオサエ、木の葉圧痕 内面：磨滅のため不明	外面：黒斑
37-70	92	E-A 8	SD0100	弥生土器	受口状口縁鉢？	器高：(3.0)	体部片	外・断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗(φ1.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：磨滅のため不明、貼付突帯、端部ナデにより波状 内面：磨滅のため不明	
37-71	92	E-A 3	SD0100	弥生土器	高杯	器高：(6.9)	脚柱部完形	外・断・内：2.5Y8/2灰白色	密(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明、円形透かし孔(３方向) 内面：磨滅のため不明	
37-72	90	E-A 8	SD0100	弥生土器	高杯	底径：10.4 器高：(7.1)	裾部3/5	外・断・内：2.5Y7/3浅黄色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ナデ 内面：磨滅のため不明	挿入付加法
37-73	92	E-A 8	SD0100	弥生土器	甕	口径：13.6 器高：(4.2)	口縁部1/8	外面：7.5YR6/6橙色 断・内：2.5Y8/2灰白色	密(φ3.0mm以下の石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
37-74	92	E-A 8	SD0100	弥生土器	甕	口径：15.2 器高：(6.1)	口縁部1/6	外・内：7.5YR7/3にぶい橙色 断：7.5YR6/6橙色	密(φ3.0mm以下の石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
37-75	92	E-A 8	SD0100	土製品	土錘	長さ：5.6 長径：3.5 短径：2.9	完形	外・断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	ナデ	重量：74ｇ 穿孔(直径0.4～0.6cm)

第１表　出土遺物観察表（４）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備　　考
37-76	92	E-A 8	SD0100	埴輪	形象埴輪	高さ：(6.6) 直径：3.2	脚部完形	外・断・内：7.5YR6/6橙色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ナデ	
38-77	93	E-A 5	SD0666	弥生土器	広口壺	口径：18.9 器高：(5.3)	口縁部1/5	外・内：10YR7/3にぶい黄橙色 断：10YR5/1褐灰色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
38-78	93	E-A 5	SD0666	弥生土器	高杯	口径：20.6 器高：(3.1)	口縁部1/12	外・断：10YR8/2灰白色 内：2.5Y7/2灰黄色	密(φ3.0mm以下の石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
39-79	93	E-A 1	SD0001	弥生土器	器台	口径：14.4 器高：(1.4)	口縁部1/3	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
41-80	94	E-A 8	SD0300	弥生土器	広口壺	器高：(2.6)	口縁部片	外・内：10YR7/3にぶい黄橙色 断：10YR6/3にぶい黄橙色	やや粗(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：竹管文、磨滅のため不明 内面：磨滅のため不明	
41-81	94	E-A 7	SD0300	弥生土器	甕	底径：5.2 器高：(4.1)	底部完形	外・内：10YR8/3浅黄橙色 断：10YR7/3にぶい黄橙色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
41-82	94	E-A 7	SD0300	弥生土器	蓋	器高：(2.2) つまみ径：3.8	つまみ部完形	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ	穿孔(直径0.8cm)
41-83	94	E-A 8	SD0300	須恵器	杯身	口径：12.4 器高：(2.2)	口縁部1/8	外・断・内：N7/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャート、黒色粒子を含む)	内外面：回転ナデ	
41-84	94	E-A 9	SD0300	須恵器	壺	口径：19.7 器高：(4.8)	口縁部1/16	外：N5/灰色 断：5YR5/1褐灰色 内：N6/灰色	密(φ2.0mm以下の長石、チャートを含む)	外面：回転ナデ、突帯１条 内面：回転ナデ	
41-85	94	E-A 9	SD0300	須恵器	壺	底径：6.6 器高：(5.5)	底部2/5	外・断・内：N7/灰白色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ナデ、貼付高台 内面：回転ナデ	
41-86	94	E-A 10	SD0300	黒色土器	椀	底径：7.4 器高：(1.6)	底部1/5	外：5YR6/6橙色 断：7.5YR7/4にぶい橙色 内：N3/暗灰色	密(φ0.5mm以下の長石、雲母を含む)	外面：磨滅のため不明、貼付高台 内面：ミガキ	
41-87	93	E-A 7	SD0157	瓦	平瓦	残存長：(7.6) 残存幅：(7.3) 残存厚：(2.3)	破片	外：5Y7/1灰白色 断：7.5YR7/4にぶい橙色 内：5Y6/1灰色	やや粗(φ7.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	凹面：布目圧痕 凸面：縄タタキ	
41-88	93	E-A 3	SD0622	須恵器	杯身	口径：11.2 器高：(2.1)	口縁部1/10	外、断、内：N6/灰色	密(φ1.0mm以下の長石を含む)	内外面：回転ナデ	
41-89	93	E-A 3	SD0622	灰釉陶器	皿	口径：14.0 器高：(2.2)	1/12	釉：5Y6/2灰オリーブ色 胎：2.5Y8/2灰白色	密(φ1.0mm以下の長石を含む)	内外面：回転ナデ、施釉	
43-90	93	E-A 13	SP0462	弥生土器	壺	口径：20.3 器高：(4.3)	口縁部1/8	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子を含む)	外面：ナデ、羽状列点文、円形浮文(２段) 内面：ナデ、波状文、羽状列点文	
44-91	94	E-A 13	SK0471	弥生土器	鉢	口径：13.4 底径：4.6 器高：8.7	完形	外：7.5YR7/4にぶい橙色 断：10YR7/4にぶい黄橙色 内：7.5YR6/6橙色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	内面：黒斑
44-92	94	E-A 13	SK0471	弥生土器	有孔鉢	底径：3.8 器高：(7.9)	ほぼ完形	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明 内面：ハケ後ナデ	穿孔(直径1.0cm)
44-93	93	E-A 13	SK0471	弥生土器	甕	底径：5.0 器高：(5.0)	底部完形	外：7.5YR6/3にぶい褐色 断：10YR8/3浅黄橙色 内：5Y4/1灰色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ、木の葉圧痕 内面：ナデ、ハケ	
44-94	93	E-A 8	SK0342	弥生土器	甕	器高：(12.0)	口縁～体部1/4	外：5YR6/4にぶい橙色 断：7.5YR8/4浅黄橙色 内：5Y5/1灰色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ、粘土紐接合痕	
44-95	93	E-A 8	SK0342	弥生土器	甕	底径：4.2 器高：(6.0)	底部完形	外・断：10YR8/2灰白色 内：10YR7/3にぶい黄橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：タタキ 内面：ハケ	
45-96	90	E-A 8	SD0331	弥生土器	広口壺	口径：16.9 器高：(9.9)	口縁～頸部1/3	外・内：7.5YR7/4にぶい橙色 断：10YR8/2灰白色	密(φ7.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
46-97	95	E-A 13	SK0397	縄文土器	深鉢	器高：(4.2)	口縁部破片	外・断・内：2.5Y4/4オリーブ褐色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母、角閃石を含む)	外面：貼付突帯、磨滅のため不明 内面：磨滅のため不明	長原式
46-98	95	E-A 8	SK0397	弥生土器	高杯	器高：(5.3)	口縁部片	外・断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	外面：黒斑
46-99	95	E-A 8	SK0397	弥生土器	甕	底径：3.8 器高：(4.6)	底部完形	外・断・内：10YR6/3にぶい黄橙色	やや粗(φ4.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明、ユビオサエ、木の葉圧痕 内面：磨滅のため不明	
46-100	95	E-A 8	SK1455	弥生土器	器台	器高：(9.5)	脚柱部1/6	外・断・内：2.5Y7/4浅黄色	密(φ2.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ハケ後ミガキ、円形透かし孔(２段・４方向) 内面：ナデ	

第１表　出土遺物観察表（５）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備　　考
48-101	95	E-A 8	SD0096	弥生土器	高杯	器高：(10.4)	脚柱部完形	外：10YR7/3にぶい黄橙色 断：10YR7/6明黄褐色 内：10YR8/1灰白色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明 内面：シボリメ	挿入付加法
48-102	95	E-A 8	SD0096	弥生土器	有孔鉢	底径：2.8 器高：(4.9)	底部1/2	外：10YR6/2灰黄褐色 断：10YR7/4にぶい黄橙色 内：10YR6/3にぶい黄橙色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	穿孔(直径1.0cm)
48-103	95	E-A 8	SD0096	土製品	土錘	長さ：6.2 長径：3.9 短径：3.6	完形	外・断・内：10YR6/4にぶい黄橙色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	ナデ	重量：100ｇ 穿孔(直径0.3cm)
48-104	90	E-A 14	SD0096	石製品	砥石	長さ：(10.2) 幅：(13.8) 厚さ：(13.3)	不明	—	—	—	重量：3000g ２面に使用痕あり
49-105	95	E-A 8	SD0555	弥生土器	有孔鉢	器高：(2.6)	底部完形	外：7.5YR2/1黒色 断：5YR7/8橙色 内：7.5YR6/6橙色	粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明 内面：ナデ	穿孔(直径0.5cm)
51-106	96	E-A 13	SE1600	土師器	壺	底径：2.5 器高：(11.4)	ほぼ完形	外・断：2.5Y8/2灰白色 内：N3/暗灰色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ナデ 内面：ナデ、板ナデ	
51-107	96	E-A 13	SE1600	土師器	高杯	底径：10.4 器高：(12.4)	3/5	外・断・内：2.5Y7/3浅黄色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ナデ	外面：黒斑 円盤充填法
51-108	96	E-A 13	SE1600	土師器	甕	口径：13.8 器高：(11.7)	口縁～体部3/5	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	密(φ7.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ、粘土紐接合痕	外面：煤付着
51-109	96	E-A 13	SE1600	土師器	甕	口径：14.1 器高：16.9	3/5	外・断・内：2.5Y7/3浅黄色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母を含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ	外面：煤付着 内面：炭化物付着
51-110	96	E-A 13	SE1600	土師器	甕	口径：15.0 底径：2.4 器高：22.1	ほぼ完形	外・断：10YR8/2灰白色 内：2.5Y8/2灰白色	やや密(φ7.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ	外面：煤付着
51-111	96	E-A 13	SE1600	土師器	甕	口径：17.1 器高：(13.9)	口縁～体部2/5	外・断・内：2.5Y7/3浅黄色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：磨滅のため不明	外面：煤付着
51-112	96	E-A 13	SE1600	土師器	甕	口径：15.4 器高：(6.2)	口縁部4/5	外・断・内：10YR6/4にぶい黄橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ヨコナデ、ナデ	
51-113	96	E-A 13	SE1600	土師器	口縁部	器高：(1.1)	口縁部片	外・断・内：2.5Y6/2灰黄色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ヨコナデ	内面：赤色顔料付着
51-114	96	E-A 13	SE1600	土師器	ミニチュア土器壺	底径：1.4 器高：(3.4)	4/5	外・断・内：2.5Y7/3浅黄色	やや粗(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ユビオサエ	外面：黒斑 穿孔か(直径0.8cm)
52-115	95	E-A 8	SK1470	弥生土器	甕	底径：3.0 器高：(5.3)	底部完形	外：10YR8/2灰白色 断：10YR8/3浅黄橙色 内：10YR7/2にぶい黄橙色	密(φ5.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	外面：黒斑あり
52-116	95	E-A 8	SK1470	土師器	器台	底径：12.8 器高：(7.9)	脚部1/3	外・断・内：7.5YR7/6橙色	やや密(φ3.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ミガキ 内面：ナデ	円盤充填法
53-117	95	E-A 13	SD0427	弥生土器	器台	口径：17.8 器高：(1.6)	口縁部1/10	外・断・内：7.5YR7/6橙色	やや粗(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：凹線文(３条)、円形浮文、ナデ 内面：ナデ	
53-118	95	E-A 13	SD0427	須恵器	高杯	器高：(4.5)	口縁部片	外・断・内：N7/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英を含む)	外面：回転ナデ、突帯１条 内面：回転ナデ	外面：自然釉かかる
54-119	94	E-A 9	SD0787	須恵器	杯蓋	口径：11.8 器高：4.9	完形	外・内：7.5Y7/1灰白色 断：5YR4/2灰褐色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ケズリ、回転ナデ 内面：回転ナデ	
54-120	94	E-A 9	SD0787	須恵器	杯身	口径：10.4 器高：4.95	ほぼ完形	外・断・内：7.5Y6/1灰色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ケズリ、回転ナデ 内面：回転ナデ	受部打欠
54-121	94	E-A 9	SD0787	須恵器	小壺	口径：5.6 器高：4.85	完形	外：N4/灰色 断：7.5R3/1暗赤灰色 内：N4/灰色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ナデ、ヘラケズリ 内面：回転ナデ、未調整	
55-122	97	E-A 13	SD0461	土製品	土錘	長さ：6.4 長径：4.2 短径：4.1	完形	7.5YR7/4にぶい橙色	密(φ1.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	ナデ	重量：128ｇ 穿孔(直径0.7cm)
55-123	97	E-A 13	SD0461	須恵器	杯身	器高：(2.0)	口縁部片	外・断・内：N6/灰色	密(φ1.0mm以下のチャートを含む)	内外面：回転ナデ	
55-124	97	E-A 13	SD0461	土師器	甕	器高：(6.6)	口縁部1/16	外・断：10YR6/3にぶい黄橙色 内：7.5YR6/4にぶい橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ハケ、ユビオサエ、ナデ、粘土紐接合痕	
55-125	97	E-A 13	SD0461	土師器	皿	口径：17.5 器高：2.3	1/12	外：10YR7/4にぶい黄橙色 断：7.5YR7/4にぶい橙色 内：5YR6/6橙色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、ユビオサエ 内面：凹線(１条)、ヨコナデ、ナデ	

第１表　出土遺物観察表（６）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備　　考
55-126	97	E-A 13	SD0461	土師器	皿	口径：15.9 器高：(2.1)	1/15	外:5YR7/6橙色 断・内：10YR8/3浅黄橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：ヨコナデ	
55-127	97	E-A 13	SD0474	須恵器	杯	器高：(1.4)	高台部片	外・断・内：N8/灰白色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、黒色粒子を含む)	外面：磨滅のため不明、貼付高台 内面：磨滅のため不明	
57-128	100	E-A 9	SK0348	弥生土器	高杯	口径：21.6 器高：(10.3)	3/5	外：10YR5/4にぶい黄褐色 断：2.5Y8/2灰白色 内：2.5Y6/2灰黄色	密(φ1.0mm以下の長石、チャート、雲母を含む)	外面：ヨコナデ、ミガキ、円形透かし孔(３方向) 内面：ミガキ、粘土絞り痕	
57-129	97	E-A 9	SK0348	弥生土器	甕	口径：16.4 器高：(5.0)	口縁部1/6	外：10YR8/3浅黄橙色 断・内：2.5Y8/2灰白色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ケズリか	
57-130	97	E-A 9	SK0348	弥生土器	甕	底径：3.0 器高：(6.8)	底部完形	外：10YR8/2灰白色 断・内：2.5Y6/1黄灰色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	
57-131	97	E-A 9	SP0388	弥生土器	広口壺	口径：14.5 器高：(6.1)	口縁部1/4	外・内：10YR7/4にぶい黄橙色 断：10YR6/2灰黄褐色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：磨滅のため不明 内面：磨滅のため不明、粘土紐接合痕	
58-132	97	E-A 10	SD0853	弥生土器	壺	底径：3.2 器高：(4.0)	底部完形	外・断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗(φ2.5mm以下の長石、石英、チャートを含む	内外面：磨滅のため不明	
60-133	98	E-A 5	SD1618	弥生土器	甕	口径：14.7 器高：(7.3)	口縁～頸部1/4	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ハケ	
60-134	98	E-A 5	SD1618	弥生土器	甕	底径：3.6 器高：(4.9)	底部完形	外：7.5YR6/4にぶい橙色 断・内：10YR7/6明黄褐色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	外面：黒斑
60-135	98	E-A 5	SD1618	弥生土器	甕	底径：4.7 器高：(5.1)	底部完形	外・断：10YR7/4にぶい黄橙色 内：5Y5/1灰色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ハケ後ナデ	外面：黒斑
60-136	98	E-A 5	SD0731, SD0734	弥生土器	広口壺	口径：18.1 器高：(1.3)	口縁部1/4	外・断・内：10YR5/4にぶい黄褐色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母を含む)	外面：波状文、ヨコナデ 内面：ヨコナデ	
60-137	98	E-A 5	SD0731, SD0734	弥生土器	広口壺	口径：13.2 器高：(5.9)	口縁部1/4	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや粗(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ヨコナデ、磨滅のため不明	
60-138	98	E-A 5	SD0731, SD0734	弥生土器	細頸壺	口径：5.8 器高：(11.4)	口縁～頸部4/5	外・断・内：10YR8/6黄橙色	密(φ2.0mm以下の長石、チャートを含む)	外面：ミガキ 内面：ヨコナデ、シボリメ、粘土紐接合痕	
60-139	98	E-A 5	SD0731, SD0734	弥生土器	細頸壺	器高：(6.4)	1/5	外・内：2.5Y8/3淡黄色 断：N5/灰色	密(φ2.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
60-140	98	E-A 5	SD0731, SD0734	弥生土器	壺	底径：4.4 器高：(4.0)	底部完形	外：N3/暗灰色 断・内：5Y4/1灰色	やや粗(φ3.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ミガキ 内面：ハケ	外面：黒斑
60-141	98	E-A 5	SD0731, SD0734	弥生土器	壺	底径：5.5 器高：(2.8)	底部完形	外：10YR8/2灰白色 断：10YR8/1灰白色 内：N4/灰色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子、1cmの礫を含む)	外面：磨滅のため不明、ユビオサエ 内面：磨滅のため不明	
60-142	99	E-A 5	SD0731, SD0734	弥生土器	高杯	器高：(6.7)	脚裾部3/5	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	密(φ2.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ハケ後ミガキ、円形透かし孔(３方向) 内面：シボリメ、ハケ後ナデ	
60-143	99	E-A 5	SD0731, SD0734	弥生土器	高杯	器高：(7.8)	脚柱部完形	外：2.5Y7/4浅黄色 断：7.5YR7/6橙色 内：2.5Y7/4浅黄色	密(φ2.0mm以下の長石、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明、円形透かし孔(４方向) 内面：シボリメ	挿入付加法
60-144	99	E-A 5	SD0731, SD0734	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(6.4)	底部完形	外：2.5YR7/6橙色 断・内：7.5YR8/4浅黄橙色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
60-145	99	E-A 5	SD0731, SD0734	弥生土器	甕	底径：3.4 器高：(4.4)	底部完形	外、内：10YR6/3にぶい黄橙色 断：5YR6/6橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、雲母、チャート、赤色粒子を含む)	外面：タタキ 内面：ハケ、ナデ	
60-146	99	E-A 5	SD0731, SD0734	弥生土器	ミニチュア土器壺	底径：2.4 器高：(5.4)	底部完形	外・断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ナデ	外面：黒斑
60-147	98	E-A 5	SD0731	石製品	石皿	残存長：(22.9) 残存幅：(12.4) 厚さ：7.6	2/5	—	—	—	重量：3000g ２面に使用痕あり
60-148	99	E-A 5	SD0734	弥生土器	壺	口径：35.0 器高：(6.5)	口縁部1/12	外：7.5YR6/4にぶい橙色 断・内：10YR6/3にぶい黄橙色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
60-149	100	E-A 5	SD0734	弥生土器	有孔鉢	口径：14.7 底径：4.2 器高：9.5	3/5	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	穿孔(直径1.0cm)
60-150	99	E-A 5	SD0734	弥生土器	ミニチュア土器壺	底径：3.0 器高：(8.0)	1/2	外・断：10YR8/2灰白色 内：10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗(φ5.5mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子を含む)	外面：磨滅のため不明 内面：ナデ	

第１表　出土遺物観察表（７）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備　　考
60-151	99	E-A 5	SD0734	弥生土器	ミニチュア土器壺	底径：3.0 器高：(4.0)	底部完形	外・断・内：2.5Y8/3淡黄色	やや粗（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	内外面：磨滅のため不明	
62-152	100	E-A 15	SD0800	弥生土器	壺	器高：(5.6)	肩部1/5	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ミガキ、貼付突帯・刺突文・刻み目、波状文、直線文・２条）、刺突文 内面：ハケ後ナデ、粘土紐接合痕	
62-153	100	E-A 10	SD0800	弥生土器	壺	口径：5.6 底径：3.3 器高：10.1	3/5	外：2.5Y7/1灰白色 断：2.5Y7/3浅黄色 内：10YR7/4にぶい黄橙色	密（φ6.0mm以下の長石、チャートを含む）	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、板ナデ	
62-154	100	E-A 10	SD0800	須恵器	杯蓋	口径：11.4 器高：4.7	1/3	外・断・内：5Y7/1灰白色	密（φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：回転ケズリ、回転ナデ 内面：回転ナデ	
62-155	100	E-A 4	SD0800	須恵器	杯蓋	口径：13.8 器高：4.35	ほぼ完形	外・断・内：2.5Y7/1灰白色	密（φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：回転ケズリ、回転ナデ 内面：回転ナデ	
62-156	100	E-A 4	SD0800	埴輪	円筒埴輪	器高：(6.0)	破片	外・断・内：7.5YR6/6橙色	やや粗（φ8.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	内外面：磨滅のため不明 箍断面：三角形状	
62-157	100	E-A 10	SD0800	埴輪	円筒埴輪	器高：(5.4)	破片	外・断・内：10YR8/4浅黄橙色	密（φ1.5mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ヨコハケ 内面：タテハケ	
62-158	100	E-A 10	SD0800	石器	磨石	残存長：(8.6) 幅：10.5 厚さ：5.9	1/2	―	―	―	重量：666g 使用痕、敲打痕あり
63-159	100	E-A 4	SD0690	石製品	砥石	残存長：(6.6) 残存幅：(7.6) 残存厚：(2.9)	一辺残存	―	―	―	重量：131g ２面に使用痕あり
67-160	101	E-A 15	SK1111	弥生土器	広口壺	口径：13.5 器高：(11.9)	口縁部完形	外・内：7.5YR8/2灰白色 断：N4/灰色	粗（φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：凹線文(2条)、磨滅のため不明 内面：磨滅のため不明、粘土紐接合痕	
67-161	101	E-A 15	SK1111	弥生土器	広口壺	口径：16.6 器高：(8.6)	口縁部1/2	外・断・内：5YR8/4淡橙色	やや密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	
67-162	101	E-A 15	SK1111	弥生土器	広口壺	口径：14.5 器高：(8.3)	口縁部完形	外・内：10YR7/2にぶい黄橙色 断：N4/灰色	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む）	外面：磨滅のため不明 内面：磨滅のため不明、粘土紐接合痕	
67-163	101	E-A 15	SK1111	弥生土器	細頸壺	底径：3.9 器高：(18.3)	4/5	外・断・内：7.5YR8/4浅黄橙色	やや粗（φ6.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：ミガキ 内面：ハケ、粘土紐接合痕	
67-164	101	E-A 15	SK1111	弥生土器	短頸直口壺	口径：13.1 器高：(15.7)	口縁～体部2/5	外：2.5Y8/2灰白色 断・内：N4/灰色	やや粗（φ8.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ、粘土紐接合痕	
67-165	101	E-A 15	SK1111	弥生土器	壺	底径：5.0 器高：(17.8)	体部～底部完形	外・断：10YR7/4にぶい黄橙色 内：2.5Y7/2灰黄色	密（φ6.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：ミガキ 内面：ナデ、粘土紐接合痕	外面：黒斑
67-166	101	E-A 15	SK1111	弥生土器	壺	底径：3.8 器高：(7.4)	底部完形	外・断：10YR7/3にぶい黄橙色 内：2.5Y5/2暗灰黄色	やや密（φ3.0mm以下の長石、石英を含む）	内外面：磨滅のため不明	外面：黒斑
67-167	101	E-A 15	SK1111	弥生土器	壺	底径：5.4 器高：(11.8)	底部～体部2/5	外：10YR7/3にぶい黄橙色 断・内：N3/暗灰色	やや粗（φ12.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ハケ後ナデ 内面：ハケ	
67-168	101	E-A 15	SK1111	弥生土器	高杯	口径：23.7 器高：(12.8)	2/3	外・断・内：7.5YR8/4浅黄橙色	やや密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：磨滅のため不明、ミガキ、円形透かし孔（３方向） 内面：ミガキ、シボリメ	杯部内外面：黒斑
68-169	102	E-A 15	SK1111	弥生土器	甕	口径：14.0 器高：(10.8)	口縁部～体部1/4	外：7.5YR8/4浅黄橙色 断・内：10YR8/2灰白色	やや密（φ5.0mm以下の長石、石英、赤色粒子を含む）	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ	
68-170	102	E-A 15	SK1111	弥生土器	甕	口径：16.1 底径：4.5 器高：14.7	1/2	外・断・内：10YR7/2にぶい黄橙色	やや密（φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む	外面：ヨコナデ、タタキ、ユビオサエ 内面：ヨコナデ、ハケ	外面：黒斑
68-171	102	E-A 15	SK1111	弥生土器	甕	口径：13.0 底径：5.8 器高：19.9	完形	外・内：10YR8/3浅黄橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ、ユビオサエ、タタキ 内面：ユビオサエ、ハケ	外面：黒斑
68-172	102	E-A 15	SK1111	弥生土器	甕	口径：18.4 器高：(6.4)	口縁部1/5	外・断・内：7.5YR8/3浅黄橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：ヨコナデ、磨滅のため不明 内面：ヨコナデ、ナデ、粘土紐接合痕	
68-173	102	E-A 15	SK1111	弥生土器	甕	口径：16.5 器高：(21.2)	口縁～体部2/5	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：ヨコナデ、タタキ後ハケ 内面：ヨコナデ、板ナデ、粘土紐接合痕	
68-174	102	E-A 15	SK1111	弥生土器	壺	口径：16.6 器高：(22.0)	体部2/3	外・断・内：7.5YR7/6橙色	密（φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ、粘土紐接合痕	外面：黒斑

第１表　出土遺物観察表（８）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備　　考
68-175	102	E-A 15	SK1111	弥生土器	甕	底径：4.4 器高：(12.0)	底部完形	外・断：5YR8/4淡橙色 内：7.5YR5/2灰褐色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ハケ	
68-176	102	E-A 15	SK1111	弥生土器	有孔鉢	口径：14.4 底径：1.3 器高：9.0	ほぼ完形	外：10YR8/2灰白色 内：5YR7/6橙色	やや密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明 内面：ハケ	穿孔(直径0.6cm) 外面：黒斑
68-177	102	E-A 15	SK1111	弥生土器	片口鉢	口径：36.2 器高：(12.9)	口縁部1/3	外・内：10YR8/3浅黄橙色 断：5YR7/6橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、タタキ後ハケ 内面：ヨコナデ、ナデ	
70-178	104	E-A 15	SD1197	弥生土器	広口壺	口径：11.5 底径：2.8 器高：17.9	ほぼ完形	外・断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	密(φ3.5mm以下の長石、石英、チャート、雲母を含む)	外面：ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ 内面：ヨコナデ、ナデ、粘土紐接合痕	
70-179	104	E-A 15	SD1197	弥生土器	壺	底径：3.8 器高：(6.8)	底部完形	外：2.5Y7/1灰白色 断・内：10YR8/2灰白色	やや粗(φ1.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
70-180	103	E-A 15	SD1197	弥生土器	高杯	器高：(7.8)	脚部2/5	外：5YR7/6橙色 断：10YR8/2灰白色 内：7.5YR8/4浅黄橙色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、赤色粒子を含む)	外面：磨滅のため不明、粘土紐接合痕 内面：シボリメ、ナデ	円盤充填法
70-181	103	E-A 15	SD1197	弥生土器	高杯	器高：(11.0)	脚柱部3/5	外・断・内：2.5Y8/2灰白色	密(φ5.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明、円形透かし孔（３方向） 内面：シボリメ	
70-182	103	E-A 15	SD1197	弥生土器	甕	底径：3.6 器高：(2.6)	底部完形	外・断・内：10YR8/2灰白色	密(φ2.0mm以下長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
70-183	103	E-A 15	SD1197	弥生土器	甕	器高：(4.6)	底部完形	外・断：10YR7/4にぶい黄橙色 内：2.5Y5/1黄灰色	やや粗(φ5.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母を含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
70-184	104	E-A 15	SD1197	弥生土器	甕	底径：5.5 器高：(8.4)	底部完形	外：7.5YR6/4にぶい橙色～7.5YR5/1褐灰色 断：7.5YR6/3にぶい褐色 内：10YR7/2にぶい黄橙色～10YR6/1褐灰色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ハケ	
70-185	103	E-A 15	SD1197	弥生土器	甕	底径：5.5 器高：(7.7)	底部完形	外：10YR8/2灰白色 断：10YR6/3にぶい黄橙色 内：N5/灰色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ハケ	
70-186	103	E-A 15	SD1197	弥生土器	受口状口縁鉢	口径：17.2 器高：(7.9)	1/6	外：10YR7/3にぶい黄橙色 断・内：10YR6/2灰黄褐色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、ミガキ 内面：磨滅のため不明	
70-187	104	E-A 15	SD1197	弥生土器	有孔鉢	口径：16.2 底径：3.2 器高：11.2	3/5	外・断・内：7.5YR7/4にぶい橙色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	穿孔(直径0.6cm)
70-188	103	E-A 15	SD1197	弥生土器	有孔鉢	底径：3.6 器高：(5.4)	底部完形	外・内：10YR8/2灰白色 断：10YR5/4にぶい黄褐色	やや密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	穿孔(直径1.0～1.2cm)
70-189	103	E-A 15	SD1197	弥生土器	鉢	底径：4.2 器高：(3.4)	底部3/4	外：7.5YR8/2灰白色 断：5Y4/1灰色 内：7.5YR8/2灰白色	(φ5.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ユビオサエ、ナデ 内面：ナデ	
70-190	103	E-A 15	SD1197	土製品	土錘	長さ：6.5 長径：4.1 短径：3.3	完形	外・断・内：7.5YR6/6橙色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子を含む)	ナデ	重量90ｇ 穿孔(直径0.4cm) 鉄分付着
70-191	103	E-A 15	SD1197	埴輪	形象埴輪	残存長：(4.8) 残存幅：(11.4) 器高：(2.9)	破片	外・内：7.5YR6/6橙色 断：2.5Y4/1黄灰色	やや粗(φ6.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
71-192	104	E-A 15	SK1202	弥生土器	壺	底径：5.0 器高：(4.0)	底部完形	外・断：7.5YR7/6橙色 内：2.5Y6/2灰黄色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ナデ	
71-193	104	E-A 15	SK1202	弥生土器	高杯	器高：(2.65)	杯部1/12	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明 内面：ナデ	接合法
71-194	104	E-A 15	SK1202	弥生土器	甕	口径：15.7 器高：(7.2)	口縁部1/6	外：10YR7/3にぶい黄橙色 断：10YR7/6明黄褐色 内：10YR8/1灰白色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ、粘土紐接合痕	
71-195	104	E-A 15	SK1202	弥生土器	甕	底径：4.3 器高：(10.5)	底部完形	外：10YR6/2灰黄褐色 断：10YR8/2灰白色 内：10YR8/3浅黄橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ハケ後ナデ	外面：黒斑
71-196	104	E-A 15	SK1202	弥生土器	甕	底径：3.8 器高：(5.0)	底部完形	外：2.5YR7/4淡赤橙色 断：7.5YR6/6橙色 内：10YR8/3浅黄橙色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	外面：黒斑
71-197	104	E-A 15	SK1202	弥生土器	甕	底径：3.4 器高：(4.0)	底部完形	外・断：10YR7/2にぶい黄橙色 内：10YR4/1褐灰色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	
71-198	104	E-A 15	SK1202	弥生土器	甕	底径：3.2 器高：(5.3)	底部完形	外：7.5YR7/4にぶい橙色 断：2.5YR6/6橙色 内：10YR8/2灰白色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	

第１表　出土遺物観察表（９）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
71-199	104	E-A 15	SK1202	弥生土器	甕	底径：4.3 器高：(3.7)	底部完形	外：5Y4/1灰色 断：10YR8/6黄橙色 内：2.5YR6/6橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
71-200	104	E-A 15	SK1202	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(2.4)	底部完形	外・断・内：7.5YR7/4にぶい橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ナデ	
71-201	104	E-A 15	SK1202	弥生土器	脚台付甕	器高：(5.7)	底部完形	外・内：10YR8/2灰白色 断：5YR6/6橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ユビオサエ 内面：ハケ	
75-202	105	E-A 14	SD1100	弥生土器	広口壺	口径：12.8 器高：(3.9)	口縁部完形	外・断・内：2.5Y7/3浅黄色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む位)	内・外面：磨滅のため不明	
75-203	105	E-A 14	SD1100	弥生土器	広口壺	口径：16.8 器高：(6.6)	口縁～頸部2/5	外・断・内：7.5YR7/6橙色	密(φ2.0mm以下の長石、チャート、赤色粒子を含む)	外面：磨滅のため不明 内面：磨滅のため不明、粘土紐接合痕	
75-204	105	E-A 14	SD1100	弥生土器	広口壺	器高：(4.7)	頸部1/4	外：5YR7/6橙色 断・内：2.5Y8/2灰白色	やや粗(φ3.0mm以下の石英、長石を含む)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	
75-205	105	E-A 14	SD1100	弥生土器	広口壺	口径：14.4 器高：(12.9)	口縁～体部1/4	外・断：10YR7/4にぶい黄橙色 内：5Y5/1灰色	やや粗(φ5.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：磨滅磨滅のため不明 内面：磨滅磨滅のため不明、粘土紐接合痕	
75-206	105	E-A 14	SD1100	弥生土器	広口壺	口径：13.8 器高：(6.7)	口縁部1/4	外・断：7.5YR8/3浅黄橙色 内：2.5Y6/1黄灰色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	
75-207	105	E-A 14	SD1100	弥生土器	壺	底径：3.6 器高：(8.2)	底部～体部3/5	外・断・内：10YR8/4浅黄橙色	やや粗(φ4.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：磨滅のため不明 内面：ナデ、粘土紐接合痕	
75-208	105	E-A 14	SD1100	弥生土器	壺	底径：4.6 器高：(5.7)	底部完形	外・断・内：7.5YR7/6橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ナデ	
75-209	105	E-A 14	SD1100	弥生土器	壺	底径：3.2 器高：(5.2)	底部完形	外・内：10YR8/2灰白色 断：10YR4/1褐灰色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
75-210	105	E-A 7	SD1100	弥生土器	壺	底径：2.2 器高：(5.9)	底部完形	外：2.5Y8/2灰白色 断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
75-211	105	E-A 14	SD1100	弥生土器	高杯	口径：18.7 器高：(9.6)	口縁～脚柱部3/5	外・断・内：10YR6/6明黄褐色	やや粗(φ5.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：凹線文(２条)、ハケ、円形透かし孔(３方向) 内面：ハケ、ケズリ、ナデ	穿孔(3ヵ所)
75-212	105	E-A 14	SD1100	弥生土器	高杯	底径：16.6 器高：(10.4)	脚部2/3	外・断・内：10YR7/2にぶい黄橙色	やや粗(φ3.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明、円形透かし孔(２個) 内面：シボリメ	
75-213	106	E-A 7	SD1100	弥生土器	甕蓋	口径：11.4 器高：7.3	1/4	外：5YR7/3にぶい橙色 断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ナデ	
75-214	106	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	口径：11.4 器高：(13.6)	1/2	外：10YR8/2灰白色 断・内：5Y5/1灰色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、タタキ 内面：ナデ、粘土紐接合痕	
75-215	106	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	口径：14.6 器高：(6.4)	口縁～頸部4/5	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
75-216	106	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	口径：14.3 器高：(12.1)	口縁～体部1/5	外：10YR7/4にぶい黄橙色 断・内：5Y5/1灰色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：磨滅のため不明	
75-217	106	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	口径：16.0 器高：(10.1)	口縁～体部1/8	外・断・内：10YR6/4にぶい黄橙色	やや粗(φ3.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
75-218	106	E-A 18	SD1100	弥生土器	甕	口径：15.8 器高：(7.5)	口縁部1/5	外・断・内：10YR8/4浅黄橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
76-219	106	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	口径：16.8 器高：(6.4)	口縁部1/4	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや密(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ	
76-220	106	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	口径：17.8 器高：(17.8)	口縁～体部1/6	外・断・内：10YR8/2灰白色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：タタキ、粘土紐接合痕 内面：磨滅のため不明	
76-221	107	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	口径：14.4 器高：(14.2)	体部1/2	外：7.5YR7/4にぶい橙色 断・内：2.5Y7/2灰黄色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ナデ、タタキ 内面：ナデ、粘土紐接合痕	
76-222	107	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	口径：14.8 器高：(9.0)	口縁部1/4	外：7.5YR6/4にぶい橙色 断・内：10YR8/1灰白色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ナデ	
76-223	107	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	口径：16.8 底径：4.4 器高：(23.5)	1/3	外：10YR7/4にぶい黄橙色 断・内：2.5Y7/3浅黄色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ナデ	

第１表　出土遺物観察表（10）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備　　考
76-224	107	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	口径：15.5 器高：(16.1)	1/2	外・断・内：7.5YR7/6橙色	やや粗(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、タタキ後ハケ 内面：ヨコナデ、ナデ	
76-225	107	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	口径：16.8 器高：(7.9)	口縁部1/4	外：7.5YR8/4浅黄橙色 断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ	
76-226	107	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	口径：22.7 器高：(15.6)	口縁～体部2/5	外・断・内：7.5YR7/4にぶい橙色	やや粗(φ10.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ、粘土紐接合痕	
76-227	107	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	口径：15.2 器高：(21.0)	口縁～体部1/4	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内・外面：磨滅のため不明	
76-228	107	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：5.0 器高：(22.0)	体部～底部1/3	外：10YR7/4にぶい黄橙色 断：2.5Y7/3浅黄色 内：5Y7/1灰白色	密(φ5.0mm以下の長石、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
77-229	108	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：3.6 器高：(8.2)	底部ほぼ完形	外：5YR7/4にぶい橙色 断・内：10YR8/2灰白色	やや粗(φ2.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明、粘土紐接合痕	
77-230	108	E-A 14	SD1100	弥生土器	鉢	底径：4.0 器高：(3.1)	底部完形	外・内：2.5Y7/4浅黄色 断：7.5YR6/6橙色	密(φ2.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	
77-231	108	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：5.2 器高：(4.1)	底部完形	外：7.5YR7/4にぶい橙色 断：10YR8/2灰白色 内：5Y6/1灰色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、赤色粒子を含む)	内・外面：磨滅のため不明	
77-232	108	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(5.7)	底部完形	外・断：10YR7/4にぶい黄橙色 内：5Y4/1灰色	やや粗(φ8.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
77-233	108	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：3.9 器高：(6.6)	底部完形	外・断・内：5YR6/6橙色	やや密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む	外面：タタキ 内面：ハケ、ナデ	
77-234	108	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：4.8 器高：(6.3)	底部完形	外：10YR7/3にぶい黄橙色 断・内：10YR4/1褐灰色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ、木の葉圧痕 内面：ハケ、ナデ	
77-235	108	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：4.1 器高：(5.1)	底部完形	外・断：7.5YR6/6橙色 内：7.5YR3/1黒褐色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ハケ	
77-236	108	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：3.4 器高：(6.4)	底部完形	外・断：7.5YR7/4にぶい橙色 内：2.5Y6/2灰黄色	やや粗(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	
77-237	108	E-A 14	SD1100	弥生土器	壺	底径：3.4 器高：(5.5)	底部完形	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母を含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	
77-238	108	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：3.2 器高：(5.2)	底部ほぼ完形	外：10YR8/4浅黄橙色 断・内：7.5YR7/6橙色	やや粗(φ4.0mm以下の石英、長石、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
77-239	108	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：4.1 器高：(5.0)	底部完形	外・断：10YR8/3浅黄橙色 内：10YR7/1灰白色	やや密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ後ミガキ 内面：ナデ	外面：黒斑
77-240	108	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：1.8 器高：(5.6)	底部1/2	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや密(φ2.0mm以下の長石、石英を含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	
77-241	109	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：4.6 器高：(5.1)	底部完形	外・断・内：5YR6/6橙色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ、ナデ 内面：ハケ	外面：黒斑
77-242	109	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：4.7 器高：(7.4)	底部完形	外・断・内：10YR7/2にぶい黄橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ハケ、ナデ	
77-243	109	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：4.6 器高：(6.7)	底部4/5	外・内：10YR7/3にぶい黄橙色 断：7.5YR6/6橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	
77-244	109	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(3.9)	底部完形	外・断・内：2.5Y7/2灰黄色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内・外面：磨滅のため不明	
77-245	109	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(4.6)	底部完形	外：5YR6/6橙色 断・内：2.5Y7/2灰黄色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内・外面：磨滅のため不明	
77-246	109	E-A 14	SD1100	弥生土器	甕	底径：4.9 器高：(3.8)	底部完形	外・断・内：7.5YR8/4浅黄橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	穿孔(直径1.0cm)
77-247	109	E-A 7	SD1100	弥生土器	ミニチュア台付土器	口径：6.1 底径：3.8 器高：6.4	3/5	外・断・内：5Y3/1オリーブ黒色	やや粗(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ナデ、ユビオサエのちナデ	
77-248	109	E-A 7	SD1100	弥生土器	受口状口縁鉢	口径：15.9 器高：12.6	4/5	外・断・内：5YR6/6橙色	密(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：貼付突帯、刺突文 内面：ハケ後ナデ、粘土紐接合痕	外面：黒斑

第１表　出土遺物観察表（11）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
78-249	109	E-A 14	SD1244	土師器	有段口縁鉢	口径：20.8 器高：(5.6)	口縁～体部 1/4	外・断・内：10YR7/6明黄褐色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ヨコナデ、ナデ	
79-250	109	E-A 15	SD1195	弥生土器	ミニチュア台付甕	底径：6.0 器高：(2.4)	底部完形	外・断・内：10YR8/1灰白色	密(φ2.0mm以長石、石英、チャートを含む	外面：ユビオサエ 内面：磨滅のため不明	
79-251	109	E-A 15	SD1199	土製品	土錘	長さ：6.2 長径：3.8 短径：3.4	ほぼ完形	外・断・内：10YR6/6明黄褐色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	ナデ	重量：96ｇ 穿孔(直径0.6cm) 鉄分付着
80-252	109	E-A 15	SP1203	土師器	皿	口径：9.0 底径：5.2 器高：1.8	完形	外・断・内：10YR8/4浅黄橙色	密(φ3.0mm以下のチャート、赤色粒子を含む)	内外面：ヨコナデ、ナデ	
80-253	109	E-A 15	SP1203	土師器	皿	口径：14.0 底径：6.0 器高：2.7	ほぼ完形	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：ヨコナデ、ナデ	
81-254	110	E-B 26	第2面検出時(3層)	須恵器	壺	器高：(8.2)	体部 1/6	外：5Y5/1灰色 断・内：N7/灰白色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：カキメ 内面：回転ナデ	
81-255	110	E-B 22	第2面検出時(3層)	須恵器	杯	底径：9.9 器高：(1.7)	底部 1/5	外・断・内：N8/灰白色	密(φ1.5mm以下の長石、チャートを含む)	外面：回転ナデ、貼付高台 内面：回転ナデ	
81-256	110	E-B 16、17	第2面検出時(3層)	須恵器	壺蓋	口径：14.0 器高：(2.7)	1/4	外：5Y6/1灰白色 断：2.5Y7/1灰白色 内：5Y7/1灰白色	密(φ2.0mm以下の長石を含む)	外面：回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：自然釉
81-257	110	E-B 26	第2面検出時(3層)	須恵器	壺	口径：21.8 器高：(3.7)	口縁 1/14	外・断・内：N8/灰白色	密(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：回転ナデ	
81-258	110	E-C 35	第2面検出時(3層)	弥生土器	二重口縁壺	口径：32.6 器高：(5.5)	口縁部 1/20	外・断・内：10YR6/4にぶい黄橙色	やや粗(φ7.0mm以下の長石、石英、赤色粒子を含む)	外面：円形浮文(２列)、刻み目、磨滅のため不明 内面：磨滅のため不明	
81-259	110	E-C 32	第2面検出時(3層)	須恵器	杯	器高：(1.9)	底部 1/3	外：N6/灰色 断・内：N8/灰白色	密(φ0.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	
81-260	110	E-C 25	第2面検出時(3層)	須恵器	杯	底径：9.9 器高：(1.7)	底部 1/4	外・断・内：N6/灰色	密(φ3.5mm以下の長石、チャートを含む)	外面：回転ナデ、貼付高台、ヘラ切り 内面：回転ナデ、	
81-261	110	E-C 32	第2面検出時(3層)	須恵器	鉢	口径：28.0 器高：(3.6)	口縁部 1/12	外・断・内：N7/灰白色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ナデ、施釉(口縁部) 内面：回転ナデ、ハケ	東播系
81-262	110	E-C 29	第2面検出時(3層)	陶器	碗	底径：3.8 器高：(2.9)	底部ほぼ完形	釉：5Y7/2灰白色 胎：N8/灰白色	密	外面：施釉、回転ケズリ、ケズリ出し高台 内面：施釉	
87-263	111	E-B 15	SD2122	弥生土器	甕	口径：24.9 器高：(3.2)	口縁部 1/14	外・内：10YR8/3浅黄橙色 断：7.5Y3/1オリーブ黒色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
87-264	111	E-B 15	SD2122	弥生土器	高杯	器高：(9.0)	脚柱部完形	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	密(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明 内面：シボリメ	円盤充填法
87-265	110	E-B 10	SK2150	弥生土器	壺	底径：5.9 器高：(4.0)	底部完形	外・断・内：2.5Y7/2灰黄色	密(φ2.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ後ミガキ、ナデ 内面：ナデ	
87-266	110	E-B 10	SK2150	弥生土器	壺	底径：4.2 器高：(4.9)	底部完形	外・断・内：2.5Y5/1黄灰色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ後ミガキ 内面：ハケ後ナデ	
87-267	111	E-B 10	SK2150	弥生土器	鉢	底径：3.8 器高：(6.8)	底部～体部ほぼ完形	外・断・内：2.5Y7/2灰黄色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ハケ後ナデ、ユビオサエ 内面：ハケ、ナデ、粘土紐接合痕	外面：黒斑
87-268	110	E-B 10	SK2150	弥生土器	高杯	器高：(6.8)	脚部 1/3	外・内：2.5Y3/1黒褐色 断：2.5Y7/1灰白色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、赤色粒子を含む)	外面：ミガキ、円形透かし孔(３方向) 内面：ナデ	内外面：煤付着
87-269	110	E-B 10	SK2150	弥生土器	高杯	器高：(3.7)	裾部 1/5	外・断・内：2.5Y8/2灰白色	密(φ1.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
87-270	110	E-B 10	SK2150	弥生土器	甕	底径：3.7 器高：(5.7)	底部完形	外・断・内：2.5Y7/2灰黄色	密(φ1.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ナデ 内面：ハケ後ナデ	
87-271	110	E-B 10	SK2150	弥生土器	甕	底径：3.4 器高：(4.0)	底部完形	外：10YR8/2灰白色 断・内：5Y6/1灰色	やや密(φ5.0mm以下の長石、石英を含む)	外面：タタキ、ナデ 内面：ナデ	
87-272	111	E-B 10	SK2150	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(5.3)	底部 2/5	外・断・内10YR8/2灰白色	密(φ1.5mm以下の長石、石英を含む)	外面：タタキ 内面：ハケ	

第１表　出土遺物観察表（12）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備　　考
87-273	111	E-B 10	SK2150	弥生土器	甕	底径：4.1 器高：(2.8)	底部完形	外・断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ後ナデ 内面：ナデ	
87-274	111	E-B 10	SK2150	弥生土器	甕	底径：4.4 器高：(3.6)	底部完形	外・断・内：2.5Y7/2灰黄色	やや密(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ、ナデ 内面：ナデ、ハケ	外面：黒斑
87-275	111	E-B 10	SK2150	弥生土器	甕	底径：4.4 器高：(2.9)	底部完形	外・断・内：10YR7/2にぶい黄橙色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ハケ	外面：黒斑
87-276	111	E-B 10	SK2150	弥生土器	甕	底径：5.2 器高：(2.5)	底部1/2	外・断・内：2.5Y4/1黄灰色	密(φ10.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ、圧痕 内面：ナデ	
87-277	111	E-B 10	SK2150	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(3.6)	底部完形	外・断・内：2.5Y6/1黄灰色	やや密(φ5.0mm以下の長石、石英、赤色粒子を含む)	外面：タタキ、ナデ 内面：ナデ	
87-278	111	E-B 10	SK2150	弥生土器	ミニチュア土器壺	底径：3.2 器高：(3.9)	底部1/3	外・断・内：2.5Y8/2灰白色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ナデ	
89-279	111	E-B 15	古墳7周溝	埴輪	円筒埴輪	底径：18.6 器高：(6.6)	基底部1/6	外・内：10YR7/4にぶい黄橙色 断：2.5Y8/3淡黄色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タテハケ後Ｂ種ヨコハケ 内面：磨滅のため不明	
95-280	112	E-B 20	SD2005	弥生土器	広口壺	器高：(3.７)	破片	外・断・内：7.5YR6/4にぶい橙色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
95-281	112	E-B 20	SD2005	弥生土器	広口壺	器高：(5.7)	頸部1/4	外：5YR6/6橙色 断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗(φ7.0mm以下の長石、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
95-282	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	壺	底径：4.8 器高：(2.6)	底部4/5	外：5Y3/1オリーブ黒色 断：7.5YR6/6橙色 内：5Y4/1灰色	密(φ2.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ 内面：ハケ	
95-283	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	壺	底径：3.6 器高：(2.6)	底部完形	外：2.5YR6/6橙色 断・内：10YR6/3浅黄橙色	やや粗(φ5.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
95-284	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	壺	底径：2.6 器高：(2.7)	底部完形	外・断：10YR7/4にぶい黄橙色 内：5Y4/1灰色	やや密(φ1.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：ナデ	
95-285	112	E-B 20	SD2005	弥生土器	壺	底径：5.0 器高：(2.1)	底部完形	外・断：7.5YR6/6橙色 内：10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ナデ	
95-286	112	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	口径：20.6 器高：(4.3)	口縁1/12	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
95-287	112	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	口径：16.9 器高：(2.8)	口縁部1/8	外・断・内：7.5YR7/6橙色	やや粗(φ3.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
95-288	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	口径：13.7 器高：(5.0)	口縁部1/3	外・断・内：10YR8/2灰白色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
95-289	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	器高：(4.9)	口縁部片	外・断・内：7.5YR8/3浅黄橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明、タタキ 内面：磨滅のため不明	
95-290	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	底径：3.3 器高：(1.4)	底部完形	外・断：10YR6/4にぶい黄橙色 内：10YR6/3にぶい黄橙色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ナデ	
95-291	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	底径：4.4 器高：(1.9)	底部4/5	外：2.5YR5/6明赤褐色 断・内：5YR5/6明赤褐色	やや粗(φ3.0m以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
95-292	112	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	底径：3.4 器高：(2.4)	底部3/5	外・断・内：2.5Y7/4浅黄色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
95-293	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	底径：4.9 器高：(2.5)	底部完形	外・断・内：2.5Y8/2灰白色	密(φ4.0mm以下の長石、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：ナデ	
95-294	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	底径：5.0 器高：(2.5)	底部3/5	外・断・内：2.5Y7/3浅黄色	密(φ7.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
95-295	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(1.5)	底部完形	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
95-296	112	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	底径：3.2 器高：(2.4)	底部完形	外・断・内：5YR8/4淡橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む)	内外面：磨滅のため不明	
95-297	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	底径：4.2 器高：(2.7)	底部完形	外・断：10YR7/2にぶい黄橙色 内：7.5YR7/6橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	

第１表　出土遺物観察表（13）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
95-298	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	底径：2.9 器高：(2.3)	底部完形	外・断・内：7.5YR6/6橙色	やや粗(φ3.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
95-299	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	底径：3.7 器高：(2.8)	底部完形	外・断・内：2.5Y5/1黄灰色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、雲母、赤色粒子を含む)	内外面：ナデ	
95-300	112	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(2.2)	底部完形	外：2.5Y7/3浅黄色 断・内：2.5Y6/1黄灰色	やや粗(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	
95-301	112	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	底径：3.4 器高：(1.6)	底部完形	外：2.5Y5/1黄灰色 断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや密(φ3.0mm以下の石英、長石を含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	
95-302	113	E-B 20	SD2005	弥生土器	甕	底径：5.2 器高：(4.9)	底部完形	外：5Y3/1オリーブ黒色 断・内：2.5Y5/1黄灰色	やや粗(φ7.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
95-303	112	E-B 20	SD2005	弥生土器	高杯	器高：(4.5)	脚柱部完形	外・断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
95-304	112	E-B 20	SD2005	弥生土器	高杯	器高：(4.7)	脚柱部完形	外・内：10YR8/2灰白色 断：10YR7/4にぶい黄橙色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：磨滅のため不明、円形透かし孔(３方向) 内面：ナデ	
96-305	115	E-B 20	SD2006	弥生土器	広口壺	口径：15.4 器高：(6.6)	口縁～頸部1/3	外・断・内：7.5YR7/4にぶい橙色	やや粗(φ4.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
96-306	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	壺	口径：15.0 器高：(2.2)	口縁部1/6	外：10YR7/4にぶい黄橙色 断・内：2.5Y6/2灰黄色	やや密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
96-307	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	壺	器高：(3.1)	体部1/15	外・断・内：10YR7/6明黄褐色	密(φ4.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ナデ	
96-308	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	壺	底径：5.6 器高：(4.5)	底部完形	外・内：10YR8/3浅黄橙色 断：5YR7/4にぶい橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ、圧痕 内面：磨滅のため不明	
96-309	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	壺	底径：5.0 器高：(3.7)	底部1/2	外・断：10YR6/4にぶい黄橙色 内：2.5Y7/3浅黄色	やや粗(φ2.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ 内面：磨滅のため不明	
96-310	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	鉢か甕	底径：3.8 器高：(4.8)	底部完形	外：2.5YR6/6橙色 断・内：2.5Y7/2灰黄色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
96-311	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	壺か甕	底径：3.4 器高：(1.5)	底部完形	外：2.5Y6/2灰黄色 断・内：2.5Y7/2灰黄色	やや粗(φ1.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
96-312	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	壺か甕	底径：3.8 器高：(2.0)	底部完形	外・内：2.5Y7/3浅黄色 断：2.5Y5/1黄灰色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、赤色粒子を含む)	内外面：ナデ	
96-313	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	壺か甕	底径：4.6 器高：(1.8)	底部1/3	外・断・内：5YR6/6橙色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英を含む)	内外面：磨滅のため不明	
96-314	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	壺か甕	底径：3.1 器高：(2.6)	底部完形	外・断・内：10YR8/4浅黄橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
96-315	115	E-B 20	SD2006	弥生土器	有孔鉢	底径：3.0 器高：(4.6)	底部完形	外：2.5Y7/3浅黄色 断・内：5YR6/6橙色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	穿孔(直径0.5cm)
96-316	115	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	口径：19.7 器高：(6.3)	口縁部1/3	外・断・内：10YR6/4にぶい黄橙色	やや粗(φ7.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、タタキ後ハケ 内面：ヨコナデ、ハケ	
96-317	115	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	器高：(5.4)	頸部2/5	外：5YR7/6橙色 断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明、粘土紐接合痕	
96-318	115	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	口径：14.0 器高：(7.1)	口縁～体部2/5	外・断・内；10YR5/4にぶい黄褐色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ	
96-319	115	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	口径：14.5 器高：(4.3)	口縁部完形	外・断・内：2.5Y6/3にぶい黄色	やや粗(φ5.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母を含む)	内外面：磨滅のため不明	
96-320	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	底径：5.2 器高：(3.2)	底部1/2	外・断：5YR6/6橙色 内：2.5Y4/1黄灰色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ハケ	
96-321	115	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	底径：5.0 器高：(4.5)	底部完形	外：7.5YR6/4にぶい橙色 断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗(φ5.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
96-322	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	底径：4.5 器高：(2.4)	底部1/3	外・断・内：7.5YR7/4にぶい橙色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む)	外面：タタキ、ナデ 内面：ナデ	

第１表　出土遺物観察表（14）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
96-323	115	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	底径：3.6 器高：(6.4)	底部完形	外・断・内：2.5Y7/2灰黄色	やや粗（φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	
96-324	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	底径：4.7 器高：(2.4)	底部1/2	内・外：10YR6/3にぶい黄橙色 断：7.5YR5/6明褐色	密（φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ユビオサエ 内面：ハケ	
96-325	115	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	底径：4.2 器高：(3.7)	底部完形	外：2.5YR5/6明赤褐色 断・内：10YR5/3にぶい黄褐色	やや粗（φ4.0mm以下の長石、石英、雲母、赤色粒子を含む）	外面：タタキ 内面：ナデ	
96-326	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	底径：5.8 器高：(2.1)	底部1/6	外：7.5YR6/4にぶい橙色 断・内：10YR6/4にぶい黄橙色	やや密（φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	
96-327	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	底径：5.2 器高：(2.4)	底部完形	外：5YR6/6橙色 断・内：10YR6/3にぶい黄橙色	やや粗（φ3.5mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：タタキ 内面：ナデ	
96-328	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	底径：3.6 器高：(2.3)	底部完形	外：5YR5/6明赤褐色 断・内：10YR6/3にぶい黄橙色	やや密（φ3.0mm以下の長石、石英、雲母を含む）	内外面：磨滅のため不明	
96-329	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	甕	底径：5.1 器高：(2.3)	底部完形	外：7.5YR6/6橙色 断・内：2.5Y6/3にぶい黄色	やや粗（φ5.5mm以下の長石、石英、チャート、雲母を含む）	外面：タタキ 内面：ナデ	
96-330	115	E-B 20	SD2006	弥生土器	高杯	口径：30.9 器高：(4.9)	口縁部1/4	外・内：10YR8/4浅黄橙色 断：5YR6/6橙色	密（φ2.5mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	
96-331	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	高杯	器高：(3.7)	脚柱部1/7	外：2.5Y7/4浅黄色 断・内：7.5YR7/6橙色	やや粗（φ3.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	内外面：磨滅のため不明	
96-332	115	E-B 20	SD2006	弥生土器	高杯	器高：(5.9)	2/5	外：2.5Y7/2灰黄色 断・内：7.5YR7/6橙色	やや粗（φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	
96-333	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	高杯	器高：(5.5)	脚部2/5	外：7.5YR7/4にぶい橙色 断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや密（φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：磨滅のため不明 内面：ナデ	
96-334	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	高杯	器高：(6.4)	脚柱部1/5	外・断・内：2.5Y7/3浅黄色	やや粗（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ 内面：磨滅のため不明	
96-335	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	高杯	器高：(6.6)	脚柱部1/5	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	密（φ1.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母を含む）	内外面：磨滅のため不明	
96-336	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	高杯	器高：(5.8)	脚柱部完形	外：7.5YR7/4にぶい橙色 断：7.5YR6/6橙色 内：2.5Y8/3淡黄色	やや粗（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：磨滅のため不明 内面：シボリメ	
96-337	114	E-B 20	SD2006	弥生土器	高杯	器高：(4.6)	脚部2/5	外：10YR7/4にぶい黄橙色 断：5Y5/1灰色 内：10YR8/2灰白色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：磨滅のため明、円形透かし孔（４方向） 内面：シボリメ	
96-338	115	E-B 21	SD2068	弥生土器	広口壺	口径：15.8 器高：(4.9)	口縁部1/8	外：7.5YR7/4にぶい橙色 断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや粗（φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	
96-339	115	E-B 21	SD2068	弥生土器	高杯	器高：(8.4)	脚柱部完形	外・断・内：7.5YR7/4にぶい橙色	やや粗（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：磨滅のため不明、円形透かし孔（３方向） 内面：シボリメ	
97-340	117	E-B 20	SE2090	弥生土器	壺	底径：3.7 器高：(8.1)	底部～体部3/5	外・断・内：2.5Y7/2灰黄色	やや粗（φ7.5mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ハケ後ナデ、木の葉圧痕 内面：ナデ	外面：黒斑
97-341	116	E-B 20	SE2090	弥生土器	壺	底径：4.4 器高：(2.5)	底部完形	外・断・内：2.5Y4/1黄灰色	やや粗（φ2.0mm以下の長石、石英を含む）	内外面：ナデ	
97-342	116	E-B 20	SE2090	弥生土器	甕	口径：18.2 器高：(5.4)	口縁部1/6	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや粗（φ8.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：磨滅のため不明、タタキ 内面：磨滅のため不明、ナデ	
97-343	116	E-B 20	SE2090	弥生土器	甕	器高：(5.3)	口縁部1/6	外・断・内：2.5Y8/2灰白色	やや粗（φ4.0mm以下の長石、石英を含む）	内外面：磨滅のため不明	
97-344	116	E-B 20	SE2090	弥生土器	甕	底径：4.9 器高：(2.5)	底部2/3	外：2.5Y5/1黄灰色 断・内：2.5Y6/1黄灰色	やや粗（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：タタキ 内面：ナデ	
97-345	116	E-B 20	SE2090	弥生土器	甕	底径：(4.6) 器高：(4.5)	底部2/5	外：10YR8/3浅黄橙色 断：2.5Y6/1黄灰色 内：2.5Y8/2灰白色	やや粗（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	内外面：磨滅のため不明	
97-346	117	E-B 20	SE2090	弥生土器	高杯	器高：(4.0)	杯部2/5	外・断・内：10YR8/4浅黄橙色	やや密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	円盤充填法
97-347	117	E-B 20	SE2090	弥生土器	高杯	器高：(4.6)	脚部3/5	外・断・内：7.5YR7/4にぶい橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ハケ、ミガキ、円形透かし孔（４方向） 内面：ハケ	円盤充填法

第１表　出土遺物観察表（15）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
98-348	116	E-B 20	SE2096	弥生土器	甕	口径：15.6 器高：(4.2)	口縁部1/8	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ハケ、粘土紐接合痕	
98-349	116	E-B 20	SE2096	弥生土器	甕	底径：3.8 器高：(2.6)	底部完形	外・内：2.5Y8/3淡黄色 断：7.5YR7/6橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ 内面：ハケ	
98-350	116	E-B 20	SE2096	弥生土器	甕	底径：3.2 器高：(3.2)	底部完形	外：5YR7/4にぶい橙色 断・内：10YR6/2灰黄褐色	やや粗(φ6.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ナデ	
98-351	116	E-B 20	SE2096	弥生土器	甕	底径：4.7 器高：(4.1)	底部1/2	外：10YR8/3浅黄橙色 断・内：5Y5/1灰色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
98-352	116	E-B 20	SE2096	弥生土器	甕	底径：3.4 器高：(3.3)	底部1/2	外・断・内：2.5Y8/2灰白色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
98-353	117	E-B 20	SE2096	弥生土器	脚台付甕	底径：4.7 器高：(2.8)	底部完形(脚台部は欠損)	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
98-354	116	E-B 20	SE2096	弥生土器	高杯	器高：(2.9)	杯部片	外・断・内：10YR6/2灰黄褐色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ナデ	
99-355	116	E-B 20	SE2106	弥生土器	壺	底径：4.9 器高：(2.6)	底部完形	外・断・内：10YR8/1灰白色	密(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、木の葉圧痕 内面：磨滅のため不明	外面：黒斑
99-356	116	E-B 20	SE2106	弥生土器	有孔鉢	底径：3.2 器高：(3.3)	底部ほぼ完形	外・内：2.5Y8/2灰白色 断：7.5YR7/4にぶい橙色	密(φ3.5mm以下の長石、チャートを含む)	外面：タタキ、圧痕 内面：ハケ	穿孔(直径0.7cm)
99-357	116	E-B 20	SE2106	弥生土器	有孔鉢	底径：4.1 器高：(2.8)	底部完形	外・断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗(φ5.0mm以下の長石、石英、雲母、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	穿孔(直径1.0cm) 外面：黒斑
99-358	116	E-B 20	SE2106	弥生土器	有孔鉢	底径：4.0 器高：(3.0)	底部完形	外・断・内：7.5YR7/6橙色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	穿孔(直径1.0cm)
99-359	116	E-B 20	SE2106	弥生土器	甕	口径：17.2 器高：(4.6)	口縁部1/5	外・断・内：10YR8/4浅黄橙色	やや粗(φ3.5mm以下の長石、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
99-360	116	E-B 20	SE2106	弥生土器	甕	底径：3.8 器高：(2.6)	底部完形	外：10YR7/3にぶい黄橙色 断・内：5Y4/1灰色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ、圧痕 内面：ナデ	
99-361	116	E-B 20	SE2106	弥生土器	甕	底径：3.8 器高：(2.0)	底部完形	外：7.5YR8/4浅黄橙色 断：2.5Y8/2灰白色 内：2.5Y6/1黄灰色	やや密(φ6.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	
99-362	116	E-B 20	SE2106	弥生土器	甕	底径：4.4 器高：(3.3)	底部完形	外：10YR7/4にぶい黄橙色 断・内：10YR4/1褐灰色	粗(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	外面：黒斑
102-363	117	E-B 17	SK2078	弥生土器	広口壺	口径：16.0 器高：(2.6)	口縁部1/6	外：2.5Y8/3淡黄色 断・内：2.5Y5/1黄灰色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：円形浮文 内面：磨滅のため不明	
102-364	117	E-B 17	SK2078	弥生土器	二重口縁壺	器高：(3.0)	口縁部片	外・内：2.5Y8/3淡黄色 断：2.5Y6/2灰黄色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ナデ	
102-365	117	E-B 17	SK2078	弥生土器	二重口縁壺	器高：(4.4)	口縁部片	外・断・内：2.5Y8/3淡黄色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
102-366	117	E-B 17	SK2078	弥生土器	壺	底径：3.0 器高：(2.5)	底部完形	外：10YR7/2にぶい黄橙色 断：10YR7/4にぶい黄橙色 内：10YR6/2灰黄褐色	密(φ2.5mm以下の長石、石英を含む)	内外面：ナデ	
102-367	117	E-B 17	SK2078	弥生土器	壺	底径：6.1 器高：(2.3)	底部完形	外・断・内：2.5Y8/3淡黄色	やや粗(φ3.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	外面：黒斑
102-368	117	E-B 17	SK2078	弥生土器	壺	底径：3.7 器高：(3.0)	底部完形	外・断・内：10YR5/1褐灰色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
102-369	117	E-B 17	SK2078	弥生土器	甕	底径：4.7 器高：(2.3)	底部完形	外・断：5YR6/4にぶい橙色 内：2.5Y7/2灰黄色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
102-370	117	E-B 17	SK2078	弥生土器	甕	底径：3.8 器高：(2.7)	底部完形	外：5YR4/2灰褐色 断・内：10YR6/4にぶい黄橙色	やや粗(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む	内外面：磨滅のため不明	
102-371	117	E-B 17	SK2078	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(3.6)	底部完形	外：2.5Y7/3浅黄色 断・内：2.5Y7/2灰黄色	やや粗(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	外面：黒斑
102-372	117	E-B 17	SK2078	弥生土器	高杯	器高：(5.0)	脚柱部1/2	外・内：2.5Y7/4浅黄色 断：N4/灰色	やや粗(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	円盤充填法

第１表　出土遺物観察表（16）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
102-373	118	E-B 17	SK2079	弥生土器	壺	底径：4.6 器高：(2.4)	底部完形	外・断・内：2.5Y8/2灰白色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：ナデ	
102-374	118	E-B 17	SK2079	弥生土器	壺	底径：3.3 器高：(3.3)	底部2/3	外・断：10YR6/3にぶい黄橙色 内：10YR8/3浅黄橙色	やや粗(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
102-375	118	E-B 17	SK2079	弥生土器	有孔鉢	底径：4.0 器高：(2.3)	底部完形	外・断・内：2.5Y7/3浅黄色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	穿孔(直径0.8cm)
102-376	117	E-B 17	SK2079	弥生土器	ミニチュア土器壺	口径：5.85 器高：(4.35)	1/2	外・内：10YR8/4浅黄橙色 断：10YR6/4にぶい黄橙色	密(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ 内面：ユビオサエ	
102-377	118	E-B 17	SK2079	弥生土器	甕	口径：11.8 器高：(2.15)	口縁部1/12	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	やや密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
102-378	118	E-B 17	SK2079	弥生土器	甕	器高：(1.8)	口縁部片	外・断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	密(φ6.0mm以下の長石、石英を含む)	内外面：磨滅のため不明	
102-379	118	E-B 17	SK2079	弥生土器	甕	口径：18.6 器高：(4.6)	1/12	外・断・内：10YR8/2灰白色	やや粗(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ	
102-380	118	E-B 17	SK2079	弥生土器	甕	底径：3.8 器高：(1.9)	底部完形	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	密(φ1.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
102-381	118	E-B 17	SK2079	弥生土器	甕	底径：3.6 器高：(2.2)	底部2/5	外：7.5YR5/3にぶい褐色 断：2.5Y4/1黄灰色 内：2.5Y6/1黄灰色	やや密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：ナデ	
102-382	118	E-B 17	SK2079	弥生土器	甕	底径：4.1 器高：(2.8)	底部完形	外：5YR7/6橙色 断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	やや密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明 内面：ナデ	
102-383	118	E-B 17	SK2079	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(4.2)	底部2/5	外：5YR6/6橙色 断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	やや密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
102-384	118	E-B 17	SK2079	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(3.2)	底部2/5	外：7.5YR7/4にぶい橙色 断・内：10YR8/4浅黄橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英を含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	外面：黒斑
102-385	118	E-B 17	SK2079	弥生土器	甕	底径：4.8 器高：(4.2)	底部2/3	外・断：10YR7/3にぶい黄橙色 内：2.5Y5/1黄灰色	やや密(φ7.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：ナデ	
104-386	119	E-B 25	SK2015	弥生土器	二重口縁壺	口径：21.4 器高：(4.8)	口縁部1/10	外・断・内：7.5YR8/4浅黄橙色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
104-387	119	E-B 17	SK2128	弥生土器	壺	底径：4.7 器高：(2.3)	底部完形	外：N4/灰色 断・内：2.5Y6/1黄灰色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
104-388	119	E-B 17	SK2128	弥生土器	有孔鉢	底径：3.8 器高：(3.0)	底部完形	外・断：10YR6/6明黄褐色 内：7.5YR7/4にぶい橙色	粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む)	内外面：磨滅のため不明	穿孔(直径0.9cm)
104-389	119	E-B 17	SK2128	弥生土器	甕	底径：3.3 器高：(2.5)	底部完形	外：5YR6/6橙色 断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	粗(φ10.0mm以下の砂岩、長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
104-390	119	E-B 17	SK2128	弥生土器	甕	底径：4.4 器高：(2.9)	底部ほぼ完形	外・断：2.5Y7/4浅黄色 内：5Y5/1灰色	やや粗(φ4.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
104-391	119	E-B 25	SK2011	弥生土器	甕	底径：4.7 器高：(3.9)	底部完形	外・断：10YR8/3浅黄橙色 内：7.5YR6/6橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ 内面：磨滅のため不明	
105-392	119	E-B 21・26	SD2023	須恵器	杯蓋	口径：13.4 器高：(3.7)	口縁部1/12	外・内：N7/灰白色 断：2.5YR6/1赤灰色	密(φ0.5mm以下の長石を含む)	外面：回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：自然釉
105-393	119	E-B 21・26	SD2023	須恵器	壺	頸部径：5.2 器高：(5.3)	頸部1/3	外・断：N7/灰白色 内：7.5Y7/1灰白色	密	内外面：回転ナデ	外面：自然釉
105-394	119	E-B 21・26	SD2023	埴輪	家形埴輪	長さ：(5.8) 幅：(3.7)	破片	外・断・内：10YR8/2灰白色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明 内面：シボリメ	
105-395	119	E-B 21・26	SD2023	埴輪	円筒埴輪	箍径：17.6 器高：(6.2)	1/6	外・内：2.5Y7/3浅黄色 断：7.5YR6/4にぶい橙色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
107-396	120	E-B 17・21	古墳6周溝	須恵器	壺	口径：8.3 器高：(3.1)	口縁部1/5	外・断・内：5Y8/1灰白色	密(φ1.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：回転ナデ	
107-397	120	E-B 17・21	古墳6周溝	須恵器	甕	口径：12.6 器高：(8.0)	口縁部1/6	外・内：N6/灰色 断：N7/灰白色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、赤色粒子を含む)	外面：回転ナデ、タタキ後カキメ 内面：回転ナデ、同心円当て具痕	

第１表　出土遺物観察表（17）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
107-398	120	E-B 17・21	古墳6 周溝	須恵器	杯身	口径：13.8 器高：4.9	２／３	外・断・内：N7/灰白色	密(φ1.5mm以下の長石、石英を含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	
107-399	120	E-B 17・21	古墳6 周溝	須恵器	杯身	器高：(3.7)	口縁部 1/12	外・断・内：N8/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	外面：自然釉
107-400	120	E-B 17・21	古墳6 周溝	須恵器	器台	器高：(9.4)	脚柱部 1/10	外：N6/灰色 断・内：N7/灰白色	密(φ2.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：波状文(２帯)、凹線文(2条)、方形透かし孔 内面：回転ナデ	
107-401	120	E-B 17	古墳6 周溝西側 外堤部	須恵器	器台	器高：(3.8)	杯底部 完形	外：N4/灰色 断・内：N8/灰白色	密(φ7.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ナデ、方形透かし孔(３方向) 内面：ナデ、回転ナデ	402と同一個体
107-402	120	E-B 17・21	古墳6 周溝	須恵器	器台	器高：(5.8)	脚部 1/8	外・断：N8/灰白色 内：N5/灰色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：波状文、回転ナデ、凹線文(2条)、方形透かし孔(３方向) 内面：回転ナデ	401と同一個体 外面：自然釉
107-403	120	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(3.7) 幅：(3.2)	破片	外・断・内：10YR8/2灰白色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
107-404	120	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(4.7) 幅：(6.0)	破片	外・内：7.5YR6/6橙色 断：7.5YR4/1褐灰色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-405	120	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(5.7) 幅：(3.6)	破片	外・内：7.5YR6/6橙色 断：10YR7/2にぶい黄橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-406	120	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪		破片	外・断・内：5YR7/8橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
107-407	120	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(3.7) 幅：(6.4)	破片	外・内：7.5YR6/6橙色 断：10YR8/2灰白色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-408	121	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(4.9) 幅：(6.5)	破片	外：5YR7/6橙色 断・内：10YR8/3浅黄橙色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-409	121	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(7.3) 幅：(6.9)	破片	外・内：7.5YR6/6橙色 断：10YR8/2灰白色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-410	121	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(4.8) 幅：(7.1)	破片	外・内：7.5YR5/6明褐色 断：10YR8/2灰白色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-411	121	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(1.5) 幅：(5.4)	破片	外・断・内：10YR8/4浅黄橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-412	121	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(7.2) 幅：(5.8)	破片	外：7.5YR7/3にぶい橙色 断・内：2.5Y7/2灰黄色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ハケ、ナデ 内面：ユビオサエ	
107-413	121	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(7.1) 幅：(4.4)	破片	外・断・内：5YR6/6橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、1cm大のチャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
107-414	121	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(5.5) 幅：(6.5)	破片	外・断・内：5YR6/6橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-415	121	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(5.3) 幅：(7.5)	破片	外・断・内：10YR8/2灰白色	密(φ5.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-416	121	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(3.4) 幅：(5.6)	破片	外・断・内：7.5YR7/6橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-417	121	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(5.3) 幅：(5.4)	破片	外：5YR7/6橙色 断・内：7.5YR8/3浅黄橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-418	121	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(7.3) 幅：(7.1)	破片	外・断・内：7.5YR8/4浅黄橙色	密(φ3.0mm以下の長石・石英・チャートを含む)	外面：磨滅のため不明、ナデ 内面：ユビオサエ	
107-419	122	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(7.0) 幅：(8.3)	破片	外・内：7.5YR6/6橙色 断：10YR8/2灰白色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-420	121	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(4.6) 幅：(5.9)	破片	外：5YR6/6橙色 断・内：7.5YR6/4にぶい橙色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-421	122	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(5.5) 幅：(4.8)	破片	外・内：5YR7/6橙色 断：10YR8/2灰白色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
107-422	122	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	器高：(10.3)	1/10	外・内：7.5YR7/6橙色 断：2.5Y6/2灰黄色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナナメハケ、ナデ、円形？透かし孔(１個残存) 内面：ユビオサエ	

第１表　出土遺物観察表（18）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備　　考
107-423	122	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(7.9) 幅：(6.7)	破片	外・断・内：10YR8/4浅黄橙色	密（φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	
108-424	122	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	朝顔形埴輪	長さ：(4.1) 幅：(7.0)	破片	外・断・内：5YR6/8橙色	密（φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
108-425	122	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	朝顔形埴輪	長さ：(3.3) 幅：(10.0)	破片	外・内：7.5YR6/8橙色 断：7.5YR5/1褐灰色	密（φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ 内面：ユビオサエ	
108-426	122	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	朝顔形埴輪	長さ：(3.0) 幅：(10.4)	破片	外・断・内：10YR8/2灰白色	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	
108-427	122	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	朝顔形埴輪	長さ：(4.3) 幅：(7.6)	破片	内・外：7.5YR8/6浅黄橙色 断：10YR5/1褐灰色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	内外面：磨滅のため不明	
108-428	122	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	朝顔形埴輪	長さ：(4.9) 幅：(8.6)	破片	外：10YR8/6黄橙色 断：10YR5/1褐灰色 内：5YR7/6橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
108-429	122	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	朝顔形埴輪	長さ：(6.5) 幅：(1.2)	破片	外：7.5YR7/6橙色 断：10YR6/1褐灰色 内：2.5Y7/3浅黄色	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ、磨滅のため不明、ハケ 内面：ユビオサエ	
108-430	122	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	形象埴輪	長さ：(4.5) 幅：(7.8)	破片	外・内：10YR7/4にぶい黄橙色 断：10YR4/1褐灰色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ 内面：ユビオサエ	
108-431	123	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	形象埴輪	長さ：(9.8) 幅：(7.8)	破片	外：5YR6/6橙色 断：10YR5/1褐灰色 内：10YR7/4にぶい黄橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ユビオサエ、ナデ 内面：ユビオサエ	
108-432	123	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	家形埴輪	長さ：(10.5) 幅：(5.9)	破片	外・内：7.5YR6/6橙色 断：2.5Y6/2灰黄色	密（φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ハケ 内面：磨滅のため不明	
108-433	123	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	形象埴輪（台部）	長さ：(7.5) 幅：(4.0)	破片	外・内：7.5YR6/6橙色 断：2.5Y5/1黄灰色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：ユビオサエ	
108-434	122	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	蓋型埴輪	長さ：(4.4) 幅：(6.9)	破片	外・断・内：5YR6/6橙色	密（φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	
108-435	123	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	形象埴輪	長さ：(9.2) 幅：(4.9)	破片	外・内：5YR6/8橙色 断：10YR5/2灰黄褐色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	
108-436	123	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	形象埴輪	長さ：(5.2) 幅：(6.7)	破片	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む）	内外面：ユビオサエ、ナデ	人物の一部か
108-437	123	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	家形埴輪	長さ：(5.0) 幅：(6.7)	破片	外・内：7.5YR6/6橙色 断：7.5YR6/1褐灰色	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	
108-438	123	E-B 17・21	古墳6 周溝	埴輪	形象埴輪（脚か）	長さ：(11.3) 幅：(5.8)	破片	外：7.5YR6/6橙色 断：7.5YR4/1褐灰色	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	磨滅のため不明	
111-439	124	E-B 25	古墳2 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(5.9) 幅：(8.3)	破片	外・内：7.5YR7/6橙色 断：10YR7/3にぶい黄橙色	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
111-440	124	E-B 25	古墳2 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(5.3) 幅：(5.5)	破片	外・断・内：7.5YR7/6橙色	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
111-441	124	E-B 25	古墳2 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(4.8) 幅：(5.3)	破片	外・断・内：10YR7/4にぶい黄橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
111-442	124	E-B 25	古墳2 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(3.0) 幅：(4.8)	破片	外・断・内：7.5YR7/4にぶい橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
111-443	124	E-B 25	古墳2 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(7.3) 幅：(8.1)	破片	外・断・内：7.5YR8/6浅黄橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ、ヨコハケ 内面：ユビオサエ	
111-444	124	E-B 25	古墳2 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(7.8) 幅：(8.0)	破片	外・断・内：7.5YR7/8黄橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ、磨滅のため不明、透かし孔 内面：ユビオサエ	
111-445	124	E-B 25	古墳2 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(8.0) 幅：(8.6)	破片	外・断・内：7.5YR8/4浅黄橙色	密（φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	内外面：磨滅のため不明	外面：黒斑
111-446	124	E-B 25	古墳2 周溝	埴輪	朝顔形埴輪	長さ：(6.8) 幅：(7.1)	破片	外・断：10YR8/3浅黄橙色 内：7.5YR7/6橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	外面：黒斑
111-447	124	E-B 25	古墳2 周溝	埴輪	形象埴輪	長さ：(4.0) 幅：(4.7)	破片	外・断：10YR8/3浅黄橙色 内：7.5YR7/6橙色	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	

第１表　出土遺物観察表（19）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
111-448	124	E-B 25	古墳2 周溝	埴輪	形象埴輪	長さ：(4.5) 幅：(6.7)	破片	外・断・内：7.5YR8/4浅黄橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
113-449	125	E-C 31	古墳1 周溝	須恵器	甕	口径：20.4 器高：(6.6)	口縁部 1/6	外・内：N7/灰白色 断：10YR7/3にぶい黄橙色、N7/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：回転ナデ	
113-450	125	E-C 31	古墳1 周溝	須恵器	甕	口径：23.4 器高：(6.9)	口縁部 1/4	外・断・内：N8/灰白色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：回転ナデ	
113-451	125	E-C 31	古墳1 周溝	須恵器	杯身	器高：(3.6)	1/12	外・断・内：N8/灰白色	密(φ2.5mm以下の長石、チャートを含む)	内外面：回転ナデ	外面：自然釉
113-452	125	E-C 31	古墳1 周溝	埴輪	家形埴輪(鰹魚木)	長さ：5.2 幅：3.3 厚さ：(2.8)	破片	外・内・断：10YR8/2灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	ナデ	
113-453	125	E-C 31	古墳1 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(4.3) 幅：(6.8)	破片	外・断・内：7.5YR8/4浅黄橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む)	外面：ナデ 内面：ユビオサエ	
113-454	125	E-C 31	古墳1 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(6.3) 幅：(6.7)	破片	外・断・内：7.5YR7/4にぶい橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
113-455	125	E-C 31	古墳1 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(5.5) 幅：(6.2)	破片	外・断：2.5Y8/2灰白色 内：5YR6/6橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
113-456	125	E-C 31	古墳1 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(5.1) 幅：(8.3)	破片	外・断・内：10YR8/3浅黄橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明 内面：ハケ	
113-457	125	E-C 31	古墳1 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(7.4) 幅：(5.4)	破片	外・内：7.5YR7/6橙色 断：10YR8/3浅黄橙色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色土粒を含む)	外面：磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
113-458	125	E-C 31	古墳1 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(3.8) 幅：(6.8)	破片	外・断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ 内面：ユビオサエ	
113-459	125	E-C 31	古墳1 周溝	埴輪	円筒埴輪	長さ：(7.8) 幅：(7.0)	破片	外・内：7.5YR8/4浅黄橙色 断：10YR6/1褐灰色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明 内面：ユビオサエ	
117-460	127	E-B 22	SK125	弥生土器	広口壺	口径：13.6 器高：(3.8)	口縁部 1/4	外・断・内：7.5YR8/3浅黄橙色	やや密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
117-461	128	E-B 22	SK125	弥生土器	甕	底径：4.1 器高：(3.0)	底部完形	外・断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
117-462	127	E-B 22	SK125	弥生土器	甕	底径：4.4 器高：(4.0)	底部完形	外・断・内：10YR7/3にぶい黄橙色	密(φ0.5mm以下の長石、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
117-463	127	E-B 22	SK125	弥生土器	甕	底径：4.4 器高：(2.7)	底部完形	外・断：10YR8/4浅黄橙色 内：10YR6/1褐灰色	やや密(φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
119-464	126	E-B 26	古墳5 周溝	須恵器	杯身	器高：(3.5)	受部片	外：N6/灰色 断・内：N8/灰色	密(φ2.5mm以下の長石、石英を含む)	内外面：回転ナデ	
119-465	126	E-B 26	古墳5 周溝	須恵器	杯身	器高：(2.9)	2/5	外・断・内：N8/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英を含む)	内外面：回転ナデ	外面：自然釉
119-466	126	E-B 26	古墳5 周溝	須恵器	杯身	器高：(3.2)	体部 1/4	外・断・内：5Y7/1灰白色	密(φ2.5mm以下の長石を含む)	内外面：回転ナデ	
119-467	126	E-B 26	古墳5 周溝	須恵器	杯身	口径：15.0 器高：5.2	体部 1/4	外・断・内：2.5Y8/1灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英を含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	外面：自然釉
119-468	126	E-B 26	古墳5 周溝	須恵器	壺	口径：12.0 器高：(4.2)	口縁部 1/4	外：7.5YR6/1褐灰色 断・内：N7/灰白色	密(φ1.5mm以下の長石、石英を含む)	内外面：回転ナデ	
119-469	126	E-B 26	古墳5 周溝	須恵器	壺	口径：10.8 器高：(5.7)	口縁～頸部 1/4	外・断・内：N7/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、チャートを含む)	内外面：回転ナデ	外面：自然釉
119-470	126	E-B 26	古墳5 周溝	須恵器	壺	器高：(5.0)	体部 1/10	外・断・内：2.5Y7/1灰白色	密(φ1.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ケズリ、回転ナデ、凹線文(２条) 内面：回転ナデ	
119-471	126	E-B 26	古墳5 周溝	須恵器	壺	器高：(5.6)	体部 1/15	外・内：N6/灰色 断：N4/灰色	密(φ2.0mm以下の長石、石英を含む)	外面：回転ナデ、道具痕跡 内面：回転ナデ	
119-472	126	E-B 26	古墳5 周溝	須恵器	提瓶	口径：5.8 器高：(7.3)	口縁部 1/16	外：5Y5/1灰色 断：7.5YR6/1褐灰色 内：5Y7/1灰白色	密(φ3.0mm以下の長石、石英を含む)	外面：回転ナデ、カキメ 内面：回転ナデ	

第１表　出土遺物観察表（20）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
122-473	128	E-B 27	SD2070・2071 上層	土師器	椀	底径：7.4 器高：(1.3)	底部 1/3	外・断・内：10YR2/1黒色	密(φ1.0mm以下の石英を含む)	外面：ナデ、貼付高台 内面：ミガキ	
122-474	128	E-B 27	SD2070・2071 上層	須恵器	杯	底径：8.8 器高：(1.6)	底部 1/6	外：7.5Y7/1灰白色 内・断：N7/灰白色	密	外面：回転ナデ、貼付高台 内面：回転ナデ	
122-475	128	E-B 27	SD2070・2071 上層	弥生土器	甕	底径：4.3 器高：(2.2)	底部 完形	外：2.5Y5/1黄灰色 断・内：7.5YR8/4浅黄橙色	やや密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：磨滅のため不明	
122-476	128	E-B 27	SD2070・2071 上層	土師器	羽釜	口径：26.3 器高：(5.5)	口縁部 1/3	外・断・内：10YR8/2灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、雲母、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ハケ	
122-477	128	E-B 27	SD2070・2071 上層	弥生土器	甕	器高：(4.4)	頸部 1/10	外・内：2.5Y7/4浅黄色 断：10YR5/4にぶい黄褐色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、雲母、チャート、赤色土粒を含む)	内外面：ナデ	
122-478	130	E-B 27	SD2071 上層	須恵器	杯蓋	口径：16.6 器高：4.5	1/3	外：N7/灰白色 断・内：2.5Y7/1灰白色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ケズリ、回転ナデ 内面：回転ナデ	
122-479	128	E-B 27	SD2071 上層	須恵器	杯身	口径：12.0 器高：(3.4)	1/12	外・断・内：N7/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石を含む)	外面：回転ナデ、回転ケズリ 内面：回転ナデ	
122-480	128	E-B 27	SD2071 上層	弥生土器	高杯	器高：(7.3)	脚柱部 完形	外・断・内：5YR8/4淡橙色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：磨滅のため不明 内面：シボリメ	
122-481	128	E-B 27	SD2070 下層	弥生土器	壺	底径：4.4 器高：(2.3)	底部 完形	外・内：2.5YR7/2明赤灰色 断：10YR4/1褐灰色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
122-482	128	E-B 27	SD2070 下層	弥生土器	壺	底径：4.6 器高：(2.0)	底部 完形	外・断・内：7.5YR8/4浅黄橙色	密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、φ5.0mm大のチャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
122-483	130	E-B 27	SD2071 下層	須恵器	杯	口径：11.6 底径： 器高：3.7	2/3	外・断・内：N8/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石を含む)	外面：回転ナデ、ヘラ切りのち未調整 内面：回転ナデ、ナデ	
122-484	128	E-B 27	SD2071 下層	土師器	羽釜	口径：26.0 器高：(7.8)	口縁部 2/3	外・断・内：2.5Y8/2灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、ナデ、ハケ 内面：ヨコナデ、ハケ	外面：黒斑
122-485	128	E-B 27	SD2071 下層	弥生土器	甕	口径：12.1 器高：(7.2)	口縁～頸部 1/5	外：7.5YR7/4にぶい橙色 断・内：2.5Y6/2灰黄色	やや密(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
122-486	128	E-B 27	SD2071 下層	弥生土器	甕	底径：3.8 器高：(2.2)	底部 ほぼ完形	外・内：10YR7/4にぶい黄橙色 断：2.5Y5/1黄灰色	密(3.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
122-487	129	E-C 32	SD3085 下層	須恵器	蓋	器高：(1.6)	天井部 1/5	外・断・内：N7/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、チャートを含む)	外面：ヘラ切り後ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	
122-488	129	E-C 32	SD3085 下層	須恵器	蓋	口径：14.5 器高：(2.6)	1/4	外・内：N7/灰白色 断：7.5R6/1赤灰色	密(φ3.0mm以下の長石、チャートを含む)	外面：回転ケズリ、回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	内・外面：重ね焼き痕
122-489	129	E-C 32	SD3085 下層	須恵器	甕	器高：(7.9)	頸部～胴部 1/3	外：5Y7/1灰白色 断：10YR7/3にぶい黄橙色、N5/灰色 内：N7/灰白色	密(φ0.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、当具痕跡後ナデ、粘土紐接合痕	外面：自然釉
122-490	129	36	落ち込み底部	須恵器	杯身	口径：12.0 器高：(3.1)	1/5	外・断・内：N6/灰色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	
122-491	129	36	落ち込み底部	須恵器	壺	口径：7.8 器高：(1.8)	口縁部 1/4	外・断・内：N6/灰色	密(φ1.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：回転ナデ	
122-492	129	36	落ち込み底部	土師質土器	甕	器高：(4.4)	口縁部片	外：7.5YR4/1褐灰色 断：2.5Y5/1黄灰色、10YR6/3にぶい黄橙色 内：10YR6/3にぶい黄橙色	密(φ1.5mm以下の長石、チャートを含む)	外面：ナデ、ハケ 内面：ハケ	
123-493	129	E-B 27	SD2071 下層	埴輪	朝顔形埴輪	器高：(6.5)	1/10	外・断・内：10YR8/1灰白色	密(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、ハケ 内面：磨滅のため不明、粘土紐接合痕	
123-494	129	E-B 27	SD2071 下層	埴輪	形象埴輪	長さ：(7.3) 幅：(7.0)	破片	内・外：10YR8/3浅黄橙色 断：10YR5/1褐灰色	密(φ6.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タテハケ 内面：ユビオサエ	
123-495	129	E-B 27	SD2071 下層	埴輪	円筒埴輪	器高：(13.8)	基底部 1/10	外：2.5Y8/3淡黄色 断：5Y6/1灰色 内：10YR8/4浅黄橙色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ナナメハケ、ナデ、円形？透かし孔 内面：ユビオサエ	
123-496	129	E-B 27	SD2071 下層	埴輪	円筒埴輪	底径：11.5 器高：(10.1)	基底部 1/4	外・内：10YR8/3浅黄橙色 断：5Y6/1灰色	やや密(φ6.0mm以下の長石、石英、赤色粒子を含む)	外面：ナデ 内面：ナデ、ユビオサエ、粘土紐接合痕	

第１表　出土遺物観察表（21）

挿図番号	図版番号	区グリッド	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
123-497	130	E-B 27	SD2071 下層	埴輪	馬形埴輪	長さ：(12.7) 幅：(8.4) 奥行：(11.4)	頭部 2/5	外：5Y8/2灰白色 断：5Y4/1灰色、7.5YR6/6橙色 内：5Y7/2灰白色	やや粗(φ6.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ユビオサエ、ナデ、粘土紐接合痕	
123-498	130	E-B 27	SD2071 下層	埴輪	鶏形埴輪	高さ：(14.1) 幅：(10.4) 長さ：(14.8)	頭部ほぼ完形	外・内：7.5YR7/6橙色 断：10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗(φ6.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：ナデ、ハケ、粘土紐接合痕 内面：ユビオサエ後ナデ、粘土紐接合痕	
125-499	127	E-C 32	土坑21	黒色土器	椀	底径：8.0 器高：(0.9)	底部 1/12	外・断・内：10YR8/4浅黄橙色	密(φ0.5mm以下の長石、雲母、赤色粒子を含む)	外面：貼付高台、ナデ 内面：ナデ	
125-500	127	E-C 32	SK3139	須恵器	鉢	底径：10.0 器高：(3.7)	底部 1/4	外・断・内：N7/灰白色	密(φ1.0mm以下の長石、チャートを含む)	外面：回転ナデ、回転糸切り、圧痕 内面：回転ナデ	内面：磨滅
125-501	127	E-C 32	3133	白磁	碗	器高：(1.9)	底部 1/4	釉：5Y7/2灰白色 胎：7.5Y7/1灰白色	密	外面：施釉、ケズリ出し高台 内面：施釉	高台に打ち欠きあり
125-502	127	E-C 27	SK3133	弥生土器	甕か鍋	口径：31.0 器高：(16.9)	口縁～体部 1/8	外・断・内：10YR8/3浅黄橙	やや密(φ7.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	外面：磨滅のため不明 内面：磨滅のため不明、粘土紐接合痕	
127-503	127	E-C 36	SK3106	須恵器	蓋	口径：16.6 器高：(2.0)	1/5	外・内：N7/灰白色 断：2.5YR6/1赤灰色	密(φ1.5mm以下の長石、チャートを含む)	外面：回転ケズリ、回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	外面：重ね焼き痕、自然釉
135-504	126	E-C 34	SK3145	弥生土器	甕	口径：25.2 器高：(19.8)	口縁～体部 3/5	外・断：2.5Y8/2灰白色 内：10YR7/6明黄褐色	やや粗(φ3.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ナデ	
159-505	126	E-C 32	土坑4	弥生土器	広口壺	口径：15.6 器高：(8.2)	口縁～頸部 3/5	外・断・内：2.5Y8/2淡黄色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
159-506	126	E-C 32	土坑4	弥生土器	広口壺	底径：5.0 器高：(3.2)	底部完形	外：10YR7/4にぶい黄橙色 断・内：2.5Y5/2暗灰黄色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
159-507	131	E-C 32	土坑6	弥生土器	壺	底径：2.2 器高：(1.6)	底部完形	外：2.5Y6/4にぶい黄色 断・内：2.5Y5/1黄灰色	やや粗(φ3.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
159-508	131	E-C 32	土坑6	弥生土器	甕	底径：3.6 器高：(1.9)	底部完形	外・断・内：2.5Y7/4浅黄色	やや粗(φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
159-509	131	E-B 23	土坑97	弥生土器	壺	底径：4.8 器高：(3.2)	底部 2/5	外：5Y3/1オリーブ黒色 断：5Y4/1灰色 内：2.5Y7/3浅黄色	やや粗(φ3.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：磨滅のため不明	
159-510	131	E-B 23	土坑97	弥生土器	甕	底径：3.9 器高：(2.9)	底部完形	外・断・内：2.5Y8/2灰白色	密(φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ後ナデ 内面：ナデ	
159-511	131	E-B 23	土坑100	弥生土器	甕	底径：3.4 器高：(1.9)	底部完形	外：2.5YR6/6橙色 断・内：10YR7/2にぶい黄橙色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
159-512	131	E-B 22	土坑116 第2層	弥生土器	壺	底径：6.4 器高：(2.1)	底部 1/4	外・内：10YR6/4にぶい黄橙色 断：5Y3/1オリーブ黒色	やや粗(φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
159-513	131	E-B 27	土坑124 第2層	弥生土器	甕	底径：4.35 器高：(1.8)	底部完形	外・断・内：2.5Y6/4にぶい黄色	やや粗(φ2.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	外面：タタキ、 内面：磨滅のため不明	
159-514	131	E-B 22	土坑127 第2層	弥生土器	壺	底径：3.85 器高：(2.4)	底部完形	外・断：10YR8/3浅黄橙色 内：10YR8/3浅黄橙色～N4/灰色	やや粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む)	内外面：磨滅のため不明	
159-515	131	E-B 22	土坑127 第2層	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(2.6)	底部 3/5	外：2.5Y7/4浅黄色 断：2.5Y5/1黄灰色 内：2.5Y7/2灰黄色	やや粗(φ3.5mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	
159-516	131	E-B 22	土坑127 第2層	弥生土器	高杯	器高：(4.2)	脚部 1/6	外・内：10YR7/6明黄褐色 断：10YR4/1褐灰色	粗(φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む)	内外面：磨滅のため不明	

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちゅうじょうしょうがっこういせきはっくつちょうさほうこくしょ （ほんぶんへん）
書名	中条小学校遺跡発掘調査報告書（本文編）
副書名	立命館大学大阪いばらきキャンパス建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	茨木市文化財資料集
シリーズ番号	第 62 集
編著者名	木村健明（編）・川村和子・黒須靖之・清水邦彦・柴田将幹・中東正之
編集機関	茨木市教育委員会
所在地	〒 567 － 8505　大阪府茨木市駅前三丁目 8 番 13 号
発行年月日	平成 27 年 10 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市　町　村 コード	遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
中条小学校遺跡（ちゅうじょうしょうがっこういせき）	大阪府（おおさかふ） 茨木市（いばらきし） 岩倉町（いわくらちょう）	27211	52	34° 48′ 32″	135° 33′ 44″	2012.5.7 ～ 2013.3.25	10,880	立命館大学大阪いばらきキャンパス建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中条小学校遺跡	集落跡	弥生時代後期	列状土坑群	弥生土器	列状土坑群を検出
			溝・土坑		
		古墳時代前期	井戸	土師器	
		古墳時代後期	古墳	土師器・須恵器	８基の古墳を検出
		古代	坪境溝	土師器・須恵器・黒色土器	大字境の溝を検出

要　約	本書は立命館大学大阪いばらきキャンパス建設に伴う発掘調査の報告書である。 調査では、主に弥生時代後期以降の遺構・遺物を検出した。 特に弥生時代後期後半の列状土坑群は東西 20 m、南北 80 mの範囲で続いており、南側に隣接する東奈良遺跡から連続している可能性が考えられる。また、列状土坑群の性格を解明するために自然科学分析を実施している。 他に古墳時代後期の古墳や古代以降近代まで踏襲されてきた大字境の溝などを検出した。

中　条　小　学　校　遺　跡
発　掘　調　査　報　告　書
（本 文 編）
茨木市文化財資料集　第 62 集
平成 27 年 10 月 31 日
編集　茨木市教育委員会
印刷　株式会社トゥユー